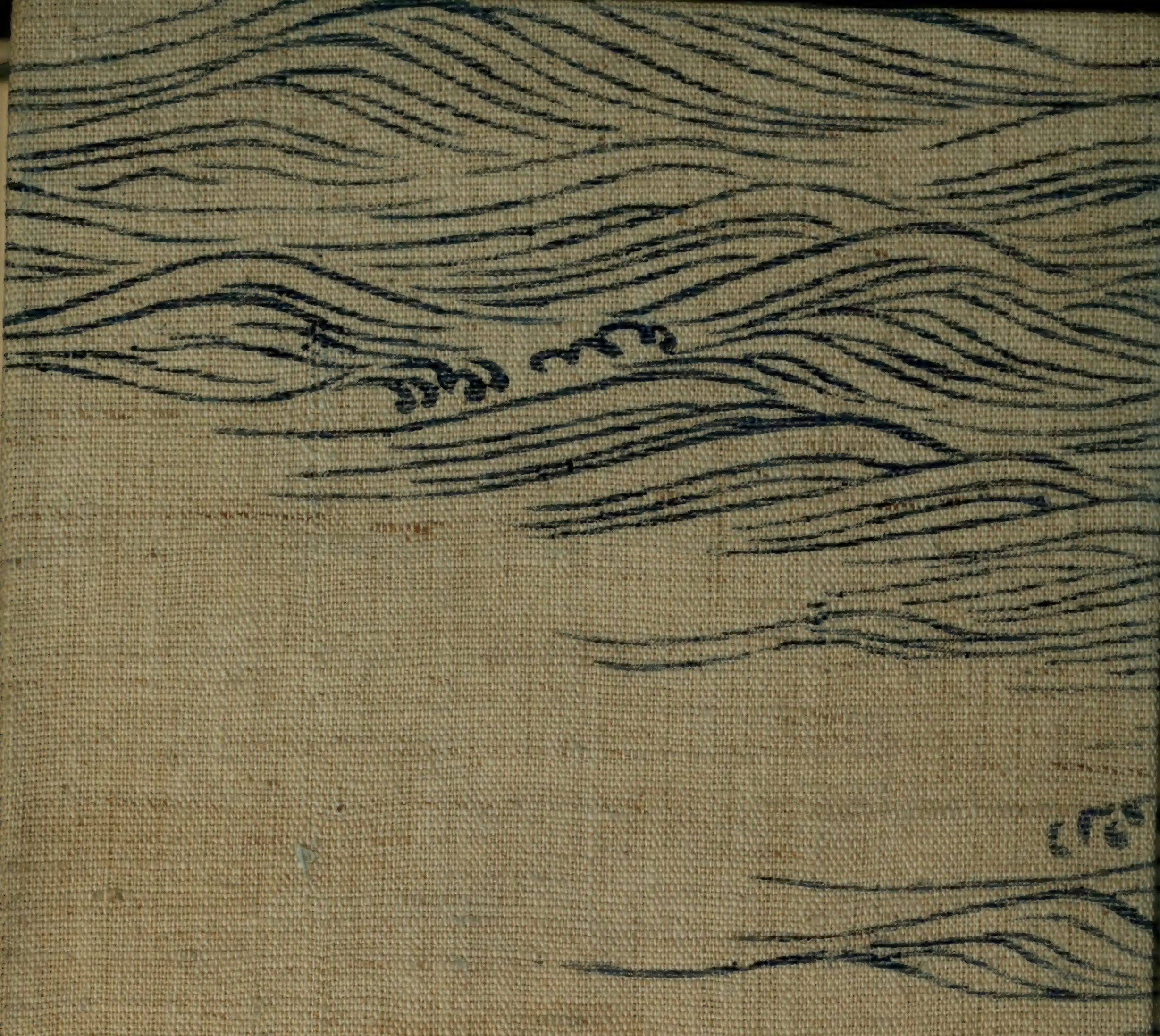




黙阿弥全集

第七巻

黙阿弥全集

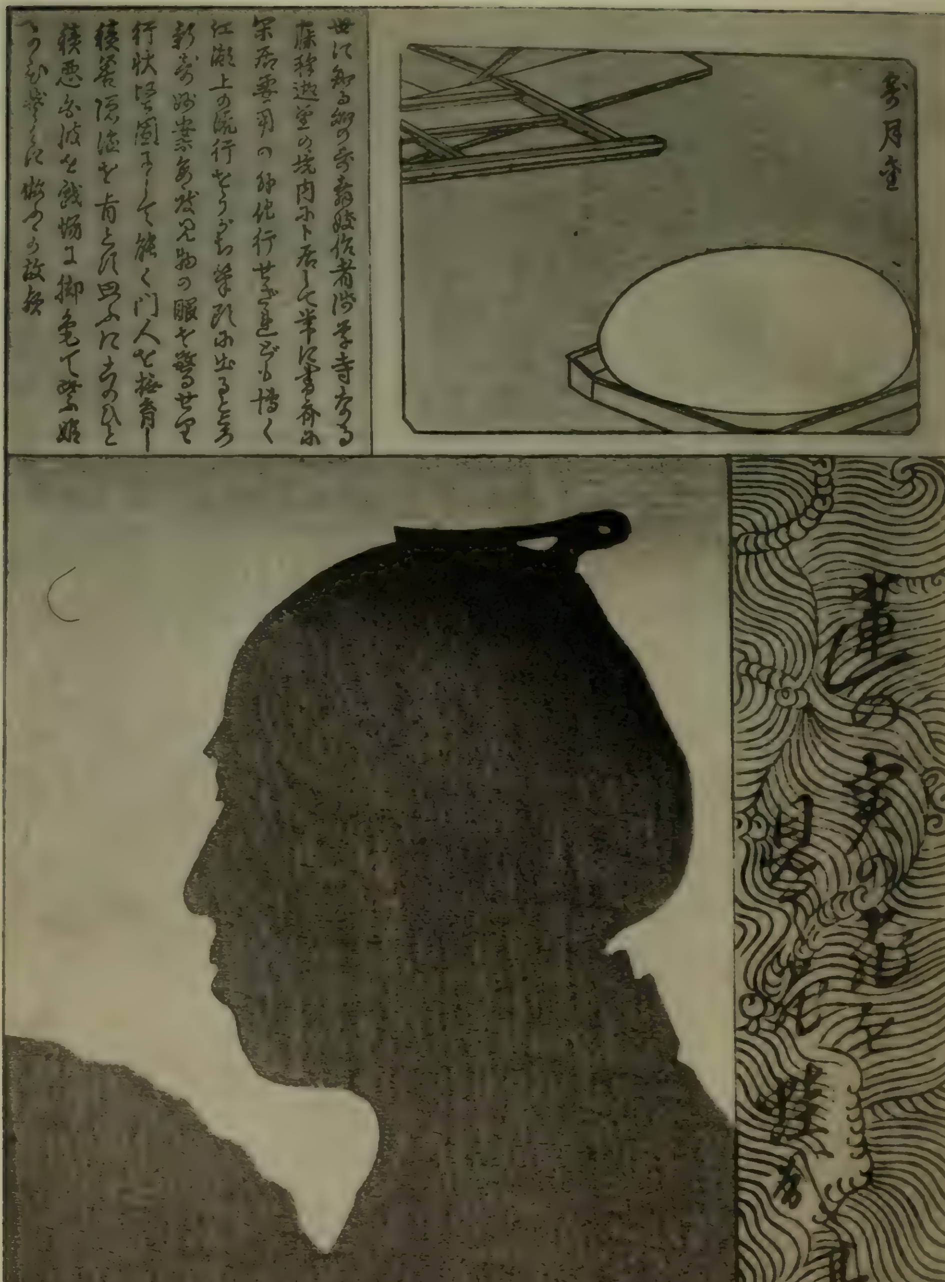
第七巻

解説

慶應年度に全盛を極めた「繪合せ」(興畫會)といふものがあつた。當時の江戸の粋士通人を網羅した遊樂團體であつて、默阿彌もその一員であつた。この圖は、慶應三年に作られた紀念冊子「隈なき影」に載せられた默阿彌の影像並に小傳である。右方「蓮の實の飛ぶを見て飛ぶ蛙哉」も自詠自筆である。小傳は次の如くに讀まれる。

(詳細の事は傳記一五八――一七〇の御參照を請ふ。)

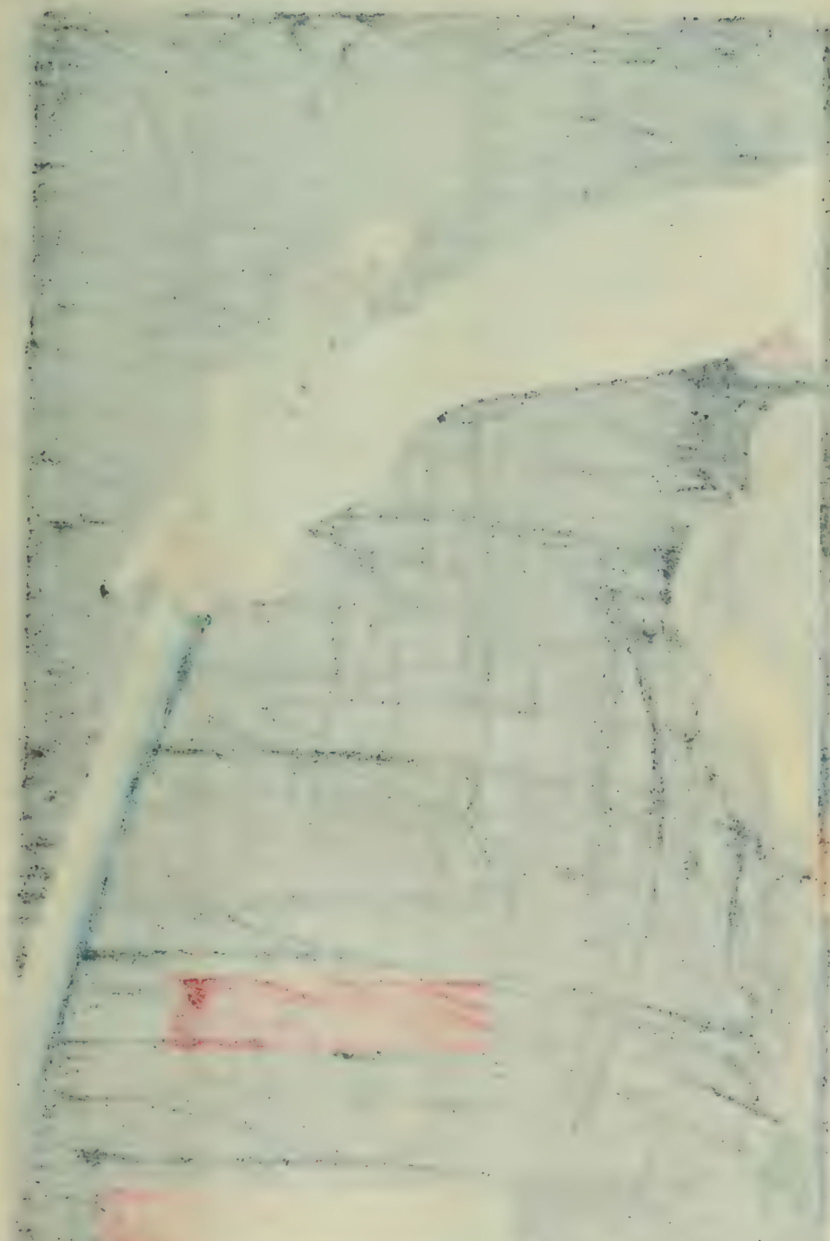
世に知る所の歌舞伎作者淺草寺なる寐釋迦堂の境内に卜居して常に書齋に閑居要用の外他行せざれども博く江湖上の流行をうがち筆頭に出るところ新奇妙案毎度御見物の眼を驚せり行狀堅固にして能く門人を撫育し積善陰德を旨とす思ふにこのひと積惡白波を戯場に脚色て紫姫がひそみに倣ふが故歟。







善悪鬼之鏡
國周筆



默阿彌全集 第七卷

河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

東京 春陽堂刊行

默阿彌全集　第七卷目次

挿繪目次

第二番目はお好みに名代の物を書直し止せばよいにこお叱も返り三筋の新内節旅を挊に木更津の夜船で濡れし與三郎二度の契も簪に拔差しならぬ妾宅で色に赤間がなぶり斬是も昔は奥州で名を知られたる觀音久次再び化けて彌勒町入込む舟穂に女房のお瀧が氣轉疵物の切れお富が二百兩ゆすり衒りもお主の爲そのあひずりの蝙蝠は欲に目のなき旅按摩丈賀が懺悔の入替子畜生塚で同胞の名乘り合ひまであれどこれ鈍き手業に男物縫ひなほしたる女浴衣も秋の晴着に鳴海の絞り地

藍青未熟者

處女翫浮名横櫛

「切られお富」は元治元年七月、守田座に書卸された、作者四十九歳の時のことである。此の作は「語り」の中にも明らかに示されてある如く、三世瀬川如皐の傑作「切られ與三」を、女の主人公に置きかへた飜作であるが、又獨立したものとして、存在の價値を持つてゐる。澤村田之助の爲めに作者が執筆したゞけに、好評を以て迎へられた。薩埵峠の一つ家で、與三郎と邂逅し、お富が疵だらけになつた顔を、パツと燃え上る火影に映して、羞らひながら對面するの場は、一篇の眼目でもあり赤いゝ出來榮であつたといふ。書卸しの時の名題は「處女翫浮名横櫛」であるが、其の後「三保浦松月横櫛」といふ名題が附せられたこともあり、「若葉梅浮名横櫛」といふ名題もある。

書卸しの時の役割は、中村芝翫（赤間源左衛門實は觀音久次）、澤村田之助（切られお富）、澤村訥升（井筒與三郎）、市川九藏（赤間屋の手代安後に蝙蝠安）、中村歌女之丞（赤間屋女房お瀧）、市川小文次（お富の親丈賀）、中村仲太郎（船穂幸十郎）、中村仲太郎（惡者みるくひの松）、市川幸藏（噺家鈍馬）等であつた。

挿繪にしたのは國周筆の錦繪である。

大正十四年十二月　　校訂者



處女翫浮名横櫛（切られお富――三幕）

序幕

藤ヶ谷天神境内の場
滑川地藏堂前の場
長谷小路妾宅の場
花水橋横浪町の場

〔役名――赤間源左衞門、井筒與三郎、赤間の手代安藏、お富の親丈賀、船穂幸十郎、惡者海松杭の松、噺家鈍馬、赤間の妾お富、赤間の下女お茂、其他。〕

（藤ヶ谷天神境内の場）――本舞臺向う淺黄幕、正面は三間高さ六尺程の藤棚の花盛り、上の方に瓦屋根の門、控柱に扉を開き附けて、門の内を見せたる誂へ、棚の上手に出茶屋の道具を片寄せ、葭簀立掛けあること、よき所に床几二脚並べたる儘にして、上に煙草盆を載せてあること、下の方柏松の植込み、總て鎌倉藤ヶ谷天神境内の模様よろしく。爰に非人○△□◎の四人、切繼ぎ裝非人のこしらへにて立掛り、此の側に風呂敷包みを背負ひし田舍者なり、是れを非人の皆々眞中に取巻き、手の内を強請つて居る見得、大拍子にて幕明く。と皆々よろしくあつて、

○お遣んなせえ〳〵。

△　おくんなさりやあ、今日が助かりますアな。
□　大勢は居りやせん。
◎　どうぞ旦那、
四人　おくんなせえな。（ト左右より引張るゆゑ、）
田舍　これさ、にしらア何さアこくだかわかんねえ、そないに人を引つぱり引ン廻して、小汚ねえ、止さつせえ〳〵。（ト振拂ふことよろしくあろ。）
○　はゝあ分つた。よつぽどな遠通寺つんてき和尚だな。
田舍　アニ、ハア、爰さあが遠通寺つんてき和尚が開基の寺だといふのか、おれさア爰が藤ケ谷の天神さまだんべいと、今日鎌倉へ行んだ戻りがけ、お參りをして行くべえこ立寄つたが、そりやあハア、げえにヒン間違つたこんだ。
□　えゝ間違つたといふなあこんたのことだ、ぐづ〳〵言はずさくんなせえ〳〵。（ト引張るゆゑ、）
田舍　小うるせえ、にしに遣る錢がある位なら、酒の一杯も餘計に呑むわ。えゝ汚ねえ〳〵、寄るな寄るな。
◎　こいつア物の言ひやうも分らねえ癖に、御大層なことを吐かしやあがるな。

△ 構ふこたはねえ、毆り挫け〳〵。

皆々 遣ッ附けろ〳〵。（ト田舍者を取卷き、皆々くらはせる。）

田舍 やあ、桑原々々〳〵、萬歳樂々々〳〵。

ト逃げ廻るを皆々追ひ廻す、この內○は田舍者の懷へ手を入れ、財布を引つたくる、田舍者は是れを知らず、皆々を拂ひのけ逸散に下手へ逃げてはひる。四人跡に思入あつて、

△ えゝ、とんだ番狂はせな唐變木だ。

◎ すてきに無駄骨を折らしやあがつた。

○ おッと無駄骨は折らねえやつよ。是れを見さッし。（ト件の財布を出して皆々に見せる。）

□ 流石は古狸だ、そつはねえな。

△ 龜の甲より年の功だ。

○ 馬鹿ア言ふな、まだ三十になるかならずだ。

◎ へん、おつな勘平だ。

○ おきやあがれ。

△ 何にしろ、早く明けて見さッし。

○よし〳〵。（ト言ひながら財布の中より、一朱と鐚錢を出して見て、）何だ、お臺場が一ツに錢が百四五十しらねえ、こいつアねつからお蔭がねえ。

□それでも萬更ねえよりやあ增しだ。

◎何とそいつを土臺に、緣起直しに一杯やらうぢやねえか。

○べらぼうめ、此の天窓數でこれッぱかりぢやあ、旨え酒が呑めるものかえ。

△それもさうだな、此の頃のやうな不漁ぢやあ始まらねえが、どうかいゝ鳥でも掛りやあいゝなあ。

◎いゝ鳥と言やあ、さつき先きの茶見世で休んで居た女は、何でも何處でか見たやうな女だなあ。

□見た筈よ、ありやあ兩國の寄席へ出た新內語りで、橫櫛のお富といつた名代の娘よ。

◎おゝ違えねえ、あの女だ。したが、見た鹽梅ぢやあ何でも人の世話にでもなつて居るのだらう、ちやんと極つてお供を連れて居るからにやあ。

△その事よ、今ぢやあ上州の方の大盡の圍者になつて居て、言ふ目が出るといふ噂だが、今の世界は女でなくッちやあ出世がならねえなあ。

○まあ、お菰にやあそんな相場はねえの。

◎したが、男と生れて來たからにやあ、一晩でもいゝから、あんな女を自由にしてえものだなあ。

△　へん、お月様に石打だ。

四人　は〻〻〻〻。

ト此の以前よき時分に上手の門より海松杭の松、道樂者のこしらへにて出で、後に立ち聞きして居て此の時ずつと出て、

松　手前達ア彼の女を、自由にしてえか。（ト是れにて皆々海松杭の松を見て、）

○　やあ、誰だと思つたら、

◎　海松杭親方、

△　何時の間に爰へ、

四人　ござんした。

松　今爰へ來て手前達の話しを聞いて居たが、乞食をして居ても捨てられねえは色氣だな、あの女を自由にしてえか。

◎　こ言つた所が、お庭の櫻さ。

松　所がさうでねえの、金になつた上に彼の女を自由に出來るといふ、魂膽話しがあるが乘る氣はねえか、どうだ。

△　金になつた上に自由にするこは、何しろ耳よりな話しだ。

○　おい／＼、得てそんな旨過ぎる話しやあ、喰つて見るこ喰へねえものだぜ。

松　これさ、何ぼ手前達が乞食だといつて、喰へるの喰へねえのこ不縁起をいふな、おれが言ふここに間違えがあるものか。

○　そりや、旦那のおつしやることだ。したが、もし親方え、わしやあ年寄のことだから、色氣よりやあ喰氣の方がようございます。

△　これさ／＼、しみツたれを言ひなさんな、乞食をして居ても喰ふものは喰つて居るから、命もあるのだ。

□　さうよ、又生きて居りやあ忘れねえのは色の道よ。

◎　こんなざまあして居ても、萬更獸や化物でもねえから、好い女を自由にしてえは人間の當り前よ。

△　へん、人間は人間でも、菰ッ冠りぢやあ始まらねえ。

□　うさあねえ、はゝゝゝゝ。

○　これさ／＼、もう無駄口を叩かずと、肝腎の親方の話しを。

△　違えねえ。もし旦那、今おつしやつた金になつた上、女を自由に出來るといふ旨い仕事の。

四人　して、其の話しは。

松　何にしろ爰ぢやあ迂濶に出來ねえ話しだ、田圃まで一緒に來さッし。

◎　そりやあ旦那の言はつしやることだから、何處までも行きやすのさ。

□　どうせこのはねは、御馳走になるは當り前だ。

○　有難え〳〵。

四人　さあ行かうぜ〳〵。(ト皆々わや〳〵言つて騷ぎ立てるゆゑ、)

松　えゝ、やかましい奴等だ。

ト大拍子になり、海松杭の松先きに四人附いて下手へはひる、跡かすめたる大拍子合方時鳥笛になり、花道より井筒與三郎着流し大小の裝にて出來り、上手の門より船穗幸十郎羽織袴大小の裝にて出來り、藤棚の花盛りをながめながら四邊を歩いて居る、與三郎花道よき所に止り思入あつて、

與三　寶の行方尋ねんと、身は遠近と徘徊へど其の手掛りも今以て徒に過ぎ行く月ごと日の、空に鳴く音の時鳥。(ト幸十郎はこなたに控へ、思入あつて、)

幸十　たゞ一聲は尊くも、又勇ましき神の庭、

與三　かねて願ひを掛けまくも、紫匂ふ藤が枝の、
幸十　夏來にければ散りそめて、
與三　由縁も薄き藤浪の、
幸十　流れと同じうき世の中。
與三　移れば變る、
兩人　習ひぢやなあ。（ト兩人心々の思入あつて、與三郎氣を替へ）
與三　あれにて、一服いたさうか。
ト以前の鳴物にて本舞臺へ來る、幸十郎は花を眺めながら花道の方へ來り、兩人舞臺よき所にて行き合ひ、與三郎思入あつて、
や、あなたは船穗幸十郎殿ではござらぬか。
幸十　おゝ、井筒の御子息與三郎殿。
與三　存じ寄らずも今日爰に、
幸十　丁度折よき此の面會。
與三　先づ其許さまにも、御健勝にて。

幸十　貴所にも變ることもなく。

與三　さて打絶えて疎遠の段は、お許し下されい。

幸十　それはお互ひ。して、御舍弟與五郎殿にも別條はござらぬか。

與三　弟めにも、變りましたる儀もござりませぬ。

幸十　それは重疊、さて久々にての面會ゆゑ種々お話しもいたしたいが、（ト床几へ目を附け思入あつて、）主人は居らねど、煙草の火もある樣子。さ、お掛けなされい。

與三　先づ〳〵。

幸十　然らば御免下され。（ト兩人よろしく床几へ掛けることあつて、）

與三　さてはや、何からお話しいたさうやら、出國なして流浪の上、辛苦を凌ぐ身の果敢なさを、御賢察下されい。

幸十　さこそと拙者も推察いたせば、此度主用に依つて出府を幸ひ、其許の宿所を尋ね、是非に面會を遂げたる上、身にも應ぜしことあらば、朋友の信義力を添へんと存ぜし所。

與三　その御厚情の通じてか、且つは念ずる菅神も此の與三郎を捨てたまはず、其許樣に今日の面會、この身の大慶、具にお話しいたせし上、猶お願ひ申す一儀もござれば。

幸十　そりや只今も申す通り、身に應ぜしことならば、遠慮なしに何なりとも。

與三　今に始めぬ其許の御親切、忝なうござりまする。

幸十　まゝ、何は兎もあれ早速承はりたきは、紛失せし北斗丸、未だ行方は知れませぬか。

與三　さあ面目もなきことながら、未だに在所相知れず、晝夜心を惱まして繁華の場所は言ふに及ばず手に手を盡し探れども、其の手掛りも今以て。

幸十　知れぬとあれば嘸かしと拙者も心痛仕つる、千葉の御家になくて叶はぬ大事の御寶、其許の御親父與左衞門殿が夜詰の時、盜賊入つて盜まれしは、其の夜當番の越度と極り、

與三　父與左衞門は切腹なし、井筒の家も退轉して、

幸十　世に薄命なる兄弟が今の流浪、寶さへ手に入らば又も花咲く井筒の家名。

與三　父の汚名を雪ぎし上家再興と思ふゆゑ、兄弟諸共心を合せ假令火水に入るなりとも、尋ね出さで置くべきかと、心は彌猛に逸れども雲を當にて的もなく、あだに過すは日數のみ、詮議日延の日限も早や近附けば兎やせん角こ、途方に暮れし折もよく其許樣に出逢ひしは、此の身の仕合せ、何卒貴殿のお執成しにて、日延猶豫の追ひ願ひ偏に賴み上げまする。

幸十　何さま、其の儀ならば左まで御配慮致されな、御前よしなに申し上げ、某が身に代へて又候日

延べの追ひ願ひ、お聞濟あるやうに執成しいたすでござらうが、必ずともに油斷なく。

與三 身を粉にしてもやがて手に入れ、きつと持參いたすでござりませう。

幸十 とはいふものゝ見とめもあらぬ尋ね物、又候日延べの日限までに、

與三 若し手に入らぬ其の時は、かねて覺悟の申し譯。

幸十 さゝ、それぢやによつて朋友の、信義を盡す拙者が胸中、假令貴殿が死んだりとて、寶が出ねば御家の名折れ、假令日限りが切るゝとも、出る時節が來らねば手に入ることは覺束なし、其の時逸つて死をなさば不忠不孝の名を取らん、恥を忍んで死をこらへ、一念籠めて尋ねなば、寶の手に入る時節もあらん、爰の道理を考へて必ず短氣を愼まれよ。

與三 あゝ親身も及ばぬ御教訓、便りとするは其許のみ。

幸十 それも竹馬の友垣を、

與三 結びはじめし頃よりも、

幸十 武藝讀書も誘ひ合ひ、

與三 互ひに親しき中なりしも、

幸十 思ひ寄らずも隔りて、

與三　今日また爰に廻り合ひ、
幸十　信義を語る朋友の、
與三　惠みも厚き、
兩人　因みぢやなあ。

ト兩人よろしく思入、これを流行唄へかすめた大拍子を冠せたる鳴物になり、花道よりお富好みのこしらへ雪駄ばき、お茂下女のこしらへにて日傘を差掛け、丁稚長松風呂敷を背負ひて出來り、花道よき所に止り、

お茂　やう〳〵のことで御境内まで、參りましたわいなあ。
お富　爰までは來たなれど、あのまあ供に連れて來た安藏は、何處ではぐれたやら、尋ねて居たので遲くなつたわいなう。
お茂　道をよく氣を附けろと、旦那樣に言附けられて來ながら、はぐれてしまふとは、よつぽど氣のきかない人でござりますわいな。
お富　天神さまへ行くことは知れて居るほどに、あすこへ行つて待合はさうぢやないかいなう。
お茂　それがようござります。これ長松どん、お前は。

お富　あの安どんを、搜して來ておくれ。
長松　あい〳〵畏りました。（ト花道へはひる。）
お富　そんならお茂、
お茂　さあ行きませう。

トやはり以前の鳴物にて、兩人よろしく本舞臺へ來る、此の内幸十郎與三郎の兩人よろしくとなしあつて、

幸十　時に井筒氏、久々のことゆゑ門前の料理屋へ參つて、一獻汲んで昔話しに、憂さを晴らさうではござらぬか。
與三　それは近頃忝なうござるが、又重ねてのことにいたしませう。
幸十　いやさ、舊友の誼、平に御同伴下されい。
與三　折角の儀、然らばお供いたすでござらう。

ト兩人よろしく床几を放れ、花道の方へ歩みながら藤の花を眺め居る。お富お茂兩人は本舞臺へ來たり、お富は與三郎を見てぢつとなる、お茂は藤の花を見やり、

お茂　もし、まあ御覽じませ、綺麗なことぢやござりませぬか。（ト是れにてお富となしあつて、）

お富　ほんにまあ、江戸紫の色深く、よう咲いたことわいなあ。

ト與三郎に見惚れ居る、與三郎此の内にお富の姿に目を附けるこなしあつて、藤の花へ掛けて、

與三　「夕暮や猶色まさる藤の花。」

幸十　これは卽吟、秀逸々々。

與三　いやも、お恥かしうござる。（ト此の内お富與三郎へ思入あつて、花へかけて、）

お富　てもまあ、美しい。（ト與三郎もちよつと見とれ、花へかけて、）

與三　はて、あでやかな。（ト思入、幸十郎急いて、）

幸十　いざ、參らうではござらぬか。

與三　さ、御同道いたしませう。

ト鳴物になり、幸十郎先きに與三郎は跡へ心の殘るこなしあつて、兩人よろしく花道へはひる。

跡お富うつとりと與三郎のあとを見送り、思入あつて、

お富　今のお方の物ごし恰好、しかとお顏は覺えねど、いつぞや上總の木更津にて、

お茂　もう日の暮れるのに、あの安藏どんは、何をして居るやら、

お富　互ひに心乘合ひの、ふとしたことの戲れより、明け暮れ忘れぬあなたのこと。

お茂　ほんにまあいゝ氣な人だ、氣を揉んで尋ねて居るのに、

お富　日頃逢ひたい〳〵と、思ふ心の屆いてか、今のは慥に、

お茂　爰へお參りなさるのは、知つて居れば、來さうなものだに。

お富　愛しいお方に違ひはない、どうぞま一度、

お茂　それとも家へ戻つてか、いや〳〵そんな不間な人でもなし。

お富　お目に掛つてとつくりと、

お茂　暮れるに斯うしても居られまい、

お富　あゝ、お顏を見たいものぢやなあ。

お茂　もし、お富さん〳〵。（ト大きくいふゆゑ、）

お富　えゝ、びつくりするわいなあ。

お茂　どうなされましたぞいなあ。（ト是れにてお富氣を替へ、）

お富　あゝ、いゝ景色だねえ。

ト思入、此の以前よき時分に海松杭の松、以前の裝にて尻端折り、目ばかり出して頰冠りして下手より出て來て、兩人の後に樣子を見て居て、此の時出で、いきなりお富のさして居る簪を引つこ抜き

駈け出す、お富びつくりして、

松　あれ簪を。（ト言ふゆゑ、お茂もびつくりして松を捉へるを振拂ひ、）
泥坊々々。（ト言ひながら松は花道へ走りはひるゆゑ、お茂はそのまゝ、）

お茂　あれえ、泥坊々々。（ト言ひながら追掛けて花道へ走りはひる、跡にお富殘り思入あつて、）

お富　あれ、もう日が暮れるといふに、お茂としたことが、簪の一本位うつちやつて置けばいゝのに。したがまあ斯うしても居られまい、安藏といひお茂まで、どちらか一人どうぞ戻つてくれゝばよいなあ。

ト思入、此の以前より後へ○△□◎の非人、上手より出て居て、此の時左右へ割つてずつと出て、お富を其中へ取巻き、

○　もしお上さんえ、御參詣のお戻りに、

△　どうぞ取らして遣つておくなせえ。

□　仲間の奴等が浮みやすわな。

◎　たつた四人しかア、

四人　居りやせんよ。（トきつと言ふ、お富氣味の惡きこなしあつて、）

お富　さあ、上げようにも折悪く、崩したお錢はない程に、今に供の女が、戻つて來たら上げようわいの。

○　さうでもありませうが、お供の來るのを待つちやあ居られやせん。

△　たんとゝは言ひません。

□　ちつとばかりでようござりやす。

◎　お前さんのお氣の濟むだけ、

○　どうぞ取らせて、

四人　おくんなせえ。（ト是れにてお富思入あつて、帶の間より鏡附の紙入を出して手早く紙に一朱一ツを包み、）

お富　さあ、是れを取つておきな。手をお出し。（ト是れにて○手を出して受取り、紙を明けて見て、）

○　もし、こりやアたつた、お臺場一ツかえ。

お富　あい。

○　見やな、これだ。（ト皆々へ見せる。）

三人　そんなものは入らねえから、返してしまへ。

お富　え。（ト思入。）

○　いやさ、こちとらの望みといふは、其の愛敬のあるお前さんのお情に、

四人　あづかりてえのだ。（トきつと言ふ。）

お富　えゝ、お前方は何をいふのだ。

○　えゝ面倒だ、手ばしこく引ッ擔げ。

四人　合點だ。（トいきなり四人してお富を捉へる。）

お富　あれえ。

ト逃げようとするを、手取りにして引ッ擔ぐ、此の時お富の懷中物舞臺へ落ちろ、皆々是を知らず藻搔くお富を上手へつれてはひる。時の鐘合方になり、花道より與三郎以前の裝にて急ぎ足に出來り、直に本舞臺へ來り、思ひ入あって、

與三　最前是れにて出逢ひし女は、いつぞや思はず木更津の舟にて契りし慥に娘、それと思へど幸十郎殿が同道ゆゑに問ふにも問はれず別れしが、今一度逢うて樣子を探らんと、取つて歸りしが、影さへ見えず、あゝこれ、逢うて樣子が聞きたいものぢやが。

ト言ひながら四邊を見廻し、ふと落ちてある以前の紙入に目を附け、手早く取り上げ見て、

こりや是れ女の紙入、もしもやさつきの彼の女子の、所持の品にはあらざるか、道に落ちたを拾

ふのは、本意ならねども證據もあらば屆けてやらん。

ト言ひながら紙入を見る途端に、紐解けて中より銀の香箱ぱつたり落ちるゆゑ、手早く取りあげ見て、

やゝ見忘れもせぬ此の香箱、しかも模樣は小夜千鳥、母が形見と所持せしを、木更津舟のわざくれに再び廻り逢ふべき爲め、後日のしるしと渡し置いたる片々の香箱、これを所持する上からは疑ひもなく契りし女、あゝ、何れへ行きしか。

トよろしく思ひ入、ばた／＼になり以前のお茂足早に走り出來り、思はず與三郎に突當り、双方びつくりして左右へ別れ、お茂こなしあつて、

お茂　これはしたり、とんだ粗相をいたしました、心の急きますもの、どうぞ御免なされて下さりませ。

ト頻りに詫びて、ついと上手へはひる、跡に與三郎呆氣にとられし思ひ入にて、

與三　はて、氣違ひのやうな。（ト膝のほこりを拂ひ、）女子ぢやなあ。

ト時の鐘、風の音にて此の仕組よろしく、此の道具廻る。

（滑川地藏堂の場）――本舞臺正面二間中足の屋體、本緣附藁葺屋根の堂、眞中狐格子の扉出入りあり、左右の小脇上の方香狹間の透し窓、腰通り、襷欄間の板羽目、但し透し窓より人の覗くことあり、正面の欄間に地藏堂と記したる額を掛けあり、上手よき所に松の大樹、後に裂ける仕掛、此の向

う上手へ晝心に川端を見せたる闇ぼかし、遠見の書割、裾通り藪疊、下手本緣の前に角長石の手水鉢柄杓下の方藪疊、松の立木植込みの張物にて見切り、日覆より松の釣枝、總て滑川地藏堂の體、爰に安藏手代のこしらへにて、尻端折り頰冠りにて、以前の松五郎と兩人立身にて囁き合つて居る見得、時の鐘、風の音にて道具納まる。と兩人よろしく思入あつて、

安藏　みる杭か、早かつたな、首尾はどうだ。

松　案じなさんな、すつかり行きやした。話し合つた通り、わつちが突然に出て簪を引ツこ拔いて駈出したら、下女めが跡を追掛けて來たから、道を横に突ツ切つて遣り過し、跡へまはつて言ひ合せて置いた乞食めらに合圖をして、手もなく引ツ攫はしておきやした。

安藏　そいつア有難え〳〵、それでやうやく動悸が落着いた。

松　こんたの頼みだから、詳しい譯も聞かずに遣ツ附けた仕事だが、全體あの女を引ツ攫つて來て、どうする魂膽だよ。

安藏　どうするかうするもあるものか、分つてゐる。

松　分つてゐるたあ、何うする積りだよ。

安藏　えゝ分らねえ男だ。とは言つたがおれのやうなものでも、何だか口幅ツてえが、言つて見にやあ譯

が分らねえ、聞いてくれ。

松　早く言ひねえな。

安藏　あのお富にやあ、ぞつこんおれが惚れて居るのだ。

松　何だつて。おつと話しの腰を折つた。それからどうしたよ。

安藏　さう言はれちやあ、二の句がつげねえ。

松　構ふことはねえ、ぶちまけねえな。

安藏　それな、手前も知つて居る通り、お富は旦那の圍ひ者だらうぢやねえか。

松　知れたことよ。

安藏　何をいふにも旦那の圍ひ者だらう。

松　知れたことよ。

安藏　それだから、うつかり手出しもなるめえぢやあねえか。

松　うつかり遣りやあはちを喰つて、枕でぶんなぐられ、突つきにけりがお拂ひ箱は當り前だ。

安藏　そんな日に逢ふはそつちの役廻りだ、こつちは藤武者で手前を頼んで引ッ攫はせ、日頃の思ひを晴らさうといふ仕事よ。

松　天晴孔明の計略、韓信つかまつたといふ洒落だ、したがさう聞いたら何だか味な氣になつた、こんたがしめたら、跡は振舞つてもいゝぢやあねえか。

安藏　そりや、おれも其の氣よ。

松　そいつは有難え。

安藏　さうしてお富は、何處に居るのだ。

松　乞食めらに言ひ附けて森の中にごめて置いたが、今に彼奴等が爰へ連れて來る筈だが、もう來さうなものだ。

安藏　思ひなしめらだなあ。

と兩人よろしくこなし、是れをばた〳〵になり、下手より○△□◎の四人お富を手取りに引ッ擔ぎ出來り、○海松杭の松を透し見て、

○　おゝ、みる杭親方か、さあ、約束通り、

四人　連れて來やした。

松　大儀々々、早くこつちへしよびいて來い。

四人　合點だ。（ト無理無體に本舞臺眞中へ引摺つて來るゆゑ、）

お富　あれエ。（ト言ひながら逃げようとするゆゑ、）

四人　えゝ、逃してたまるものかえ。

ト酷く本舞臺へ押へ附ける、此の内安藏いろ〳〵思入あつて、頰冠りを深く仕直しなどして身繕ひをすること、海松杭の松は闇いといふ思入あつて、

松　何にしろ眞闇だ、焚火でも仕にやあ顔が知れねえ。

安藏　おつこ顔が知れてたまるものか。先づおれが先陣だ。どいてろ〳〵。

ト言ひながらお富を押しこかさうとする、お富藻掻きながら、

お富　あれえ〳〵〳〵。

ト聲を立てるを、五人してお富の手を取り口を押へたりして、尙も連れ行かうとする。ばた〳〵になり花道より與三郎以前のなりにて走り出て來り、ちよつと花道にて本舞臺を透し見て、

與三　何やら向うに怪しき人聲。（ト此の時知らせにてチョンと月出るゆゑ、）

安藏　南無三、顔が。（ト安藏は上手へ逃げてはひる。與三郎舞臺へ思入あつて、）

與三　折よく月影。

トつか〳〵と舞臺へ來て、いきなり海松杭の松を突廻し、口◎を見事に投げ退ける、是れにて海松杭

松　何で邪魔を仕やあがるのだ、打ッちめろえ。
の松與三郎を見遣り、
四人　合點だ。
ト皆々縫包みにて與三郎へ打つて掛るゆゑ、與三郎刀を拔き切散らす、海松杭の松是れを見て、
松　それ、引こ拔いたぞ。（ト海松杭の松先に皆々逃げて下手へはひる。與三郎跡を見送り、思入あつて、）
與三　犬に等しき人外めが、女を捉へ無禮の振舞、ても危いことの。
ト言ひながら倒れ臥し居るお富を引き起さうとするを、お富惡者と心得、
お富　あれえ、どうぞ堪忍して下さりませ。
與三　こりや女中、決して氣遣ひなものではない、惡者どもは追ひ散らし、爰には一人も居らぬぞよ。
お富　すりや今までの。（ト四邊を見廻し、皆々が居らぬといふ思入あつて、）えゝ、嬉しや〳〵。
與三　如何にも、惡者共と見たるゆゑ、こなたの難儀を救ひ申した。
お富　さうとは知らず、お禮も申しませず、何れのお方か存じませぬが、危い所をお助け下され、有難う存じまする。
與三　何のこれしきに。（ト言ひながらお富をよく〳〵見遣り、）おゝ、こなたは最前境内にて、ちよつと見

掛けた女中ぢやな。(ト是れにてお富も與三郎をぢつと見て、)

お富　ほんにあなたも其の折に、お見掛け申して、計らずも。

與三　いやも、不思議なことにて。

お富　又もお目もじ。

與三　嘸かし、驚いたことであらうなう。

ト兩人よろしく思入、此の時風の音、雨車になる、與三郎空を見上げ思入あつて、

あゝ、月はあれども折惡しく風立つ雲の運び雨、何にせい暫時晴間を、(ト堂の緣を見遣り、お富へ思入あつて、)まあ〳〵、此の緣へ來やれ。

お富　はい、さういたしませうわいな。

ト兩人よろしく思入あつて、堂の緣へ來り、住ふことよろしくあつて、

與三　何はさて置き、是非ともこなたに逢うて、尋ねようと存じたは此の紙入。(ト紙入を懷より出して、)もしやこなたが、取落したのではござらぬか。(ト渡すをお富取つて見て、)

お富　ほんに、こりや惡者の手籠めに逢うた其の折に、取落したるわたしの紙入。

與三　左樣と存じこなたを尋ね、渡さんものと態々來掛る途中にて、今の狼藉救うて見れば、尋ぬるこ

なた。

お富　あゝ嬉しや〳〵、此の中には身にも代へぬ、それは〳〵大事の品が入れてござりまする。もしあなた様、御親切に有難う存じまする。

與三　何の其の禮には及ばぬこと。して今承はれば其の中には、大事の品があると申すが、如何なる品にて、何ゆゑ大事になさるゝぞ。

お富　さあ、此の品は言ふに言はれぬ譯あつて、大事に持つて居りまする。

與三　なに、すりや譯ある品とあるからは。身共も譯が、

お富　え。

與三　いや、仔細をいうて聞かしやいの。（ト合方きつぱりとなり。）

お富　さあ、お話し申すも恥かしながら、算へて見れば過ぎし春養ひ親のその爲めに、江戸を離れて木更津の乘合船で恥かしいお情受けた其の時に、又逢ふまでの證にと、お渡しありし此の香箱。

與三　して取交せし男といふは。

お富　さあ、其の儘別れて此の年月、最前計らず境内にてお見受け申したあなた様、よう似たお方と思うたれど、滅多なことを言ひ出してお笑ひもあらうかと、それゆゑ今まで、言ひ兼ねて居りました

わいなあ。

與三　むゝ、それにて思ひ當りしは、計らず拾つた其の紙入、證據もあらば屆けんと、改め見れば見覺えのある片々の香箱、もしやと取出し比べ見るに、寸分違はぬ所持せし香箱、そんならいつぞや木更津にて。

お富　わたしも其の時恥かしい、旅を稼ぎの戻り道、

與三　乘合ふ舟の浪枕、

お富　濡れて彌增す別れ路に、

與三　分けし片々の香箱を、

お富　肌身放さず大切に、

與三　持つて互ひに尋ねたる、

お富　ぬしはあなたか、

與三　女子はそなたか、

お富　思ひも寄らず、

與三　斯うもしつくり、（ト双方の香箱を取つて合せ見て、）

お富　合ふも盡きせぬ、

與三　思へば深い。(ト兩人ぢつと思入あつて、)

お富　逢ひたかつた〳〵、逢ひたうござんしたわいなあ。(ト與三郎に縋り附くをちよッと拂ひ退け、)

與三　これはしたり、滅相な、今ではごうやら誰やらの手活の花となつたる樣子。あゝ滅多に側へ寄つたなら、ごのやうな目に逢はうも知れぬ。是れを思へばわしのやうに、正直に守つて居たは、大きな白癡といふものぢやなう。(トよろしくひぞつて見せる。)

お富　さあ、さうおつしやるも無理ならねど、わたしの心の切なさと身の果敢なさを一通り、お聞きなされて下さりませ。(ト合方きつばりとなり、)わたしの實の父さんは、世にも果敢ない盲目に杖に縋つて人樣の肩を力の按摩鍼、その日暮しの手助けも、あすこの寄席やお座敷のと、身につまさるる新内の仇な文句の節の間も、共稼ぎして親と子が細き煙りも立て兼ぬる、まだ其の上に父さんが長の病氣のその上に、藥の代も煎じ詰め便りなき身を見兼ねてか、長屋の人のお世話にて赤間とやらいふ大盡の世話になるのも親への孝行、苦界の勤めに異ならぬ圍ひ者ぢやの何ぢやのと、世間の人の口の端も身を捨てゝこそ浮む瀬と、心の内に思ひ寐も、いつかあなたに逢ひたいと神へ祈りし甲斐あつて、逢うて嬉しう思ふ間も、泣くも泣かれぬあなたの無情、是れほど思ふ私が

心、少しは不便と思召し、せめて優しいお詞を、お掛けなされて、モシ下さりませいなあ。

ト取りすがり、いろ〳〵あつて言ふ。

與三　あゝ、成程詳しい様子を聞いて見れば、左のみ無理とは思はねど、一旦人に身を任せ親子諸共世話になり、恵みを受けたる其の人はいはゞ夫に異ならず、それぢやによつて其の男に、随ふが女の道ぢや程に、これまでの縁と思ひ切つたがよいではないか。

お富　疑ひ深いも事による、是れまでわたしが苦勞した心も知らず情ない、疑ひ晴れずば、生きて詮ない此の身の上、さうぢや。（ト與三郎の差添へ手を掛け、死なうとするゆゑ、あわてゝ留めて）

與三　こりや、狼狽へて、そちや何で死ぬのぢや。

お富　何でとは胴慾な、お前に別れて何の此の世に。

與三　そんなら眞實變らぬ心か。

お富　疑ひ晴れずば、わたしの心を。

ト言ひながら、與三郎の差添の小柄を手早く抜き取り、縁の上へ小指を押し當て、思ひ切つて押し切る思入あつて、

あいたゝゝゝ。

與三　あゝこれ、どうぞしやつたか。
お富　これ、見て下さんせ。（ト切つたる小指の先を與三郎に見せる。）
與三　おゝ、こりや小指まで。
お富　さ、切つてあなたへ此の心中。
與三　おゝ、疑ひ晴れた。
お富　そんなら、疑ひ晴れましたか。
與三　おゝ、晴れいで何とせうぞいの。
お富　嬉しうござんす。（ト側へ寄らうとする、此の時雷の音烈しく鳴る、）あれえ。
　　トびつくりする、與三郎思入あつて、
與三　おゝ、こりや大分降つて參つた。まゝ、爰へ來やれ〳〵。（ト捨ぜりふにてお富を介抱して居る、此の内雨止む、與三郎思入あつて、）もう雨も上つた程に、是れから身共が、そなたの宿の近所まで、送つてやりませう。
お富　そりや何を言はしやんすぞいなあ。
與三　はて、何時までも爰に斯うして居るは悪いほどに、さ、少しも早く支度をしやれ。

お富　いえ、わたしや歸ることは。（ト思入あつて、）まあ、爰へ來て下さんせ。

與三　いや〳〵、さう言はずと早う歸るがようござる。

お富　いえ〳〵、さうおつしやらずと。（ト無理に大刀の方を取る。）

與三　えゝ、是れはしたり、それでは却つて。

お富　はてまあ、ござんせいなあ。（ト辻堂へはひらうとする、又雷の音する。）

與三　こりや、大分強く鳴つて來た。（ト四邊を見て思入あつて、）おゝ、幸ひ此の辻堂にて。

お富　人の來ぬ間に。

與三　積る話しを。

お富　ちつとも早く。

與三　さ、おぢや。

ト與三郎お富の手を取り堂の扉を明け、兩人よろしくこなしあつて内へはひる、跡時の鐘風の音になり、以前の海松杭の松下手よりうろ〳〵出來り、

松　今の雷は素敵な音だが、何でも爰等へごつさり落ちたに違えねえ。

ト言ひながら四邊へ思入あつて、堂の前へ來て内へこなし、よき時分に、上手より安藏以前の裝にて

　　眞闇だといふ思入にて、四邊を透し見て出來り、

安藏　おい松や、おい、みる杭、何處に居る〳〵。(ト言つてもみる杭の松心附ず默つて居るゆゑ、よく〳〵見ていきなり背中を叩き。) えゝ、何をしてゐるのだ。

　　ト是れにてみる杭の松びつくりして、

松　あゝ、びつくりした。(ト安藏を見て、) 安兄イか。

安藏　これ。(ト囁く、みる杭の松呑込み思入あつて、)

松　うゝ、よし〳〵、承知だ〳〵。

　　ト此の内安藏は四邊を見廻し、緣の上に落ちてゐる小柄に目を附け、取上げ見て、

安藏　こりやあ小柄に、血が附いて居るわえ。

　　ト思入、みる杭の松も此の内うろ〳〵して居て、平舞臺に落ちてゐる以前の指の先を、何であらうと取上げ見て、

松　えゝ、氣味の惡い。(トよく〳〵見て、) こりやあ小指の先きだらう。

　　ト言ひながら氣味惡さうに出して安藏に見せる、安藏取つて、

安藏　ふむ、こりやあ指だ。はゝあ、慥に誓ひに切つた指。(トよろしく思入あつて、) こいつア一番狂言

を。（ト小指へ思入。）

松　書くにやあお負けに、この小指。

安藏　靜にしろ。さあ行かう。

ト風の音になり、安藏先きにみる杭の松兩人よろしくあつて上手へはひる。跡時の鐘合方になり、扉を明け、與三郎お富の兩人じだらくな裝にて、與三郎は帶と大小を持ち出で、兩人よろしくこなしあつて帶を締め、下手にある手洗鉢にて手を洗ひなどして、お富帶を直しなどすることあつて、

お富　もし、今のお詞を、必ず忘れて下さんすな。

與三　何の違うてよいものかいの。

お富　ほんに、しみ／＼。（與三郎の顏を見て、ちつと嬉しきこなし、）

與三　思へば深い緣ぢやなあ。（ト此の時ばた／＼になり、花道より以前の下女お茂出來り花道にて、）

お茂　元の所にもお出でなされず、是れほど尋ぬるのに、何處にまあおいでなさることやら。お富さんえ、お富さんえ。

ト言ひながら本舞臺へ來り、上手へ行くをお富見やり、

お富　お茂ではないか。（ト是れにてお富を見やり、）

お茂　おやお富さん、爰においでなさいましたか、やれ〳〵嬉しや、やう〳〵のことで、胸の痞が下りましたわいな。

お富　わたしも、どんなにか待つたことぢやないわいなう。

お茂　又私はごんなにか、捜したことではございません。あなたまあ、どうして爰へ來ておいでなさいました。

お富　さつきそなたが行つた後で、惡者に出逢ひ、手籠めに逢はうとした所を、あなたがお出でゞ、命を助かり、兎や角うするうち又雷樣で氣を失うたを、優しいあなたの御介抱で、命拾ひをした程に、ようお禮を申しやいの。

お茂　それはまあとんだことでござりました。ほんにあなた、有難うござりました。

ト是れにて與三郎お茂を見て、

與三　おゝ、女中が見えて丁度幸ひ、ちつとも早くお出でなされい。（トこれにてお茂與三郎を見て、）

お茂　あなたはどうやら、おゝそれ〳〵、さつきちよつと御境內でお見掛け申した、（トちよつと兩人へ思入あつて、さてはといふこなしにて、）あなたのお蔭でお怪我もなく、有難うござります。さあお富さん、ちつとも早く參りませう。

お與　どうやら行きとも、（ト與三郎へ思入、お茂は是れを見て取り。）

お茂　あゝ成程、これでは。（トさてはと思入、與三郎こなしあつて。）

與三　女中が見えて丁度よかつた。ちつとも早く支度して。

お富　あゝこれ、（ト思入あつて、紙入より手早く金を出し、ちよつと紙に捻つて。）是れで何ぞお買ひよ。

ト やるをお茂とつて、

お茂　おやまあ、有難うございます。

與三　さあ、少しも早くおいでなされい。

お富　それでも、ごうやら。

ト お茂これを見て、外して花道の方へ來り、揚幕の方を延上り見ながら、

お茂　あの安藏どんは、何處をまごついて居るか、氣の利かない人だよなう。

ト 知らぬ顔して向うを見て居る、この内お富與三郎いろ〳〵こなしある、此の以前よき時分に上手より安藏以前の裝にて出かゝり居て、この時今來たといふ思入にて、ばた〳〵と跫音を立て前へ出來り、

安藏　お富さん、とんだ所においでなすつたね、どんなに捜したか知れやアしません。

ト 與三郎は安藏が出ると直にお富と思入あつて、ついと扉の内へ逃げてはひろ、お富知らぬ體にて、

お富　わたしもお前にはぐれてから、どんなにか尋ねたわいなあ。

お茂　安藏どん、お前も大概な人だねえ、あれ程言ひ附つて來ながら、はぐれるとはあんまりだね、どんなに氣を揉んだか知れはしないわね。

安藏　それはお互ひこだ。

お富　それにもう今の雷様で、びつくりしたわいの。

安藏　嘸さうでござりましたらう。然し旦那がお待兼ねでござりませう。そこへ出たら舟か駕籠にお乘せ申しますから、ちつとも早くお出でなさいまし。こうお茂どん、ぐづ〳〵せずと、早くしねえな。

お茂　なにわたしがぐづ〳〵するものかね、お前がぐぢ〳〵して居たから、遲くなつたのだわね。

安藏　さあお富さん、ちつとも早く行きませう。

お富　さあ、行くことは行くけれど。

ト行き兼ねる思入、此の前より與三郎は堂の窓より顏を出し、お富と顏を見合せては種々と互に顏で仕方して行きともなきこなし、安藏はちよつと目を附け、素知らぬ顏にて、

安藏　けれどぢやあござりませんよ。（ト言ひながらお富の指先へ目を附け、）おやお富さん、小指をどうか

なさいましたか。

お富　え、あの、これは、今の雷様にびつくりして、お堂の扉を明けようとて、つい怪我をしたのち
やわいな。

安藏　とんだ怪我だね。（トちよつと思入あつて、）こいつは勘定ものだわえ。

トきつと思入、お富も思入あつて、

お富　何を言ふのだよ。（ト言ひながら紙入の金を出し紙に捻つて、）今日のことは默つておいでよ。

ト口塞げをやる、安藏取つて、

安藏　思ひ掛けず有難うござります。もしお富さんえ、これで何にも白紙に、包んで置けとは安いもの
だね。

トお富はこの内與三郎と顔見合せ思入あつて、双方へかけて、

お富　何をいふのだね。

お茂　さあ申しお富さん、遲くなりますわいな。（ト袖を引ッ張るゆゑ、）

お富　えゝも、ぢれッたいねえ。

ト思入、是な唄になり、お富先に立ち跡へ心の殘るこなし、お茂安藏附いて、せり立て〳〵三人とも

よろしく花道へ掛り、よろしくあつて揚幕へはひる、跡合方時の鐘になり、與三郎扉を明けて出で、
向うを見送りよろしく思入あつて、

與三　一夜の契りに情を立て互ひに尋ね逢うたれど、久し振りにて語ひの積る話しも聞く間なく、何れに住居なすことやら、我が居る所も言ひ聞かさず、つひには人の來合せて問ふにも問はれず本意ない別れ、あゝ殘念なことぢやなあ。（ト言ひながら差添を差さうとして、小柄のなきゆゑ、）やゝ、最前お富が小柄を取りしが、何れへ遣りしか、雷鳴に驚かされ、誓ひに切つた指さへも爰には見えず、月を明りに尋ねて見ようか。

トよろしく平舞臺へ下りて搜す思入、此の前方、よき時分、以前の○△□◎の非人上下より窺ひ出來り、この時左右へ割つて双方よりずつと出で、

○　うぬ、侍め爰にうせたな。

△　よくもさつきはおら達に、

□　痛い目見せた、

◎　その返禮。

四八　覺悟しやあがれ。（ト双方より一度に縫包みにて打つてかゝるを、ちよツと立廻り與三郎きつと止める。）

與三　さては仕返しにうせたのぢやな。

四人　疊んでしまへ。

與三　ちよこ才な。

ト鳴物になり、四人を相手にいろ〱立廻りあつて、トヾきつと見得、これを知らせにて此の道具廻る。

（赤間妾宅の場）＝＝本舞臺三間中足の屋體、柿葺、柱四ツ谷丸太、本緣附欄間好みの透し、正面上手に床の間、柱に投込の花活をかけあること、掛物は茶がけ物何なりとも、眞中出入りに茶立口、總體茶壁の腰張り、上下とも落間、後へ下げて建仁寺垣、この前に四ツ目垣下草の花盛り、よき所に若楓の立木、いつもの所に門口、道具好みの通り綺麗に飾り附け、總て長谷小路赤間の妾宅奥座敷の模様よろしく、二重の上眞中に源左衞門好みの裝煙草盆を控へ、腰提げの煙草入にて煙草を吞んで居る、此の下手に丞賀更けたる按摩のこしらへにて、猪口を持ち酒を吞んで居る、◎下女のこしらへにて酌をして居る、本舞臺に一、二、三の三人手代のこしらへにてなり、この側に鈍馬噺家のこしらへにて四人酒肴の臺の物を取散らし、皆々酒盛りの體。賑かなる流行唄にて道具納まる、と皆々よろしくあつて、

一　今日はお富さんのお留守で、淋しいと言はつして、旦那からお許しで、わたし等始め爰へ出て、

◎　お留守ごとのお酒盛り、上下なしにくつろいで、

鈍馬　數なりませぬ拙者めも、お席に列なる身の大慶。（ト聲色のやうに言ふ。）

二　なに辨慶だ、わつちは又運慶が作の仁王様ぢやあねえが、眞赤になる程天井なしに呑み續けとやらかしたものだから、いやもう大層醉つた〳〵。

三　あゝ、「醉うた〳〵五勺の酒に、」（ト無性に踊るゆゑ源左衞門見やり、）

源左　あゝ、古風な奴等だなあ。（ト思入、丈賀こなしあつて、）

丈賀　いやもうお若い方々はお元氣でようございます、年寄つては何事も埒は明きませぬ、お羨ましいことでございます。

一　もし、さうおつしやつて下さると、わたし共のやうな者でも、面目なくツて、

三　左様々々、穴へでもはひらにやあなりませぬ。

二　お前なんぞは、もう穴へはひつてもいゝ年だぜ。

三　えゝ病づかせなさんな、まだ十三七ツだ。

鈍馬　呆れた兵だぜ、はゝゝゝ。

丈賀　とんだ賑かでようございます。したがまた私のやうな面白くもない爺を、態々お人でお招き下すつて御馳走になりますといふは、有難いことでございます。

二　これといふのもお富さんが、春中からの御病氣が早速御全快ゆゑ、このお酒盛りも出來るといふものさ。

一　全體あの時、直にお床上げのお酒盛りが、あらうといふ所を、生憎なもので。

三　ぼつかり赤い風が吹き廻して、今日が日まで延々になつた譯さ。

鈍馬　斯うまた何もかも新らしくなつた、此御新宅でお酒盛りとは猶お目出度いではござりませぬか。

◎　ほんにさうでござんす、何よりかこんなお目出度いことはござりません、あの時はひよつと御病氣が重りはせまいかと、大抵お案じ申したことではござりません。

丈賀　とりわけて私めは、どのやうにか案じましたことではござりませなんだ。

源左　おれも案じたが、お互ひに若いうちは肥立が早いものだ。これも信心のお蔭だらう。あれに煩つて居られちやあ、おれ一人で手返しが出來やあしねえ。

丈賀　あの時の私の心苦しさ、ひよつと萬一のことでもあつたら、どうしたものであらうと、夜の目も寐ずに氣を痛めたことではござりませぬ。それも旦那樣が厚いお手當ゆゑにさつぱりと全快いたし、こんな嬉しい有難いことはござりませぬ。いつぞやも私が長の大病、娘一人が手一ツで、世帶のことや藥の代に手詰つて、どうせうこともならぬ折、捨てる神ありや助ける神と旦那樣の

お情にて厚い惠みのお世話にて、此の身の病氣も早速直り、今では丸々二人がお世話になり、何不自由なく此の樣に樂々いたし居りまするも、みんな旦那樣のお蔭、あゝ勿體ないことぢや有難いこと、朝夕忘るゝ暇はなく心に拜んで居りまする。

源左　これさ、そんなことはどうでもいゝわな、酒だ酒だ。

丈賀　是れはしたり、とんだことを申し出しました、御酒のお座敷で面白うもないことを申し上げました。年を取ると埒もないものでござります。はゝゝゝ。

鈍馬　さあ〳〵、お酒のこと〳〵。おゝお杯は。

丈賀　幸ひ私が持合せました、此のお杯。(ト◎へこなしあつて。)もし、どうぞおすましなすつて上げて下さりませ。

源左　人には構はねえで、勝手に呑んで居るがいゝわな。

丈賀　いえもう、最前から大層に喰べ醉ひました。

源左　なに遠慮があるものか。

ト是れまでの間皆々よろしく酒を呑んで居ること、◎は一々酌に廻る。丈賀思入あつて、

丈賀　ときに旦那え、お富は今日は、どちらへ參りましたのでござります。

源左　なにさ、今日は天神の藤を見ながら、お禮がてら觀音樣へ參りに行つたが、もう歸りさうなものだ。

丈賀　それにしましては大分遲うございますが、またひよつと芝翫を見ようと思つて、三丁目を覗いては居りませんか知らん。

源左　何さ、この頃ぢやあ、お富は芝翫が嫌ひになつたといつたが、おれも嫌ひな役者よ。

丈賀　あゝ、勿體ないことを。

鈍馬　さうして今日のお供には、どなたが參りました。

源左　安藏を附けてやつたから、遲くなつても氣遣ひはないのさ。

鈍馬　それぢやあ大丈夫、鐵の脇差とはあんまり古いから。（ト言ひながら自分にて燗德利を取つて手酌で呑んで、）おゝさい〳〵悅びありや、此の杯は外へは遣らじと、もし旦那、失禮ながら私からあなたへ上げるのは今日が始めて、三番叟でございます。（ト杯を出すゆゑ源左衞門取つて、）

源左　とんだお茶番だ。（トこの時鈍馬源左衞門の煙草入を取つて見て、）

鈍馬　このお煙草入は、結構でございますね。

二　おい〳〵鈍馬さん、株で又こせついちやあいけねえぜ。

鈍馬　と言ふ譯でなしさ、あんまりいゝから拜見を遂げたるばかりさ、何處でお手に入れましたね。
源左　なに、こりやあ馬道の小川屋さ。
鈍馬　よつぽどよく仕立てましたね。
源左　さうさ、代物に凝つてくれるから嬉しいのさ、さうして誂へ物を、づらさねえからいゝ家さ、ごうぞ贔屓にしてやつてくんなせえ。
鈍馬　私も心易く參りますから、今度行つたら、いゝ奴を一ツ。
一　お前誂へるのか。
鈍馬　なあに、ねだり出すのさ。
三　蟲のいゝ男だぜ。
皆々　はゝゝゝ。
源左　そりやあさうと、少し風氣のせゐか、肩が張つてならねえ。
丈賀　お肩が張るなら私が、ちよつと揉んで上げませう。（ト立ちかけるゆゑ）
源左　これさ、勿體ねえわな。
丈賀　何が勿體なうござりませう、勿體ないといふは私共親子のことでござります、何から何まであな

たのお情にて、浮み上つて居りまする身の上、それにあなたが勿體ないとおつしやるは、大方お富をお世話下さるゆゑ、私のやうな者でも男とも思し召しましてのことでござりませうが、それは世間のキツとした男のこと、私などはそんな譯ではござりませぬ、今のやうなこと必ずおつしやつて下さりますな、お蔭で今は療治にも出ませぬが、手馴れた業の揉療治、骨の折れるといふではなし、何の造作もないことでござります。

　　トこんなことを言ひながら、羽織などを取退け支度をするゆゑ、

源左　詞に甘え、少しやつて貰ひませうか。（ト是れにて後へ廻り、源左衛門の肩を揉みながら）

丈賀　おゝこりや、大分張詰めて居りまする、首筋からよく揉みほぐして上げませう。

　　トよろしく揉むこと、源左衛門思入あつて、

源左　此の頃ぢやあ肩の張るといふ事を覺えたが、人といふ者は、いつ何時煩ひが出ようも知れねえものだなう。

丈賀　いやも、人の身にも煩ひさへないものならよいものでござりますが、其の内にも輕い者が煩つては叶ひませぬ、御覧の通り此のやうな不眠になるも、長の病氣擧句の果が眼病みとなり、貧苦の中にも種々と手當はしても其の甲斐なく、遂には不明の盲目となるも主人の皆罰、私が懺悔話

しのあらましをお聞きなされて下さいまし。（ト合方きつぱりとなり、）元私は千葉の御家中井筒與左衞門樣に勤めて居りましたもの、若氣の至りに不圖朋輩の女中と睦み遂に女子は身重になつたを、御主人のお情にて夫婦になつて生れましたは、お富の兄でござります、其の時慾の迷ひにて世にあさましい巧み事、不義さへある上又候お主の目を掠めてよからぬ業、それから後は長の病氣、果ては此の身もさまようて貧苦に迫る其の內に、女房はお富を產むと其のまゝ產後の惱みにこの世を去り、跡に殘つて盲目の乳吞を抱いて貰ひ乳に育てるまでの艱難辛苦、段々續く不仕合はこりや皆御主人の罰ぢや恐しいと、心附いても今更に後悔先きに立たずとやら、いつそ此の事御主人へ打明けてお詫びしたなら、少しは罪も消えようと思ひ附いたる其のうちに、與左衞門さまは夜詰の時、お家の寶北斗丸といふ劍を、盜賊の爲めに盜まれしが越度となり、與左衞門さまには御切腹にて家名斷絕、お詫の綱の切れ果てたも天道樣がお許しなさらぬ非道の罪、脫れぬ罰、あゝ人といふものは、微塵ほごも道に缺けた事はせぬものと、取つて返らぬ今の後悔、御推量なされて下さりませ、

トいろ／＼となしあつて言ふ、源左衞門思入あつて、

源左　それぢやあお前は、北斗丸といふ短刀を盜まれて腹を切つた、井筒の家來であつたか。

丈賀　若黨奉公を勤めて、忠助と申して居りました。

源左　はて、思ひがけない。

丈賀　あなたは又どうして其の事を、御存じでござります。

源左　なあに、人の噂で聞いたこともあり、ちつと仔細があつて知つて居るのさ。

丈賀　左樣でござりまするか、浮世のことゝいふものは、善い噂は知れませんが、兎角惡いことは何處でごう噂をしまひものでもござりません。惡いことは猶のこと、噂は決してせぬものでございます。

源左　うつかり人の噂は言はれぬものサ。そりやあさうと父さん、もう小遣ひがない時分だらう、少しばかりだが、是れを取つて置きねえ。

ト紙に包みし金を、懷より出して丈賀の手へ持たせてやる、丈賀持つて見て、

丈賀　これは滅相な、まだ此の間お貰ひ申したのがござりますから、是れはお返し申しませう。

ト源左衞門の方へ金包みを出すゆゑ、

源左　正直な人だ。餘計あつて邪魔なら、小遣取りに利を取つて貸しなせえ。（ト又持たせるゆゑ、）

丈賀　折角の思召し、お貰ひ申しておきませう、有難うござります。

トよろしく懐へしまふ。皆々思入あつて、

三　あゝ成程、丈賀さんは仕合せな人だ、御馳走になつたり、お金を貰つたり、

一　今のお話しでは不仕合のやうだが、今のお身の上では、七轉八起といふのだ。

三　それといふも正直なお氣立ゆゑ、天道様のお惠みでございませうわいな。

二　お富さんは優しくツて大事にしなさるし、又旦那が情深くツて居なさるから、今ぢやアほんの樂隱居さまさね。

鈍馬　ごうぞ三日でもいゝから、丈賀さんにあやかりてえものだ。

一　成程慾氣のねえ男だ。

四人　あはゝゝゝ。

ト是れを流行唄になり、花道よりお富以前の裝にて先に立ち、お茂安藏附いて出來り、花道にて、

お茂　モウシお富さんえ、急いだせゐか、思つたより早く參りましたね。

お富　わたしや何やら、いまだに動悸がするわいな。

安藏　あんまり遲くなりましたから、旦那の機嫌を惡くしちやあいけませんぜ。

お富　さうぢやわいな。さあ行かうわいなあ。

ト　やはり右の鳴物にて、安藏は先きへ出拔けて、本舞臺門口へ來て、

安藏　お富さんの、お歸りでござります。(ト言ひながら門口を明け、内を見て、)是れは皆さん、お揃ひだね。

ト是れにて皆々立ち騷いで、

○四人　さあ〱、お富さんのお歸り〱。

源左　なに、お富が歸つて來たのか。

二　おい安藏どん、お歸りが遲かつたの。

安藏　何さ、ついわたしが道ではぐれたものだから、互ひに搜し合つたので遲くなりました。

ト此の内にお富お茂附いて内へはひり、

お富　旦那さん、今日は有難うござりました、早く歸らうと思ひましたが、つい遲くなりました。

源左　たまに出るとそんなものよ。(ト此の時丈賀前へ出て、)

丈賀　あんまり戻りが遲いので、おりや旦那さまにお氣の毒でならなんだ。

お富　おや、お父さんも、來てお出でかえ。

丈賀　今日もまたお招き下されて、御馳走になつた上、この樣にお金まで下された程に、ようお禮を申

してくりやいの。(ト件の金包みを出して見せるゆゑ、)
お富　それはお氣の毒な。旦那え、有難うございます。
源左　その禮には及ばねえ。
丈賀　お富が戻つて、私も安心いたしました。それに大層喰べ酔ひましたゆゑ、もうお暇いたしませう。
ト立ち掛けるゆゑ、源左衛門思入あつて、
源左　まあいゝわな。泊つて行けばいゝのに。
丈賀　いえ、有難うございまするが、年寄の長居は邪魔なものでございます。左様ならば旦那さま、御機嫌よろしく。
源左　そんなら、もう歸らつしやるか。
丈賀　はい、皆さま、大きにお世話になりました。
四人　左様なら、又この頃に。
丈賀　はい〳〵。(ト言ひながら探りながら、門口へ行きかけ、立ち戻つて來てお富に、)これ、旦那さまを大事にせいや。
ト思入あつて言ひながら又門口へ出る、此の内お茂は履物を直し、杖などを取つてやりすることある

お富送りながら門口へ來て、

お富　氣を附けてお出でよ。

丈賀　杖さへあれば。（ト突立てながら、）やつたもんぢやないわいの。

ト唄になり花道へはひる、お茂思入あつて、

源左　お富、着物でも着替へるがいゝ。

お茂　ほんに氣が附きませなんだ、直にお寐卷がようござりませう。

お富　さうしませう、早く持つて來ておくれな。

お茂　畏りました。（トお茂、下女◎奥へはひる。）

二　いやもう、今までは何か物足りないやうで、さつぱり座敷が浮かなかつたが、

一　お富さんがお歸りで、何處となし賑かになつて來ました。

三　又これから御酒を、はやらせることゝしやせう。

二　それがいゝ〳〵、是れから何でも藝盡しとしよう。

鈍馬　そんなら私から始めませう、先づ最初は何にしませう、端唄都々逸乃至は手品か曲持か、はなれ事なら輕業か、いつそのことに獨り角力と出掛けませう。（ト裸にならうとする。）

ト此の内お富着物を着替る。安藏思入あつて、

安藏　もうお前も歸んなせえ。

鈍馬　おツと承知。(ト狂言の思入にて、)お暇蒙る上からは、身共は屋敷へ立歸らん。(ト狂言の思入あつて、門口の外へ出て氣を替へ、)左樣なら、又明日。

安藏　勝手にしやあがれ。(ト鳴物になり、鈍馬ツイと下手へはひる。源左衞門思入あつて、)

源左　よつぽど氣樂な男だなあ。

お富　これお茂や、奥へ行つて、旦那のお召物を疊み直して置きなよ。

お茂　畏りました。(ト花道より以前のみる杭の松出來り、花道にて、)

松　何でも向うの家には違えねえ。何にしろ、遣ツつけて見よう。(ト本舞臺門口へ來り、)もし、赤間さんの御別宅とおつしやるのは、此方ではござりませぬかえ。(ト是れにて安藏内より、)

安藏　あい、此方でござりますが、何處からお出でなすつたえ。

松　此方なら用があつて參つた者でござります。(ト門口を明け、)眞平御免なせえまし。(ト内へはひり四邊を見廻し、源左衞門とお富を見遣り思入あつて、)あなたが此方の旦那樣でござりますか。さうしてお前さんがお上さんかね、私やあ松といふ奴でござります、お初にお目に掛りました。もし、

お上さんえ、外の事でもございませんが、さる所でこんな簪を拾ひましたから、人に見せたら知つて居るものがあつて、是れは赤間のお上さんの簪だといふことを聞きまして、態々お届け申しに参りましたが。（ト以前の簪を叺煙草入の間より出して、）お上さん、此の簪にお覺えがござりますかえ。

ト お富の前へ出す。

お富　見せて下さんせ。（ト取つて見て、）おゝ、是れはさつき拔かれた簪。

松　何處で拔かれなすつたか知らねえが、わつちやあ拾つて來やしたよ。

安藏　もし、この簪は何處で拾つて來なすつたえ。

松　しかも滑川の辻堂でさ。

お富　え。（トぎつくりこなし、源左衛門思入あつて、）

源左　何であらうと、態々持つてござつた御親切、大きにお世話でござりました。これお富、あのお人へ酒でも上げてくりやれ。

お富　あい。（ト思入あつて、源左衛門の煙草入の段口より金を出し、紙に包みながら、）御酒を一口上げたいが夜も更けたことゆゑ、少ないが、是れで勝手に一口上つておくんなさい。

ト出すを、みる杭の松とつて、ちよつと明けて見て、

松　お富さん、たつた二分かえ。

安藏　もし、二分でも志しであげるのだ、それにたつた二分とは、何のこッてござりますえ。

松　そりやあ只の所で拾つたら、錏三文くんなさらねえでも貰はうとは言はねえが、二分や三分で有難うござりますと、禮を言つちやあ歸られねえの。

安藏　もし〳〵お前おつなことを言ひなさるね、お富さんがどうしたといふのでござりますね。

松　どうするものか、滑川の辻堂で年の頃は廿四五で、色の生ッ白い侍と出合をした其の跡に、落ちてあつた此の簪。もしお手代衆、二分や三分ぢやアあんまり見倒しぢやあねえかね。

お富　あゝ滅相な、そんな事は知らぬわいなあ。

源左　お富が拔かれたといふ簪が、出合をしたといふ其の場所に、落ちてあつたと言はしッても、外に慥な證據があるか。

松　證據のねえことをいふものか、此の簪ばかりぢやあねえ、血汐のついた此の小柄。（ト懷より以前の小柄を出して、）これで誓ひに切つた指、嘘か實はお富さんの、左りの小指のねえのが證據だ。

お富　さあ、どの樣に言はしやんしても、其のやうな事わたしや知らぬ。はい覺えはござんせぬわいな。

ト此の内源左衛門思入あつて、

源左　お富、指を見せやれ。

お富　さあ、それは。(ト思入、安藏側より、)

安藏　何も隱すにやあ及びません。念晴しだ、出してお見せなせえな。

ト お富の手を持つて源左衛門の前へ出す。

源左　はてなあ、ふむ。(ト思入。)

お富　さあ斯うなつたら何をお隱し申しませう。今日天神さまへ參りがけ、つい安藏にはぐれてから簪を掏り取られ、其の上乞食に取卷かれ、既に危く慰まれようとした所をお侍に助けられ、嬉しやと思ふ間もなく雷樣に、驚く拍子に小柄がぬけて、つい此の指を切りましたわいなあ。

源左　怪我で切つたとあるからは、證據といつても證據にならず、然し態々一品を爰まで持つてござつたこなた、禮はわしが仕ますから、何とも言はず歸つて下せえ。(ト言ひながら紙入より十兩包を出して、)さあ、是れを持つて行きなせえ。(ト遣る、みる杭の松取つて見て、)

松　こりやあ十兩ありますね。これだけおくんなさりやあ何も言ふことはねえけれど、現在多くの金を出し、圍つて置けばいはゞ女房、それを人に慰まれ面へ泥を塗られた上金を出すたア、世間に間

抜もあるものだ、流石は田舍の唐變木、江戸にやあそんな相場はねえ。

源左　江戸の勝手は不案内、女房を人に盗まれたりや、ごうすりや男が立ちまするな。

松　先づ上分別が綺麗に出すか、男に女をくれて遣るか、又下の分別で遣ッつけりやあ重ねて置いて四つにするか、顏へ疵でも附けるが仕置さ。然しお前にやあ出來めえ。そりやあ江戸ッ子のする仕事だ。なあに、田舍者に出來るものかえ。

トきつと言ふ、源左衞門此の内思入あつて、後にある脇差を取つて抜身を後へかくし、思入あつて、

源左　いかにもお前の言ふ通り、江戸の作法は知らねえが、間男切るのは、斯う切るのか。

ト及び腰に松を切下げる、松アッと言つて倒れる、お富アレと逃げる裾を押へ、杯を取つて、

お富、一つ呑みやれ。

お富　いいえ、わたしは。（ト振拂ひ逃げるお富の腰を捉へ、きつと見得。）

源左　厭でもあらうが、今日は呑みやれ。

お富　それでも、どうも。

源左　この世の別れだ。呑んでおきやれ。

お富　えゝ。（トぎつくり思入。）

源左 絹問屋の旦那なら、面へ泥を塗られても、其のまゝ濟まして置かうけれど。
お富 そんならお前は。
源左 おりやア盜人だ。
お富 えゝゝゝゝ。
源左 そのびつくりは尤もだ。(ト合方になし、)絹問屋といふのは表、出羽奥州の喰詰め者、觀音久次こいつたはおれよ。餓鬼から仕込んだきずなんこ握りしでえに手が上り、親の物は子の物と壺にはまつた世渡りも、何處の賭場でも親分とかずりを取つても間に合ず、それより早く手短かに首を元手に肚胸が第一、短かい命を長脇差六十餘州を股に掛け、惡事に惡事の總まくり、こんなこたア常不斷。これを聞いちやアびつくりだらう。
お富 えゝ、さうこは知らず今日までも、堅いお方と思ひの外、てもおそろしい盜人とは、こりやまあどうせう、どうせうぞいなあ。こりやもう、いつそ。(ト逃げようとするを源左衞門引き附けて、)
源左 動きあがるな。
一 到頭是れで親分が、地金を出した長脇差。
二 もう是れからはおらツちが、四角な帶のお手代も、

三　これでやう〳〵年明けだ。
安藏　やれ、窮屈な思ひをしたなあ。（ト此のせりふの内、みる杭の松苦しみながらやう〳〵起き上り、）
松　さては、われは盗人だな。
源左　今知つたのか不便な奴だ。手前も冥土へ行く土産、お富を殺すを見てくたばれ。さあ、お富をそこへ引きずつて行け。
三人　合點だ。（トお富を連れて舞臺よき所へ引き据ゑる、源左衛門こなしあつて、）
源左　それ、荒繩で括しあげろ。
三人　合點だ。（ト繩を出しお富を縛る、源左衛門思ひ入あつて、）
源左　一思ひに殺しちやあ、曲がねえから此の庭で、弄り切りにするがいゝ。（ト源左衛門立上りお富の目先へ脇差を突附け、）さ可愛さあまつて憎さが百倍、今此の野郎に恥しめられたも、みんなうぬから起つたこと、いくら知らぬと言ひ張つても、左りの小指の切つてあるのが、誓ひに切つた慥な證據、うぬは此の指を切つたのか。
ト刀の先にてお富の指の先を突く、お富苦しきこなしにて、
さ、指まで切つてやるほどの、男があるならその名を言へ、さ、その間男を。（ト一刀肩先を切り、）

安藏　言やあがれ。（トきつと思入。）安、手前から替り〴〵にやれ。
源左　え、ほんたうに殺すのかえ。
安藏　あたりめえよ。
源左　えゝ、そんならわつちが。（ト源左衞門の白刃を受取り、ちよつとお富を薄傷に、二刀程切つて、）もし親分、もうこの位でいゝぢやあござりませんか。
安藏　えゝ、もつと切れ〴〵。（ト是れにて安藏思入あつて、）
源左　えゝどうも仕方がねえ。もしお富さん、お前詰らねえことをしなすつたねえ、實はお前を助けてやりたく庇ふ積りでゐたけれど、犬骨折つて鷹の餌食さ、疾うから思ひを、イヤサ思つたばかりで仕方がねえ、サア相手の野郎の名を、言つておしめえなせえ。（ト言つても默つて居る。）言はねえと、もつと痛い目をしなくつちやあなりませんぜ。さあ、言はねえか〴〵。
ト是れにて三人にて切る、右のせりふの内みる杭の松安藏へ思入ある、安藏もみる杭に掛けていふ思入、みる杭苦しみながら。
松　あゝ苦しい〳〵、おれが何も知つたことはねえのだ。こりやあみんな安藏に。
ト言ひかけるゆゑ、是れまでのうち安藏お富を切りながら、此の時みる杭を切下げる、みる杭アツと言

つて倒れ、息絶える。

源左　どうしたんだ。

安藏　えゝ、手が廻つて此奴を遣ツつけた。

源左　脆いやつだな。さあお富、これからはわれ一人だ、早く言つてしまへ。さあ、みんな爰へ來て一ツ呑め〳〵。

トこれにて源左衞門酒を呑み、皆々へ杯をやる。◎顫へながら酌をする、お富は苦痛の思入あつて、

お富　斯うなる上は何を隱さう、男といふは木更津で、二世を契りし其のお方、それもお前の世話になるずつと昔の事ながら、今日思はずも出逢うたゆゑ、つい嬉しさにしつぽりと濡れて宿りの辻堂で見咎められたが身の因果、日頃慕ひし其の人に、一旦逢うた上からは、此の世に思ひ置くことなし、お前もまた是れ程までに切りさいなんだら、お前の顏も立たうほどに、苦痛をさせず一思ひに、男らしう早う殺して下さんせいなあ。

トよろしく苦痛のこなしあつていふ、源左衞門思入あつて、安藏の持つて居る白刃を取つて、

源左　われが願ひだ、殺してやらうわ。

トお富を切り倒す、お富アッと言つて倒れ伏す、安藏側へ寄つて見て、

安藏　もし親分、息は絶えてしまつた。
源左　やれお陀佛か、不便なことだ。
三人　して此の片附けは。
源左　おゝ三日でも抱いて寐た女だ、斯うして遣らう。（ト言ひながらみる杭の懐より以前の金包を出し）直に此の金が葬料だ。こいつを添へて、手前大儀ながら、親仁の所へ遣つてくれろ。
安藏　もし、そりやあわつちが持つて行きませう。
三人　何にしろ、持出す工夫をせにやあなるめえ。
源左　そりやあ奥にある、葛籠の中へたゝッこめ。
一　成程、縮緬の荷を送つて來た、通ひ葛籠の悪いやつがあつたッけ。
二　違えねえ、あいつを丁度早桶代り、
三　それぢやあ人が氣が附くめえ。
安藏　何にしろ早く持つて來い。
三人　おッと承知だ。
ト一、三の兩人茶立口へはひり、誂への古葛籠を持ち出し來る、此の内安藏、二の兩人にてお富の

軆を引き起す、一、三立寄つて、

安藏　どうでもこりやあ上州織の仕入物、

一　のりだらけで始末におへねえ。

二　悪い仕立屋に掛つたゆゑ、

三　斯う疵ものにされた日にやあ、

一　小切れ見世でもお斷りだらう。

ト言ひながら皆々にて件の葛籠へお富を入れ、繩を掛け安藏肩を入れる。

二　是れで元直の符牒は知れめえ。

三人　引ツ立てろ。(ト三人にて引ツ擔がうとする。)

安藏　さうぢやあねえ。蓋をしろえ。

皆々　合點だ。

トよろしく蓋をして、安藏背負ひあげる、仕掛にて、本蘇芳の血潮葛籠を漏つて、だら〳〵と流れ出す、皆々見て、

源左　しかも荷物は女もの。

安藏　茜木綿の紅絞り、

一　なまツちぼりで、

四人　送り荷の、（ト葛籠をあげる。）

源左　蘇芳の色も、よく出たなあ。

トよろしく思入、時の鐘知らせに附き、此の道具よろしく廻る。

（横浪河端の場）――本舞臺向う一面横浪河岸より向うを見たる遠見の書割、下の方地がすり、下手に材木を積んだる張物の書割、上の方木戸の袂柵矢來を見せ、よき所に柳の立木、日覆より同じく釣枝、總て川緣の模樣よろしく、時の鐘波の音にて道具納まる。と直にばた〳〵になり、上手より安藏以前の葛籠を背負ひ、頰冠り尻端折りにて出來り、よき所へ葛籠をおろし、汗を拭きながら、

安藏　やれ〳〵、素敵に骨が折れた。（ト言ひながら葛籠の內へ向ひ、）こうお富や、わりやあ運のいゝ女だぜ、腹立ち紛れに親分が切りさいなめと言つた時、おれも少しは自棄になり、疵だらけにやあしたものゝ、急所をよけて助けたはおれがものに仕ようばつかり、今納屋の小蔭でこなたが言つた通り、命を助かつた其の禮にやあ末長くお前の女房にならうと言つたことを忘れるなよ、達者になつた其の時に、ありやあ苦し紛れに言つたのだと、そんな茶羅ツぽこはいけねえせ。是れからは

手當をして、元の體にしてやらう、さうとも知らず此の十兩、葬ひ金だと渡した親分、へゝん、生馬の目をぬくたア此のことだ。人の目褄にかゝらぬうち、こいつを路用に、是れから夜通し厚木まで、ちつとも早くさうだ。

ト葛籠を背負ひ行きかゝる、此の時後より與三郎好みの裝にてつか〳〵と出で、葛籠をとらへる、安藏扨はといふ思入あつて振拂ひ、兩人ちよツと立廻つてきつと見得、誂への鬪鬪模樣の鳴物になり立廻りよろしくあつて、此の内に以前の丈賀下手より何心なく出來り、眞中へはひり、邪魔になる立廻りよろしくあつて、トゞ安藏は背負つたまゝ摺拔け花道へ掛る、舞臺にては引ツ張りの見得よろしく、

ひやうし　幕

ト幕外にて安藏思入あつて、向うへ走りはひる、跡シヤギリ。

中幕

薩埵峠一ッ家の場
彌勒町赤間屋の場
狐ヶ崎畜生塚の場

〔役名――赤間屋源左衞門、井筒與三郎、蝙蝠安、按摩丈賀、旅商人幸助實は舟穗幸十郎、道具屋吾市、赤間屋若い者喜助、同太助、駕籠舁ねつこの松、同でくぼくの岩、按摩でく市、同もく市、切られお富、源左衞門女房お瀧、宿場女郎等。〕

（薩埵峠一ツ家の場）――本舞臺三間の間常足の二重、前へ出して飾り、誂へ三尺の本緣を附け藁葺屋根栗丸太の柱、向う暖簾口、押入戸棚、崩れたる鼠壁、舞臺眞中に圍爐裏、罐子を掛け、此の側に粗朶を入れし籠を置き、上の方葺きおろしの下屋、下地窓、いつもの所栗丸太の簀戸、下の方藪疊後岩の張物、奥深に浪の書割、總て薩埵峠の麓、はなれ家の體。爰に○△の雲助門口に垂駕籠をおろし、立ちかゝり居る、波の音、馬士唄にて幕明く。

○　おい、姐御内かえ。

△　兄貴は何處ぞへ行きなすつたか。

○　返事をしねえのは留守か知らん、何ぼ取られる物がねえとツて、明けツ放しぢやあ無用心な。

△　大方酒でも買ひに行つたのだらう、茶を一杯呑んで行かう。

　ト兩人内へはひり、二重へ腰を掛け、罐子から茶を汲み呑みながら、

○　こう、手前昨夜はいゝ仕事をしたさうだな。

△　おゝ、彌勒町へ三挺もので、一挺めえ一分づゝ酒手を貰つた。

○　不景氣だ〳〵といふが、荒ツぽく遣ふ奴があるな。おらア昨夜はあぶれて寐たが、どうだ彌勒町は賑かか。

△何處の家も賑かだが、其のうちにも此の頃出來た、赤間屋がめつぽふだ。

○脇土地から來た人だが、何でも以前は上州か奥州あたりの道樂者、苦勞人だけ分りもよく、錢ばなれが器用だから、こちとらの仲間でも、みんなあすこへ擔ぎ込むから、餘計に客が出來る筈だ。

△一つ拍子がいゝと、ずん／＼よくなるなあ女郎屋だ、二百や三百の金は、內證にごろ／＼して居るさうだ。

○何でも今ぢやあ彌勒町で、赤間屋が頭だらう。（ト時の鐘）おゝ、あの鐘は入相だな。

△降りさうなせゐか、べらぼうに暮れえ。駕籠を爰へ預けておいて、飯を喰つて來ようぢやあねえか。

○駕籠を預けて行くはいゝが、姐御は本當に居ねえかしらぬ。おい姐御々々々。（ト奥へ思入あつて、）

何だ、追炊きで飯を炊いて居るえ。

△こう、飯こいやあ早く行つて、喰はうぢやあねえか。

○今行かあ、靜にしろえ。それぢやあ姐御駕籠を置いて行くから、頼みますよ。（ト駕籠を內へ入れる。）

△さあ、早くしねえか、腹がぺこ／＼すらあ。

○えゝ、しみッたれな事を言ふなえ。

トやはり右の鳴物にて兩人下手へはひる。時の鐘、誂への合方になり、花道より與三郞半合羽、紐附

股引、大小旅裝、菅笠を持ち出て來り、花道にて、

與三　今打ちしは入相なるか、火急の用事に今宵のうち、薩埵峠を越したいと、急いで來たれどもう入相、坂へ掛れば燈火が入らう、火打袋を忘れたれば向うの小屋で提灯を、少し早くも點して行かう。（ト腰より小田原提灯を出し舞臺へ來り門口より）御無心ながら提灯の灯を、一ツ貸して下さい。あゝ誰も居らぬか、御免下さい〳〵。（ト奧にて、）

お富　あい〳〵、何でござります。

トやはり合方にて、奧よりお富半纏がけ、好みのこしらへ手拭を深く冠り、十能へ火を入れ持ち出て、圍爐裏へ明ける、與三郎門口から、

與三　往來の者でござるが、提灯の灯を貸して下され。

お富　あい、お安いことでござります、附木がそこにありますから、點けておいでなさいまし。

與三　それは忝なうござる。（ト與三郎内へはひる、お富は俯き圍爐裏へ粗朶を入れ、焚附け居る。與三郎二重下手へ腰を掛け、）今年は季候の遲いので、まだ寒うござるな。

お富　それに濱邊は町と違つて、猶寒うござります。（トこの聲を聞き、）

與三　はて、似た聲も。（ト顏を見ようとして暮れて見えぬ思入、圍爐裏の側の附木を取り火の附かぬ思入。）こ

れは雨氣で濕つたか、此の附木はさつぱり附かぬ。(トこの聲を聞き、)

お富　さういふお聲は。(トそつと與三郎を見る。)

與三　え。

お富　どれ、わたしが附けて上げませう。

トお富附木を取つて圍爐裏の火を移さうとして、粗朶へ燃え附きぱつと燃えあがる。兩人びつくりなし、圍爐裏越しに透し見て、

や、あなたは。

與三　そちは、お富か。

お富　與三郎さまか。

與三　はて、思ひがけない。(ト顏を見ようとする。)

お富　えゝ、お恥かしうございます。(ト袖にて顏を隱す。)

與三　以前に替るそぼろの身裝、それゆゑそちは恥かしいのか。

お富　いゝえ、さうではなけれども。

與三　してまた何故、恥ぢるのぢや。(トお富思入あつて顏を上げ、)

お富「與三郎さま、こんな顏になりました。

ト手拭を取る、此の時又ぼうと燃え上り、與三郎お富の顏を見てびつくりなし、

與三 やゝ、額を掛けて數ヶ所の疵、何ゆゑかゝる怪我をなせしぞ。

お富 そんならわたしが此の樣に、數ヶ所の疵を受けましたも、あなたは御存じござりませぬか。

與三 さあ、地藏堂で出逢ひし折、互ひの住所をいふ間もなく、迎ひの者に本意なくも別れて丁度三年越し、尋ね捜せど雲を當、知れぬも道理鎌倉より里數隔てし山向う、薩埵峠に居ようとは思ひがけねば知らざりしが、かゝる姿になつたるは、如何なる仔細か言うて聞かしやれ。

ト合方替つて、お富思ひ入あつて、

お富 わたしが斯樣に數ヶ所の疵を受けましたを、一通り聞いて下さりませ。仔細といふはあの晩に宿へ歸ると海松杭の松といふ惡者に、滑川の辻堂で忍び逢ひしを言附けられ、言譯なせど拔き差しのならぬ小柄に切つた指、南無三寶と思ひしが脫れるだけはと僞るを、聞かぬも道理上州の絹商人の大盡で赤間といひしは拵へごと、まことは出羽や奥州で人に知られし長脇差、觀音久次といふ惡者、顏へ泥を塗られては生けて置かれぬ相手を言へと、子分に言附け弄り切り、死ぬと覺悟を極めしゆゑ、苦痛を怺へてあなたのお名を、到頭言はず運よくも、氣を失ひしを死んだと思ひ

葛籠へ入れて捨てらるゝ途中で息を吹き返し、捨てに行つたる安藏の介抱受けて其の場から、厚木在に隱れ住み、命の親に是非なくも其の安藏に身を任せ、仕込んだ藝の新內で旅を稼ぎに箱根から、先きに住居をすればとて、今では化物同然に替り果てたる姿でも、替らぬ心に與三郎さま、あなたの事は片時も、明け暮れ忘れはいたしませぬ。

與三　さてはそちを世話なせし赤間といひし大盡は、出羽奧州で名の高き觀音久次であつたるか、長脇差ゆゑ手荒くも、科あればとてこの樣に思ひ切つたる刀疵、憂き目に逢ひしも皆われゆゑ、思へばいつぞや木更津の夜舟の契りが互ひの惡緣、又も再び鎌倉で廻り逢はずばこのやうな、替りし姿になすまいもの、親は何れの何者か、嘸やこの身を恨んで居よう。

お富　藁の上からかゝさんに別れて長の此の年月、大恩受けた父さんも斯かる顏ゆゑ振捨てゝ三年この方旅から旅、何處にどうして居ることやら、是れも今では行方知れず、目の不自由な體ゆゑ一倍苦勞になりまする。

與三　二度までそなたに逢ひながら、別れせわしく何事も言はず語らず知らざりしが、親といふのは何者なるぞ。

お富　只今にては揉療治丈賀と名をば申しますが、元は下總千葉の御家中、井筒與左衛門樣といふ御用

人の若黨にて、忠助と申せしもの。(トこれを聞き與三郎びつくりなし、)

與三　えゝ、そんならそなたの親こいふは、井筒の若黨忠助とか。

お富　委しいことは知りませぬが、藁の上からかゝさんに別れて間もなく町へ出て、こゝやかしこの貰ひ乳で人と成つたるわたしの體、聞けば一人の兄さんがあつたとやら、それも丁度五ツの年迷兒になつて行方知れず、その年ふつと父さんが目を煩うたが元となり、遂に兩眼つぶれてしまひ仕方なく／＼按摩を覺え、其の日の煙りも立て兼ぬるしがない暮らしの揉療治、これもお主の皆罰と音信不通の井筒樣へ手を合せて蔭ながらお詫をいたして居りましたが、不義理なことでもあつた樣子、その艱難の其の中で足手を伸ばして貰つたる、恩も返さず苦勞を掛け、濟まないことでございます。

トお富愁ひの思入。

與三　幼年の折別れしゆゑ、しかと面を覺えぬ忠助、今では盲目となつたるか、はてさて不便なこゝちやなあ。

お富　どうしてあなたは父さんを、御存じでござります。

與三　おゝ知らいでならうか、今言うた親忠助の主人なる、井筒與左衛門は我が父なるわ。

お富　えゝ、そんならあなたはお主樣の、さうとは知らず。
與三　如何にも、悴與三郎。
お富　え、家來の身にて勿體ないが、一度ならず二度までもお情受けし身の冥加、嘸父さんが聞かしやんしたら、悅ぶことでござりませう。
與三　忠勤暇を取りしより、如何なる譯か十何年、音信なければ行方も知らず、そなたと契りを結びしは主從盡きせぬこれ奇緣、以前の身にてあるならば親子共に引取りて、斯かる憂き目は見せまいもの、いうて返らぬことながら、只今とては家もなく、住所定めぬ與三郎。
お富　御大家なりと聞きましたが、如何なる譯で只今では。
與三　斯く流浪いたせしも、五ヶ年あと父上が夜詰の折に盜賊入り、お納戶金にお枕刀北斗丸を奪ひ取られ、其の越度にて父上には情なくも御切腹、家族は殘らず追放され、歎きの餘り母上には枕も上らぬ大病に、醫療に手をば盡せしかど、其の甲斐もなくみまかりたまひ、野邊の送りもそこそこに七日々々の佛事を營み、それより寶詮議の爲め弟與五郎諸共に、所々方々と徘徊なし、いはゞ此の身は雲水同樣。
お富　すりや短刀の紛失ゆゑ、井筒のお家は跡方も、ないて返らぬ果敢ないこと。

ト此の時花道より安藏頬冠り尻端折り、藁草履にて出來り、門口より内を窺ひ思入あつて樣子を窺ひ居る。

與三 まつた北斗丸の短刀が府中にあると聞きしゆゑ、知邊を求めて此の程より片邊に住ひなし、日夜詮議いたせし所、やうやく所持の道具屋に尋ね當つて見し所疑ひもなき北斗丸、飛び立つ程に思へども買求むるには二百兩金子なければ手に入らず、殊には外にも望み手ありて打捨て置かれぬ火急の相談、取るものも取り敢へず鎌倉表へ立越えて、懇意な方へ頼まんと夜を日について急げども、遙々行きし甲斐もなく金子調達出來ぬ時は、北斗丸は人手に渡り、井筒の家名再興ならず埋れ木になる兄弟二人、實に風前の燈火よりも危き與三郎、盡きぬ縁こそ測らずも提灯の灯を求めしより、そなたに逢うて過ぎ越し方、名乘つて見れば主從に、二世の契りも三世の縁、金子調達いたしなば再び尋ね參らんが、調達出來ぬその時は、これが此の世の逢ひ納め、思ひ出す日もあつたらば、水の一つも手向けてくりやれ。（ト與三郎愁ひの思入にていふ、お富ぢつと俯き泣き居る、與三郎氣を取り直し提灯へ灯を移し、）思はぬ話しに暫時の暇入り、今宵の内に薩埵を越えねば、明日の泊りの都合が惡い、道を急げば、お富さらば。（ト思ひ切つて立上る、お富引留め、）

お富 あ、もし、與三郎さま、ちよつとお待ち下さりませ。

與三　何の用かは知らねども、心も急けば又歸りに。

お富　さうでもあらうが二百兩、金子の出來ぬその時は、再びお歸りなさらぬあなた、まあ〳〵待つて下さりませ。

與三　ぢやと言うて急ぎの道中、鎌倉までは餘程の里數。

お富　さあ、其の鎌倉までおいでなくとも、短刀求むる其の金が、出來たらよいではござりませぬか。

與三　それは知れたことながら、容易く出來ぬ二百兩。

お富　それぢやによつて與三郞さま、お待ちなされて下さりませ。

與三　して又、身共を止めしは。（ト合方替つてお富思入あつて、）

お富　さあ、是れがきつと鎌倉で出來ることなら上げますが、此のせち辛い浮世の中、十か二十の金でさへ容易なことでは出來ませぬ、ましてや大枚二百兩、十が九つ出來ますまい、それが出來ねば命を捨て死ぬると聞いて此の儘に、どうまああなたを上げられませう、親が御恩を受けましたお主樣なり一夜でも、枕交せし大事の夫、命に掛けて私が今宵中に調達なし、其の紛失の短刀が再びお手に入るやうに、いたしますから若旦那、お待ちなされて下さりませ。

ト　お富思入にていふ、門口の安藏むつとせし思入にて、内へはひらうとして門口に蹲み窺ひ居る。

與三　その親切は忝けないが、赤間が妾の時分と違ひ、裝もそぼろのそちが身で、二百兩といふ金が。

お富　出來ぬ所も女の一心、ゆすり衒を、いやさ、堅く出來ます目當もあれば、夜明けまでに手に入らずば、遲くも明日の夕方までには、きつとお手に入れませうから、お待ちなされて下さりませ。

與三　すりや出來難き二百兩、調達なすには何を目當に。

お富　目當といふは、もし。（ト四邊へ思入あつて與三郎へ囁き、）以前の誼に。

與三　そんなら赤間へ。

お富　あもし、誰が聞いて居ませうやら。

與三　油斷のならぬ浮世の中。（トこれにて安藏後へさがり窺ひ居る、）して又、今の亭主といふは。

お富　今もお話し申した通り、安藏といふ赤間の手代、疵を受けたる其の時に、助けられたる恩によりせう事なしに身を任せ厭な枕を交すのも、戀しいあなたに逢ひたさの、念の届いて此の樣にお目に掛るは嬉しいが、以前に替るこの姿、お恥かしうござりまする。（トお富始終顏の疵を隱す思入）

與三　姿形は替れども替らぬそちが心のまこと、命に代ても二百兩整へくれる眞實に見捨てる心はなけれども、亭主のある身と聞くからは、假令以前の馴染にせよ、迂濶に手出しもならぬ仕儀。

ト與三郎このせりふを言ひながらお富に寄添ふ、お富嬉しき思入にて、

お富　何の亭主といふもの丶、色戀といふ譯ではなし、助けた恩を笠に着せ、無理往生の亭主顔、元より愛想の盡きた人、あなたに替りがないならば。

ト　お富も與三郎に寄添ふ、此の內門口の安藏腹の立つ思入よろしく。

與三　わしが心に替りがなくば、其の安藏を振捨て丶、

お富　元木にまさるうら木の譬、

與三　昔馴染の色戀も、

お富　薩埵峠にまた再び、

與三　磯打つ波の打ち寄りしは、

お富　親不知より底深く。

與三　契りし緣の二世三世、

お富　その嬉しさも汐風に、

與三　濕り勝ちなる、

兩人　身の上ぢやなあ。

ト　兩人ぴつたりと寄添ふ。門口の安藏きつとなり、內へはひらうとして氣を替へ、思入あつて下手の

藪の蔭へ忍ぶ。

與三　大事を抱へし身の上に、斯ういふ處へ安藏が歸り來らば一大事、何かの事は短刀の我が手に入りし上のこと、くれ〴〵頼むは金子の調達。

お富　それはお案じなさいますな、きつとお手に入れませう。

與三　何にも言はぬ、忝ない。どれ、夜更けぬうちに一先づ旅宿へ。

お富　して只今のお住居は。

與三　おゝ、府中宿の入り口常念寺の表門前、門の柳が住居の目印、委しく記せし所書。

ト與三郎懷中より所書の書附を出し、お富に渡す。

お富　府中とあれば丁度道順、歸りにお寄り申しますから、お宿にお待ち下さりませ。

與三　さういふことなら是れより直に、

お富　夜道は物騒、少しも早く、

與三　そんならお富、

お富　與三郎さま、

與三　必ず吉左右。（ト門口へ出て顔見合せ、）待つて居るぞよ。

ト唄になり、與三郎思入あつて花道へはひろ、お富跡を見送り、

お富　娘心の浮氣から後先見ずに木更津で言交したる與三郎さまが、思ひがけないお主の御子息、どういふ譯か父さんの、目の潰れたも不忠をした、お主の罰と聞くからは、爰が御恩の返し所、又二つには切られた遺恨の源左衛門、隱す素性をぶちまけてゆすつた事なら二百兩、素人家ぢやあむづかしいが、根がたゞ取つた金なれば、綺麗に出すに違ひない、蝙蝠安を玉に遣ひ、今夜の內に府中へ仕掛け親とお主の爲めなれば、こいつア一番憎まれ口も聞かにやあならねえ。

ト思入、安藏藪から出て花道へ行き掛け、跫音をして門口から、

安藏　お富や、今歸つた。（ト門口を明ける、お富ぎつくり思入、誂への合方になり、）

お富　だいぶ遲かつたの。

安藏　地切になつたら歸らうと、世帶染みた根性に、すつかり取られて問屋場で側中へ足を出して歸つて來た。

お富　そりやあお手柄なことだね。

安藏　出るたア取られ〳〵、此の頃のやうぢやあ續かねえ。

お富　極りを言つて居るぜ、何にしてもそりやあお手柄なことだ。

安藏　こう、何ぞ引ッかけるものを。
お富　何があるものか、蟲のいゝことを、
安藏　そこにあるどんざを引掛けてくりやれ。（ト蒲團を引掛けること）えゝこれ、何ぞ金になる仕事はあるめえか。
お富　こう、愛敬をこぼす仕事だが、しつかりになる事があるよ。
安藏　そいつア氣の惡い話しだが、しつかりになるとはどういふ譯だ。
お富　お前話しに聞かねえか、彌勒町で評判の赤間屋といふ女郎屋は、源左衛門の見世ださうだ。
安藏　そんなら源左衛門の見世か。
お富　今ぢやあ堅氣な附合に、不斷二百や三百は、手許にあるといふ噂、今夜これから仕掛けたら、一元手になる譯だが、お前一緒に行く氣はねえか。
安藏　そいつアさつぱり知らなんだが、誰が話しで聞いたのだ。
お富　さつき爰で問はず語りに、問屋の岩と松が話し、駕籠を預けて行つたから今に爰へ歸つて來よう二人に委しく聞いて見ねえ。
安藏　おゝ慥な事を聞き糺し、堅氣になつたを附込んで、氣障を言つたら大丈夫

お富　なくてならねえ二百兩、ゆすりに行くも男の爲め。

安藏　や。

お富　いやさ、亭主に樂をさせたいからよ。

安藏　へゝん、おつう言やあがる。(ト安藏せゝら笑ひ、以前の所書を取上げ、)や、こりやあ何だ。

ト言ふ、お富引き取り、

お富　手拭き紙だよ。(ト圍爐裏へ打ち込む、安藏思入、)

安藏　さうして、是れから振り込むにやあ、

お富　斯ういふ筋に仕ようぢやねえか。

安藏　そいつアよからう。

お富　えゝ、まだ言やあしねえわな。むゝ、耳を貸しねえ。(トお富安藏の肩へ手を掛け囁く、安藏うなづきながらお富の手を取るを拂ひ、)何をするのだな。

ト安藏の肩を叩く、これを道具替りの知らせ。

安藏　緣起を附けるのだ。

トお富は安藏をお先にしてといふ思入、安藏はお富を玉に遣つてといふ心々の思入、時の鐘、波の

音、合方にて此の道具廻る。

（赤間屋見世先の場）――本舞臺四間通し常足の二重踏段附き、向う上手持筋の襖、間平戸の戸棚、此の脇赤間屋と記せし長暖簾、下手折廻し板羽目庇の上へ戸袋附の格子、二階の前側をおろし、下手に番手桶を積みし赤間屋と記したる用水桶、總て彌勒町赤間屋見世先の體、爰に丈賀着流し下駄がけ按摩のこしらへ、これをでく市もく市同じく按摩にて引き据ゑ居る、幸助半合羽脚袢一本差し旅裝にて支へ居る、下手に喜助、太助、若い者にて立ちかゝり、二重に○□の女郎胴抜のこしらへにて是れを見て居る、流行唄にて道具留まる。

でく　うぬ、太え奴だ、どうするか見やあがれ。

丈賀　もし〳〵、旅がけのものゆゑ、御當所の勝手を存じませぬ、どうぞ堪忍して下さりませ。

でく　何ぼ勝手を知らぬとて、按摩をして歩くからは、仲間の掟は知つて居よう。

もく　どこを宿にして療治に出るか、有體にそれをいへ、宿へ掛つて預けにやあならぬ。

丈賀　左樣でもござりませうが、只今も申します通り、旅掛けの者でござりますれば、御料簡なされて下さりませ。

でく
もく　いや〳〵、料簡ならぬ〳〵。

幸助　これ〳〵、どういふ譯か知らないが、可愛さうに年寄だ、料簡して遣つて下さい。

でく　いや〳〵、年寄だらうが子供だらうが、此の宿で療治をするなら、組頭の座頭の所へ運上出すが仲間の掟、・・・もぐりにはひつて療治をされちやあ、宿場の者の難儀になる。

幸助　さうでもあらうがあのやうに、お前方には見えまいが手を合して拜んで居るから、料簡して遣つて下せえ。

もく　えゝ、此の人はさつきから餘計な口を利くぢやあねえか、目明の知つたこッちやあねえ、すつこんで居さつしやい。

幸助　餘計なことゝは知りながら、人の難儀は見て居られず、斯うして留めにはひるからは二人の衆に一杯買はう。それを規模に料簡して、許してやつて下せえな。（ト これにて喜助太助中へはひり、）

喜助　おい〳〵でく市さん、お前方が引張つて會所へ連れて行つた所が、逆にして振つても、二百といふ錢はなさゝうだ。

太助　折角あなたが仲へはひつて、一杯買はうとおつしやるのは、爰等が直に預け所だ。

〇　みんながあんなに譯をいふに、堪忍してやんなさらねえのか。

□　あんまり强情を言ひなさんすと、今夜から此方の家へお前方は呼ばないよ。

でく　何さ、わたしらだつて愛敬生業、强情なことを言ひ度くもないが、是れも仲間の掟だからさ。

もく　お前方の挨拶ごいひ、一杯買はうとおつしやるなら、爰は大目に見脱しませう。
幸助　それぢやあ料簡してくんなさるか、そりやあ何より忝ない。（ト財布より一朱を出し、）これは少しばかりだが、一杯呑んでくんなさい。（トでく市に渡す、でく市捻つて見て、）
でく　もし旦那、こりやあお臺場かえ。
幸助　少なからうが二百づゝ二人で分けてくんなさい。
もく　貰はねえにはましだけれど、
でく　もう一朱下さいましな。
喜助　こう〳〵慾張つたことを云ひなさんな。祝儀座頭はお定まり二百取りやあ文句はねえ。
太助　悪しつこく言はねえで、一杯呑んで歸んねえ。
でく
もく　えゝ、それぢやあ、大負けに負けませう。
○　お前方が一朱とるには、引けまで揉まにやあなるまいに。
□　あんまり大負けなこともあるまいよ。
でく　こりや、大分評判が悪い。もく市や、早く行かうぜ。
もく　行くはいゝが、其の金は燒ちやあないか見て貰へ。

幸助　目の見えないお前方に、そんな物をやるものかな。
でく　これは御免下さりませ。
もく　ごなたもおやかましうござりました。（ト右の鳴物にて、でく市もく市下手へはひる。）
喜助　さあ〳〵、按摩さん〳〵、二人の奴は歸つたから、
喜助
太助　こつちへ出ねえ〳〵。（ト丈賀さぐり〳〵出で、）
丈賀　これは〳〵どなた樣でござりますか、お蔭さまで助かりました、有難うござりまする。
幸助　わしは往來の旅人だが、こなたの難儀を見兼ねたゆゑ、それで留めて進ぜたが、何處も怪我はなかつたか。
丈賀　仕合せと怪我はいたしませぬ。
幸助　そりやあ何よりよかつたな。今聞けば旅掛けといふが、京へでも登らつしやるのか。
丈賀　いえ、何處と申す當てもなく鎌倉から山を越し、木賃宿を寐所にして療治をいたして歩きます。
喜助　それぢやあお前はたつた一人か。
太助　便りにする子供もなしか。
丈賀　はい子供も二人ござりましたが、兄は五ツで迷兒になし、遂にそれ切り行方知れず、妹は身性

が悪いので人に切られて死んだとも、又存へて居るともいへど、これも三年越し死んだか生きたか分りませぬ。（ト丈賀涙を拭ふ。）

幸助　やれ〱、それは不便な事だが、いつたいこなたは、何處の者だ。

丈賀　はい、私は下總の千葉の者でござります。

幸助　それぢやあ若しや忠助と。

丈賀　え。

幸助　いやさ、中年からの盲目であらうの。

丈賀　はい、左樣でござります。

喜助　もし旦那、よい子供衆がござりますが、お上りなすつて下さいましな。

太助　どうでごちらへか、お泊りでござりませう。

幸助　さあ、府中の宿に宿もあるが。（ト幸助暖簾を見て、）こつちの家は、赤間屋といふか。

喜助　はい、左樣でござります。近頃見世を出しましたが、仕合せと繁昌でござります。

丈賀　そんなら此方が赤間屋樣でござりますか、して旦那樣のお名は、何とおつしやりますな。

○　こつちの家の、旦那の名かえ。

□　旦那の名は源左衛門といふよ。
丈賀　あの赤間屋源左衛門さま。はてさて、似た名も。（ト思入。）
幸助　え。
丈賀　いや、賑かなことでござりますな。
幸助　久しく爰で休んだせゐか、草臥がぐつと出て、府中まで行けさうもない。
太助　ごうぞお上りなすつて下さりませ。
幸助　それぢやあ若い衆、この子を二人しまつて下せえ。
太助　畏りました。
□○　おや、嬉しいね。
幸助　何しろ、大層草臥れた。此の按摩さんを連れて上つてもよからうの。
喜助　よろしい所ぢやござりませぬ。
幸助　それぢやあお前一緒に來て下せえ。
丈賀　それは有難うござりますが、まだ今日は口明けをいたしませぬ。
○　旦那のお療治をしまつたら、二階を一遍廻つてお見、

□　何處でかしら揉み手があるよ。

丈賀　いえ、お療治は兎も角も、同じ名前のこつちのお家。

幸助　もしや尋ねる、いや、旅の疲れを二階にて。

丈賀　お禮がてらにゆつくりと。

幸助　肩から揉んで貰はうか。

喜助　さあ、お上りなさりませ。

太助　お客だよ。（ト奥にて、）

大勢　はい――。

ト流行唄になり幸助先きに○、□、丈賀に太助附いて奥へはひる、喜助履物札を附け見世にある臺の物をかつぎ奥へはひる、引違へて奥より源左衛門、着流し女郎屋亭主のこしらへにて出來り、思入あつて、

源左　今旅人に連れられて二階へ上つた旅按摩は、お富の親の丈賀だが、娘故とはいひながら、目も見えねえで旅の空、路頭に迷ふ身の因果、廻り廻つて今日爰へ來るといふも盡きせぬ縁、昨日今日のやうだつたが、算へて見ればもう三年、月日の經つは早いものだ。（ト奥より喜助出來り、）

喜助　旦那、何をしておいでなさいます。

源左　手前にちつと用があるから。
喜助　はい、何でござります。
源左　今上つた旅人は、あれはたゞの者ぢやあねえぜ。
喜助　へえ、左樣でござりませうか。
源左　姿は商人ごしらへだが、二本差に違ひねえ。
喜助　どうしてそれが知れました。
源左　脇差の差しやうが違ふ。
喜助　それぢやあ今のは。
源左　これ。（ト喜助に囁き、）氣を附けてくれ。
喜助　合點でござります。

ト流行唄になり、花道より以前の○△垂をおろせし駕籠を擔ぎ、跡より蝙蝠安半合羽尻端折りにて附添ひ出來り、花道にて、

○　兄貴、向うが赤間屋だ。
安藏　見世の脇へおろしてくれ。

兩人　合點だ。（ト舞臺へ擔ぎ來る、喜助立ち掛り、）

喜助　へい、こりやアいらつしやいまし。若い衆、橫附けにしねえな。

△　なに、お客ぢやァありませぬ。

喜助　お客さまぢやあねえのか。（ト蝙蝠安出で、）

安藏　へい、內證へ用があつて參りました。（トこれにて源左衞門蝙蝠安を見てぎつくり思入あつて、奧へ行かうとするを、）あもし旦那、ちよつと待つて下さりませ。（ト源左衞門思入あつて、）

源左　なに、待てとは誰だ。

安藏　旦那、安藏でござります。

源左　おゝ安か、よく來たな、まあ此方へ上つたがいゝ。

安藏　眞平御免下さいまし。（ト誂への端唄になり、蝙蝠安手拭で足の砂を拂ひ二重へ上り、）まことに御無沙汰をいたしましたが、いつもながら御機嫌よろしう、お目出たうござります。

源左　どうしたかと思つて居たが、手前も達者で仕合せだ、よく爰に居るのが知れたな。

安藏　さつきこいつ等に聞きまして、明日まで待たれず夜道を掛け、お目にかゝりに上りましたが、もう引けでござりますな。

喜助　まだちつと間がござります。

○　棒組、まだ引け前だとよ、早かつたぢやあねえか。

△　杖を拔いて來たから、其の筈だ。

安藏　もし旦那、斯ういふ御生業をなすつておいでなさるとは、さつぱり知りませなんだ。

源左　する氣もねえが女房が、此の生業の產れから、勸められて始めたのだ。

安藏　何にしろ御繁昌で、結構でござります。

源左　さうしてあれぎり逢はなんだが、おつなものを顏へ彫つたな。

安藏　えゝ、爰に大きな黑子がござりましたが、泣き黑子だといひますから、こんな物を彫つて消しました。

源左　して今ぢやあ何をして居る。

安藏　もし不思議なことがござりますぜ、旦那が女郎屋をしておいでなさるに、わつちが判人をして居りますわな。

源左　はあ、それぢやあ手前は判人か、そいつア丁度幸ひだ、好い奉公人があつたら連れて來てくれろ。

安藏　そこに如在はござりませぬ、久し振りで上りましたから、お土產がてらいゝ玉を一緖に連れて參

りました。

源左　なに、奉公人を連れて來た、いや、拔目のねえ奴だな。

喜助　もし安藏さんとやら、どんな玉だね。

安藏　こんな玉の玉でねえのと、びつくりする代物だ。

喜助　そいつは何より耳よりだ。

源左　安や、早く見てえな。

安藏　今お目に掛けます。おい松や、こつちへ擔ぎ込んでくんな。

○　畏りました。（ト駕籠を下手寄りよき所へ出し、○履物を出す。）

安藏　さあ、こつちへ出な。（ト駕籠の內にて、）

お富　安さん、そこへ行つてもいゝかえ。

源左　や、あの聲は。

ト源左衞門思入、ばらりと駕籠の垂をあげる。內にお富そぼろな裝の上へお召縮緬の半纏を引掛け居るこしらへにて。

お富　お富さ。（トずつと出る。）

源左　む〻、どうして爰へは。

お富　久し振りだねえ、旦那。

ト源左衞門ぎつくり思入、誂への合方になり、お富二重へ上る。

源左　手前は死んだとばかり思つたが、そんならおぬしは達者で居たか。

お富　あい、總身にかけて七十五針、助かり難い命を助かり、冥土でなくちやあ逢はれぬ旦那に、娑婆でお目に掛りますよ。

安藏　何こ、い〻お土産でございませう。

喜助　成程器量はびつくりだ、五分もすかねえ五分玉だが、疵だらけぢやあ値打はねえ。

安藏　そりやあ外ぢやあ値打はねえが、旦那の家ぢやあ踏める代物。

源左　それぢやあおれが女郎屋を、始めた事を聞き込んで、此の疵物を賣りに來たのか。

お富　あい、どうぞ買つておくんなさいな。

源左　折角賣りに來たものを、此の儘たゞも歸されめえ。何にしろ爰は見世先き、奧へ來やれ、相談しよう。

お富　お邪魔になるか知らないが、爰が勝手でございます。

安藏　お見世で相談いたしませう。

源左　さうでもあらうが見世先きで、奉公人は極められねえ。（ト時の鐘、引けの拍子木を打つ。）

お富　そんならどうでも。

源左　はてもう、引けだ、奥へ來やれ。（トこれにてお富蝙蝠安思入あつて、）

お富　それぢやあ旦那の仰せに隨ひ、

安藏　奥で相場を極めませう。

○　もし姐御、わつちはどうしませう。

お富　お氣に入つても入らなくつても、此方の家に居る體、歸りはいらねえ巻いて歸んな。

ト△駕籠に附けし風呂敷包みを取つて、

△　この包みを、上げやせうか。

安藏　そりやあ夜明の熊が所へ歸りに寄るから、さう言つて預けて行つて下ツし。

△　畏りました。

安藏　これで一杯呑んで行かッし。

ト唄になり源左衞門先きに、お富蝙蝠安喜助附き奥へはひる、時の鐘になり、下手より黒四天の捕手、

頰冠りにて酒菰着て出來り、四邊を窺ひ呼子の笛を吹く、これにて奧より以前の幸助出來り、

幸助　傳內か。

捕手　幸十郎樣。

幸助　これ。(ト時の鐘合方になり、)北斗丸の一腰をこの家の主人が所持なすと巷の噂に聞きしゆゑ、旅商人と姿を替へ最前より入込みしが、一癖ある源左衞門迂濶に詮議なし難し、それと知れなば合圖をなさん、其の方共は軒下に非人の體にて忍び居やれ。

捕手　仰せに任せ先刻より、裏手に忍んで居りました。

幸助　必ず人目に掛らぬやう。

捕手　心得ました。

ト幸助きつと奧を見込む、捕手は菰をかぶる。此の見得時の鐘にて道具廻る。

(赤間屋內證の場)——本舞臺平舞臺、向う四尺程の延喜棚、此の飾り附けよろしく、上手一間の戶棚錠前のある鏡戶、下手白木の簞笥、用簞笥手箱など道具よろしく、上の方折廻し塗骨障子屋體、下の方後へ下げて斜に廊下の書割、揚幕へ見世の暖簾の裏を見せ、總て赤間屋內證の體、爰に源左衞門座蒲團の上に住ひ、傍に丸行燈誂への煙草盆、下手にお富、安藏仕ひ、この見得、爪彈の二上りに

て道具留る。と右の合方にて。

源左　これお富、今日まで死んだと思つたが、どうして手前は助かつた。

お富　どうしてわたしが助かるものか、命があつて助かつたのさ。

源左　これ、そんな氣障はいふにやあ及ばねえ、物は當つて碎けろだ、駕籠で態々來るからは何か望みがあるだらうから、斯うしてくれろと打ちまけて、ざつくばらんに言つてくりやれ。

安藏　別に望みもござりませぬが、戀の遺恨に弄り切り手の附けられねえお富が死骸、わつちに捨てろとおつしやつたが、息のあるのをまさか川へも打ち込まれず、せうことなしに背負ひ込んで總身へかけて七十五針、長の年月介抱して疵こそ出來たが元の身に、したのも金に仕ようばかり、幸ひ遊女屋をして居なさると聞いたゆゑ、賣りに來やした此のお富、年一杯ふんごんで、どうか買つてお貰ひ申してえ。

源左　賣るとあるなら買ひもせうが、辛い苦界の勤めをするより、金が入るなら貸してやらう、身を賣ることは止しにしやれ。

お富　思召しは有難いがお借り申すは心掛り、辛い勤めもふて寐をして、氣儘にすりやあ苦勞はねえ、やつぱりわたしを買つておくれな。

源左　おれから金を借りたとて、心掛りがあるものか、催促をして取るやうな、源左衞門だと思つて居るか、野暮を言はず、二人とも、是れを持つて早く歸れ。

ト源左衞門手箱の内より百兩包を出し、お富の前へ投る、お富見て、

お富　こりやあ旦那、幾らありますえ。

源左　七十五針の膏藥代、端たに刻んで遣られもしめえ、百兩あるから持つて行きやれ。

安藏　そんなら二人へこの金を。（ト取りにかゝるを、）

お富　えゝ、手を出しなさんな、みつともねえやな。もし旦那え、是れよりやつぱり年一杯、わたしやあ買つて貰ひたい。

源左　年一杯はおろかなこと、白髪になるまで抱へても、客へ出せねえおぬしの體、百は愚五十も出せねえ。

お富　客へ出せざあ昔馴染、お前のお伽をしようから、二百にわたしを買つておくれな。

ト源左衞門思入あつて、

源左　なに、おぬしの體を二百に買へと。

お富　何だな旦那、そんなおつかねえ顏をおしでないよ。

ト お富手拭で源左衛門の額を打ち、いやらしく言ふ。此の内上手障子を明け、お瀧窺ひ居る、下手廊下より喜助太助出る、お瀧ずつと出て、源左衛門の側へ住ひ、

お瀧　喜助、この女は何だ。

喜助　へい、目見得の女でございます。

お瀧　何だ目見得の女だ、いけ巫山戯た奴ぢやあねえか、太助引張り出してしまへ。

太助　へい。（ト氣味惡き思入、）

お瀧　えゝ、何をぐづ〳〵して居るのだ、引摺り出してしまへといふのに。

お富　おや、おつかねえのだね。

お瀧　どうしたと。（ト煙管を持つて立ちかゝるを、）

源左　これさお瀧、靜にしねえか。

お瀧　いゝえ靜にしちやあ居られませぬ。（ト喜助、太助立ちかゝり、）

太助　もし姐さん、ちよつとこちらへ來なせえ。

お富　はい有難うございます、爰が勝手でございます。

喜助　勝手であらうが、おい安さんとやら、お前も一緒に來てくんねえ。

安藏　何の用か知らねえが、用があるなら遠慮はねえ、爰で言つておくんなせえ。

太助　爰ぢやあ話しが仕憎いから、ちよつとそこまで來てくんなせえ。

安藏　いえ、久し振りでお土產がてら、賣りに來た此の女、どこへ行くにも及びやせぬ、爰で相談いたしやせう。こうお富や、旦那は何處にどの位の疵のあるのは御承知だが、お上さんは御存じあるめえ、よくお目に掛けて置くがいゝ、手前の體は疵が値打だ。

お瀧　委しく見るにやあ及ばない、一目見てもゆすり衒り、いやさ、體の疵も幾所か深い淺いは上部から見えすく心の底巧み、外の事なら知らねえこと抱へる子供は女房の役、わたしが分銅一針一兩、七十五針で七十五兩、百兩ならば言分なしだ。

安藏　言分なしとは何のことだ、腹散々抱寐をして擧句の果てに切りきざみ、あの時おれがお富の體をどんぶりやつたら下手人だ。今斯うして居なさるも、わつちが命を繋いだのだ、言分言やあ山程あらア。

お瀧　おゝ、こりや面白い、山程あるなら言ひなせえ、耳は聞き役聞いて遣らうよ。

安藏　おゝ、言はねえでどうするものだ。（ト安藏きつとなるをお富留め、）

お富　これさ、何を大きな聲をするのだ、靜にしねえ、みつともねえやな。

安藏　それださいつて、言へといふから言はにやあならねえ。

お富　はて、言ふのは何時でも言はれるわな。（トお富安藏を留め、お瀧に向ひ、）もし、お前さんはお上さんかえ。

お瀧　あい、女房だがどうしたえ。（ト強く言ふ。）

お富　もし、さうツツ慳貪におつしやいますな、いつ女房になんなすつたか、わたしも以前は旦那の妾口約束でも女房に仕ようとお言ひのこともあつたが、身性が惡さに七十五針、すんでに死ぬほど切られたが、切れぬ夫婦の二世の緣、おいやであらうがお上さん、妹と思つておくんなせえ。

喜助　これさ〳〵、姐さんそんな野暮を言ひなさんな、これが眞面目な商人なら氣障な脅しも喰はうけれど、遊女屋渡世するからは、女出入は半生業だ。

太助　高が以前は妾てかけ、世間に幾らもあることだ、手切れを出したらいゝぢやあねえか。

安藏　何だ。

兩人　さ、言へ〳〵、何だ〳〵。

お富　これさ靜にしておくれよ、じていわつちやあ內氣だからおびえるわな。こりやお前方が知らねえ話しさ、月に五兩か三兩で圍はれて居たことならば、切餅の一つも貰やあ手切の證據に書附でも、

張るのが世間の通例だが、譯の違つたわたしの體、緣を切るなら切るやうに、もしお上さん、お前捌いておくんなせえ。

お瀧　なう、旦那は抱寐をしたとけに百兩といふ手切だが、わたしが捌けば五十兩か七十兩が關の山、百兩ならばいゝ相場、默つて持つて行つたがいゝ。

お富　そりやあ旦那が米屋とか又質屋とかいふことなら、默つてお貰ひ申しますが、言はゞたゞ取る御生業人が百兩出すものなら、二百兩は當り前、京都へ登る街道の中で繁華な彌勒町、痺をきらさず出しておくれな。

お瀧　連添ふ亭主の古疵ゆゑ、くれといふならやりもせうが、いはゞ只取る生業とは、そりやあ何といふせりふだ、三束四束出來る日は只取るやうにも思はうが、金の出ねえ奉公人はたゞの一人もありやあしねえよ、しつかり元手の掛つた代物、只取るといふがあるものか。

お富　そりやあお前は知らねえことさ、今ぢやあ宿場の女郎屋だが、昔をいやあ、ねえ旦那、たゞ取ることもあつたねえ。

源左　むゝ。（トぎつくり思入。）

お富　もし旦那、一服お貸しな。（ト源左衛門の煙草入と煙管を借り、煙草を呑む。）

安藏　人の物をたゞ取つた罪滅しに二百兩、綺麗に出してしまひなせえ。（ト是れにて喜助太助立掛り、）

喜助　これ、さつきから默つて聞いて居りやあ、おつなせりふの言廻し、旦那が盗人でもしたといふのか。

太助　人の事をいはうより、うぬ等が天窓の蠅でも追へ、會所へしよびいて行つたらば直に繩の掛る奴等だ。

安藏　何だと。

喜助　切られお富に蝙蝠安、箱根をかけて名の賣れた、宿場稼ぎの護摩の灰。

太助　ゆすり衒りといふことを、旦那やお上さんは知るめえが、こちとらは知つて居るぞ。

お富　ゆすり衒りはいはねえでも、何れもさまが御存じだよ。（ト誂へ新内の合方になり、お富半纏を脱ぎ好みのこしらへになり、）年端もいかねえ身の上で、よせばいゝにと人樣に異見も度々言はれたが、女のくせに大それた、切られ／＼と言はれるも疵がなけりやあ引眉毛、自前稼ぎか旦那取り、亭主を色に榮耀喰ひ、和田や大和田のうなぎより小意氣な筋もあるけれど、額をかけて七十五針、總身の疵に色戀もさつた峠の崖ツぷち、打込む汐に濡手で粟、金は取つても高がゆすり、夜盗かつさき屋尻切り、盗みをしたことはねえ。

安藏　よくある奴だが首のねえ、兇状持でありながら、旦那々々と人にも言はれ、蟲も殺さぬ顏をして洗つて見りやあ人殺し、それから見りやあこちとらは旅から旅を飛び歩くが、惡事をすりやあ直き人の目に附く面の蝙蝠安、高島屋なら小粒でも山椒の辛い巧みもあらうが、羽根より押のきかねえのは仕馴れぬゆすりの提灯持ち、あかるい體でぬかるみへ飛び込む玉だ意氣地はねえ。

お富　上部を飾つて半纏でしがは隱して居るものゝ、長いことをいふ内には終にア襤褸の出たがるもの。

安藏　たゞ取る金でもあるめえが、封の知れねえ包金、明けて言つちやアものがねえ。

お富　言はぬが花だ、もし、旦那。

安藏　綺麗に出して、

お富　おくんなせえ。（ト此の内源左衞門ぢつと思入あつて、）

源左　こりやあ二人言合せ、おれを抱いて行く氣だな。抱いて行くなら行つて見ろ、以前を言やあ妾と手代脱れぬ主人の源左衞門、切られお富の蝙蝠安のと名うてがましく言つたとて、高が二年か三年の、功の積まねえゆすり衒り、手前達の瘦腕でおれを抱いちやあいかれめえ、今は眞面目な遊女屋だが。

ト源左衞門思入あつて上手を見る、上手屋體より幸助窺ひ居て、顏を見合せばつたり障子をしめる、

源左衞門氣な替へ、

昔話しも野暮なやつ、氣障をいはずにこつそりと、金が入るなら借りに來い、憎い奴でも抱寐をした以前を思つて貸してやらう。それとも氣障が言ひ度くば、洗えざれえ言つてしまへ、どうで一度は死ぬ體。五十で死ぬも百で死ぬも、持つて生れた約束だ。

ト源左衞門思入にて言ふ、兩人思入あつて、

お富　そりやあお前が二百兩、望み通りくんなさりやあ、何しに氣障をいふものかね。

安藏　向後お見世へ來ぬといふ、一札でも張りやせう。

源左　なに、書附をとつたとてでんどへ出されぬ互ひの身の上、いやさ、みの(紙)にしろ西の内)にしろ、破れた日にやあ反故同然。(ト思入あつて、)お瀧や、もう百兩出してくれ。

お瀧　それぢやあ、あいらの言ふなりに、二百兩遣んなさるのかえ。

源左　おぬしの前は氣の毒だが、これも古疵仕方がねえ。

喜助　こりやあお上さんのいふ通り、

太助　二百兩やるのは馬鹿々々しい。

源左　はて、金は世界の湧きものだ。

お瀧　それだといつて。
源左　えゝ、出せといふに。（トきつと言ふ。）
お瀧　今出しますアな。
　　　トお瀧つんとして手箱から百兩包みを出し、源左衞門の前へ置く。源左衞門以前の金と一つにして、
源左　それぢやア二人が望み通り、耳を揃へて二百兩、これで言分あるめえな。
安藏　なに、言分がござりませう。
お富　これさへあれば大事の男の、いやさ、男は誰もこの樣に、切れ離れよくしたいもの、只取る金でも斯うはいかねえ、もし旦那、有難うござります。
安藏　流石は名うての、いえ、なんにも言はず、有難うござります。お富、これへ入れな。
　　　ト懷より財布を出す、お富思入あつて、
お富　この金をか。
安藏　はて、大事の金だ、落しちやあいけねえ。（ト無理に取つて財布へ入れる、お富思入。）これを元手に堅氣になり、小商えでも始めましたら、きつとお禮に參ります。
源左　いや、其の禮には及ばぬから、足を近く來てくれるな。

お富　來るなといつても昔馴染、口が明いたら度々來るよ。
お瀧　いふなり次第、手切を出した其の上に、
喜助　度々來られてなるものか。
太助　今度來りやあ鹽花だ。
お富　たゞは來ねえが小遣の、金に困りやあ其の時は。
安藏　お氣の毒だが又來やす。
お瀧　てもまあ、憎い。
源左　はて、何にも言ふな、今に二人は。
安藏
お富　え。
源左　命を大事にするがいゝ。（ト思入。）
お富　どれ、更けねえうちに出掛けようか。（トお富立上る、此の時下手より以前の丈賀探り〳〵出で。）
丈賀　お富、待ちやれ。（トお富見て、）
お富　やあ、お前は父さん。（トびつくりする。）
丈賀　えゝ、おのれはなあ〳〵、何時の間にそのやうな、惡黨にはなつたるぞ。

ト這寄り、お富の裾を捉へ引き据ゑる、合方になり、

喜助　やあ、そんならさつきの按摩さんは。

太助　切られお富の父さんか。

安藏
お富　今の樣子を。

丈賀　おゝ療治を仕舞つて二階から、下りる途端に聞いた聲、もしやと小隅に身を忍び、一部始終を殘らず聞いた。おのれは濟まぬことをするなあ。

お富　濟むも濟まぬもあるものか、お前の知つたことぢやあねえよ。

安藏　目の見えねえは丁度幸ひ、知らねえ顏をして居ねえ。

丈賀　知らぬ顏はして居られぬ、目は見えねえでも耳がある、最前からのゆすりの段々、ようもく\あのやうな憎て口がきかれたこと。今更改め言はずとも知つて居ようが中年から、覺えた按摩に療治もなく其の日に困り十四から新内語りで寄席へ出し、僅か二百か三百の割をたそくに幽な暮し、ふとした緣で赤間さまのお世話になつておれまでが、樂に暮した御恩を忘れ、其の身の不義に切られたる疵を兎やかう言立てゝ、旦那へゆすりに來るなどゝは言はうやうない人でなし、目かいの見えぬこの親が路頭に迷ふも構はずに、その身の榮耀にゆすり衒り、人さまの物をたゞ取つて天道

さまがなくば知らず、何安穩で居られよう、手本は眼前この親仁、いやさ、親はかほどの惡黨になれと育てはせぬものを、えゝ情ない奴ぢやなあ。（ト悔しき思入、お富濟まぬといふ思入あつて、）

お富　お前のいふのは尤もだが、ゆすり衒りもお主へ御恩を。（ト四邊へ憚る思入にて、）さあ、恩の義理のと人並の義理を思つて朝ッから、好きな酒が呑めるものか、お前を捨てたも榮耀がしたさ、人間僅か五十年、半分寐りやあ廿五年、息のある内半日でも仕度えことをするのが德、是れが今の流行だよ。

丈賀　いかに口があればとて、言ひたいがいの憎て口、三日飼へば犬猫でも主人の恩は思ふもの、それに劣つた畜生め、おのれは狐か狸なるか、兩眼見えれば此の儘に、生して置きはせぬものを。

ト丈賀探り寄り、お富に立ちかゝるを、源左衞門丈賀を留め、

源左　これ、その腹立は尤もだが打つて變つたお富の根性、所詮頼みにやならぬから、死んだと思つてあきらめなせえ。

丈賀　それだと申して此の樣に、親が困るも餘所に見て。

源左　はて、一旦世話をしたからは、こなたはおれがどうとも仕よう。

丈賀　有難うはござりますが、それでは罰が當ります。

喜助　何であらうと、旦那のお詞、
太助　お前は默つて居ねえ。（ト安藏思入あつて、）
安藏　詰らぬことで暇取つた、立場を起して駕籠をこしれえ、
お富　ゆつくり寐ながら歸るとしよう。
丈賀　此のまゝおのれを歸すものか。（トお富丈賀を見て、ほろりとなり、）
お富　こつちもお前に別れるのが、いや、親を親とも思はにやあ、明日が日死んでも、構やあしねえ。
ト額を背ける。
丈賀　おゝ、親と思ふな子でないぞ、七生までの勘當だ。
お富　それでわたしも、あゝさばく\した。
安藏　こりや、何方もおやかましう。
喜助
太助　をとゝひ來やれ。
安藏　げぢく\ぢやァあるめえし。
丈賀　えゝ思へばく\。（ト立ち掛るを、）
源左　これ父さん、縁を切つたら捨てゝ置きねえ。

ト この内お富、安藏下手に有合ふ上草履をはき、花道へ行き、振返り、

お富　親へ不孝も二世掛けし、

安藏　え。（ト 思入、二上りの合方。）

お富　二上りは意氣だの。

ト 二上りの唄入りになり、お富 涙を呑み込み愁ひの思入、安藏 懷から財布をちよつと出し、につこり思入よろしく花道へはひる。

喜助　いや、太え女もあるものだな。

太助　これ、父さんが聞いて居るわ。

喜助　おつこシヨ。（ト合方になり、丈賀探りながら前へ出で、）

丈賀　旦那さま、御免なされて下さりませ。いつの間にあのやうな惡黨になりましたか、大恩受けた旦那さまへゆすりに參る人でなし、憎い奴でござります、今にその身に罰が當り碌な死にやうはいたしますまい、とてものことにこの耳が聞えずばよからうに、惡い噂を聞かぬうち早う死にたうござりまする。（ト 涙を拭ふ。）

源左　その歎きは尤もだが、目こそ見えね足腰の利かぬといふ年でもなし、必ずきな〳〵思はずに長生

きをする氣になんねえ、幾ら生きて居たくッても生きて居られぬ身の上ぢやあ。（ト源左衞門思入あつて、）あゝ、詰らねえことでごたごたした、お瀧や、一杯燗をつけてくれろ。

源左　酒斷ちも、もういゝに仕よう、ごうで長くはこの土地に。

お瀧　今日はお前、妙見さまで、酒斷ちの日でござんすに。

お瀧　え。

源左　いやさ、十千萬兩金があつても、死んだ日にやあそれッきり、息のある内一日でも吞みてえ酒を吞むのが德だ。父さん、お前も一杯吞みなせえ。

丈賀　有難うはございますが、酒も喉へは通りませぬ。

源左　酒がいやなら菓子があらう、茶でも入れて進ぜてくれ。

丈賀　いえもう、お構ひなされて下さりますな、是れから宿へ歸つて、お念佛でも申しませう。

源左　それぢやあお前の氣任せに、宿へ歸つて寐るがいゝ。是れは少しばかりだが。

丈賀　有難うござります。左樣なら、お暇いたしまする。（ト金を戴き財布へ入れる。）

喜太助　どれ、見世まで送つてやらう。（ト丈賀立上り、花道へ行く、）

丈賀　あゝいふ娘の出來たのも、元はといへば此の身の惡事。

喜助
丈賀　え。
太助
丈賀　いいえ、惡い事は出來ませぬな。
ト合方にて喜助丈賀の手を取り、太助附いて花道へはひる、時の鐘、誂への合方になり、此の内お瀧酒道具を出す、源左衞門猪口をとり上げる、お瀧酌をしながら。
お瀧　もし旦那、日頃のお前の氣に似合はず高が妾の言掛り、どうでもなるのに二百兩、何で金を遣んなすつた、どんな事をしなすつたか、わたしやあさつぱり合點が行かない。
源左　そりや、手前が言はねえでも、妾手かけの手切なら、五十か七十出しやあ濟むのを、言ふなり次第二百兩、遣つたはおれが舊惡に、命が惜しいばかりだ。
お瀧　え、そりやまあ何で。
源左　夫婦となれど一大事、今日まで手前に隱して居たが、おらあ實は盜人だ。
お瀧　えゝ。（トびつくりなす、凄き合方になり、）
源左　その驚きは尤もだが、何を隱さう出羽奧州喰詰めて來た長脇差し、觀音久次といふものだ。賭場の喧嘩で十三人人を殺して故鄕を逃げ、鎌倉へ來てごろつくうち、成田歸りに下總の千葉の屋敷へ忍び込み、お納戶金ご守刀北斗丸を盜み取り、それから運よく上州の絹問屋と姿を替へ、お富

を金で圍ひ者、恩あるおれに泥を塗り間男したゆゑ弄り切り、殺す心でうつかりと喋べつたおれが身の素性、斯うして居ても彼奴らの口から漏れる其の時は、娑婆に居られぬ兇状持、それゆゑ金で口塞げ、もうこの土地にもうかうかと足を留めちやあ居られねえ、手前に難儀のかゝらぬやう、去状書いて渡すから、爰で生業するがいゝ。さあ、今呑む酒が夫婦の別れだ。

ト猪口をお瀧にさす。

お瀧　初めて聞いたお前の素性、三日なり共緣あつて夫婦となつた上からは、共々野末に身の恥を晒せばとても此の儘に、どう別れられよう。死なば諸共死出三途、わたしや未練はごさんせぬ。

源左　その志しは忝けないが、それより手前は生き存らへ、首になつたら葬つて七日々々の訪ひ弔ひ水の一つも手向けてくりやれ。

お瀧　假令何と言はしやんしても、別れる心はござんせぬ。

源左　そんならどうでも共々に、

お瀧　死ぬこ覺悟を極めて居ります。

源左　鬼の女房に鬼神だなあ。（ト此の内上手屋體より幸助窺ひ居て、此の時前へ出るを見て、）

お瀧　あなたは旅のお客さま、もうお歸りでござりますか。

幸助　ちつと早いが歸ります、さつき預けた腰の物を。

お瀧　畏りました。（ト傍にある脇差を取つて出す、幸助差して、）

幸助　もう一腰出してくりやれ。

お瀧　えゝ、もう一腰とは。

幸助　御亭主、こなたが知つて居ようがな。

源左　私が存じ居るとは、どんなお腰でござりましたな。

幸助　おゝ、其の尋ねる一腰は、千葉家の重寶北斗丸。

源左　何と。

幸助　最前汝が身の素性打ち明したる其の時に、北斗丸を奪ひしと我れと我が手に自身の白狀、一腰渡して覺悟なせ。

源左　さては怪しき旅人と、見た目は違はぬ廻し者、慥に千葉の家來だな。

幸助　いかにも我は千葉家の藩中、舟穂幸十郎と申す者、姿を窶して街道筋を寶詮議の忍び役、短刀渡して繩にかゝれ。

源左　ムヽ、其尋ぬる北斗丸は、此の源左衛門が盗んだが、三年あとに賣代なし、今は我が手にあらざ

れど、罪は隠さぬ寶の盗賊、捕らるゝものなら捕つて見よ。

幸助　いふにや及ぶ、覺悟なせ。

源左　何を小癪な。

ト此の内お瀧戸棚より脇差を出し、源左衞門に渡す、直に抜いて切つてかゝる。幸助腰より十手を出しどん／＼早めたる合方にて立廻り、此の中へお瀧はひり、よろしくあつて、よきほどに下手より、黒四天の捕手四人、ばら／＼と出る。お瀧行燈を吹消す。時の鐘、凄き合方にて立廻り、トヾ捕手二人にて源左衞門を引伏せ、

捕手　しめたぞ。

トこの聲にお瀧びつくりなすを幸助襟上を取つて引附ける、源左衞門刎ね返し兩人を投げ退け、一人を踏まへるを木の頭、一腰を銜へ平ぐけの帶をしめる、捕手十手を振上げ窺ふ、此の見得どん／＼早めたる合方にて、

ひやうし　幕

ト禪の勤めにてつなぎ、引ッ返す。

(畜生塚の場)――本舞臺眞中に石の畜生塚、松の立木、日覆より同じく釣枝、正面左右とも卒塔婆を結込みし小高き藪疊、後彌勒町を斜に見たる野邊灯入りの遠見、總て狐ケ崎畜生塚の體。禪の勤

めにて幕明く。とやはり禪の勤めにて、花道より以前の喜助、太助頬冠り、尻端折りにて出來り、直に舞臺へ來り、

喜助　コウ太助、爰で一服やつて行かうぢやねえか。

太助　さつきから呑みてえが、跡から人が來るやうだから、呑みてえ煙草も呑まずに來たのだ。

ト喜助煙草入より摺火打を出し、火を打ち煙草を呑みながら、

喜助　うつかり人にやあ附合へねえ、内の旦那が盗人とは、どんな者でも氣が附かねえ。

太助　今々思やあ不斷から、錢放れがよかつたが、盗んで來た金だからだ。

喜助　何にしろ内に居りやあ奉公人はかゝり合ひ、一晩ぐらゐは行かにやあならねえ、ちつとも早く逃げるが勝だ。

太助　斯ういふことゝ知つたなら、二十五兩も盗んだもの、あんまりあわてゝ三文も、持たずにおらあ逃げて來た。

喜助　今から跡へ取つて返し、金を盗みやあ直に同類。

太助　聖人危きに近寄らずだ。

喜助　や、向うから誰か來るやうだぜ。

太助　こいつあ早く逃げるが勝だ。

喜助　いや、とんだ目に逢ふものだな。

ト やはり禪の勤めにて兩人上手へはひる、禪の勤めを打上げ、床の淨瑠璃になり、

〽夏もまだ薄き暑さの花卯月、曇りし空に行く先きも、暗き繩手の木下闇、蝙蝠安は佇みて、

ト此内花道より以前の安藏頰冠り尻端折り、駕籠へ附けし風呂敷包みを背負ひ出で來り、花道にて、

安藏　何だか宿が騷々しいが、喧嘩でもあつたか知らぬ。（ト雨車になり、）えゝ忌えましい、又降つて來たか。

〽雲足早き山風に、星もまばらの運び雨、しばし木蔭に立ち休らひ、（ト本舞臺へ來り、）お富が着替を預けて置いたから、夜明しの熊が所で駕籠を頼みながら一杯やつたが、駕籠はあつても人足が遊びに行つて居ねえので、せう事なしに出掛けて來たが、お富は何をして居るか、鼻緒で足を喰ふといつたが、直してども居るか知らぬ、どれ、待合すうち一服やらうか。

〽濕るほくちに附きかぬる、火打の火影に四過を見廻し、

ト安藏捨石へ腰をかけ、叺煙草入より火打ちを出し、火を打ちながら思入あつて、木魚入りの合方になり、

さつき内へ歸つた時、誰か男の居る樣子、はひるも野暮と門口で聞くとも知らずひそ〳〵と、お富が情人の與三郎へ、短刀を買ふ三百兩都合仕ようと受合つたは、赤間へゆすりに行く心、知らねえ顏でお先きに遣はれ、一緒に來たはゆすつた上で、金を此方へ巻上げてどぢを組まして遣る積り、數ケ所の疵を介抱の恩も厚木の在所から夫婦になつて三年越し、命の親と明暮にいふのもほんの口先ばかり、女に肌は許されねえ。然しおれが斯ういふ氣になつて居るのを知らぬが佛、大佛樣ぢやあねえけれど、目から鼻へ拔けるやうな素早い奴だがそこが女、うつかりおれに二百兩渡しやあがつたが運の盡き、殺らして行かうと思つたが酷い殺生するよりも、これから直に帆を掛けて、七十五里の遠州灘舟で乘ッ切り伊勢路から、伊賀を廻つて大阪へ一足飛びが上分別。幸ひ雨も止んだ樣子、どれ、彼奴の來ぬ間に出掛けようか。

〽逃げ支度なす後より、突出す刃物に貫ぬかれ。

ト此の時藪の内より、出刃庖丁にて安藏を突く、安藏アッと言つて倒れ、

やあ、おれを切つたは何者だ。

お富　誰でもねえ、切られお富だ。

〽藪押し分けて庖刀を、逆手に振上げ立ち出るお富、

ト藪をおし分け、以前のお富、庖刀を振上げ、きつと見得、一つ鉦凄き合方になり、

安藏　やゝ、こりやお富には、何時の間に。

お富　お主の爲めに愛敬を捨てゝゆすつた二百兩、どうで素手では渡すめえと、思つたゆゑに夜明しの立場酒屋で庖刀を、盜んで直に裏手から田圃傳ひに先へ來て、藪蚊に喰はれてさつきから後で樣子は殘らず聞いた、七十五里の遠州灘あぶねえ舟に乘るよりも、弘誓の舟で死出三途冥土へ行くが近道だ、覺悟極めて六道の辻に迷はず早く行きねえ。

安藏　そんなら今の問はず語り、わりやあ後で聞いて居たか、心の替つた女だが、三年この方女房になし、抱寐をしたゞけ不便ゆゑ、命は助けてやらうと思つた、未練な心に裏をかゝれ、却つてわれに切られたか、もう生かしちやあおけねえぞ。

お富　えゝ、愚癡を言はずと往生しねえ。

〽又も肩先き切り附くれば、流るゝ血汐に目もくれなゐ、流石亭主に殺し兼ね、刃金も鈍る庖刀を、蝙蝠安は足下にふまへ、

トお富安藏の肩先きを切る、是れにて糊紅になり兩人立廻り、お富殺し兼ねる思入、安藏お富を引倒し、庖刀をふまへきつと見得、やはり一ツ鉦の合方にて、

安藏 今息の根を留めてやるから、冥土の土産に聞いて行け、赤間の妾の時分から、ぞつこん惚れて宿無しを頼んでわれを引ツ擔がせ、强淫しようと思つたも與三郎めに邪魔をされ、鶍の嘴に簪と小柄を證據に辻堂で出逢ひをなした底を割り、七十五針縫ふ程の疵は附けても一旦の思ひの念を晴らさうと、介抱なして女房に持つたが病の惡心から、ゆすり衒りもおれが仕込み、擧句の果てに殺されちやあ、あんまり馬鹿を三保が浦、爰は所も狐ヶ崎、一番地切だ覺悟しろ。

トきつと見得、お富安藏の足を拂ひ、思入あつて、

お富 その惡巧みも疾うからして、知つては居れどあの折に、介抱受けた恩あるゆゑ恨みを餘所に今日までも、蟲を殺して女房になつて居たのも命が惜しさ。たつた一人の父さんと、言交したる與三郎さんに逢度いばかりで存へた其の甲斐あつて廻り合ひ、名乘つて見れば故主の御子息、なくてならざる短刀の償の金の二百兩、それが欲しさに三年越し假にも亭主にしたそなた、殺すも因果殺さるゝも、因果と思つて往生しねえ。其のかはりにやあ死んだ跡で一本花に線香の、煙りは斷えず手向けるから、それを土産に金を渡し、七本塔婆になつて下せえ。

安藏 心の腐つたとち阿魔め、うぬが手向けを受けるものか、深手は負つても蝙蝠安、殺されるなら殺して見ろ。

お富　假令この身は共々に、死ねばといつて其の金を、お役に立てずにおくものか。

安藏　何を小癪な。

〽垣根の卒塔婆引拔いて、打つて掛れば身をかはし、附け入る刃を振拂ひ、打ちつ打たれつ夜嵐に、鳴子のゆれる如くなり。

ト安藏垣根の塔婆を拔き打つてかゝる、お富庖刀にて突いてかゝる、淨瑠璃の切より誂への鳴物になり、藪の内を遣ひ、立廻り存分あつて、安藏の脇腹へ突込む。

〽隙を窺ひ脇腹へ、ぐつと突込む急所の深手。

高が女と侮つて、やみ〱うぬに殺されるか、えゝ忌えましい。

ト安藏お富の髻をつかみきつとなる。

お富　おゝ尤もだ、尤もだが、亭主を殺すもお主の爲め、今にわたしも跡から行き冥土で言譯する程に清く往生して下せえ。南無阿彌陀佛。

〽刃を拔けば目を見開き、摑みし髻放さねば、五本の指もばら〱と、降出す雨と諸共に果敢なく息は絕えにける。

ト お富庖刀を拔く、安藏やはり髻をつかみ居るゆゑ、庖刀で指を切る思入、これにて安藏よろ〱

　　となりばつたり倒れる。

〽お富は手早く懐より財布引出し押し戴き、(トお富安藏の懐より二百兩入りの財布を出し、)
ちえゝ忝ない、此の金取らうばツかりに、女の身にてゆすり衒り、連添ふ亭主を殺せしも、お主の難儀救はう爲め、少しも早く與三郎さまへ、おゝ、幸ひのこの着替、血汐が附けばこれを着替へて、

　　ト以前の包みを取り上げ、

〽包みをかゝへて行かんとせしが、
南無三、向うへ來かゝる人影、遣り過して、おゝさうぢや。
〽藪の小蔭へ身を忍ぶ。(トお富思入あつて藪の蔭へはひる。)
〽折しも爰へ道具屋の、吾市が跡を與三郎、追ツかけ來り引き留め、

　　ト花道より吾市羽織一本差し尻端折り、短刀の箱を風呂敷で背負ひ、小田原提灯を提げて出來る、跡より以前の與三郎着流しにて出來り、花道にて、

吾市　もし與三郎さま、何時も同じせりふだが今日ばかりは待たれませぬ、何を隠さうこの短刀は、彌勒町の赤間屋から内々で出た代物、ちつと氣障な噂があれば、早く賣つてしまひたいのだ、もう

明日までは待たれませぬから、お斷り申しまする。

與三　さういふ譯もあらうけれど、是非々々金子調達なせば、今宵の所を待つて下され、最早明日調はずば何れへなりとも賣らつしやい。もう一日とは申すものゝ、僅か半日の所なれば、どうぞ待つて下されい。

吾市　そりやあ一日や半日に、何もめかりはござりませぬが、今もお話し申す通り、ちつと譯がござりますれば、早く賣つてしまひたいのだ、それゆゑ金目な代物を、夜る夜中持ち歩きます。

與三　甚だ無理なことながら、其の短刀が手に入らねば、居てもたつても居られぬ某、半日待てずば一時なりとも。

吾市　お氣の毒だが、待たれませぬ。

〽ひかへる袖を振拂ひ、行くをしばしと追ひ來り、

ト與三郎袖をとらへるを振拂ひ、舞臺へ來る、與三郎追ひかけ來て、

與三　そんならどうでも、待たれぬか。

吾市　はて、今持つて行けば右から左り、直金になる短刀、待てなら待つて上げませうが、今金が出來ますか。

與三　さあ、今というては。
吾市　金が出来ずば待たれませぬ。
〽金の切羽に兎やせんと、思ふ後に聲あつて、
お富　その金、お渡し申しませう。
〽立ち出るお富にびつくりたし、（ト後からお富出る。）
與三　や、思ひがけないお富なるか。
お富　與三郎さま、やうやく金子が手に入りました。
與三　そんならそなたの働きで。
お富　御用に立てゝ下さりませ。（ト金を出す、與三郎取つて、）
與三　何にも言はぬ忝ない。（ト戴き、）それ、代金の二百兩。
吾市　これは〳〵有難い、思ひも寄らぬ今夜の商ひ。
〽脊負ひし風呂敷とく〳〵と、短刀渡せば與三郎、火影に取つて打ち見やり、
ト吾市提灯を下へ置き、風呂敷包みより短刀を出し與三郎に渡す、與三郎提灯の燈火で改め見る。
この内吾市も金を改め見る。

與三　相違なき北斗丸、身共が慥に受取つた。して、金子はよいか。

吾市　よろしい段ではござりませぬ、慥にお貰ひ申しました。（ト提灯を取り上げ四邊の血汐を見て、）やあ
こりやあ大層な血汐のしたゝり。

與三　まさしく人をあやめし樣子。

お富　はい、切られた者がござりました。

吾市　え、そりやまあ何處で。

お富　つい、其處でござります、

吾市　はあゝ、人殺しだ〳〵。

〽臆病風にわな〳〵と、足もしどろに逃げて行く。（ト吾市びつくりなし下手へ逃げてはひる、）

〽跡見送りて與三郎、

與三　そちが蔭にて紛失の、北斗丸が我が手に入り、本地へ歸參の與三郎、禮は詞に盡されぬ。

お富　勿體ないそのお詞、親忠助の緣により、いはゞ家來の此のお富、何のお禮に及びませう。

與三　して調達のこの金子は、赤間とやらより借受けしか。

お富　御用に立てんと道ならぬことで取り得し二百兩、それを連添ふ安藏が横取りせんとなせしゆゑ、

據なく手に掛けて殺しましてござります。

與三　やゝ、そんなら今の金ゆゑに、連添ふ亭主を殺せしとか、さういふ事のある上は當所に居るは身の大事、故郷へ歸る我と共々今宵の內に當所を立退き、千葉のあたりに身を忍び、本地へ歸參いたしなば、屋敷へ引取り妻となさん。

お富　その思召しは嬉しけれど、赤間に疵を受けてより、蝙蝠安にすゝめられ、三年この方ゆすり騙り、そればかりか大それた人殺しさへある身の上、殊には額より總身をかけ數ケ所の疵のあるわたし御新造さまの奧さまのと、附合ひ堅いお屋敷へ、どうして行かれませうぞえ。

與三　假令いかなる科ありとも、父が汚名を雪ぐのは、偏にそなたの蔭なれば、紛失なせし北斗丸上へ差上げ一旦の忠義を立て又候や、浪人なして連添はん。よしや兩腰捨つるとも、此の儘そなたを捨てられうか。

お富　すりやそれ程までにわたしをば、あなたは思うて下さりますか。

與三　おゝ思はいで何とせう、人は兎もあれ我が爲めには恩ある身の上。

お富　そんならこんな疵者を、承知であなたはわたしをば。

與三　この世はおろか二世三世。

お富　女房に持つて下さりますか。
與三　盡未來まで替らぬ女夫。
お富　えゝ嬉しうござんす。
〽流石お富も我が惚れし色には常の女子にて、抱き附きたる折柄に、
ト お富嬉しき思入にて與三郎に縋り附く、此の以前下手の藪蔭より丈賀窺ひ居て、
丈賀　いや、その女夫にはなられぬぞ。
〽聲にびつくり驚く兩人、始終窺ふ親丈賀、藪の小蔭を探り出で、
ト 兩人びつくり飛び退く、下手より丈賀探りながら出るを見て、
お富　や、お前は父さん。
與三　なに、親父とは。
丈賀　へい、忠助めでござります。
與三　絶えて久しき忠助なるか。
丈賀　あゝ、お懷しうござりまする。
與三　盲目となりて十何年、音信不通に逢はざるゆゑ、お富をそちが娘と知らず、言交したる與三郎。

お富　家來の身にて有難いお主さまに連添ふは、此の上もない身の仕合せ、出來した娘と悦んで下さんせにやならぬのに。

與三　二人が女夫になられぬとは。

丈賀　添ふに添はれぬ譯あつて。

與三　して又それは。

お富　いかなる譯にて。

丈賀　添はされぬのは此の世から、畜生にせにやならぬゆゑ。

與三
お富　え。

丈賀　何を隱さう二人は、胤腹替らぬ親身の兄妹。

與三
お富　えゝゝゝ。

〽思ひがけなき兄妹ご、聞いて二人は打ち驚き、

與三　してまあ二人が、

兩人　兄妹とは、

丈賀　この身の懺悔、一通り聞いてくりやれ二人のもの。

〽先立つ涙おし拭ひ、（ト床の合方、一ッ鉦になり丈賀思入あつて、）今を去ること廿五年、井筒のお家に勤めし折、腰元およよと不義をなし御追放にもなるべきを、お慈悲深くも表向き二人を夫婦にして下され、間もなく女房が懷妊に御新造さまも御懷胎、月日も替らず同日に產れし二人の男の子、その面差の似たところよりふつと起りし惡心に、抱いて參つて產屋にて人目を忍び入替へ置き、その後お富を產みしとき產後の惱みに女房が死去、泣きの淚で暇を取り此處や彼處の貰ひ乳で育てる內に總領を、五ッの年に迷兒となし、今において行方知れず、

〽主人の目をば晦ませし其の報いにて兩眼つぶれ、天の御罰のそら怖しく。心を入替へ按摩になり、行方の知れぬ主人の胤、尋ね出して身の詫びこ思ふに任せぬ浮世の中、犬畜生に劣つたる親の子とて二人とも、知らぬ事とはいひながら、現在親身の兄妹で契りを結びし畜生道、それぢやによつて添はされぬわいの。

〽過ぎ越し方の身の罰を明けて塞がる胸の內、聞く兄妹は今更に、互ひに顏も合せかね、
ト丈賀よろしく思入にていふ、與三郎お富面目なき思入にて、

與三　初めて聞きし身の素性、今日まで井筒の總領に、生れしとのみ思ひしに。

丈賀　まことは産屋で取替へし、此の忠助が實の悴。
お富　そんならお前が眞實の、兄さんでござんしたか。
與三　そちは妹であつたるか。
お富　こりやどうしたら、ようござんせう。
〽互ひに顔も合せかね、面目涙。
與三　どうというて今更に、仕樣模樣もなき身の上。
〽知らぬ事とはいひながら、一度ならず二度までも、契りを結びし因果同士。
ト與三郎お富よろしく思入あつて、
これといふのも大切な短刀詮議なすべき身で、色に心を奪はれて忠孝忘れし天の罰、この身は是非もなけれども、たつた一人の妹を畜生道へ落せしは、兄が心の亂れしゆゑ、許してくれよこれ妹。
〽先非を悔いし與三郎、お富もなく〳〵顔を上げ、
お富　今更いうて返らねど木更津舟で逢うた時、わたしがすけなうしたならば、こんな事にはなるまいもの。

〽神ならぬ身の露知らず、現在血筋の兄さんに、
手出しをしたはわたしの科。
〽堪忍してとばかりにて、悲歎の涙に暮れければ、與三郎も涙を拂ひ、

與三　この上は是非もなし、生きて憂き恥曝さんより、一命捨てゝ相果てん。

お富　おゝ、わたしもどうぞ共々に。（トお富與三郎に縋る。）

與三　あ、いや〳〵、そちと一緒に死ぬときは心中なせしと死後までも、此の身に憂き名を負はねばならぬ、そちは命をながらへて目の不自由な親父さま、お側に附いて介抱なし、今日を忌日に七々日の。追善供養いたしてくりやれ。

お富　さあわたしが常の女子なら、跡に殘つて御介抱、とひ弔ひも仕度いけれど、これまで積る身の惡事、人を殺せし上からは、明日をも知れぬわたしの命、一緒に死んで惡いなら、先きへ死なして下さりませ。

與三　いや〳〵そちは殺されぬ、此の與三郎が先へ死に、冥土にござる與左衛門樣へ申譯をいたさにやならぬ。

お富　いえ〳〵わたしが、死なねばならぬわいな。

へ死ぬを爭ふ兄妹に、側に泣き居る親丈賀、探り寄つて押し留め、

ト與三郎死なうとするをお富留め、差添へ手を掛け死なうとする、丈賀探り寄つて兩人を留め、

丈賀　おゝ其の爭ひは尤もだが、お富は兎もあれ與三郎、そちは死んでは濟まぬぞよ。

與三　何と言はるゝ。

丈賀　今手に入つた北斗丸、そちが手よりお上へ差上げ、一ツの功を立てた上、井筒の家を再興なし、旦那さまの實の御子與五郎さまを御家督に、立てた上にて死ぬるとも遲いことはあるまいぞよ。

與三　むゝ。(ト與三郎是非なき思入。)

丈賀　定めて斯ういふことであらうと、言ふまいとは思つたが、おれが言はねば女夫になり、終には同じ畜生の孫が出來るが不便さに、包むに餘つて打明けしぞ、死なうといふは無理ならねど、其の短刀を持參なし、井筒のお家を再興せずば、そなたの功が立つまいぞ。

與三　さあ、それは。

丈賀　それでも達て死にたくば、留めはせぬ死ぬがよい、そなたが死なばお富も死なう、二人の子供を先立てゝ跡に殘つて何樂しみ、おれも共々命を捨てる、生き甲斐のない體ゆゑ死ぬるは更々厭はねど、五ツの年に失ひし主人の胤を尋ね出し、其の上死にたい我が願ひ、さあ世に便りない此の

親の、命を助ける心はないか。
與三　さあそれは、
丈賀　二十五年養育の、井筒のお家を思はぬか。
與三　さあ。
丈賀　親に命を捨てさすか。
與三　さあ。
丈賀　さあ。
兩人　さあ〳〵〳〵。
丈賀　思ひ留まつてくりやいの。
〽恩と義理とにしめ搦まれ、死ぬに死なれぬ與三郎、
與三　すりや今我れが死ぬ時は、お富ばかりか親までが命を捨てるとあるからは、死ぬに死なれぬ此の場の仕儀。
お富　もし兄さん。
與三　妹。（ト顏見合せ、）仕樣模樣も、

兩人　ないことぢやなア。

お富　はアゝ。

〽又も涙のむら時雨に、濡れて乾かぬ袖袂、與三郎は氣を取り直し、

トお富泣伏す、與三郎思入あつて、

與三　親父さまの今の御異見、聞けば聞くほど一概に死なんとせしは我があやまり、此の短刀を持參なし井筒の家を興すが忠孝、さるにても入替りし主人の胤に廻り合ふ何ぞ證據がござりまするか。

〽問ひかけられて小膝を進め、

丈賀　さあ證據の品はなけれども、左りの肱に月星に、似たる痣のあるのが證據。

〽聞くにお富は打ち驚き、

お富　えゝ、左りの腕に月星の、痣のあるのが御主人の、

丈賀　おゝ、産屋の內で入替へて、我が子となせしお主の胤。

お富　そんなら今日まで連添ひし、蝙蝠安といふものが、お主のお胤であつたるか。

〽あまりの事に呆れ果て、何と詞も泣きながら。

丈賀　あゝ知らぬこととて是れまでに、此の目が見えたことならば、見覺えのある幼顏疾くにも名乘り

合ふべきに、して又その安藏どのは。
お富　わたしが手に掛け、殺しました。
丈賀　そんならそちが殺せしとか。えゝ、情ないことをしてくれたなあ。
與三　思ひがけなきことながら、すりや安藏が肱に痣が。
お富　もし、これを見て下さんせ。
〽死骸の袖を引きまくれば、夜目にもあり〳〵肱の痣。
トお富安藏の吹替の腕をまくり、痣を見せる。
與三　疑ひもなき肱の痣、我と替りし嫡子でありしか。
丈賀　して〳〵何ゆゑ殺せしぞ。
お富　さあ、お前も知つて居る通り、赤間よりゆすり取つたる二百兩、横取りせんとせしゆゑに據なく殺したる、亭主殺しも今こなり、素性が知れゝば主殺し、この道生きては居られぬわたし、ちつとも早く。
〽お富は有合ふ庖刀にて、死なんとなすを與三郎、これはと留むる隙を見て後に窺ふ道具屋が、手早く短刀摺替へて、逃ぐるも知らで兄妹が、

ト此の內お富出刃庖刀にて死なうとするを與三郎留める、此の以前より吾市後に窺ひ居て石地藏の臺の上にある短刀を自分の差してゐる脇差と摺替へ後へはひる。兩人これを知らず。

與三　あこれ、お主の胤を殺せしも、元はといへば我が爲ゆゑ、そなたが死なば共々に、我れも死なねばならぬ義理。

〽二人が死なば年老いし、目かいの見えぬ親父さま、共に死ぬるは知れたこと、子として親の命をば延ばすこそあれ縮めるは、不孝に不孝を重ぬる道理。

トこの內與三郎よろしく思入あつて、

これ死ぬのは何時でも死なれるぞ、生き存へて親父さまへ、御苦勞かけぬがせめての孝行、合點がいたか、これお富。

〽一先づ此の場を立ちのいて、死ねと目まぜで敎ふれば、お富もそれと合點して、

ト與三郎思入にてお富へ敎へる、お富呑み込みて、

お富　あい、お前の詞に從うて、死ぬのは思ひ切りました。

丈賀　そんならお富も與三郎も、死ぬるを思ひ留るとか、人でなしの此の親を、親と思つていふ事を聞いてくれたか、えゝ忝ない〳〵。

〽二人が素振も見えぬ目に、悦ぶ親の果敢なさに、
ト丈賀手を合して拜む、與三郎お富指さしをなし、じゆつなき思入あつて、
與三　生れしまゝに知らざりし、親に逢ふのも面目なき、
お富　契り重ねし兄妹の、
丈賀　この世からなる畜生道、
與三　犬は門戸を守れども、
お富　主を主とも思はざる、
丈賀　人の皮着た畜生の、
與三　親子兄妹名乘り合ふ、
お富　所も丁度駿河なる、
丈賀　名さへ二人にふさはしき、
與三　狐ヶ崎の畜生塚、
お富　約束事とはいひながら、
丈賀　思ひ廻せば廻すほど、

與三　因果同士の、

三人　寄合ぢやなあ。

〽三人手に手を取りかはし、身の上かこち泣く涙落ちて流れて富士が嶺の、雪解の水の芝川へ一度に落つる如くなり。（ト三人手を取りかはしよろしく思入、時の鐘になり、）

與三　やゝ、今打つ鐘は。

丈賀　ありや無縁寺の七ツの鐘。

お富　最早七ツに程近し。

與三　夜明けぬうちに。

〽短刀抱へて立上れば、（ト與三郎短刀を持つて立上る、此の時以前の喜助、太助窺ひ寄つて、）

喜助
太助　その短刀を。

〽それをと掛るを與三郎、籠手を拂つてずでんどう、起しも立てずお富は引附け、

ト兩人短刀を取りに掛るを、與三郎投げ退け、又立掛るをお富引附け、

お富　愛構はずと。

丈賀　ちつとも早う。

與三　おゝ合點だ。

ト行くを見返る一世の別れ、後の歎きぞ。

ト三重になり、與三郎喜助を投げ退け、つかつかと花道へ行く、お富丈賀に圍ひ太助を引附け與三郎を見送る、時の鐘の送り、波の音にてよろしくきざみ、

幕

大切

道行淨瑠璃の場
駿州初子ヶ浦の場

（淨瑠璃）契りし中も犬椿夏の文句をその儘に　穐色於富與三郎　（清元連中）

〔役名――赤間屋源左衛門、非倚與三郎、船穂幸十郎、非倚與五郎、道具屋吾市、赤間屋若い者喜助、同太助、駕籠舁ねつこの松、同でくぼくの岩。切られお富等。〕

（横田松原の場）――本舞臺一面の黑幕、松の釣枝、爰に垂をおろせし四手駕籠を置き、前幕のねつこの松、でくぼくの岩立掛り居る、禪の勤めにて幕明く。

岩　コウ松や、今そこで噂をして居たが、蝙蝠安が殺されたさうだな。

松　さうよ、府中の赤間屋で金をゆすり、歸り道で殺されたさうだが、惡いことは出來ねえな。

岩　もしやお富が殺しやあしねえか、外に色があるといふから、あの女かも知れねえぜ。器量もいゝだが好い肚胸だ。

松　それに又ゆすりに行つた赤間屋の亭主といふが、元は觀音久次といふ奥州の方の惡黨で、お富のゆすりから舊惡が割れ、屋根傳ひに逃げたとやらで、府中の宿は亂騷ぎだ。

岩　道理で往來が賑かだと思つた。そりやアさうと此の旦那は、べらぼうに重いぢやねえか。

松　さうよ、器量よりやあ目方があるが、（ト指で小判の仕方をして、）れこでも持つて居やあしねえか。

岩　れこなら何でも百兩からだ、酒手でもねだらうぢやあねえか。

松　しつかり貰はにや擔げねえ。（ト駕籠の内へ向ひ、）もし旦那、お目が覺めましたか、もし旦那旦那。

ト駕籠の垂をあげる、内に吾市乘つて居て伸びをしながら、

吾市　あゝ、いゝ心持にぐつすり遣つたが、若え衆、こゝは何處だ。

岩　爰は横田の松原でござります。

吾市　何で爰へ立てたのだ。

松　一杯貰つてお貰ひ申しませうと、それで爰へ下しました。

吾市　先きまで行きやあ飲ませるのに、途中で酒手をねだるといふのは、手前達も時代だな、今時そんなことは流行らねえ。
松　いえ申し度くもございませんが、旦那が滅法重いので、酒手でもなくつちやあ擔げやせぬ。
岩　隨分御器量もいゝ方だが、ぼつぼつがしつかりと見えますね。
吾市　え。（ト懷を抑へ、）なに、重いのは太つて居るからだ、金などを持つて居るものか。さあ、重かア増しに一杯買ふから杖を拔いて急いでくれ。（ト錢入から錢を二百出し遣る、ねつこの松取つて）
松　もし旦那、たつた二百かえ。
吾市　二百ぢやあ不足といふのか、二合づゝ買つたら言分あるめえ。
松　もし、思召しは有難うございますが、ちよつと呑んでも二升と三升、二合や三合の端た酒は呑みやせぬ。
岩　二百や三百は叩ッ返してしまへ。
吾市　二百で厭なら止すがいゝ、駕籠は乘つても乘らねえでもだ。
岩　乘らねえでもなら止しなせえ、乘せねえ方が此方も勝手だ。
吾市　手前達は勝手だらうが、駕籠賃は先き拂ひだ、爰で下りりやあ半分返せ。

松　半分ごころかあの上へ、まだ酒手を貰ふのだ。

吾市　此奴等ア人を見損なつたか、年中僞物で飯を喰つてる、馬の眼を拔く道具屋吾市、下手なことを吐かしやあがると、問屋場へそびいて行くぞ。

岩　酒手を出した其の上で、何處へでも勝手に連れて行け。

吾市　連れて行かねえでどうするものだ。

松　面倒だ、叩きしめろ。

岩　合點だ。

吾市　うぬ等にしめられてなるものか。

ト禪の勤めになり、兩人息杖にて打つてかゝる、吾市ねつこの松の息杖を引ツたくり、叩き合ふ。此の内吾市懷より二百兩入りの財布を落す、ねつこの松これを取上げ、

松　やあ、こりや金だ。

吾市　南無三それを。（ト取らうとするを突き退け。逸散に上手へ逃げてはひる。）うぬ、それを取られてなるものか。（トでくぼくの岩を突倒し、逸散に上手へ追ひかけはひる、でくぼくの岩起上り。）

岩　やい松や、待たねえか〳〵。駕籠を捨てゝも行かれめえ。（ト駕籠の内を見て、）何だ、駕籠の中に書

附があるが、道具屋が忘れて行きやあがつたか。(ト駕籠の内より淨瑠璃觸れを出し、開き見て、)「淨瑠璃名題――。」(ト淨瑠璃名題、太夫連名役人の名前を讀み、)こりやあ淸元の淨瑠璃觸れだ、何にしろ棒組のねえ戻り駕籠は、役が惡い。

ト禪の勤めにてでくぼくの岩駕籠を擔ぎ上手へはひる。禪の勤めを打上げ、知らせに附き正面の黑幕を切つて落す。

(道行の場)――本舞臺向う流れのある在體の遠見、立木の張物、正面舞臺前共卯の花の土手板、楓の立木、日覆より楓の釣枝、總て在體の道具よろしく、下の方淨瑠璃臺、爰に淸元連中居並び、よろしく道具納まる。と直に淨瑠璃になり、

〽花咲きし昨日の春を今日忍ぶ、夏は來れどもまだ寒き片山里に卯の花の、雪の素足の跡さへも殘る卯月の雨あがり、

ト本釣鐘ばた〳〵になり、花道より與三郎頰冠り尻端折り大小にて、つか〳〵と出來る、跡より喜助窺ひ出る、これと一緒に東の假花道よりお富頰冠り棲を端折り、つか〳〵と出來り、跡より太助窺ひ出る、双方一時に留り、

〽年も十九か廿日月、茂る若葉に蔭闇き木々の下道ばら〳〵と、雨の雫の落人に掛りし空のむら雲も、小夜吹く風に吹き散りて、見かはす月の顏と顏、

ト此の内與三郎お富へ喜助太助掛り、是れを相手に立廻りながらよろしく振りあつて、與三郎は刀を拔き、お富は帶に挾みし庖刀を振上げる。これにて喜助太助向うへ逃げてはひり、兩人舞臺へ來る、チヨンと月出で、顏を見合せ、

與三　お富か。

お富　與三郎さん。

與三　これ。(ト押へる。時鳥笛。)

〽曉近く山の端に死出へ導く時鳥、それも追手と驚かれ、

ト兩人花道と東の假花道へ入代つて行きかけ、向うを見て後へ下り行き當りて双方へ別れ、手拭を取り思入あつて合方になり、

常は待たるゝ鳥の音も、若しや追手と落人の後見らるゝ腑甲斐なさ、どうやら東も白みし樣子、そなたは一人何れへ行くのだ。

お富　わたしやお前の隱れ家へ。

與三　して同道せし親父さまは。

お富　宿外れの木賃宿へ、送り屆けて取つて返し、お前に逢うて死ぬ心。

與三　そんならそちも此の世を見限り。

お富　さあ殺すもお主の爲なれど、血筋と聞いては主殺し、又二ツには兄妹で契りを結びし上からは、生きて居られぬわたしの體、目かいの見えぬ父さんに御苦勞掛けるは不孝なれど、野末に科を曝すよりはと、死ぬる覺悟にたゞ一目、お前に逢うてと思うたる念が屆いて嬉しうござんす。

與三　言合さねど我もまた、家來の胤と聞く上は井筒の家名を一日でも、此の身に附けては濟まぬ義理殊にはそちが言ふ通り、侍の身で畜生の交りなしてのめ〳〵と、人に面が合されうか。それゆゑ弟に短刀を手渡しなして其の儘に、死ぬる覺悟で出でたれど、親父さまやそなたにも逢うた上でと來かゝる途中、思はず逢ひしは盡きせぬ緣。

お富　そんならお前も死ぬ覺悟で、お家を脫けてござんしたか、爰で逢うたは丁度幸ひ、一緒に死んで下さんせ。

與三　さあ、一緒に死に度いものなれど、兄妹同士で交りを結びし上は別れ〳〵に、死ぬがせめての身の言譯、そちは是れより何れへなりと、所を替へて死んでくりやれ。

お富　そりや情ない與三郎さん。

〽初めて色に成田から旅を稼ぎの新內節、三筋世過ぎに木更津のこはい夜船に寄添うて、あ

のゝものゝと言ふうちに果敢ない別れも佛の加護、また辻堂で二世の緣結びしことは夢にして、色戀捨てゝわたしをば一緒に殺して下さんせと、男の膝に取縋り、流石女の愚癡になり譯も涙に暮れにけり。

トこの内お富與三郎をとらへ、新内模様の口說きよろしくあつて、

與三 そちがいふのも無理ならねど、

〽これが町人百姓なら人の誹りも厭はねど、一合取つても侍が心中せしと言はれては、この身ばかりかお主樣、忠義も盡くさで人の口、かゝる契りが又外に永い未來も畜生道、許してくれよ妹と、切なき兄が身の言譯、理りせめて哀れなり。

ト與三郎よろしく思入あつて、お富ワツと泣き伏す、與三郎も顏を背け涙を拭ひ居る。

〽折から爰へ弟草實生の菊の與五郎が、それと見るより走り寄り、

ト花道より與五郎着附大小、短刀の箱を抱へ、小田原提灯を提げ出來り、花道にて舞臺を透し見て、つか〳〵と舞臺へ來り、

與五 や、そこにおいでなさるは、兄者人でござりますか。

與三 そちは弟、何ゆゑ爰へ。

與五　最前お前が出てのあと、舟穗殿がござつたゆゑ、これ幸ひと渡されし北斗丸の短刀を、御覽に入れしにこは如何に、似ても似附かぬ品ゆゑに、何を詮議いたせしとて、舟穗殿も御立腹。

與三　すりや手に入りし短刀は、贋物にてあつたるとか。

與五　これ、御覽下さりませ。（ト箱より短刀を出し見せる。）

與三　まことにこれは眞赤な贋物、最前道具屋吾市より、改めて受取りしが。

お富　どうしてそれが贋物に。

與三　なりしは此の身の絕體絕命、せめて失せたる短刀を上へ差上げ一ツの功と、思つた事も鵤の嘴。もうこの上は。

〽肌くつろげて與三郎、死なんとなすを押し留め、

ト與三郎差添へ手を掛け死なうとするを、與五郎留めて、

與五　あ、これ、兄者人早まつたこととして下さりますな、今お前が死ぬ時は年端も行かぬこの與五郎、短刀詮議がなりませうか。

〽思ひ出すも涙の種、父母ともに世を去りて、誰を便りにする人もあらぬ此の身は孤兒同然親とも兄とも力にするお前に別れて何とせう、弟不便と思ふなら死なずと共々短刀の詮議を

なして下されと、口説き立てられ是非なくも、

ト與五郎與三郎を捉へよろしく思入、與三郎是非なき思入あつて、

與三　あゝあやまつた〳〵、今某が死んだとて、其の短刀が出るでもなし、思ひ留つた、案じるな。

與五　そんなら、思ひ留つて下さりますか。

與三　正しく道具屋吾市が仕業、彼を捉へて詮議なさん、そちは此の由舟穂殿へよしなに執成しいたしてくりやれ。

與五　畏りましてござりまする。

與三　さゝ、心も急けば片時も早く、

與五　左様なれば、兄者人、

與三　弟　與五郎、

與五　必ず共に、

與三　や、

與五　早まつたことして下さりますな。

〽心は跡へ殘る月、人影長き土手傳ひ、見返り〳〵急ぎ行く。

ト與五郎跡を見返り／＼、心の殘る思入にて花道にてよろしくあつて、逸散に花道へはひる。

お富　もし兄さん、お前は短刀の御詮議に、是れからおいでなさんすか。

與三　あいや、今更彼を捕へしとて我改めて受取つたれば、いはゞ此の身の不調法、今のやうに言うたのは與五郎を歸さう爲め、重ね／＼の憂き事に、死ぬより外に思案はない。

お富　さういふ事であるならば、どうぞわたしも共々に、

與三　おゝ、斯うなる上はもうこれまで、

お富　明日の浮名となるとても、

與三　最早厭はぬ死出三途、

お富　兄妹二人連立ちて、

與三　畜生道へ落ちるとも、

お富　これも前世の約束ごと、

與三　共に鬼畜の苛責を受けん。

お富　えゝ嬉しうござんす。

〽これが此の世の別れかと、見あぐる空も薄曇り、鐘の音ひゞく無縁寺の、後世へ導く通夜

の聲。

ト兩人名殘を惜しむ思入あつて、ばた〳〵になり兩人向うを見て、

與三　又もや向うへ見える人影、

お富　見咎められては最期の邪魔、

與三　しばし小蔭に忍び居て、

お富　心靜に、

與三　最期を遂げん。

〽手に手を取りて行く道も、ちすぢに搦む苗代田、畔を傳うて、

ト三重、時の鐘にて與三郎お富の手を取り、上手へはひる。

〽行く先きも、靄に小闇く見えわかぬ、森をはなれてたゞ一羽、夜明けも待たで立つ烏。

ト本釣鐘ばた〳〵になり、花道より、源左衞門好みのこしらへ一本差し頰冠りにてつか〳〵と出來り、

〽今は赤間も忍ぶ身に、往來なければ後先へ心配りて立留り、(ト源左衞門思入あつて)

跡を振返りほつと思入。

源左　世の譬にも、川だちは川で果てると言ふ如く、惡事を止めて善心に立ち歸つても是れまでの、我が

身に積る舊惡に、又顯はれて觀音久次、只不便なは女房が後へ心の殘らぬやう、命を捨てたか素人にやあ生れ勝つた根性だ、おれもこれから中國か九州筋へ行かにやあならねえ、今夜が別れ行きがけの、駄賃にお富をぶツぱなし、馬で飛ばして中仙道、木曾を廻つてちつとも早く。(ト 鷄笛)
もう夜明けに近いわえ。

〽東も白み街道を、引く馬士唄に氣も急かれ、いそぐ後へ捕手の人數、

ト驛路の鈴になり、源左衞門舞臺へ來る、跡より黑四天の捕手二人窺ひながら舞臺へ來て、

捕手　捕つた。(ト打つてかゝるを身を躱し、ちよつと立廻つて、)
源左　や、さては我を追手の捕手か。
捕手　おゝ、府中の宿の東西南北、
同　搦め取らんと窺ふ我れ〳〵。
源左　源左衞門も又元の、觀音久次となるからは、死にもの狂ひだ覺悟なせ。
捕手　何を小癪な。

〽打つて掛るを身を躱し飛鳥の如き働きに、爰の稻叢かしこの木蔭、塒はなるゝ鳥ならで、一度に掛る時しもあれ、早出の杣が木こり唄。

ト兩人掛るを左右へ投げ退ける、此の時上手より同じく黒四天の捕手四人ばら〳〵と出で、打って掛り、よろしく立廻りあつて、源左衞門眞中にてきつと見得。

〽杣人も色にあふみのみかの山、末はつま木と藤蔓に結び合うたる中ぢやもの、積る思ひの思ひの解けて、解けて流るゝ谷川の深い淺いは戀の淵、ションガエ〳〵。

ト此の内竹笛入りにて、源左衞門六人の捕手を相手に捕物の立廻りよろしくあつて、鷄笛。

〽はや明け近き亂れ鷄、逃ぐるを遣らじと追うて行く、跡にはお富與三郎後の浮名や殘すらん、後の浮名や殘すらん。

ト捕手上手へ逃げてはひる、源左衞門跡を追つかけはひる。段切、知らせに附き、太夫座を樹木の張物にて消し、正面の遠見胴折れにて岩組になり、向う打ち拔きに三保の松原、二段の波手摺よろしく道具納まる。時の鐘ばた〳〵になり、上手より與三郎お富出で、

與三　あれ見よお富、東も白み、最早夜明けに程近し。

お富　人の目褄にかゝらぬ内、

與三　爰ぞ二人が死に所、

お富　少しも早う、

與三　お富、
お富　與三郎さま、
與三　覺悟はよいか。
お富　南無阿彌陀佛。
　ト兩人肌ぬぎ死なうとする、此の時後へ以前の源左衞門出で、
源左　死ぬならおれが殺してやらう。（ト兩人の肩を一刀づゝ切る。兩人びつくりなし）
お富　やゝ、こなたは赤間源左衞門、
與三　さてはお富を遺恨に思ひ、
源左　妾を取られし女敵討、爰で出逢ふは百年目、二人共に覺悟なせ。
與三　おゝ、どうで二人も死ぬ覺悟、
お富　切つて恨みを、
兩人　晴らせよ赤間。
源左　源左衞門が兩人を女敵討にうつたるも、ごうで始終はこのおれを、親の敵と覗ふは治定、後腹病めぬ其の爲めに、女敵兼ねた返り討だ。

與三　そりや又何ゆゑ。
源左　冥土の土産だ、聞いて行きやれさ。
兩人　やゝ、何と。
源左　こなたの親の與左衛門に、切腹させしは我が仕業。
お富　さては千葉家の北斗丸、
與三　奪ひ取りしはこなたよな。
源左　如何にも千葉家へ忍び入り北斗丸はおれが盗んだ、年限たつて先達て賣代なせしが今での後悔。
與三　その短刀を求めんと、お富に賴みし二百兩。
お富　價の金を調達に、ゆすり衒りもお主の爲め。
源左　すりや短刀は手に入りしか。
與三　千々の思ひで求めしも、似ても似附かぬ贋物にて、
お富　艱難辛苦も水の泡。
源左　それこそ道具屋吾市の仕業。（ト此の時ばた／＼になり、吾市走り出來り、源左衛門に行當る、源左衛門見て）や、おのれは吾市。

吾市　南無三、こゝには。

ト逃げようとするを源左衞門引附け、持つて居る短刀を引ツたくろ、是れにて金財布を落す、お富これを取上げる、源左衞門手早く短刀を抜き放しきつと見て、

源左　不思議に我が手に戻りし短刀。(ト與三郎下より見上げて、)

與三　やゝ、それぞまことの北斗丸。

お富　又この金は二百兩。

吾市　それを。

ト振りほどき取りに掛るを源左衞門手早く一刀浴びせる、吾市ワツと言つて倒れる。兩人見やり、

與三
お富　これは、

源左　いや、此の下手人は觀音久次。(ト言ひながら白刃を我が手に腹へ突込む。兩人驚き、)

與三　やゝ、根強き惡事の其の方が、

お富　何ゆゑあつて自殺なせしぞ。

源左　是まで積る身の舊惡懺悔話しの一通り、聞いて下せえ二人の衆。(ト竹笛入りの合方になり、)盗みばかりやア昔から師匠はねえが段々と、巾着切から功を積み、果は夜盗の免許を受り、出羽奥州で

腕前も人に知られた觀音久次、簓の竹の叩きばなしも度重なりし兇状に、どうで始終は眞劍の刀の錆と知りながら、止められねえが身の因果、いつぞや千葉家へ忍び入り寶を盗んだばつかりに與左衛門どのに切腹させ、我が手は下して殺さねど、言はゞ久次は親の仇、積る惡事の罪亡し死なうと覺悟なしたるは、行く先き〴〵に捕手の人數、所詮脱れぬ我が體、思ひ掛なく手に入りし北斗丸の短刀で我が手に命を捨てたのはこなたに敵を討たれし心、死ぬべき時に死なざればと恥を知つたも今日の今、惡事の年明き與三郎どのへ此の身の言譯。許して下せえ。（ト思入あつて、）男の意地に二人を女敵討に斬つたれど、急所を避けし淺手故、此の二百兩を路用となし、短刀持つて、此の場を早く。（ト北斗丸を抜き、與三郎の前へ出す。與三郎取上げ、）

與三　ほゝお、惡に強きは善にもと。

お富　情の賜。

兩人　忝ない。

ト與三郎糊紅を拭ひ鞘へ納めることあつて、兩人よろしく悦ぶ思入、此の時ばた〳〵になり、中間忍び提灯を持ち、幸十郎以前の裝にて與五郎附添ひ出で、

幸十　それに居るは、與三郎どのか。

與三　おゝよい所へ舟穗氏。
お富　北斗丸が手に入りました。
幸十　なに、短刀が手に入つたとか。
與三　これ、御覽下されい。
幸十　どれ。(ト幸十郎短刀を拔き見る、與五郎提灯を差出す。)まことにこれぞ北斗丸。
源左　その盜賊は、則ち自殺。
幸十　すりや觀音久次も切腹なせしか。何にもせよ、北斗丸再び戻る上からは。
與三　跡目は何卒弟へ。
與五　あいや、兄を差し置き弟が。
與三　兄とは誰がこと、家來の悴。
與五　そりや、何ゆゑに。
お富　この金もつて父さんに、樣子を聞いて下さりませ。(ト幸十郎此内血汐の寄るを見思入あつて、)
幸十　やゝ、二人の疵より流るゝ血汐。
源左　一つに寄りしは、もしや二人は。

與三　面目ないが、
お富　親身の兄妹（ト與三郎差添を腹へ突き込む、お富は庖刀を喉へ突立てる。）
與五　やゝ、すりやそれゆゑに。
幸十　自殺なせしか。
源左　互ひの遺恨も晴れたる上は、
與三　是れより共々、
お富　冥土の旅。
幸十　我は與五郎諸共に、
與五　東へ旅立ち。（ト吾市起き上り。）
吾市　その短刀を。
ト立掛るを源左衛門引附け、止めを刺す、本釣鐘、烏笛、向う遠見へ日の出を引出す、これにて三人苦痛の思入にて、
源左　白む東に、
與三　近附く知死期、
切られお富

お富　これが此の世の、（トがつくりなる。）
幸十　目出度い、
與五　悲しい、
皆々　別れぢやなあ。

ト太撥にて明け六つの時の太鼓を打込む、これにて手負ひ三人きつとなり落入る。幸十郎短刀を持ち、與五郎手を合せ拜む。此の模樣よろしく時の太鼓、烏笛、驛路の鈴、きざみに附き、日の出を引上げ、三人は落入る。引張りよろしく、

幕

切られお富（終り）

好色芝紀島物語

目出度き御代に扇ヶ谷滿詮公の狩座にカツキと立つか弓取の八幡知ずの藪の中朧に見し戸川仙人其俗姓は衣手に常陸坊に列生の門傳へを受て今も猶名に大磯の大三浦歌に和らぐ鋪島が許へ雪の下の富士白屋十三郎が戀中に子迄なしたる勤の操堅いと誰も白鼠の刀屋手代の與三郎が思はぬ災難受たる無實何の情も内儀のお玉うなづき合の源四郎と心をあはす遣手のお爪呵責の杖小刀針年季もわづか一突に紅蓮の血汐に濡衣は鬼神も舌を枕捜しの其罪科を葛籠に入て橋からごんぶり流れ灌生佛性なる肴屋の新介お浪が盤臺に故主の難儀とおみつが身賣一荷にあまろ漁夫の五平次洲崎をさして艫拍子におせつが辛苦片袖に櫻の紋の附まとふ亡靈の一念青木主鈴が色香にまよひ夫を殺す勸懲の昔噺を狂言のさかえ

「怪談敷島物語」は、明治二年三月守田座に書卸された、作者五十四歳のことである。此の作も「切られお富」と同じく田之助を中心として作せられたものといふべきで、雙脚を失つた田之助をして十分に活躍せしめるやうに仕組まれてもあつたが、田之助も亦壯健者以上の努力を以て演出したといふことで著明である。田之助は不自由の身體を以て傾城の敷島と毒婦のお玉の二タ役を演じ分けて好評を博したといふ。先代左團次が源四郞を懸命に勤めたことも傳はつてゐるが、まだその頃は彼れも技藝に熟さなかつたので、三浦屋の責場で、敷島を責める源四郞が、仲藏のお爪と田之助の敷島とに、「拙い奴だ〻」と口小言を言はれ、あべこべにいぢめられたといふ話がのこされてゐる。書卸しの時には「好色芝紀島物語」といふのであつたが、其後「廓文庫敷島物語」といふ名題も附せられた。

書卸との時の役割は、澤村田之助(傾城敷島、同亡靈、お玉)、澤村訥升(靑木主鈴、藤代屋十三郞)、中村芝翫(魚屋新助)、中村仲藏(漁夫五平次、三浦屋の遣手お爪)、尾上多賀之丞(三浦屋の傾城誰袖、新助妹おみつ)、屋上菊次郞(三浦屋の傾城雲井)、中村福助 刀屋手代與三郞)等であつた。

挿畫にしたのは繪草紙の一部と、大正十四年三月大阪に上演せられた時の舞臺寫眞で、片岡我童の傾城敷島である。

大正十四年十二月　　校訂者



好色芝紀島物語（怪談敷島物語――六幕）

序幕

吉原仲の町の場
同　三浦屋の場
同　格子先の場

〔役名――遣手熊鷹お爪、若い者源四郎、刀屋手代與三郎、むきみ賣り五郎吉、代官岩淵郷太夫、同長井而藏、庄屋作兵衞、三浦屋新造中窪、同米山、茶屋の若い者喜助、三浦屋若い者、地廻り二人。三浦屋傾城誰袖、同新造誰人、其他〕

（仲の町の場）――本舞臺三間の間常足の二重、向う帶入りの襖、眞中に和泉屋といふ柿の暖簾を掛け、上の方に門、下の方半格子、掛行燈、箱の用水桶、爰に○△地廻りのこしらへにて喧嘩をして居るを、喜助茶屋の若い者にて留めて居る、二重に下女煙草盆の掃除をして居る、仲の町の模樣、二挺鼓の唄にて幕明く。

○　いやだ〳〵。

△　えゝ、打捨つておけ〳〵。

喜助　まあお腹も立ちませうが、御料簡なさい〳〵。

○　料簡も何もいるものか、あんまり此の野郎が人を馬鹿にしやあがるから、癪に障らあ。
△　なに、癪に障るもねえもんだ、癪に障る御面相は、もちつと氣が利いて居らあ。
喜助　是れはしたり、お前さん方のやうに、お互ひにさうおつしやつちやあ果しがございません、お心持も惡うございませうが、まあ御料簡なすつて、一廻り廻つてお出でなさいまし。
○　全體この野郎がしみッたれだから、それでわつちが癪に障るのだ。
△　まだそんなことを言やあがるか、何がおれがしみッたれだ、その譯を言へ。
○　面白い、言へといふなら言つて聞せらあ、昨夜から出來がいゝから、一杯呑ませろといふに、喰隱しをしやあがるからよ。なあ若い衆さん、それでわつちに買へといふから、そこで間違ひをしやしたのさ。
喜助　そこはお前さんのおつしやる所も御尤もでございますが、どうか爰の所は私にお預けなすつて、どうぞ笑つて下さいまし。
○　なに、お前にさう苦勞を掛けては氣の毒だ。
△　今日の所はお前に免じて、
兩人　料簡しやせうよ。

喜助　それは大きに有難うございます、御機嫌が直りましたら、お早くお出でなすつて、悦ばせてお遣んなさいまし。

○　おつウ油を掛けるぜ。

兩人　大きにお世話になりました。（ト○△下手へはひる。）

喜助　いや、いけ騒々しい手合だ。それはさうと、今夜は八幡の御代官郷太夫様がお出でなさるお約束だが、又誰袖さんが來るの來ねえのと、やかましいことを言ふだらう。

下女　ほんに、あんなやかましいお客はないね。

喜助　兎や斯ういふ内、今においでなさるだらう、ちつとそこらを片附けておかうか。

下女　さうしませうわいな。

ト喜助、下女、四邊を片附けて居る、流行唄の合方になり、向うより郷太夫羽織、大小、代官のこしらへ、面藏同じく下役にて附き、跡より作兵衛羽織着流し、庄屋のこしらへにて附添ひ出で來り、花道にて、

郷太　作兵衛見やれ、いつもながら廓の繁昌、賑かなことではないか。

作兵　左様でござりまする、如何なる石部金吉でも、爰へはひるとついうかり遊ぶ氣になりまする。

面藏　身共は廓などへ參る所存はなけれども、鄉太夫殿の附合で、つい止められず、此の程より餘程深入りをいたしたわえ。

鄉太　何にいたせ、少しも早く茶屋へ參らうか。

面藏　何さま左樣いたさう。さゝ、お越しなされ〳〵。

ト是れにて三人舞臺へ來る、喜助、下女見て、

喜助　これは〳〵旦那樣、ようゐらつしやいました。

下女　先程からお待ち申して居りましたわいな。

喜助　先づ〳〵此方へいらつしやりませ、(ト皆々よろしく住ひ、)

鄉太　何はさておき、誰袖は仕舞うてあらうな。

喜助　先刻左樣申して置きましてござりまする。

鄉太　先づそれはよしと。して作兵衞には、申し遣はした五十金を持つて參つたであらうな。

作兵　お手紙でござりましたから、早速持參いたしました。

鄉太　それは御苦勞々々、今宵はしつかり禮をいたすであらうわえ。

作兵　それははや有難うござりまする。して此の金子は、何の御入用でござりますな。

郷太　さあ、其の入用は。（ト立ちかゝる。）

作兵　その御入用は。

面藏　これさ作兵衛、何を野暮なことを言ふのだ、豫てそちも知つての通り、三浦屋の誰袖をお妾になさるお思召しで、此間から身請の相談。

作兵　すりや、其の身請に御入用でござりまするか。

郷太　いや、年にも恥ぢず面目ないが、どうしたことか彼れに執心いたし、手活の花にいたさんと身請のしるしに遣はす金、遠路の所早速持參いたしくれて、忝ない〳〵。

面藏　それはさうと、郷太夫殿の戀人誰袖君を早くこれへ。

喜助　畏りました。

郷太　長井面藏には米山が馴染だが、作兵衛にも誰か相方を出してくりやれ。

喜助　左樣なれば新造業の、中窪さんはどうでござりませう。

郷太　おゝ、彼奴は大の客取ゆゑ、作兵衛には丁度よからう。

面藏　成程郷太夫殿の仰せらるゝ通り、作兵衛の目尻の鹽梅といひ、こりや爭はれぬものでござるな。

作兵　是れは御挨拶、痛み入りましてござりまする。

皆々　はゝゝゝゝ。

ト是れにて賑かな鳴物になり、花道より誰袖、傾城打掛け衣裳、中窪、米山、誰人何れも新造の裝禿長喜世留を持ち若い衆長柄を差掛け、跡より若い衆一人附き出で來り花道に留る。

誰袖　夕霞引くや廓の晴小袖、誰教へねど紅梅の、薫り慕うて人來鳥、戀知り顔に吉原の今全盛のおいらん方、揃うた花の梅園へ人並々に恥かしい、いまだ莟もかたまらぬほんの實生も御贔屓の、何れも樣のお蔭にて、先づ是れまでは來たものゝ、此上はお前方必ず共に賴んだぞえ。

中窪　あのまあ、おいらんの言ひなさんすことわいな、當時若手の賣出しこ誰々さんも袖引いて、

米山　お前の噂ばつかりゆゑ、それでやつぱり誰袖さん。

誰人　ほんにさうでござんす、大方客衆も待兼てゞござんせう。

中窪　そんならおいらん和泉屋へ、是れから直に、

皆々　ござんせえなあ。

誰袖　ほんに、苦界は。(ト皆々こなしあつて氣を替へ、)さ、子供來や。

禿　アイ――。(ト是れにて皆々舞臺へ來る、喜助下女見て、)

喜助　これはおいらん、お早うござりました。

下女　先程からお待兼でござりますわいな。

皆々　待つて居た〳〵、さあ〳〵是れへ〳〵。（ト誰袖皆々よろしく二重へ住ひ。）

誰袖　何方もようござんしたなあ。

面藏　いや、いつ見ても〳〵、あでやか〳〵、この美しい所を見ては、郷太夫殿が現になるゝは尤も至極。

作兵　及ばぬことではござりまするが、斯ういふおいらんを自由になされる、岩淵樣はお羨ましいことでござりまする。

郷太　こりや〳〵作兵衛、其樣に言うてくれるな、身共はくわツくゐといたすわえ。

面藏　郷太夫殿の嬉しさうなお顏付。

作兵　イヨ色男さま〳〵。

ト此内喜助下女酒肴を出し、捨ぜりふにて、郷太夫誰袖へ杯をさす。

郷太　誰袖、一ツ呑みやれ。（ト誰袖思入あつて、）

誰袖　有難うはござんすが、わたしや氣合が惡うござんすゆゑ、どうぞ堪忍して下さんせいなあ。

郷太　なに、氣合が惡い、それは困つたものだ。各々お聞きなされたか、誰袖が氣合が惡いと申すが、

何ぞ良い藥はござるまいか。
而藏　生憎所持いたさぬが、然し少しぐらゐ氣合の惡いのは、尊公の顏を見たなら治りさうなものでござる。
作兵　左樣々々、して見まするご色男も、氣合の惡い藥にはなるものと見えますな。
米山　ほんにおいらんの合藥を、
誰人　子供に取りに遣りませうわいな。
誰袖　いえ〳〵捨ておいて下さんせいなあ。
鄉太　是れはしたりどういふものだ、合藥を呑む方がよいではないか。それに又身共の來る度每に、つひぞ氣合の好いことがないわえ。
誰袖　あい、わたしの氣合の惡いのは、生れ附きぢやわいなあ。
鄉太　こりや誰袖、そりやつれないといふものだ、少しぐらゐ笑顏を、見せてもよいではないか。
中往　誰袖さんの笑顏は、五郎吉さんの來た時ばかり。
誰人　あゝこれ、滅多なことを。
鄉太　むゝ、其の五郎吉とは、慥洲崎から來る剝身賣だな。

中窪　どうしてそれを。
郷太　知らいでならうか、豫々噂に聞いて居るわえ。
面藏　さては其の五郎吉といふ者が、間男とやらでござるかな。
誰袖　何のわたしらのやうなものに、色の戀のといふことがござんせう、一つ洲崎の生れゆゑ、幼馴染で、心易いのでござんすわいなあ。
郷太　あゝ口は重寶なものだなあ。（ト是れにて作兵衛思入あつて、）
作兵　して、面藏どのゝお相方は。
面藏　身共は郷太夫殿の附合で參るゆゑ、是れなる新造の米山だ。
作兵　へえゝ、此の若いのでござりまするか、面藏さま、ちよつとお立ちなされませ。（ト作兵衛面藏米山を立たせ丈競べをさせ、）申し面藏さま、あなたとお相方とはあんまりな違ひでござりますな。何の事はない、淺草の觀音樣と仁王樣のやうでござります。
米山　何を馬鹿な。
作兵　して私の相方は。
郷太　これなる新造の中窪だ。（ト作兵衛中窪を見て、）

作兵　いや、成程無い名は附けぬものだ、まことに中くぼでござりますな。
中窪　大きにお世話、是れでもいゝこいふ人がありますよ。
米山　ほんに、中窪さんは、どんなに情人があるか知れませんよ。
作兵　これは餘程の物好きと見えるわえ、はゝゝゝ。
喜助　お一つ召上つては、如何でござりませう。
鄕太　如何さま、左樣いたさう、さゝ、つぎやれ〳〵。（ト是れより酒盛りになり、鄕太夫杯を取上げる、下女酌をする、鄕太夫肴を見て、）これ、爰にある酢貝の酢が吸ひたいが、何ぞ吸ふものを貸してくりやれ。
下女　散蓮花でござりますか。
而藏　もし、これでは間に合ひませぬか。（ト中窪の額を捉へて出す、中窪むつとして、）
中窪　えゝも、大概におしなさいましよ。何ぼお前が顏が長いといつて、あんまりな數無しだよ。
而藏　これはしたり、さう怒るものではない、つい爰に有合せたゆゑ、ちよつと間に合せようと思つて。
中窪　あれ、まだ駄目を押して居るよ。（ト立ちかゝる。）
鄕太　あゝこれ、料簡しやれ〳〵。

ト皆々捨ぜりふにて中窪を宥める、流行唄の合方になり、花道より與三郎、羽織着流し風呂敷包を持ち、手代の装にて出來り、花道にて、

與三 あゝ色里とはいひながら、斯う見た所はまた格別なものぢやなあ。それはさうと仲の町の、和泉屋といふは、慥向うの茶屋であらう、郷太夫樣が來てござるか、ちよつと向うで尋ねて見ませう。（ト舞臺へ來り、）はい、御免なされませ。（ト是れにて郷太夫與三郎を見て、）

郷太 おゝ、誰かと思へば、刀屋の手代與三郎ではないか。

與三 左樣でござりまする。

面藏 はゝあ、此の仁が先刻ちよつとお話しのあつた、刀屋でござるか。最前より手前も共々相待ち居つた、さゝ是れへ來やれ〳〵。

與三 左樣なら、御免なされて下さりませ。（ト與三郎よろしく住ふ、面藏思入あつて、）

面藏 此の若い者は、どうか見たやうな仁でござるが。

郷太 おゝさ、存じて居る筈だ、この若い者は、以前藏前の米問屋、與左衛門が悴でござる。

作兵 御年貢米お拂ひの節などには、親父の名代に度々參つた、與三郎でござります。

面藏 成程さう言はるれば拙者なども度々面會いたしたが、久しう逢はぬゆゑ、とんと見忘れ申した。

作兵　さうして今では、こなた何處にござる。

與三　いえもう、御存じの通り、實家はお藏屋敷へも、出入りいたし居りましてござりまするが、買込みました米相場の間違ひより引續いたる不仕合せ、搗て加へて親父の大病、藏前の家屋敷も終には人手に渡る仕儀、據なく只今にては以前の僅な知邊を賴り、魚賣の新助と申すもの丶世話になり、この鎌倉の京橋の刀屋半左衛門方に奉公いたし居りまする。是れと申すもわたくしが不束ゆゑ、親共へ苦勞を掛け、面目次第もござりませぬ。

面藏　それは重ね〲の不仕合にて、氣の毒千萬なことでござる、然し人間は七轉八起といふから、殊に其許などは若年のこと、また開運の時節もあらう、何は兎もあれ、達者で奉公いたし居るが重疊と申すもの、必ず心を落さぬがよいて。

與三　段々との御親切、有難う存じまする。

鄉太　いやまた某も同役共へ賴み置き、引立て丶遣すであらう。それはさて置き、先達てより賴み置きたる短刀は、未だ相應な品も見當らぬかな。

與三　いえ、其事につきまして、今日態々上りましてござりまするが、丁度お誂への短刀が出ましたゆゑ、直樣御旅宿へ持參いたしましたるところ、此の廓內へお出でと承はり、お跡を慕ひ參りま

したも、なか〳〵勝れましたる品物ゆゑ、望手がござりまして、殊の外取急ぎますれば、態々これまで持參いたしました。

郷太 それは以前の馴染とて、よく態々持つて來てくれた、幸ひ今日は刀劍の目利者長井氏が同道なれば鑑定をいたして貰はう。

與三 それは好い折でござりまする。（ト與三郎風呂敷包の短刀を出して見せる。郷太夫見て、）

郷太 長井氏、この短刀は如何でござらうな。（ト面藏へ渡す、面藏見て、）

面藏 成程これは結構なる出來でござる、中身は見ぬが無銘であらうな。

與三 左樣でござりまする。

面藏 相州には名鍛冶も數多ござるが、此の短刀などは拙者が鑑定では、先づ村正と言つてもよい作でござる。して直は何程と申すのぢやな。

與三 精々働きまして決着の直段が、五十兩でござりまする。

面藏 それは至極安いものだ。郷太夫殿、こりやお求めなさつたがようござる。

ト面藏郷太夫へ短刀を渡す、中窪思入あつて、

中窪 さつきからたんたう〳〵と言ふから、わたしは又旨いものをたんと喰べさせるのかと思つたら、

馬鹿らしい大違ひだ。

女形皆々　あれまた、あんな意地の汚ないことばツかり。

喜助　中窪さんの意地の汚ないのは、今始まつたことではござりません。

中窪　おや氣障な喜助ごんだよ。おたんちんやア――。（ト是れにて中窪つんとする、郷太夫思入あつて、）

郷太　あゝこれ〳〵、喧しい、少しの間靜にしてくりやれ。ときに與三郎、長井氏がよいと仰せらるるから、如何にも身共が購める。それについて斯樣いたさう、明日、旅宿へ持參いたしてくりやれ。

與三　それは有難うござりますれど、まことに早急なことで、お氣の毒さまではござりますが、外の買手が主人方にあなたへ賣れずば直に買はうと、宅に待つて居りますれば、私はお待ち申しまする心得でござりまするが、主人が只今お購め下さりませずば、外へ賣りませうと存じまする。

面藏　さういふことなら郷太夫殿、斯うなされては如何でござらう。

郷太　どういたせばようござるな。

面藏　先刻の五十兩で、お購めなされてはどうでござる。

郷太　是れはしたり、あれはこれなる誰袖を身請けいたす手附金でござる。

トこれを聞き誰袖びつくりなし、思入あつて、合方になり、

誰袖　申し岩淵さん、お前身請けをすると言はしやんすが、わたしやどうも心が濟まぬわいな。

ト郷太夫思入あつて、少しむつとして、

郷太　なに、身共が身請けいたすが、不承知と申すか。

誰袖　あい、假令身請けをされようとも心が解けねば無駄なこと、わたしばかりが女郎でもござんすまい、何處ぞへ行つてお前相應、よい女郎衆を見立てなさんせ。

米山　誰人　もしおいらん、それでは。

誰袖　お前方まで同じやうに、捨て置いたがよいわいなあ。

郷太　いや、假令厭と言はうが、應と言はうが、高が女郎は賣り物買ひ物、金の威光で身請けなし、此の郷太夫が自由にする。

誰袖　そりやもう、金で買はれるわたし等ゆゑ、どうなと自由になりたいが、わたしやお前が厭でござんす。

トきつぱり言ふ。

郷太　どうしたと。（ト刀に手を掛け息込む。）

誰袖　岩淵さん、お前わたしを切る氣でござんすかえ。さあ切らしやんせ、賤しい勤めはして居れど、お前の儘にも。

鄕太　むゝ。(ト誰袖鄕太夫と顏見合せ)

誰袖　成るまいわいなあ。

鄕太　うぬ、さう言や、いつそ。(ト立ちかゝるを面藏留めて)

面藏　これはしたり岩淵氏、まあ〳〵お待ちなされ〳〵。これさおいらん、どうしたものだ、高の知れた剝身賣に心中立ては止しにしやれ。年が年中蜆ッ貝を見るやうに小さくなつて居ようより、鄕太夫殿に從へば、いはゞ其の身は活計歡樂。

作兵　左樣々々、面藏樣のおつしやる通り、手鍋を提げて暮さうより、玉の輿に乘る方がよさゝうなものでござりまする。

誰袖　そりやもう有難うはござんすが、好いた男と暮すなら假令手鍋を提げようとも、何の厭ひがござんせうぞいなあ。(ト誰袖立上るを、鄕太夫きつと留め)

鄕太　すりやどうあつても、得心せぬか。

誰袖　えゝも、聞くのも耳の、(ト振拂ひ)穢れでござんす。

ト唄になり、誰袖先きに誰人附いて奥へはひる。郷太夫思入あつて、

郷太　思へば憎き彼れが一言、どうしてくれう。（ト郷太夫思案の思入）

面藏　岩淵氏、先づそれよりは、又とない此の短刀を、お購めなされい。

郷太　如何さま、彼にかゝつて猶豫もなるまい、ようござる。（ト懐中より金を出し、）則ち代金五十兩、改めて受取つてくりやれ。（ト與三郎に渡す、與三郎受取り、）

與三　これは有難うござりまする。慥に受取りました。左樣なら餘り自由がましくはござりまするが、最早私はお暇いたしまする。

郷太　いや／＼與三郎待ちやれ、身共は是れより三浦屋方へ參れば、其方も同道いたし、一杯呑んで歸るがよい。

與三　それは有難うござりますれど、ちと用事もござりますれば、又後してのことにいたしませう。

郷太　何の、その遠慮には及ばぬことだ。

面藏　是非とも同道いたすがよからう。

與三　有難うござりまする。

ト此内中窪與三郎に思入あつて、煙草を吸附けて出したり、いろ／＼思入作兵衛中窪を見て、

作兵　是れはしたり中窪、そなたは間違へて居るか、現在おれが側に居るものを、何も人の客にいやらしい目附をしたり、煙草を吸附けたり、おぬしはおれが相方、人の世話をするには及ばぬ、おれに煙草でも附けてくりやれ。（ト言へども中窪夢中になり、與三郎に見惚れて居るゆゑ、作兵衞中窪の側へ行き、）これさ、中窪。（ト作兵衞中窪の脊中を叩く、中窪びつくりなし、）

中窪　おや、びつくりしたよ。誰だと思つたらお前さんかえ、常談もいゝ加減にしておくんなさいよ、折角わたしが樂んで見て居るものを、氣障な甚助だよ。

作兵　これは情ない、まだ夢中になつて間違へて居るか、おれは甚助ではない、庄屋の作兵衞だ。

中窪　おやお前は角兵衞かえ、おや嬉しいね、それぢやあ爰で一つ舞つて見せておくんなさいな。

作兵　なに、舞へこはそりや何を。

中窪　角兵衞獅子をさ。

作兵　いや、また間違へた、はゝゝゝ。（ト是れにて鄕太夫思入あつて、）

鄕太　それはさうとあの誰袖、情なくはするものゝ、こあつて此の儘歸れもせず、何と誰袖を連れ、三浦屋へ行かうではござらぬか。

面藏　如何さま、彼の君を同道なされたことならば、色よい返事をいたさうも知れず。

作兵　成程牛を馬に乘替るといふこともござりますれば、それがよろしうござりませう。

喜助　まだ、早うござりますから、二階でお一ツ召上りませ。

米山　喜助どんが氣を揉んで、考へてばかり居りますから、三階へお出でなさいましよ。

鄕太　喜助の考へて居るは、ありや生れ附きだ。

喜助　いや、惡いお太鼓でござりまする。

鄕太　さ與三郎、座敷を替て一獻いたさう。

與三　私は主持でござりますれば、最早是れにて。

鄕太　まあ、一緖に來やれと申すに。

ト是れにて鄕太夫先きに皆々附いて奥へはひる、跡端唄の合方になり、花道より五郎吉、織色の筒ツぽ剝身賣のこしらへにて出來り、花道にて、

五郎　うか〳〵來たが爰はもう仲の町だ。親父が子分の熊が妹、今ぢやあ三浦屋の誰袖といふ女郎になつて居るゆゑに、幼馴染で忘れられず一度が二度と化けて上り、內の者に見附けられ二階をせかれて居るものゝ、滿更でねえ彼奴ゆゑ、のろいやうだがちよつとでも、逢つて行きてえものだなあ。

ト舞臺へ來る、此の途端以前の誰袖出來り、五郎吉を見て、

誰袖　もし、そこへござんしたは、五郎吉さんぢやアありませんか。（ト五郎吉聲を聞きつけ）

五郎　あゝ、誰かと思つたら誰袖か。（ト浮いた合方になり）

誰袖　もし五郎吉さん、わたしや案じて居るものを、なぜ顏見せては下さんせぬ。

五郎　藪から棒に何を言ふのだ、その逢ひてえのは同じこと、毎日こつちへ商ひに來るから、お前に逢つて行きてえけれど、以前は一ツ濱邊育ち、互ひに剝身を剝き合つた中だからよかつたが、お前は立派な女郎になり、おらあやつぱり父さんの臑を嚙つて剝身賣、お前の外聞になるから、それでおらあ來ねえのよ。

誰袖　何のまあ外聞も何も入るものかいなあ、兄さんが道樂で據なく廓へ來て、長い年季の勤め奉公まだ何年と先きの知れぬを、早く年が明けたならお前の女房になりたいと、わたしや思つて居るゆゑに、こつちの方へ來なさんしたら、廻り道でもつい寄つて、顏を見せて下さんせいなあ。

五郎　そりやあお前よりおいらの方で言ふことだ、日毎に替る客の數、長い月日のその内にやあいゝ人の出來勝ちゆゑ、年が明けて表向きおれが女房に持てりやあいゝが、ひよつと寐返りでもされた日にやあ、友達中へ顏が出せねえ。

誰袖　そりやあ五郎さんお案じでない、どんなお客があらうとも、お半の淨瑠璃ではないけれど、男は一人に限つて居れば、玉の輿より味噌漉提げ、一生剝身を剝く氣でござんす。

ト此の内後へ以前の鄕太夫、作兵衞、面藏出かゝり居て、此の時鄕太夫腹を立て、前へ出で、

鄕太　こりやヤイ、人の揚詰の女郎をば、盗むとは太い奴だ。

面藏　言はゞ間男同然だ、其の分にはいたさぬぞ。（トきつとなる。）

五郎　間男とは誰がことだ。

鄕太　誰でもない、われがことだ。

五郎　なぜおれが間男だ。

鄕太　さればさ、おれが揚詰の女郎をば、なぜ盗んだ。

五郎　なに、盗みやあしねえ、おれが女郎だ。

鄕太　いや此奴が〳〵、小い形で大きなことをまき出したな、おれが女郎とは何のことだ。

五郎　この誰袖はおれが情人だ。末は夫婦にならうと約束をした女房だ、勤めをさせておくから仕方がねえが、いはゞそつちが間男だ。

鄕太　いや、しやらくせえことを吐かし居る、素人ならば知らぬこと、今は女郎のこの誰袖、假令以前

は情人にもせよ、我が揚詰のうちなれば、われの方が間男だ。

五郎　間男ならばお定まり、七兩二分といふ所だが一分の金もねえおれだ、二人共に切つてくんねえ。

誰袖　さあ岩淵さん、五郎吉さんを切る氣なら、わたしも共々切つて下さんせ。

鄕太　おゝ切らねえでどうするものだ。（ト鄕太夫きつとなり、刀を抜き掛ける、五郎吉是れをきつと留め、）

五郎　こりやあおれを切る氣だな、面白い、切られるものなら切つて見ろ、親の代から小蜆の見るかひもねえ野郎だが、ぎやつといふから海へ出て、板子一枚その下は譬の地獄と覺悟して、一暴風喰やあ浪の底、鮫や鯨の餌食となり、疾うに命はねえ體、抜身か剝身か知らねえが、その赤鰯の赤貝で切らうといふのはいたら貝、この儘詫びて歸りやあよし、ばかを吐かすと鼻ツ柱を、（ト突ツ放し、）叩き毆るぞ。

鄕太　うぬ、ちよこざいな。（ト息込む。）

五郎　やつぱりおれを切る氣だな。

鄕太　さあそれは、

五郎　さあ切らねえか。

鄕太　さあ、

五郎 さあ、

兩人 さあ〳〵〳〵

五郎 えゝ、きり〳〵と切りやあがれ。（ト體を突き附ける。鄕太夫思入あつて氣を替へ、）

鄕太 廓で人をあやめなば、却つて此の身の、

面藏 お名の出ますることもござれば、

作兵 たゞ何事も、

鄕太 この場は此の儘。

五郎 いゝや、此の儘ぢやあ濟まされねえ、お前も立派な侍ぢやあねえか、切ると言つたら切らねえか。

誰袖 さあ切たしやんせ。

五郎 さあ、何處からでも切れ。切れ〳〵〳〵。（ト兩人體を突き附ける。）

鄕太 もうこの上は。（ト鄕太夫刀を拔いて振上げる、爰へ以前の○△出來り、此の體を見て割つて入り、）

○ これさ兄イ、どうしたことの間違ひか知らねえが、

△ わつち等に任して、此方へ來てくんなせえ。

五郎　あい、有難うございますが、お前方どうぞ打捨つて置いておくんなせえ。

○　これさ兄イ、さう言つてくれちやあものがねえ。

△　まあ惡いやうにはしねえから、

兩人　言ふ事をきいてくんねえ。（ト五郎吉を無理に引立て、下手へ連れて行く、五郎吉思入あつて、）

五郎　やい三ぴんめ、今日はうぬ等に預けて置くぞ。さあ言分があるなら言つて見ろ、骨が舍利になつても、うぬ等にけぢめを喰つて、引込んで居るのぢやあねえや。

兩人　これさ、もういゝから來ねえといふに。（ト引張る。）

五郎　あい、有難うございます。（ト郷太夫をちよつと見て、）ざまあ見やがれ、いけどうめ。

兩人　さあ〳〵行かう〳〵。（ト兩人にて五郎吉を引張り下手へはひる、郷太夫思入あつて、）

郷太　命冥加な青二才め、たゞ一刀に切下げんと存じたなれど場所柄ゆゑ、控へて居ればよい事にして附上り、匹夫などゝ申すものは、いやはや他愛のないものでござるて。

面藏　尊公の仰せらるゝ通り、相手にいたすは大人氣ない。

作兵　左樣でございまする、何の事はない、あんな奴は病犬と同じことでございまする。

面藏　いや、先刻より餘程の暇入り、最早三浦屋へお出でなされては如何でござる。

作兵　成程、それが宜しうございませう。

郷太　然らば誰袖を、同道いたして参らう。（ト誰袖思入あつて、）

誰袖　いえ〳〵、わたしやちつと爰に用がござんすゆゑ、跡から行きますわいなあ。（ト此時中窪出來り、）

中窪　おいらんそれでは悪いから、まあお出でなさいましよ。

誰袖　直に行くから、お前も先へ行つて下さんせ。

中窪　そんなことを言はずに、まあお出でなさいよ。

ト中窪誰袖を引張る、此の時奥より與三郎出來り、郷太夫に向ひ、

與三　私はもうお暇いたしまする、大きに種々有難う存じまする。

郷太　是れはしたり與三郎、さりとては附合の悪い、是非とも身共と同道しやれ。

作兵　お前がさう歸りたがると、旦那の御機嫌が悪いから、ちよつと三浦屋まで行きなさい。

中窪　もしえお前さん、是非一緒に行つておくんなさいましよ。それともたつて否だといふと、喰附きますよ。

與三　これは又迷惑千萬な。（ト此の時喜助出來り、）

喜助　さあ、旦那様いらつしやいまし。

郷太　おゝ喜助か、支度はよいな。
喜助　よろしうござります。
郷太　然らば面藏殿、
面藏　岩淵氏、
郷太　御同道いたさう。
ト是れにて郷太夫先きに面藏、作兵衞、與三郎、中窪、跡より喜助白鳥を提げ附いて下手へはひる。
誰袖殘り思入あつて、
誰袖　あの五郎さんはどうしなさんしたか、種々話したいこともあれば、どうぞ逢ひ度いものぢやなあ。
ト思案の思入、爰へ下手より以前の五郎吉出來り、誰袖を見て、
五郎　おゝ誰袖、そこに居たか。
誰袖　お前は五郎さん、よう來て下さんしたなあ。
五郎　さうして郷太夫は、もう行つたか。
誰袖　あい、たつた今行つたわいなあ。
五郎　忌えましい野郎だ、とんだ所へ來やあがつて、話しの邪魔をしやあがつた。

誰袖　ほんにさうでござんすわいなあ。今も今とて、やれ身請けをするの何のと、わたしやもう顏を見るさへ厭でござんすわいなあ。

五郎　コウ旨くいふぜ、お前おれにそんなことを言つて、悦ばせておいて、内へ歸ると鄕太夫と二人で惚けやあしねえかと思へば、あんまりいゝ心持でもねえのさ。

誰袖　えゝも、憎らしい。(ト誰袖五郎吉を抓る。)

五郎　あいたゝゝゝゝ。どうで可愛がられる玉ぢやあねえ。

ト是れにて下手より、三浦屋の若い者常吉出來り、

常吉　もしおいらん、お客樣でござります、お早くお出でなさいまし。

誰袖　今行くわいな。もし五郞さん、話さにやならぬこともあれば、どうぞ、今夜引過ぎに、格子まで來て下さんせ。

五郎　そりやあ行きは行くが、立明しは御免だぜ。

誰袖　そんな事があつて、よいものかいな。

常吉　さあおいらん、お出でなさいまし。(ト常吉誰袖を引張る。)

誰袖　えゝも忙しない。(ト誰袖立上るを道具替りの知らせ、)今行くわいなあ。

ト兩人思入あつて、あれまた憎やの唄になり、此の仕組よろしく道具廻る。

（三浦屋廣間の場）＝本舞臺三間の間平舞臺、向う一面の襖、櫛形の欄間、上下折廻し障子を建切り、總て三浦屋廣間の模樣、爰に以前の鄕太夫、面藏、作兵衞、與三郎、中窪、米山、喜助酒肴を取散らし酒を呑み居る、所作の切れにて道具納る。

中窪　さあ長井さん、一拳おいでなさいましよ。

面藏　いや〳〵身共拳は不得手だ、作兵衞は大分座敷を勤めるといふ評判だから、定めし拳も打つであらう、作兵衞こ遣つたり〳〵。

作兵　ごういたしまして私は、ごまを摺つてお金を貰ふのは好きでござりますが、拳は大嫌ひでござります。

米山　そんなことを言はずと、中窪さんと一拳おやんなさいましよ。

喜助　あなたはお強いくせに、御常談ばかりおつしやいます。

作兵　ごうして〳〵。眞平々々。（ト皆々捨ぜりふにて酒を呑み居る、此內與三郎思入あつて、）

與三　いや旦那樣、私はもう澤山御酒を頂戴いたしましてござります、殊に又夜が更けますから、もうお暇いたしまする。

郷太　いや〳〵、與三郎、夜更けては物騒ゆゑ、今夜は泊つて行くがよい、ひよつと道で間違ひのあつた時には、跡で悔んで返らぬこと、明日そちが主人へは身共が申譯いたしてやらう程に、是非とも泊つて行くがよい。

與三　それは有難うござりますれど、それではどうも濟みませぬ。

面藏　殊に五十兩といふ大金を所持いたし居れば、猶々夜道はいたさぬがよい。

作兵　左樣々々、今夜泊つて明日の朝、早く歸る方がよろしうござります。

ト此の以前より下手にて、若い者源四郎窺ひ居る。

喜助　皆さんがあれ程におつしやいますから、明朝のことになさりませ。

米山　ほんに、それがようござんすわいな。

中窪　さうして溫かにして、寐かして上げますから、わたしと一緒にお出でなさいよ。

作兵　これ〳〵、おぬしはおれが相方ではないか。

中窪　いえ〳〵、わたしはぬしと見立替でありますよ。

作兵　女郎の方から見立替をするといふことが、何處の國にあるものか。

中窪　今は世が逆まだよ。

作兵　なに、目が逆まだ。

面藏　手前ではあるまいし、はゝゝゝゝ。

與三　いや段々遲うなりますれば、私はお暇いたしまする。（ト立上る。）

鄕太　これはしたり、斯程に申すに、泊つて行くがよいではないか。

中窪　お前さん今時分歸られますものかね、そんなことを言はずとわたしと一緒にお出でなさいましよ。

與三　いえ〳〵、さうしては居られませぬ。

中窪　まあいゝから、お出でなさいましよ。

ト中窪與三郎を無理に引張り、上手障子の内へはひる、下手より以前の源四郎出で、

源四　旦那樣、ようお出でなさいました。

鄕太　おゝ、誰かと思へば若い者の源四郎か、さあ〳〵一杯呑め〳〵。（ト杯をさす。）

源四　それは有難うござります。ごなた樣も、眞平御免なされませ。

面藏　さあ〳〵、遠慮なく呑んだり〳〵。

源四　有難うござります。さきに旦那樣、誰袖さんのお身請けは、如何なされます。

鄕太　いや、あれは決して外へ遣つてくれるな。身共が身請けをいたさねばならぬ、則ち手附の五十兩

（ト懐中へ手を入れ思入あつて、）南無三、渡さうと思つて持つて來た五十兩、見やれ、この短刀を買つてしまつた。（ト思入あつて短刀を見せる。）

源四　へえ、左様なら其の短刀が五十兩でござりますか。

郷太　源四郎見やれ。（ト郷太夫短刀を抜き、）燒刃金色勝れし短刀、是れも今日が手詰めゆゑ、つい是れを購めたて。

源四　左様でござりますか。ごうかちよつと拜見いたしたうござります。

郷太　さあ〳〵見やれ〳〵。（ト郷太夫源四郎に短刀を渡す、源四郎見て、）

源四　はて、此の短刀は、覺えのある短刀でござりまする。

郷太　そちが知つて居るか。

源四　それは私共の當時の女房、まだ玉苗と申しまして勤めをいたして居りました時分、青木主鈴様といふお武家様が、御所持でござりましたが、お拂ひになつたと見えまする。

郷太　左様か、誰が所持かと思つたが、出所が知れて心持が好いと申すものだ。

源四　何にいたせ外々から言込みのある誰袖さん、何ぞ證據を下さりますれば、お手附がござりませずとも、主人の方は私がよいやうに申して置きませう。

郷太　それはよいが、今差當つてそちへ渡す品が。（ト郷太夫當惑の思入、面藏思入あつて、）
面藏　その短刀を源四郎へ、五十兩の抵當に、お預けなされては如何でござる。
郷太　如何さま、五十兩で購めた短刀、金子持參いたすまで、其方へ預け置く。
源四　左樣なら私がしつかりと、お預り申しました。
作兵　して、誰袖どのゝ身請けの高は。
源四　三百兩でござります。
作兵　いや、それは高いものだ、御支配内の魚屋新助の妹に、おみつといふ娘がござりますが、誰袖どのに生寫し。
郷太　して、其の娘は家に居るか。
作兵　滑川岸の藤代屋十三郎といふ人の所へ、貰はれて參りました。
源四　それぢやあ家の、敷島さんの客十三さんの嫁御かえ。
作兵　おゝ、其の十三が女郎にはまり嫌ふゆゑ、泊りがけに新助の所へ來て居ります。
郷太　それでは其の娘に仕ようか。
源四　でも氣の多い、素人と女郎のいゝのは、比べて見ると大違ひでござります、誰袖さんにお極めな

さいまし。

郷太　それぢやあやつぱり、元木に勝るうら木なし。これ、誰袖を早く爰へ呼んでくりやれ。

源四　畏まりました、只今お連れ申します。（ト源四郎下手へ來て短刀を抜きかけ見る、時の鐘、）こいつを賣つたら。

郷太　や。

源四　いえ、此の相談は。（ト思入あつて短刀をしやんと納めるを道具替りの知らせ、）ばれにやあいゝが。

ト此の仕組よろしく道具廻る。

（二階部屋の場）――本舞臺三浦屋二階女郎部屋の模様、爰に中窪與三郎を追廻して居る。をかしみの鳴物にて道具納まる。

與三　これはしたり情ない、是ればつかりは堪忍して下され〱。

中窪　あれさ、お前さんもじれつたい、後生でありますから、わたしの願ひを叶へておくんなさいましよ。

與三　わしはお前のやうな人は嫌ひでござるわいの。

中窪　お前さんは嫌ひでも、わたしはお前さんがいゝのでありますよ。

與三　さうでもあらうが、堪忍して下され〱。

中窪　そのやうに強情をいふと、猶のこと、腕づくでも聞いて貰はにやなりませぬ〱。

ト是れより可笑味の合方になり、中窪與三郎を追廻す、捨ぜりふにて上手へ追行く、下手よりお爪の遣手そつと出で、障子を明け腹這ひになり、床の下の紙入を取つて障子の外へ出て、紙入の貫目を引いて見て、につたり思入あつて懐へ入れる。此の内中窪は與三郎を追掛け居る、お爪咳拂ひをなし。

お爪　これさ〱、中窪さん、騒々しい何を騒ぐのだ、靜におしなさい。

トお爪言紛らして中窪を叱る、中窪腹を立て、

中窪　おや、わたしや騒いぢやあ居ませんよ、今鼠が出たから追掛けて居たのでありますよ。

お爪　口の減らないことをお言ひでない、靜にして居るものを、誰が叱るものかね。

中窪　お前さんは何かと言ふと、わたしばッかり叱つて氣障だよ。

お爪　何だとえ。

中窪　何とも言やあしませんよ。

お爪　さうしてお前のお客が片附いてお出でなさるぢやあないかえ、自分のお客の所へ行きもしなくッ

て、廊下鳶をすると、打捨つちやあ置きませんよ。

中窪 はい〳〵。

お爪 はい〳〵ぢやアありません、早くお出でなさいよ。

中窪 今行く所でありますよ。（ト中窪ぶり〳〵して上手へはひる。お爪思入あつて與三郎を見て、）

お爪 おや、あなた御免なさいまし、御挨拶もいたしませんで、あんまりあの子が惡巫山戲をいたしますから、時々小言を言ひませんと仕方がござりません。

與三 いやもう丁度よい所へお前が來たので、わしも大きに助かりました。

お爪 ほんとにあの子にやあ困りますよ。さうして今直においらんが參りますから、あなたちつとお休みなさいまし。

與三 いや、わしはもうさうしては居られませぬ。

お爪 そんなことをおつしやらずに、まあ少しお横におなんなさいましよ。どれ、おいらんをお呼び申して參りませう。（トお爪思入あつて下手へはひる、與三郎思入あつて、）

與三 こんな所に長居はならぬ、少しも早く駕籠にでも乘つて歸りませう〳〵。ト思入あつて蒲團の下を捜し、紙入のないといふ思入にてびつくりなし、あちこちを捜して居る、爰

ト中窪出來り、與三郎を見て、

中窪　もしえ、何をして居るのでありますえ。さあ喧しやが行つたから、何でも言ふことを聞いておくんなさいましよ。

與三　これはしたり、其處どころではないわい、わしは今紛失物があるゆゑ、捜して居ますわいの。

中窪　そりやあ大變なことをなすつたねえ、よく捜してお見なさいましよ。

與三　わしも捜して居れど、どうも見えぬわいの。あゝこれ、誰ぞ來て下され〱。

ト兩人にて捜し、見えぬゆゑ與三郎手を叩く、是れにて下手より源四郎出來り、

源四　何ぞ御用でござりますか。

與三　いや、大變でござる〱。（トせいたるこなし。）

源四　さうして何でござりまする。

與三　何だどころではござらぬ。最前わしが寐る時に、五十兩入れた紙入を蒲團の下へ置きましたが、どうしたことやら、見えませぬわいの〱。

源四
中窪　えゝ。（ト兩人びつくりなし。）

源四　なに、五十兩はひつた紙入がござりませんえ、さあ〱〱、そりやあ大變だ。よくまあ捜して

中窪　御覧じませ。源ごん、大變ぢやあないかねえ。もしえ、わたしやあ取りやあしませんよ、よく見ておくんなさいましよ。(ト言ひながら中窪長襦袢一ツになり、着物をふるひ見せる、源四郎思入あつて、)

源四　はゝあ、それぢやあ今夜二人連れで、ふりで上つた客がありましたが、今しがたこそ〳〵と早足に歸りましたが、慥に彼奴等が仕業でござりませう、顔形を知つて居りますから、會所へ屆けて朝歸りを取押へて遣りませう。

與三　あの金がござりませぬと、わしは家へ歸ることが出來ませぬ、それにまた今お前の話しの二人の衆が、怪しいと言うた所が、きつとした譯でもなし、よしやさうとした所が、明日の朝までには何處へ行くことやら知れぬわいの。

源四　それだつてお前さん、鼠が銜へて行つたといふぢやあなし、是れより外へ行きやうはござりませぬ。

與三　それだといつて、爰でなくなつた金、是非返して下さりませ。

源四　そりやあお前さんが無理といふものだ。(ト此の時下手より◎□若い者にて出來り、)

□◎　源四郎どん、どうしたのだ。

源四　なあに、此のお客が蒲團の下へ入れて置いた、五十兩はひつて居る紙入が見えねえから、爰でなくなつた金だから、是非返せと言ひなさるのだ。

◎　そりやあとんだことだが、何にしても仕樣がねえぢやあねえか。

□　それを返せといつたつて、そりやあお前さんが分らねえといふものだ。

與三　何でも爰でなくなつた金だから、返して下され〳〵。

源四　お前も分らねえ人ぢやあねえか、内證で預つた金ならば、まどつて返すまいものでもないが、人に取られた其の金を、何でまどつて返すものだ、分らねえことを言はねえで、金さへなけりやあ大丈夫。

◎　夜更さふけに歩いても、追剝いだところが木綿もの。

□　高の知れた端た錢、試し切りなら知らねえこと、追剝ぎの方は大丈夫だ。

兩人　さあ、きり〳〵と歸りなさい。

與三　それだといつて此の儘に。

源四　えゝ分らねえ、歸らねえのか。（ト源四郎與三郎を酷く突倒す。中窪思入あつて、）

中窪　あゝわたしがお金の都合が出來れば、お歸し申しはせぬけれど、何をいつても五十兩、五兩の金

もむづかしい、高の知れたわたしなれば、所詮出來やう筈がない。

源四　さあ、ぐづ／＼しねえで歸らねえか。（ト與三郎を無理に引立てにかゝる。）

與三　それだと言つて。

源四　えゝ、こじれつてえ、歸りやあがれ。（ト三人にて與三郎を廊下へ突出す。與三郎無念の思入にて、）

與三　あゝこれ、口惜しいわえ、悔しいわえ。見す／＼爰で取られた金に違ひはない。それと知りつゝ今のしだら、何でも怪しい此の家の内。

ト與三郎きつと思入、此以前お爪出かゝり居て、この時前へ出て與三郎の側へ來り、

お爪　もし、今聞いて居りやあ、爰の内で金がなくなつたと言ひなさるが、それぢやあ家の者が取つたと言ひなさるのだね。そりやあおかたじけ、お禮から先きへ申します、わたしも二階の取締をする遣手でござんす、お前方に暖簾へ疵を附けられちやあ、わたしの役が濟みませぬ。それとも家の者が取つたといふ、證據があるなら見せておくれ、さあ見せなさんせ。

與三　さあ別に證據はなけれども、なくなつたに違ひない、何でわしが僞りを言ひませう。

お爪　はゝあ、それぢやあやつぱり取つたと言ひなさるか。（ト思入あつて、）あゝ聞えた、お前言掛りを言ひなさるのだね。こりや面白い、もう一遍言つて見なさんせ。（トお爪與三郎の胸倉を取り、こづき）

かう見た所が、人柄もよし、然も立派な男だが、大方どこぞの女郎にはまり、廓の金には詰るが習ひ、それで言掛けをしなさるのか、見掛けに寄らねえ太え男だ。

ト突ッ放す、與三郎ぢつと怺へ無念のこなし、源四郎思入あつて、

源四　こりやお爪さんの言ふ通り、大方そんなことだらう、わしやあ又正直者だから、聞いた時にやあびつくりした。成程お爪どんはお爪ごんだけ、目かどの強い所は、いや感心なものだ。

お爪　そりやあお前多くの子供を預つて、客を見分ける稼業だもの、此の位のことはお茶の子だ。

與三　證據のないを越度にして、こなさん達こそ此のわしに、言掛をするのぢやな。

お爪　なに、言掛をするものかな。

源四　これとも怪しく思ふなら、會所へ行つて、白い黒いを分けて遣らう、さあ行きなせえ。

ト引ッ立てに掛る。

與三　それぢやといふて、會所とやらへは。

お爪　行かれないのは、言掛か。

與三　さあ、さうではなけれど。

源四　さうでなければ一緒に行くか。

與三　さあ、それは。

源四
お爪　さあ、

與三　さあ、

三人　さあ〳〵。

源四　張合のねえ、（ト源四郎與三郎を張り倒し）大騙りめ。

ト突倒す、與三郎どうとなつて起上り、悔しき思入。

與三　えゝこれ、人の金を取つて置き、其の上ならず此の打擲、えゝ悔しいわい〳〵。とあつて此のまゝ主人へは戻られず、また請判の新助も不斷からあの樣に、決して朋輩が勸めても、廓などへ足踏すなとあれ程わしに言うたれば、此樣な目に逢うたゞ行かれもせず、こりやいつそお波が兄五平次の所へ行て、あの人から新助へ此の始末を話して貰ひ、出る所へ出ても此の仕埓を、附けて貰はにやならねえわえ。（トきつと思入、源四郎せゝら笑ひ、）

源四　べらぼうめ、何處へでも持ち出せ、そんなことをびつくりとでもするものぢやあねえ、さあ、早くしろ〳〵。（ト與三郎を引ッ立てに掛る。）

與三　おゝ、せいでかい。

源四　え丶尻腰もねえくせに、ぐづ〳〵吐かさず、(ト足蹴になし、)歸りやあがれ。

ト與三郎ばつたり倒れ、起き上つてきつとなり、

與三　ちえ丶。(ト齒嚙みをなし、)覺えてをれよ。(ト逸散に花道へ走りはひる。)

お爪　おい〳〵、お前方は大戸の締りを明けてやらねえか。

◎□　合點だ。

小雀　あれさ中どん、手荒なことをしておくれでないよ。

ト兩人與三郎の跡を追つてはひる、お爪源四郎顏見合せにつたり思入あつて、

お爪　よつぽど初心な野郎だなあ。

源四　隨分むごい仕事だつた。そりやあさうと、今夜はどうだ。

お爪　これ。(ト囁く。)

源四　そいつはい丶首尾だつたね。

お爪　おゝ、い丶首尾と言やあ圍ひに、(ト小指を出し、)れこが待つて居るぜ。

源四　それぢやあ是れから、こつそり圍ひへ。

お爪　二人の中を敷島が、氣取つて居れば見られぬやう。

源四　むゝ、合點だ。
お爪　どれ、此方は部屋でお酒としようか。
ト　お爪立上り、懐からばつたり金を落す。此の以前下手へ誰袖出で、窺ひ居て、
誰袖　今のはたしか。
源四　金ぢやあねえか。（トお爪取上げ、懐へ入れ、）
お爪　むゝ、鐘なら丁度。
誰袖
源四　え、（ト言ふを木の頭。）
お爪　八ツであらうよ。
ト　懐で手玉に取り、につたり思入、源四郎はうなづく、誰袖は合點の行かぬ思入よろしく、時の鐘にて、
ひやうし　幕

二幕目

吉原三浦屋の場

〔役名――遣手熊鷹お爪、若い者源四郎、庄屋作兵衞、新造中窪、同米山、若い者太助、三浦屋女房お玉、同傾城敷島、同誰袖、同雲井、禿和歌野等。〕

（遣手部屋の場）――本舞臺三間の間平舞臺、向う上手延喜棚、內の飾附よろしく、眞中白木の箪笥小戸棚、此の脇水屋戸の樣な蠅帳、茶道具など飾り、よき所に長手の箱火鉢、鐵瓶を掛け、上の方一間折廻し障子屋體、下の方廊下の片遠見、ずつと下に階子の上り口、總て三浦屋遣手部屋の體。爰に作兵衛前幕の庄屋にて立掛り居るを、中窪、米山の女郎、太助の若い者、作兵衛を留めて居る、此の見得吉原雀の唄にて幕明く。

作兵　これ／＼、着物がだいなしになる、留めるなといつたら留めるな。

中窪　まあ、そんなに騷がずとも、譯の分ることだから、靜にしておくんなさいよ。

米山　作兵衛さん、中窪さんが氣を揉んで居なさるから、まあ部屋へおいでなさいよ。

作兵　いや／＼、內證へ行つて斷らにやあならねえ。

太助　もし旦那、何でござりますか知りませぬが、まあお部屋へお出でなすつて下さりませ。

中窪　內證へ行つて斷らずとも、二階のことは遣手衆に、言つた方がようござんす。

作兵　それぢやあ遣手を呼んでくれ。

米山　太助どん、お爪どんは何處へか行つたのかえ。

太助　今日は廿四日でござりますから、今朝早く清正公樣へお參りに出掛けたが、もう今に歸りませう。

作兵　遣手が留守なら內證へ行つて、亭主に逢つて言はにやあならねえ。（ト行かうとするを中窪留めて、）

中窪　ほんにお前はしつこいね、昨夜あれ程言ふなり次第お前の自由になつて居たから、ちつとはわちきの言ふ事も、聞いてくれてもいゝぢやあないかね。

作兵　昨夜自由になつたのは、手前がおれに惚れて居るからだ。

中窪　誰がお前に、いやさ、惚れきつて居るわちきのいふこと、なぜ聞いておくれでないね。

作兵　聞かねえぢやあねえけれど、内證へ行つて言はにやあならねえ。

米山　ほんに、ぬしも強情だね。

作兵　強情とは、誰がことだ。

中窪　誰でもない、お前のことだよ。

作兵　さう言はれちやあ、料簡ならねえ。

ト作兵衞下へ行かうとするを皆々留める。やはり右の唄にて、階子の口よりお爪遣手のこしらへにて珠數を持ち出來り、

お爪　これは庄屋様、どうなすつたのでござりますか。

作兵　おゝ遣手のお爪どのか、こなたの歸りを待つて居たのだ。

お爪　何の御用でござりますか、まあ爰へお出でなさりませ。

ト屋體の内へ作兵衞を連れて來り、よき所へ住ふ、中窪も側へ坐りながら、

中窪　ほんに、お前さんには困り切りますよ。

お爪　大方中窪さんが、不勤めからでござりませう。

作兵　いや〳〵、さういふ譯ではない。

お爪　さうして何でござりまする。

作兵　又枕捜しだ。

お爪　え、何ぞなくなりましたか。

中窪　お爪どん、まあ聞いておくれ、今朝明方のぱら〳〵降りで、宿屋へ行くのも面倒ゆゑ居續けに仕ようと言つて、ぬしもわちきも、昨夜の疲れで、ぐつすりと寐ましたのさ。

作兵　所でふつと自が覺めて、蒲團の下の紙入を見ると、中にあつた金が誰が取つたか一朱もない、來る度毎になくなるからは、何でも爰の二階の内に盗む者があるに違ひない、わしも以前の身分なら勘辨も仕ようけれど、今ぢやあ役をしくじつて金に困る體だから、是非とも出して貰はにやあならぬ。

米山　ほんに昨夜のわちきのお客も、道へ落した覺えもないが、財布が見えぬと言ひなさんした。

太助　毎日々々斯う二階で、お客の物がなくなつては、打捨つては置かれない。

お爪　此の間からこの事も、聞いて居るゆゑ内々で目を附けて居る所、何にしろお前さんへまことにお氣の毒でなりませぬ。ちつと心當りもござりますから、まあ私にお任せなすつて、お待ちなされて下さりませ。

作兵　それぢやあこなたへ任すから、きつと詮議をして下さいよ。

お爪　いえも、家の名前に掛りますから、詮議を仕ぬかにやあ置きませぬ。

作兵　既にこなたが留守だといふから、內證へ行つて御亭主に、斷らうと思つたのだ。

お爪　いえ、主人は四五日以前江の島の、辨天樣へ百味講で參りまして、留守中でござります。

太助　さつき抱への金公が、先きへ歸つて來ましたが、金澤から濱を廻つて明日お歸りださうでござります。（ト是れを聞きお爪思入あつて、）

お爪　それぢやあ明日歸んなさるとか。（ト思入あつて、）浮々しては居られねえわえ。

作兵　なに、うか／＼して居られぬとは。

お爪　さあ、枕捜しがござりましては、うか／＼しては居られませぬ。

ト此の時下手の廊下口より、和歌野の禿部屋着の裝にて出來り、階子の口へ行きかけるを。

これ〳〵和歌野や、どこへ行くのだ。

禿　あい、おいらんのお使ひに、小間物屋へ行くのぢやわいな。

お爪　下へ行つたら源四郎どんに、ちよつと顏を貸してくれと、さう言つてくりや。

禿　あい〳〵。（ト階子の口へはひる。）

作兵　今の禿は評判の、敷島どのによく似て居るな。

中窪　そりや、似て居る筈さ、敷島さんの子だものを。

作兵　はあ、それぢやあ實の娘かえ、道理でよく似て居ると思つた。

米山　血筋といふものは、爭はれないものだね。

作兵　おツ孕ましたは、誰だな。

米山　藤代屋の十三さんといふ、お前のやうな好い男さ。

トやはり吉原雀の唄にて、階子の口より源四郎羽織着流し、若い者のこしらへにて出來り、

源四　何ぞ御用でございますか。

作兵　いや、外の事でもないが、代官の郷太夫殿が五十兩の代りに預けた、あの短刀はあるであらうな。

源四　へえ、お預かり申してございまする。

作兵　あれを買つた五十兩は、此の庄屋が貸した金、定めて噂に聞いたであらうが、鄕太夫殿がしくじつたれば、身請どころか貸した金も所詮取れねば、貸した代りに其の短刀を貰ひたい、どうぞおれに返してくりやれ。

源四　そりや五十兩さへ下すつたら、あなたへお返し申しませう。

作兵　えゝ此の男は分らぬ男だ、五十兩貸した其の抵當に、おれが方へくれと言ふのだ。

源四　いえお前さんが分らぬのだ、あの短刀は誰袖さんが、身請けの手附に取つた短刀、御相談が替りますれば、短刀は返されませぬ。

作兵　なぜ、返されぬな。

源四　はてお手附三日限り、身請けがじやみれば手附損、あの短刀はお流れゆゑ、返すことはなりませぬ。

作兵　言はれて見ればそんなものか、あの短刀を五十兩の代りに取らうと思つたばかり、なけなしの金を三兩二分、重荷に小附に取られてしまひ、こんなつまらぬことはない。えゝどうせ明日は附馬だ、太ス公大臺でもさういつてくれ。

太助　畏りました。

作兵　おゝ、序に米山さんも、仕舞つて遣らう。
米山　おや、嬉しいねえ。
中窪　さあお爪どんの邪魔になるから、早く部屋へおいでなさいよ。（ト引ッ立てる。）
作兵　どれ、行つて自暴酒こせうか。
米山　さあ、おいでなさいましよ。
　ト右の唄にて中窪作兵衛を引張り、米山附いて廊下へはひる、太助は下手へはひる、跡端唄の合方になり、
源四　お爪どん、呼びに寄越したは、何ぞ用かえ。
お爪　お前にちつと相談がある。
源四　枕捜しの事ぢやあねえかえ。
お爪　おゝ、其のことよ。
　ト四邊へ思入あつて上手を見る、上手の障子を明け、雲井部屋着傾城好みのこしらへにて顔見合せ、障子をしめる。兩人思入あつて、是れへ聞かせる心にて、
源四　わつちも今内證へ呼ばれ、お上さんが言ひなさるに、此の間からお客の物が度々二階でなくなる

のは、誰か手癖の悪い者が枕搜しをするに違ひない、此の噂がぱつとするこ、終にやあお客の足が止り、内の衰微になることだから、詮議を仕ようと思つても、お心好しの旦那ゆゑつい等閑になつて居たが、丁度幸ひ旦那が島へ行つた内に、二人して二階の詮議をしてくれと、今言附けなすつたこころさ。

お爪　その旦那も明日あたりは、歸つて來なさるといふことだから、今夜の内にしにやあならぬが、お前ちつとは當りがあるかえ。

源四　少し考へ附いたことがあるから、わつちやあ目串を附けて置いた。

お爪　むゝ、お前の考へついたのは誰だ。

源四　高くは言へねえが、敷島さんが、どうもわつちやア怪しく思ふ。

お爪　そりやあいゝ勘の附け所だ、わたしも怪しく思つて居るのだ。

源四　當時藤代屋の十三さんの外に、これぞといふ客もないのに、此の間も誰袖さんに買つて遣つた五分玉の挿込みの簪は、どんな盲目に踏ましても二十兩にはふめる代物、その外煙管や煙草入を心易い朋輩に買つてやつたこいふ噂、その金高を〆上げたら四五十兩に違ひないが、この金の出所が知れない。

お爪　この間刀屋の若い衆が、五十兩二分金で取られたが、勘定の合ふ其の買高、器量はいゝが利口過ぎ、底の知れねえ敷島さん、あの子の仕業に違ひない、年を取つては厭だけれど、會所からでも言はれた日には第一わたしの越度ゆゑ、いやでも今夜一詮議、罪を作らにやならぬわえ。

源四　何にしろ詮議をするにやあ、部屋を洗つて見にやあならねえから、今に內證へお上さんにこつそり呼んで貰ふ積りだ。

お爪　さうした跡へ踏込んで、簞笥の引出し手箱の內。

源四　あもし。（ト四邊へ思入あつてお爪に囁く。）

お爪　むゝ、そんならお前は見世へ行つて。

源四　何喰はぬ顏で待つて居ますよ。

ト源四郎足早に下手へはひる、是れと入違ひに誰袖部屋着の裝、菓子を紙に包み持つて出來り、

誰袖　お爪どん、少しばかりだが、善さんがお前へ。（ト渡す、お爪あけて見て、）

お爪　おや、こりやわたしの好きな革ぎうひ、まことに有難う、よろしく申しておくれ。

誰袖　今に鰻が來るから、お出でなさいよ。（ト行きかけるを。）

お爪　あこれ誰袖さん、お前にちつと聞きたいことがあります。

誰袖　あい、何でござんすえ。（ト側へ來る。）
お爪　いえ、外のことでもないが、此の間敷島さんから、簪を貰ひなすつたさうだね。
誰袖　あい、この簪を貰ひました。（ト挿してゐる珊瑚珠さし込みの簪を抜いて見せる。）
お爪　成程これはいゝ簪だ、こりやあわたしが預かつて置くよ。
誰袖　え、そりやまあ何で、その簪を。
お爪　是れには何も仔細はないが、是れを買つた其の金の、出所がちつと怪しいから、分るまで預つて置くよ。
誰袖　そりやまあどういふ譯でござんす。
お爪　今わたしが言はずとも、分ることだから、待つておいで。
トばた〳〵になり、下手廊下より以前の中窪出來り、
中窪　お爪どん〳〵、今雲非さんが立會つて、源四郎さんが敷島さんの手箱の内を開けて見たら、此の間なくなつた紙入や、金入が中から出たので、枕捜しは敷島さんに極りましたよ。
ト誰袖これを聞いてびつくりなし、
誰袖　えゝ、そりやほんの事でござんすか。

中窪　嘘のほんのこ、米山さんと隣の部屋に遊んで居て、襖の間から見て居たのだよ。

お爪　それぢやあ證據の種が出たか、これだから誰袖さん、此の簪を預るのだ。

誰袖　その簪は兎も角も、敷島さんにそのやうな疑ひ掛るはなんぞの間違ひ、あの正直なおいらんがそんな事をしなさんせうか。

中窪　しないといつても手箱から、證據が出れば脱れはない、作兵衛庄屋の金を取つたも、敷島さんに違ひない。

お爪　あゝこれ、靜に言ひなさらないか、ぱつとしては家の恥だ。

誰袖　假令何と言ひなさんしても、姉さんに限つて、そのやうなそでないことをしなさんせうぞいな。

中窪　さういふお前も珊瑚珠の、簪を貰つたからは、提灯持かも知れないぞえ。

誰袖　何でわたしが、其のやうなことを。

お爪　えゝ、二人共靜にしなせえ、其の身の闇いか明るいを、詮議するのは遣手の役。（トきつと言ふ。）

誰袖　えゝ。（ト氣味の惡き思入。）

お爪　くらいといへばもう日暮れ。太助どん、行燈の支度をしなよ。

トお爪立上り帶をぐつと締める、中窪いゝ氣味だといふ思入、誰袖案じられる思入、吉原雀の唄に

て、道具廻る。

（雲井部屋の場）――本舞臺雲井部屋の體。爰に敷島、子役の禿住ひ、端唄にて道具留る。

敷島　これ由縁や、おいらんは何處へ行きなさんした。

禿　今遣手部屋に居なさんしたわいな。

敷島　何か用があるとの事ゆゑ、お呼び申して來てくりやいの。

禿　あい、お呼び申して參りませうわいな。（ト禿下手へはひる、敷島殘り思入あつて、）

敷島　月日の經つは早いもの、辛い勤めの長年も、もう三月にて年も明け、身儘になるは嬉しいが、十三さんのお内にも、お嫁御さんがあると聞けば、直に其處へ行かれもせず、兎やかう思ふ其のせゐか、此の四五日の夢見の惡さ、何ぞ凶事でもありはせぬか、あゝ、心に掛ることぢやなあ。

ト思入、下手より以前の雲井出來り、

雲井　敷島さん、よう早う來て下さんしたな。（ト言ひながら上手へ住ふ。）

敷島　おいらん、何ぞ御用でござんすか。

雲井　ちつとお前に話しがござんす。（ト上手障子屋體の内を窺ひ、上手に住ひ、）見れば顏の色が惡いが、

風でも引きなさんしたか。

敷島　又いつもの血の道で、心持が惡うござんす。

雲井　その心持の惡いところへ、聞くのも厭でござんせうが、言はねばならぬことがござんす。

敷島　そりや何でござんすえ。（ト誂への合方になり、）

雲井　敷島さん、今改めて言はずとも知つてのことではあるけれど、お前は爰へまだわたしが、先の雲井さんに遣はれて新造で居た時分、しかも五ツで賣られて來ておいらんの禿となり、それからわたしが見世へ出て、雲井といふ名を繼いでから附渡りにわたしが遣ひ、姉となつて突出しの世話もしたれば朋輩ながら、わたしや親身の姉妹とお前を思うて居るけれど、姉と思うて居やしやんすか。

敷島　いつにないおいらんの、そりや何を言はしやんす、今も言はしやんす五ツの年に、爰へ賣られて來たわたし、親が有るやら無いやら知らぬ便りない身のわたしゆゑ、ほんに姉とも親とも思ふは廣い世界においらん一人、なぜ思ふの思はぬのと、其のやうなことを言はしやんすぞいなあ。

雲井　そんなららお前も、やつぱりわたしを、姉と思うて居やしやんすか。

敷島　思はいで何としませう、一生便りに思ふおいらん、どうぞ見捨てゝ下さんすな。

雲井　さういふお前の心なら、遠慮のない姉のわたしが、異見を言はにやなりませぬ。

敷島　惡い事があるならば、わたしが身の爲め何なりと、どうぞ言うて下さんせ。

雲井　外でもない此の間から、度々物のなくなるのは、枕搜しをするものが、二階にあるに違ひないとお上さんや遣手衆が目を附けて居たところ、お前の仕業といふ噂。

敷島　えゝ。(トびつくりする。)

雲井　さあ、五ツの年から側に居て、そんな心のないことは、知つては居れど今も今、お爪どんや源四郎どんが、きつとした證據があつて、詮議をするといふことゆゑ、姉よ妹といふ中で聞き捨てならずわたしが預り、お前の詮議の期を延ばしたは、逢うて是れが言ひたいゆゑ、よもや〳〵そんなことの、あらうやうはなけれども、譬にもいふ貧の盜み、十三さんも良い所の息子さんではあるけれど、廓の金には詰るが習ひ、又お前とても十三さんゆゑ、その身の爲めになる客は、段々放れて是れといふ、客のないのは知つてゐる。何ぞ金の切羽にて、ふつとした出來心から惡い事をしなさんしたら、わたしに言うて下さんせ、痩せても枯れても三浦屋の、二階でお職の此の雲井、わたしが捌いてこつそりと、名の出ぬやうにしようわいな。

ト此の内雲井思入にて言ふ、敷島悔しき思入にて、

敷島　ハアヽ。（ト泣き伏す、雲井これを見て、）

雲井　物をも言はず泣かしやんすは、いよ／＼盗みをしやしやんしたか、定めて餘儀ないことであらう、お前が盗んだ其の金は、わたしが殘らず償うて人に知らさぬやうにせうから、包まず言うて下さんせいな。（ト敷島顏を上げ、）

敷島　物をも言はずわたしが泣くのは、疑はるゝのが悔しいゆゑ。

雲井　何と言ひなさんす。

敷島　五ツの年より十何年、道に落ちたものさへも手に取らぬ此の敷島、如何にお客によいのがないとて、姉女郎のお前にさへ疑はるゝもの、餘の人もわたしの仕業といふであらうが、更々覺えはござんせぬ。疑ひ晴らして下さんせいな。

雲井　そんなら、きつとござんせぬか。

敷島　えゝ情ない、それ程までに何でわたしを、姉さんには。

雲井　さあ、疑ふのも證據があるゆゑ。

敷島　なに、證據があるとは。

雲井　敷島さん、これを知つて居やしやんすか。（ト懷から誂への鼠羅紗の紙入を出し、敷島に見せる。）

敷島　え。（ト思入あつて、）此の紙入はついにこれまで、見たこともござんせぬ。

雲井　鼠羅紗の純子の裏、梅の折枝の銀金物、こりや先達て刀屋の若い衆が取られた紙入、これがお前の手箱の内にあつたゆゑにわたしまで、お前が仕業と疑ふわいな。（ト敷島紙入を見て悔しき思入）

敷島　そんなら是れが手箱の内に。

雲井　現在わたしが立會うて、明けて見た手箱の内に、此の紙入のあつたが證據、知らぬとばかりぢや濟まぬぞえ。

敷島　誰が手箱の内へ入れたか、わたしや覺えはござんせぬ。こりや此の身に恨みのある、朋輩衆の仕業なるか、この紙入ゆゑお前にまで、盗みしたかと疑はるゝが、私や悔しうござんすわいな。

ト無念の思入、此の以前より下手へお爪源四郎出で、つか／＼と入り、

お爪　さあおいらん、悔しければ悔しいやうに、其の譯を聞かうから。

源四　わつちと一緒にお出でなせえ。（ト引立てに掛るを、雲井留めて、）

雲井　あゝこれ二人の衆、さつきにからいろ／＼とわたしが詮議して見たが、ほんまに覺えのない樣子知らぬことゆゑ何事も、料簡してやつて下さんせいな。

お爪　そりや雲井さん何を言ひなさるのだ、覺えがないと言ひなさるが、手箱の中から紙入の出たのが

脱れぬ慥な證據、外の者の示しになれば、縛りあげて痛い目させ、白狀させねば二階を預かる、遣手の役が濟みませぬ。それとも覺えのないといふには、何ぞ證據がござりますか。

雲井　さあ、其の證據は。

お爪　證據がなけりやあ枕搜し、家の暖簾に拘はるから、此の儘にしちやあ置かれませぬ。

源四　死なうといへば留めるを承知で、脅しに持つた刃物三昧、小な時から腹散々世話になつた雲井さんを、白癡にするとはづぶとい根性。

お爪　どうでたゞぢやあ言ふめえから、是れから責場へ連れて行つて、一泣き泣かして遣らにやならぬ。

ト此の內敷島悔し泣きに泣き居る。

源四　さあ敷島さん、斯うなるのは覺悟であらう、わつちと一緒にお出でなせえ。

敷島　いえ〳〵わたしやお前方に、責められる覺えはござんせぬ。

源四　あるか無いかは縛りあげ、叩いて見りやあ分ることだ、ぐづ〳〵せずと一緒に來なせえ。

ト酷く敷島を引摺り倒す。

雲井　あゝこれ、ひよわい生れの敷島さん、手荒なことして下さんすな。

ト敷島の側へ寄らうとするを、お爪隔てゝ、

お爪　又しても〳〵、いゝ加減になさいまし、あんまりお前が留め立てすると、疑ひが掛りますよ。

雲井　それぢやと言つて此の儘に。

お爪　えゝしつこい、打捨つて置いておくんなせえ。（ト雲井を拂ひ退ける。）

敷島　あゝもしおいらん、お志しは嬉しいが、斯ういふ憂き目に逢ふといふも、みんな此の身の因果ゆゑ、わたしを留めて疑ひでも、掛つては濟まぬから、捨て置いて下さんせいな。

お爪　むゝ因果なこともあるものか、盗みをするから憂き目に逢ふのだ。それ源四郎どん、しよびいて行きねえ。

源四　合點だ。（ト泣き居る敷島を引ッ立てる。）

雲井　そんなら、どうでも。（ト寄るをお爪隔てゝ、）

お爪　折檻するのは、遣手の役だ。

雲井　ハアヽ。（ト泣く。）

源四　さあ、きり〳〵ごうしやあがれ。

ト早き合方にて源四郎敷島を引摺り、お爪せり立て下手へはひる。雲井ハアと泣き伏す。ばた〳〵になり下手より誰袖走り出來り、

誰袖　もしおいらん、敷島さんは本當に、盗みをしたのでござんせうか。

雲井　何の盗みをせうぞいの、そでない事は知れてあれど、手箱の內に紙入のあつたゆゑに疑ひかゝり責場へ連れて行かれたが、もしや遣手のお爪どんや源四郎どんに意趣でもあつてか、旦那さんがござんしたら、內證へ行つてお詫びをしように、折の悪い旅の留守。

誰袖　お上さんへ言つたとて、意地の悪い生れゆゑ、お聞きなさることでもなし。

雲井　それに又わたしとは、まだ玉苗といはしやんして、朋輩で居た時分から、すれて居た中なれば。

誰袖　所詮言つても無駄なこと。

雲井　あゝどうしたら。（ト煙管をとんと突くを道具替りの知らせ）よからうぞいの。

ト雲井思案の思入、誰袖も案じるこなし、しんみりとした端唄にて道具廻る。

（物置責場の場）――本舞臺三間の間平舞臺、三方鼠壁腰通り板羽目、上の方土藏の入口、網戸の出入り、いつもの所綟張りの板戸出はひり、下の方廊下口、總て三浦屋物置の體。爰に以前の敷島俯向き居る、上手にお爪弓の折れを持ち立膝にて詰寄り居る。道具半程より、時の鐘床の三重にて道具留る。

淨ルリ　〽吹送る風も身にしむ春の夜の、殘る寒さにしよんぼりと、哀れなるかな敷島は、悔し涙に

暮れければ、遣手は側へ詰寄りて、

ト此の内敷島額を上げ、涙を拭ひ悔しき思入、お爪額をのぞき込み、床の合方になり、

お爪　これ敷島さん、斯うして責場へ連れて來たら、どうでもかうでも言はさにやおかぬ。外の事とは譯が違ひ、あの三浦屋の二階には枕捜しの女郎があると、世間の噂になつた日には、家の衰微になることだ、軒を並べる遊女屋に枕捜しのある家へ誰が態々來るものだ、たつた一人のお前ゆゑ百人足らずの内の者が、此の額を吊さにやあならねえ、痛い目せぬうち言ひなせえ、是れまで隨分わたし等の爲にもなつたお前ゆゑ、内證の方はいゝやうに執成して上げようから、有體に言つてしまひな。

敷島　いくら言へゝ言はしやんしても、わたしや盗んだ覺えがなけりや、言ふことがござんせぬ。

お爪　無いといつたつて言はせずに置くものか、證據がなけりや知らぬこと、五十兩といふ金を取られた人の紙入が、手箱の内にあつたからは、言はせずに置くものか。

敷島　其の紙入が手箱にあつたは、わたしに恨みのある人が、斯ういふ憂き目に逢はさう爲め、入れて置いたに違ひない。

お爪　まだ〳〵そんなことを言ふのか、酒は少しも呑まねえが、そんな甘口に乘るやうな、たゞの婆ア

と思つて居るか、これでも以前はお屋敷勤め、遊ばせ詞も遣つたが、やの字結びもくの字形、身性が惡さに宿場の飯盛り、杓子のやうな駄面だが、程と肚胸で板頭、場數を踏んだ調練に、鐵砲見世の長屋から野玉にまでも出たおれだ、恐らく女郎のことならば總隊進めの指圖役、熊鷹お爪が睨んだからは、脫れぬ所と覺悟して、包み隱さず言ひなせえ。

敷島　いくら言へと言はしやんしたとて、此の身に覺えのないことなれば。

お爪　それぢやあどうでも言はねえか。

敷島　あい、言はぬわいな。

お爪　えゝ、死太い奴だなあ。

〽曲る心の弓杖にて、首も折れよと打すゑて、

トお爪弓の折れにて敷島の脊中を打つ、敷島わつと倒れる。お爪側へ來て弓の折れにて顏を突ツつき、

さあ、是れでも言はねえか、これでも言はねえか、えゝきり〳〵と吐かさぬか。

〽滅多無性に續け打ち、情白髮の遺手が折檻、敷島ぢつと痛さを怺へ、

トお爪敷島をむごく打ちすゑる。敷島切なき思入にて、

敷島　假令どのよに打たれても、此の身に覺えないことを、どう盜んだと言はれうぞいな。

お爪　さう強情を言ひ通せば、まだ〳〵こんな事ぢやあねえ、後手に括し上げ、梁へ吊して小刀針、くたばつたらば知らぬこと、息の通つて居るうちは、打つて〳〵打ちすゑて、總身に痣の紫絞り、彼の世の晴れに着せて遣るぞ。

〽又もや弓杖ふり上ぐる折柄窺ふ誰袖が、其の手に縋り抱き留め、

（ト お爪又弓の折れで打たうとする、此以前下手へ誰袖出で窺ひ居て、つか〳〵と來てお爪を縋り留め、）

誰袖　あゝもしお爪どん、まあ〳〵待つて下さんせ、敷島さんはひよわい體、もしものことでもあつたらば、內證へお前濟むまいぞえ、もうよい加減にして下さんせいな。

お爪　えゝしやらくさいことを言ひなさんな、濟むも濟まぬもあるものか、內證から二階中は預かつて居る此の𢬵手、ぶち殺しても構ふものか。

誰袖　そりやさうでもござんせうが、其處をお前の情にて。

お爪　わたしは情は大嫌ひ、生れついて無慈悲だから、打つだけ打たにやあ料簡しねえ、留め立てせずと退いて居なせえ。（ト 又ふり拂ふを又縋り、）

誰袖　いえ〳〵留めずに居られませぬ、わたしが爰へ來た時から、お世話になつた敷島さん、それ程お前が打ち度くば、わたしも打つて下さんせいな。

お爪　まゝ、達て邪魔をしなさりやあ、誰彼の容赦はねえ、望み通り打つて遣らう。

〽留める誰袖打ちすゆれば、（トお爪又誰袖を打つ、敷島これを見て、）

敷島　あゝ申し誰袖さん、必ず留めて下さんすな。わたしが斯ういふ目に逢ふのは、脱れぬこの身の災難ゆゑ、捨て置いて下さんせいな。

誰袖　いえ〳〵お前が覺えもない、災難ゆゑに此のやうに、責めに逢ふのを妹の身で、どうまあ見捨て居られうぞいな。

敷島　其の志しは嬉しいが、お前に怪我でもあつては悪い、早う行つて下さんせいな。

誰袖　いえ〳〵何と言はしやんしても、打たるゝならばわたしも共々。

お爪　えゝまだぐづ〳〵こ言つて居るのか、客があらうに行かねえのか。

誰袖　いえ〳〵わたしや行かぬわいな。

敷島　あゝこれ、行つて下さんせといふに。

誰袖　それぢやというて。

お爪　えゝきり〳〵と行かねえのか。

〽寄るを突退け〳〵て、又もお爪が弓杖振上げ、打たんとなすを留むれば、えゝ面倒なと側

杖に共に打たるゝ苛責のせめ、早く行つてと妹を憐れむ敷島父姉を、庇ふ誰袖朋輩のまことは涙に現れて、いとゞ哀れに見えにける。

ト此の内お爪弓を振上げ、敷島を打たうとする、誰袖留めるを振拂ひて打つ、敷島早く行つてくれといふ思入にて立廻りよろしくあつて、

〽折から中窪駈來り、(トばた〳〵になり、下手より以前の中窪出來り、)

中窪　誰袖さん〳〵、今内證のお上さんが、お前を連れて來いとのこと、わたしと一緒にござんせいな。

誰袖　今跡から行くほどに、さう言つて下さんせいな。

中窪　いえ〳〵何か急な用、一緒に來いと言ひなさんしたぞえ。

誰袖　何も呼ばれる覺えはないが。

中窪　呼ばれる種は慥に珊瑚珠。

誰袖　え、(トびつくりする。)

中窪　いえさ、三疊に待つて居なさいますよ。

お爪　ちつとも早く行かねえのか。

誰袖　それぢやと言うて。

中窪　はて主と病だ、ござんせいな。

〽無理に手を取り引立てられ、心殘れど是非なくも見返り〳〵引かれ行く、跡に遣手は一人笑み、

ト中窪いやがる誰袖を引立てる、誰袖心の殘る思入、敷島も見送り下手へはひる、お爪思入あつて、

お爪　先づ邪魔になる誰袖が行つてしまへば留手もなし、もう一責と思つて居るが、一人憎まれるもどつとしねえ、源四郎めはどうしたか、早く來てくれりやあいゝに。どれ、遣手の役だ憎まれようか。

〽弓杖持つて立上る、所へ禿の和歌野が襟上、引ツ立て來る源四郎。

トお爪立上る、此の時下手より以前の源四郎、和歌野の襟上を取り、引きずり來る。

おゝ源四郎どんか、さつきから待つて居たに、何をして居たのだ。

源四郎　所詮たゞぢやあ言ふめえと、思つたから責道具に、此奴を一番遣はうと、使ひから歸るを待つて居たので遲くなつた。さあ、ぶる〳〵せずと此方へ來い。

〽手荒く引き摺り引き倒す、和歌野を見るより敷島が、

ト源四郎和歌野の手をぐつと引く、之れにて引き倒されて轉ぶ、敷島見て、

敷島　や、和歌野ぢやないか。
和歌　おいらんでござんすか。
〽痛さ怺へて縋り附く。（ト和歌野起上らうとして、膝を打ち痛き思入にて、敷島に縋る。）
何でまあ此のやうに、酷い目に逢はしやんすぞいな。（ト敷島引き寄せ、）
敷島　さあ、わたしや思はぬ疑ひうけ、さつきから此の様に、責に逢うて居るわいな。
和歌　そりや何ゆゑでござんすぞえ。
お爪　おゝ、此の敷島が責められるのは、枕捜しをしたからだ。
和歌　え。
お爪　お客のものを我がものと、盗みをしたから折檻するのだ。
和歌　そんならわたしの母さん、ぢやないおいらんが、盗みをしたゆゑ打たれるとか。これおいらん何でそんな悪いことを、お前はしなさんしたぞいな。
敷島　何でわたしが盗みを仕よう、此の身に覺えはなけれど、誰が入れたか手箱の内に紙入が入れてあつたので、疑ひうけて此のやうに、痣になる程打たれたわいな。（ト敷島手をまくり見せる。）
和歌　おゝ、嘸痛うござんしたらう。

源四 〽撫擦る子の恩愛も、知らぬ邪險の源四郎、（ト源四郎和歌野の襟上を取つて引き退け、）これ敷島さん、お前位世の中に恩を知らねえものはねえ、主人の情で十三郎と二人の中に出來た子を、そつと產して里にやり、五ツになつた其の暮に、手許へ置いて遣りたいと人に知らさず呼戻し、禿にして使はせるこんな主人があるものか、其の大恩を忘れてしまひ、主人の難儀になるやうな枕搜しをするといふは、愛想の盡きた恩知らず、そんなづぶとい根性ぢやあ我が子も可愛くあるめえが、白狀しにやあ此の和歌野を、打つて〳〵打ちのめすが、それでもお前は言はねえか。（ト敷島を打ち、）さあ、此の和歌野は可愛くねえか。（ト又打ち、）言はにやあわれから、かうかう〳〵。

〽續け打ちに打ちすゑれば、和歌野は打たるゝ杖の下、その身を枷に手を合せ、

ト源四郎敷島を打つ、和歌野これを留め手を合せて、

和歌 あゝ申し源四郎ごん、わたしを打つておいらんを、堪忍して下さんせいな。

〽言ひまはつて伏拜むを、邪魔な餓鬼めと引き退けて、

ト和歌野拜み廻るを、源四郎荒く引き退けて、

源四 お爪ごん、所詮たゞぢやあいかねえぜ。

お爪　責道具の其の餓鬼を、打つて〳〵打ちのめすがいゝ。

源四　合點だ。

〽和歌野が襟上鷲掴み手拭捻りし捻棒にて情容赦もあらけなく、打てばひい〳〵齒を喰ひしめ泣聲忍ぶいぢらしさ、見るに敷島たまり兼ね、

ト此の内源四郎捻を掛けし手拭にて和歌野を打つ、和歌野苦しき思入。

敷島　あゝこれ、その子の知つたことではない、かよわいものを打たずとも、わたしを打つて下さんせいな。

お爪　おゝ、相打ちにしてやらう。

〽お爪は敷島源四郎は、和歌野を宙に引提げて、兩人一度に續けさま滅多無性に打つ手が廻り、脾腹を打つて其の儘に、氣絶の體にびつくりなし、

トお爪は敷島を打ち源四郎は和歌野を打つ、手が廻りて脾腹を打ちぐつたりなる、源四郎手を放せばばつたり倒れる、びつくりして、

やあ、此奴は大變、打ち殺した。

〽いふに驚き抱き起し、(ト敷島和歌野を抱き起し見て、)

敷島　こりや、事切れたるか、ム、、、、。

〽はつさばかりに取詰めて、其の儘そこへ伏し轉べば、（ト敷島氣を失ひし思入にて倒れる、）

お爪　やあ、敷島も死んだと聞き、取詰めて引附けた。

源四　水を吹ッ掛けて遣りてえが、手水鉢は爰になし。

お爪　藏前に秋葉樣の火防のお水がある筈だ。

源四　おゝ、あつた〳〵。

〽有合ふ德利の神水を、是れ幸ひと顏へ吹掛け、

ト源四郎德利の水を和歌野の顏へ吹掛ける、お爪敷島の口へ德利からつぎ込み、

和歌野やアい。

お爪　敷島やアい。

〽いふ聲通じて二人とも、息吹き返し顏見合せ、

トお爪源四郎介抱する、これにて兩人息を吹きかへし、

敷島　おゝ、和歌野か。

和歌　おいらん。（ト這ひ寄り縋る。）

敷島　よう生返つてくれたなう。

和歌　爰が苦しうござんすわいな。（ト胸をおさへる。）

敷島　おゝ苦しからう〳〵、よしないわしゆゑそなたにまで、此の苦しみをさせるわいの。

お爪　其の苦しみをさせるのも、お前が死太く言はねえからだ。

源四　可愛さうだと思ふなら、早く盗んだと言ひなさい。

お爪　言はねえ日には今の様に、打ち殺すまで責めにやあおかねえ。

源四　さあ盗んだと言ひなさるか。

敷島　さあ、それは。

お爪　もう一責め責めようか。

敷島　さあ。

源四　言ひなさるか。

敷島　さあ。

兩人　さあ。

三人　さあ〳〵〳〵。

お爪　此の子を生すも殺すのも、お前の心たつた一ッだ。

源四　性根を据ゑて返事をしなせえ。

〽退ッ引きならぬ詰合に、泪かわかぬ濡衣を　我が身に負ひて愛し子を助けんものと心を定め、

ト此の内敷島ぢつと思入あつて、

敷島　今まで隱して居たけれど、此の子が可愛いばッかりに隱したことを言ひます程に、此の子は助けて下さんせ。

お爪　おゝ、言ひさへすりやあ助けてやる。

源四　それぢやあいよ〳〵枕捜しは。

敷島　この敷島でござんすわいな。

〽わつとばかりに泣き伏せば、始終を小蔭に聞き居たる雲井はたへ兼ね走り入り、

ト敷島泣き伏す、兩人は占めたといふ思入、この以前より下手に雲井窺ひ居て、いろ〳〵思入あつて、此の時つか〳〵と內へはひり、

雲井　これ、敷島さん。（ト敷島の側へ坐る。）

敷島　や、姉さんでござんすか。（トわつと泣く。）

雲井　えゝ、お前はなあ〳〵、見下げ果てた心ぢやなあ。（ト誂への合方になり、）斯ういふ事とは露知らず、手箱の内から證據は出たれど、大方これは意趣のある朋輩衆の仕業と思ひ、今も二階で寄りこぞり、兎やかう言ふのを言ひ消して、あの子に限つてそんな事は決してないと立派に言つた、わたしが今更面目ない、賤しい勤めはして居れど、金に心を掛けぬのが遊女の晴れでござんすに、それにこんな事をして、お前ばかりの恥ではない、お家の恥はいふに及ばず、姉女郎のわたしの恥はどのやうでござんせう、お前ゆゑに明日から仲の町へも最う出られぬ、長い年月一ツに居て今日までこれを知らなんだのが、わたしや悔しい〳〵わいな。何でこんな情ない、さもしい事をしなさんしたぞいな。

〽襟上取つて引倒し、悔し涙にくれにける、敷島は涙を拭ひ、

敷島　あゝ、そのお恨みは無理ならねど、姉さんお前はわたしの心を。

雲井　えゝ知らぬ〳〵、何で盗みをするやうな、そでないお前の心と知らう、そんな妹はいらぬ程に、姉というて下さんすな。

敷島　そりや情ない、これ姉さん。

雲井　おゝ、そりや此方から言ふことぢや。
敷島　そんならどうでも、盗みをしたと。
お爪　思はなくつてどうするものだ、現在お前が盗人だと、
源四　今言つたのが、何より證據だ。
敷島　それも是れも和歌野ゆゑ。
雲井　え、（ト思入。）
和歌　おいらん、苦しうござんすわいな。
敷島　えゝ、言ふに言はれぬ此の場の仕儀。（ト敷島和歌野を抱き泣く、雲井は思入あつて立上り、）
雲井　斯ういふそでない心と知らず、長い年月騙されたのか、思へば腹が立つわいな。
ト行きかける。敷島裾を捉へ、
敷島　あゝもしおいらん、是れには深い。
雲井　えゝ放しなさんせ、顔を見るのも。
敷島　えゝ。（ト雲井裾を拂ひ、）
雲井　厭ぢやわいな。（トぢつと思入。）

〽腹は立てども昨日まで、姉よ妹といふ仲に心を殘し立かへる、跡に二人は笑壺に入り、
ト雲井腹の立つ思入にて、跡へ心を殘し下の方へはひる。

お爪　先づ枕捜しに極れば、內證へ行つて今夜のうちに、表沙汰にして突出すか。

源四　但しは是れから年季を增し、旅へでも賣つてやるか。

お爪　何にしろさつきから、おれも澤山憎まれた、部屋へいつてお酒としよう。

源四　これから跡で餓鬼と二人、存分そこで泣くがいゝ。

お爪　どれ、一息吐いて來ようか。

〽責場の口へ掛金かけ、胸にこたへる錠の音、
ト兩人外へ出で、緞張りの戸をしめ、お爪懷から錠を出し、ぴんとおろし、

源四　お爪どん、まんまと首尾よく。

お爪　えゝ、時代なことを言ひなさんな。

〽うなづき合つて入りにける。（ト兩人思入あつて下手へはひる。時の鐘。）
〽折しも告ぐる鐘の音に、哀れを添へる責場の內、敷島やう〳〵顏を上げ、
ト床の合方になり、敷島思入あつて、和歌野を引き寄せ、

敷島　これ和歌野、嘸切なかつたであらうの。

〽抱きしめれば縋り附き、

和歌　いえわたしよりかお前こそ、嘸切なうござんしたらう。

敷島　よたけもないそなたにまで、かゝる憂き目を見するのも、覺えもない盗人の疑ひ受けし此の身ゆゑ。

和歌　そんなら、盗みはせぬのかえ。

敷島　何で盗みをせうぞいの、手箱の内に紙入の入れてあつたも外ならぬ、あの源四郎とお爪が仕業、元より覺えのない事なれば、死んでも巧みに落ちまいと、此の身に覺悟はして居たけれど。

〽愛し可愛い一人子の、そなたが氣をば失ふほど、源四郎に打たるゝを、親の身として見て居られず、

危い命が助けたさ、盗まぬものを盗みしと、此の身に罪を負うたわいの。

和歌　えゝまあ、それは情ない、盗まぬものを盗んだと、何でお前は言はしやんした。

〽わたしやこんな責めに逢ひ、源四郎に殺されても親の爲なら悲しうない、この身を庇うて下さんしたは、嬉しいけれどお前をば、

盗みもせぬに、泥坊と。

〽言はすが悲しうござんすと、縋り附いて泣きければ、（ト此の内兩人よろしく思入あつて、）

敷島　おゝ賢い〳〵、よう言うてくれたぞいの、覺えもない盗人となるのも何より悔しいけれど、罪に落ちねばいつまでも憂き目を見ねばならぬゆゑ、盗みをしたと罪に落ち、一先づこの場の責苦を脱れ、そなたを助け二つには、十三さんへ此の事を知らせてあげねば亡き跡で、いやさ、疑はるるが悲しいゆゑ、そなたは是れから廓を脱け、十三さんの所へ行き、斯ういふ責めに逢ふことをよう言うてくりやいの。

和歌　いえ、わたしや行くのは厭でござんす。

敷島　厭とは何ゆゑ。

和歌　お前と二人爰に居て、責められるなら一緒に責められ、死ぬなら一緒に死にたいわいな。

敷島　よう言やつた〳〵、其の志しは嬉しいが、十三さんへ此の事を知らせてくれる者がなければ、ほんに盗みをしたかと思ひ、是れぎり愛想を盡かされたら、わたしも夫といはれねば、そなたも親とは言はれぬぞ、年にまさりて利口ゆゑ、爰の道理を聞き分けてどうぞ行つてくりやいの。

〽いふに幼い子心にも、實にもと思ひ涙を拭ひ、

和歌　さういふことなら行きませうが、わたしや道が知れぬわいな。

敷島　おゝ道の知れぬも尤もぢやが、世に人鬼はないものゆゑ、廓を出たら鎌倉川岸へは、どう行きますと聞いて行きや。

和歌　あいく。

敷島　然し表は、暗くはないか。

和歌　いえくお月樣が出やしやんした。

敷島　月夜なれば行く道の知れぬこともあるまいが、最早今宵も引け過ぎに、定めて往來も淋しからう、常から嫌ひな犬などに取卷れたら困るであらう、とは云へ爰へ置く時は、又もや憂き目を見せねばならぬ、可愛さうだが少しも早う。

和歌　あい、そんならおいらん、行きますぞえ。

〽仕方なくく目を拭ひ、立上る子のみすぼらしく、涙に重き袂を銜へ、戸口へ行きてたまり兼ね、（ト和歌野是非なき思入にて立上り、行きともなきこなしにて下手へ行く。）

敷島　あゝこれ和歌野、ちよつと待ちや、

和歌　あい、何でござんす。

敷島　〽縋る我が子の顔打ち守り、（ト和歌野立返りて縋る、敷島顔をぢつと見て、）

敷島　あ、是れが此の世の。

和歌　え。

敷島　達者で居やいなう。〽守を襟に掛けさせて、これが別れと言はねども、蟲が知らすか子心にも、

ト敷島和歌野に守を掛けさせる、和歌野思入あつて、

和歌　これおいらん、わたしやお前に別れて行くのが、どうも厭でならぬゆゑ、誰ぞ頼んで下さんせいな。

敷島　〽おゝ尤もぢやと言ひたさを、胸にこらへて敷島が、さあ頼む人があるならば、夜半にそなたを遣りはせぬ、無いから親が頼むのを厭なら行くな止しにしや。もう／＼そなたは頼まぬから、親と思ふな子でないぞ。（トきつといふ、和歌野びつくりして、）

和歌　あゝもしおいらん、行きます／＼。これから直に行きますから、お前の子にして下さんせ。

敷島　おゝ、行きさへすれば子ぢやわいの。

和歌　えゝ、嬉しうござんす。

〽名殘惜しげに立上り、杉戸を押せど明かざれば、(ト和歌野戸口を明けようとして、)

おいらん、爰が明かぬわいな。

敷島　ほんに最前二人の者が、錠をおろして行つた樣子、こりや遣るにも遣られぬかいな。

〽又も泪に暮れにける、門には庄屋が最前から、樣子を聞いて泪を拭ひ、

ト此の以前よき程に作兵衞、手水に行きし思入にて出來り、入口にて窺ひ、内の樣子を聞き愁ひの思入あつて、

作兵　これ〳〵敷島どの、案じさつしやるな〳〵、今錠を明けて遣ります。

敷島　え、さうおつしやるはどなたでござんす。

作兵　おゝ、おれは新造の中窪が客の作兵衞といふ庄屋でござるが、手水におりて戸惑ひなし、最前からの樣子をば殘らず爰で聞きまして、熱い泪をこぼしました。今明けてやるから待たつしやれ。

〽四邊見廻し庭口の、小石を拾ひ、錠前を、打てば難なく明く戸口、此の間に早うと出行くを、

ト作兵衞下手よりごろた石を拾ひ來て、錠を明け、そつと戸を明ける。これにて和歌野門口へ出るを、

これ、鎌倉川岸なら廓を出て、淺草の觀音さまから眞直に行くのぢやぞ。

和歌　あい〳〵。
敷島　怪我せぬやうに、早う行きや。
和歌　あい〳〵。

〽出行く和歌野見送る敷島、惜しむ名殘も一世の別れ、涙ながらに走り行く。
ト和歌野名殘を惜しむ思入、敷島も見送り、よろしく和歌野泣きながら、花道へ走りはひる。敷島わつと泣き伏す、ばた〳〵といふ跫音にて、作兵衛思入あつて、

作兵　や、誰やら爰へ來る樣子、見咎められてはこなたの迷惑、少しも早くさうだ〳〵。

〽戶口をしめて作兵衛は、さし足なして、
ト三重になり、知らせなしに此の道具七分程廻り、上手に以前の緣張りの戶口、下手は廊下の道具になり、

〽折から出で來る中窪は、（ト作兵衛道具に附いて歩く思入、下手より以前の中窪出來り、）
中窪　これ作兵衛さん、わたしばかり床へ置き、お前は何處へ行きなすつたのだ。
作兵　手水に下へ下りたところ、戶惑ひをして階子が知れず、さつきからまごついて居たのだ。
中窪　いえ〳〵それは嘘でござんす。聞けば新造の米山さんと、いゝ中だといふ噂、大方こゝぞ明部屋

で、いゝ事をして居なすつたのだらう、あの子にお前を取られては、いさゞ凹んだこの顔が、猶凹まなくつちやあならないわな。

作兵　凹んだらおれが、直してやらう。

中窪　どうして直しておくれだえ。

作兵　鼻の穴へ葭を入れて、脹らましたら直るだらう。

中窪　えゝも、張子の達磨ぢやアあるまいし。

作兵　達磨ならいゝけれど、耳木兎だ。（ト中窪を突倒し、上手へちよつと小隠れをする、中窪起上り）

中窪　えゝ、あの庄屋のあんぽんたんを、目高のやうなちつぽけな米山めに寐取られたか。大方わたしを突倒し、あんぽんたんは米山の、目高の方へ行つたであらう。（ト上草履を脱ぎ捨て、）二人をおめ〳〵寐かさうか。

ト是れにて作兵衛上草履をそつと履き、日高川の浄瑠璃を語る、中窪笑止味の人形振、作兵衛上草履にて足拍子を踏み、兩人よろしくあつて、トゞ作兵衛中窪の腰を捉へ、人形遣ひの思入にて兩人下手へはひる、是れにて又知らせなしに、道具元へ戻る。時の鐘し

〽跡には暫し敷島が、泣き倒れしが、やう〳〵に、涙を拭ひ顔を上げ、

ト敷島宜しく思入あつて、

敷島　もう何處いらへ和歌野は行つたか、犬にでも取卷かれ難儀をして居はせぬか、案じられてならぬけれど、爰へ置いたらどのやうな責めに逢はうも知れぬゆゑ、不便ながらも夜る夜半、十三さんの所へ遣つたは、あの子の命が助けたさ、此の儘罪に陷つて果敢ない死をば遂げるのが、わたしや悔しうござんすわいな。

〽悔し涙に身を掻きむしり、袖を喰ひ裂き泣き居る折しも、遣手は奥を忍び足、戸口に窺ひそつと明け、

ト敷島悔しき思入、お爪忍び足にて出來り、戸口の錠を見てうなづき、そつと戸を明け小聲にて、

お爪　おいらん〳〵、敷島さん。

敷島　や、お爪どんか。(トびつくりする、)

お爪　あゝこれ、其のびつくりには及びませぬ。責めに來たのぢやござんせぬ。

敷島　さうして何しに。

お爪　嘸さつきはわたし等が、お前は憎うござんしたらう、堪忍して下さんせいな。

敷島　何と言はしやんす。

〽不審に思へば猫撫聲。（ト誂への合方になり、お爪思入あつて、）

お爪 遣手の役に仕方なく、手酷い責に逢はしたも、お上さんの言附けゆゑ、是れにも譯のあることで、まだ玉苗さんと言つた時分、お前と一二を爭つて互ひに張合ふ朋輩同士、所で旦那におッ被せ、今では家のお上さん上見ぬ鷲も男の心、不斷旦那がお前をば贔屓にするゆゑもしひよつと、見替られでも仕ようかと、根は燒餅から江の島へ旦那が行つたを幸ひに、枕搜しの詮議をさすも、以前の遺恨が爰へ出たのさ、わたしも段々取る年に、いつまで遣手をする氣もなければ、惨いことは仕度くはなけれど、源四郞が見てゐるゆゑ、まさかそつと打たれもせず、嘸痛かつたでござんせうが、是れもみんなお上さんの言附けゆゑ責めたのぢや、どうぞ堪忍して下さんせ、あゝ愛しいことをしましたな。

〽出もせぬ涙をすゝり上げ、背撫で擦り勞はれば、

ト お爪思入あつて、敷島を擦り居る、誂への合方になり、

敷島 そんならわたしに覺えもない、枕搜しの罪を着せ、手酷い責めに逢はせしは、お上さんの言附けでござんすか。

お爪 言附けでなくて誰がまあ、むごい事をしませうぞ、元は武家の娘ださうだが、まだ十四五の時分

から身性が悪く賣られた體、生れ立ちから曲つた氣に、情を知らぬお上さん、其の言附けゆゑ責めたのさ。

〽聞くに敷島はつとせき立ち、

敷島 えゝ情ないお上さん、何の遺恨でわたしをば酷い目には逢はすのぢや、わたしやお前の悪い事を知つては居れど大事のことゆゑ、今日まで誰にも言ひはせぬぞえ。まだ朋輩で居た時分は、中の悪いお前なれど今は主人と何事も、言うたことはござんせぬに、此の身ばかりか和歌野まで、よう酷い目に逢はせしよなあ。

お爪 おゝ其の悔しいは尤もぢや、嘸腹が立たうが、誰が入れたか手箱の内に五十兩盗まれた其の紙入があつたが災難、どうでも目串は拔けぬぞえ、此の目論見もそれを越度に、もう二三年年季を增させ、お前に勤めをさせる氣だから、覺悟して居なさんせ。

敷島 すりや此の上に年季を增させ、もう三月にて出られる體を、又も勤めをさせようとか。

お爪 先づ三年は大丈夫、事によつたらもう五年、苦界の水を飲まずばなるまい、さうなる時には十三さんと、添はうと思つた樂しみも何時のことだか知れぬぞえ。あゝ、お氣の毒なことだなあ。

敷島 えゝ聞けば聞くほど悔しいけれど、斯ういふ罠に掛りしも、此の身の脫れぬ災難なれば、今更い

うても返らぬこと、疑ひ受けし雲井さんに、盗みをせぬといふことをよう言うて下さんせいな。

お爪　雲井さんもさつきのやうに、腹を立つて言はしやんしたが、部屋へ歸つて泣いてばかり、お前の明りの立つやうに、わたしが言つて上げようわいな。

敷島　どうぞ云うて下さんせいな。

お爪　もう今夜は誰も來まい、寐られもしまいが足でも伸し、横になつて寐なさんせ、今に何ぞ喰べるものを、持つて來てあげようね。

敷島　有難うはござんすが、何も喉へは通らぬわいな。（ト時の鐘。）

お爪　いや、斯うして話して居る所を、源四郎にでも見られたら、お前も惡しわたしも惡し、ごれ、見られぬ内に行きませう。

〽言ひつゝお爪が立ち上れば、

敷島　ごうぞ今の言傳を。

お爪　あい、とつくりと言ひませう。

〽戸口へ出しが立戻り。（トお爪雪洞を持ちて出掛け、思入あつて立戻り、）

これ、體の疲れに假睡して、風引かぬやうにしなさんせ。

〽人目を厭ひ燈火を、吹き消す途端、ばつたりと、取落したる短刀を、尻目に掛けて立出る
戸口に窺ふ源四郎、

トお爪思入あつて雪洞を吹き消す、此の途端前幕の短刀を落す、敷島目を附けろ、お爪思入あつて
門口へ出る、此の時下手へ源四郎出て、

源四　お爪どん。

お爪　これ。（ト囁く。）

〽囁き合うて傍なる、小蔭へこそは忍び入る。（ト兩人頷き合ひ下手へはひる。）

〽跡に敷島櫺子から、さす月影に透し見て、

ト敷島あたりを透し見て、お爪が落せし短刀を取り上げ見て、

敷島　思ひがけない此の刃は、慥に今お爪どんが、落して行つたに違ひないが、何で爰へ落して行つた
か。

〽不審ながら抜き放し、見れば鋭き業物に、ぞつとなせしが氣を鎭め、

ト敷島抜いて見る、薄き風の音にてぞつとせし思入。

思はずこれが手に入りしは、是れで死ねとの知らせなるか。（トよき物が手に入りしといふ思入、一

つ鉦を打ち込み誂への地藏經のやうな合方になり、折も折とて塀越しに、聞ゆる田圃の鉦の音、佛へ
通夜の念佛は、あの世を照す道しるべ、思ひ廻せば此の身ほど、世にも因果なものがあらうか。
〽親は何處の誰なるか、五ツの年に勾引され廓へ賣られ人と成り、長の年季も最う三月で、
苦界を脱れ、十三さんと一ツになるを樂しみに、指折り待ちし甲斐もなく、
昨日に替る今日の身は、明日の噂となる鐘の、
〽八ツか七ツかまだ六ツの、年端も行かぬあの和歌野、わたしが死んだと聞いたなら、嘸や
泣いて歎くであらう。
それが不便でならぬけれど、死なねばならぬ身の災難、
〽行末賴むは十三さん、お前ばかりが便りゆゑ、可愛がつてやつて下さんせ。
又旦那さんを始めとして、お世話になりし雲井さんに、恥をおかゝせ申しましたも、命を捨つる
が言譯ゆゑ、どうぞ堪忍して下さんせいな。
〽彼方此方を伏し拜み、
あゝ、今更言うて返らぬ繰言、又もや障りのない內に、少しも早うさらぢや〱。
〽又も聞ゆる鉦の音に、六字の唱名高々と、南無阿彌陀佛々々々々、今死ぬる身も女子の

嗜み、亂れし髪を搔き上げて、白刃を喉へ押し當てしが、

ト此の內一ッ鉦、敷島思入あつて帶をしめ直し、居住ひを直し、念佛の內手を合せ拜み、顏へかゝる髪の毛を搔き上げ、白刃を取り直し、死におくれし思入。

〽夫や我が子に引かされて、鈍る手先を取直し、咽喉へぐさと突き立つれば、あツと一聲迸しる血汐の紅葉からくれなゐ、始終を窺ふ源四郞、白刃持つ手をしつかと捉へ、

ト此の內敷島思入あつて喉へ突込み、糊紅になる、此の以前より戸口に源四郞窺ひ居て、此の時つかつかとはひり、敷島を留め、

源四　や、こりや、敷島には自害をしたか。

敷島　や、さういふ聲は。

源四　源四郞さまだ。（ト時の鐘、誂への凄き合方になり。）

敷島　何と言やる。

源四　苦しからうがちつとの內、辛抱して聞いて行け。（ト短刀を捥ぎ取る。）おれをたゞの若い衆と、思つて居るか知らねえが、元は上總の喰詰めもの、廻り髪結の源四郞坊主、さる小屋敷へ仕事に行き、お孃さんの顏や襟、剃つたが緣で引ツぱらひ、湯治宿やぐれ宿を徂へ歩いた擧句の果てが、

人を賴んで年一杯爰へ賣つたが玉苗だ、その惡足を白ばツくれ、鮨屋の口で不寐番にはひつて見世の若い衆と、出世をしたも旦つくが、手出しをしたを幸ひに、慾德づくの馴合で、女房にさせたお玉が手引、表向きでは主家來、內證はおれが女房に、奧の鬮ひが出會場所、にじり口から這ひ込んで、小箱を枕に寐て居たを、見たのが因果見られたが、因果に手前を殺さにやあ、此方の首に拘るから、枕搜しと名を附けて、可愛さうだが責め殺すのだ。

〽巧みを聞いて口惜しく、手負は苦しき息を吐き、（ト敷島思入あつて、）

敷島　さては、お客の枕搜しも。

源四　いゝや、そりや目違ひだ、おらあ旦那の目を盜み、お玉を自由にするばかり、客の財布や紙入の枕搜しは外にある。

敷島　さうしてそれは。（ト此の以前よき程にお爪寺洞を袖に隱し、戶口に窺ひ居て、）

お爪　誰でもねえ、熊鷹お爪だ。

〽言ひつゝ入るを見てびつくり。（トお爪內へはひる、敷島びつくりなし、）

敷島　そんならお前が。

お爪　あい、枕搜しはわたしだよ。

敷島　え〻、それではやつぱりお爪どんは。

お爪　持つて生れた敵役さ。

敷島　え〻〳〵（ト合方きつぱりとなり）

お爪　お定りの祝儀ぢやあ、月に二十か三十兩、四十くらがり五十手の、手の長いのが持前に枕捜しを始めたも、もう取る年も六十近く、生きた所が七八十、九十の坂は越せねえから百と二百死に金を、除けて置かうと取込んだが、譬にもいふ千丈の堤も蟻の一穴と、顯はれ小口になつたから、誰ぞに罪をなすらうと思つた矢先きに此の話し、丁度な所ゆゑ手箱の内へ證據に入れた紙入から自害をさせる短刀まで、おれが手づまの種廻し、長口上は御退屈、こ〻等でしやぎつて源四郎どん、はねを附けてしまひなせえな。

源四　お〻、是れせえ言やあ用はねえ、長く苦痛をさせるも殺生、千まで言つたお前のせりふの、殘りをついで十萬億土へ、殺して遣るから待つて居ろ。

お爪　然し是れを聞いたらば、何ぼ間抜けなお心好しでも、少しは悔しからうなあ。

〽二人が巧みの一部始終、聞くに手負は口惜しく、

トお爪敷島の顔の側にて憎くいふ、敷島口惜しき思入にて、

敷島　おゝ、人に恨みがあるかないか、今に思ひ知らしてやるぞ。

〽目も血走りて恨めしげに、見詰し顔の物凄きも、恐れぬ不敵の源四郎、

ト薄き風の音一ッ鉦、敷島きつと思入。

源四　おゝ恨みがあるなら化けて來い、いつでも恨みは聞いてやらう。

お爪　何で化けて出るものだ、そんな尻腰のあるのぢやねえ。

源四　どうだ、化けて出て恨みを言ふか。（ト言ひながら敷島の髻を摑み、引ッ立てる。）

敷島　おゝ、死に代り生き代り、恨みを晴らさで置くべきか。

源四　えゝ、しやらくせえ、默つてくたばれ。

〽短刀とつて喉笛を刔りくる〳〵苦しむ敷島、髻放せど手を放さず、

ト源四郎短刀を取り敷島をゑぐる、敷島苦しむ、源四郎髻を放す、敷島源四郎の袖を捉へ居る。

えゝ、放さねえか〳〵、悔しいと思つた一心に、しつかりと捉めえて居やあがる。

お爪　それぢやあ化けて出るかも知れねえ。

源四　何のこいつが。

〽手をもぎ放し蹴倒せば、果敢なく息は絕えにける。

ト敷島の手をもぎ放し、蹴返す、これにてばつたり倒れる。時の鐘、合方。

お爪　人目に掛ると面倒だから、何ぞへ入れて置きてえものだが、おゝ、待ちな、いゝ物がある。

〽言ひつゝお爪は土藏の内、とつかは入れば源四郎、刃の血糊を拭ひ見て、

トお爪土藏の内へはひる、源四郎敷島の裾で糊紅を拭ひ見て、

源四　郷太夫から川流れに、流れこんだ此の短刀、切味の鹽梅ぢやあ、何でもこれは作ものだ。

ト鞘へ納める。

〽お爪は葛籠を抱へ出で、（ト藏の内よりお爪古葛籠を抱へ出來り）

お爪　襤褸綿を入れて置いた古葛籠、此の中へ入れるがいゝ。

源四　こいつはいゝ物があつた。（ト蓋を明け、）丁度幸ひ襤褸綿が、底にあるので中へ入れても、血の流れる氣遣ひがねえ。（ト源四郎は敷島の死骸を葛籠へ抱へ入れ、足で踏み込み入れる、お爪捨ぜりふにて、古綿にてこぼれし血を拭ふ、源四郎蓋をなし、）どこぞの隅へ埋めて置かうか。

お爪　なに埋めるにやあ及ばねえ、引汐時を考へて、花水橋からどんぶりやんねえ、直に海へ流れて出て、葛籠が腐りやあ鮫の餌食さ。

源四　然し、是れから行つたらば丁度夜明けになるだらう、明けちやあどんぶりやりにくい。

お爪　それぢやあ明日の暮方まで、藏の緣の下へ入れて置いて、暮れてから行くがいゝ。
源四　さうすりやあ大丈夫。（ト此の內紐を結ぶ。）
お爪　とてもの事の丈夫ついでに、向うの羽目を二三枚、引ツ剝して置いてくんな。
源四　なぜ此の羽目を引ツ剝すのだ。
お爪　人の口がうるせえから、責めに掛つた敷島が、羽目をへがして逃げ出したが、大方情夫の十三の所へ駈込んで行つたらうと、ごまかしてしまふのだ。
源四　成程お前は感心だ、惡事に掛けては五分も隙かねえ。
お爪　そりやあ一寸でも此の婆婆へ、先きへ出て來た年の功だ。
源四　違えねえ、どれ、引ツぺがして置かうか。

ト源四郎短刀にて羽目板を三枚へがす、跡胴緣殘り、向う黑幕、爰へお玉女郎屋女房のこしらへにて胴緣へ手を掛け立身、誂への合方にて、

お玉　敷島は、片附いたか。
お爪　おやお上さん、何時の間に。
お玉　さつきから羽目越しに、樣子は殘らず聞いて居たよ。

源四　思ひ通りに敷島が、自害をしたから、止めを刺し、葛籠の中へ入れて置いた。

お玉　先づ目の上の瘤が取れ、これで樂々今夜から。

お爪　枕を高くお休みなさい。（ト此の時指金の猫お玉に飛び附く。）

お玉　あれえ。（トお玉びつくりなし、下に居て胴緣を潜り藏へ轉び出る。）

お爪　お上さん、どうなさいました。

お玉　猫がわたしに飛附いたよ。（ト指金の猫お玉を見込む。）

お爪　おゝこりや、敷島の祕藏の三毛。

源四　死人に猫は大禁物。（ト猫をしめ殺す、雨車になり、）おゝ、いつの間にか降つて來た。

ト源四郎葛籠へ腰を掛ける。

お玉　雨にはしめるものなれば、旦那の留守を幸ひに。（ト言ひながら立上る。）

お爪　奥の園ひでしつぽりと。

トお玉を突く、これにてたぢ〳〵となり、源四郎へぶツ附かり其の儘葛籠へ腰を掛け、

お玉　お爪や。

お爪　はい。（ト下に居る、お玉金包みを投げる、これを木の頭。）

お玉　御苦勞だつたね。

ト言ひながらお玉思入、お爪金を取上げ、につこりと思入。雨車二上りの合方、火の用心の聲にてよろしく、

ひやうし幕

三幕目

永代橋西詰の場
大川端辻番の場

〔役名――藤代屋十三郎、若い者源四郎、刀屋手代與三郎、辻番の足輕傳助、鳶の者、藤代屋の若い者八助、敷島の亡靈、新助女房お波。〕

（永代橋々詰の場）――本舞臺上手丸物の橋の袂を見せ、向う一面佃島品川沖の遠見、此の前に小高き石垣の手摺、日覆より柳の釣枝、下手高札場開帳札など建て、此の傍に疊みし葭簀張の出茶屋床几を重ねあり、總て永代橋々詰夜の體。爰に鳶の者○羽織尻端折り盲縞の股引、草履がけ鳶の者のこしらへにて、組合の提灯を持ち、八助羽織着流し店向き若い者のこしらへにて藤代屋と記せし弓張りを持ち、立ちかゝり、幽めたる波の音、時の鐘の合方にて幕明く。

八助　頭、夜る夜半大きに御苦勞さまでござります。

○　そりやあ不斷出入りをする、お店のことだから構ひませぬが、何にしてもお袋さまが泣きなが

らおつしやるものだから、廉々は分りまするがちつとまだ呑込めねえ事があるけれど、押して聞くのも泣いて居なさる所へ氣がねえから、承知しましたと分つた積りで出かけて來たが、ちよつと聞いた所ぢやあ、何ぼ新助が自分の妹だといつて、今ぢやあ藤代屋のお嫁御樣、あのおみつさんを何でも連れて行くと無理に引張つて行つたとのことだが、肴屋の新助はそんな分らない男ぢやあねえが、これには何か譯のあることでござりませうね。

八助　さあ、それもこれも家の若旦那が惡いからさ、お前も知つて居なさる通り、あの新助が家へ魚を賣りに來た緣で、あのおみつさんを小間使に寄越した所が、器量はよしあの通り利口ものだからお袋さまが氣に入つて、なま中心の知れない者を、十三郎の嫁に貰ふよりおみつを貰つて嫁にしたいからと、新助へ話した所が、釣合はない身の上だからと達て辭退したを無理遣りと、貰つた所が十三さまは、あの通り敷島に夢中になつてあの子を嫌つて居るものだから、それを聞いて今日新助が出掛けて來て、そんな不用な妹なら返してくれろと連れて行つたのだから、新助の方にはちつとも無理はない譯さ。

○　それぢやあ新助が尤もだ、何にしても若旦那にも困つたものだ。それに聞きやあ今日吉原の三浦屋から、敷島が昨夜部屋を逃げたから、此方のお家へ來て居るだらうと、若い者が掛合ひに來た

といふが、どこぞへ若旦那が忍ばせてゞもあるのかね。

八助　そいつがちつとも分らない、若旦那は何でも知らないといつて、おれを袖にして餘所へ行くとは不實な女だの薄情だのと、腹を立てゝ居なさるし、廓の者は廓の者で、此方より外に參る所はない、敷島はもう三月で年の明く體なれど、外の者なら其の儘には置きませぬが、今まで家の爲になつた女郎でござりますから、綺麗にあなたへあげますと、證文へ熨斗を附けて置いて行つた、其の中へこんな事を持込んだものだから、家中亂騷ぎさ。

○　何にしても困つたものだ、然し新助の方も、さういふ譯ぢやあちつと氣はきかねえが、何處までもあやまつておみつさんを、取り戻すより外仕樣がないね。

八助　そこはわたし共と違つて、頭の顏だから、さう謝らずとも、話し合ひでお前に任せませうよ。

○　いや、一風流な男だから、どんなもんだか。

八助　ほんに不斷がいゝ人だけ、怒つたらきかねえからね。

○　まあ、兎も角も遣つて見ませう。

八助　何分お頼み申します。

○　よつぽどの手古摺ものだ。

ト両人行かうとする、ばた〳〵になり、花道よりお波魚屋の女房にて、足早に出來り、直に舞臺へ
來る、八助提灯の燈火にてお波を見て、

八助 おゝ、お前は新助さんのお内儀ではござらぬか。

○ お波さんか、是れからお前の家へ行く所だ。(トお波両人を見て、)

お波 是れはまあ、どなたかと思つたら、八どんに頭でござんしたか、わたしも是れからお店へ行て、こちの人に逢うて、悦ばさうと參つた所、氣が急きますから御免なされませ。

ト行かうとするを留め、

○ あゝ、これさ〳〵、新助さんはさつきお店へ來て、おみつさんを連れて歸つたは疾うのこと、それに附いてわつち共は、お前の所へ出掛けて行くのだが、それぢやあまだ家へ歸んなさらねえのかえ。

お波 はい、まで戻りませぬが、そんなら最前おみつどのを、連れて戻つたとおつしやりまするか。

八助 そりやあまだ明るい内のことさ。

お波 えゝ、そんならてつきりあの子をば、廓へ賣りに行つたに違ひない、えゝまあお袋さまも、なぜ素直に戻して下されたのぢやぞいなあ。

八助　どうして〳〵素直に戻すどころか、お袋さまが種々と譯をおつしやるのも聞き入れず、こんた家に置くものかと、無理に連れて行つたので、お袋さまは泣きの涙。

○所でわつちをお呼びなすつて、どうか新助どのゝ家へ行つて、忰にきつと敷島がことは親の威光で思ひ切らせ、おみつと夫婦に仕ようから、どうか腹も立たうけれど、今までの事は水に流して、元々へ取戻して來てくれろと、賴まれて出掛けて來たが、聞けばお前が今言ひなさるには、あのおみつさんを廓へ賣りに行つたとやらいふのは、どうも合點が行かねえが、そりやア一體どういふ譯だえ。

お波（思入あつて、）さあ、お話しが出ましたから申しまするが、有りやうは斯うでござりまする。こちの人新助どのゝ元主人、米屋與左衛門樣の御子息與三郎樣、只今では身上しもつれ、是非なくこちの人が引取りまして、新助の請判にて雪の下の刀屋半左衛門樣方へ奉公に出しました所、この間短刀とやらを賣つたお金の五十兩、廓へ行つて盜まれし故、主人へは歸られずとあつて新助へも言はれぬと言うて、わたしの兄の五平次の家へ行つて賴んださ兄より話しを聞いてから、新助がどうぞして五十兩の金こしらへ、御恩報じが仕度い〳〵と、種々苦勞はして見ましたが、出來ぬものはお金とて切羽詰つて仕方なく、此の間妹が家へ年始に參つた時、斯う〳〵いふ譯で

どうも藤代屋に居づらいゆゑ、取戻してくれとわたしへ頼み、その事を詳しう新助へ話せし所、そりやあとんだ事ぢや、なぜ叱らぬと一旦わたしへは申しましたが、貧に迫つた所から、其の話しを幸ひに、妹を取戻せば十三様も、敷島と御夫婦にお成りなさればお袋さまも御安心、こつちも亦妹を廓へ賣つて五十兩の金こしらへて、若旦那の難儀を救へば兩方へ義理が立つと、それと言はずに今日お店へ、上りし留守に思ひ掛けなく手に入るお金、丁度高も五十兩早う行て悦ばさうと急いで來た甲斐もなう、あの子を廓へ賣らせてはお袋さまへ濟まぬゆゑ、是れから行つて取戻して參りますれば、どうぞ此の事は必ず共に、沙汰なしになされて下さりませ。

○ そりやあとんだ話しだ、然しながらお上さん、お前は女だから知らないが、五十兩で賣つたものを今が今でも五十兩で、返さぬのが廓の法だから、さういふ事ならわつちがお袋さまへ、不足めの所はお話しを仕ようから、兎も角も一緒にお店へお出でなせえ。

お波 どうしてまあお袋さまへ、どの顏さげてお目に掛られませうぞいなあ。

○ さあ、それが却つて遠慮が無沙汰だ、さういふ譯のあることなら、實は斯う〳〵でござりますざつくばらんにお話し申す方が、新助さんの爲めにもよからうと思ふぜ。ねえもし、八どん。

八助 こりやあ頭の言ひなさる通り、何ぼ新助さんの方が尤もだと言つても、今までおみつさんが世話

になつたお家だから、あの儘ぢやあ惡からうと、わたし共は思ひますね。

○第一あのお子さんを少しの內でも、廓へ置くとお店の暖簾にも掛ろことだから、わつちの言ふことをきいて、ちつとも早く請戾して來なさるがいゝ。

お波　それぢやと言つて、どうもお店へ。

八助　これさ、其の遠慮が惡いのだ、そんなことなら初手に譯を言うて、お袋さまへお願ひ申せば、何の五十や百の金、貸さぬとおつしやるものかね。

○兎も角も惡いやうにはしねえから、わつちと一緒においでなせえ。

お波　ぢやと言うて、面目なうて。

八助　えゝ、情のこはい。

○まあ、來なせえと言ふに。

ト○八助お波を無理に引立て、橋の向うへはひる。跡雨吟の端唄になり、花道より與三郎、思案をしながら出來り、花道にて思入あつて、

與三　此の間から五平次の內の世話になり、氣の毒さは思へども、今日までうか〳〵して居たは、新助があれ程まで四五日のその內には、きつと五十両の金こしらへ、主人へ戾れるやうにすれば案じ

ることはないと言うてから、もう二十日餘り、今に何の沙汰もないは、金才覺の出來ぬは必定、それも恨む所はない、此の身の粗相で取られたる其の金ゆゑに氣の毒な、新助夫婦にこの樣な、苦勞を掛けるのみならず、聞けば此の頃では生業にさへ出ずに、金の事に心配してくれるといふことぢやが、何をいふにも五十兩、所詮二人の力にて都合の出來やう筈はない、それを知りつゝ存へて、この難儀をさせようより、わしが死んだら主人ぢやとて、ちつとは勘辨してくれよう、それが何より此の身の言譯、さうぢや〳〵。（ト四邊の小石を拾ひ、袂へ入れなどして、向うへ思入あつて、）あゝ、今死んだなら分らぬものぢやと、嘸やさぞ新助夫婦が恨まうけれど、是れも二人へ心配をさせまい爲めにする事ゆゑ、必ず惡う思うてたもるな、詫は未來でしますぞよ。（ト涙ながらに向うを拜み、）此のやうなこと言うて居て、往來の人に見咎められぬ其の内に、ちつとも早くさうぢや〳〵。

ト上手へ行きかゝる、此の内橋の向うより、以前のお波藤代屋と記せしぶら提灯を提げ出で來る、是れにて與三郎手早く頰冠りをなし、お波と摺合ふ。お波與三郎を見て、

お波　あなたは、若旦那ではござりませぬか。（ト與三郎びつくりなし、）

與三　や、お波どのか、許して下され。（トつか〳〵と橋の上へ行き、）南無阿彌陀佛。

ト身を投げようとするを、お波あわてゝ駈け寄り、縋り留め、

お波　あゝもし若旦那、早まつたことなされますな。

與三　いや〳〵、どうぞ留めずに、死なして下され〳〵。

お波　さあ死なうとおつしやるは、お金のことでござりませうが、そんなら死ぬるには及びませぬ。

與三　え。

お波　まあ〳〵お待ちなされませいなあ。（ト留めながら橋より下り與三郎を下に置き思入あつて合方になり）もし若旦那様、あなたは何でその樣な、無分別なことして下さりますぞ、そりやもうお金の才覺が、遲うなつたは濟みませねど、何をいふにも五十兩、お前さまは以前が以前でいらつしやれば、何のさほどもない金と思召しもござりませうが、私共の身にとつては、それは〳〵得難い金高、これに附いては此の中から、こちの人も私も夜の目も寐ずに駈歩き、どうぞと思へど出來ぬゆゑ、詮方つきて藤代屋へ參つた妹を、先方の御子息が嫌ふを幸ひ無理に縁切り連れ戻り、廓へ賣つて金こしらへようと、思うて居る私共夫婦のものゝ心にも、ちつとはなつて下さりませいな。

ト涙ながらに言ふ、與三郎も落涙の思入にて、

與三 その志しを無足にして、死なうとしたは濟まぬけれど、何ぼ以前が主從ぢやというて、そなた衆夫婦は言ふに及ばず、縁に繋がる五平次どの、貧しい中へ掛り人、湯錢から小遣ひまで貢いで貰ふ心の切なさ、いつそ死んだら此のやうな、難儀を人にも掛けまいし、また主人方の引負も言譯が出來ようかと、無分別かは知らねども、わしは死ぬ氣になりましたわいなう。

お波 それはあなたがお若いゆゑ、後前見ずの御料簡と申すものでござりまする。なぜとおつしやりませ、假令あなたが死んだにしろ、其の引負の五十兩は何處が何處まで請判の新助が償はねば、御主人樣へも濟みませず、又掛り人になつて居るが氣の毒ぢやとおつしやれど、品によれば他人さまさへお世話をするが世の人情、それにあなたはお主樣、家來の新助が女房の私の兄なれば、かゝりや繋がるお主筋、何にも御心配なさることはござりませぬ、それにもうこの通り。(ト懐より財布に入れし金を出し、)御覽なさる通り、お金が出來ましたからは、明日にもこちの人がお連れ申して、御主人樣へお詫びが濟めば、その樣な御苦勞をなさるには及びませぬ。

與三 然しながら妹御のおみつどのは、鎌倉でも大家と云はるゝ藤代屋へ貰はれしは身の果報と、人もいうて居るに、それをわしゆゑ無理に暇取り可愛さうに苦界へ沈め、調へし金と聞いては、何ぼこなた衆の志しでも、此の金ばかりは受けられませぬ。

お波　いえ〳〵、こりや其のやうなお金ではござりませぬ。それに附いてもあなたへもお話し申し、お悦ばせ申さねばならぬといふは此のお金、お聞きなされませ、今日新助が斯う切羽詰れば仕方がない、言憎いこと言うても藤代屋へ行て、おみつをば取戻し、廓へ賣つて金こしらへねば、あなたへ濟まぬと出て行きまして、暫らくすると表から、お武家様がお供を大勢お連れなされ、主人新助は居らぬかとおつしやりますゆゑ、生憎他行いたしましたと申し上げましたれば、其の方は女房か、新助他行ならそちでも苦しうない、今日罷り越せしは餘の儀にあらず、先日我君滿詮公此の邊への鷹野の節、お拳の反れしを新助が捕へ、差上げし御褒美として金子五十金下さる、有難く頂戴いたせと、白木の臺へうや〳〵しく載せて出された其の嬉しさ、新助に見せて悦ばさうと、直に飛んで參りましたが、何とまあ有難いことではござりませぬか、それぢやによつてお前様も、必ず御心配なさるやうなお金ではござりませぬわいなあ。

與三　なに、すりやお鷹の反れしを新助が、捕へて差上げし御褒美として下されしお金とな、さう聞けば同じながら借り置いても心は濟めど、それに附けても新助が、藤代屋へ行きしと言ひしが、おみつどのゝ身の上に、別に變りはござるまいの。

お波　さあ、それもお案じなさるには及びませぬ、假令妹を賣つたにいたせ、元金で返さずば利に利を

附けても取戻しくれいと、藤代屋のお袋さまが無理やりに私へ、五十兩お渡しなされましたれば、是れもお氣遣ひはござりませぬわいな。

與三 わしゆゑ知らぬお人にまで、其のやうな苦勞を掛け、どうもそれでは濟まぬわいなう。

お波 假令借りても申さば緣者、殊にお得意先なれば、新助が商ひに行く度毎に賣りし魚で差引いてお貰ひ申せば濟みますこと、それは少しも構ひませぬ、たゞ氣掛りは、おみつの身の上。

與三 僅かな内でもさういふ譯では、廓へ置いてはわしが濟まねば、夜は更けたれど氣の毒ながら、そなたと同道するほどに、新助に早う逢ひ、どうか安否を聞きたうござる。

お波 左樣なれば御苦勞さまながら、あなたも行つて下さりますするか。

與三 樣子聞かねば落着きませぬ。

お波 さういふことなら、少しも早う。

與三 夜更けぬうちに、

お波 若旦那さま。

與三 お波どの。

お波 どれ、お供いたしませうか。

ト犬の聲して新内流しの合方になり、お波先きに提灯を持ち、與三郎附き花道へはひる。跡時の鐘、薄きばた〳〵になり、花道より前幕の源四郎、頰冠り尻端折りにて古葛籠を背負ひ、縫包みの犬吠え附くを追ひながら、出來り、

源四　えゝ畜生め、吠えやあがるな、何も胡亂なものぢやあねえ、といつてまたあんまり潔白な體でもねえが聞いて呆れらあ。いや常談ぢやあねえ、夜る夜中こんな物を背負つて歩くものだから、人がきよろ〳〵見やあがつて癪に障らあ、葛籠を背負つたがをかしいかと、爰等が一番髙島屋の聲色の遣ひごこだが、まだ〳〵惡事はそこまで行かねえ、ごうしてこれでもおれにやあ、重荷だ、なか〳〵死人は重いものだ。（ト大きく言つて口を抑へ、四邊へ思入あって舞臺へ來り、）大きな聲でこんな事を言つて、橋番にでも見附かつて、捨て損ふと大變だ、どれ、橋の上から敷島の死骸をどんぶり打ち込めば、丁度今が引汐時、直に海へ流れてしまへば、葛籠は崩れその果は鮫の餌食となる體、どつこいしよ。（ト橋の高欄へ葛籠を載せ、體を抜き、葛籠の印を見て、）おゝ、さつぱり氣が附かなんだが、内證の印の丸に三ッ引、うつかり此の儘どんぶりやらかし、葛籠が何處ぞへ流れ附くと、こんな所から足の附くものだ、是れを思ふと年は取りたくねえ、あれ程のお爪姿アだが爰へ氣が附かねといふは、よつほど箍が弛んだな。（ト言ひながら葛籠の印を引ッぺがし袂へ入れ、）

是れで大丈夫だ。どれ、水葬禮としてやらうか、然し手前も仕合せな女だ、忝けなくも尊くも、上總無宿の源四郎坊主さまが引導だ。有難く聽聞しろ」それ、南無阿彌陀佛。（ト葛籠を橋の向うへ投げ込む、水の音烈しく、源四郎ほつと思入あつて、）あゝがつかりした、是れがほんの重荷を下したのだ。どれ、早く歸つてお玉と樂しまうか。（ト橋を下り平舞臺よき所まで來る、ドロ〳〵になり、橋の向うへ灯入りの人魂を引き上げる。源四郎見返りこなしあつて、）何だ人魂か、おらア時節違ひの花火かと思つた、あんまり白癡脅しな、ふん、（ト肩で笑ふを道具替りの知らせ、）笑はせやアがらア。

ト佃になり、源四郎逸散に花道へはひる。此の途端、よろしく道具廻る。

（大川端辻番の場）——本舞臺向う一面の築地塀、上手へ寄せて九尺の辻番、向う張壁、左右へ戸を建て板羽目の蹴込み霧除庇、式臺の前に仕掛物の辻行燈へ燈火を點し、下の方柳の立木、日覆より同じく釣枝。時の鐘合方雨車にて此の道具留る。と下手にて、

傳助　火の廻り〳〵。

ト言ひながら下手より傳助、胡麻鹽鬘、菖蒲革の袴、木刀を差し、辻番の親仁にて弓張提灯を持ち六尺棒を突きながら出來り、

北風が東風に替つたから、降るだらうとは思つたが、春の雨には珍らしいさんと夕立のやうだ、

初雷でも鳴らなければいゝが、然し鳴つてもおれにやあ聞えないから構はないが。それに、降れば廻るにも及ばず、爰等が辻番親仁のかすりだ、こんな晩こそ樂々と一杯呑んで行火といふ、おれが情婦でも抱いて寐ようか。

ト二重へ上る、ばた〳〵になり、花道より以前の源四郎、逸散に走り出で、直に舞臺へ來て、軒下へはひり、

源四　恐しい雨で、何處もかもぐつすりで、心持が惡くツて堪えられねえ。おゝ、こんなことを云つて居て、通れを喰ふも氣が利かないし、是れから先きは雨止みをする所がねえから困らあ。（ト辻番の内を覗き、）えゝ畜生め、手酌で旨くやつて居やあがらア、氣が惡いなあ。もし、御無心ながら少しの内、お軒下をお貸しなすつて下さいまし。

傳助　あゝ途中で雨に逢つたのか、そりやあ困つたらう、遠慮はないから此方へ上つて、雨止みをして行くがいゝ。

源四　そりやあ有難うございます、左樣なら御免なさい。（ト式臺へ上り、）まことに惡い天氣でござります、どうか止めばようござりますが。（ト言ひながら手拭で手足を拭いて居る。）

傳助　なあに降りが强いから、今に上るだらう。そりやさうと、お前遠方かえ。

源四　いえ、直御近所でございます。

傳助　それぢやあいゝが、然し濡れても歸れまいから、まあゆつくりと話して行くがいゝ、其の内には止むだらう。

源四　有難うございます、此のお辻がないと、内まで濡れて歸らなけりやあならぬ所でございました。

傳助　ほんに、爰等は雨止みをする所がないから、嘸困つたらう。

源四　いやもう御覽なせえ、此の通りぐず濡れでございます。

（ト言ひながら着物を絞つて居る、傳助見て、

傳助　おゝ、そりやあ冷たからう、おれが行火を貸して遣るから、ちと其處で乾かすがいゝ、そんな物を着て居ちやあ毒だ。（ト行火を式臺へ持つて來る。）

源四　御親切に有難うございます。左樣なら拜借いたします。（ト行火を引寄せ、股火をしながら、）あゝ、お蔭さまで助かりました。

傳助　おい、お前もつと此方へ寄んな、其處は漏るよ。

源四　左樣でございますか。（ト居住ひを直し、行火に當つて居て、）成程、こりやア大變に漏りますね。

傳助　いやも、普請前だから何處も彼處も雨漏りだらけで、何のことはねえ、芝居でする山三の浪宅を

見るやうだ。

源四　もし、山三の浪宅といやあ、此の間ちよつと三丁目の芝居を覗きましたが、不破名古屋の狂言で大層な大入りでござりましたが、あゝ芝居のはひる所を見ますと、世の中はよくなつたに違ひござりませぬよ。

傳助　世の中のよくなつたのは、わしなどの內職で知れます、此の春から大層忙しくなつたから、そこで斯うやつて好きな酒も吞まれるといふものさ。

源四　何生業でも、世の中がよくなくつちやあいけませぬ。

傳助　おゝ、酒といへばもうおつもりだ、えゝ殘して置かずとみんな吞んでしまへ。

源四　あゝ、温まつていゝ心持になつたらば、ちつと睡氣がさして來た。

ト行火を抱き、突伏して居る、薄ドロ〳〵、寢鳥の合方になり、辻行燈の燈火消え、中より敷島二幕目の裝、薄色の模樣、敷島の亡靈にて仕掛にて前へ出で、辻行燈の傍にしよんぼりと屈み居る、此の時勝手より傳助德利を持ち出來り、

傳助　おや、辻行燈の燈火が消えたが、油は澤山ある筈だが。（ト弓張提灯へ燈火を點し持ち來り、辻行燈へ點さうとすると、仕掛けにて燈火附く、傳助びつくりなし、）あれ、燈火が附いた、何だか薄氣味の惡

いことだ。(ト言ひながら敷島を見て、)そこに居るのは、女の樣だが、あゝ、お前あの人の連かえ。

トこの聲に源四郎目を覺し、

源四　え、何と言ひなさいますえ。

傳助　あそこに居る女は、お前の連れだらうといふことよ。

源四　いゝえ、私ヤあ連れはござりませぬ。

傳助　はゝあ、それぢやあ別か、何にしても其處に居ちやあ濡れるから、お前も此方へ上んなせえ、何を言つても默つて居る女だ、あゝ恥かしいのか、何も恥かしいことはないから、遠慮なく此方へ上んなせえ〳〵。(ト言へども、源四郎には見えぬ思入。)

源四　もし〳〵、その女といふのは、いつたいどこに居るのでございます。

傳助　こなたも若いくせに、眼の惡い、それ、其處に居るわな。

源四　え。(ト少し薄氣味わるきこなし、)

傳助　あゝ、お前女郎だな。

源四　なに、女郎。

傳助　それ見なせえ、知つて居るのだらう、大方お前が連れてども逃げて、髮の亂れて居る鹽梅では、

傳助　よい中の戀爭ひで、道で喧嘩でもしたのぢやあないか。

源四　もし／＼、もう止しておくんなせい、ちつと此方に覺えがあれば。

傳助　え。

源四　何さ、ちつとも覺えのねえことを。

傳助　それでもお前の顏を、恨めしさうに、あれ、見詰めて。

源四　何だか不氣味な。（トぞつとせし思入にて立上り、四邊を見廻す、敷島源四郎の目先へすつと顏を出す、源四郎暗き思入にて透し見て。）や、敷島か。

トびつくりして、どうと下に居るを木の頭、敷島柱の際へ立上る、傳助はこれを見て式臺へ俯伏になり、着物をすつぽり被る、源四郎は逃げようとして逃げられぬ思入、敷島だん／＼柱へ消えるをきざみ、大ドロ／＼にてよろしく、

ひやうし幕

四幕目　深川洲崎の場

〔役名〕――藤代屋十三郎、青木主鈴、漁夫洲崎の五平次、若い者源四郎、船頭熊藏、非人雪踏の粂、

同桐臺の政。三浦屋の遣手お爪、三浦屋女房お玉、敷島の亡靈等。」

（洲崎海邊の場）——本舞臺四間通し四尺程の棕櫚伏の土手、眞中に誂への足掛り、此の下に棧橋、二重上に九尺誂への辻堂、藁屋根、狐格子、左右中窓三尺本緣附、軒口に鬼子母神といふ額、中窓の下に草履を附けし額を掛け、此の辻堂の側に柳の立木、日覆より同じく釣枝、正面藪疊み後黒幕、舞臺花道とも波幕、兩棧敷の水引打返し、同じく浪幕、向う正面安房上總の切出しの遠見、總て深川洲崎海邊の體、辻堂の前に吾妻下駄、燒印のある雪踏脱ぎ捨てあり、爰に筵を布き、雪踏の傍、桐臺の政、非人つゝれ装にて、一升徳利竹の皮包を置き、酒を呑み居る、此の見得波の音にて幕明く。

粂　これ政や、ちつと茶碗を廻さねえか、おらアまだ二杯か呑まねえ。

政　おれが醉つて居ると思つて、いゝ加減なことを言ふな、何ほ高い酒だつて今五合つがして來たのだ、二へえや三べえ呑んだので、こんなに無くなつて、たまるものか。

粂　おれが今褌の洗濯をして居る内に、どし／＼手前が呑んだらう、呑みやあなくなるのは當り前だ。

政　これさ、いゝ加減なことを言へ、一合呑みやあ眞赤になるおれだ、面を見て物を言へ。

粂　成程手前は一合上戸、まだ醉つた様子もねえが、それぢやあ酒屋のつぎが悪いのか、合點のいかねえことだなあ。（ト政徳利を見て、）

政　こう兼や、なくなつたのが分つた〳〵、其の徳利に罅があつて、下の筵がぐつすりだ。

兼　それぢやあ地びたが一人で呑んだのか、忌えましい目にあつたなあ。もう一ぺえやりてえが、手前錢はねえか。（と政思入あつて、）

政　錢はねえが、金があらあ。

兼　金なら猶いゝ、二朱を二つ貸してくれ。

政　借りるにやあ及ばねえ、あれを持つて行け。（ト辻堂の前にある履物を見せる。）

兼　こいつアさつぱり氣が附かなんだ、彼奴がありやアぐつすり呑めらあ。

政　吾妻下駄にばら緒の雪踏、男と女の履物だ、こんなのは取つても罪にならねえ。

兼　娘か年増か知らねえが、どんな女か見てえものだ。

ト兼拔足にて辻堂の側へ行き、内の樣子を窺ふ、政は腰に差して居る鍵を出して履物を引ッ掛けそつと盜み、これを持つて下手へはひる、兼心附き四邊を見て、

兼　やあ、政野郎め、おれを出し拔き履物を揚げて行きあがつた。分前を取らずに置くものか。やいやい盜人め、待ちやあがれ〳〵。

ト波の音にて下へ敷きし筵を其のまゝに下手へ追掛けてはひる。是にて波の音烈しく、かすめて佃に

なり、上手より丸ものゝ漁船、眞中に十三郎吉原冠り、櫻の紋附小袖の着附け、着流し、煙草盆を側へ置き煙草を呑み居る、いゝ、みよしの方に五平次、筒袖の長半纏、三尺帶腰蓑網打のこしらへ網を揃へ居る、艫の方に熊藏、同じく長半纏三尺帶切張りの竹笠を冠り、櫂にて船を押し出來り舞臺眞中にて、

十三　これ五平次、なぜ今日は日並もよいのに、此のやうに掛らぬだらう。

五平　時折こんなことがござりますが、かういふ日にやあいくら打つても、雜魚一尾かゝりやあしませぬ。

熊藏　もう今日はいゝ加減に網の方は切り揚げて、內から船へ入れて來たお酒がそつくりございますがお燗を一ぺえ附けませうか。

十三　酒も一杯呑みたいが、後の月から氣が鬱ぎ、家にばかり居たゆゑに、お袋が案じ過し、ちと氣晴らしに網にでも、行つたがよいと勸められ、久し振りで今日來たが空手で歸るも極りが惡い、もう一二遍御苦勞でも、爰等へ打つて見て下さい。

五平　さう仰しやるならお心ゆかし、もうちつと打ちませう。(ト五平次網を手へ掛け、支度をする。)

十三　爰にはどうか居さうだわい。

熊藏　三才ものでも掛りやあいゝが。

ト熊藏船を押す、五平次下手へ網を打ち、じり〳〵と寄せながら、五平次ぎつくり思入。

十三　五平次、何ぞかゝつたか。

五平　へい掛りました、とんだ物が掛りました。

十三　大分網が重いやうだが、大きな物でも掛つたか知らぬ。

五平　今日は初めからいかねえと思つたが、到頭仕舞ひがお客さまだ。

熊藏　なに、お客さまだえ。そんなことだらうと思つた。

ト五平次やつと網を寄せ、水にて洗ひ、引きあげる、此の内十三郎合點のいかぬ思入にて、

十三　これ五平次、今言つたお客さまとは、何のことだな。

五平　こりやあわし共仲間の、符牒でござりまする。

十三　大方そんなことであらうが、聞いて置きたい教へて下さい。

五平　なに、お聞きなさらなくつてもようござります。

十三　いや、隱すこと程聞きたいものだ、何だか聞して下さいな。

五平　さうおつしやるなら申しますが、お客さまと申しますは、水死人のことでござりまする。

熊藏　假名でいへば土左衛門さ。

十三　むゝ、始めて聞いたが水死人のことか。

ト十三郎氣味の惡き思入にて、水中を見る、五平次網を置き下に居て、

五平　斯ういふものゝ掛る日には、決して漁はござりませぬから、もうこれぎりで、お歸りなすつて、家で一杯お上りなされませ。

十三　さういふことならもう網は、是れ切りで止しに仕よう。然し歸ると極つたら、さう急ぐにも及ぶまい、熊や一杯吞まうか。

熊藏　それは宜しうござりまする、さつきから樽の匂ひで、喉がぐび〳〵して居りまする。

十三　ちよつと船を爰へ繫いで、一德利つけてくんな。

熊藏　畏りました。

ト熊藏櫂を立て船をもやひ、一ツ竈に掛けてある藥罐へ燗德利を入れる、五平次は網を片附け、水にて手を洗ひながら、

五平　この二三日は日並もいゝのに、何で今日は漁がないか、年中生業にして居ても水の上の事は分らねえものだ。

熊藏　親方、先月も今日はこんなだつたね。

五平　さうだッたけな。
熊藏　それ、朝から何にも掛らなくつて、擧句の果が古葛籠さ。
五平　あこれ、あの時のことは言はねえがいゝ。
熊藏　言つちやあ惡いかね。
五平　惡い事もねえけれど、言はなくつてもいゝことだ、手前のお喋べりにも困るぜ。
熊藏　これもみんなお前に似てさ。
五平　口の減らねえ野郎だ。
熊藏　それだからお喋べりさ。
五平　えゝ、いゝ加減にしねえか。（ト熊藏首をすつこめ舌を出す、五平次見て、）やい、今の舌は何だ。
熊藏　こりやあお喋べりの看板だ。（トこれにて皆々笑ひ、）
十三　これ五平次、何の話しか知らないが、古葛籠とは面白さうだ、不斷話し好きだのに、なぜ話して聞かせねえのだ。
五平　いえ、あんまりどつとしねえことでござりますから。
十三　何でもいゝから、聞きたいものだ。（ト熊藏辨當の重箱と猪口と徳利を盆に載せて出し、）

熊藏　はい、お燗が出來ました。

十三　一ツついでくんな。（ト猪口を出す。）

熊藏　はい。（ト酌をする、十三郎呑んで、）

十三　さあ五平次、一ぺえやりながら今の話しを。（ト猪口をさす、五平次受けながら、）

五平　それぢやあどうでも話しますのかね。（ト呑みながら合方になり、）今も熊が言ふ通り、後の月の廿八日、お約束のお客があぶれ、四ツ時分から熊と二人で地網に海へ出た所、丁度今日と同じやうに雜魚が一尾網にかゝらず、こいつア、こじれが來たから切り揚げて歸らうと思ふと、船の際へ流れついた古葛籠、お國行きの荷物でも取落したのが流れて來たか、掛合ひにならねえやう突出さうとした所熊の野郎が言ひますに、斯うして船へ流れ附いたは、とんだ勘平のせりふだが、天から我へ授かる葛籠、上げて見ようと此の野郎が。

熊藏　なに、若旦那わつちぢやあござりません、親方が慾張つて、上げろ〳〵と言ひました。

五平　なに、おれが言ふものか。

熊藏　言はねえことがあるものかね、上げろ〳〵と言ひなさるから、船へ上げたところ滅法に重い古葛籠、舌切雀なら化物だが、兎も角も訴へて主があつたら禮を貰ひ、無けりやあ悉皆お上から拾つ

た者へ下されば、何でも中は二ツ山だと、わつちが言つたら親方が。

五平　えゝ、又お喋べり野郎め、詰らねえことを言ふな。

熊藏　言はなくつちやア分りませぬ、その時この親方が、そんな勘定といふがあるものか、おれは親分手前は子分、七分三分が當り前たと、酷くわつちを籠めなさるから、やつとのことで四分六と、葛籠の割を極めました。

五平　そりやあ手前が强慾に、何があるか知れもしねえものを、やれ二ツ山だの四分六だのと、口やかましく吐かすから、七分三分と言つたのは、からかひ面に言つたのだ。

熊藏　えゝ、旨く言つてなさらあ。

十三　これさ、熊や默つて居ろ、話しの腰が折れてしまふ。さうして其の葛籠をどうした。

五平　先づ四分六と割を極め、紐を解いてその蓋を、明けて見てびつくりしました。

十三　何が中にはひつて居たな。

五平　さあ、何があつたこ思召します。（ト十三郞思入あつて、）

十三　さあ、葛籠へ入れてあつたのなら、大方着物か道具類。

熊藏　所が中にあつたのは。

五平　あこれ、この跡は又明晩と、お話し申さねえ方がよからう。
十三　さう言はれると猶聞きたい、早く跡を話して下せえ。
熊蔵　まあ一ツお上りなさいまし。
十三　まあ打捨つて置いてくれ、酒どころではない。さうして葛籠のその中には。
五平　今もあなたのおつしやる通り、着類か道具と思ひの外、中にあつたは女の死骸。
十三　えゝ。（トびつくりなす、誂へ凄味の合方、かすめて波の音になり、）
五平　もし、年の頃は十九か二十、よく取つて廿一位な、びつくりする程のよい女、尤も素人ぢやあござりませぬ、裝の樣子ぢやあ女郎でござりますが、酷い責めにでも逢つたかして、兩の手は痣だらけ、亂れた髮が顏へかゝり、喉を突いて死んだと見えて、顎から胸へ血だらけゆゑ、ほんに蓋を取つた時、わつちも熊も呆氣に取られ、どう仕ようかと思ひました。
十三　そりやアとんだ物を引き揚げたな。
五平　わつちも一人五ツの年迷兒になつてそれツきり、知れない娘がござりますが、達者で居れば二十一、丁度似寄りの年頃に、何となく不便になり、葬つてやらうと思ひましたが、たゞの水死と譯が違ひ、疵のある死骸ゆゑ、どんな跡で難儀が此の身に掛るめえものでもござりませぬから、葬

つてやる譯にもいかず、然し船へ流れ寄つたは、何ぞ緣のあることゝ思ひ、せめて念佛の三遍も唱へてやらうと片袖を、引ッちざつて持つて歸り、柳の木の下へ埋めて證を立てゝ置きました。

十三　それぢやあ死骸は、たゞそのまゝ。

熊藏　わつちが葛籠の蓋をして、沖の方へ突き出しまして、後をも見ずに歸りました。

五平　その晩家へ歸つた所、葬らねえのが心に掛り、氣になつてなりませぬから、寺へ頼んで其の女の戒名を附けて貰ひ、朝夕拜むその序に、線香を立てゝ遣つてをります。

十三　そりやあ奇特によくして遣んなすつた、必ず惡く報いはしまい。

ト此の内熊藏、十三郎の着附の紋を見て、

熊藏　もし若旦那、お前さんの此の御紋は、何といふ御紋でござります。

十三　身上の崩し初めが紋所と、家の紋が野暮だから、名物切の内から寫した、一輪櫻の紋所、こりやあ世間にない紋さ。

熊藏　親方ちよッと、この御紋を見なせえ、一件の紋と同じやうぢやあねえか。（ト五平次見て、）

五平　ほんに今まで氣が附かなんだが、寸分違はぬ紋所。

十三　これ、一件の紋とは、何の紋だ。

五平　今お話し申した、死骸の袖に附いて居た紋が、同じ紋でござります。
十三　え、（ト心當りのある思入にて、）して、其の部屋着の色合は。
五平　たしか薄鼠でござりました。
十三　さうして、もしや裾の方に、模樣は附いて居なんだか。（ト熊藏思入あつて、）
熊藏　附いて居ました〱、馬鹿々々しい話しだが、ぞつとする程いゝ女に、死んで居ても氣が惡く、裾の方を眺めたところ、附いて居たのは水の流れに、楓葉の模樣でござりました。
十三　なに、水の流れに楓葉の模樣、そりや、おれが言交した、敷島に違ひない。

ト十三郎くわつとなりし思入にて、五平次の胸づくしを取る。

五平　これ若旦那、何をなされます〱。
十三　その死骸を、何處へやつた〱。
五平　まあ〱、爰を放して下さいまし。
十三　いや〱、言はぬうちは放さぬ〱。
五平　まあ、お放しなされませ。（ト捥ぎ放す。）
十三　さあ、其の死骸は何處へやつた。

五平　今もお話し申しました通り、掛合ひになりますから、片袖捥ぎ取つて、葛籠はその儘沖のはうへ突き出してしまひました。

十三　えゝ情ないことしてくれたな。（ト泣き伏す。）

熊藏　もし、其の敷島さんといひなさるのは、わつちの妹の行つて居る、三浦屋の内の敷島さんでござりますか。

十三　おゝ、其の三浦屋の敷島だ。

熊藏　話しにやあ聞いて居たが、遂に一度見たことがねえから、葛籠のまゝに又沖へ突き出してしまつたが、顔を見知つて居たならば、葬つてあげたものを。

五平　それぢやあ葛籠のあの死骸は、若旦那の買馴染、敷島さんでござりましたか、道理こそ着物の紋が一ツ紋でござりました。

十三　さあ櫻の紋に楓葉の模様は、吉野立田といふ心で、おれがこしらへて遣つた部屋着、それが證據で駈落と一途に思つた敷島の、非業な最期は知れたれど、何處へ流れて行つたやら、行方の知れぬ浮死骸、斯ういふ事と露知らねば、夫婦約束反故になし駈落するとは水臭い、そでない奴と恨んで居たが今となつては可愛さうに、定めて非業な死をするまでには、悲しい憂き目に逢つたで

あらう、何處の浦へ流れて行つたか、見られるこゝなら死顔なりと、どうぞ一目見たいものだ。

ト十三郎思はず前へ乘出す、波の音はげしく、船ガツクリとなる、五平次あわてゝ十三郎を捉へ、

五平　あゝもし、お危うござりまする。かね〴〵妹のお波から敷島さんと若旦那とは、一方ならぬ深い中と話しに聞いて居りましたから、御尤もではござりますが、私共が引き揚げてから、もう一月になりますから、今頃までには葛籠も腐り影も形もござりますまい、お心殘りでござりませうが、思ひ切つてそれよりは亡き跡々の弔ひを、懇にしてお上げなされませ。

熊藏　こりや親方の言ふ通り、外の人の百遍より若旦那の一遍が、敷島さんへは何より追善、埋めて置いた片袖へ、お念佛でもおつしやりませ。

十三　成程流れてもう一月、所詮死骸は知れまいから、せめて殘る片袖を、見たいものだが、まだあらうか。

五平　えゝござりますとも〳〵、埋めてからまだ一月、腐る氣遣ひはござりませぬ。

十三　そんなら家へ歸つたら、掘出して見せてくりやれ。

熊藏　畏りました、わつちが掘出して上げませう。（ト時の鐘、五平次思入あつて、）

五平　あゝ思へばとんだお話しから、八重にからんだ絲筋が、分つて見れば若旦那と、死ね死なうとい

ふ三浦屋の、

熊藏　敷島さんと知れたのも、同じ櫻の紋所、

十三　誰が仕業か知れざれど、花の盛りをむごたらしく、

五平　思はぬ風に散り果てしも、裾に染めたる立田川、

熊藏　流れの模様が前表か、

十三　水の哀れやもみぢ葉の、

五平　血汐に染みしその亡骸、

熊藏　どこへ流れて行つたるか、

十三　跡に殘りし片袖に、

五平　しぼる涙の花七日、

熊藏　その弔ひも形ばかり、

十三　思へば敢果ない。（ト向うへ思入あつて小縁へ手を突く、波の音を打込み、）身の上ぢやなあ。

ト跡薄く波の音、熊藏空を見て、

熊藏　まだ暮れるには間があるが、曇つたせゐか暗くなつた。

五平　北からずん／＼上るから、後にやあ一降り掛るだらう。
十三　降らない内に五平次の、家まで早く歸りたい。
五平　なに、家までは大丈夫、降る氣遣ひはござりませぬ。
十三　それでも、どうやら。
五平　はて、わつちが見拔いておきました。
熊藏　どれ、一押しに乘ツ切らうか。

ト波の音かすめて佃になり、熊藏櫂をぬき櫓を押す、是れにて船は花道へ掛り、捨ゼリフにて熊藏櫓を押し、五平次十三郎は酒を呑みながら花道へはひる。跡時の鐘、かすめて波の音、よき程に上手辻堂の狐格子を明ける、内にお玉、女郎屋女房のこしらへ髱の毛を櫛で撫附け居る、源四郎逆熊の鬘、着流しにて兩人よろしく向うを見て、

お玉　源さん、
源四　お玉、
お玉　今の船に乘つて居たのは、
源四　敷島が客の十三郎。

お玉　とんだ話しを聞くものだね。（ト木遣崩しの合方になり、）どうで一度は知れようと、思つて居たが止められず、身の用心の出來ねえのが、色と盜みの二道に、終にやあ心の調子が替り、二階もしんと引け過ぎから、彈く二上りに浮氣になつて、圍ひで寐たも度重なり、亭主のばちに皮よりも今では其の身の破れとなり。

源四　この深川の砂村の、玄伯といふ藪醫者が、おれが以前の友達に惡いことにやあ拔目なく、匙の廻る男だから、身の相談に出掛けて來たが、田圃道で知れにくゝ、まご〳〵歩いた草臥休め。

お玉　この辻堂の緣端で、吸附煙草もこれまでは人目を忍ぶ二人が中、それも封頭顯はれて、お爪婆アを道連れに、二人家を追出され、急に困つて洗濯屋の狹い二階で一夜を明かし、とつけり寐ない所から。

源四　昨夜の疲れで睡氣がさし、臂を枕に辻堂で隣知らずにゆつくりと、とんだ夢を見たところ。

お玉　寐耳へはひつた人聲に、狐格子の間から覗いて見れば土手下へ、もやつた船の五平次は、知らねえ人だが船頭は、內の抱への誰袖が兄の熊故知つた顏。

源四　とりわけ客の十三郎に二人が逢つちやあ面倒ゆゑ、出るにも出られず寐て居たが、葛籠へ入れた敷島の死骸がばれた上からは、うつかり爰にやあ居られねえ。

お玉　幸ひわつちが以前の客主鈴さんが、領分の府中とやらに居なさるから、頼つて行つて世話になり、樣子がよけりやあ四六見世でも、叩いて見ようぢやアあるめえか。
源四　いや、其の相談にやあ乘りにくい。
お玉　なに、相談に乘られないとは。
源四　あの主鈴さんは玉苗時分、熱くなつて來た客人、それを頼つて行かうといふのは、譬にもいふ燒棒杭、油斷のならねえ話しだからよ。
お玉　ほんにお前も泥水を呑んだ人のやうにもねえ、わたしのやうな莫連でも惚れて居るのが此方の附目、自前稼ぎをする心で、一晩位は自由になる氣さ。
源四　それが何よりけんのんだ、えつちらおつちら府中まで、送つて行つて取られちやあ、二度と再び出來過ぎたこんな女房は持たれねえ。
お玉　その氣休めが上手だから、わつちやあ苦勞でならねえよ。
源四　なに、苦勞でならねえとは。
お玉　世間の娘や女房が、いつそやれこれ言ふからさ。
源四　そんな株は親父から、讓つて貰つた覺えはねえ。

お玉　なに、ねえことがあるものかね。
源四　あるなら金で買ひてえものだ。
お玉　賣つてあげるから金をお出し。
源四　それ、即金で五十兩。（ト懐の財布から五十兩包み出す。）
お玉　おや、此金は何うしたの。
源四　お爪婆アが後の月、枕搜しで取つた金、遣手部屋の天井へ隱して置いたをこつそりと、昨夜おれが卷き揚げたのだ。
お玉　ほんにお前も何時の間に、そんな太え氣になつたのだ。
源四　みんなお前に仕込まれたのだ。
お玉　おやまあ、呆れもするよ。
源四　いや、其の呆れるのはお前の身の上、以前は足利眤近で何百石といふ石取のお孃さんの身の果てが、お玉といふ名に三浦屋の、妲妃々々と名に呼ばれ、人をば化す古狐。
お玉　斯ういふ身性になつたのも、三浦に緣ある上總無宿、源公といふ髮結さん、襟を剃つて貰つたのが足となつて屋敷を逃げ、終には親の勘當受けお前の爲めに苦界へ沈み、種々の惡事をなすのが元。

源四　身の殺生と知りながら、石より堅い敷島に枕捜しと毒氣を吹ッ掛け、飛鳥落ちるおいらんを、以前はひつじ(執事)の源公が到頭責めて往生させ、
お玉　責場の羽目を引ッぺがし、十三を慕つて逃げたとこしらへ、葛籠に入れてどんぶりと、
源四　海へ流してしまつたは、その古なら安倍の晴明、
お玉　當時流行の本國堂でも、こればッかりは知れまいと、
源四　思つた死骸を知られたからは、
お玉　隱した尻尾の出ぬうちに、
源四　那須野にあらぬ武藏野へ、
お玉　宙乘りよりか飛のりの、
源四　駕籠で飛ばして夜通しに、
お玉　府中を目當に、
兩人　いゝふけようか。(ト寺鐘、かすめて波の音になり、)
お玉　おや、今の間に暗くなつたね。
源四　もう暮れる時分だらう。

お玉　暮れちやあ道が知れねえから、暮れねえ内に行かうね。(ト源四郎下りようとして、)

源四　うつかり爰へ脱いで置いて、履物を取られたか、爰等にまだ居るか知らぬ。

お玉　これも當時の流行ものだが、跣足で行くのは恐れるね。(ト源四郎額に附いて居る草履を見て、)

源四　おつとある〳〵、鬼子母神さまへ奉納した、額へ附けた草履がある、是れを履いて行から。

　　ト額の草履を取る。

お玉　これを履いちやあ勿體ないよ。

源四　なに、構ふことがあるものか。(ト思入あつて手を見て、)えゝ、額の埃で手を汚した、どれ、洗つて來ようか。

　　ト一ツ鉦凄き合方になり、お玉は帶をしめ支度をする、源四郎は土手へ下り、水にて手を洗はうとして、びつくりしてふり拂ひ、ぱつと本水かゝり、

　誰だ、おれの手を引張るのは。

お玉　源さん、何だえ。

源四　水の中で、手を引張つた。

お玉　河童ぢやアないかえ。(ト源四郎又洗はうとして、)

源四　えゝ、又引張りやあがる。（ト水の中を見る、波の音になり、セリの穴より誂への葛籠浮上る、源四郎見て。）や、この葛籠は覺えのある、家の印を引ッぺがして、海へ流した古葛籠。

ト源四郎葛籠を引き寄せ、印の跡を見る、お玉ぞつとせし思入にて、

お玉　あゝ、いやな風が吹いて來た、身の毛が立つほどぞつとする。

ト辻堂の内へはひり、狐格子をしめる、これと一緒に源四郎は葛籠の紐を解き

源四　もう一月の上になるから、死骸は腐つてしまつたらう。（ト蓋を明ける、兩窓をおろし、一つ鉦にて源四郎葛籠の内を見て。）や、まだ生々しい、此の死骸。（ト髻を持つて引き上げる、敷島殺されし時の薄色の裝にて目をねぶり、半身出る。）恨みの念が殘つてか、死んだ時に少しも替らず、こりやアうぬは迷つたな。（ト寐鳥になり、敷島眼を明き、源四郎をきつと見て。）

敷島　えゝ恨めしい源四郎、よくも此の身に濡衣着せ、非業な最期をさせしよなあ。

ト敷島恨めしさうに源四郎の顏をきつと見る。

源四　なに、源四郎が恨めしい、恨めしくば取り殺せ、腕に力はねえけれど肚胸で賣出す敵役、憎まれるのは合點だ。さあ、取殺すなら殺して見ろ。（ト手を放し、顏へ唾を吐き掛ける、敷島顏をづつと出し。）

敷島　恨みの一念この土に止まり、取り殺さいでおくべきか。

源四　えゝ、うぬ等に殺されて、（ト葛籠の蓋をしやんとなし、）つまるものか。
ト葛籠へ片足踏掛け、きつと見得、此の時辻堂の横手の窓より、お玉顔を出し、

お玉　源さん、何だえ。
源四　葛籠へ入れてぶち込んだ、敷島の死骸が流れて來たのよ。
お玉　早く突き出しておしまひな。
源四　むゝ、合點だ。
ト側にある水死人の卒堵婆を取つて葛籠を突き出す、波の音にて下手へはひる。雨車になり、

お玉　おや、ばら〳〵降つて來たよ。
源四　丁度葛籠をぶち込んだ、あの晩の雲行きだ。
お玉　たんと降らねえうちに。
源四　ちつとも早く出掛けよう。（ト空を見て、）こいつは今にどつと來るわえ。
お玉　傘はなし、困るね。
源四　爰に菰がある、是れを引ツ掛けて行かう。（ト兩人手拭を冠り、）
お玉　何だか眞闇だね。（ト窓より引込み、狐格子を明け、手拭を冠りしお玉の吹替さぐりながら出る。）

源四　危ねえ、手を取つてやらう。

ト源四郎吹替の手を取つて下へおろし、二人して菰を引張り行かうとする、此の時ばつたりと音する、源四郎吹替を圍ひ窺ふ、下手の藪を押分け、十三郎逆熊好みの鬘、着流し大小雪踏にて出で兩人を窺ふ。時の鐘きびしく、忍び三重模様の合方になり、源四郎吹替に菰を着せ、手を取り行かうとするを、十三郎立ち塞がりちよつと立廻り、此の時下手へもやひの解けたる棹の附きたる小舟流れて來る、土手の上にては三人立廻りあつて、上手に十三郎下手に源四郎、眞中に吹替裏向にて見得、これより葛西念佛の間へ狸囃子を冠せし誂への鳴物になり、下手よりお爪遣手にて尻端折り、燒印のある雪踏を持ち、窺ひながら出來り、此の中へはひり源四郎を尋ねる心にて、探りながらだんまり模樣の立廻りよろしくあつて、ト吹替、土手より船の內へすべり落ち、其のまゝ菰を冠り、俯伏になり居る、源四郎續いて船へ飛び込まうとする、お爪捕へようとするを十三郎隔てる、此の時大ドロ〳〵になり、上手柳の立木へ陰火燃え、敷島の亡靈出で源四郎を引戻す思入、源四郎後髮を引かれる心にて、たちたぢと戻り、十三郎に行當る、爰へお爪割つて入り、ちよつと立廻つて上手にお爪、下手に源四郎、十三郎眞中にて敷島を見上げ、

十三　やゝ、柳の下にあり〳〵と、見えし姿は正しく敷島。

お爪　さては魂魄、

源四　中有に迷ひ、

敷島　恨みを晴らさでおくべきか。

　ト お爪源四郎上下へ逃げ行くを、れんり引に引き戻される、十三郎これを見て、

十三　はて、執念深い、

　ト此の時非人傘出で、うぬと十三郎に組附くを、拔打ちに浴びせる、敷島白刃に恐れる思入、これと一時に、お爪上手の土手からすべり落ち、卒堵婆にすがり上を見上げる。源四郎は下手の船へ飛び込み棹を突ッ張る、十三郎刀を引き、傘見事に轉る、これを木の頭

女だなあ。

　ト大ドロ〳〵にて、敷島柳の木へ消える、十三郎は刀の糊紅を拭ふ、お爪はほつと思入、源四郎は船に乘り、棹をさし花道附際まで行く、此の模樣よろしく大ドロ〳〵にて、

　　ひやうし　幕

　ト幕引附けると波の音にて、源四郎ほつと思入あつて棹をさし、花道よき所まで行き、艫の方へべつたりとなり、やれ嬉しやといふ思入にて、手拭を出して汗を拭ふ、此の時お玉菰を刎ねのけ、

お玉　源さん、どうした。

源四　どつしたどころか、がつかりした。

お玉　意氣地のねえ男ぢやあねえか。

源四　それだつて出たものを。

お玉　何だ。

源四　幽靈がよ。

お玉　それがお前怖いのか。

源四　怖くねえこともねえ。

お玉　それぢやあ圓朝の話しは聞けねえよ。（トこの時薄ドロ〳〵にて船の中へ陰火燃える。）

源四　それ、其處へ陰火が燃えた。（トお玉見て、）

お玉　煙草入を貸してくんな、陰火を借りて一服吞まう。

源四　いや、呆れたものだ。（ト叺煙草入を出すをお玉取る、これにて陰火消え、お玉立上り、）

お玉　さあ、ぐづ〳〵せずと早く遣んねえ。（ト舳の方へ腰を掛け、銜へ煙管にて憎體に摺火打を打つ。）

源四　いや、亭主遣ひの惡い女だ。（ト源四郎立上り、棹を取直す。）

お玉　えゝ、じれつてえ、さつぱり附かねえ。

トちよん〳〵と火を打つ音に合して、波の音を打込み、佃になり、源四郎棹をさし、お玉煙草を呑みながら花道へはひる。誂へ波の音にてつなぎ、直に引返す。

五幕目　五平次内の場

〔役名〕＝藤代屋十三郎、漁夫五平次、家主因業與九兵衛、刀屋手代與三郎、五平次悴五郎吉、船頭熊藏、尼寺の比丘妙珍。敷島の亡靈、三浦屋の誰袖、熊藏女房お長、妙珍弟子妙眞實は敷島娘お和歌等。

（漁夫五平次内の場）＝本舞臺三間の間常足の二重、向う暖簾口、上手一間間平戸の戸棚、下手鼠壁、上の方一間後へ下げて中窓の板羽目、下の方一間牡蠣殼を上げし屋根、腰障子に貝の畫あり、汐むき網船と記し、いつもの所門口、下手よき所に柳の立木、この前に土手板、總て深川洲崎漁夫町五平次内の體。平舞臺よき所に、五郎吉袷の上へ織色の筒袖、紺の腹掛三尺帶にて睾丸火鉢を控へ、盤臺へ蛤を入れ、これを剝いて居る、下手に○△同じく筒袖のこしらへ、魚賣りにて煙草を呑み居る此の見得波の音、ちよいと〳〵の唄にて幕明く。

五郎　コウ勝や、手前昨夜元地へ行つたさうだな。

○　花川戸の市が引けて、それから芝居へ飛び込んだが、面白えのではねまで居て、日が暮れて遲くなつたから、廓へ泊りとやらかした。

五郎　さうして芝居は、どつちへ行つた。

△ どこへ行くものか、一丁目よ、重忠の討死から見たが、今度するお化の出る狂言は、何といふ狂言だな。

五郎 手前達はあれを知らねえか、ありやア柳橋がお得意で話す、敷島十三の怪談よ。

○ はあ、それぢやあいつか仲町の、源太兄イの寄席で聞いて來た、敷島の怪談話しか。

△ おい兄イ、いつの間にか一丁目へ、抜けがけをして行つたの。

五郎 まだ行つちやあ見ねえが、一丁目へ商えに行つて、番附を貰つて持つて居るから、それで狂言を知つて居るのよ。

兩人 番附があるなら見せねえな。

五郎 火鉢の引出しにあるから出して見ねえ。（トこれにて○箱火鉢の引出しから淨瑠璃觸を出し）

○ おゝ、あつた／＼、どれ讀んで見ようか。（ト開き見て、）「淨瑠璃名題、たゞ思ひ寐のうたゝ枕に櫻雨花契雲、淨瑠璃太夫淸元延壽太夫――」（トよろしく讀んで、）それぢやあ昨日聞いたのが、あれが淸元の延壽太夫か。

△ 道理でいゝ聲だと思つたが、家元ぢやあ其の筈だ。

○ そりやさうと此方の内の、ちやんは今日は仕事に行つたか。

五郎　昨日からの約束で、藤代屋の若旦那と、今朝早く沖へ出たが、熊公も一緒だ。
○　それぢやあ熊が一緒に行つたのか、何にしろ此の日和ぢやあ、今日は漁はあるめえよ。
△　おゝ、熊と言やあ、あいつの妹お袖ッ子に昨夜逢つたが、兄イに是非來てくれるやうにと、言傳を頼まれて來た。
五郎　お袖は昨夜見世に居たか。
○　昨夜見世に出て居たが、内に居る時分にやあ、色は白かつたが赤ッ毛で、ぼうた布子を着て居たから、左のみにも思はなんだが。
△　さうよ、汐水よりやあ泥水がすつかりと染込んで、めつぽふけえいゝ女になつたが、あれが馬士にも衣裳といふのだ。
○　コウ兄イ、何ぞ奢んねえ。
五郎　なに、おごれとは。
○　どんなに昨夜お前のことを、惚けて居たか知れねえぜ。
五郎　惡く言つて居たが、聞いて呆れらあ。
△　どうして〳〵、惡く言ふどころか、あんまり手放しで惚けるので、おらッちも氣が惡くなつて、

詰らなくなつてしまつた。
五郎　さうして昨夜は何處へ行つた。
○　伏見町の阿魔のところへ、久し振で行つた所が、生憎とお斷りさ。
五郎　それぢやあお客にならなんだか。
△　なあに、あんまり客になり過ぎて、向うの女がお客さまよ。
五郎　そいつは大しくじりだ。
△　何にしろ兄イ、昨夜の入れ合せに、何ぞ奢んねえ。
五郎　おごれと言つたつて、今日は留守番だ、父さんが歸つて來たら遊びに出るから、家に待つてゝくんねえ。
○　又すつぽかしぢやあねえか。
五郎　なに、後にきつと行くよ。
△　それぢやあ家に待つて居るぜ。（ト言ひながら兩人門口へ出て、）
○　どれ、洲崎へ行つて茶でも呑んで行かう。（ト右の唄にて兩人下手へはひる。）
五郎　詰らねえ奴が來やあがつて、暇潰しをした、父さんが歸ると又小言だ。どれ、もう一升ばかり剝

いておかう。

ト替つた合方になり、五郎吉は蛤を剝いて居る、花道より妙珍黑の頭巾、鼠の着附、墨衣、脚絆草鞋比丘尼のこしらへにて、網代笠を持ち木魚を叩き、後より和歌野、坊主鬘小さな笠を冠り、同じく鼠の着附、腰衣、草鞋にて木魚を叩き出來り、

妙珍　西方二世功德無量道南無阿彌陀〻〻〻〻〻〻。

和歌　南無阿彌陀〻〻〻〻〻〻。（ト花道へ留り、）

妙珍　これ妙眞や、そなたはまだ歩き馴れないから、嘸草臥れたであらうが、向うの家へ行くと休ませるから、精出して歩いたがよいぞ。

和歌　あい〳〵、わたしやちつとも草臥やしませぬ。

妙珍　おゝ、段々歩き馴れると草臥れなくなる、西方二世功德無量道。

兩人　南無あみだぶ〳〵。（ト木魚を叩きながら舞臺へ來り、）

妙珍　はい、今日は。

五郎　おゝ妙珍さんか、大層今日は遲かつたね。

妙珍　子供を一緒に連れて出ますと、御修行に手間取りますから、どうしても遲くなります、さうして

五郎　今日はお前一人で、お父さんはお留守かえ。

妙珍　父さんは今朝漁に出たが、奥に熊の女房が來て居るから、まあ此方へ這入んなせえ。

五郎　それぢやあ奥にお長さんが。（ト妙珍思入あつて懐から文を出し、）もし五郎さん、昨日元地へ御修行に行つたら、あの子の所から文を頼まれたよ。（ト五郎吉に渡す）

妙珍　こりやあ大きにお世話だつた、又詰らねえことを言つて寄越したのだらう。

五郎　さう言はずとつくりと、讀んで上げておくんなさい、辛い勤めの憂さ晴らし、詰らないことでもお前の所へ斯うして書いて寄越すのが、何よりの樂しみさ、それを察して御修行に、廓へ行く度毎に、あの子に逢つてはお前の所へ言傳でもないかと、わたしの方から聞いてやるのも、是れもやつぱり後生の爲め、「願に喜知六平等施一切南無あみだぶ〳〵。」

ト妙眞も一緒に木魚を叩く、この内五郎吉文を見て、

五郎　何ぞ譯があることだらうが、急に住替に出てえから、兄貴の熊を寄越してくれろ、おれの所へ頼んで來た。

妙珍　いえ、あの三浦屋のことに附いては、種々お話しがござりまする。（ト此の時奥にて、）

お長　五郎さん〳〵。（ト呼ぶ。）

五郎　熊の女房が爰へ來たから、何も言つちやあいけねえよ。

妙珍　そこに拔りはございませぬ。南無あみだ〳〵。

ト木魚を叩き居る、奥よりお長結び髮、前垂襷がけにて出來り、

お長　おや妙珍、よくお出でだね。

妙珍　これは熊さんのお上さん、何時もながら、甲斐々々しく、お洗濯でございますか。

お長　いえ〳〵今日は此方の家に、志しの佛があつて、お茶の御ぜんを炊いてくれと、親方から頼まれて、手傳ひに來て居ますのさ。

妙珍　それは御苦勞さまでございますな。

お長　お前が修行にお出であつたら、お經を上げて貰つてくれと、親方が言つて行きなすつたから、何もないがお經を上げて、御膳を喰べて行つて下さんせ。

妙珍　それは〳〵有難うございまするが、御修行先から頼まれまして、此の先きの横町までちよつと行かねばなりませぬが、行つて參つてもよろしうございませうか。

お長　あ、よいとも〳〵、ゆつくりと行つて來なさんせ。

妙珍　左樣ならば、行つて參つて、御囘向いたしますでございまする。

お長　そんなら必ず待つて居るぞえ。

妙珍　はい、直に行つて參りまする。(ト妙眞を見て、)もしお長さんえ、これを連れて參りますと、道に手間が取れますから、どうぞ行つて參りますまで、此方へお置きなされて下さりませ。

ト妙眞をこちらへ連れて來る。

お長　ても可愛らしいお小僧さん、此の子はお前のお弟子かえ。

妙珍　はい、妙眞と申しまして、預りものでござりまする。

お長　おや、さうでござりますか。

妙珍　これ妙眞や、わしは此の先の横町まで、ちよつとお使ひに行つて來るから、其の内こちらで待つて居や。

妙眞　あい〳〵。(ト冠りし笠を取る、此の内五郎吉蛤を剝いて居て、思はず妙眞を見て、)

五郎　や、この子は何處かで、見たやうだが。

お長　お前、この子を知つて居なさるのかえ。(ト五郎吉思入あつて、)

五郎　おゝ、たしか此の子は三浦屋の。(ト言ひかけるを、)

妙珍　あゝもし、其の三浦屋の事は、どうぞ言つて下さいますな、此の子の事ではいろ〳〵と、お話し

がござりますが、何れ後程參りまして、ゆつくりとお話しをいたしませう。これ、おこなしく待つて居や。

妙眞　あい〳〵。

お長　そんなら後に、妙珍さん。

妙珍　はい、直に行つて參りまする。南無阿彌陀佛々々々々々々、

ト右の合方にて木魚を叩きながら下手へはひる。お長妙眞を見て、

お長　どういふ譯か知らねども、此の位な時分から、尼寺へ預けられ、斯うして修行に歩くといふは、可愛さうなことぢやあないかね。

五郎　おい坊さん、お前はたしか三浦屋の、禿ツ子ぢやあなかつたか。

妙眞　あい。いゝえ、さうではござんせぬ。

五郎　何でも禿に違ひないが、今もあの妙珍さんが、口留めをして行つたからは、言ふなとでも言つてあると見える。おい坊さんや、妙珍さんが歸るまで、爰に居るのも退屈だらうから、その横丁を上へあがると直洲崎の土手だから、潮干の人でも見て來ねえ。

妙眞　あい、有難うござります。

お長　然しあんまり遊びにほうけて、海へ落ちぬやうにしなさんせ。

妙眞　あい〳〵、そんなら行つて參ります。

五郎　さあ〳〵、早く行つて遊んで來ねえ。

妙眞　あい〳〵。（トやはり下手へはひる。）

五郎　あの小坊主は、三浦屋の敷島の禿だが、どうしてあんな坊主になつたか。

お長　妙珍さんにこつくりと、譯を聞いたら知れようわいな。

ト元のちよいと〳〵の唄になり、下手より與九兵衞、着流し當番つなぎの半纏、少し更けたる家主のこしらへ、下駄がけにて出來り、

與九　いや、待たるゝより待つ身になるなと、さて〳〵、待遠なことではある。今日爰の五平次の内に志しの佛があつて、茶飯が出來ると聞いたゆゑ、今朝ツから附込んで、もう出來るか〳〵と百度參りをして居るが、もう八ツ下りの子は疾うに歸つたに、今に迎ひにも來ないのは、まだ料理ごしらへが出來ないか、但しはおれを出し拔いて、先へ喰つてゞもしまつたか、何でも今度は居催促に、坐り込んで喰はねばならぬ。（ト門口へ來て、）さあ〳〵、來ましたぞ〳〵。

ト門口を明け内へはひる。

五郎　これは大屋さん、又お出でかえ。
お長　いえも、お呼び申します程の事でもございませんのに、今朝程から度々とお足を運ばせ申しまして、お氣の毒でございますわいな。
與九　いや〳〵、其の心配には及ばぬ〳〵。（ト下に居て、）幾ら足を運んでも長屋内の事なれば、裾もそんなに切れもしまひし、又下駄も左のみ減りもしまひ、たゞ減つたのはおれが腹ぢや、度々足を運んだ替り先づ一度を一杯の割で十四五杯もよばれますから、其の氣で馳走して下さい。
五郎　いや、如何に生れが信濃だつて、あんまりな喰ひぬけだ。
お長　あこれ、（ト五郎吉を目で叱り、）これは〳〵大屋さまには、お茶の御膳がお好きと見えます、おいしくはございませんが、どうぞ澤山あがつて下さりませ。
與九　いや、おそらく嫌ひなものはなく、何でも好きな其の内にも、茶飯と聞いては目のない程大好きぢや。
五郎　それぢやあ毎晩賣りに來る、餡掛豆腐の茶飯屋は、大方お馴染でございませうね。
與九　いや、あの茶飯は決して喰はぬ。
五郎　そりや又なぜでございます。

與九　はて、錢が出るから喰はないのだ。

五郎　いや、しみッたれなことを言ひなさる、僅か百か二百出せば、豆腐で茶飯が喰へませうに。

與九　どうして〳〵、百はおろか三文でも錢は出さぬ、そも〳〵信濃の雪國から、冬奉公に鎌倉へ出て僅か二兩か三兩の給金を溜め込んで番太郎の株を買ひ、草履草鞋のその外には、冬は燒芋春は又ほかん〳〵の白酒に、夏は夜見世の冷水賣、寐る目も寐ずに金をこしらへ、到頭場末の家主とまで取りあげた此の與九兵衞、假令百の錢にもせよ、遣つてなるものか、そこで二十軒からある長屋うちを、朝から匂ひを嗅いで歩き、菜の出來た家へしけこみ、一杯づゝ貰ふゆゑ、一年三百六十五日菜を拵へたことがない、玆が家主の役德ぢやて。

お長　又大屋さまの御常談ばかり、然し、其のやうになされましたら、しつかりお金が溜りませう。

五郎　それぢやあ今日の納豆汁も、嗅ぎ當てゞござりますね。

與九　察しの通りかぎ當てゝ來たが、長屋うちを嗅ぎ歩くも、段々と評判になり、此の頃では惡い癖に旨い物を拵へる時は、さつぱり匂ひをさせぬゆゑ、久しく菜に有り附かず、鹽ばかり嘗めて居たが、擂鉢の音で足を附け、首尾よく嗅ぎ當てた上からは、納豆汁とのつぺいを、四五日ぶりも喰はねばならぬ。

五郎　いや、呆れ返つたしみツたれだ。

お長　是れはしたり、又そんなことを。（ト押へて、）いえも、何をいたしますにも、人手はなし、急拵へのことゆゑ、きがら茶でござりますが、よろしくば澤山上つて下さりませ。

與九　なに、きがら茶だ、それは何より結構だ、たゞの茶飯と事替つて、鹽氣があつて別段だ、これこれお長どの焦でもあるなら二ツばかり、大きく結んで腹塞げに、先へ喰はしてくれまいか。

五郎　いや、意地の汚ねえことを言ふな。

お長　いえ、焦も少しはござりましたが、もう何もかも出來ましたれば、直に奥へお出でなすつて、たんと上つて下さいまし。

與九　そんなら、もう支度がよいとか、やれ〳〵それで安心した。

五郎　どれ、わつちが給仕をして上げよう。（ト盤臺を片附け、立上るゆゑ、）

與九　これ〳〵、決して給仕には及ばぬ、勝手知つたる此方の家、手盛りでやるから構はつしやるな。

お長　いえ〳〵、それでは失禮でござります。

與九　なに、失禮が入るものか、少々天窓をはられても、此方に徳の附くことなら、我慢をする此の與九兵衞、決して給仕には及ばぬぞ。

五郎　さう言はずと、わつちに給仕を。

與九　はてさて、それに及ばぬと言ふに。

ト五郎吉を留める、右の唄にて與九兵衛先きに五郎吉附いて奥へはひろ、此の唄にて、花道より前幕の十三郎先きに、五平次投網を肩へかけ出來り、花道にて、

十三　これ〳〵五平次、今まで一緒だと思つて居た熊藏が見えないが、何處ぞ廻り道でもしたのか。

五平　へい、熊の野郎でござりますか、あれはさつきお話し申した、片袖を掘出すので、今餌屋へ熊手を借りに遣りました。

十三　それはよくやつてくれた、少しも早くその袖を、掘出して貰ひたいのだ。

五平　いえ、熊が歸れば直でござります。（ト右の唄にて兩人舞臺へ來り、）さあ、若旦那おはひりなされませ。（ト兩人内へはひる。）

お長　おや若旦那様、もうお歸りでござりましたか、大層お早うござりましたな。

十三　いや、今日はどうしたことぢややら、雜魚が一尾取れぬゆゑ、早く切りあげて歸つて來ました。

お長　なごゝ裏をおつしやつて、大層お漁があつたのではござりませぬか。

五平　いや〳〵若旦那のおつしやる通り、海老ツ子一尾かゝらねえ、こんなこともねえものだ。

お長　それは散々でござりましたな。（ト此の内十三郎上手へ住ひ、お長煙草盆を出し、）もし親方、内の人はどうしました。
五平　おゝ熊か、熊は今そこでおつな年増と話しをして居た。
お長　え、女と話をして居ましたえ。
五平　家へ歸つたらしつかりと、言つて遣るがいゝ。
お長　あい、思入れ言つてやりませう、あんな助平な人はござりません。
ト右の合方にて、花道より前幕の熊藏、餌掘の熊手を提げて出來り、直に門口へ來て、
熊藏　親方、借りて來ました。
五平　おゝ御苦勞々々、直に其の手で掘つてくれ。
熊藏　あいあい。（ト合方にて柳の下を掘る、お長門口へ來て、）
お長　熊さん、お前どこへ行つて居たのだ。
熊藏　どこへ行くものか、餌屋へ熊手を借りに行つたのだ。
お長　それに何も、年増と話しをしなくつてもいゝぢやあないかね。
熊藏　誰が話しをするものだ。

お長　それでも親方が、さう言ひなさいましたもの。

熊藏　又そんなことを言つて、手前に氣を揉ましたのだ。（ト此の内熊藏掘つて居る、）

五平　もし若旦那、あんな野郎でも亭主だと思やあ、燒餅を燒きますぜ。

十三　そこが夫婦の情愛だ。いや、まだ袖は出ないかな。（ト熊藏誂への櫻の紋附きし片袖を掘出し、）

熊藏　おい、親方、掘出しました。（ト片袖を出す、五平次取つて十三郎の側へ持つて行き、）

五平　若旦那、これでござります。（ト十三郎手に取り、よく〳〵見て、）

十三　土に埋もれ染色は、見るかげもなく替り果てたが一輪櫻の紋附は、おれが好みで去年の暮、こしらへ遣りし覺えの片袖。

五平　そんなら是れがあなたのお馴染、あの三浦屋の敷島どのゝ。

十三　如何にも、流れに楓葉の模樣が裾に附いて居たといひ、この紋所が慥な證據。

お長　その三浦屋とおつしやるのは、お前の妹おそでさん。

熊藏　おゝ、あれが行つて居る三浦屋だ。

五平　つひに逢つたことはないが、全盛なおいらんだと噂に聞いた敷島どのが、どういふ譯で非業な死を遂げ、葛籠へ入れて流されたか、合點のいかねえことだわえ。

十三　如何にも合點の行かぬこと、まあ一通り聞いてくりやれ。(ト誂への合方になり、)定めて是れまで新助どのゝ緣に繋がるこなたゆゑ、貰ひしおみつを嫌ひしなどゝ、わしを恨んで居たらうが、實はおみつをお袋が貰はぬ先きから馴染にて、假初ならぬ七年越し、しかも今年六ツになる子まである二人が中、年が明けたら夫婦にならうと互ひに起請を取交し、指折り算へし年月も、もう三月にて四月目には年季も明けて出られる體に、待ちに待つたる其の處へ、忘れもせぬ後の月二十五日のことであつたが、其の三浦屋から若い者が、昨夜夜更けて敷島が駈落をいたしましたが、大方こちらへ來て居りませうと、届けて來たゆゑ案じられ、心當りを尋ねたれど何處へ行つたか行方知れず、今日はけふはと思ふうち、四五日經てど便りもなきゆゑ、さては外に男があつて子まである二人が中を見捨てゝ逃げたに違ひない、言はうやうない不實ものと悔しく思つて居る所へそれ見た事かとお袋はじめ、親類中に言はれるのが癪に障つて一月ばかり外へも出ずに寐て居たを、又お袋が案じ過し、ちと氣晴らしに網にでも行つたがよいと勸められ、今日爰へ來たそのお蔭に駈落をした敷島の行方は知れたが其の樣な、非業な死をば遂げたのは、何ぞ仔細のあることならん、此の手蔓を聞いたらば今に樣子が分るであらう。斯ういふ中の敷島ゆゑ、おみつを嫌ふといふではないが、女房に持たぬを許して下され。

五平　いえも、其のお子のある事も承はつて居りますから、あれを女房になされませぬは御尤もでござりまする、おみつも年は行きませぬが、そこらは承知して居りますから、決してお恨みには存じませぬ。

十三　さう言はれては十三郎、まことに面目次第もない。（ト俯き面目なき思入。）

五平　何は兎もあれ、分らぬは敷島どの丶非業な最期、三浦屋であつたことか、但しは途中であつたことか、どうか手蔓を聞きたいものだ。

熊藏　もし若旦那え、今おつしやつたそのお子さんは何處にお出でなされまする。

十三　その子は丁度女ゆゑ、禿に仕立て敷島が手許に置いたが、これも其の夜駈落したゆゑ、生死の程も知れざれば、實に寐た間も忘られぬ。

熊藏　左樣なら其のお子は、禿になつてござりましたか。（ト お長思入あつて、）

お長　もし熊さん、今尼寺の妙珍さんが、可愛らしい小坊主を修行に連れて來なさんしたが、慥三浦屋の禿たと、いふやうな事でござんしたが、もしやそのお子ではあるまいかね。

熊藏　そりやア何とも言へねえ。

十三　耳よりな話しだが、さうして其の子は何歲ぐらゐであつた。

お長　はい、六ツか七ツでござりまする。
十三　どうか其の子に逢ひたいものだが、逢ふことは出來まいか。
お長　只今に是れへ參りますから、其の子をお目に掛けませう。
熊藏　安請合ひに請合つて、きつと來るかえ。
お長　今日はその片袖の、いはゞ忌日に妙珍さんに、お經をあげて貰ふ約束、きつと參るに違ひござりませぬ。
十三　來たら直に逢はしてくりやれ。
お長　畏りましてござりまする。
五平　何にしろ其の片袖が、敷島さんと極つたからは、お寺で附けて貰ひました戒名もござりますから、埃だらけぢやあござりますが、奥の佛前へお出でなすつて、お念佛でも申して下さりませ。
十三　おゝ、何といふ戒名だか、それも見たし、菩提の爲め、回向をしてやらう。
熊藏　よく淨瑠璃にもありますが、千部萬部のお經より、若旦那の一遍の、その御回向が何より追善。
お長　草葉の蔭でも敷島さんが、嘸お悦びでござりませう。
十三　そんなら尼御の爰へ來るまで、奥へ行つて回向しませう。

五平　それお長や、御案內申せ。

お長　あい〳〵、さあ若旦那樣、お出でなさいまし。(ト十三郎立上り、)

十三　どれ、囘向して遣りませう。(ト唄になり、十三郎先きにお長附いて奧へはひる。)

熊藏　親方、わつちア一風呂はひつて來やすよ。

五平　若旦那がお歸りを、送つて貰はにやあならねえから、早く歸つて來てくれ。

熊藏　ほんの烏の行水、飛びこんで來るばかりだ。

トちよいと〳〵の唄にて熊藏下手へはひる。五平次綱を片附け居る。此の唄にて、花道より與三郎羽織着流し、雪踏風呂敷包みの菓子折を提げ、出來り花道にて、

與三　今日は二月の廿八日、まだ時候は寒いけれど、天氣が好いのでちらほらと、洲崎の櫻が咲いたと見え、汐干に人が出る樣子、どうでも春は春だけぢやな。(ト右の唄にて舞臺へ來り、)ちと、御免下さりませ。

五平　はい、どなたでござりまする。

與三　五平次どのは、お內でござりますか。

五平　はい、五平次は內でござりますが。(ト言ひながら思はず顏見合せ、)や、あなたは藏前の與三郎樣。

與三　これはお内でござりましたか。丁度よい所へ參りました。

五平　汚穢しうはござりますが、先づ是れへお通り下さりませ。

與三　左樣なら、御免下さりませ。

ト合方きつぱりとなり、與三郎内へはひり、上手へ住ふ、五平次煙草盆を出し、

五平　お茶は惡うござりますから、差上げませぬ。

與三　必ず構つて下さりますな。

五平　いえもう、お構ひ申したうても、御覽の通りでござりますから、御免を蒙ります。

ト與三郎思入あつて、

與三　さて早速ながら、此の間は新助の緣に依り、五平次どの、此方にまで一方ならぬ世話になり、しみ〴〵禮も言ひませぬが、三浦屋で失うた五十兩の金も調ひ、事故なく刀屋へ再び歸參の叶ふといふも、みんな此方衆のお蔭ゆゑ、死なうと思つた命も助かり、この大恩は實のこと、死んでも忘れはいたしませぬ。

ト與三郎手を突いて禮をいふ。

五平　是れはしたり與三郎樣、何のお禮に及びませうぞ、此の五平次が妹の連合、新助がお主なれば

縁に繋がる私も、申さば御家來同然ゆゑ、お世話いたすは當り前、それを其のやうにおつしやつては、却つて迷惑いたしまする。まあ、お手をお上げなされて下さりませ。

與三　いや〳〵、さういふ譯ではない、新助は元わしが親父に使はれたものなれば、少しは恩もあるけれど、こなたに仕置いたこともなく、あのやうな世話になり、このやうに言はうとも、詞で禮は盡されませぬ。

五平　さうおつしやつては甚だ迷惑、もう其のお禮はおつしやつて下さりますな。さうして今日は何方へお出でなされました。

與三　今日は砂村のお屋敷へ主人の用のあるを幸ひ、此方へ禮を言ひたさに、好んでわしが使ひに來たのは、此の間より其の折の禮に來ねばならぬけれど、主人へ歸つて間もなくに、見世を明けては濟まぬゆゑ、餘儀なく無沙汰になりましたは、どうぞ堪忍して下さりませ。

五平　まだそんなことをおつしやりますか、もうよい加減にして下さりませ。

ト與三郎風呂敷を解き、菓子折を出し、

與三　何ぞ禮をしたけれど、知つての通りの身の上ゆゑ、ほんの是れは心ばかり、茶受になとして下さりませ。（ト五平次の前へ出す。）

五平　これはまあ結構なお菓子を、有難うござりまするが、なぜこんな義理立てをなされます、まことにお氣の毒でござります。

與三　いや／＼、其のやうに言はれては、面目ない、ほんのお禮の印ばかり。

五平　どうして印ごころぢやあござりませぬ。（ト折をあけて見て、）これは深川で名代の船橋屋でござりますな、私も甘い物好きで、方々のをやつて見ますが、あそこの家くらゐ大きくて旨いのはござりませぬ、こりやまあしつかりと樂しめます。（ト戴いて側へ置き、）さうしてあなたは、是れから直にお店へお歸りでござりますか。

與三　いえ／＼、今お屋敷へ行きがけでござりまする。

五平　お出がけならお歸りに、ちよつとお寄り下さりませ。此のお持たせのお菓子を開き、お茶を上げたうござりまする。

與三　御用が早く濟みましたら、歸りにお寄り申しませう。

五平　必ずお寄り下さりませ。

與三　左樣なれば、五平次どの。

五平　お待ち申して居りまする。（ト與三郎門口へ出で、）

與三　ちつと空が曇つて來たが、どうか歸りに降らねばよいが。

ト唄になり、與三郎思入あつて下手へはひる、五平次殘り思入あつて、

五平　以前は藏前で一二を爭ひ、米屋の右に立つ家はないといはれた程の身上も、左り前になつては叶はず、お乳母育ちの若旦那が、今は手代の奉公人、氣の毒さうに此の菓子を、お出しなさるがおいとしい、然しお心が通じてか、志しの佛前へ何ぞと思つたお供物に丁度幸ひ初穗を上げ、跡は茶受けに若旦那へ。（ト此の内五平次折の蓋をあけて見る。奥より與九兵衛出掛り、これを見て、）

與九　五平次、旨さうだな。

五平　もう嗅いで來なすつたのか。

與九　ちよつと一ツ毒味をせうか。（ト取りにかゝるを留めて、）

五平　幾つでも上げますが、たゞはどうも上げられませぬ。

與九　何だと。

五平　これは一ツ五分づゝゆゑ、二ツあげれば一匁。

與九　三ツ喰へば一匁五分か。

五平　その勘定で幾つでも、喰い度いほど上りませ、店賃で差引きます。

與九　いや、錢が出ては眞平だ。

五平　さう言はずと、たつた一ツ。

與九　いや／＼、半分でも喰ひ度くない。

五平　此の鹿の子は旨さうだ。（ト折を見せる、與九兵衛喰ひ度き思入にて）

與九　むゝ、殺生な、蟲唾が走る。

五平　どれ、茶を入れて賞翫しようか。

ト五平次折を見せびらかす、與九兵衛口を開き、喰ひ度き思入、ちよいと／＼の唄にて、此の道具廻る。

（佛檀前夢の場）——本舞臺三間の間常足の二重、本緣附、眞中に瓦燈口、太鼓張りの襖、上手風雅なる佛檀、六字の名號、燒物の佛具、下手銀張りの袋戶棚、この下手簞笥本箱の書割、誂への短檠、三方伊豫簾を下し、上の方一間後へ下げて下地窓のある屋體の書割、上下に秋草の土手板、下の方黑板の塀、二階屋の淨瑠璃臺、伊豫簾をおろし、日覆より紅葉の釣枝、總て綺麗なる座敷の體。道具中程よりドロ／＼にて道具留る。とやはりドロ／＼にて、指金の蝶あちこちと飛び秋草の中へはひる。とドロ／＼打ち上げ、知らせに附き下手屋體の伊豫簾を卷あげる、爰に淸元連中羽織袴にて居並び、前彈きなしに、直に兩吟の淨瑠璃になる。

〽夢結ぶ千種の露に夜の蝶、翼交せし契りさへ昨日に替る今日の秋、

ト屋體の伊豫簾を三方巻きあげる、内に十三郎着流し、好みのこしらへにて、以前の片袖を手に持ち住ひ居る。

〽身にしむ風に亡人を、思へば胸も晴れやらぬ、雨持つ空の薄曇り、

ト合方になり、思入あつて、

十三 形見こそ今は仇なれ片袖も、涙に濡れて此のやうに、ありし色香は褪めたれど、其の面影はありありと殘る模様と紋所、せめて是れなと位牌へ直し、どれ回向して遣りませう。

〽涙に濕る片袖の紋の櫻もちりぬるで、いろは紅葉の染模様、流れの水の哀れにも、今は手向の錫茶碗、

ト此の内十三郎佛壇の前にある小机を出し、これへ佛壇より白木の位牌を出して飾り、香爐錫の茶碗を載せ、件の片袖を持ち、敷島を思ひ出し愁ひの思入よろしくあつて、机の上へ載せ、懐から守袋を出し、

そなたがあの世へ先立つとは、神ならぬ身の露知らず、二世の誓ひを此のやうに、取交したる血起請も、今となりては反故同然、輪回の絆を打ち切る爲め、此の血起請を火中なし、亡き敷島を

弔はん。

〽後の世掛けし血起請を、煙となせば風立ちて、軒端にそよぐ呉竹の葉音も凄き秋の聲、

ト此の十三郎守袋より起請を出し、思入あつて、側にある火鉢へ打ちこむ、掛焰硝ぱつと立ち、ドロ〳〵になり、十三郎うつとりとなる、鼓、唄掛りになり、

〽ありし廓の面影も、此の世を去りて亡き魂の、夫子に引かれ髣髴と傍の籬に敷島が、

ト燒酎火ドロ〳〵寐鳥になり、掛焰硝ぱつと立ち、件の火鉢の中より、敷島幽靈のこしらへにて出で、上手よき所まで行く、此の文句の留り、引拔きになり、

〽部屋着の儘の立姿、

トドロ〳〵にて、敷島部屋着好みのこしらへになり、十三郎心附き敷島を見て、

十三　やゝ、そなたは敷島、どうして爰へ。

敷島　あい、お前に一目逢ひたさに、廓を脱けてやう〳〵と、幾せの思ひで來ましたわいな。

十三　むゝ、そんなら非業な死を遂げし、噂ありしは僞りにて。

敷島　さあ、既にわたしや死ぬ所、危い命を助かりて、やつぱり此の世に居ますわいな。

十三　さては形見と思つたが、この片袖は心得ず。

敷島　いえ〳〵それはわたしの小袖、葛籠の内へ入れ置きしが、廻り〳〵てお前の手へ。

十三　それと知つたら互ひの起請、火中するではなかつたに。

敷島　えゝ聞えぬわいな十三さん、そもや二人の馴れそめは、

〽七歳後の文月に、初會からして馬鹿らしい勤め放れし蚊帳の内、惚れた心がすいて見え、二階に浮名立つ秋や、〽二度の月見も早や過ぎて八ツ口厭ふ五月帶、子持高尾の古へを、忍ぶ紅葉の染模樣、〽血汐の起請反故となし、切れる心でござんすなら、これが別れさ情なくも、立つを引留め十三郎、〽其の疑ひは無理ならねど、秋の日和の替るとも替らぬ心汲み分けて、機嫌直してくりやいのと、留むれば拂ふ女郎花嵐にくねる風情なり。

ト此の内敷島十三郎口說の振りよろしくあつて、合方になり、

十三　さあ、わしに替りはない程に、心を直してくりやいの。

敷島　いえ〳〵何と言はしやんしても、所詮添はれぬ譯あれば、血汐の起請も今は反故、お前と女夫になられぬわいな。

十三　なに、二人が女夫になられぬとは。

敷島　さあなられぬ譯はお袋さまが、お前と女夫になさるとてお貰ひなされたおみつさん、一ツになら

れぬ其の時は、髪をおろして尼となり、一生男を持たぬとやら、もしも其のよなことがあつたなら、是れも誰ゆゑ敷島ゆゑと、お袋さまがお恨みなされう、爰の道理を思ふ時はどうでも添はれぬ二人が中、それゆゑ思ひ切る程に、おみつさんと睦じう添うてあげて下さんせいな。

十三　すりやそれゆゑに此のわしを、今日からふツつり思ひ切り、おみつと女夫になれと言やるか。

敷島　その替りには、わたしと思ひ、

〽二人の中のお和歌をば、行末長う見捨てずに不便を掛けて下さんせ、又二ツには百萬年、
　御壽命過ぎてあの世では、
どうぞわたしと睦じう、女夫になつて下さんせ。

十三　おゝ、そりや言はずとも知れたこと、夫婦は二世といふからは、

敷島　彌陀の御國に、世帶して、

十三　一ツ蓮に差向ひ、

敷島　何方が先きへ行かうとも、

十三　半座を分けて待つ心。（ト敷島思入あつて、）

敷島　それでは迷はず、

十三　や。

敷島　嬉しいわいな。

〽これが別れと敷島が口には言はねど閻王の、修羅の迎ひのしげゝれば心急るゝ折柄に、

ト此の内薄ドロ〳〵敷島名殘惜き思入、ばた〳〵になり奥より以前の和歌野走り出來り敷島を見て、

和歌　や、お前はおいらん。（ト敷島びつくりなす、）

〽親子は一世草の葉の露と消え行く秋の夜も、覺むれば春の夢見草形見ばかりぞ。

ト此内敷島立ち上り、和歌野縋るを振切り行かうとする、十三郎これを留める、トヾ大ドロ〳〵になり掛焔硝パッと立ち敷島佛檀の中へ消える、和歌野行かうとするを十三郎二枚折の屏風で隔て、此の蔭へ兩人隱れる、これにて伊豫簾を下し清元連中を消し、道具居所替りになる。

（五平次内佛間の場）――本舞臺三間の間常足の二重、向う暖簾口上手古びたる佛檀、白木の位牌佛具よろしく飾り、下手鼠壁に替り上手の屋體打返して中窓のある鼠壁、いつもの所海苔粗朶の垣根、下の方二階下よりあふり、船板の塀に替り。よろしく道具納まる。

ト床の淨瑠璃になり、

淨るり　〽吹送る濱邊の風に見し夢も、破れ屏風の二枚折り、目覺めて起きる十三郎、

トドロ〱にて、日覆より心といふ字を屏風の内へ引いて取り、ドロ〱を打上げ、屏風を取りのける、内に十三郎目の覺めし思入、側に和歌野俯伏せになり居る。

十三　さては今のは夢であつたか。（ト本釣鐘を打込み、）非業に死せし敷島が、後世の苦患を助けんと、位牌に向ひ回向をなす内、まどろむともなく見し夢にあり〱姿顯はして、詞交せし嬉しさも覺めて悔しき玉の緒の、果敢なく切れし敷島が迷うて逢ひに來りしか、又おいらんと聲かけて縋り寄りし小坊主は正しく娘和歌野なりしが、案じる故に見たることか、是れも心の疲れぢやなあ。

〽歎息なして吐息をつき、傍を見れば俯伏せに、居睡り居るは以前の小坊主。

ト十三郎思入あつて、和歌野を見て、

やゝ、爰に居るのは今見たる、夢のうちの慥に小坊主。

〽起きよ〱と搖り起せば、（ト十三郎和歌野を搖起す、和歌野目を覺し、）

〽縋り附けば顏打ち見やり、（ト和歌野十三郎に縋り附く、十三郎見て、）

和歌　やあ、十三さんか、逢ひたかつたわいな。

十三　さういふのは和歌野か。（ト顏をとつくり見て、）おゝ、和歌野だ〱、よく無事で居てくれたなあ。

〽抱きしむれば嬉しげに、

和歌　十三さん、今爰に居たおいらんは、何處へ行かしやんしたぞいな。
十三　そんならそちも爰に居て、同じ夢を見やつたか。
和歌　あい、お師匠さまのござる內、つい睡くなつて寐ましたが、それでは夢でござりましたか。
十三　おゝ、夢ぢやわいの。
和歌　夢なら覺めずに、居てくれゝばよいに。
十三　おゝ尤もぢや／＼、おれでさへ逢ひ度いもの、そちの逢ひ度いのは無理でない。

〽背撫で擦り勞りて、見れば以前の俤なく、替り果てたる墨染の、姿に先立つ涙を拭ひ、

ト十三郎和歌野の背中を擦りながら、どうしてこんな姿になつたかといふ思入あつて、涙を拭ひ、

これ／＼和歌野、どうして斯ういふ姿になつたか。又そちが母の敷島も、廓に居る內どうしたか譯を知つて居やるなら、四邊に遠慮の者はない、早う言うて聞してくりや。これ、泣いて居ては譯が分らぬ、譯を言うてくりやいの。

〽いへば和歌野は目をすりながら、

和歌　お前が言へといはしやんせいでも、言ひたうて／＼ならぬけれど、お前に逢うて嬉しいのと悲しいので胸がつかへ、急に物が言へぬわいな。

十三　急に言へぬも無理ではないが、早う樣子が聞きたいから、どうぞ言つて聞してくれ。

和歌　あい、あい。

〽涙に咽び言ひかぬれば、

十三　これ、そちが母の敷島は、もしや廓の三浦屋で、

和歌　あい、情ない目に逢はしやんしたわいな。

〽聞くに驚く十三郎、

十三　して〳〵跡は、

〽して〳〵跡はと問ひかくれば、亡き敷島が乘移りしか、和歌野はませし詞にて、

ト十三郎びつくりなし、泣き伏す和歌野を引起す。此の時風の音になり、敷島の乘移りし心にて、誂へ凄き床の合方になり。和歌野思入あつて、

和歌　忘れもせぬ跡の月、二十四日の晩のこと、あの遣手のお爪どんが、若い者の源四郎どんと、二人しておいらんを。

〽藏の脇の責場に連れ行き、枕捜しをしたというて、弓の折で責め折檻、

酷い目に逢うたけれど、取つた覺えのない事ゆゑ、知らぬ〳〵と言はしやんしたら、言はねばわ

たしを責めるというて、あの源四郎が宙に引ツ提げ、撚棒で手酷く打たれ、切ないのを怺へるうち、打ち所が惡かつたか、わたしや目をまはしたわいな。

〽跡言ひさして泣き伏せば、十三は堪らず抱きあげ、

ト和歌野泣き伏す、十三郎抱き上げて頰摺りをなし、

十三　えゝ可愛さうに此のやうに、五ツか六ツになる者を、折檻するとは邪險な奴等、亭主は好けれど二度目の女房玉苗めが惡いのに、名うてのお爪源四郎、いかに無慈悲といひながら目を廻すほど打つといふは、嘸痛かつたであらうな。さうして、それからどうしたぞ。

和歌　おいらんがわたしを庇うて、覺えもない枕捜しをしましたと、言はしやんしたわいな。

〽又もやわつと泣き伏せば、聞く度毎に十三郎、胸にこたへて我が身をば、打たるゝよりも猶苦しく、

ト和歌野泣き伏す、十三郎よろしく思入あつて、

十三　すりや敷島にはそちを庇ひ、覺えもない枕捜しの罪を其の身に引受けしとか、直なる心に邪の汚名を取りしは悔しからう。それでそちは助かつたか。

和歌　あい、さういうたので助けられ、二人が行つてしまつたゆゑ、なぜ覺えのないことを言はしやん

したというたれば、
〽覺えもない罪を着たも、酷い目に逢はぬうち、十三さんの所へ行き、此のことを言うてくれと、言はしやんしたけれど、
わたしや別れともないゆゑ、行くのは厭ぢやというたれば、
〽行くのが厭なら子にせぬと、言はしやんすゆゑ仕方なく〳〵、
母さんの子になりたいばかり、廓を脫けて出ましたわいな。
十三　そんなら汝を子にせぬと、脅して廓を落せしとか、察するところ共々に責苦に逢ふを助けん爲、
〽僅か五丁の內でさへ一人で外へ出さぬのに、晝でもあるか夜に入つて、道さへ知らぬ和歌野をば、
思ひ切つて落すまでの、親の心はどのやうぞ、さうしてそちは何時に、廓を脫けて何處へ行つたぞ。
和歌　あい、廓を出たは引過ぎにて、觀音樣から眞直に、よつぽど行つて尋ねたけれど、何處といふ先きを知らねば、誰に聞いてもさつぱり知れず、
〽あちらへうろ〳〵こちらへうろ〳〵、お月樣も雲間に隱れ、暗さは暗し其の上に、肩を打

たれた體の痛み、
どうしようかと思ふ内、宿無しめらに取卷かれ、
〽着物としごきを取られてしまひ、顫へながら寒さをこらへ、こゝやかしこの軒下で、
〽泣いて一夜を明せしと、聞くに堪らず抱きしめ、不便の者やとやゝ暫し、涙に暮れしが泣く目を拭ひ、(ト和歌野よろしくあつて、十三郎抱き上げ勞りて、)

十三 あゝ聞けば聞くほど哀れな話し、如何なるそちは宿業で、二人の中へ生れて來たか、藁の上より里にやられ、他人の中に成人なし、親の手許へ呼ばれても、
〽勤めする身に人目を憚り、禿となして遣ふゆゑ、現在生みの兩親を、十三さんのおいらんのと詞からして他人向き、
餘所々々しさについ一度甘えたことを言ひもせず、親は眼前ありながら親なき禿と同じやうに、たゞの一夜樂々と、寐たこともなく其の上に、
〽氣を失ふ程打ち叩かれ、行先き知れぬ夜道にて、宿無しどもに剝ぎ取られ、裸で一夜明せしこは、思へば〱不便やな。
僅か五ツか六ツの子に此の苦しみをさせるのも、親甲斐のない十三ゆゑ、堪忍してくれこれ娘、

〽抱きしめ〳〵子ゆゑに迷ふ恩愛に、我れを忘れて聲を上げ、歎く涙は春雨の軒端を傳ふ如くにて、更に小止みはなかりけり。

ト十三郎和歌野をとらへ、よろしく愁ひの思入あつて、抱きしめて泣く。

〽始終後に聞き居たる家主も怺へ兼ねて轉び出で、（ト此の時奧より與九兵衞泣きながら出で、）

與九　はあゝ。（ト聲をあげて轉び出る、十三郎びつくりして、）

十三　やゝ、つひぞ見ぬこなさんは。

與九　これ〳〵、何も案じる者ではない、わしは此の長屋の家主だが、茶飯を奧で馳走になり、さつきからの哀れな話し、殘らず後で聞いて居ました、取り分け哀れは、宿無しに裸にされたとか、まだ正月雪や霜の降る時分、嘸や其の晩吹きさらされ、寒かつたであらうと思へば、可愛さうやら不便なやらで、澤山喰つた茶飯より涙で胸が一杯だ、おりや悲しくてならぬわい。

〽悲しいわいのと聲をあげ、子供の如くに泣きければ、菓子折携へ一間より立ち出る主人の五平次が、

ト與九兵衞子供のやうに泣く、奧より以前の五平次菓子折を持ち出來り、

五平　これ〳〵、大屋さん〳〵、泣きなさるのは尤もだ、誰でも泣かずにやあ居られねえ、わしも今臺

所で袖をぐつすり濡らしました。(ト菓子折を見せ、)ちよつとこれを佛前へ供へますと上げますから、泣き止んで下さりませ。

與九　いや〳〵、それは店賃で差引かれるから、喰ひたうない、ハアー——。

ト與九兵衞泣く、五平次佛壇へ菓子折を供へる、十三郎思入あつて、

十三　これ〳〵和歌野、さうしてそなたはどんな譯で、斯ういふ姿になつたのぢや、其の譯聞かしてくりやいの。

〽いふをば聞いて五平次が、

五平　いやもし若旦那樣、その譯は、このお子を弟子にした尼が、お話し申したいと奥に待つて居りますから、それからお聞きなされませ。(ト奥へ向ひ、)妙珍さん〳〵。

妙珍　はい〳〵、只今それへ參りまする。

〽言ひつゝ出る尼妙珍、(ト奥より以前の妙珍出來り、)

これは〳〵、お初にお目にかゝりますが、私は妙珍と申しまする尼にござりまする。

五平　これ〳〵、其の御挨拶には及ばないから、少しも早く今の話しを。

十三　どうぞ聞せて下さりませ。

〽頼みに尼は進み出で、（ト合方になり、妙珍前へ出で、）

妙珍　いやも、お話し申しませうとも、今も此の子が申した通り、跡月廿四日の晩御修行先きに不幸があつて、お通夜のお勤め頼まれて夜明方に歸る途中、八幡前の軒下に何かめそ〳〵泣く子供、見れば可愛や丸裸、樣子を聞けば哀れな話し、その三浦屋は私も不斷修行に行きますから、よく存じて居りますが、女房も無慈悲に遣手が邪險、取りわけ見世の若い者强慾非道の源四郎、揃ひも揃ひ人でなしゆゑ、そつと樣子を聞いたところ、敷島さんは駈落して行方が知れぬといふことゆゑ、連れて行つたら又この子が、いゝ、みじめを見るであらうと思ひ、當分寺へ置いた方が無事と思つて天窓を剃り名も妙眞と改めて、身寄りの人に逢はうかと、修行に連れて歩きましたが、盡きぬ緣とてお前さまに、爰でお目にかゝるといふは、これもやつぱり阿彌陀樣の、お引き合せでござりませう。

〽一部始終を物語れば、

十三　すりやそれゆゑに尼御どのが、此の和歌野を弟子となし、お世話なされて下されましたか、何とお禮を申さうやら、

與九　他人のわしも共々に、

三人　有難うございまする。

〽十三を始め人々も、手を突き禮をぞ述べにける、和歌野はふつと思ひ出し、

ト皆々妙珍に禮をいふ、和歌野思入あつて誂への守袋を出し、

和歌　廓を逃げる其の時に、十三さんに逢うたなら、お渡し申せと此の守を、おいらんから預かつたれど、乞食に剝がれた其の時に取られたと思つたも、跡へ落して行つたゆゑ、斯うして持つて居りまする。

ト出す、十三郎取つて、

十三　こりや覺えある敷島が、肌身放さぬ守袋、これを十三に渡せとは、是れには何ぞ深い様子が。

〽と思案をなせば五平次が、守袋に目を附けて、（ト五平次件の守へ思入あつて、）

五平　もし、ちよつとお見せ下さりませ。

十三　この守をか。

〽渡せばとつくと打ち見やり、

五平　はて、似た切もあるものだ。

十三　なに、此の切が似寄りとは。

五平　さあ、話せば長い昔話し、死んだ女房が其の以前、さる小屋敷に御奉公して居つた時分、奥樣から戴いたと申しまして持つて居つた鶯鳶切、五つの時に勾引され、今に行方の知れませぬ娘お崎に出世がさせ度く、漁夫づれには不相應な鶯鳶切でこしらへた守を持たせて置きましたが、丁度似寄りの守袋。

與九　これ五平次どの、もしやそれが行方の知れぬ娘の、守ぢやござらぬか。

五平　わしもさうは思へど、五つの年に別れたぎり、風の傳手にも聞かざれば、死んだか生きたか知れぬ娘。

ト十三郎これを聞き思入あつて、

十三　その守に覺えあらば、慥にこなたの娘であらう。

五平　え、そりや又何で。

十三　さあ五つの年に兩親に、別れしことを敷島が、寐物語にいたせしからは、どうも娘と思はるゝが何ぞ外に證據はないか。

五平　外に證據もござりませぬが、いろ〳〵入れし守の內、一寸程の白木で彫つた、八幡樣はござりませぬか。

〽いふに十三は守を開き、白木の尊像取り出し、

ト これにて十三郎守の中を搜し、白木の木像を出し、

十三　如何にも爰に八幡宮、寸分違はぬ木彫の尊像。（ト差出す、五平次取つて見て、）

五平　おゝ、是れだ〱、これに少しも違ひない。

十三　さてこそ、となたの娘であつたか。

〽思ひがけなき親子の縁に、驚く折から五郎吉が、樣子を聞いて飛んで出で、

ト 十三郎五平次思ひがけなき思入、奧より五郎吉走り出で、

五郎　父さん、樣子は奧で聞いたが、行方の知れねえ姉さんは、敷島さんであつたのかえ。

五平　お、　思ひがけない鴛鴦切の、守袋が目印に、

十三　又八幡樣の尊像が、證據になつて行方の、

五平　知れぬ娘の知れたのも、盡きせぬ緣だ。

五郎　此の叉姪に逢ふといふも、

妙珍　これも佛の皆導き、

十三　思へば不思議な、

四人　出逢ひぢやなあ。

〽これも佛の導きと、盡きぬ緣を語り合ふ隙を窺ふ家主が、してやる餅が咽喉へつかへ、

ト皆々よろしく思入、此の内與九兵衞そつと菓子折を引寄せ、四邊を忍んで餅を喰ひ、この時大きく頰張り、胸につかへし思入にて、うゝゝと云つて倒れる、皆々びつくりして、

五郎　おい大屋さん、どうしたのだ〳〵。

〽ばたつく音に臺所より、熊藏夫婦も出て來り、

ト五郎吉は介抱なす、奧より熊藏お長出來り、

妙珍　胸へ指さしをして居なさるから、何か胸へつかへたのであらう。

お長　おや〳〵折が半分から、中のお菓子がなくなつたのは。

熊藏　慾張り大屋が喰つたのだらう。さういふ事なら、も一つお負けに。

〽背中をぶてば家主は、うゝんとばかりに胸撫で下し、

ト握り拳で與九兵衞の背中を叩く、これにて胸の通りし思入にて、

與九　あゝ嬉しや〳〵、やつと通つた。

熊藏　もし大屋さん、どうしなすつたのだ。

與九　いや笑ふ口へは物が喰へぬが、つい泣く口へ此の餅菓子をせしめたが、あんまりみんなの名乘合ひが搦んだ筋だと思ふうち、こつちの喉へ餅が搦み、すんでのことに此の與九兵衞、餅と心中する所だ。

ト胸を擦り居る、十三郎思入あつて、

十三　その心中に引替へて、思へば不便や敷島は、自殺なしたか但し又、人手にかゝつて死んだるか、何で非業な最期をせしか、可愛さうなことをしたなあ。

〽愁ひに沈む十三郎、見るに我強き五平次も、目には泣かねど胸にまで、滿ち來る汐の涙を呑み込み、（ト五平次愁ひの思入。）

五平　あゝ今更言つても返らねえ、跡の月の廿八日、思へば親子の緣あつて葛籠が船へ流れ着いたも、斯ういふ事と知らねえゆゑ、何があるかと引き揚げて蓋を明ければ女の死骸、何處の誰が娘なるか。

〽親の歎きはどのやうと、子を持つた身の涙脆く、片袖なりと葬つて塔婆の一ツも立てゝやらうと、我が娘とも知らぬゆゑ、片袖切つて其の跡は又もや沖へ突出したが、なぜ船へまで流れつく、心があるならあの時に、

〽夢になりとも名乘り合ひ、われがことを賴まぬか。（ト和歌野へ思入。）なんぼ他人同樣に、禿にして置いたとて可愛うないこともあるまい、なぜ賴んではくれねえのだ、さうしたならば引揚げて、どんな立派な葬ひでも力一杯してやるのに、現在親が逢ひながら鮫の餌食に流したのが、言つて返らぬことながら、悔しくッてなりませぬ。もし若旦那、實にわしや腹が立ちます。

〽强い詞の其の內に、こぼす淚は猶更に、いとゞ哀れに見えにける。

ト五平次悔し泣きに泣く、五郞吉も思入あつて、

五郞　ほんに父さんの言ふ通り、お前に逢つて言難けりやあ、わつちにでも言ひなさりやあいゝに、然し親子とはいふものゝ、五ッの年に勾引され、久しく逢はねえ父さんゆゑ、死んでもやつぱり遠慮して、それで言はずに餘所ながら、逢ひに來たのでござりませう。

五平　それが分らねえといふものだ、血を分けた親子の中に、何の遠慮がいるものか。手前のおつかあは馬鹿だなあ。

〽孫をば抱いて泣顏を、隱す心を察しやり、列なる者も共々に、（ト皆々愁ひの思入あつて、）

熊藏　そんな事とも知らねえで、直に明くる日親方が、お寺で戒名附けて貰ひ、

お長　その片袖を門口へ、埋めたは先月廿八日。

妙珍　そんならさつき志しの佛があると云つたのは、其の片袖の御供養か、そこへわたしが此の子を連れ、修行に來たのも一ツの不思議。

與九　いはゞ忌日に志しの、茶飯の出來るを嗅ぎ當てゝ、納豆汁にのつぺいで馳走になるも此の店を貸して置くゆゑ脫れぬ家主。

五平　思へば是れも數年來、生業づくとはいひながら殺生をした此の親の、因果が可愛や子に報い、現在我が目に掛りながら、魚の餌食にするのも因緣。

十三　如何に定まる因緣とて、無實の罪で責めに逢ひ、斯かる非業の死を遂げては、行く所へ行かれはせまい、枕捜しは誰がせしか、疑ひ受けし敷島が、汚名を晴らして遣りたいものぢや。

〽歎きに沈む其の折柄、廓を脫けし誰袖が、人目を厭ひ馳込めば、

トばた／＼になり、花道より誰袖手拭を吹流しに冠り、部屋着裝上草履にて走り出來り、直に內へ駈込む、和歌野見て、

和歌　あれ、おいらんが。

十三　なに、敷島が。

誰袖　あゝもし、わたしでござんすわいな。（ト手拭を取り、ほつと思入）
十三　や、誰かと思へば三浦屋の、
五平　思ひがけない熊が妹、
與九　ほんにお前はお袖さん、
誰袖　あい、誰袖でござんすわいな。
五郎　さうしておぬしは、何しに來たのだ。
誰袖　言はねばならぬことがあつて、
熊藏　言はねばならぬ事といふのは、心づかへだ早く言やれ。
　　〽兄が詞に誰袖が、四邊窺ひ吐息をつき、
誰袖　さあ、わたしが不斷お世話になつた、姉女郎敷島さんの敵を取つて貰ひたく、廓を拔けて來ましたわいな。
　　〽言ふに人々打ち驚き、
十三　これ〳〵誰袖、敷島が敵をば、取つてくれとはどういふ譯だ。
お長　まだまあお前は知るまいが、敷島さんは五郎さんの、姉さんでござんすぞえ。

誰袖　そりやまあどうして。
五郎　その入譯は跡にして、敷島さんの敵とは。
十三　如何なることか、これ誰袖、
五平　仔細を早く、
皆々　聞かしてくりやれ。

〽仔細を早くと誰袖を、取圍めば座を進め、

誰袖　さあ敵を取つて貰ひたいのは、敷島さんが無實の罪にて酷い責苦に逢うた上、非業な死をばなさんしたゆゑ。
皆々　何と。（ト誂への合方になり、）
誰袖　あの三浦屋のお上さんは、玉苗といつた元は女郎、先のお上さんが亡なつて旦那さんが、相手欲しやで居るのを附込み抑掛けて、到頭二度目のお上さん、相談づくで若い者の、源四郎どんとは其の以前、

〽まだ女郎衆で居た時より、深い仲ゆゑ人目を忍び、首尾待合ひの庭傳ひ裏の圍ひで出會して、

度重なつて敷島さんの目に掛つたを遺恨に思ひ、一ツ穴の遣手衆お爪どんが盗んだる、枕捜しの紙入を、敷島さんの手箱へ入れ、無理に取つたと罪を着せ、〽むごい責苦に逢はせし上、お爪どんが死ねがしに、刃物を置いて行つたゆゑ、敷島さんがその刃物で、自害をして死なしやんしたを、二人で行つて止めを刺し、源四郎どんが葛籠へ入れ、海へ流して世間へは、駈落したと言ひ觸らし、〽隱して居たのでござんすと、いふに人々さてはと悦び、

十三　すりや女房のお玉を始め、源四郎とお爪めが、惡巧みにてあつたるか。

五平　是れにて知れし娘が様子、こりや打捨ては置かれぬわえ。

〽勇み立つたる門口に、窺ひ居たる與三郎、

ト皆々思入。此の以前下手より與三郎出來り、是れを立ち聞きしてゐて門口を明け、

與三　思はず知れし枕捜し、我が取られたる五十兩は、彼等が仕業であつたるか。

〽門の戸明けて入り來れば、

五平　や、誰かと思へば與三郎さま、只今お歸りでござりまするか。

與三　おゝ最前の約束ゆゑ、砂村よりの歸りがけ、お茶の無心に立ち寄る門口、何やら内に取込みゆゑ、

軒端に立つて樣子を聞けば、誰袖どのゝ今の詞で慥に知れしあの夜の盜人、正しく廓で取られしなれど、若年者の悔しさは、昨日までも今日までも我遣ひしと主人より疑ひ受けし五十兩、測らず是れへ立ち寄りて、盜みし者は遣手のお爪、それに荷擔の源四郎、二人の仕業と知れたる上は此の身の潔白立てねばならぬ。

ト言ふに十三も進み出で、

十三　すりや新助どのより話しに聞きし、與三郎殿であつたるか、私事は藤代屋十三郎でございまする。

與三　かねてお名は承はりしが、お目に掛るは今日が初めて。

十三　これを御緣にお心易う、

與三　お願ひ申すでございまする。（ト兩人思入、與九兵衞こなしあつて、）

與九　斯う又事が分りし上は、こりや其の儘に捨ては置けぬ、出る所へ持出して表沙汰にせねばいかぬ、家内安全店子騷動、出入がなければ儲からぬ、先づ辨當代は言ふに及ばず、筆墨代から跡での禮、酒や肴は無駄事ゆゑ、正金で寄越すは承知であらうな。

五平　その入用は元より承知、假令漁夫の五平次が此の痩世帶をしまへばとて、出る所まで持出して、

娘の敵を取らねばならぬ。
十三　假令何程掛らうとも、其の入用は十三が引受け、こなたに苦勞は掛けぬから、早くお上へ願ふがよい。
お長　この事を敷島さんが、草葉の陰で聞かしやんしたら、嘸嬉しうござんせう。
與九　此の上は廓へ行き、其の三人を預けにやならぬ。
誰袖　いえ〳〵廓へ行かしやんしても、其の三人は居ぬわいな。
十三　なに、三人が、
皆々　廓に居ぬとは。
誰袖　さあ死骸は海へ流せしゆゑ、誰知るまいと思ひしに、惡事千里に旦那さんの耳へはひつて忽ち顯れ、これまで亭主の此の顏へ泥を塗つたる三人ゆゑ、表沙汰にもしたけれど、さうなる時には恥の上塗り、何も言はずに暇を遣ると粹な捌きで昨日の晩、惡い巧みの三人は家を出されてしまつたわいな。
十三　そんなら敵の三人は、家を出されてしまひしとか。
五郎　さうして彼奴等の行く先は。

誰袖　何處へ行つたか知れぬわいな。

五平　願つて出るにも目當にする、その三人の行方が知れねば、娘が敵を取ることならず。

與九　こりや、辨當代を取り損なつたか。

十三　どうか敵の三人を、尋ねる仕樣はござらぬか。

妙珍　はい、それは私が頼まれませう。

〽言ふに妙珍うなづき出で、

十三　なに、妙珍どのが。

五郎　敵の行方を。

妙珍　修行に歩いて裏々まで、尋ねたことなら知れるは必定。

五平　又責められた一段から、自害をしたを葛籠へ入れ、海へ流したことまでの、

誰袖　その證人は、この誰袖。

お長　その又葛籠を沖合で、引き揚げて見た其の時に、

熊藏　一緒に居合す證人は、お袖が兄のこの熊藏。

十三　思へば〱此のやうに、緣ある者が打ち寄つて、

五平　一部始終の分るといふも、
五郎　みんな定まる因緣に、
與九　此の家主は儲け口、
五平　これも死靈の、
皆々　導きぢやなあ。

〽折しも佛間に焰々と、燃ゆる陰火を和歌野は見るより、
ト此の時ドロ〳〵になり、ト手佛檀の前へ燒酎火燃ゆる、和歌野見て、

和歌　あれ、おいらんが。
ト寄らうとするを、十三郎隔て、
十三　今に恨みを。（ト和歌野を下に居らせ、）晴らしてやるぞ。

〽怪しおそろし、
ト皆々よろしく思入、大ドロ〳〵三重にて、燒酎火を上へ引上げる、是れをきざみよろしく、

ひやうし　幕

六幕目大詰

府中上總屋の場
井の頭樋口の場
小金井捕物の場

〔役名〕＝青木主鈴、藤代屋十三郎、熊鷹お爪、漁夫五平次、上總屋源左衞門實は源四郎、荒木主水、旅人武藏屋半七實は鳥山隼人、五平次悴五郎吉、若い者喜助、同太助、百姓つん作、番人畑六。上總屋女房お玉、同下女お菊、十三郎一子和歌野、上總屋抱へお增等。〕

・(上總屋見世先の場)＝本舞臺四間通し常足の二重、上手三尺戸袋、一面の踏段。向う上總屋といふ紺の長暖簾、上手上襖、下間平戸の戸棚、下手折廻し鼠壁、板羽目煙出しのある柿葺の庇この上戸袋、格子、二階の前側をおろし、下の方黒板塀、此の前に用水桶、番手桶、上總屋と記せし雨覆ひ二重下手に臺の物白鳥の德利、總て宿場女郎屋の體。爰に○□の若い衆半合羽一本ざし脚絆、△若い衆尻端折り脚絆、兩掛へ風呂敷に包みし刀を附け、是れを擔ぎ立ち掛り居る、太助若い者にて小腰を屈め居る、喜助同じく若い者にて帳を調べ、つん作百姓象股引、草鞋、馬糞浚ひにて籠を側へ置き、腰を掛け煙草を呑み居る、名古屋名物にて幕明く。

□　コウ若い衆、邪魔だらうが此の兩掛こ、上に附いて居る刀を預つて置いて下せえ。

太助　畏りましてござりまする。まあお上りなされませ。

ト○□二重へ上る、△兩掛をおろし、腰を掛け草鞋を解いて居る。

○　もし、今日は大層野半纏を着たお侍さまがお通りでござりますが、お鷹野でもござりますかな。

太助　今日は足利家の御連枝滿詮樣とおつしやるお方が、小金井の櫻を御遊覽で、昨日からお先供がお通りでござりまする。

△　道理で道中筋に、盛砂がしてあると思つた。

百姓　わしは小金井在でござりますが、夕櫻を御覽なされて、古瓦のある國分寺が御旅宿になりまする。

□　その滿詮樣とおつしやるのは、當時での御名將で、御仁心深く下を憐み、よい殿樣だといふことだ。

百姓　それゆゑ今日もお通り筋で、御直訴をした者があつたが、尤もな事かして、お取上げになつたて。

喜助　そりやあ樒子供を連れた人ださうだ。

百姓　いゝ坊主の子を連れて居たて。（ト太助思入あつて若い衆に向ひ）

太助　ときに旦那、新造衆にいたしませうか、年增衆にいたしませうか、

○　わつちが年がいかねえから、年增より新造の程のいゝのを出してくんねえ。

太助　畏りました。

喜助　お仙さんにお萬さんがよからう。
△　おらあ器量にやあ構はねえから、床のいゝのを頼むよ。
□　下司張つたことをいふなえ。
△　いえ、爰が地鐵でござりまする。
太助　先づお二階へいらツしやいまし。
○　それぢやあ二階へ行つて、脚絆を取らうか。
△　それがよろしうございます。
太助　さあ、いらつしやいまし。お客だよ。（ト奥にて、）
大勢　あい――。

ト右の唄にて、多助先きに○△□兩掛を擔ぎ暖簾口へはひる。

百姓　今の衆は、江戸の衆だな。
喜助　何でも相應な商人衆だが、小道具屋などゝいふ者は、相手次第で儲ける生業、それだから遊山半分あゝして遊んで歩けるのだ。
百姓　旨い物をうんと喰つて、遊んで歩くのも生業なら、又斯うして馬糞を拾つて、うんといふ程擔い

でも僅か一貫か一貫二百、これで一生送るのだから、考へて見ると詰らねえもんだ。
喜助　その代り元手は入らず、たゞ拾つて歩きせえすりやあ、一貫と一貫二百になるのだから、こんな旨え生業はねえ。
ト此の時奥よりお増浴衣の上へ縞の仕掛を引つ掛け、宿場女郎のこしらへにて文を持ち出で來り、
お増　伯父さん、お待遠だつたね。
百姓　なに、丁度一服遣りてえ所だから、足休めにようござりました。
お増　それぢやあ此の文を、新家の金十さんへそつと屆けておくれ、そして是非お目に掛り度いから、是非來ておくんなさいと、さう言つておくんなさいよ。
百姓　あい〳〵承知しました。（ト文を懷へ入れる。）
お増　伯父さん、少しばかりだが煙草でもお買ひよ。（ト紙包みの金をやる。）
百姓　來る度毎にお貰ひ申して、お氣の毒でござりますが、お志しでござりますからお貰ひ申して置きますする。（ト煙草入へ入れる。）
お増　どうぞ今の言傳を、きつと言つておくんなさいよ。
百姓　むゝ、言ひますとも〳〵、魚心ありや水心で、今のお金を貰つたからは。

ト此の内百姓つん作向うを見て、思入あつて籠を擔ぎ、馬糞浚ひを持つて逸散に花道へはひる。お增びつくりして、

お增　おやまあ、あの人はごうしたのだらう。

喜助　向うの飯屋に繋いである、馬がしつかり垂れこんだのを、人に取られねえうちと駈出したのだ。

お增　ほんに慾張つた、聾親仁だねえ。

ト端唄になり、花道より青木主鈴、中月代羽織着流し、大小下駄がけにて出來る、跡より武藏屋半七、半合羽尻端折り脚絆草履一本ざしにて、小腰を屈め詫びながら出る、是れに續いて若い衆の駕籠舁山駕籠をかつぎ、附添ひ出來り、花道にて、

主鈴　こりや〳〵町人、身共何も其の方に、詫びられる覺えはない。

半七　つい駕籠の者がつまづきまして、思はぬ粗相をいたしましてござりまする。

駕舁二人　へい〳〵、ごうぞ御免なされて下さりませ。

主鈴　往來繁き街道中、そりや大方人違ひであらう。

半七　いえ〳〵、人違ひではござりませぬ、つい躓いてあなたさまへ。

主鈴　はてさてしつこい、存ぜぬと申すに。（ト右の唄にて舞臺へ來る、喜助見て、）

喜助　これは旦那さま、よういらつしやいました。
お增　お花見でござりますか。
主鈴　いや〳〵、朋友どもに誘はれて、深代寺へ參つたのぢや。
喜助　それではお手打でござりましたか。
主鈴　おゝ、皆手打ち好きゆゑ所望いたして打つて貰つた。
駕舁　いや、其のお手打は眞平だ。（ト駕籠屋氣味の惡き思入、半七こなしあつて、）
半七　いやもし旦那さま、見る影もない私共、何卒お慈悲を持ちまして、只今の不調法御免なされて下さりませ。
主鈴　又しても〳〵、身共その方共に詫びを受ける覺えはない。
喜助　もし旦那さま、どうなされたのでござりまする。（ト此の内主鈴見世へ腰を掛け）
主鈴　いや、それなる町人が乘つてをつた、其の駕籠の棒鼻を、身共の肩へ打附けたと申して、最前よりあやまるが、此の方に覺えのないことゆゑ、あやまるに及ばぬと申すのぢや。
半七　いえ〳〵、左樣おつしやりますれど、正しくあなたへ此の駕籠を。（ト言ひ掛けるを、）
主鈴　まだ〳〵申すか、しつこい奴だ。これ身共は當所の郡代なるぞ、夜るでもあるか晝中に、その駕

籠を突き當てられては、刀の手前捨ては置かれぬ、手打ちにいたさにや相成らぬ。

半七　え。

駕舁　お手打ち好きとおつしやれば、

同　そこをどうぞ御勘辨、

兩人　へい／＼、お願ひ申しまする。

主鈴　いや／＼其の詫には及ばぬ、元より突き當てられた覺えなければ、切るにも及ばねば詫るにも及ばぬ、事を好まぬ身共が性質、勝手に乘つて行つたがよい。

半七　それではどうも濟みませぬ。

喜助　もし／＼、今のやうにおつしやるのは、旦那さまのお情だ、突き當つたといふ日には、命を取らねばならぬから、そこで知らぬとおつしやるのだ、口數利かずにお禮を申して、早くお出でなさいまし。

半七　それは／＼お情深い旦那さま、有難うございまする。（ト辭儀をなし、喜助を下手へ連れて來て、）もし、あの旦那さまは、何とおつしやりますな。

喜助　あなたは靑木主鈴樣といつて、此の界隈の御郡代だ。

半七　へえ、それぢやあ彼方が、青木様でござりまするか。

ト半七主鈴へ思入、其の内主鈴はお増と話しをして居る思入。

喜助　さうしてお前さんは、何處へお出でなされるのだ。

半七　江戸の者でござりますが、小金井の櫻から玉川の鮎でも取る氣で、此の頃府中で評判の上總屋を當込みに參りましたものでござりまする。

喜助　左様でござりまするか、其の上總屋は此方でござりまする。（ト是れにて半七暖簾を見て、）

半七　お詫びをなすので顚倒なし、さつぱりと氣が附かなんだが、成程こちらが上總屋だね。

主鈴　さては其の方も、遊歴に參つたのぢやな。

半七　へい、櫻の盛りと承はり、江戸からうか〳〵と、三人連れで參りましてござりまする。

喜助　さうして其のお連れさんはえ。

半七　歩いて來るゆゑ、まだ爰へ來るにはちつと間がありませう。

喜助　さう聞いてはお客さまだ、先づ此方へお上りなされませ。

半七　今夜はお世話にならねばならぬ。これ若い衆、お前方は歸りがけにさつきの連れに逢つたらば、早く來いと言つて下せえ。

駕舁　へい〳〵畏りました。いや、お手打ち好きだとおつしやつたから、お手打ちになるかと思つたが。
同　危い命が助かつて、こんな有難いことはない。
喜助　こう〳〵若い衆、そりやあお前方の聞き違ひだ、手打ち好きだとおつしやつたのは、深代寺の蕎麥のことだ。
駕舁二人　左樣でござりましたか。
半七　おゝ、蕎麥といへばお前方も、歸りに蕎麥でも喰つて行きねえ。（ト紙に捻つた金をやる。）
兩人　これは有難うござりまする。（ト駕籠舁兩人は駕籠を擔ぎ、下手へはひる。半七會釋をして、）
半七　旦那樣、御免下さりませ。（ト二重へ上る。）
主鈴　さあ、遠慮なく通るがよい、身共もこちらは懇意ゆゑ、是れを緣に又後方、二階へ參つて面會いたさう。
半七　有難うござります。
喜助　もしお客樣、新造衆にいたしませうか。
半七　何れ新造のことだが、好ささうなのを見立てゝ下せえ。

喜助　畏りましてございまする。もしお增さん、見世が明きますから、お客さまをお連れ申して、おかねさんにさう言つて下さいまし。
お增　あい〳〵、さあ二階へお出でなさいまし。
半七　おゝ若い衆、忘れて居たが、跡から連れが尋ねて來たら、
喜助　直にお知らせ申しまする。
半七　左樣なら旦那さま、眞平御免下さいまし。
喜助　お客さまだよ。（ト奧にて。）
大勢　あい――。（ト宿場騷ぎにてお增半七を連れて暖簾口へはひる。）
主鈴　喜助、今の若い者は何だと思ふ。
喜助　江戸の商人でございませう。
主鈴　いや、商人と見たは目違ひだ、何でも武士に違ひない。
喜助　へゝえ、武士でございますかね。
主鈴　脇差を持つて駕籠から出る身の取廻しが、何でも武士ゆゑ、突掛けた駕籠も突掛けねえと、ちよつと情を見せて置いたも、おれが胸にあることだ。

喜助　左様でござりますか、道理でいつにない立役は、不思議だと思ひました。
主鈴　なに、これがおれの持前だ。
喜助　あんまりさうでもござりますまい。
主鈴　ときに、源左衛門は内か。
喜助　いえ、今日は仲間の寄合で、留守でござりまする。
主鈴　お玉は奥か。
喜助　たしか今湯でございました。
主鈴　湯ならおれも一風呂はひらう。
喜助　お早くお出でなされませ。
主鈴　どれ、鬼の留守に、
喜助　えゝ、
主鈴　垢でも流さうか。（ト端唄にて主鈴思入あつて奥へはひる。喜助跡を見送り、）
喜助　あの青木さんは、お上さんの以前の客だといふことだが、いまだに内證は切れねえ樣子、旦那が承知か知らねえが、大騒動にならねばいゝが。

ト草履札を揃へ居る、又宿場騷ぎになり、花道より、お爪序幕の遣手、そぼろなる拵へ、頰冠り尻端折り、大黑傘を持ち出來り、花道にて、

お爪　今跡で駕籠屋に聞いたが、新らしい家だといふから、慥に向うに違ひねえ。おゝ上總屋といふ暖簾が目印、どれ見世へかゝつて掛合ひを附けてやらう。（ト舞臺へ來り、）はい、御免なさいまし。

ト喜助ちよつと見て、

喜助　今日は出ねえよ。

お爪　出ねえとは何だえ。

喜助　志しの日でねえから、手の内はねえといふのだよ。

お爪　もし若い衆さん、身裝は汚ねえが、物貰ひぢやあございませんよ。

喜助　なに、物貰ひぢやあねえ。

お爪　斯う見えても商人でござりまする、此方のお家へ賣りたいものがあつて、江戸から來ましたのだ。

喜助　商人にやあ受取りにくいが、賣りてえといふのは何だえ。

お爪　外の物でもござりませぬ。雪踏を一足買つて下さいまし。

ト腰に附けた風呂敷包から、ばら緒の雪踏を出す。

喜助　なに雪踏を買つてくれ、見くびつたことを言ひなさんな、なんぼ宿場の小見世だつて、出所も知れねえお前達の雪踏が買へよう、履物の下駄と雪踏は香取屋より外のを履いたことはねえ。

お爪　さう言はずと買つておくんなせえな。

喜助　えゝしつこい、入らねえといふにつ。（トきつと言ふ。）

お爪　そんなに大きな聲をしなさんな、お前達が大きな聲をしたとつて、わつちやあ怖くもおそろしくもねえよ。

喜助　どうしたこと。（ト喜助立ちかゝる、此の時奥より太助出來り、喜助を留め、）

太助　こう〳〵喜助どん、構ひなさんな〳〵、氣違ひかも知れねえから、打捨つて置きねえ〳〵。

トお爪見世の端へ腰を掛け、

お爪　なに、わつちやあ氣違ひでも何でもねえ、しら几帳面の商人だ、出所が知れねえと言ひなさるが、源といふ字の燒印は出所の慥なこれが證據、お前方ぢやあ分らねえから、旦那さんでもお上さんでも、二人の内に是れを見せて、是非買つて貰はにやあならねえのだ。

太助　こう〳〵婆さん、お前氣違ひでねえといふが、旦那でもお上さんでも、古い雪踏を履くものか、そんな詰らねえことを言はねえで、在へでも持つて行つて、早く賣つて歸るがいゝ。

お爪　御親切に有難えが在へ持つて行つた日には、二朱か三朱の端た金、駕籠賃にも足りやあしねえ、一晩泊りに江戸から態々こゝまで來るからは、五十こ百兩纏めた金に、賣らなくつちやあ割に合はねえ。
太助　なに、燒印のある古雪踏を、五十こ百兩に賣りてえとは、いよ〳〵此奴ア氣違ひだ。
喜助　見世ツ端へ緣起の惡い、ぐづ〳〵すると叩ツくじくぞ。
太助　さあ、痛い目しねえうち早く行きねえ。
お爪　おゝ買つてくれゝば直にも行くが、此の雪踏を賣らねえうちは、爰の見世は動きやあしねえ。
喜助　うぬ、さう强情を吐かしやあがりやあ。
太助　叩きしめるぞ、覺悟しろ。
お爪　おゝぶて〳〵、手前達にぶたれてえのだ、疵が附きやあ膏藥代は、一分十兩一寸百兩、金があるならおれをぶて、よもや打つことは出來めえが。
兩人　打たねえでどうするものだ。

ト兩人立ちかゝつて打ちにかゝるを突廻して立廻る。やはり騷ぎ唄にて花道より源左衞門羽織着流し、駒下駄がけにて出來り、花道にてこれを見て、

源左　やあ、何か見世に間違ひがあるわえ。(トばた〳〵にて舞臺へ來り兩人を留め、)これ〳〵、何だか譯は知らねえが、見世先きでみつともねえ靜にしねえか。

ト言ひながら兩人を留める、此の内お爪たゝくらはす、お爪俯伏に倒れ居る。

喜助　旦那、打捨つておいておくんなせえ。

太助　叩きしめにやあ、癖になります。

源左　見りやあ汚ねえ裝をして、此の婆アは乞食ぢやあねえか、なぜこんな者に手出しをするのだ。

ト　お爪起上りながら、

お爪　あゝ痛え〳〵、よく酷い目に逢はしやあがつたな。(ト源左衞門と顏見合せ、)

源左　や、お爪か。

お爪　源四郎か。

源左　どうして爰へ。

お爪　この雪踏が惡足で、江戸からわざ〳〵尋ねて來たのだ。(ト件の雪踏を突き附ける。)

源左　やあ。(トぎつくり思入。)

喜助　それぢやあ旦那は、此の婆アを。

太助　御存じでございますか。
源左　むゝ、おれが以前の近附きだ。
お爪　さあ、此奴等はおれを打たねえか。
兩人　さあ、それは。
お爪　よもや手出しはなるめえが。
兩人　むゝ。（ト後へ下る。）
お爪　これ、源四郎。（ト源左衞門の胸づくしを取る。）
源左　えゝ、何をする。（ト振り拂ふ。）
お爪　よくもおれを。（ト持つて居る雪踏を下へ叩き附けるを、道具替りの知らせ、）いつぺえ遣つたな。
ト詰寄る、源左衞門惡い奴が來たといふ思入、誂への端唄にて道具廻る。

（上總屋湯殿の場）＝本舞臺三間の間常足の二重、大和葺櫛形の欄間、簀の子の本椽附、向う上手一間狐格子二枚引の戸、欄間に浴室といふ額、下手二間二段の棚、此の下杉戸の戸棚、上の方一間中窓明け立てあり、此の前通ひの廊下出入りあり、下の方喰違ひの建仁寺垣、不燈籠、同じく手水鉢、松の立木、日覆より同じく釣枝、總て湯殿の體。下手誂へ大振りの鏡立、この側に櫛箱眞鍮の金盥、

うがひ茶椀などよろしく、爰にお玉浴衣裝、湯あがりのこしらへにて鏡へ向ひ額を直して居る、上手に以前の主鈴煙草を呑んで居る、此の見得媚いた端唄にて道具留る。

お玉　もし旦那、わたしや大層逆上ましたよ。

主鈴　そりやア湯がぬるかつたせゐだ。

お玉　なに、あんまり長湯をしましたからさ。

主鈴　いや、湯へでもはひらなくては、おぬしの側へ寄られぬから、ついうか〳〵と長湯をした。

お玉　えゝも、好かないことをおつしやいますよ。（ト主鈴を抓る。）

主鈴　あゝ痛い、好かれねえのは當り前、つひぞ女に好かれたことがねえ。

お玉　わたしぢやあ惡うござりますかえ。

主鈴　これ、そんなことを言つてくれるな、つい本當に受けるから。

お玉　本當といへば、もし旦那、この間お願ひ申したものを、本當に貸しておくんなさいますか。

主鈴　おゝ、おれはおぬしと違つて、噓をつくことが大嫌ひだ。（ト懷から百兩包みを出し、）それ、約束の百兩。

お玉　おや、本當でござりますか。

主鈴　これだから人の事も、本當に思つてならねえ。（トお玉金を戴き、）

お玉　旦那、まことに有難うござります。（ト思入あつて、）ほんに常談は常談、あなたを便つて吉原から跡の月爰へ來て、お世話になつて居るうちに、丁度爰が賣物に出たのを幸ひ直に買ひ、上總屋といふ暖簾を掛け、見世を出したも、一から十まで、みんな旦那あなたのお蔭、實にこの御恩は忘れはしませぬよ。

主鈴　さうして其の金で、買ふといつた娘の話しは極つたのか。

お玉　はい、十六になる娘でござりますが、十年百兩で昨日極めて遣りましたが、髪は黒し色は白し、田舍者とは見えませぬ、押出しのいゝ娘でござります。

主鈴　そりやあいゝ玉が手に入つたな。

お玉　ほんに旦那、あなたへ何ぞお禮をいたさにやなりませぬから、何ぞと思つて居りますが、御不自由のない御身分ゆゑ、何を上げたらよからうと、思ひ附きがござりませんよ。

主鈴　斯うして世話をするからは、いはゞ緣者も同じこと、何の禮に及ぶものだ。

お玉　いえ、何の仲でもそれでは義理が。

主鈴　むゝ、濟まねえと思ふなら、おれが賴みを、たつた一晩。（ト主鈴お玉に寄添ふ。）

お玉　それはお安い御用だが、もし。（ト主鈴へさゝやく。）
主鈴　むゝ、それぢやあ彼奴が内に居るゆゑ。
お玉　あれさ、靜におつしやいましよ。（ト上手廊下から下女お菊出來り、）
お菊　お上さん、旦那がお歸りなさいました。（ト兩人びつくり解れて、）
お玉　いつ歸りなすつた。
お菊　今しがたお歸りなすつたが、何だか汚ない婆アさんと、話しをしておいでなさいますよ。
お玉　なに、汚ない婆アさんが來た、誰ぞのお袋でもあるか知らぬ。おゝ湯上りで寒くなつた、お菊やちよつと引ツ掛けてくんな。
お菊　はい〳〵。
ト捨ぜりふにて側にある着物をお玉に着せる。主鈴紙入から金を出し、紙に包み、
主鈴　お菊や、少しばかりだが。（トお菊にやる、）
お菊　毎度有難うござりまする、お上さん、旦那へよろしく。（ト辭儀をする。）
主鈴　いや、お菊のことだから言ひもしめえが、おれが爰に居たことは。（ト拇指を出し、）れ、こに言つてくれるな。

お菊　何でそんなことを申しませう。

お玉　そりやお案じなさいますな、そんなことに掛けては、どんなに氣が利いて居ませう。

お菊　これもみんなお上さんに、仕込まれたせゐでござりまする。

主鈴　ときに、おれはもう歸らうか。

お玉　まだお話し申したいことがござりますから、奥の六疊へおいでなすつて、一口お上んなさいましな。

主鈴　然し、一人で呑んでもどつとしねえ。

お玉　今にわたしが參りますから、ちつとのうち、お菊を相手に。

主鈴　それぢやァ庭の花でも見ながら、

お玉　待つて居ておくんなさいましよ。

主鈴　そんなことをいつて來やあしめえが。

お玉　來るなと云つても參りますよ。

主鈴　その氣休めに迷ふのだ。

お菊　さあ、おいでなさいまし。

主鈴　どれ、奥へ行つて一杯やらうか。

ト端唄になり、主鈴お玉とうなづき、お菊附いて上手廊下口へはひる、お玉跡を見送り、

お玉　ほんに縁といふものは、以前わたしが吉原で玉苗といつて居た時分、お客で來なすつた主鈴さん、わたしが内へ直つてから、久しくお目にもかゝらなんだが、昔馴染に又今度一方ならぬお世話になり、此の間からお借り申した金もかれこれ三四百兩、それもどうした惡縁か、わたしに心があつてのこと、義理に義理が重なつては遂には厭といふにも言はれず、一晩位は目を忍び一緒に寐ずばなるまいが、内の人がいつこくだから、野暮なことを言はねばよいが。

ト お玉思入あつて、金包みを帶の間へ挾む、上手より以前の源左衞門出來り、

源左　お玉、爰に居たか。

お玉　おや、いつお歸りだえ。

源左　今しがた歸つたが、飛んだ者が舞込んだ。

お玉　誰が來たえ。

源左　お爪婆アが來やあがつた。

お玉　いつか一度はあの婆アが、尋ねて來ようと思つたが、よく早く嗅ぎつけて江戸から出て來たね。

源左　内證は四邊に耳があるから、奥の六疊へ連れて行かうか。
お玉　いえ、それよりは座敷から離れて居る此の湯殿、爰の方が知れなくつてよいよ。
源左　それぢやあ爰へ連れて來ようか。（ト源左衞門立上る、此の時下手にて、）
お爪　いえ、お迎ひには及びませぬ。今そこへ參りますよ。
ト端唄の合方になり、下手庭口より以前のお爪傘を持ち出來る。
お玉　おや、お爪どん、よく來なすつたね。
お爪　お上さん、やつとのことで參りました。（ト二重へ上り、よき所へ住ふ。）
お玉　あれきりわたしも此方へ來て、お前も元地でお馴染の主鈴さんのお世話になり、やう／＼爰の跡を引き受け、見世を明けたも十日あと、ちつと家が片附いたら、お前の居所を尋ねようと、思つたばかりでついそれなり、不義理は堪忍しておくれよ。
お爪　どういたしまして、お前さんからお人を受けては濟みませぬ、それに又此處といふきつとした居所もなく、爰に三日あすこに五日、菰を着ない宿無し同樣、ちりん／＼の飛脚屋位が尋ねたつて知れやあしませぬ。
お玉　さうしてわたしがこゝに居ることを、何處で聞いて來たのだえ。

お爪　そりやあ蛇の道はへびで、主鈴さんが後楯に、新見世ながら幅も利く當時府中の流行見世、豪氣なことだといふ噂を、聞いて態々來ましたは、此の雪踏を買つて貰ひたさ。（ト雪踏を出し、）お上さん、どうぞ買つて下さいまし。（トお玉雪踏を見て、）

お玉　むゝ、源の字の燒印は、源さんの雪踏だが、これを買へとはどういふ譯だえ。

お爪　別に譯もないことだが、忘れもしねえ跡の月二十八日の暮れ方に、洲崎の土手で宿無しが揚げた雪踏は覺えのある源といふ字のこの燒印、旦那の雪踏に賣らうと思つて路用を遣つて江戸から、態々こゝまで持つて來たのさ。

源左　成程おれが雪踏だから、買へといふなら買ひもせうが、高が二分か二分二朱の、四ツのばら緒のその雪踏。

お玉　幾らにこれを賣る氣だえ。

お爪　左樣さねえ、此の儘賣つたら二朱か三朱、一分までには賣れめえが、立派なお家がこつちの見込み、百兩に買つて下さいましな。

源左　なに、いつぽんに買つてくれ、以前ならば四百だが、今の相場に直せば二貫一分、こりやあ安いものだ。

ト思入ていふ、お爪源左衛門の顔を見て、

お爪　もし源四郎どん、ぢやあねえ旦那、春氣でお前逆上なすつたか、いつぽんといふのは百兩だよ、ぽんやりしたことを言ひなさんな。（トお玉思入あつて、）

お玉　なに、この雪踏を百兩に、

お爪　買つてもいゝから、賣りに來たのだ。

源左　おれよりこなたが春氣のせゐで、逆上て居るか居らねえが、何で是れを買つてもいゝのだ。

お爪　いゝといふのは外でもねえ、おれがこつそり天井へ、隱して置いた五十兩。

源左　や。

お爪　さあ、お前があの晩盜んだらう。

源左　いゝや知らねえ、覺えはねえ、何でおれが盜むものだ。

お爪　いや知らねえとは言はさねえ、きつとした證據があるよ。

源左　なに、證據があると。

お爪　さあ此の雪踏を引ッ逡つた、乞食が跡へ立戻り、殘らず聞いた二人が惡事、折よく其奴が知つた奴に、二人がこつそり辻堂で寐て居た事から五十兩盜んだ事まで慥かに聞き、證據の雪踏を一分

で買ひ、直に洲崎へ行つた所、丁度日暮れに雨氣づき、闇さは闇しそこ爰と、尋ねるうちに敷島の死靈に恐れて見失ひ、それから今日までざつと一月、その行先きを尋ねるので、占筮にばかりどの位錢を取られたか知れやあしねえ、然し何處で聞いても方角は、西といふのを目當にして一飛びに來た烏山、布田からやつさ足が附き、六社前まで尋ねて來たのだ、何ぼ諸式が上つても此の雪踏が百兩ぢやあ、高いやうだが半分は、おれが金の五十兩、直切らず買つておくんなせえ。

トお爪よろしく思入、お玉源左衞門と顔見合せこなしあつて、

お玉　どういふ譯か知らないが、以前は一ツ三浦屋に三人ながら居た體、賣るの買へのときざをいはず、器用な事にしておくれな、どうでお前のいふやうな事にやあ所詮いかないが、大なり小なり爰まで來た、路用はわたしが上げようから、話し合にしておくれな。

お爪　大なり小なり爰まで來た路用をわたしに下さるとは、有難いお志しだが、百兩の金が一朱かけても、お話し合には出來ませぬ。

お玉　そんな野暮を言はないで、十兩わたしが上げようから、それを路用に玉川で、鮎でも取つて歸りなさいな。

お爪　十や二十の金の欲しさに、爰まで態々來やあしねえ、纏めた金が欲しいから、路用を遣つて出て

來たのだ、百兩取らねえその內は、お氣の毒だが歸らねえ。

源左　歸らずば何時までも、爰に寐込んで居るがいゝ、主鈴さんのお世話にて斯うして居るが羨ましくこつちに覺えもねえ金を、盜んだなどゝ言ひ掛り、わりやあ强請に來たのだな。

お爪　おゝ强請に來たのだ、然し堅氣な所へは行かねえ、人の物をたゞ取んなさる、盜人だから强請に來たのだ。

源左　なに、盜人とは誰がことだ。

お爪　誰でもねえ、うぬがことだ。

源左　どうしたと。（ト源左衞門立ち掛る、お玉留めて、）

お玉　あゝこれ、靜にしなさらねえか、見世の者に知れると面倒だわね。コウおつかあ、お前も最うい い加減にして早く歸りねえよ。

お爪　此の雪踏さへ賣つてしまやあ直にわつちやあ歸りますが、どうあつても買ひませんかえ。

ト思入にて言ふ。此時下手より喜助太助の兩人ばら〳〵と出て、

兩人　さあ、婆アめうしやあがれ。（トお爪を引立てに掛るを振拂ひ、）

お爪　手前達の知つたことぢやあねえ、打捨つて引込んで居ろ。

喜助　いゝや引込んぢやあ居られねえ。

太助　旦那の恥だ。うしやあがれ。（ト お爪を引立てに掛るを、振拂ふゆゑ兩人にて毆る。）

お爪　あゝ痛い〱、よくもおれを打ちやあがつたな。

兩人　打たねえでどうするものた。（ト又立ち掛るを源左衞門留めて、）

源左　これ〱、二人とも打捨つて置け〱、此奴は氣が違つて居るかも知れねえ。

太助　どうで本氣の沙汰ぢやあねえ。

喜助　性の附くやうしめてやらう。

源左　これさ、手荒い事をするなといふに、どんな言ひ掛りをするかも知れねえ。

お爪　何で言ひ掛りをするものだ、盗人だから盗人だといふのだ。

兩人　まだ吐かしやあがるか。（ト又立ち掛るを源左衞門留める。）

お玉　これ〱お前方もしつこい、見世を明けてどうしたものだ、こんな者に構はずと、丁度お客の來る時分、早く見世へ行きねえよ。

喜助　えゝ行きは行きますが、

兩人　あんまりな奴だから。

お玉　えゝ、行けといつたら行かねえのか。（トきつと言ふ。）

喜助　忌えましい、

兩人　婆アだなあ。（ト合方にて兩人下手へはひる。お爪思入あつて）

お爪　それぢやあお上さん、どうあつても買ひませんかえ。

お玉　愛嬌のないことを言ふやうだが、十兩の上はお斷りだ。

お爪　先づ十兩なら出來ねえ相談、出る所へ出て貰ひませう。お上さん、おやかましうございました。

ト　お爪雪踏を持つてずつと立つて行かうとする、お玉思入あつて、

お玉　お爪どん、何處へ行くのだ。

お爪　何處へ行かうとわたしの勝手さ。

源左　出る所へ出るといふのは、代官所へ行くといふのか。

お爪　いゝえ、國分寺へ行きますのだ。

お玉　何でお前は國分寺へ。

お爪　むゝ、今日小金井の櫻から百草を掛けて玉川で、鮎の御漁があると聞く、足利家の御連枝たる滿詮公の御旅宿が、國分寺ゆゑそこへ行くのだ。

源左　そりや何ゆゑに。

お爪　金にならねえ意趣晴らし、お前達の間男から枕捜しの罪を着せ、何科もねえ敷島を非道に殺して其の死骸を、葛籠に入れて流したことまで、理非明白に滿詮樣へ是れから行つて訴人するのだ。どうでおれも荷擔人ゆゑ、命のねえのは合點だが、其處はおれが舌三寸訴人の廉で言ひ拔ければ、御褒美代りに命は助かり、構ひ位で濟む體、可愛や二人板附に消え行く水の安房上總、羽根田を横に澪杭の拔き差しならねえ深い罪、人間僅か五十年、二人合せて百兩の金で命を捨てるとは、思ひ切りのいゝ人達だ。

お玉　そりやあ行くなら何處へでも、勝手に行くがいゝけれど、滿詮樣へ訴人すれば、言はずと知れた三人共お仕置受けねばならねえ身の上、そこはお前は老功で訴人の廉で脱れもしようが、又わたし等の言取りで、科は脱れぬ同罪さ、命に掛るめえものでもねえから、行かねえ方がよからうぜ。

お爪　そりやあお前が言はずとも、抱込まれるも承知だが、金がなけりやあ酒も呑めず、旨えものも喰へねえ日にやあ生きて居ても死人も同然、どうでこれから生きた所が僅か五年か三年だ、年明け前のおれが命、さのみ惜しいこともねえ。

源左　六十近え體ゆゑ惜しくもねえかも知らねえが、どうで死んでも極樂へ、行けねえ罪のお前やおれ、

お爪　先づ一日でも此の娑婆に、居るのが徳といふものだ。

お爪　その損得も知つて居るが、何をいふにも金づくだ、百兩くれりやあ行きもしねえが、十や二十の端た金ぢやあ生きて居ても詰らねえ、おらあ是れぎり死んだ所が、ぼうた布子たつた一枚、形見は跡に虱ばかりだ、お前方は箱から掛つた此處を捨てるのは惜しからう、そこを又捨てさせるのが百兩貸さねえおれが腹癒せ、お上さん意地の悪い婆アさんだね。ハイ、おやかましうござりました。

ト　お爪煙管を仕舞ひ立上る、お玉思入あつて、

お玉　お爪どん待ちな。（ト　お玉以前の百兩を出して、）

お爪　又かえ。

お玉　さあ、是れを持つて行きな。（ト　お爪金を取り上げ見て、）

お爪　や、こりやあ百兩かえ。

お玉　望みの通り百兩上げたら、それで言分あるまいね。

お爪　なに、言分がござりませう、是れが欲しいばかりで、厭なことも言ひましたのさ。

ト　源左衞門心得ぬ思入にて、

源左　思ひ掛けねえ其の百兩、どうしておぬしは持つて居たのだ。

お玉　奉公人を抱へるので青木さんから借りたのさ。
源左　それぢやお跡で困るだらうに。
お玉　なに金は世界の湧きものだから、今出しても又直に、悉皆はひることがあるから、（トお玉源左衛門へ思入にていふ、）お前も骨を折つておくれよ。
源左　むゝ、おれが算段して来よう。（ト此内お爪は金を改め見て、）
お爪　こりやあ珍らしい、小判でございますね、久し振りで見ましたよ。
源左　斯う話しが分つたら、角目立つにも及ばねえから、今夜はこつちへ泊つて行きねえ、昔話しでも仕ようぢやねえか。
お爪　古葛籠に慳貪婆ア、昔話しにやあ縁があるが、井の頭に姪があつて、とんだ雀のお宿だが、そこを尋ねて行くつもり、貰ひ立ちに是れから直に、お暇いたして行きませう。
お玉　もうこれからでは遅からう、今夜は爰へ泊んなせえな。
お爪　なに、まだ暮れて間がないから、四ツまでには行けませう。
源左　それぢやあどうでも帰るのかえ。
お爪　はい、お暇いたします。

お玉　年寄は言ひ出すと、人のいふ事をきかねえから、氣任せにしてお置きよ。

源左　然しこれから井の頭へは、田圃道で知れにくい、おれが道まで送つてやらう。

お爪　いえ〳〵、それには及びませぬ、聞き〳〵行つたら知れませう。

源左　いや、晝なら知れるが夜道ぢやあ、なか〳〵知れねえ。

お爪　それぢやあ送つてお貰ひ申しませうか、然しお氣の毒だね。

源左　何の造作もねえことだ。

お玉　お前支度はいゝかえ。（ト頷で知らせる。）

源左　おゝ、ちよつこ提灯を取つて來よう。（ト合方にて源左衞門上手へはひる。）

お玉　物は當つて碎けろと、斯う色話しになつたからは、以前の誼にこれから度々、此方へ來たら尋ねておくれよ。

お爪　えゝ上りますとも〳〵、此のお金を遣つてしまへば、何處へ參る所もなければ、又御無心に上りますする。

お玉　御無心は恐れるね。

ト此の時奥より源左衞門七首を懐へいれ、小田原提灯と麻裏草履を持ち出來り、

源左　さあ、支度がよくば庭口から、裏手通りを出掛けようか。
お爪　お連れなされて下さりませ。（トお玉提灯へ思入あつて、）
お玉　源さん、印はいゝかえ。
源左　大丈夫、わらびばかりだ。（トちよつと見せる。）
お爪　草鞋でなくては行けませんか。
源左　なに、草履で行けるよ。
お爪　左様なら、お上さん。
お玉　静にお出でよ。
お爪　有難うござります。
源左　どれ、送つてやらうか。

ト時の鐘、端唄になり、お玉源左衞門うなづき合ひ、お爪先きに源左衞門附き花道へはひる、お玉跡を見送り居る、上手障子を明け主鈴向うを見て思入、下手庭傳ひに半七庭下駄にて出でこれを窺ふ、時の鐘、三人顏見合せ、主鈴障子をぴつしやりしめる、お玉ずつと立つを、

半七　お上さん、ちよつと待つて下さりませ。

お玉　何ぞ御用でござりますか。
半七　わしはおしげの客でござりますが、お聞き申したい事がござりまする。
お玉　あの、わたしに。（ト思入、誂への合方になり）さうして、お聞きなさりたいとおつしやりますは。
半七　いや、外のことでもござりませぬが、今の婆アは太え奴でござりまするな。
お玉　え、そんならあなたは。
半七　湯へはひらうと爰へ來て、思はず知らず垣越しに、樣子を聞いて居りました。
お玉　とんだことをお聞きなさいましたね。（トお玉ぎつくり思入。）
半七　どういふ譯か知らないが、強ねだりにねだられて、何で百兩やんなすつた。
お玉　さあ、久しい馴染に困るといふから、それで貸して遣りましたのさ。
半七　それぢやあお前の身寄りかえ。
お玉　いゝえ、他人でござりまする。
半七　ふむ、他人の中なら二兩か三兩、十兩貸せば豪氣なことだが、ぼつかり百兩やんなさるには、大方二人の命にでも、拘はることをあの婆アが、助けたとでもいふやうな事がなければ貸されまい。なあ申し、玉苗さん。

お玉　どうしてわたしが以前の名を。

半七　さあ、知つて居るのは久しい跡、まだ女郎衆で居た時分、たつた一晩初會で行つたが、多くの客にお前の方では忘れてしまひなすつたらうが、わしは忘れず知つて居る、しかもそれから内の女房になつたと聞いて仕方なく、裏も返さずしまつたが、以前からの情人だといふ、若い者の源四郎こ、此の府中へ逃げて來て、上總屋といふ名前にて女郎屋をして居ると、噂に聞いて小金井の、櫻を假託けありやうはお前の顔が見たいので、爰の家へ上つたのさ。ごうで亭主のある體、抱いて寐ようの何のといふ野暮なことは言はないから、厭でもあらうが附合つて、後に一杯呑んで下せえ。

お玉　有難うはございますが、わたしや斷つて居りますから。

半七　それぢやあ酒は斷物かね、酒が呑めずば菓子でも取らう。

お玉　はい、お茶なら頂戴いたしませう。

半七　つい酒呑はくごくなり、一ツことを言ふやうだが、さつきの婆アは遣手だね、慥か熊鷹お爪とかいつて、枕捜しをした科で、三浦屋を出された奴、どういふ尻尾を見られたのか、妲妃と渾名のお玉さん、百兩やつたはごういふ譯だえ。

お玉　さあ、あれは。
半七　話されねえかね。
お玉　さあ。
半七　わしに返事のならねえのは、言ふにいはれぬ事と見えるが、若しや人でも殺したのか。
お玉　え。（トぎつくり思入。半七煙草箱で下を叩き、）
半七　とつた。（トきつと言ふ、お玉びつくりなし、）
お玉　えゝ、何だとえ。（ト思入、半七氣を替へ、）
半七　捕つたといつたも蚤ぢやあねえ、敷居の上へ坐つて居て、足へ痲痺がきれたから、疊の苆を取つたのだ。
お玉　苆を取るには仰山なお客さんの言ひやうに、わたしはびつくりしましたのさ。
半七　爰がやつぱり生醉に、ちよつと芝居の眞似をして、お前に肝を潰させたのだ、はゝゝゝゝ。（ト言ひながら立上り思入あつて、）然し、生醉本性違はず。
お玉　え。
半七　きつと來て下せえよ。

ト誂への端唄になり、半七思入あつて廊下より上手へはひる、お玉跡を見送り、

お玉　何だらう馴々しい、初會に來たと言ひなさるが、遂に覺えぬ顏容、話しのやうに三浦屋に居る時分の事からして、水を向けて裏問ふゆゑ、何にも言はぬがあの客は、もしや廻し者ではないか、油斷のならぬ、（ト此の時上手の窓を明け半七窺ひ、顏を見合せぴつしやり障子をしめる。）事だなあ。

ト時の鐘、誂への端唄にてお玉ぢつと思入、これにて此の道具廻る。

（井の頭上水場の場）――本舞臺三間の間高二重の草土手、上の方一間樋の口、これより舞臺へ壺心に波幕、此の内へ切穴、後黒幕一面の藪疊、上水へ塵芥捨つ可からずの高札、上下藪疊、柳の立木、日覆より同じく釣枝、總て井の頭上水場の體、時の鐘、波の音にて道具留る、と下手より番人畑六、股引尻端折り、竹笠を冠り、山入村といふ弓張提灯、割竹を持ち出來り、

畑六　さて／＼鳥追ひといふ役は、暇のない大役だ、朝から晩まで蓑笠で田畑へ下りる鳥を追ひ、又夜に入ると野荒しを追ひ散らしに歩かねばならぬ、どうで向うは強いから、盗んでしまつた跡へ廻り、出逢はぬやうに仕度いものだ。

ト言ひながら上手へはひる、誂へ靜なる田舍節、蛙の聲になり、花道より以前の源左衛門先きに、小田原提灯を提げ、お爪傘をかつぎ出來り、花道にて、

お爪　田圃道は蛙の聲で、耳やかましくツて話しも出來ねえ。
源左　その内にも日が暮れるこ、世間が靜になるせゐか、滅法騷々しい。
お爪　向うに見える樋の口は、上水の樋の口ぢやねえか。
源左　あれから右へ附いて行くと、井の頭の辨天さまだ。
お爪　それぢやあこれから一筋道、もう送つて貰はずともいゝ、爰から歸つてくんなせえ。
源左　この先きの三股が、悪くすると間違ふから、そこまで送つて行つて遣らう。
お爪　なに、右か左を聞いて行つたら、道の知れねえことはあるめえ。
源左　もうちつとだから一緒に行かうが、ちよつと提灯を持つてくんねえ。（トお爪へ提灯を渡す。）
お爪　えゝ、送らずこもいゝと云ふに。
ト右の鳴物にてお爪入替り、先へ立つて行く、源左衞門後へ下り懐より短刀を出し、お爪を殺さうといふ思入、舞臺下手にて拔きかける、お爪振返る、源左衞門ぎつくり思入あつて懐へ入れると、
今光つたのは何だ。
源左　何にも光つたものはねえ。
お爪　螢の出るにはまだ早いが、人魂でも出たか知らぬ。

源左　氣味の惡い事を言ひなさんな。
お爪　なに、お前よりおれの方が、よつぽど氣味が惡いのさ。
源左　氣味が惡いとは人魂がか。
お爪　人魂ぢやあねえ、お前がよ。
源左　何だと。（ト誂への合方蛙の聲になり、）
お爪　おれを爰まで送つて來たのは、殺す心で來たのだらう。
源左　や。
お爪　こんなことは講釋や話しでよくいふ筋だが、殺されるなら殺して見ろ、年は取つても熊鷹お爪、まだ〱靑い手前達に、殺されるやうな耄碌はしねえ。
源左　何でお前を殺す氣で、おれが送つて來るものか、人に送らしてもいゝけれど、おれが態々送つて來たのは、昔馴染の親切だ。
お爪　いや、親切かは知らねえが、ぴかりと光つた短刀は、鄕太夫から五十兩の手附けに取つた無銘の業物、それでおれを殺す氣だらう。
源左　なに、そんなものは持つちやあ居ねえ。

お爪　野郎め嘘を吐きやあがるな。（トお爪源左衞門を捉へ、懐から短刀を引出し、）この短刀は、何だ。

源左　むゝ。

お爪　これでおれを殺す氣だらう。（トきつと言ふ、源左衞門も思入あつて、）

源左　さう知られちやあ隱しはしねえ、如何にもわれを殺す氣で、（トお爪の持つて居る短刀をぽいと引つたくり、）この短刀を持つて來たのだ。（トきつと見得、お爪せゝら笑ひ、）

お爪　しやら臭えことを吐かしやあがるな、殺す心で手前の來たを、承知で爰まで送らせたはおれが方でも殺す氣だ、枕捜しで三浦屋を追ひ出された時天井へ、隱して置いた五十兩、手前に盗まれ手振編笠、投込みで行く死人同樣六道錢もねえ始末に、土瓶の酒のお餘りを貰つて吞んだこともある、今日といふ今日百兩の金でおれも浮まれる、ほんに手前が殺さうと送つて來たは遠方御苦勞、お禮がはりに熊鷹婆アが、手づから引導渡してやるから、燒場にあらぬ焚捨ての野火の煙と消えてなくなれ。

トきつと見得。

源左　そりやあお前の目から見たら、まだ言草も青二才、子供のやうに思ふであらうが、三年たてば三歳兒の魂、百兩とられた悔しさに、爰までおれが送つて來たのは、狼者と人にもいはれた上總

無宿の源四郎坊主。腕に覺えの剃刀で髮剃すつて引導は、坊主の役だ手前よりおれの方から渡してやるから、念佛唱へて覺悟しろ。

お爪　えゝ言はして置けばいゝかと思つて、腕に覺えのあるのねえのと、うぬ等が手に合ふ婆アぢやねえぞ。

源左　むゝ、合ふか合はぬか合せ砥で、根が髮結の源四郎が、寐刃を合した切味見せうか。

お爪　さう云ふわれから。（トお爪傘で打つてかゝる。）

源左　何を小癪な。

ト源左衞門短刀で切つてかゝり、ちよつと立廻り、上手にお爪傘をかつぎ、下手に源左衞門短刀を差し附けきつと見得、誂への説經ぎぬたと錫杖を冠せし鳴物になり、兩人土手を遣ひ立廻り、此の内お爪傘にて源左衞門の短刀を打ち落し、直に取つて切つて掛る、源左衞門危く土手からすべり落ち直に水道の流れへ落ちろ、どんと水の音、ぱつと水の花立つ、お爪土手の上にて流れを見込み、思入あつて、

お爪　ざまを見ろ間抜野郎め、土手から辷つて水道へ落ち、水勢早き雨上りに見る間に下へ流されたが、水心がねえと見える、何にしろ思つた通り百兩とつた其の上に、五十兩の形にとつた此の短刀が

不思議に手に入り、思ひがけねえ金儲け、二度あることは三度といふから、もう一遍たんまりと早く金にあり附きたいものだ。

ト言ひながら短刀を風呂敷に包み、腰にさす、此の時後の藪の間から主鈴出て窺ひ刀を拔き、お爪どうとなり、

主鈴　その金は身共が遣らう。（ト肩先から切りさげる、

お爪　やあ、おれを切つたのは、何奴だ。

主鈴　誰でもねえ、青木主鈴だ。

お爪　えゝゝゝゝ。（トびつくりなす、一ッ鉦凄き合方になり、主鈴前へ出て、思入あつて、）

主鈴　あんまり金を欲しがるから、刃金をわれにくれて遣るのだ。

お爪　思ひがけねえ主鈴どの、何でおれを殺すのだ。

主鈴　おゝ、われが持つたる金ゆゑだ。

お爪　何と。

主鈴　さつきお玉が手前に渡した、あの百兩は宵の口、おれがお玉に貸した金、ゆすり取つたを障子越し後でとつくり見て居たゆゑ、生して置いては後日の妨げ、直に其の場で殺さうと思つたなれど殺したら、見世を明けて間のねえ上總屋、内の不吉と思ふから蟲を怺へて窺ふうち、源四郎が送

つて行くは途中で殺す心と知つたが、若し手に餘る其の時はと見え隱れに附けて來たが、案の定手に餘り、罪科深き井の頭、水道へ落ちて生死さへ知れぬ朧の雨上り、水勢早く廻り來る因果車や道端の地藏の顏も三度目に、ゆすつた金も取返し、青木主鈴が殺してやる。（ト此の時日覆にて時鳥笛、主鈴空を見て、）季候も早く夜もすがら、死出の田長の初聲を末期の耳に聞き德に、今を盛りと土手に咲く蓮華の上で往生しやれ。

トやはり時鳥笛、主鈴よろしく思入、お爪口惜しき思入にて、

お爪　やあ卑怯未練な青木主鈴、不意を喰はずばやみ〳〵と、わい等の手に合ふ婆アぢやねえが、聲も掛けず切られた深手に、假令體は自由にならずと、此の儘われに殺されようか。

主鈴　えゝ、愚癡をこぼさずゆすつた金を、おれに返して默つてくたばれ。

ト一ツ鉦凄き合方にて、お爪短刀にて主鈴に切つて掛る、主鈴刀にて是れを受け、兩人立廻りよろしくあつて、土手の上にて主鈴短刀を打落し、又一かせ切る、お爪糊紅になり、

お爪　小癪なことを。人殺しだ〳〵。

ト言ひながら土手から轉げ落ち、やはり人殺し〳〵と言ひながら花道の方へ這ひながら逃げて行く、主

鈴は件の短刀を取上げ、思入あつて柳の木へ短刀を突き立て、お爪を見てつか〳〵と花道へ行き、髻を摑んで引き附け、

主鈴　これ、逃げて行くのは助かる氣か、五十年の定業から生き延びてゐるわれが體、どこまで慾が深いかしれねえ。

お爪　人殺しだ〳〵。

主鈴　えゝ、喧しいっ

ト引き摺つて舞臺へ來り、立廻つて主鈴お爪の脇腹へ突立てる、お爪突かれた儘立身にて苦しむ、主鈴刀を拔く、お爪ひよろ〳〵と主鈴の方へ來る、主鈴足で蹴る、これにてばつたり倒れる、糊紅を拭ひ鞘へ納め、懷から金を入れし財布を出し我が懷へ入れ、柳の木の短刀を取りお爪の首を搔き切り落ちてゐる風呂敷へ首を包み、短刀の糊紅を拭ひぢつと見て、

この短刀は名作ながら、殺氣のあるので不吉ゆゑ、おれが賣つたが廻りめぐつて、手にはひつたのは不思議の一つ。（ト此の時以前の畑六出で主鈴を透し見て、）

畑六　畑荒しめ。

ト組附くを振拂ひ、短刀の鞘を捜す、又畑六掛るを立廻り、此の内鞘を拾ひ、しやんと納め、

主鈴　どれ、更けない内に。

畑六　どつこい、われは。

ト又粗附くを振拂ひ、ちよつと立廻り、畑六を當てる、畑六うんと立すくみになり、主鈴首と短刀を持ちつか〳〵と花道へ行く、よき程に畑六見事に轉る、寺鐘にて主鈴花道へはひる。是れにて道具廻る。

（上總屋座敷の場）＝＝本舞臺三間の間平舞臺、眞中銀張り秋草の地袋戸棚、此の上誂へ通しの棚、上の方一間床の間、袋表具の南無妙法蓮華經の掛物、下の方一間手紙を張りし、袋戸棚、この下茶道具を並べ、上の方一間下地窓のある鼠壁、下の方一間折廻し障子屋體、總て上總屋座敷の體、爰に以前のお玉誂への膳を控へ、夜食を喰つて居る體。茶椀皿などよろしく、側に二ツ物の廣蓋、酒道具燭臺を點し下女お菊給仕をして居る、下手に以前の喜助控へ居る、此の見得端唄の合方にて道具留る。

お玉　お菊や、義太夫の三味線の聞えるのは、何處だの。

お菊　内の二階でござりまする。

お玉　わたしや隣だと思つて居たよ。

喜助　今日江戸から和合連の衆が、小金井の花見がてらこちらの家へお出でになつて、今夜淨瑠璃がござりますのさ。

お玉　そりやあ面白からう、語り物は何だえ。
お菊　今和紫さんといふお客が、御所櫻の三段目をお語りなすつたが、男も好うござりますが、淨瑠璃も好うござりまする。
喜助　お上さんにお聞かせ申したうござりました、素人とはいひながら、生業人は跣足でござります。
お菊　是れから今に昔八丈の、お駒の引廻しがござりますさうだが、嘸面白うござりませう。
喜助　女郎衆が浮氣になつて、そこへばかり行つて居るので、外のお客がやかましく、小言ばかり聞いて居ります。
お玉　おゝ外のお客といへば、おしげの所へ初會で上つた、好い男は何だの。
喜助　さつきも青木の旦那さまが、商人風に見えるけれど武家だとおつしやりましたが、たゞの人とは思はれませぬ。
お玉　よくおしげに氣を附けろと、さう言つてくんな。
喜助　畏りました。（ト合方にて以前の主鈴包みを提げて出來り、）
主鈴　内證かと思つたら、爰に居たのか。
お玉　お前さんこそ、何處へ行つてお出でなさいました。

主鈴　ちよつと近所まで行つて來た。喜助、もう何時だな。

喜助　へい、引け過ぎでござりまする。

お玉　これ喜助や、旦那がお出でなすつたから、何ぞお肴を。

喜助　へい、料理番へ申し附けませう。

お玉　早くしてくんなよ。

喜助　畏りました。

お菊　私も一緒に行きませう。（ト合方にて兩人下手へはひる、主鈴思入あつて、）

主鈴　今の肴の來る間、おれが酒の肴を遣らうか。

お玉　何でござりますか、有難うござりまする。

主鈴　さあ、此の包みをあけて見な。（ト首の包みを出す、お玉取つて、）

お玉　大層重うござりますね。（トお玉包みを明ける、中より婆アの首出る、お玉びつくりして、）え、この首は。

主鈴　これぢやあ一杯呑めるだらう。（ト時の鐘、新内の合方になり、）

お玉　どうしてお爪がこの首を、持つてお出でなさいました。

主鈴　宵に爰へ來た時に、お爪が百兩ゆすつたを障子越しに聞いて居て、よツぽど出ようと思つたが、井の頭まで源四郎が送つて行くのは殺す氣と、推量したゆゑ控へて居たが、年は取つても熊鷹婆ア手に餘ると思つたから、誰にも言はずこつそりと跡を附けて行つた所、案の定源四郎は土手から辷つて川へ落ちたが、雨降擧句の水勢に、見る間に下へ流された。（トお玉びつくりして、）

お玉　それぢやア水にしましたかえ。

主鈴　なに、水勢は早いけれど、底の知れた上水ゆゑ死ぬ氣遣えはねえけれど、水はよツぽご呑んだらう、そこでお爪が濡手で粟、さつきゆすつた百兩に五十兩の短刀を、重荷に小附持つて行くゆゑ、聲をもかけず後から、ばつさり浴びせて殺してしまつた、金は元より此の短刀、首までおれが取つて來た。

ト金財布と短刀を出す。

お玉　よく取つて來ておくんなさいました、お前さんがお出でなさらないと、婆アにみんな取られる所まことに有難うござりました。

主鈴　慾徳づくはさて置いて、彼奴を生して置くときは、枕を高く寐られぬゆゑ、それでおれが殺したのだ。

お玉　それで安心いたしました。
主鈴　いや、まだ安心は出來ねえぞ。
お玉　え、そりやなぜでござります。
主鈴　お玉、これを見やれ。（ト懐の紙入より願書を出して見せる。）
お玉　何でござります。（トこれを見る。）
主鈴　おぬしがお爪と源四郎に、敷島を責殺させ葛籠へ入れて海へ流し、駈落の體にして置いた、惡事を一々書立つておれが所へ願つて來たが、表向にする時は二人へ直に繩を掛け江戸表へ差出せば言はずと知れた死罪が究狀、この上總屋も上り物、なんと安心は出來めえが。

ト お玉當惑の思入にて、

お玉　とんだ事が出來ましたが、どうか仕樣はありますまいか。
主鈴　そりやあおぬしの心一つで、危い命も助かつて、爰の家もこの儘に、無事に納まることがある。
お玉　なに、わたしの心一つとは。
主鈴　何の造作もねえことだ、おれに其の身を任せれば、おぬしの命は助けてやる。
お玉　むう。

主鈴　常からおれが言つて居るのに、兎角蛇の生殺しで、きつとした返事をしねえが、今改めて此の主鈴に身を任せれば引ツくり返し、彼奴等を罪に落す工夫は、我が方寸にあることだ、もし又それが行き損なへば片ツ端から此の如く首にすればそれまでだが、それもおぬしが心次第で、おれに其身を任せにやあ、惜しいものだが此の首がころりと落ちにやアならねえぜ、死ぬと生きるの境だから、とつくり思案をするがいゝ。(ト主鈴煙草を呑みながら思入にて言ふ、お玉ちつと思入。)

お玉　もし青木さん、まだわたしも三十になるやならずで死んだ日には、此の世へ產れた甲斐がない。切ない時の神頼み、此の身をお任せ申しますから、命を助けて下さいましな。

主鈴　そりや隨ひさへする事なら、きつと命は助けてやる。然し妲妃と渾名のお玉、口約束では賴まれにくい、野暮なことだが心中見せやれ。

お玉　その心中は今爰で。(ト件の短刀を取り、指を切らうとする、主鈴これを留めて、)

主鈴　あゝこれ危ねえ、まあ待つた。指を切るとはあんまり時代、そんなことぢやア不承知だ。

お玉　さうしてどうすりや、お前の氣に。

主鈴　おゝ、おれへ立てる心中なら、源四郎を殺してしまへ。

お玉　えゝ。(トびつくり思入、合方替つて、)

主鈴　さあ、いくらおれに随ふと、口で言つても其の以前、お嬢さんで居た時分、源四郎ゆゑ勘當受け女郎にまで賣られても思ひ切られぬ二人が中、彼奴が居ては寐覺めが悪い、どうで始終は切られる體、外の者が殺すより、おぬしが手に掛け殺したら、可愛い女房のことだから迷はず往生するだらう。（トお玉默つて俯向きゐる。）默つて居るは心が殘り、源四郎を殺されねえのか、さういふ事ならおれもそれまで、表向きで江戸表へ縛つて出すからさう思へ。

ト主鈴思入あつて、ずつと立つ。お玉こなしあつて裾を捉へ、

お玉　あもし、まあ〳〵待つて下さいまし。

主鈴　おれを留めるは、思案が附いたか。

お玉　あい。

主鈴　殺す心になつたのか。（トきつと言ふ。）

お玉　さあ、今更こんなことを言ふと、心の知れた女だと思ひなさるも知つては居れど、實は疾うからあの人にも、困り切つて居たけれど、今更切れるに切れられず、夫婦になつては居るもの丶見世を出したもあなたのお蔭、わたしのやうな莫連でもどうした御縁か兎やかうと、おつしやつて下さるのが、實に嬉しくお心に隨ふ氣では居るけれど、亭主があれば返事もならず、にや〳〵やにし

て居りましたが、どうで命のないことなら、御恩になつたあなたへ心中、今にも内へ歸つたら。

主鈴　そんなら、おぬしが、

お玉　心を鬼に、殺しませう。

主鈴　むゝ、それでこそおれへの心中、幸ひお爪を殺さうと、源四郎が持つて居た、此の短刀ですつぱりやりやれ。（ト以前の短刀をお玉へ突附ける、お玉とつて思入あつて、）

お玉　酒に醉はした其の上で、ぐつすり遣る氣でござりますが、もし手に餘つた其の時は。

主鈴　おゝ、おれが助太刀して遣るから、心丈夫にすつぱりやりやれ。（ト時の鐘、お玉拔きかけ思入あつて、）

お玉　とはいへ是れまで、

主鈴　心が殘るか。

お玉　何の未練が殘りませう。

主鈴　流石は武士の、

お玉　娘のわたし。

主鈴　どりや、手料理を、（ト刀を持ち立上り、）見物しようか。

ト唄、時の鐘にて主鈴思入あつて、上手屋體の内へはひる。お玉ぢつと切なき思入、この時奥にて

口上『東西々々、此の處お聞きに達しまする淨瑠璃外題、戀娘昔八丈、鈴ケ森引廻しの段、初まり左樣。』

木を打ち、

ト是れにて床の淨瑠璃になり、

〽人の身の捨て所とや名にふりし鈴ケ森の仕置場所、靑竹にて矢來を構へ傍にきらめく拔身の槍、この世からなる地獄の責め。

ト此の内お玉短刀を取り、思入あつて側にある燗德利の酒を茶椀へつぎ、無理酒を呑み咽る事など

よろしくあつて、

お玉 折も折時も時、二階で語る淨瑠璃は、今の世までもあのやうに亭主殺しの名を殘す、白木屋お駒が引廻し、思はず聞くも此の身の辻占、忘れもしねえ十五の暮から、屋敷を逃げて長の年月、苦勞苦患をした亭主、義理を云へばわたしも一緒に、死なねばならぬ所なれども、當てもない冥土へ行くより、やつぱり娑婆で樂がしたさに、殺す心になつたれど、惡い人でも亭主ゆゑ、酒でも呑まにやあ殺せねえ。

〽子を思ふ闇より闇に目もわかず、たゞさへ闇き父親が、

ト お玉ちつと思入あつて、又酒を呑む。此の內下手より以前の源左衞門着附を着替へ、鬘水入りの鬘になり、酒に醉ひしこなしにて出來り、花道附際にて、

源左　あゝ醉つた〳〵、こんなに醉つた積りぢやあなかつたが、內へ歸つたら滅法に醉つた。
〽涙に見えぬ道筋を、たうとう彼處へたどり附き、（トひよろ〳〵と眞中へ來り、）
お玉、今歸つた。（ト下に居る。）

お玉　大層遲かつたね。（ト誂への合方になり、）

源左　つい歸りに忠次が所へ寄つて、一ぺい呑んで遲くなつた。えゝい、あゝ醉つた〳〵。

お玉　水でもあげようか。

源左　水は眞平、澤山呑んで來た。

お玉　さうしてお爪婆アは、どうしたえ。（ト源左衞門思入あつて、）

源左　むゝ、お爪婆アか。井の頭の水道端で殺さうと思つた所、年は取つても手强い婆ア、よつぽど叩き合つたが、何といつても女だな、段々おれに追ひ詰められ、逃げる機に土手から辷り、川の中へどんぶり落ちたが、此のごろの長降りで、水勢が早いから、ずん〳〵下へ流れて行つた。

お玉　そりやお前がかえ。

源左　なに、おれぢやアねえお爪婆アがよ。

お玉　大概なことをお言ひでないよ、お前がどんぶり川へ落ち、着物を借りて來たのだらう。

源左　成程着物は借りて來たが、川へ落ちたことはねえ、着物は泥が着いたから、忠次が所で借りて來たのだ。

お玉　泥が附いたといひなさるが、天窓がぐつすり濡れて居るぜ。

源左　え。（トびつくりなし天窓へ手をやり、）さう知られたら仕方がねえ、實はおれが落ちたのだ。

お玉　それぢやあお前は井の頭まで、川へ落ちに行つたのだの。意氣地のねえことだの。

源左　さう言はれちやあ面目ねえ、穴へでもへひりてえ。（ト天窓を押へ面目なき思入。）

お玉　なに、穴へでもはひりたいえ。

〽今日が親子の一世の別れ、せめて最期の暇乞ひ。

トお玉前表にいふかといふ思入よろしく。

源左　あゝ、内へ歸つたら大層醉が出た、さあ早く寐ようぢやねえか。

お玉　まだわたしは拜みをしねえから、寐たくばお前先きへお寐よ。

源左　えゝ、邪險なことを言やあがるな。（ト源左衞門醉ひたる思入にて、ごろりと倒れる。）

〽見れば嚴しき竹垣に、さも恐ろしき拔身の槍、

ト お玉源左衞門を見て、短刀を拔きかけ殺しかねる思入。

お玉　何にも知らず醉倒れ、枕もせずに高鼾、惡い人だがこの年月、互ひに苦勞苦患して、夫婦になつた二人が中。

〽これで我が子を殺すかと、思へば胸も張裂く思ひ、

ト お玉思入あつて、源左衞門を搖り起し、

もし、迎ひ酒に一つお上りな。

源左　もう〳〵呑めねえ、堪忍してくれ〳〵。

お玉　何だな、そんなしみツたれなことを言つて。

源左　それぢやア半分ついでくれ。（ト茶椀を出す。）

お玉　ちつさぬるいよ。

〽未來は奈落へ落ちるとも、お慈悲ぢや願ひ上げますと、愚に返りたる親心。

ト お玉ついでやる、源左衞門是れを呑み、咽せかへりよろしく思入あつて、

源左　お玉、喉へつかへてもう呑めねえ、後生だから半分助けてくれ。（ト出す。）

お玉　それぢやあ半分助けるよ。（トお玉これが別れといふ思入よろしく。）

源左　あゝ、いゝ心持ちになつた、是れぎり往生してえものだ。南無妙法蓮陀佛か。さあお玉、早く往生さしてくれ。

お玉　今往生さして上げるから、爰へ來てお寢よ。

〽さあ／＼こちへと手を取つて、暫し傍に介抱なす、

トお玉手を取り、上手へ來る、源左衞門しだらなく倒れ、直に寢入りし思入、お玉これを見て搔卷を上へ掛け、

醉倒れたは丁度幸ひ、聲立てさせず一突きに。（ト短刀を持ちきつと思入、時の鐘きびしく。）

〽思ふこと叶はねばこそ憂き事の、戀と義理との諸手綱、不便やお駒は夫の爲め斯かる憂き身の縛り繩、顏さし入るゝ懷を、もれて流るゝ淚橋、屠所の羊の歩みより果敢なき身ぞと觀念し、力なく／＼引かれ來る。

ト此の内お玉四邊の膳など片附け、短刀を拔き放し行燈で見て、杯洗の水を掛け鼻紙で拭ふ。此の時源左衞門搔卷をはねのけ、胸を出しふんぞり返つて寢る、お玉側へ寄り、突き兼ねる思入よろしくあつて、トヾ胸元を突かうとして手が狂ひ襟を突く、これにて源左衞門糊紅になり、起上り、疵へ手を

やりびつくりなし、

源左　や、何でおれを殺すのだ。

お玉　意氣地がねえのに、飽きたからよ。

源左　何と。（ト立上らうとしてどうとなる。時の鐘、凄き合方になり、）

お玉　屋敷育ちの世間見ずに、初めて男に口說かれたフツと心の迷ひから、お前と情人になつたが因果、産みの親にやあ勘當受け、苦界へ賣られ此の年月、人に妲妃と言はれるのも皆惡足のお前ゆゑ、いつぞは切れよう〳〵と思つた所へ主鈴さんが、御新造さまこいはれる氣だよ。

源左　むゝ、さては以前の買馴染、金があるのに目がくれて、わりやあ亭主を殺すのだな。

お玉　えゝ、やかましい、靜にしねえ、世間へ知れりやあお前の恥だ、口數きかずと默つて死にねえ。

源左　いゝや一人は死にやあしねえ、手前も一緒に抱き込んで。

お玉　えゝ、愚癡なことを言ひなさんな。

〽身を切りさかれ憂き恥を、晒すも定まる因緣づくつ

ト淨瑠璃の切れ、誂への鳴物にて立廻りの內、源左衞門短刀を捥ぎ取り、お玉を突きに掛る、お玉危

くなる。

〽折もこそあれ、こなたなる、群集押分け兩親が、

ト上手より以前の主鈴出で、刀を抜き源左衛門を一刀切り下げる。

〽娘の姿見るよりも、前後不覚に取りみだし、（ト源左衛門主鈴を見て、）

源左　こりや、二人言ひ合せ、此の源四郎を殺すのだな。

主鈴　知れたことだ。（ト又誂への鳴物になり、三人立廻り、主鈴源四郎を切倒す、是れにてどうとなる、）それ止めを刺しやれ。

お玉　あい。（ト思入。）

〽歎きを止めて下さるが、少しは冥土の罪滅し、

ト　お玉乗つかゝり止めを刺す、主鈴思入あつて、

主鈴　おゝ、心中見えた。

お玉　やつとのことで仕止めました。

主鈴　むゝ、女の手際にや天晴だ。（ト主鈴短刀を抜き首を切る。）

お玉　この死骸はどうしませう。

主鈴　遺恨を受けたものがあつて、夜更けて裏から忍び入り、首を持つて行つたと言へ、おれが方でいいやうに江戸表へは訴へれば、それぎり跡に調べはない。

お玉　初めて人を殺しましたが、どつとしねえものだねえ。

主鈴　そりやあ心が殘つて居るからだ。

お玉　何で心が殘つて居ませう、昨夜までも一ツ夜着、枕を並べて寐た亭主を、心が殘つて殺されませうか、これでわたしの疑ひが、晴れましたでござりませうね。

主鈴　むゝ、晴れたとも〳〵、今日といふ今日さつぱりと、心にかゝる雲も晴れ、月の武藏の府中宿雜魚寐も緣の六社前、おれとおぬしに婆アと源四郎、天窓の數も四人部屋。（ト膳の上へお爪と源四郎の首を並べ、）二つ並べた此の首は、時に取つての尉と姥、何の中でも夫婦の固め、幸ひ爰に有合ひの、これで、祝儀のまなびをしよう。（ト主鈴有合ふ膳の上に、燗德利猪口あるを出す。）

お玉　それぢやアちよつとてう附けに、わたしが呑んでお前さんへ。

主鈴　媒人いらずに三々九度。

お玉　何だか極りが惡いねえ。

〽今死ぬる身の今までも、おぼこ娘のあどなさを、思ひ遣りつゝ兩親が泣く音は濱邊に打ち寄

する、波に波增す如くなり。

ト此の内お玉猪口を取上げる、主鈴酌をなす。お玉首へ思入あつて呑み、主鈴へ差し、よろしくあつて、時の鐘。

主鈴　あの鐘は、何時だ。

お玉　八ツでありますよ。

主鈴　まだ明けるには、二時あるな。

お玉　一寐入りしませうか。

主鈴　久し振りで遠慮なく。

お玉　今夜は雑魚寐と、

主鈴　仕ようかい。

ト時の鐘誂への端唄になり、兩人上手屋體へはひる。時の鐘、合方になり、下手より以前の喜助出來る、跡より以前の半七野袴打ッ裂き羽織、大小にて出來り、下手にて喜助に囁く、喜助頷き屏風の側へ來て、

喜助　もし、お上さん〳〵。

お玉　誰だ、喜助か。
喜助　ちよつとお目に掛りたいと、おつしやるお客様が參りました。
お玉　どなたか、彼方へお通し申しな。
喜助　爰で逢ひたいとおつしやいます。
　　　ト是れにてお玉主鈴上手屋體より出來り、半七を見てびつくりなし、
主鈴　や、そこに居るのは、
お玉　宵に上つた商人衆。
主鈴　さてこそ武家であつたるか。（ト半七前へ出で、）
半七　先刻ちよつと御意得しが、又候寐所へ推參いたし、失敬御容赦下されい。
　　　ト辭儀をなす、主鈴も脇差を持ち、上手へ出で、
主鈴　拙者は當所の郡代にて、青木主鈴と申す者、して其許様は。
半七　拙者は即ち足利家の御連枝、左衞門頭滿詮が近臣、烏山隼人と申す者。
主鈴　や、
半七　以後はお見知り下さりませう。

主鈴　して、鳥山氏には何御用にて。

半七　主人滿詮の命を受け、拙者是れへ罷越せしは、其許初め此の家の主人源四郎夫婦の者に、詮議あつて參つてござる。

主鈴　して我々に、

兩人　御詮議とは。

半七　元大磯の廓に於て、抱への遊女敷島に、身に覺えなき罪を負はせ非業の最期をいたさせしは、それなるお玉源四郎、遣手お爪が仕業なる事分明に相分り、彼れが親五平次と申すもの其許へ訴へ出しに、却つて五平次が仕業などゝ逆さ吟味をなさるよし、今日小金井の花御遊覽に、御發駕ありし殿の御前へ、五平次が直訴なせしゆゑ、主命うけて某が穿鑿に參りし所、お爪は其許、源四郎はお玉が殺害いたせし條、重ね〴〵も不屆き至極、繩打つて召連れ參る、さあ尋常に覺悟めされ。

ト主鈴思入あつて、

主鈴　如何にもお爪は某へ、無禮せしゆゑ某が、是非なく手討ちにいたしてござるが、

お玉　源四郎を殺せしは、正しく遺恨のあるものが、いたせし事と存じまする。

喜助　あゝもし〳〵、其の言譯はいけませぬ、何もかも私が、みんな喋べつてしまひました。
お玉　えゝ、言はねえでもいゝことを。
半七　やあ、斯はどの惡事をなすにも似ず、其の言譯は卑怯未練、叶はぬことゝあきらめて、尋常に繩受けるか。
兩人　さあ、それは。
半七　異議に及ばゞ多人數にて、手籠めになして繩かけうか。
兩人　さあ。
半七　繩受けめさるか。
兩人　さあ。
半七　さあ。
三人　さあ〳〵〳〵。
半七　返答は、なゝ何と。
トきつと詰寄る。これにて主鈴、お玉これまでといふ思入あつて、
主鈴　むゝ脫れるだけはと思つたが、理非明白な滿詮公へ直訴されたらもうこれまで、とても死ぬなら

花々しく、此の場に於て。
喜助 及ばぬ事だわ。(トちよつと掛るを、主鈴拔打ちに切倒し、きつと見得。)
半七 手向ひなせば。それ、者共。(ト上下にて、)
大勢 はあゝ。(ト上下より幕明の旅人を始の、黒四天の捕手八人出て、)動くな。(ト兩人を取巻く。)
主鈴 やあ、數百人にて取り圍むとも、物の數にて數ならず。
お玉 成らば手柄に、
兩人 搦めて見よ。
半七 何を小癪な。

トどん／＼になり、皆々兩人へ打つて掛る、主鈴は刀、お玉は短刀にて立廻り、よき見得よりどんどんの入りし誂への鳴物になり、主鈴半七十手にて烈しき立廻り、お玉は皆々と立廻りごつちやになり、主鈴上手の窓を打ち破り、此の内へ飛び込みはひる、跡皆々お玉と立廻り存分あつて、トヾお玉叶はずなり、

お玉 もうこの上は。(ト自害しようとするを半七留めて、)
半七 やれ待て、自殺は相成らぬぞ、汝を殺すは外にあり。

お玉　何と。
半七　やあ〳〵、それに控へし者共これへ。
四人　はあゝ。
　トやはりどん〳〵にて、下手より十三郎、五平次、五郎吉和歌野を背負ひ、皆々旅裝にて出來る、お玉見てびつくりなし、
お玉　や、思ひがけない十三郎、それに隨ふ五平次五郎吉、やゝゝゝゝ。
半七　敷島が敵妲妃のお玉、その方共に遣はす間、此の場に於て敵を討ちやれ。某檢分いたすであらう。
四人　有難うござりまする。（トこれにて半七上手の床几へ掛る、四人お玉に詰寄る。）
五平　お許し受けし上からは、恨み重なる娘が敵、
十三　十三が爲には妻の仇、
五郎　この小坊主には、
和歌　親の敵、
五平　さあ尋常に、

四人　勝負なせ。（トお玉きつと思入あつて、）

お玉　むゝ、斯くなる上は最早これまで、手は下さねど敷島は、如何にもおれが殺させた。

四人　さてこそな。

お玉　敵とねらふ上からは、片ツ端から返り討ちだぞ。

四人　何を小癪な。

トどん／＼白囃子になり、十三郎は脇差、和歌野は短刀、五平次、五郎吉は棒を持ち立廻りになりよろしく、此の内上手へ陰火燃ゆることあつて、お玉和歌野の短刀を持ち、手を捉へ脇腹へ突込む。皆々びつくりなし、

皆々　やゝ、これは。（トお玉どうとなり、）

お玉　今ぞ悪心発起なし、これなる和歌野が手に掛り死ぬのが一ツの身の言譯、さあ立寄つておた／＼に、斬つて恨みを晴らして下され。

半七　ほゝお、悪に強きは善にもさ、改心なせしは天晴なり、いざ一太刀づゝ恨みを晴らせ、跡に主命蒙りし隼人が死刑に行はん。

十三　娘が恨を晴らせし上は、

五平　これにて最早、

三人　われ〳〵は。

半七　然らば身共が介錯なさん。（トお玉の側へ來る。）稱名唱へて覺悟なせ。

お玉　どうで地獄へ行く體、お念佛は申しませぬ。（ト首を突き出す。）

半七　えい。

　　　トお玉の首を打つ、これにてお玉後へ倒れ誂への切首出る、これにて陰火消える。

　　三つの首級を、あれなる棚へ。

捕手　はッ。

　　　ト正面の棚へお玉、源四郎、お爪三人の首を並べ、

半七　お玉、源四郎、遣手のお爪、惡事に與せし三人が、

十三　その身の果ても府中宿、

五平　たえぬ驛路の鈴ヶ森、

五郎　所も安房さ上總屋に、

半七　床に掛けたる題目の、

十三　掛地は則ち無縁塚、
五平　また袋戸は捨札に、
五郎　罪科記す、
四人　手紙の張交ぜ。（ト時の鐘、鶏笛。）
捕手　いで此の上は、主鈴が行方を、
半七　尋ね捜さん、ぬかり居るな。
捕手　心得ました。
半七　その方共は故郷へ早く。
十三　はゝ、有難う。
　　　ト辭儀をするを木の頭。
三人　ござりまする。
　　　ト半七上手にて繩捌きをする、十三郎五平次は嬉しき思入、五郎吉は和歌野に辭儀をさせる、この模樣、時の鐘の太鼓、鶏笛にてよろしく、

ひやうし　幕

ト時の鐘、波の音にてつなぎ、直に引返す。

（小金井捕物の場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中に丸物の小金井橋、左右低き土手板、上下に大樹の櫻の立木、日覆より同じく櫻の釣枝二段におろし、向う在體夜の遠見、總て玉川上水小金井櫻の體、時の鐘、波の音にて幕明く、と下手より、○□△◎の百姓四人、尻端折り竹槍を持ち出來り、

○　これ金十、時ならぬ夜る夜中、竹法螺を吹いたゆゑ、盗人でもはひつたかと、庄屋殿へ馳附けたら、

△　今日國分寺へ泊つてござる、滿詮樣の仰せにて、捕物があるとやら、

□　それ故端々を固めろと、庄屋どのから嚴しい言附け、

◎　その捕物は御郡代の、主鈴さまだといふことだ。

○　常日頃から惡い人ゆゑ、

△　何か御詮議があると見える、

□　然し勝れた手利なれば、

◎　滅多に捕られることではあるまい。

○　何にしろ焚火でもして、張番しませう。

三人　それがいゝ〳〵。

○　さあ〳〵ござれ〳〵。

ト仕出し上手へはひる。本釣鐘、誂への合方、櫻の花ぱら〳〵と散り、ばた〳〵になり。花道より以前の主鈴、長襟下着裝大小尻端折りにて出來り、花道にて跡を振返り見て、ほつと思入、

主鈴　最早向うは小金井橋、爰まで來るうち一人も我を追ひ來るものなければ、伏置く捕手の手段もあるまじ、智勇兼備の藏詮公が嚴命なりと聞きしゆゑ、網裏の魚と思ひの外危き難を脫れしは、未だ運命盡きざるか、是れから秩父の山越しに、信州路へと赴かん。

ト右の鳴物にて舞臺へ來る、此の時上手より荒川主水葎と記せし深き網代笠、鼠の着附、墨衣、鼠の手甲、脚絆、草鞋、修行者の拵へ、坊主合羽にて姿を隱し出來る、主鈴見て、

こりや〳〵修行者、その方が參りし道に警固の者は居らざるか、存じ居らば敎へてくりやれ。こりやこりや修行者。(ト主水默って居るゆゑ、)物を言はぬか。(ト木札を見て、)あゝ、聾か。

主水　どうぞお手の內を下さりませ。

主鈴　火急なことで參りしゆゑ、手の內取らす鳥目がない。

主水　どうぞ取らして下さりませ。

主鈴　えゝしつこい、無いと申すに。
主水　いえ〳〵、おねだり申しますは、鳥目ではござりませぬ。
主鈴　して何をくれと申すのぢや。
主水　何でもござりませぬ、此方の首を。
主鈴　や。
主水　どうぞ取らして下さりませ。
主鈴　さてはおのれは盗賊か、但しは我れを捕らんとなす、足利滿詮が間者なるか。
主水　如何にも汝が推量の如く、足利滿詮が近臣にて、荒川主水と申す者。
　　ト主水笠、頭巾を取つて投げ、衣着附を脫ぎ捨てる、野袴打ッ裂き、襷、鉢卷、大小、草鞋のこしらへになる、主鈴びつくりなし、
主鈴　や、すりや疾くより此の邊まで。
主水　一里四方の弓手馬手、出口々々を取り圍めば、最早叶はぬ青木主鈴、尋常に繩受けよ。
主鈴　小癪なるその一言、十三歲より眞影流の奧儀を極めし青木主鈴、數千人にて取圍むとも、一方を切り開かんは我が此の腕に覺えあり、成らば手柄に搦めて見よ。

主水　おゝ未熟ながら我も亦、柳生流の極意を得たれば、搦め捕らんは手裏にあり。

主鈴　見事汝が。

主水　おんでもないこと

主鈴　何を小癪な。

トどん〳〵大小の鳴物、日覆より櫻ばら〳〵と散り、主鈴は拔身、主水は誂への十手にて橋を遣ひ立廻りよろしくあつて、主水呼子の笛を吹く。是れにてどん〳〵になり、下手より黑四天襷、鉢卷の捕手八人出來り、

主水　何れも、ぬかりめさるな。

八人　心得ました。

トどん〳〵にて皆々主鈴へ十手で打つてかゝる、ちよつと立廻つて、能き見得より誂への鳴物になり主鈴八人を相手に面白き捕物の立廻り、此の内主水櫻の蔭へはひる、主鈴は八人を相手に立廻り、知らせなしに橋を廻し、正面より横を見せ、後の遠見を折返し玉川を眞直に漏斗に見たる道具になり、皆々を橋の向うへ追ひ込み、ほつと思入あつて川の水を呑まうとする、爰へ捕手一人掛るを立廻つて切倒し、橋を越えて行かうとする、奥にてありや〳〵の聲、又上手へ行かうとする、ありや〳〵の

聲、主鈴何れへ逃げようかと途方に暮れし思入、此の内始終櫻の花を散らし、是非なく花道へ掛る。早太鼓ばた／＼にて、花道より前幕の半七、襷、鉢卷凛々しきこしらへ、手槍を持ち出で、主鈴へ突き掛け、ちよつと立廻つてきつとなり、

主鈴　やあ、汝は鳥山、又候爰へ。

半七　おゝ、搦め取りに向うたり。

主鈴　何を。

ト又右の鳴物にて舞臺へ戻る、此の時上手より主水同じく手槍を持ち出で突掛ける、これより誂への鳴物になり、三人立廻りあつて、主鈴足を突かれ、たぢ／＼となり、

ちえゝ殘念な、手を負ひしか。

主水　最早叶はぬ、青木主鈴。

半七　尋常に繩かゝるか。

主鈴　さあ、それは。

兩人　手籠めになさうか。

主鈴　さあ。

兩人　さあ。

三人　さあ〳〵〳〵。

ト主鈴観念なせし思入。

主鈴　斯くなる上は是非に及ばぬ、武士の情に切腹を、何卒お許し下されい。

半七　許し難き罪人ながら、切腹願ふはまことの武士。

主水　その心底に我々が、望みの通り、

兩人　許してくれん。

主鈴　すりや切腹御許容とな、ちえゝ忝ない。

ト此の時上手へ黒四天の捕手大勢出で、

捕手　動くな。

主鈴　何を。（ト立上りきつとなり、）先づ今日はこれぎり。

ト目出度く打出し。

敷島怪談（終り）

第二番目近世水許錦畫基

芳年生が活筆の姿を寫す俠客傳記きつねの術に凡眼を惑はす修驗の奇妙院が盜みし金の罪科を着せる證據の手拭もあぢにからみし疑ひに思ひ違ひて武士の身に袖ない事と水間へ意見其破口を繕うて舅殺しと清瀧が白刃としら刃の果し合ひ扨は敵とお汐が自殺に姉のおなぎが泣ふして淚に袖の濡衣も晴て瘧も遠近を取卷く捕手に民五郎火蓋を切り鐵砲腹續て左門が立腹を一場の山に明神の祭禮

曙清瀧夏魁

「勢力富五郎」は慶應三年十月、五十二歳の時に、守田座に於て書卸された。講談に據つて脚色せられたもので、當時飛ぶ鳥もおとさんばかりの人氣であつた芝翫の派手な技藝は勢力の役にぴつたりとはまつて好評であり、又仲藏が適役たる奇妙院に扮して、例の如く妙を極めた演出をなして好評であつた。

書卸しの時の役割は、中村芝翫（神力民五郎、岩岡の竹五郎）澤村訥升（三ツ島左門）、中村仲藏（修驗者奇妙院）、大谷友右衛門（白瀧の與吉）、坂東三津五郎（甚兵衛娘おしほ）、中山現十郎（闇の丑藏）、坂東喜知六（雇かゝあおとら）、大谷門兵衛（白瀧子分狸の彌八）、中村雁八（神力子分波切文次）、坂東鶴藏（百姓甚兵衛）等であつた。

挿繪にしたのは國周筆の錦繪である。――勢力民五郎は神力富五郎を、岩岡は庵岡をもじつたもので、兩者の間に別はない。

大正十四年十二月　　校訂者



群清瀧贔屓勢力（勢力事神力民五郎――三幕）

序　幕　栗林村鬪爭の場

中　幕　俠客神力内の場

（役名――俠客神力民五郎、三島左門、芝の彌太郎實は黑闇の丑藏、神力の子分波切文治、百姓甚兵衞、修驗者奇妙院、俠客白瀧與吉。甚兵衞娘おしほ、雁嘆お虎、其他。）

（栗林村の場）――本舞臺一面の平舞臺眞中に大樹の松、上下掛稻、正面藪疊　此の後ろ黑幕、朧月を下し、下手は從是栗林村と記したる境杭、總て栗林村の體。爰に甚兵衞少し更けたる百姓にて羽織着流し下駄を履き、傘を擔ぎ、小田原提灯を持ち立掛り居る。是を捕手四人〇△◎□黑四天襷鉢卷にて、十手を振上げ、取卷き居る、禪の勤にて幕明く。

甚兵　こりや何れも樣には、わたくしめに何お疑ひござりまして、動くなやらぬとおつしやりまする。

〇　仔細と申すは其方事千歲村の甚兵衞とて、名ある百姓の身をもつて、

△　神力民五郎と申す長脇差に荷擔なし、此の近鄕近在の豪家へ參つて押借なすよし、

◎　代官所のお耳に入り、民百姓の難儀故今日殘らず召捕れと上意を受けし我々共、

□ 豫て荷擔の者共を調べ置きたる上からは、脫れぬ所と覺悟なし、サア尋常に、
四人 腕廻せ。(ト立ちかゝるを留めて、)
甚兵 これは〳〵思ひも寄らぬお疑ひを受けましたが、成程只今おつしやりまする長脇差の神力殿とは疾より懇意に致しますも、此甚兵衞親子の爲には命の親でござります故。
四人 なに、命の親とは。
甚兵 三年以前娘を連れ伊香保へ湯治に參りましたが、歸り道に熊谷の土手で多くの賊に出逢ひ、既に命を取らるゝところ、神力殿が通りかゝり親子が命を助けくれし大恩のある人故に、一方ならず懇意にしますが、なか〳〵押借ゆすりなどゝ非道な事をする樣な、そんな人ではござりませぬ。
○ やあ言ふな〳〵、聞けば汝が娘しほは彼と通じ居るとの事、申さば聟も同然故、
△ 押借ゆすりは致さぬなどゝ我が執成致すとも、
◎ 是迄致せし惡事は逐一、上聞に達して居るわ。
□ 先づ差當り懷中に、掠めし金子あらんもしれず、
四人 どれ、われ〳〵が。(ト懷中へ手を入れるを振拂ひ、)
甚兵 いえ〳〵お改めには及びませぬ、豫て夜道は物騷故、金子は持參致しませぬ。

○ なに、ないことがあるものか。（ト懐中より金の入りし財布を引出し、）扨こそ怪しき此金子。

ト甚兵衛是をとらへ、

甚兵　いえ決して怪しい金ではございませぬ、お疑ひ受けます上は何をお隠し申しませう、爰に持つて居ります此百両は、隣村の作兵衛が所の頼母子講に今宵當つて取つた金、嘘偽のない事は講元の作兵衛にお問合せ下さりませ、怪しい金ではございませぬ。（ト振拂ひ懐へ入れる。）

○ 假令何であらうとも、悪事に荷擔の百姓甚兵衛、

△ 言譯あらば代官所で、申開きをしたがよい。

□ 先づ差當る金子を渡し、

◎ 覺悟極めて、

四人　縄にかゝれ。（ト四人立掛る。）

甚兵　いえ〳〵これは慥な金子、不正でなければ渡されませぬ。

○ えゝ面倒だ、手ごめにめされ。

三人　心得ました。

と禪の勤になり、四人甚兵衛へかゝり懐の金を取らうとするを、甚兵衛やるまいといふ立廻り、ば

た／＼になり、下手より縫ぐるみの犬出て來り、捕手へ飛掛る、ドロ／＼になり、捕手びつくりなし左右の掛稻の中へ逃込む、薄ドロ／＼雷序にて上下へ狐火出る。甚兵衛四邊へ思入あつて、

甚兵　思ひも寄らぬ代官所の疑ひ受けて捕手の衆に、賴母子講の金を取られ縛られるところであつたが、何處から來たか駈けて來た、犬に恐れて四人共かき消すやうに逃げたのは、何だか合點の行かぬ事だが、今の捕手は何だしらぬ。

ト合點の行かぬ思入、此時上手掛稻を押分け、奇妙院散髪輪袈裟に尻端折り一本差し修驗者の打扮にて半身出し、

奇妙　今のは、己が眷屬だ。

甚兵　や、さういふ聲は、

奇妙　修驗者の奇妙院だ。（ト時の鐘凄き合方にて出る。）

甚兵　扨は今の捕手の衆は、

奇妙　己が使ふ御先狐だ。

甚兵　何故狐を捕手となし、此甚兵衛を脅せしぞ。

奇妙　われが今夜隣村で、賴母子講で百兩取つたを眷屬共が知らした故、濡手であはよく百兩の金を

取らうと先刻から、此松蔭で待つて居たのだ。（ト甚兵衛扨はといふ思入。）

甚兵　そんならわしが頼母子で、當つた金をこなたは取る氣で、

奇妙　それも遺恨があるからだ。

甚兵　なに、遺恨があるとは。

奇妙　われが倅に狐を憑け祈禱をかこつけ妹のおしほを度々口說いたが、神力めとちゝくり合ひ己に色よい返事をせぬ故、憑いた狐をいつ迄も捨て置く中種を見だされ、奇妙院は狐を使ふと、甚兵衛われが代官所へ訴へなしたばつかりに、此近鄕を構はれて摑み取りに取る金を取らずに仕舞つた意趣返し、賴母子講の金ばかりか掛替のない命迄、己が取るから覺悟しろ。

甚兵　娘が事は兎も角も、此の近鄕を構はれしは我が狐を遣ふ故其身を責める天の罰、此の甚兵衛が知らぬ事、それを遺恨に賴母子の此金ばかりか命迄取らうなどゝはのぶとい奴、百姓ながら劍術も少しは腕に覺えがある、めつたに我に渡さうか。

奇妙　こしやくな事をぬかしやアがるな。

ト禪の勤になり、奇妙院拔きかけるを甚兵衛傘で留める、ちよつと立廻つて三味線入り禪の勤になり兩人、立廻り奇妙院拔いて切つて掛るを、甚兵衛傘で受留め奇妙院傘で追れ、後退りにたぢ／＼となる。

ばた〳〵になり、花道より丑藏褞袍、三尺、山刀、脚絆草鞋にて鐵砲を提げ、つか〳〵と出て來り、花道にて、

丑藏　や、奇妙院どのか。

奇妙　おゝ丑藏か、加勢しろ。

丑藏　合點だ。

ト丑藏舞臺へ來る、奇妙院又切つて掛るを甚兵衞あしらふ、此中へ丑藏鐵砲にて打つて掛り三人立廻つて、甚兵衞の足を丑藏鐵砲にて拂ふ、これにてどうとなり奇妙院切下げる、甚兵衞手を負ひ、苦しき思入にて、

甚兵　奇妙院が加勢なすは、眷屬の狐よな。

丑藏　いゝや狐ぢやアねえ、古狸だ。（ト甚兵衞丑藏を見て、）

甚兵　や、わりや神力の子分の彌太郎。

丑藏　仔細あつて子分になり、尻尾を隱して化けて居た此新米の彌太郎は、狐を遣ふ奇妙院と一つ穴の獸だ。

甚兵　不斷二兩三兩の金を貸してやつたのに、恩を仇にて返す氣か、われが加勢をしたばかりに深手を

負ひし此甚兵衛、もうかなはぬか、口惜しい。(ト甚兵衛口惜しき思入。)

奇妙　まだ〳〵口惜しがる事がある、われを殺して金を取る此人殺しの罪科を、神力めに背負ひ込ませ、己が自身に手を下さず、首をころりと落してやるから、冥土へ行つて待つてゐろ。

甚兵　此の罪科を脊負はせるとは、娘の戀の敵故か。

奇妙　いや、神力めを殺すのは、戀の遺恨ばかりぢやあねえ、親分からの頼みだわ。

甚兵　なに、親分が頼みだと。して〳〵それは、何者なるぞ。

奇妙　その親分は誰でもねえ、日頃彼奴等が敵と覘ふ庵岡の竹五郎だ。

甚兵　やゝゝゝ、扨は竹五郎の子分であつたか。

丑藏　神力初め淺川の子分の奴等が樣子を探りに、子分になつて化けて居たのだ。

甚兵　それでは疾から此方の樣子を。

奇妙　一々知らしてやつたれば、庵岡在は要害堅固、敵討は所詮出來ねえ。

丑藏　然し助けておかぬ故、此人殺しを脊負ひ込ませる證據にさつき盜んで來た、神力めが持つて居る上代染の此手拭ひ。(ト懐中より誂への手拭を出し、)死骸の側へ捨て置けば、言はずと金に目がくれて殺した證據になるは必定、何と旨い企みであらうが。

甚兵　えゝ聞けば聞く程根強き企み、たつた一言神力に此事が知らせたい、誰ぞ爰へ來てくれぬか。

ト甚兵衞手負にて花道の方へ行かうとして、行かれぬ思ひ入、奇妙院引ずり倒し、

奇妙　えゝ、もがくな〳〵、いくら汝がもがいても爰へ神力は來やあしねえ、冥土へ行つて待つて居ろ。

丑藏　いや、さう丈夫には言はれない、場所から歸りは此道故、通らぬ中にちつとも早く。

奇妙　むゝ、邪魔のない中、どれ息の根を。（ト奇妙院立掛る、甚兵衞這ひ出して逃げるを、）

丑藏　動きやあがるな。

甚兵　誰ぞ來て來れぬかい、人殺し〳〵。

奇妙　えゝ、やかましい。（ト切倒し、）默つてくたばれ。

ト乘つ掛り止めを刺す甚兵衞苦しみ落入る。時の鐘奇妙院刃を拭ひ、甚兵衞の懐より財布を引出し、金を取つて財布を捨て、惡くねえやつだと頂き、懐へ入れる。

丑藏　これ、助鐵砲に分前は。

奇妙　何にも言はずに一緒に來い、後に三兩わけてやらう。

丑藏　なに分前は三兩だえ、そいつアあんまり犬骨だ。いや、犬といやア今し方、大きな犬が來なんだかえ。

奇妙　その犬故にどぢをくんだが、それぢやアおぬしが連れて來たのか。

丑藏　猪を打ちに連れて來たが、そこへ逃げて行つたか知らぬ。

　ト此時知せに付き、月をおろし時の鐘、かすめて風の音、丑藏花道の方へ思入あつて、

や向うへ誰やら來る樣子。

奇妙　見咎められては身の大事。

　ト兩人うなづき上手の掛稻へ奇妙院、下手の掛稻へ丑藏隱れる。時の鐘誂の合方になり、花道より左門五十日鬘誂の着付着流し、大小雪踏にて出で來り、花道にて、

左門　今迄あつた月影を忽ち隱す雨雲に、夜霧が深く行先もぼんやり分からぬ薄暗がり、勝手の知れぬ田圃道、溝川へでも落ちにやアいゝが。（ト舞臺へ來り、甚兵衞の死骸へ躓き）往來中に寐てゐるのは地酒に醉つた生醉か。（ト跨いで越し足に障りし手拭を取り、）や、此手拭は。

　ト透し見る、掛稻より奇妙院出て南無三といふ思入にて、後より此手拭を引とる、左門はきつとなつて奇妙院を引戻し、ちよつと立廻り左右へ分かれきつと見得、竹笛入り誂の田舍節の唄になり、兩人立廻る。花道より與吉着流し一本差し、下駄がけ片褄を取り酒に醉ひたる思入にて出で來り、花道から透し見て喧嘩だといふ思入あつて尻を端折り、舞臺へ來る。と下手より丑藏出て與吉にかゝる

を張倒し、此中へ入り立廻る、此の内奇妙院金包を落す、是を左門拾ひ行かうとするを丑藏片袖を捉へて、奇妙院與吉と立廻り、與吉と心得丑藏の足をとり引倒す、此はずみに左門の片袖もげ、丑藏の手へ殘る、是を奇妙院引取る、左門は片袖を取返さうとして與吉に行當り、直に拔きかけるを與吉是を留め、雨人立廻つて左門與吉を振拂ふ、與吉酒に醉ひし思入にてよろ／＼として手を突き、以前の手拭を拾ふ、左門上手にて刀を拔き振上げる、與吉手拭を銜へ眞中にて有合ふ傘を開き、左門へ差付ける、丑藏は下手へうつ伏になる、奇妙院は花道へツカ／＼と行き印を結ぶ、双方見合つて木の頭どろ／＼雷序になり、後の黑幕を切つて落し、向う稻荷の社のある在體の遠見、灯入の狐火宜しく、與吉左門後を見返る、丑藏そつと顏を上げ見る、此模樣よろしく。右鳴物にて、

ひやうし幕

ト奇妙院印をもどし、ドロ／＼打上げ懷より片袖を出し透し見てうなづき懷へ入れる。舟玉の唄へ砧水の音を冠せ、奇妙院花道へ入る。此内に道具廻しにて、直に木を直し、屋臺囃子にて賑やかに引返す。

（神力宅の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面暖簾口、上手一間床の間、摩利支天の掛物、此の前に三方に神酒德利續いて鼠壁、下手一間間平戸の押入戸棚、此上の欄間に大きな神棚、上の方一間の中二階、平舞臺に大藥罐を載せし大きな箱火鉢、いつもの所門口、下の方一間神力と書きし腰障子、

此の前に番傘をさしたる地口行燈、總て神力内の體、爰に子分重六、小助、丹藏、大八の四人繩襷を掛け一腰の目釘をしめし、喧嘩に行く支度をして居る。これをおとら雇女にて皆々を留めて居る、此見得屋臺囃子にて幕明く。

とら　これさ、お前方は親分の留守に、何處へ喧嘩に行きなさるのだ。

重六　何處へ喧嘩に行くものか、庵岡の子分の奴等が明神樣の神酒所へ來て、こんなしみッたれな祭りはねえと、けちを付けて行きやアがつたと、村の手合が知らして來たから、

小助　只さへ遺恨のある奴等、これから行つて追ぶちに、叩きしめてやらにやアならねえ。

とら　そりやアさうでもあらうけれど、親分の留守の中にお前方をやつては濟まない、まあ歸りなさんす迄待つて下さんせ。

丹藏　えゝつまらねえことを言ひねえな、ぐづ〳〵して居る中にやア逃足の早い奴等だから、歸つてしまふに違えねえ。

大八　これから裏手の山越しに、先へ廻つて庚申堂で挾み打にたゝきしめて、腕を見せにやア腹がいえねえ。

とら　お前方のいふのも尤もだが、庵岡の子分では互ひに遺恨のある中だから、どういふ間違ひになら

うもしれぬ、負けるは勝と見脱して、歸してやつたがようござんすぞえ。
重六　どうして歸してやられるものだ、假令命は捨てればとて、けちを付けられちやア料簡ならねえ。
小助　おゝさうだ〳〵、向うの相手が相手だから、お虎どんの顏の樣にへこんぢやア居られねえ。
とら　えゝ飛んだ所で顏の讒訴、もう留めないから勝手におしな。
小助　おゝ、しなくつてどうするものだ。
丹藏　さあ支度がよけりやアやツつけようぜ。
小助　さあ、出かけろ〳〵。（ト皆々樫の木の棒を持ち門口へ出る、お虎是を留めて）
とら　そんならどうでも。
重六　えゝ知れたことだ。
ト お虎を突倒し、屋臺囃子になり四人勢ひ込んで花道へ行掛る、と花道より民五郎伸びし月代を二つに割し好の鬘、派手な着附にて一本差し鎖の煙草入、下駄がけにて花道にて四人を留め、
民五　こりやア手前達は何處へ行くのだ。
四人　親分留めてくんなさるな。（ト行かうとするを。）
民五　これさ、どういふ間違ひか知らねえが、己に譯をいつて行け。

重六　いや、親分にやア言はれねえ。

小助　留めずとやつて、

四人　くんなせえ。

民五　聞分のねえ奴等ぢやアねえか、譯を言はにやあ一人でも、やる事はならねえぞ。

重六　これさ、親分、

四人　さう言はずと。

民五　ぐづ〳〵せずと、内へ歸れ。

四人　それだといつて。

民五　えゝ歸れといつたら歸らぬか。

ト　きつと言ふ、是には四人是非なく顏見合せ後ずさりに歸る。民五郎悠々と舞臺へ來る、是を門口にお虎見て居て、

とら　それ見たことか、お前方は親分に叱られて、私の顏よりへこんだらうが。

四人　えゝ、やかましいやい。

ト　是にてお虎上手へ座蒲團を敷き、民五郎此上へ住ふ。四人は下手へ控へる。お虎湯呑へ茶を汲んで出

す。

とら　親分、お早うございましたね。

民五　明神様へ参つたので、ちつと歸りが遲くなつた。（ト脇差を拔き側へ置き、四人に向ひ、）これ、向う見ずの手前達を居候に置くからは、叩き合ひは片生業、年中身體に生疵の絶えねえ神力民五郎、無理でねえ事ならば決して留めやアしねえから、譯を話して行くがいゝ。

ト是にて手前言へ汝言へといふ思入あつて、

重六　いえ、譯といふのは外でもござりませぬが、今日庵岡の子分の奴等が、明神様の神酒所へ來て、

小助　こんなしみつたれな祭はねえと、けちを付けて行きましたから、

丹藏　只さへ遺恨のある奴等、叩きしめてやらうと思つて、

大八　それでわつちらが出かけますのさ。（ト是を聞き民五郎思入あつて。）

民五　そりやアいゝ、ここへ己が歸つた、外ならねえ庵岡の子分と聞いちやア捨て置けねえ。

重六　それぢやア親分、

四人　お前も一緒に。（ト民五郎氣を替へ、）

民五　どうして／＼、竹五郎が子分では指さしをする事もならねえ。

四人　え、そりや又何んで。
民五　親分からして遺恨のある此村へ來てけちを付けたは、慥に喧嘩を買ひに來たのだ、どんな向うに巧みがあるか、うつかりそれへ手出しはならねえ。今日の所はそれなりに、見ねえ顏をして居やれ。
重六　それだといつてあの儘に、あいつらを歸しちやあ、
小助　あんまり人がねえ樣で、世間の聞えがみつともねえ。
民五　さうでもあらうが産神の、年に一度の今日は祭り、腹も立たうが料簡しやれ。
丹藏　いえ／＼あの儘歸しちやあ、親分お前の名折故、
大八　どうぞやつて、
四人　おくんなせえ。（ト民五郎思ひ入あつて、）
民五　むゝ、これ程己が留めるのに、行きたけりやア勝手にしろ。
四人　え、（トぎつくり思ひ入。）
民五　親分子分の緣を切り、禮證文を張つて行け。（トきつと言ふ、是にて四人むうと顏見合せ思ひ入、）
とら　それ見なせえ、お前方がちよき掛りに、喧嘩をしたらつゞまる所は親分の、どんな難儀になるか

しれない。

民五　そりやア親分子分故、難儀のかゝるも厭やあしねえが、遺恨重なる庵岡の子分の者と喧嘩をさせては、言交した事もあれば白瀧へ己が濟まねえ、今日の恥は雪いでやるから、思ひ止まつてよしにしやれ。（ト是にて四人も思入あつて、）

重六　腹が立つてならねえが、頼みに思ふ親分の難儀になつては濟まねえ譯。

小助　今日の所は親分の、詞に付いて、

四人　よしやせう。（ト皆々鉢巻襷などとる。）

民五　おゝ、よく料簡してくれた、喧嘩はいつでも出來る事、まあそれよりやあ祭ゆゑ機嫌直しに一ぺいやりやれ。

四人　有難うござります。

民五　然しこゝで呑むよりやあ、手前達は臺所で勝手にやつた方がよからう。

重六　いゝどこぢやアござりませぬ、實の所が親分の前ぢやア、幾ら呑んでも醉ひませぬ。

小助　こても御馳走になるならば、大胡坐をひツかいて、

丹藏　角力甚句でも唄ひながら、

大八　茶椀でどし〳〵おふりたい。
民五　茶椀よりやあ鏡を抜いて、柄杓でぐい〳〵呑むがいゝ。
四人　そいつア何より有難い、
とら　肴は戸棚に入つてゐるよ。
重六　なに、肴がいるものか。
四人　さあ〳〵、早くやツつけよう〳〵。（ト屋臺囃子にて、わや〳〵と四人奥へはひる。）
民五　いや、騷々しい奴等だな。そりやアさうと、師匠の息子は昨夜歸つて來なすつたか。
さら　はい、八ツ過にお歸りなすつたが、二階へ上つておよつたぎり、まだお起きなされませぬ。
民五　なに、まだ寐て居なさるか、いや呆れたものだな、早く行つてお起し申せ。（ト此時二階にて、）
左門　いや起すにやあ及ばねえ、今其處へ行くところだ。
ト合方になり、二階より前幕の左門片袖なき着附にて、伸をしながら出來る。
とら　おや、お目覺でござりましたか。
民五　大そう寐さつしやりましたな。
左門　昨日明神の境内へ、千葉の社中が奉納に擊劍會を催したから、見物ながら行つた所、勝れた腕を

持ちながら、爰やかしこの道場にくすぶつて居る呑仲間、放蕩無賴の舊友共がちらりと見付けて引出だし、飛入に來た奧州者と名乘りを上げられ仕方なく荒浪渡といふ奴と、槍劍の試合をしたが、旅には稀な遣ひ手で中々己も骨が折れ、草臥たせゐかぐつすりと一寐入に寐込んだが、みんなの聲で目が覺めた。

民五　其の噂も聞きましたが、武士の身では槍劍は表業ではござりますが、無益な事はなされますな。

左門　心願あつて謹愼中故、すべて物事愼んで腕をさすつて居るけれど、覺えた業に捨難く、殊には數萬の見物に、はずみに掛ツて一本行つたが、今更思へばよせばよかつた。

民五　(片袖なきを見て、)や、お前樣の片袖は。

左門　むゝ、此片袖か、昨夜途中で引切られた。

とら　そりや、何處の女中さんでござります。

左門　いや女ならいゝけれど、栗林の藪際でつまらぬ者に出ツくはし、此の片袖を切られたが、己の物ならいゝけれど、こなたに借りた此小袖、疵物にして氣の毒だ。

民五　何の着物の一枚や二枚、氣の毒なことがありませう。これお虎、何故着せ替へて上げねえのだ。

とら　それでも直におよりましたから。

民　早く出して上げてくれろ。

とら　あい／＼。

民五　去年親分が死んでから、足手まとひの女房を里へ頼んで男世帯、野郎ばかりでやつて見ましたが、飯の世話と着物の出し入れは、女でなければいけぬ故、此お虎を頼みました。

左門　まだそれよりは肝腎の。（トいふを、）

とら　ところが家の親分は、隣村からおしほさんが毎晩泊りに來なさるから、少しも不自由はござりませぬ。

民五　よけいなことを言はねえで、早く着物を出して上げろ。

とら（押入から小袖を出し、）さあ左門さま、お召替へなさいまし。

左門　それぢやア是を、又借りようか。（ト左門帯を解く、とばつたりと前幕の金を落す、民五郎取上げ、）

民五　や、此金は。（ト左門手早く取て、）

左門　こりやア人から預り物だ。

民五　慥に高は、百兩ばかり。

とら　え。（と思入。）

民五　いや、落さねえ様になさいまし。（ト民五郎左門へ思入あつて、）これお虎、ちつと内證の話しがあるから、奥へ行つて、みんなと一緒に酌でもしながら一ぺいやれ。

とら　そりやア有難うござります。

民五　喧嘩をしねえ様に氣を付けてくれ。

とら　畏りました。どれ御馳走になりませうか。

ト奥へ入る。此内左門は着物を着替へる。民五郎暖簾口から奥を見て、

民五　左門様、これへおいでなすつて下さりませ。（ト端唄の合方になり、左門を上手へ住はせ、思入あつて、）改めて申さずとも知れた事でござりますが、お前様の御親父たる左太夫様の御弟子になり、神影流の稽古なし、免許皆傳受けまして、御武家にさへも遂に一度負けた事がござりませぬから、此土地へ参りましても、人に親分々々と立てられますも師匠のお庇、御恩は寐た間も忘れませぬ。其御子息のお前様故御恩返しにお世話致せば、若し又金の入る事でもござりましたら御遠慮なく、いつ何時でも仰しやりませ。御不自由はさせませぬから、悪い噂のない様にお身を大事に愼んで夜歩きをして下さりますな。

左門　（思入あつて、）かういふ懶惰な身になつたも、酒と若氣に今もいふ舊友共にそゝのかれ、道場歸

りに柳橋で藝妓を相手に呑初め、今日は新橋明日は堀と、かの傾城傾國と傾ける程の家屋はないが、刀劍迄も典物に入れる程に遣ひ果し、終には親の勘當受け、師弟の縁でおぬしを便り食客となる此の左門、然し已も浮浪の身で此の儘果てる心もなし、志願を貫き一度は世に出る積りで此頃は、好な酒せへ愼んで、惡い耳を聞せねえのに、何で夜歩きをするなと言ふのだ。

民五　さあ、何處で喧嘩をなすつたか、其の片袖を切られる程では、餘程の事と思はれます、若し又相手に金でもあつて、失なりでもした其の時は　疑を受けねばなりませぬ、それ故どうか夜歩きをおよしなされて下さりませ。

左門　（扨はといふ思入あつて、）むゝ、すりや片袖を引切られ、大まい百兩といふ金を所持して居る故此左門が、若し切取でも致したかと、神力おぬしは思つて居るか。

民五　さあ、着類さへもわたくしから借着をなさるお前樣が、僅な金でもあることか、百兩といふ其金をどうして御所持なされまする。

左門　疑惑するのは尤もだが、全くさういふ譯ではねえ、撃劍會の其崩れが蓬萊屋で一杯傾け、思はず知らず夜を更し、九ツ過に歸つたところ、今もそなたにいふ通り栗林の藪蔭で、二三人での挑み合ひ、喧嘩ならば留めてやらうし物取ならば懲してやらうと、持つて生れた負けぬ氣に、其場へ

民五　立入り片袖を引裂れた折躓いて思はず拾つた此百兩、（ト以前の百兩を出し、）先刻おぬしに隱したは、邊りの人目を憚る故、勘當受けて浮浪となり、斯く窮迫致せども己も三島左太夫が倅、身の窮屈を厭はずに、仕官致せば劍道で五百石は取れる身體、決して非道な事はしねえ。

民五　流石は師匠の御子息樣、其お心を疑つたは返す〲も不調法、面目次第もござりませぬ、どうかこれはあなたの方へ。

左門　いや〱、これはおぬしの方へ。

民五　さうおつしやらずと、あなたの方へ。

左門　いや、どうあつてもおぬしの方へ、預けておかにやあ心が濟まぬ。

民五　それほど迄に仰しやるなら、此百兩は勢力がお預申しておきませう。（ト民五郎百兩を取上げる。）

左門　いや、おれもそれでさつぱりした。いや、さつぱりといやア起きたばかり、まだ嗽ひも遣はなんだ、湯へ一ぱいはひつて來ようか。

民五　慥今日は祭ゆゑ、早仕舞ひでござりますぜ。

左門　それぢやア早く行つて來よう（ト戸棚を明けて捜す思入。）

民五　もし、楊枝なら、爰にありますよ。（ト火鉢の引出しから袋入の齒磨と楊枝を出す。）

左門　こりやア歯磨迄忝い。(ト楊枝と歯磨を持ち立上る。民五郎思入あつて、)

民五　とはいへ、どうも、

左門　や。(ト思入。)

民五　いや、どうも新湯はあつくツていかねえ。

左門　そりやア御布告を知らねえやつだ。(ト門口へ出てぴつしやりしめ、)どれ、一風呂入つて來ようか。

ト端唄屋臺囃子になり、左門肩へ手拭を掛け房楊枝をむしりながら花道へはひる。民五郎跡を見送り、

民五　左門様が栗林で、拾つたといはつしやるが、片袖といひ此の百兩、欲に迷つて道ならぬ手荒い事でもなさりやアしねえか。あゝ、心にかゝる事だなあ。

ト民五郎煙草をのみ思案の思入、端唄屋臺囃子になり、花道よりおしほ島田鬘世話娘好の打扮、泣ながら出て來る、是を文次着流草履、尻端折り、子分の打扮にて介抱しながら出て來り、花道にて、

文次　これさ、おしほさん、人が見て笑ふから、いゝ加減に泣きなせえな。

しほ　それぢやといつて悲しくつて、わたしや泣かずに居られぬわいな。

文次　悲しいのも尤もだが、もうちつとだから辛抱しなせえ。(トおしほの手を引き舞臺へ來り、門口から、)親分、内かえ。

民五　誰だ、文次ぢやアねえか。
文次　あい、わつちでござります。
　　トおしほつか〳〵と內へはひり、民五郞の側へ來て、
しほ　もし、ひよんな事が出來たわいな。（トわつと泣伏す。）
民五　おゝおしほか、はひり早々泣伏して、父さんと喧嘩でもしたのか。
しほ　いえ〳〵、そんなことぢやござんせぬわいな。
とら（奥より出て介抱しながら、）もしおしほさん、どうなさいましたのだ、早く譯をおつしやいましな。
民五　これ文次、おしほはどうしたのだ。
文次　どうしたごころぢやアござりませぬ、飛んだ事が出來ました。
とら　おしほさんはひよんな事だとおつしやるし、お前は又飛んだ事だといふし、どんな事が出來たのだえ。
文次　どんな事のこんな事のこ、大變な事だ。
とら　いつ迄そんな事を言つて居るのだね。
民五　これおしほ、どうしたのだ。

しほ　もし、父さんが殺されたわいな。

民五　え、甚兵衞どのが殺された。(トびつくりする。)

文次　何と大變な事だらう。

とら　ほんに大變な事だねえ。(ト民五郎思入あつて、)

民五　して、殺した奴は何者だ。

文次　殺した者は知れないが、昨夜九ツ過ぎてから、栗林で人に切られ、酷い死にやうしなすつた。

民五　なに、昨夜九ツ過に栗林で殺された。金でも持つては居なんだか。

しほ　あい、隣村の作兵衞どのゝ賴母子講へ行かしやんして、鬮が當つて寄金を百兩持つて歸り道、庚申塚で連に別れ一人になつたを付込んで、栗林の藪蔭で樣子を知つて居る者が、其百兩の金をとり、むごたらしう父さんを殺しましたわいな。

ト泣伏す、お虎介抱なす、民五郎左門が殺せしといふ思入あつて、

民五　すりや百兩の金を取り、甚兵衞どのを殺したとか。あゝ、渇しても盗泉の水は飲まぬと言ひながら、取切りなすとは。

文次
とら　え。(ト思入、民五郎氣を替へ、)

民五　いやさ、貧の盗みか知らねえが、殺して取るとは非道な仕業。
とら　どんな奴の仕業だか、手前は知れない積りでも天道様が見てござれば、今に捕られて首はない。
文次　親から代々盗人を生業にする者もねえが、親や身寄の身になつたら、嘸悔しい事だらう。
　ト此内民五郎ぢつと思入。
しほ　もし民五郎さん、姉や兄はあるけれど、兄弟他人の初めとやら、父さんに別れては便りない私の身の上、力に思ふはお前ばかり、どうぞ是から末長う私を見捨て下さんすな。
民五　何でおぬしを見捨るものだ、思ひ出せば三年後甚兵衛どのは熊谷の土手で人手にかゝる所、丁度折よく奥州から歸りがけに通り掛り、危い命を助けたが緣となつて己故に、立派な所へ行かれる身を疵物にした上からは、女房があつても一生涯、おぬしはおれが見捨はしねえ。
しほ　便りない身を不便に思ひ、生涯見捨てぬ心なら、どうぞわたしの力となり、敵を討たして下さんせいな。
民五　むゝ、言はゞ舅の甚兵衛どの、此神力が助太刀して敵を討たしてやりたいが、何をいふにも其敵は。
しほ　え。

民五　いやさ、敵がしれたことならば、おぬしにおれが討たしてやらう。

しほ　えゝ頼もしいお前の詞、草葉の蔭で父さんが嘸悦んでござんせう。

民五　其の悦びに引替へて、此神力のせつなさは。(ト民五郎思入。)

文次　なに、親分がせつないとは。

とら　どうかなされましたかえ。

民五　さあ思ひ掛けねえ話しから、持病の癪が胸先へ。

しほ　何ぞ薬はござんせぬか。

民五　いや、薬にも及ばねえ。

とら　何にしろ奥に行つて、寐ころんでおいでなさいまし。

文次　おしほさん、お前もまだお話しがございませうね。

しほ　ある所ぢやアござんせぬ、いろ／＼話さにやならぬわいな。

民五　己も言ひてえことがあるから、それぢやア奥へ一緒に來やれ。

とら　親分お床を持つて行きませうか。

民五　べらぼうめ、それどころぢやアねえわえ。

さら　いえなに、おあんばいが悪いからさ。

文次　飛だかん違ひだ。

しほ　そんなら民五郎さん。

民五　奥へ行つて話さうか。（ト唄になり、民五郎先におしほ付いて奥へはひる。）

文次　かう、お虎どん、がうぎに親分はふさぎなすつたぢやアねえか。

とら　そりやアお前、親同様の甚兵衛さんが、死なしやんしたからさ。

文次　なるほど、それでふさぎの蟲や赤蛙か、いや、赤蛙ご言やア咋夜すつかりむかれたが、何ぞ貸してくれねえか。

とら　又わたしに貸してくれかえ、ほんに文さん、お前にやア幾ら貸したか知れないから、もう〳〵百でも貸すまいと思つて居るけれど、此目尻の下つた顏を見ると、つい貸してやりたくなるよ。

ト文次に寄添ふ。

文次　そいつア何より有難いが、目尻の下つてゐるのが、お前好きか。

とら　助兵衛たらしくていゝものを、もつと下げてお見せよ。

文次　もう是よりやあ下らない。

とら　何だね、此節のお米ぢやアあるまいし、ちつとづゝ下げなくつて、ぐつとお下げよ。

ト文次指で目尻を下げ、

文次　どうだえ、これぢやあ。

とら　ほんに子分衆も大勢あるが、どう見ても、お前の顔は。

文次　どうしたと。

とら　間抜な顔だねえ。（ト文次を突倒し、屋臺囃子にて奥へ逃げてはひる。）

文次　えゝいめえましい散蓮華だ、此の埋草に引つかめえて、何でも借りて行かにやあならねえ。

ト文次奥へはひる。これにて屋臺囃子を打上げ、床の淨瑠璃になる。

〽打續く田毎の出來も十分に、神の祭も賑しく囃す太皷の音よりも、名に響いたる神力が家を目當に奇妙院、連立つ彌太も一つ穴、

ト是へ屋臺囃子を冠せ、花道より前幕の奇妙院緋の衣篠掛修験者の打扮、丑藏連立ち出來り、花道にて、

奇妙　これ彌太郎、神力は宅に居ようか。

丑藏　先刻内へ歸つたから、居るに違ひはござりませぬ。

奇妙　何にしろ先へ行つて、家の樣子を見てくりやれ。

丑藏　合點でござります。

〽しめし合して門口から內の樣子を窺ひて、

ト兩人舞臺へ來り　丑藏門口から內を窺ひ、片袖を見て、

丑藏　もし昨夜の着物がござりますぜ。

奇妙　これ、めつたなことを。

丑藏　おつと承知だ、（ト思入あつて、）親分、內かえ〳〵。

〽呼はる聲にどや〳〵と、一間を出る子分共。（ト奧より子分四人出て來り、）

重六　おゝ誰だと思つたら、彌太郎か。

小助　何でそこに立つてゐるのだ。

丹藏　早く內へはひらねえか。

大八　誰か一緖に連れて來たのか。

丑藏　おゝ、奇妙院樣をお連れ申した。

重六　なに、奇妙院樣とは。

小助　それ、狐を付けた修験者だ。
丹藏　これ、靜に言へ、聞えらあ。
大八　さあ、こつちへおはひりなされませ。
奇妙　それへ參つてもようござるかな。
重六　ようござりますとも〱、ずつと是へお通りなされませ。
奇妙　然らば御免下され。
〽もつたい顏に上座へ直れば、（ト奇妙院上座へ住ふ。これよりさんげ〱の合方へ屋臺囃子を冠せ、）
小助　これ彌太郎、奇妙院樣を何で連れて來たのだ。
丹藏　外でもねえ、親分のどうも瘧が落ちねえから、奇妙院樣の御祈禱で、落してお貰ひ申すのさ。
丹藏　へゝえ、御祈禱で落ちますかね。
奇妙　落ちるとも〱、元瘧といふ物は病ひとはいひ乍ら、物の障りで煩ふ故、祈禱をなせば直さま落ちるて。
大八　それは不思議なことでござりますね。
小助　やつぱりそれも一件かね。

奇妙　なに、一件とは。
小助　それ、お前樣がお遣ひなさる。（ト狐の眞似をする。）
丑藏　これさ、つまらねえ事を言はねえで、早く親分に知らしてくりやれ。
丹藏　合點だ〳〵。
奇妙　いや呼ぶに及ばぬ、愚僧が奧へ。
〽立ちかゝれば、（ト奧より）、
民五　奇妙院樣がおいでなら、それへ行つてお目にかゝりませう。
〽ちよつと出るにも用意の一腰、手に携へて一間を出で、
ト奧より民五郎衣裳を着換へ一腰を持出て來り、眞中へ住ひ。
民五　これは〳〵、ようこそおいでなされました。
奇妙　すりや、其許が神力殿でござるかな。
民五　へい、民五郎にござりまする。
奇妙　いや、雷名は承知致しをるが、不思議なことで知る人になりまする。
民五　御覽の通りのぶこつ者、お心安うお願ひ申しまする。

奇妙　彌太郎殿の賴みにより、今日祈禱に參つてござるが、瘧を煩ひ居らるゝ由落ちこじれると落ちぬもの故、嘸かし御難儀でござらう、然し愚僧が祈禱をなせば速に落して進ぜます。

民五　それは有難うござりまする。

重六　其の御祈禱とおつしやるのは、どんなことを、

四人　なさるのでござりますな。

奇妙　先づ拭き取りの祈禱といつて、當人を裸になし惣身に掛る障を殘らず幣束にて拭き取るのぢや。

民五　瘧の病ひは風を忌めば、少しの中でも裸になつては。

奇妙　惡いことならならずとも、着慣れた衣類を形代に祈禱をして進ぜませう。

民五　それぢやあわしが衣類をば。

奇妙　形代にして祈禱なせば、當人も同じこと。

〽言ふに彌太郎かたへなる小袖を取つて差出し、（ト丑藏以前の片袖なき小袖を取つて、）

丑藏　もし奇妙院樣、これではどうでござります。

奇妙　形代故何でもよいが、神力どの、こりや此方の衣類でござるか。

民五　はい、私のでござりまする。

奇妙　確と左樣かな。

民五　きつい御念でござりますな。

奇妙　形代になすからは、篤と聞いておかねばならぬ。（ト此内丑藏ひろげ見て、）

丑藏　もし親分、こりや片袖がありませぬ。

民五　おゝ、其片袖か。

重六　そりやアたしか左門樣か。

民五　いやさ、そりやア先刻八軒の油が袖へ掛つた故、片袖洗ひにやつたのだ。

ト四人に默つて居ろといふ思入。

丑藏　もし、奇妙院樣、片袖なくてもようござりますかな。

奇妙　いや、片袖なくては祈禱は出來ぬ。

小助　何故御祈禱が、

四人　出來ませぬ。

奇妙　されば、形代になすからは片袖なければ片輪も同然、襟袖おくみ五輪五體、揃はねば祈禱は出來ぬ。

民五　片輪で出來ずば御縁のないのだ。
丑藏　これさ親分、さう言はずと、折角ござつた奇妙院樣、
丹藏　それで惡くば袖のある、
大八　何ぞ外の着物を出して、
奇妙　いや、外の衣類を出すに及ばぬ。
丑藏　でも片袖がなくては、五體揃はぬ片輪者。
奇妙　ところを愚僧が法力で、五輪五體揃へてやらう。
民五　なに、五輪五體揃へるとは。
奇妙　幸ひ是に似寄りの片袖。
〽取出す片袖見てびつくり、（ト奇妙院懐から前幕の片袖を出す、民五郎びつくりなし、）
民五　や、其片袖は。
奇妙　縞柄といひ大きさも、寸分違はぬ此片袖。（ト小袖へ袖を添へ、）是で其身に疵も付かず、五體揃ひし神力殿、
重六　なるほど是は一つ袖。

小助　どうして是を、
四人　修驗者樣が、
奇妙　持つて居るのは、拾ひました。
民五　何處でお拾ひなされました。
奇妙　栗林の藪蔭で。
民五　え。（ト合方になり、）
奇妙　時刻も丁度子の刻過、雨氣に暗き田圃道、宵に降つたるばら〳〵降りに、水ッ溜りと思ひの外血に辷つてびつくりなし、飛退く途端木蔭から血刀提げて逃行く曲者、やらじと止むる片袖を力に任し引切つて藪へ逃込み行方しれず、厄介ながら捨ても置かれず、代官所へ訴へようと持つて來た片袖が、飛んだ所で役に立つた。
重六　それぢやあ昨夜栗林に、人殺しがあつたと聞いたが、
小助　今の話しを聞いて見ると、此片袖の持主が、
奇妙　慥に其夜の人殺し、
民五　扨は昨夜の、

奇妙　や。

民五　はて、飛んだ事だなあ。

〽それと言はねど神力は、左門が仕業と思ひ込み、思案にくれゝばかたへより、

ト民五郎左門が仕業だといふ思入、丑藏わざと小袖を取つて、

丑藏　何にしろ此片袖は、親分に下さいますか。

奇妙　根が拾つた片袖故、たゞ進ぜてもよいけれど、拾つた所が所といひ、又持主が持主故、たゞは遣られぬ賣りませう。

民五　すりや、此片袖を。

奇妙　此方に賣つて進ぜたいのさ。

民五　いかにも賣るとおつしやるなら、似寄りの袖を買ひませうが、して其値は。

奇妙　拾つた物故いくらでもお心持と言ひたいが、ちつと金子が入用故、百兩に買つて貰ひたい。

民五　やあ。

丑藏　もし〳〵奇妙院樣、引ちぎれた片袖を、あんまり高いぢやあござりませぬか。

奇妙　只賣つたらば四百か五百、端た錢にかならぬ物だが、身ごろが合つて買ふ時は、身體へ疵が付か

ぬ故、百兩では安いものだ。

重六 (腹の立つ思入にて、) 何で是が安いものだ、高が着物の片袖だ、何處で拾つて來なすつたか、をかしな事を言ひなさんな。

小助 これが堅氣な百姓か商人なら知らねえこと、年中場所のかすりを取り遊んで暮す此方の親分、

丹藏 何處から來たか知れもしねえ、お前方に脅しを喰つて、金を出してつまるものか。

大八 なんぼ諸色が高いといつて、白癡脅しなことを言ひなさんな。

奇妙 はて、こなた衆の知つた事ぢやあねえ、此片袖を入用の人が買つたら高くはねえ。さあ神力殿、百兩で買はつしやるか。

民五 さあ、それは。

奇妙 それとも望みでない事なら、無理には勸めぬ止しなせえ、假令些細な片袖でも、只拾つてはおかれねえ、代官所へかう〳〵と、有體に訴へようか。

民五 さあ、それは。

奇妙 但し內證で買はつしやるか。

民五 さあ、

奇妙　訴へようか。

民五　さあ、

奇妙　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

奇妙　代官所へ持出したら、お調べなしに人殺し首と釣替へ、神力どの、否か應かの返事をさつせえ。

〽のつぴきならぬ手詰になり、袖の値の百兩を持つては居れど神力が出すに出されぬせつなさを、窺ふおしほが敵と思ひ、

ト此内民五郎懷にある以前の百兩を出さうかといふ思入、よき程に下手より與吉着流し一本差、派手なる打扮にて出來り、門口に窺ふ、是と一緒におしほ二階の障子を明け窺ひ居て、民五郎が親を殺せしといふ思入、びつくりなして。

しほ　そんなら昨夜の、

民五　や。

〽見合す顏にはつとばかり、障子をさして泣き入るおしほ、門にも來合す白瀧が合點行かずと窺ひゐる。

トおしほ民五郎と顏見合せ、ばつたりと障子をしめ、はアと泣伏す。門口の與吉合點の行かぬ思入。

奇妙　これ神力殿、返事のないは買はぬ氣か。

民五　むゝ。

奇妙　買はずば、これから代官所へ。

〽脅しの詞に門口から、

與吉　いや、其片袖はわしが買はう。

〽言ひつゝはひる白瀧與吉、（ト與吉內へはひる。）

民五　や、おぬしは白瀧、

四人　與吉親分。

丑藏　そんならお前が、此の片袖を。

與吉　いかにも、わしが買ひませう。（トよき所へ住ふ。民五郎思入あつて、）

民五　これ與吉、何でおぬしが其の片袖を。

與吉　己が買ふのは外でもねえ、何ぞの時は片腕に、互ひになる氣の兄弟分、其片腕の片袖がなければ五體に疵が付くゆゑ。

奇妙　其處でこなたが此の袖を、百兩出して買はうといふのか。

與吉　いかにもそれで買ひますが、然し身ごろのねえわし故、譬にもいふ知らず半分、五十兩にまけてくんなせえ。

奇妙　男を磨く白瀧殿、こなたの顏をつぶす樣だが、五十兩には負けられぬ。

丑藏　いらぬおせゝの口出しだが、中を取つて七十五兩、切餠一つはまけてもよし、又買上げてもよささうな、爰らが相場と思ひます。

與吉　相場違ひかしらねえが、人間纔五十年、生れた年から一兩宛五十兩なら賣つてもよからう。

奇妙　今生延びたら是から先、百年生きるも知れねえ身體、一年二分では賣られねえ。

與吉　（きつとなり、）五十兩で賣られずば、御代官でも地頭でも、勝手な所へ持つて出なせえ。

奇妙　なんと。

與吉　狐を遣ひ近郷を、追放されし奇妙院、お構ひ場所の栗林で、どうして昨夜それを拾つた。

奇妙　や。

與吉　其の片袖を代官所へ持つて行つたらこなたから、先へ繩がかゝらにやあならねえ、拾つた所も拾はれた所も惡い栗林、どつちも五分と五分だから、中を取つて五十兩におれが買ふのは扱ひだ。

ト是にて奇妙院、丑藏思入あつて、

丑藏　成程流石は與吉親分、七十五兩が相場だと口を出したはわつちが過り、こりやあ器用に奇妙院樣、五十兩にお賣りなせえ。

奇妙　むゝ、百兩缺いては賣るまいと、思つた袖も買手が上手、四の五のなしに五十兩で、安い物だが賣りませう。

丑藏　然し親分、五十兩は右から左でござりませうな。

與吉　後ともいはず、それ五十兩、

〽流石名うての貸元に、財布の金を投げ出せば、

ト與吉懐から金財布を出し、中から五十兩包を出し奇妙院の前へ投出す。

民五　いや、與吉にそれを出さしては。

與吉　なんの五十や七十は、遊びの上の塵埃り、己に任してくんなせえ。

奇妙　然らば金と引換に。

與吉　これで言分ござりますまいな。（ト金と片袖と引替にとり、）

奇妙　何言分があるものか。

重六　そつちになくば、
四人　こつちにあるわ。
奇妙　なに、言ひ分があるとは。
重六　あぢにからんだ片袖に、ぢつと辛抱して居たが、
小助　六十兩といふ金を、
升助　取られた日にやあそれだけの、
大八　言ひ分言はにやあ、
四人　腹がいねえ。（ト立ちかゝるを與吉留めて、）
與吉　其腹立は尤もだが、神力さへもあの通りぢつと辛抱して居るに、手前達が横合から喧嘩を買ふにやあ及ばねえ。
重六　それだといつて、此儘に。
小助　どうも料簡、
四人　なりやせぬ。
與吉　それぢやあ己の扱ひが、手前達の氣に入らねえのか。

四人　なに、さういふ譯ぢやあねえけれど、
與吉　なけりやあ默つて居てくれろ。
四人　えゝ、いめえましいなあ。
民五　これ、白瀧が口をきくに、餘計な事を言はねえで、手前達は奥へ行け。
重六　それでも此場の、
四人　結末を見にやあ。
民五　えゝ、行けといつたら行かねえのか。
〽鶴の一聲是非なくも、打連れ奥へ入りにける。(ト四人の子分奥へはひる、丑藏思ひ入あつて、)
丑藏　折角賴んだ御祈禱も、今となつてはをかしなはめ、暮れぬ中に少しも早く、
奇妙　何さまそなたに賴まれて、人助故うかうかと、お構ひ場所へ來た愚僧、咎のない内歸宅致さう。
與吉　それぢやあもうお歸りでござりますか。
奇妙　最早日ざしも西へ傾き、釣瓶落しの秋の日に、
丑藏　入相近き七つ過ぎ、
奇妙　どれ足許の明るい内に。(ト立上る。)

民五　左様なれば、
民五 與吉　奇妙院殿、
奇妙　二人の衆、
丑藏　どれ、お送り申しませうか。

〽人をまどはす野狐の修驗の尾に付き彌太郎は、打連れ立ちて行過ぎしが、

ト奇妙院丑藏思入あつて花道へ行き、

丑藏　もし奇妙院樣、まんまと首尾よく、
奇妙　これ、あんまり野暮なせりふぢやあねえか。
丑藏　然しやつぱり紋切形に、ずつしり褒美を。
奇妙　何にも言ふな、それ。（ト十兩紙に包みやる、丑藏取り）
丑藏　や、こりや十兩かえ。
奇妙　不足はあるめえ。
丑藏　不足はないが、ほんの金かえ。
奇妙　虚の金といふがあるものか。

丑藏　でも狐を遣ふおめえだから。

奇妙　どうしたと。

丑藏　後で木の葉になりやあしねえか。

奇妙　なにを馬鹿な。さあ、行かう。

〽おのが古巣へ歸り行く、

ト奇妙院先に丑藏眉毛へ唾を付けて、金を見て嬉しき思入にて花道へはひる。與吉後を見送り、

〽跡見送りて白瀧が、

與吉　これ神力、お前とわけあるおしほどのゝ、親御が昨夜殺されたと途中で聞いて悔みながら、こつちの家へ來たところ、何かごたつく樣子故門に立つて話しを聞けば、其甚兵衞どのが殺された所も同じ栗林で、切られた袖を證據にして奇妙院が人殺しと言はぬばかりの賣買を、見ても居られず飛込んで五十兩で己が買つたが、よもやお前が甚兵衞どのを助けこそすれ何で殺さう。昨日から此小袖を左門樣が着てござれば、正しくこりやあ左門樣、何とさうであらうがな。

〽星をさゝれて神力が、それとあかさば左門が訴人、師弟の義理に包み隱し、

民五　（ぎつくり思入あつて、）さう思ふのも尤もだが、浪々なしても侍氣質、切取などをさつしやる樣な、

そんな心は微塵もない、早い話しが腕はよし、非道な事をさつしやれば、おれが所の食客に何で
なつてござらうぞ。

與吉 いや／＼、そりやあ師弟の縁に左門様をかばふのだ、お前が幾ら隱しても證據になつた此の小袖
五十兩で己が買つたも兄弟分の縁ある故、なぜ此己を他人にして打明けてくれねえのだ。

民五 眞身も及ばぬ親切に、何をおぬしに隱すものだ、甚兵衛どのを殺したも、左門様の業ぢやあねえ。
外に殺した者がある。

與吉 して、外にあるとは。

民五 切られた袖が證據となりし、此神力民五郎だ。

與吉 えゝ、それぢやあ兄貴が。

民五 これ、靜に言やれ。

ト兩人あたりを見廻して、

與吉 いはゞ舅も同然な、甚兵衛どのを、何の遺恨で。

民五 遺恨はなけれど、欲ゆゑに。

與吉 なんと。

民五　頼母子講の當り金百兩持つて居たのが因果、金がほしさに甚兵衛殿を殺して逃げるを見付けられ引切られたる此の片袖、左門樣でない證據は其折盜んだ百兩の、金を爰に持つて居る。

〽取出す金に白瀧は、呆れ果て詞なき折から二階と表口ト民五郎以前の百兩を出し見せろ、與吉是れを見て呆れし思入、下手へ裏口から子分四人喧嘩支度で出るを文治留める、二階ではばた〳〵と音して、

とら　もしおしほさん、早まつた事しなさんすな。

文次　これ、あの法印をしめたらば、親分の難儀にならう、むやみな事をするなといふに。

しほ　いえ〳〵、放して下さんせいなあ。

四人　いらぬ留だてしてくれるな。

〽言ふ聲聞いて神力が、心も心ならざるを、白瀧むんずと胸ぐらとり、ト此內民五郎二階と表へ思入あつて、どちらを留めようかとうろ〳〵するを、與吉胸づくしをとり、

きつとなつて、

與吉　これ神力、いやさ民五郎、ゑゝこなたは〳〵、見下げ果てた性根だなあ。

〽腹立まぎれに引すゑる門には文次を突退けて、駈行く子分を追駈け行く、

ト與吉民五郎をこづく、此内四人は文治を突退けて花道へ走りはひる、文治跡を追かけ行く、與吉思ひ入
あつて、

與吉　こなたはごういふ心だか、是が他人でもある事か、女房も同じおしほどのゝ親を殺すといふ事が何處の國にあるものだ、それでも達師といはれるか、さういふそでねえ根性と知らずに是迄兄弟の、義を結んだが口惜しい、今日から義絶をするからにやあ、兄でもなけりやあ弟でもねえ、五十兩で今買つた、此片袖が置土產だ。

〽片袖取つてたゝき付け、（ト與吉民五郎に片袖を打付け、）

遊び事の遣り取りや、時のはずみの運次第、只とる樣な事もあるが、人の物は百錢一枚取つたことのねえ白瀧、假にも兄弟といつたのが世間の人に面目ねえ、えゝいめえましいだことなあ。

〽齒がみをなして白瀧が、悔し淚にくれにける、折柄始終を聞居たるおしほは二階を走り下り、

ト與吉頭を搔きむしり、口惜しき思ひ入、ばた／＼にて二階よりおしほ短き脇差を持ち出て來り、

しほ　これ民五郎さん、樣子は二階で聞きました、何で殺しなさんしたぞいな。（ト民五郎に縋り付、）金がいるなら入る樣に私に言うて下さんせぬ、お前の事なら父さんも何の百や二百の金貸さいで何とせうぞいなア、よし又それが出來ぬなら此身を苦界へ沈めても、お前の爲なら厭ひはせぬに、今更

言うて仕方はなけれど、かういふ邪険な心としらず、親のゆるさぬいたづらして、ほんに是迄幾度か異見された姉さんや兄さんに今となり、合はす顔がござんせぬ故死なうと覺悟したところ、死んでも冥土で父さんに言譯があるまいと、お虎どのに止められ死ぬにも死なれぬわたしの身體、推量して下さんせいな。

〽わつとばかりに取亂し、泣入るおしほが身の上を不便と思へど打明けて、言ふに言はれぬ苦しさの、樣子知つたるお虎はぬけ出で、

トおしほ泣きふす、民五郎せつなき思入、此時下手へお虎出て、

とら　此の樣子を左門樣へ、ちつとも早く、さうだ。

〽男勝りに尻はしをり、飛ぶが如くに走り行く、

トお虎尻を端折り、逸散に花道へ走りはひる。與吉ぢつと思入あつて、

〽白瀧見兼ねて介抱なし、

與吉　お〻尤もだ〳〵、敵同志になつたからは、生きて居ては兄弟衆死んでは親御に逢はれぬ譯、中有に迷ふおめえの身體、己が助太刀して遣らうから、敵を討つて言譯しなせえ。

しほ　え、敵を討てとは。

與吉　親御を殺した神力を、敵と名乘つて討ちなせえ。

しほ　そりやさうでもござんせうが、たとひ半年一年でも夫と思つた神力さん、どうまあ敵を討たれませう。

與吉　討たねば親、兄弟へ、身の言譯があるまいが。

しほ　さあ、それは。

與吉　それとも親や兄弟を、捨てても敵を討たぬ氣か。

しほ　さあ。

與吉　但しは討つか。

しほ　さあ。

與吉　さあ。

兩人　さあ〳〵〳〵。

與吉　親の敵を討たずばなるまい。

〽言ふにいなとも稻舟の水に漂ふ思ひにて、取りつく島もなく〳〵に、おしほは心取直し、

トおしほ宜しく思ひ入あつて、

しほ　いかなる前世の因果にて、二世も三世も言ひ交せしお前が親の敵となり、討たねばならぬ此場の仕儀、返り討になる迄も、かすり疵の一つも付けねば未來へ行つて父さんへ言譯がござんせぬ、覺悟して下さんせいな。

與吉　あつぱれ氣丈によく言つた、それでこそ親御へ孝行。これ神力、おしほどのゝけなげな心に先非を恥ぢて潔よく、敵と名乘つて討たれさつせえ。

民五　親兄弟へ言譯がねえとあるなら是非がねえ、是迄一つ寐したよしみ、かすり手位は受けてやらう心臆せず己を切れ。

〽おしほは身體を突付けられ、今更討つに討兼ねて、（ト民五郎おしほに身體を突付ける。）

しほ　そんなら、どうでも。

與吉　討たねば親御へ、孝が立つまい。

〽きつと云はれて立上り、（トおしほきつと思ひ入あつて、）

しほ　親の敵、神力覺悟。

〽拔手も見せず我と我がのんどへがばと突立つれば、はツと留めたき神力が顏を背ける苦しさ切なさ。

ト おしほ一腰をぬき、喉へ突立てる、民五郎びつくりし留めようとしてぢつと思入、與吉抱起して、

與吉　こりや、おしほどのには、何故に。

〽言ふに手負は顔を上げ。

しほ　討たねばならぬ父さんの、敵なれども討たれぬは。

〽三とせ後に伊香保から、湯治歸りに熊谷の、土手で親子二人とも草葉の露と盗人の、刃にかゝり死ぬ所、通りかゝりし神力殿に、

〽危い命助けられ、大恩のある其人を、たとひ親の敵とて何で私が殺されませう、それ故先へ死にまする、切ない譯を推量して、

〽不便と思うて下さんせと、義理をたつるも二世かけし惚れた男のいとしさは、言はねどそれと見えにける、我故命捨てさせし身の苦しさも白瀧が、

ト 此内おしほ手負にて、宜しく思入、是を民五郎見て不便だといふ思入、與吉詰寄り、

與吉　一旦命を助けられし、義理を思つておしほどのが自害したのは見上げた心、しかし此儘冥土へ行

つたら、甚兵衞殿に言譯あるまい、緣あつて夫婦同樣是迄枕を交した中、冥土の土產にこなたも共々潔よく腹を切り、手に手を取つてあの世へ行き、甚兵衞殿へ言譯さつせえ。

民五　なるほど、義理を思つたら死なにやあならぬ所だが、甚兵衞どのを殺す程な義理知らずの神力だから、大事の命は捨てられねえ。

與吉　いくら大事の命でも、天の網がかゝつたら高飛をする事も出來ず、唐丸籠で宿送り恥を暴した其上で、惜しがる命を捨てにやあならぬ、さうなる日にやあこなたばかりか草葉の蔭の親分迄、恥になるから未練を言はず、肚胸をすゑて腹を切れ、己が介錯してやらう。

民五　假令恥にならうとも、此結構な世を捨て命を捨てるは大べらぼう、生きられるだけ一日でも生延びるのが身の德だ。

與吉　さういふこなたが心なら、

へ柄に手を掛け抜きかけるを、（ト與吉拔掛けるを留めて、）

民五　こりや白瀧、なんとするのだ。

與吉　何とするとは知れた事、人殺しの兇條で切られる時は仲間の恥、遲かれ早かれ死ぬ身體、己が貰つた覺悟しやれ。

民五　假にも兄と名の付いた、わりやあ己を殺す氣か。

與吉　此身の恥だ、殺さにやおかねえ。

民五　おゝ、切られるものなら切つて見ろ。

與吉　何をこしやくな、

〽切て掛るを身をかはし、拔合せててうと受け、上段下段打合ふ刃音、側に苦しむ手負のおしほ是なう待つてと止むる折柄、お虎が知せに宙を駈け立戻つたる三嶋が、それと見るより左右を留め、

ト此内與吉切つて掛る民五郎拔合せて受留め、屋臺囃子を冠せ兩人派手なる立廻り、おしほ苦痛を怺へ這ひ寄つて留める、よき程にばた／＼になり、花道より左門出て來り、花道にてちよつと思入あつて直に舞臺へ來り、此中へはひり、兩人を留め、

左門　あゝこれ、二人ともに待つた／＼。

與吉　仔細あつての果し合ひ、

民五　怪我があつてはならぬから、

與吉　留だてせずと、見物さつせえ。

〽又も打合ふ兩人を、左門は左右へしつかと留め、

ト又立廻つて上手に民五郎、下手に與吉。裏向に眞中にて左門兩人の拳をとらへ、

左門　いや見物なして居られぬは、どちらに怪我があつてもならぬ。達て命が取りたくば、先づ此刀で二人より己を先へ殺してしまへ。

兩人　何と。

左門　今そち達の果し合も、元の起りは左門故、仔細を語る其間、此刀を預けてくれるか。

兩人　さあ、

左門　但しは、これで己を殺すか。

兩人　さあ、

左門　預けてくれるか。

兩人　さあ、

左門　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

左門　兩人返事は、なゝなんと。（ト是にて兩人思入あつて）

民五　いかなる仔細かしらねども、
與吉　聞かぬといふも本意でねえ、
左門　そんなら暫し二人の刀を、
民五　あなたへお預け、
兩人　申しませう。
左門　早速の承知忝い。（ト左門兩手に刀を持ち、）直には行かぬ亂れ燒、するどき二人が魂を左門樣に
預かつた。
民五　して、お止めありし、
與五　其の仔細は。
〽言ふに左門はどつかと座し、（ト左門思ひ入あつて、）
左門　仔細といふは外でもない、甚兵衛殿を暗殺せし證據となりし袖は元より、賴母子講の百兩も此左
門が所持せし金。（トおしほびつくりして、）
しほ　そんなら、昨夜父さんを、
民五　栗林にて殺せしは、

興吉　左門殿にてあつたるか。

左門　窮迫なせど義を守り、非道をなさぬ此の左門、暗殺なしたは外の者だ。

民五　すりや、殺せし者が、

興吉　外にあるとか。

左門　其夜のあらまし此場にて、疑ひ晴しに話して聞さう。

〽語り聞けんと座を進み、

都下にまさつて此邊は、農民迄が劍道を執心故に奉納せし撃劍會が群集なし、千葉の社中の舊友と九つ過迄蓬萊屋で酒宴を催し歸りがけ、しかも所は栗林雲足早くばら〳〵と、降來る空の薄暗がり、一叢茂る藪蔭に其人影も二三人、挑むは喧嘩か物取か、懲らしてやらうと立入つて、支へ止むる木下蔭、漆紅葉か道端の、血に辷ツて躓く死骸、是はと驚く後からむんずと組付く曲者を、小手を返して投退けるはずみに肩よりめり〳〵と、左の袖を引ちぎられ取返さんと探り合ふ、手先へ障りし金包拾ひ取りしが我過り、隠し置きしを千悔なし、落した者があるならば返してくれんと神力へ預けし金を此左門が、金策盡きて甚兵衛を暗殺なして掠めしと、思ひ違ひて義理を立て其身に負ひし人殺し、又白瀧も手拭を證據に是も思ひ違へ、白刃を合す果し合、己も知らねば

神力も元よりしらぬ事なれば、疑ひかゝる村雲を、晴らして月の光あるするどき二人が此刀、今日迄丸い附合の、かけざる様に納めてくりやれ。

〽あいし次第を物語れば、扨はさうかと神力白瀧互ひに心の疑ひ晴れ鞘へ納める白刃と白刃、中に嬉しき手負ひのおしほ、

ト此内左門物語やうの思ひ入宜しく民五郎與吉互ひにうなづき、白刃を鞘へ納める。おしほ嬉しき思入にて、

しほ　嬉しやそんなら父さんを、殺せし者は外にあつて、神力殿ではなかつたかいなあ。

左門　おゝ、神力が殺せしと言ひしはまつかな僞言、

しほ　何でお前は其様な、僞り言うたことぢやぞいなあ。

〽縋り歎くに神力も不便と思ひいたはりて、（ト民五郎思ひ入あつて、）

民五　おゝ其恨みは尤もだが、片袖といひ金といひ左門様が仕業とのみ、思ひし故に人殺しの、科を此身に脊負ふのは、左門様の親御様、左太夫様の御指南受け、

〽神影流の奥義を極め匹夫ながらも歴々に負けぬが此身の仇となり、しかも過ぎ行く年の後、

他流試合に遺恨を受け、數十人にて取卷かれ、既に一命を取られるところを左太夫様に助けられ、御

教諭受けて此土地へ、流れて來たる民五郎、
〽七年此方生延びて榮耀榮華をなしたるも、大恩受けし師匠の蔭、
其御子息の左門樣、我家の内から繩付になしては濟まぬ其上に、おしほにつながる緣により左門
樣を突出せしと、言はれるのは必定故、
〽此身に科を引受けて甚兵衛殿を殺せしと、言ふ神力が苦しみは、師匠に受けし恩返し、
そちが自殺も餘所に見て邪險な者と思はうが、ゆるしてくりやれ、これおしほ。
〽手に手を取つていたはれば、手負は嬉しく縋り付き、
しほ　え丶、よう言うて下さんした、是が冥土へよい土產、
〽思へばさつき死んだなら、わたしや彼世へ行くにも行かれず中有に迷はにやならぬのに、
息があつたばつかりに、お前の殺さぬ事を聞き父さまに逢はるれば、迷はず往生する程に、
〽百萬年の御壽命すぎ、あの世へござんす其時は、女夫になつて下さんせと、いふ息さへも
四苦八苦、（トおしほ宜しく思入あつて、）
もう目が見えぬか、悲しやなあ。
〽いふが此世の名殘の秋、梢の風に紅葉の散りてはかなくなりにけり、

ト　おしほ宜しく落入る、民五郎介抱して泣く、左門與吉も愁ひの思入。

與吉　ヘ不便なものやと兩人も、共に涙にくれたりしが、かういふ事と露知らず、こなたの仕業と思つたは、己が場所から歸りがけ通りかゝつた栗林で、袖を切られし樣子をば、星明りに見た上に死骸の側で拾つた手拭。（ト懷から誂の手拭を出す。）

民五　其の手拭は昨日夕暮、場所でなくせし己が手拭。

與吉　それ故若しやと來て見れば、片袖といひ金といひ、現在こなたの白狀に、人殺しと思ひしも今となつては面目ねえ。

左門　扨は昨夜栗林へ後から來たのは、與吉どのか。

與吉　左門樣とも知らずして、

左門　あぶないことで、

兩人　あつたなあ。（ト兩人思入。）

民五　まだあぶねえは左門樣が、もう一足遲かつたら、

左門　どつちか怪我をするところ、

與吉　こつちは怪我なく助かつたが、入らざる世話に橫合から敵呼はりしたばかり、おしほどのに命を

捨てさせ、兄貴へ對して濟まねえ譯。身の言譯に此場にて。

〽刀逆手に取直せば、（ト與吉死なうとするを、民五郎留めて、）

民五　これ待て白瀧、おしほが死んだも其元は己が包み隱せし故、おぬしが死ねば神力も見ては居られぬ一緒に死ぬ。

與吉　いゝや、こなたは死なずにおしほどのや、此の與吉が亡き跡の、とひ弔ひをして下せえ。

民五　そりやあこつちで言ふ事だ。

與吉　すりや、どうあつても。

民五　おぬしが死ぬなら、己も死ぬ。

與吉　えゝ面倒な。

民五　ちつとも早く。

〽既にかうよと見えければ、（ト兩人腹を切らうとするを、左門双方を留め、）

左門　えゝ又しても刃物三昧、男を磨くやうにもねえ、死なうといふは惡い料簡。

民五　いや死なねば浮世の、

與吉　義理が立たぬ。

左門　死んだら猶更義理が立つまい。

左門　今近郷近在で、一二と云はるゝ神力白瀧、兩人一時に命を捨て鬼籍に入らば三年後非業な死を遂げ此世を去り、恥辱を殘せし二人が親分寒川の繁藏が其の仕返しは誰がする。

兩人　何と。

兩人　むゝ。（トぎつくり思ひ入。）

左門　通常の者でもあることが、敵は名におふ庵岡の親分株の竹五郎、上へ言ぬ鷲の胴取に今にも上より手がはひり唐丸籠へ乘る時は、短え命でありながら、長脇差を看板に一刀流の腕自慢、殊には子分も四五百人、出口々々の見張さへ、六挺だらみの小砲に、常に鎖の肌着をも着込み、要害堅固にして居れば容易なことぢやあ討たれねえ。さあ討ねばならぬ繁藏が、大事な敵を討ちもせず、些細な事で命を捨て、冥土へ行つて親分に何と言譯する積りだ。親分子分の義理を思はゞ緣につながる甚兵衛を、暗殺なした敵迄討つてやるのが何より追善、死んぢやあ浮世の義理が立つまい。

民五　なるほど、こりやアあやまつた、一途にはやつて今死んだら、

與吉　冥土へ行つて親分に、

民五　敵も討たず二人とも、

與吉　言譯のねえ所、

左門　其處へ心の付いたなら、

民五　此の場は、

與吉　此の儘、

左門　浮世の義理を、

民五 與吉　立てにやあならねえ。

〽刃を鞘へしつくりと、納める折柄駈け來る文次、

ト是にて拔いた一腰をシヤンとをさめる。ばた／＼になり以前の文次出て來り、直に舞臺へ來て、

文次　親分々々、いゝ事を聞いて來やした。

民五　おゝ、いゝ事とは耳よりな。

三人　して／＼樣子は。

〽言ふに文次は汗おし拭ひ、（ト文次汗を拭きながら、）

文次　さつきあれから若い奴等が奇妙院を追つかけたが、御先狐を遣つたか、姿をくらまし彌太郎とも何處へ行つたか行方しれず、それから諸所へ手分して、行方を搜して歩いた所、明神山で見掛け

た故、木の間へ隱れて樣子を聞けば、甚兵衞樣を殺したはおしほさんの遺恨により、奇妙院と彌太郎が仕業といふ事聞いた故、取つて返して知らせに來ました。

民五　すりや甚兵衞殿を殺せしは、奇妙院が仕業さな。

左門　おのが殺して其の罪を、

與吉　塗りにうせたる奇妙院。

文次　まだ〳〵大事は二人とも、竹五郎が子分にて、犬にはひりし廻し者、

民五　間者とあれば猶の事、是より直に明神山へ、

與吉　然し貴兄は瘧の煩ひ、

左門　一人やるのは心もとない、

文次　わしが一緒に、

民五　いや、いはゞ舅の敵故己が討たねば義理が濟まぬ。

左門　さういふ事なら、

與吉　片時も早く。

ト此時庵岡の子分○窺ひ出て、

○　われをやつては。（ト民五郎に掛るを突廻し、）

左門　こしやくな事を。（ト左門引すゑる。）

與吉　跡氣遣はずと。（ト門口をしめる、民五郎花道へ行き、）

民五　合點だ。

〽勇み進んで、

ト二重へ曲撥を冠せ、民五郎花道へはひる、與吉伸上りて見送る、左門は十分と立廻り引ばり宜しく。

幕

ト山おろしのつなぎにて、直引返す。

大切

明神山古廟の場
鎭守祭捕物の場

〔役名――神力民五郎、庵岡竹五郎、三島左門、白瀧與吉、奇妙院、黑闇の丑藏、其他。〕

（明神山の場）――本舞臺四間通しの高二重、此前へ張出し中足の二重岩組の蹴込み、高二重の上手に一間藁葺畫心の辻堂、狐格子横手羽目共とはれる仕掛、上下一ぱいに岩山の張物、杉の立木、向う杉の梢を見せたる切出しの遠山、灯入の半月、谷間の心、花道いつもの所低き岩の張物、杉の梢谷間

の切穴、是より舞臺下手へ出る事、總て明神山頂上の體。山おろしにて幕明く、

〽山の端へ傾く月も鎌の刃や、我家へ歸る草刈の笛に心も澄渡る明神山の頂上に、谺も若しや合圖かと、奇妙院は丑藏が來るを遲しと松のかげ、

竹笛入、谺の合方にて、上手より前幕の奇妙院出て來り、

奇妙　深山幽谷に景地ありと、木の間を洩れてきら／＼と流れにうつる月影に、見渡す谷の山紅葉峰に妻戀ふ鹿の聲、麓に賤が小夜砧心耳を澄ます笛の音は、我家へ歸る草刈か、おゝ、其牧童の丑藏は、何をして遲いことだか、どれ一服やつて待たうかえ。

〽かたへの岩に腰打掛け、火打取出し打つ音も、谺に響く向うより火影目當に駈來る丑藏、

トやはり山おろし谺の合方、摺火灯を出し煙草をのみ居る、ばた／＼にて花道より丑藏鐵砲を提げて出來り、花道にて

丑藏　其處に居るのは、奇妙院殿か。

奇妙　おゝ、丑藏か、待つて居た／＼。

丑藏　もし、油斷のならぬ事が出來た。

奇妙　なに、油斷のならぬとは。

丑藏　其處へ行つて話しませう。

〽火繩を振つて山間より、けはしき道を登り來て、

ト丑藏花道の切穴より舞臺下手へ上つて來り、

丑藏　もし、油斷のならぬといふ譯は、神力めが今爰へこなたを尋ねて上つて來ます。

奇妙　むゝ、昨夜殺した甚兵衞の己を敵と狙つて來るか。

丑藏　いかにもこなたと己を尋ね、敵を討ちに來るとの事故、力づくではかなはぬから、木蔭に隱れて一ぶちにぶち殺す氣で鐵砲を、一挺用意して來ました。

奇妙　おゝ出來した〳〵、それさへあれば大丈夫だ。

丑藏　それにしても不思議なは、誰が爰に居る事を神力めに知したか。

奇妙　いや誰でもない、己が知した。

丑藏　え、こなたがそれを知らしたとは。

奇妙　先刻彼奴の子分の者が、見え隱れに付いて來た故、甚兵衞めを殺した事から、爰に隱れて居る事も告げる樣に言つてやつた。

丑藏　そりや又何で。

奇妙　男の敵と神力が、己を尋ねて來るは必定、瘧病ひを幸ひに足場の悪い此山へ、釣出して殺す氣だ
彼奴を一人片付ければ、先親分も安心だ。

丑藏　然し瘧をふるつて居ても、力强の神力め、若し手にあまつた其時は。

奇妙　其の手當もしておいた、鎭守の祭の群集に紛れ、忍び／＼に今朝ッから諸所へ入込むこつちの子分が、合圖をすれば八方から此山を取巻く積りだ。

丑藏　さう聞く上は大丈夫。

奇妙　したが、なるたけ人手を借りず神力めをしとめねば、骨を折つた甲斐がない、何でも爰へ來たならば、己が相手になつてゐるから、若しや危ふくなつたらば、一と打ちにぶち殺せ。

丑藏　それぢやあおれはちつとも早く、杉の梢へ上つて居よう。

奇妙　(向うへ思入あつて、)噂をすれば影とやら、

丑藏　向うへ來るは慥に神力、

奇妙　おぬしは、梢へ、

丑藏　合點だ。

〽おゝ合點と丑藏が、杉の梢へよぢのぼる、程もあらせず神力が敵の行方其處爰と月をよす

がに尋ね來て、

ト是にて丑藏は鐵砲を持ち下手の杉へ登る。奇妙院は向うへ思ひ入。矢張右の鳴物ばた〳〵にて民五郎一本ざし、尻端折りにて出來り、花道へ留り、

民五　今麓の一軒家で奇妙院を尋ねしに、日暮に一人修驗者が登つたといふからは、峠に祭る明神の古廟に居るに相違ない。ちつとも早く、おゝさうだ。

〽茂る樹木の谷間より明神峠へさし掛れば俄に山霧立覆ひ、目ざしも知れねば途を失ひ、

ト民五郎花道の切穴より下手へ上り來る、奇妙院是を見て九字を切り印を結ぶ、薄ドロ〳〵になり窓蓋を下し、灯入の月を隱し、舞臺暗くなる、民五郎思ひ入あつて、

やゝ今迄ありし月影も、山霧深く立上り尋ぬる敵の奇妙院も、何れに居るかあいろ分らず、はて困つたものだなあ。

〽行くに行かれず彳めば、奇妙院は顏を差出し、

ト民五郎途方にくれし思ひ入、奇妙院民五郎の前へ顏を差出し、につたりと思ひ入あつて、

奇妙　氣遣ひ致すな、爰に居るわ。

民五　や、さういふ聲は。（トきつとなる。奇妙院印をもどす、是にて月出て明るくなる。）

奇妙　奇妙院だ。

民五　おゝ、奇妙院か、やう〳〵のことで尋ねて來たのだ。

奇妙　病氣も厭はず夜に入つて、明神山迄尋ねて來たは、何ぞおれに用でもあつてか。

民五　ちと貰ひたいものがあつて。

奇妙　なに、貰ひたいとは、何だしらん。あゝ、臆病故劍難除のお守を貰ひに來たのか。

民五　其の劍難除は、おれよりもこなたが大事にしたがいゝ、其そッ首を貰ひに來たのだ。

奇妙　かけげえもねえ此の首を、貰ひに來たとはそりやなんで。

民五　昨夜討たれた甚兵衛につながる縁の神力が、一本花や水向の泣の涙の机の上へ、團子替りに供へてえのだ。

奇妙　いや、折角の望みだが、團子代りにや遣られねえ、いで此首をやる時は、二本道具に引馬で立派に落す大事な首、氣の毒ながら斷りだ。

民五　一旦已が望んだからは、いやだと言やあ腕づくで、ねぢり切つても貰はにやならぬ。

奇妙　なんぼおぬしが力強でも、おれが首にやあ骨がある、捻り切るなら切つて見ろ。

民五　おゝ切らねえでどうするものだ。

奇妙　こしやくな事を。

〽立蹴にけるを身をかはし、足首取つて引倒せば、ふり拂つて立掛るを胸許取つて一腰を只一突と差付れば、

ト奇妙院民五郎を蹴る、身を躱しちよつと立廻つて奇妙院を引付け、一腰を抜き胸許へ差付ける。

奇妙　やれ待て神力、其刃物が己が身へ一分でも立つが最後、われが命が先へねえぞ。

民五　なに、命がねえとは。

奇妙　これ、後の杉の梢を見ろ。

民五　なんと。

〽見返る杉の梢より筒先向けて丑藏が、覘ひ居るにぞびつくりなし。

民五　やゝ、杉の梢に窺ひゐるは、

奇妙　手向ひなせば、忽に、

丑藏　火蓋を切つてぶち殺すぞ。

民五　やゝゝゝゝ。（ト奇妙院振拂つて立上り）

奇妙　何と手出しはなるめえが。

民五　む丶。（トちつと當惑の思入。）

奇妙　さあ切られるなら切つて見ろ、己を切りやあ立所に手前も命を捨てにやあならねえ。さあ切れ、さあ切れ、刃物を持つて切れねえのか。え丶、張合のねえ奴だなあ。

〽又もはつたと蹴倒せば、其儘どうと神力が瘧の病ひに顫へ出し、齒の根も合はぬ胴顫ひ、

ト奇妙院民五郎を蹴倒す、民五郎どうとなり起上らうとして瘧の思入にて顫へ出し、口惜しき思入。奇妙院是を見て、

奇妙　どうした〳〵、何でそんなに顫へるのだ、此奇妙院が怖いのか。

民五　え丶、折も折とて寒氣だち、瘧の顫へに手足もかなはず、敵も討たでやみ〳〵と、手籠になるか口惜しい。

〽立上りてはどうとなり、もだえ苦しむ體を見て、

ト民五郎顫へ〳〵宜しく思入、兩人是を見てしめたといふ思入。

奇妙　あ丶、顫へるのは瘧のせゐか。（ト肩へ足を踏掛け、）其顫へるを留めてやらうと先刻祈禱に行つてやつたに米一升が惜しいのか、己が祈禱を受けねえばかり、持つて生れた力さへ出せねえ瘧の胴顫ひ、あまり見る眼が不便だから行法勝れた奇妙院が瘧ばかりか其首を、ころりと爰で落してやら

う。

民五　ちえゝ。（ト口惜しき思入。）

丑藏　思ひがけねえ瘧にて、手足が自由にならねえ上は、もう鐵砲にも及ぶめえ。

奇妙　おゝ袋の鼠、大丈夫だ、丑藏手前も爰へ來て、さいなんでやるがいゝ。

丑藏　そいつあ何より面白い。

〽杉の梢をひらりと飛下り、襟上取つて引倒し、

ト丑藏杉の木から飛下り、顫へゐる民五郎の襟上を取つて引倒し、

やい神力、ちつと此方に願ひがあつて子分になつた丑藏を、よく鼻の穴へ繩を通し、ひどい遣ひ樣をしやあがつたな、瘧で身體の利かねえのが廻る因果の牛車、今日こそ日頃の意趣返し、心の儘にかう〳〵。（ト民五郎を打つて突放し、）こんないゝ心持はねえ。

民五　えゝ、瘧の病ひに此の有樣、手出しもならぬが口惜しい、ちえゝ。（ト顫へゐる。奇妙院側へ寄り、）

奇妙　されば、是から冥土の土産に言つて聞かせる事がある、甚兵衞めを殺したのは我と疾からちゝくりやつて、おしほをくれぬ其上に、己が狐を遣ふのを代官所へ訴へて、追放させし意趣晴し、賴母子講の歸りを待受け金を取つて殺した科を、汝に着せるもくろみで、此丑藏が盗んで來た上代

染の手拭を落して歸る其所へ、邪魔な奴めに出ツくはし、盜んだ金を取落し、業腹まぎれ引切つた其片袖が役に立ち、百兩取らうと思つたも半分直の五十兩、其埋草にわれを釣出し、爰で殺して親分から褒美の金を貰ふのだ。

民五　己を殺して褒美を取る、其親分といふのは誰だ。

奇妙　手前達にやあ遺恨のある、庵岡の竹五郎樣だ。

民五　やゝ、扨は修驗者奇妙院は。

奇妙　元は上總の久留里產れ、洒落に唄つた舟玉から、さんけ〳〵に姿をかへ、六根生得勝負好き、晦日々々の竈じめに、側中しめる道樂のいつか三つぼの狐を遣ひ、人を化した身の科に、果は不動の金縛り、縛の繩にも二三度かゝり、生れ故鄕を構はれて今庵岡の子分となり、化た修驗の衣を脫ぎア野狐官次といふ者だ。

丑藏　其の相づりの彌太郎は、まだ角大師の時分から横に車の牛部屋育ち、人の物は我物と何でもござれにとる年も十六むさしの芝浦から、江戸を喰ひつめ親玉の子分になつた黑闇丑藏、二人が二人廻し者、間者に來たとは知るめえな。

ヘ弱身へ付込む丑藏が足下に掛けて踏みにじる、足首取つて神力が、

ト丑藏民五郎を踏みにじる、民五郎足首を取つてぢつと見て、

民五　もう言ふ事は、それぎりか。

兩人　や。

民五　せりふが切れたら二人とも、息の根を留めてやらう。

〽丑藏投退け仁王立ち、二人は見るよりびつくりなし。

ト民五郎丑藏を投げのけ、すつくと立ち、きつと見得、兩人びつくりなし、

奇妙　やあ、わりや瘧でふるへて居たに、

丑藏　見りやあ常に替らぬ體、

奇妙　扨は寒氣と、

兩人　言つたのは、

民五　おゝ、嘘だ。

兩人　やあ、

民五　力づくにも腕づくにも、かなはぬ梢の飛道具、どんと火蓋を切られりやあ、大事の命を玉なしに筒に籠めたる焔硝の、煙と共に消えにやあならねえ、其大難を脫れん爲、瘧といつて顫へたのだ。

さうとも知らずごん〳〵と、野鐵砲をはなすやうに嘘か實か身の素性問はず語りに庵岡の、子分と聞いては二人とも、敵に敵の二つ玉、己が拳の強薬で敲き殺すぞ覺悟なせ。

奇妙　さう聞く上は。

丑藏　只一撃ちに。（ト鐵砲を取りに掛る、）

民五　ごつこい、とりやあ渡されねえ。（ト鐵砲を足で抑へる。）

奇妙　えゝ面倒な、ばらしてしまへ。

丑藏　合點だ。

〽兩人一度に拔連れて切つてかゝるを身をしづめ、拔合しててう〳〵、受けつながしつ挑みのふ。

ト此内拔いて切つて掛る、民五郎ぬき合せて立廻り、よき見得より山おろし誂への鳴物になり、三人立廻り宜しくあつて、丑藏民五郎に追はれ危くなり。

こいつはたまらぬ。

ト丑藏切穴へ飛込む、奇妙院切つてかゝるを、民五郎刀を打落す、此刀谷へ落ち、奇妙院かなはず上手辻堂狐格子を打破り、内へ逃込む、民五郎追掛けてはひり、ばた〳〵になり下手羽目を打破り、奇

妙院肩先を切られ糊紅になり逃出で、下の二重へどうとなる、民五郎辻堂より刀を振上げきつと見得、是より鳴物替つて奇妙院逃げるを追ひかける立廻りあつて、トヾ奇妙院又切られ、

奇妙　もうかなはぬか、口惜しい。

ト腰にさしたる錫杖を谷間へ打込む、とからりと音して、是をきつかけに花道揚幕の内にて竹法螺を吹く、民五郎是を聞き、合點の行かぬ思入にて、

民五　やゝ、麓に聞える竹法螺は、

奇妙　おのれを取卷く合圖なるわ。

民五　すりや、此の神力を。

奇妙　擒になさん豫ての手だて。

民五　なに、こざかしい。

〽疊みかけて脇腹へ、ぐつと突込む急所の深手、虚空を摑んで七轉八倒、はかなく息は絕えにけり。

ト立廻つて民五郎奇妙院の脇腹へ突込みゑぐる、奇妙院立身にて宜しく苦しみ落入る。民五郎刀を拔くとばつたり倒れる。民五郎止めを刺す、此時後へ襷鉢卷半纏紐付股引の捕手六人、十手を持出て、

捕手　とつた。

ト打て掛るを身をかはし、民五郎刀をくはへ尻を端折りきつと見得、是より大小入どん〳〵の鳴物になり、民五郎六人を相手に捕ものゝ立廻り宜しくあつて、上手へ追込み刀を杖にホッと思入。

〽ホッと一息つく折しも、峰より下す夜嵐に瘧の病ひに寒氣立ち、五體ふるへて留度なく、

ト山おろし床の合方になり、民五郎瘧にてふるへ出し、どうとなり、

民五　ちえゝ口惜しや殘念や、せめて一方切抜けて親分の敵竹五郎に、一寸なりと疵を付け、切り死仕ようと思つたも、瘧の病ひに手足もかなはず、此の神力が絕體絕命。

〽日頃念ずる摩利支天の助けのなきはよく〳〵に、（ト爰へ捕手一人掛り、）

捕手　運命盡きし民五郎。

〽よろぼひ〳〵後なる古廟へのぼり麓を見おろし、

ト捕手を力に辻堂へのぼり、柱巻にて左右を見て、

民五　我一人を捕へんと、明神山の八方へ篝を焚いて取卷く捕手、

〽鬼神ならばしらぬこと、切抜けんこと思ひも寄らず、

やみ〳〵繩目にあはんより、潔く腹切つて冥土へ行つて親分に言譯なさん。おゝさうだ。

〽ふるへ／＼一腰を取らんとなすを奪ひ取る捕手、直に谷間へ飛び入つたり。

ト民五郎刀を取らうとするを、捕手取つて谷へ飛込む。

〽南無三一腰奪ひ取られ、何で死なんと見廻す足許、火繩の煙に心付き以前の鐵砲取上げて是で死なんと打ちうなづき、

ト民五郎以前の鐵砲を見付け、是幸ひと取上げ、

丑藏めが持つて來た玉籠なせし此鐵砲、爰にあつたは是幸ひ、胸板打つて相果てん。

〽鐵砲杖に神力がよろぼひ／＼立上り、（ト民五郎鐵砲を杖に立上り、向うを見て思入あつて、）

篝の光に見え渡る、香津白瀧小鄉內馴染の土地も今日限り、是が此世の見納めなるか。

〽我と我手に鐵砲の筒先取つて胸に當て、ふるへ／＼る足踏みしめ／＼、

ト此內民五郎筒先を胸に當て、ふるへ／＼足にて引金を引かうとして引けぬ思入、此時下手より捕手二人窺ひ出る、

〽引がね引けば忽に筒聲高く打拔く胸板、

トふるへながら足にて引がねを引く、捕手「やア」と聲を上げ十手を振上げる、此のとたん本鐵砲の音して筒より仕掛にて煙出る、捕手はびつくりして俯伏になり、是より床二挺の合方になり、民五郎鐵砲

を突いた儘立身にて苦しむ。よき程に又捕手「ヤア」ト聲を掛ける。是にて民五郎高二重より中足へどうとなり、糊紅を吐く、捕手は後へ倒れる。本釣鐘を打込む、

〽朱になりてぞ、

ト三重本釣にて民五郎落入るたきざみ、よろしく

ト屋臺囃子のつなぎにて、引返す。

幕

（祭禮の場）＝＝本舞臺三間の間御祭禮といふまたぎの大提灯、梅の花打市松の雨障子、左右石の玉垣、後ろ杉林此前に傘を付けし地口行燈二本宛立て、正面丸木の鳥居、本社の遠見、左右漏斗に杉林地口行燈、總て鎭守祭禮の體。爰に前幕の丑藏鉢卷尻端折にて八角の棒を持ち、立身にて是を子分四人鉢卷繩襷にて手ごろの棒を持ち取卷きゐる、此見得屋臺囃子にて幕明く。

丑藏　こりやアうぬらは何とする。

重六　何とするとは知れたこと、同じ子分の其中でも心の知れねえ芝の彌太郎、

小助　をかしな奴と思つたが、案の定庵岡のうぬは子分の黑闇丑藏、

丹藏　こつちの仲間へ去年から、犬にはひつた畜生野郎、

大八　尻尾を挾んで高吠するやう、敲きしめにやあ、

四人　腹がいねえ。

丑藏　おゝ、いかにも汝等が云ふ通り親分からの內意を受け、故鄕を離れ此土地へ犬に入つた黑闇丑藏、汝等がやうな瘦犬が何百疋取卷くとも、尻尾を挾んで吠える樣なそんな弱い犬ぢやアねえ、喰ひ太つた一もくもの犬に緣ある此棒で、片ッぱしから、向う臑を敲き擲るぞ覺悟しろ。

四人　何をこしやくな。

ト大拍子にてちよつと立廻り、十二座の鳴物になり、丑藏四人を相手にをかしみの立廻り宜しくあつて、トド叶はず上手へ逃げてはひる。二人は跡を追掛けてはひる、ばた／＼にて花道より庵岡の子分四人○△□◎、綱襷鉢卷にて六尺棒を持出て來り、

○　これ／＼手前達は怪我はなかつたか、噂に聞いた白瀧與吉、腕ぶしの强い奴だ。

△　いかに力があるとつて、竹梯子を振廻し、側へ寄付くことが出來ねえ。

□　一息爰でついたらば、總掛りでやッつけよう。

◎　あれ／＼跡へ殘つた者も、追はれて爰へ逃げて來る。

○　えゝ意氣地のねえ奴等だなあ。

□　いくぢのねえのはこつちが先だ。

三人　違えねえ。

トばた〳〵屋臺囃子になり、花道より同じく子分四人六尺棒を持ち逃げて出て來る、後より與吉鉢卷肌脱繩襷尻はしをり一本差しにて、誂の竹楷子を持出で來り、花道にてちよつと立廻り舞臺へ來り、八人惣掛りにて立廻つて、與吉眞中に左右に分れ、きつと見得。

○　さあ、斯う取卷いた棒づくめ。

△　命はねえぞ。

八人　覺悟しろ。

與吉　しやらツくせえ覺悟呼はり、兄弟分の神力が明神山で死んだからは、遺恨重なる庵岡の枝葉のうぬらも片ツぱし、生しちやあ歸さねえぞ。

○　さういふわれも、

八人　生かしちやあおかねえ。

與吉　こしやくな事を。

ト屋臺囃子にて八人棒で打つて掛るを、階子にて受留め、きつと見得、誂の鳴物になり、與吉八人を

相手に花々しき棒ハ立廻り存分あつて、皆々下手へ逃入る。此時上手より以前の丑藏出て、

丑藏　白瀧覺悟。（ト切つて掛るを、）

ト抜合せて鳴物になり、兩人立廻り、兩人引張りの見得にて、此道具廻る。

與吉　何を。

（鎭守裏手の場）――本舞臺正面一面石の玉垣、後ろ杉林淺黄幕、上手に楓の立木、舞臺眞中に石の井筒、後に車の柱を立て、繩釣瓶、下手に御供水といふ高札を立て、總て裏手の體。どん〳〵にて道具留る。とばた〳〵になり、上手より子分六人白の鉢巻同じく襷尻端折りにて、竹槍を持ち逃げて出て來る、後より左門抜身を持ち數ケ所手を負ひ、糊紅になり出來り、どん〳〵にてちよつと立廻り、よき見得より竹笛入の誂への鳴物になり、六人を相手に井筒を遣ひ立廻り宜しくあつて、上下へ追込み、息の切れる思入にて井筒の水を汲み呑まうとする。爰へ一人掛る、是を投げのけ水を呑み、ホツと思入あつて、

左門　高の知れたる士民と思ひ、侮つたのが此身の不覺、多勢に無勢防ぎ兼ね、急所の深手に五體かなはず、やみ〳〵爰で果てるとも、息ある内に助太刀なし、恩を請けたる神力のたそくにならんと思へども、心の弓の張りきれて彌たけにはやれど詮方なし、あゝ何れに居るか今一度、此世の名殘に

逢ひたいものだ。(トひよろ〳〵と前へ出て、)神力やアい〳〵。(ト又一人掛るを立廻つて、)神力やアい。
ト呼ぶ、ばた〳〵になり、花道より文次出來り、直に舞臺へ來り、

文次 左門樣か。

左門 そちは文次か。

文次 深手をお負ひなされましたか。(ト血を見てふるへる思入。)

左門 いかにも數箇所の深手を負つたが、して神力は無事なるか。

文次 えゝ無事どころか親分は、明神山で舅の敵奇妙院を殺した所、多くの捕手に取卷れ、我と我手に鐵砲で胸板打つて。

左門 やあ。

文次 死なつしやりました。(ト左門がつくりとなり、)

左門 すりや神力は相果てしとか、さすれば我も。

捕手 うぬ。(ト掛るを立廻り井筒の上へ上り、捕手後から組付くを其儘後へ寄りかゝり、)

左門 最早是まで。(ト腹へ突込む。)

文次 やあ、こりや左門樣には。(ト左門引廻す、)

左門　文次、さらば。

ト刀を拔く。是にて切口ぱつくりとなり血汐流るゝ、文次見てふろへろ。矢張竹笛入の合方へ、どんどんを冠せ、此道具元へ戻る。

（祭禮の場）＝＝本舞臺元の道具、上手に竹五郎刀を持ち立身、下手に與吉詰寄り居る、上下に子分大勢六尺棒庵岡といふ長提灯を持ち控へ居る、此見得渡り拍子にて道具留る。

竹五　珍らしや、白瀧與吉。

與吉　庵岡の竹五郎。（トきつと見得、すり鉦入の鳴物になり、）

竹五　日外我家へ押掛けて、來た折利根の名物故ばたつく鯉の生造り、切味見せて手料理に血まぶれ仕事の洗ひ物、馳走なさんと思ふ中、我腕前に恐れたか箸さへ取らず歸つた白瀧、今日はすつぱり三まいに胴骨除けて料るから、いやでも膳へ付いてくりやれ。

與吉　そりやあ何より忝い、腕が自慢の料理好き研ぎすましたる庖刀の、其切味が見せたくば、いつでも馳走になりませう、お禮に生きてる江戸浦の鯛を一枚進ぜるが、其三つ道具の鋤鍬をとつた腕ぢやあ切りにくからう、是迄幾度大難を越した印の鳴門骨、切れるものならきつて見なせえ。

竹五　おゝ、切れるか切れぬか、あんばい見せう。

○ 其の料理なら親分が、

△ 手をおろす迄もない、

□ 子分が寄つて無造作に、

◎ づぶ〳〵ぎりに、

皆々 してくれう。

竹五 いや珍客へ馳走ゆゑ、自身におれが料るから、手出しをせずと控へてゐろ。

皆々 おゝ。（ト皆々控へる。）

竹五 さらば料理にかゝらうか。

與吉 どれ、手の内を拜見致さう。

ト大小入鳴物になり、兩人拔合せ立廻つて、上手に竹五郎刀を振上げ、下手に與吉刀を差付け、

皆々 どつこい。

ト引張りの見得にて、　目出度く打出し

勢力民五郎（終り）

御贔屓厚き御取立に無人ながら初席より
大入なせし御禮旁々四葉を始一座の連中
替り〳〵の讀切も御定連の御好みに従がひ

前座 落語 春風柳枝が和尚次郎

並にお花 作兵衛 坂東順禮記

後座 講談 桃川燕林が妲妃於百

附り重吉 彦五郎 關東義賊傳

結世界柳燕

善惡兩面兒手柏

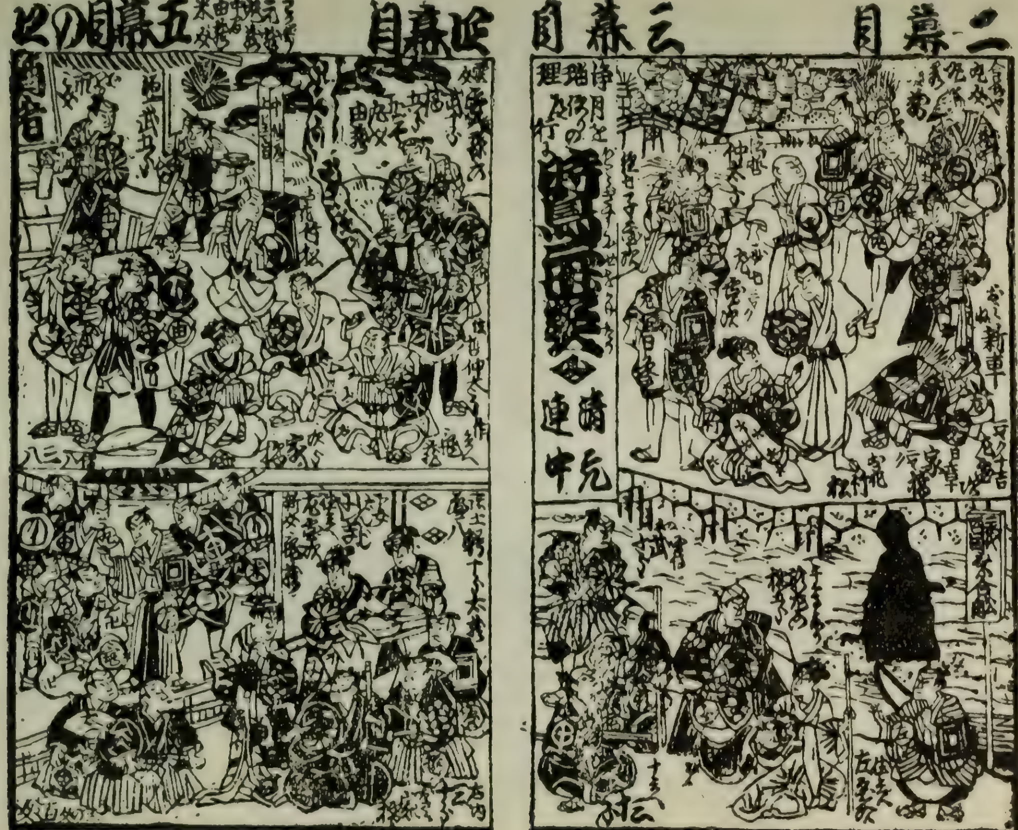
春風亭柳枝の落語和尚次郎と桃川燕林の講談妲妃のお百とを取扱つてある『善惡兩面兒手柏は』、慶應三年五月市村座に上演された。作者五十二歳の時である。「御伽草紙百物語」といふ名題で、妲妃のお百だけを脚色してあるものは、この兒手柏の中から其の件だけを抽出して、多少の修訂を施したものである。「續續歌舞伎年代記」には、「――最初お百を田之助に演ぜしむる筈なりしに、此時生憎田之助の持病足痛おこり、何分にも出勤出來難く、一ト狂言だけ休み度き由申出せる際圖らずも河原崎國太郎病死なしたるより、俄かにお百を家橘お花を竹松が勤める事に變更なし、此趣を述べたる座頭龜藏の口上番附出たり」とある。作中にも家橘の役が舞臺の上で斷りを述べてゐる所もある。然し各優努力の甲斐あつて好評を得た。

書卸しの時の役割は後の五世菊五郎の市村家橘（役僧日章後に和尚次郎、德兵衞妾お百、愛妾妲妃）、坂東龜藏（魚賣新助、花屋作兵衞、鐵砲お熊、冀國公）、關三十郎（美濃屋重兵衞實は新居の彥五郎、中川右膳）、市川左團次（桑名屋德兵衞、講中妙七、紂王、秋田小僧重吉）、市川新車（作兵衞娘おみね後に藝者峯吉、紂王の后）、市村竹松（作兵衞娘お花）、松本幸藏（中川丈左衞門、住僧空月、葛飾次郎左衞門）、中村仲太郎（駒木主膳、桑名屋手代善兵衞）等であつた。

口繪にしたのは、國周筆五世菊五郎似顏の妲妃のお百であり、挿繪にしたのは稿下當時の繪草紙の一部分である。

大正十四年十二月

校訂者


二幕目
三幕目
五幕目

善惡兩面兒手柏（妲妃のお百と和尙次郎――七幕）

第一幕

深川淨心寺の場

【役名――花屋作兵衛、役僧日章、秋田の重吉、役僧日丈、中川丈左衛門、若黨佐五平、葛飾五郎三郎、彥根の金五郎、日法上人、千ケ寺參り。雇婆お熊、佐兵衛娘おみね、同お花、友達娘おたき等。】

（深川淨心寺門前茶見世の場）＝本舞臺三間の間、下手へ寄せて三間常足の二重、正面寄り葭簀張り、軒口に諸講中の提灯、左右に竹に結びし納め手拭大分、花屋といふ掛行燈、下手に茶店道具一式上の方奥深に淨心寺の門前を見たる片遠見、ずつと上手に靑竹を結廻せし開帳の高札、日覆より松の釣枝、總て門前茶見世の體。爰に娘おたき、二重に腰をかけ居り、○△□◎の參詣人四人立ちかゝり居る。此模樣題目太鼓にてよろしく幕明く。

○　なんと皆の衆、大層な朝參りではないか。

△　いやもう、夜の明けぬ内から、どん〳〵と、此界隈はとんと祭りの樣でござる。

□　人は法華氣違ひと惡く言ひますが、此位又氣の揃つた、陽氣な宗旨はござらぬて。

◎さうして今度の開帳には、大層娘達が參詣に出るさうぢや。
○もし、そりやからでござる。此妙心寺の役僧に日章樣といふがあつて、お說法がえらい上に、役者の樣だといふので、張り半分で娘達が大そう參るといふことぢや。
△ところが此節、その日章樣が久しく病氣で引籠つてござるので、早くよくなるやうにと、娘達が毎朝お百度をあげますとさ。
□いやそんなに娘達に思はれるとは、よい月日の下に生れた人ぢやなう。
◎わたし共もかうやつて、睡い目を厭はずに、毎朝爰へ參詣に來るも、ちつと譯があることとさ。
○もし、その譯といふは、此門前に茶見世を出してゐる、花屋の娘を張りにござるのだらう。
三人　いや、こりやあ一番當てられました。
○ときに、今通つて來ましたが、あの娘が見えませんが、どうしましたらう。
△大方、矢張りお百度の仲間ではないか。
□なんにしろ、お開帳へ參詣をして、來ようぢやあござりませぬか。
三人　それがよい〳〵。
四人　さあ〳〵參りませう。

ト右鳴物にて仕出し四人は上手へはひる。花道より千ケ寺參り灘七、同仲藏、切つぎ尻端折り、脚絆草鞋掛け、小さな葛籠を脊負ひ、笠を手に持ち、千ケ寺參りのこしらへにて出來り、

灘七　ときに仲藏、向うに見えるが、あれが鎌倉の妙心寺だ。

仲藏　見りやあ、開帳だと見えて、大層賑かなことだ。

灘七　もしねえさん、私共は千ケ寺を參るものでござりまするが、どうぞお茶を一杯振舞つて下さい。

たき　あい／＼、さうして茶碗を持つてゐなさんすかえ。

兩人　はい、どうぞ是へ下さいまし。

ト腰に提げたる水呑みの茶碗を出す。是にておたき土瓶より茶をついでやる。

兩人　これは憚りでござります。

ト下の方へ立ちて茶を呑んでゐる。上手より役僧日丈、坊主鬘、衣なりにて出來り、

日丈　お瀧ばう、お花ばうはどうしたえ。

たき　はい、ねえさんは今地内へ參りましたわいなあ。

日丈　はてな、どこで間違つたか知らぬ。（ト引返して上手へ行かうとする。是を灘七、仲藏見て、）

灘七　や、お前は桑名屋にござつた、善兵衛殿ではないか。

仲藏　おゝ、善兵衞殿ぢや〳〵。（ト是にて日丈兩人を見てびつくりなし。）
日丈　おゝ、貴樣は水主の灘七に仲藏、いや思ひがけない所で逢つた。
灘七　思ひがけないとはこなたのこと、どうしてそんな姿にならしやつた。
日丈　まあ〳〵爰へ掛けるがいゝ。（ト是にて三人床几へ掛け、合方になり、）
仲藏　して、お前は何で出家に。
日丈　さあ聞いて下せえ、日外、川口の店を出て、在所へ引込みゐたところ、今より丁度三年あと、熱の病で大煩ひ、旣に命もとらるゝ所を、日蓮樣の御利益で、捨てた命を拾つたゆゑ、それから直に改宗して、坊主になつて此寺の、今では尊い名僧智識ぢや。
灘七　そりやあとんだことであつたが、よくまあそれでも思ひ切つて、こんな姿にならしやつたの。
日丈　おれがことより貴樣達は、何んで船乘りを止めにして、千ケ寺參りに出掛けたのぢや。
灘七　そんならまだこなさんは、店の話を知らつしやらぬか。
日丈　今も言ふ大煩ひで、かういふ姿になる程だから、三年あとから店のことは、どうなつたか少しも知らぬ。
灘七　いやもう、話せば長い騷動だが、まあかい摘んで話しませう。（ト合方になり、）それ、お前も馴染

で知つてゐなさる、ざこ場から來る魚賣新介が妹のお百を、小間使ひに置いた所、內の親方德兵衞殿の氣に入つたのが騷ぎの初まり、とう〳〵お百を妾にして、可愛相に本妻のお高殿が飯炊きの佐吉と密通したと言つて、ありもせぬ科を拵へ、懷妊をしてゐるものをば、土藏の中で縛り上げ、打つて〳〵打ち倒し、擧句の果が雪の降る晩、すッ裸で追出したを、お百の兄の新介が、お高どのゝ親の內に、以前勤めた緣により、自分の內へ引取つて、手厚く世話をした上に、首尾よく產をさせた所、打たれた痣があやかつてか、痣だらけの男の子、それを見ると血が上り、產所で直に往生したも、元はと言へばお百ゆゑ、違つた仲の兄妹とて、新介は見上げたもの、そのお高どのを立派に葬り、孤兒までの世話をするとは、何と奇特なことではないか。

日丈　初めて聞いた店の話、そりやまあとんだことであつた。

仲藏　まだ〳〵それからそのあとが、怪談ばなしといふところだ。お高どのゝ一念で、丁度月日も三年目、忌日の晩に折檻した、土藏の中から火の玉が出たと思ふと忽ち廣がり、家財貨財は殘らず灰、江戶へ受けて來た二艘の船が、いちどきに遠州灘で難船して、助かつたのは此の二人、十三人水死したから、菩提のために生業やめ、千ケ寺參りに出掛けたのだ。

日丈　はゝあ、それぢやあ、あんな大家であつたが、桑名屋の內は潰れたとか。

仲藏　潰れたどころか忽ちに大阪中にも居られぬゆゑ、二度目の女房のお百を連れ、德兵衞殿には行方知れず。

日丈　いや水の流れと人の行く末、どうなるか知れぬものだ。是につけて思ひ出すは、わしが勤めてゐた時分、その親方德兵衞殿が、人の乘らぬ大晦日に、雷電丸を乘り出して、播磨灘で海坊主を切らしやつたことがあつたが、よく人の話にも、海坊主を切る時は、七代祟るといふ噂、かういふ事になり行くも、きつと祟りに違ひない、はて爭はれぬものぢやな。

灘七　ところでこなたに賴みがあるが、どうぞ聞いて貰ひたい。

日丈　なに、わしに賴みとは、どんな事ぢや。

灘七　さあ、見さつしやる通りの千ケ寺參り、僅かな路用も遣ひ果し、どう仕ようかと思つたところ、爰でこなたに逢ふといふは、こりやあお祖師樣のお引合せ、以前の誼みに五兩ばかり、路用を貸して貰ひたい。

仲藏　今わしもその事を、言ひ出さうと思つてゐた。もし善兵衞どの、人を救ふは出家の役、どうぞ賴みを聞いて下さい。

日丈　そりやあ以前の誼みゆゑ、ありさへすれば貸してもやらうが、何を言つても出家の身で、五兩の

事は措いて、一兩も持つてはゐぬ。氣の毒ながらお斷りぢや。

灘七　そんなら五兩はさておいて、一兩も貸せないとか。

日丈　幾ら貸したく思つても、ない袖は振れぬわえ。（ト是れにて兩人むつとして、）

仲藏　貸せなけりやあ借りめえが、以前の事を思つたら、五兩七兩の端た金、口塞げに貸さゞあなるめえ。

日丈　そりや何んで。

灘七　今でこそ、かうやつて衣や袈裟を身に纏ひ、有難さうな顔をしてゐても、元を糺しやあ桑名屋の爲替の金の五十兩、引浚つて逃げた、こなたは盜人。

日丈　や。

灘七　さ、その一割の利だと思やあ、五兩位は何でもなからう。

ト是にて日丈惡い奴に逢つたといふ思入にて、

日丈　成程以前の誼みを思へば、さう不實にも出來ねえから、五兩の金は貸してやらうが、今言ふ通り爰になければ、後迄地内で待つてゐてくれ。

灘七　そんなら地内に待つてゐようが、五兩の金はきつといゝかえ。

日丈　はて、奉納金を盗んでも、用達てゝやらうわえ。
灘七　それぢやあいまだにかうしてゐても、その料簡は止まねえのか。
日丈　はて、是をやめては女郎買ひや、好きな酒が呑めぬわえ。
兩人　それぢやあきつと後迄に。
日丈　拵へてやるから、二人は地内を。
兩人　どれ、一こ廻りひやかして來ようか。（ト題目太鼓にて、兩人上手へはひる。）
日丈　いや、飛んだ奴に出ツ會した、然しおれも此節では、小遣ひ錢がなくなつたから、何ぞ事はあるめえかと、一度思つてゐたところ、今日はいよ〱持ち前の、又性惡をせねばならぬ。
ト腕組をなし考へる。爰へ上手よりお花、島田髷、前垂、下駄がけにて出來り、
お花　おたきさん、大きに有難う。
たき　おや、ねえさん、大そうお早うござんしたな。
ト是にて日丈拔足にて、お花の後より抱き付く。
お花　あゝもし、どなたでござんす。
日丈　誰でもない、おれぢや、日丈ぢや。

お花　え丶もう、悪いことばつかり、どうぞ放して下さんせいな。

日丈　お丶放さうとも〳〵。おぬしと話がしたいのだ。

お花　お丶お前の話なら、聞きたくもござんせぬわいな。

日丈　さうすげなう言はぬものぢや。まあ爰へ掛けたがよい。(ト無理に床几へかけさせ、)何時もながら言ふことぢやが、此の日丈が日頃から、とやかう言ふのも聞いてはくれず、そなたはあの日章に、疾うから惚れてゐるけれど、そりやつれないぞや〳〵。あの日章ぢやとて、わしぢやとて、同じ衣のあさ坊主、丸い天窓の出家ぢやが、なぜそのやうに嫌ふのぢや。今日は是非共かうやつて、心を籠めて書いて來た文、請けて貰はにやならぬぞや。

　　ト懐より文を出し、お花の懐へ入れるを突き戻し、

お花　あ丶もし日丈様、御出家の身でありながら、その様な事なされますと、あなたのお身に拘はりますぞえ。

日丈　さあ、その身の上に拘はる事は、百千萬億合點ぢや。ほんらい十六七八のそなたの心が得佛なら、罪障消滅する日丈、是非〳〵今日は此文を、讀んで貰はにやならぬわいなう。

お花　たとひ何んとおつしやりましても、此様な事が知れますると、貫主様へ濟まぬ。どうぞ堪忍して

下さんせいな。

日丈　なに、貫主へ知れては濟まぬと言やるか。そんならわしが言うて聞かさうが、なぜその樣に思ふなら、かういふ事をしてゐるのぢや。(ト懷より文を出して、)日章さま參る、花より。(ト是にてお花びつくりして、)

お花　あゝもし、それは。(ト取らうとするを、)

日丈　どつこい、滅多に是は遣られぬ。かういふ事をしてゐながら、貫主へ濟まぬもないものぢや。此日丈が願ひをば、叶へてくれぬその時は、此文を貫主へ。

お花　あゝもし、そのやうな事を。

日丈　そんなら願ひを叶へてくれるか。

お花　さあ、それは。

日丈　是を貫主へ持ち出さうか。

お花　さあ、

日丈　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

日文　こりやもう、どうもたまらぬわえ。

ト　お花へ纒はるを振拂つて上手へはひる。日丈跡を追つかけはひる。此時床几の上へ文を忘れて行く。おたき出て文をとり、

たき　此文は姉さんへ、日丈づらが寄越した文、こりやよいものを拾うたわいな。（ト帶の間へ挾み、）おゝ今の騷ぎで、皆水をこぼされてしまつた。どれ、一杯貰うて來ようわいな。

ト　手桶を提げて上手へはひる。花道より講中七右衞門・由藏、竹三、何れも羽織着流し、首へ珠數を掛け、講中の帳面を持ち出て來り、直に舞臺へ來る。上手より以前のお花出來り、七右衞門お花を見て

七右　おゝお花ばう、いつも繁昌でよいな。

お花　これは七右衞門樣、けふは大そうお早うござりましたな。

ト　是にて三人へ茶を汲んで出す。

七右　いや、今日は講中の寄り金を持つて、奉納に來ましたゆゑ、いつもより早く出て來た。

由藏　さうして今内へ寄つたが、父さんも留守で錠がおりてゐたが、何處ぞへ行つたのか。

お花　はい、今日は父さんは見世の花がなくなつたゆゑ、買出しに參りましたわいな。

竹三　はゝあ、さうかえ。此子の父さんとは久しい馴染であつた。さうして此の妙心寺の門前にゐなが

ら、念佛宗でゐるとは、合點が行かねえ。

お花　はい、それはかうでござんす。死んだかゝさんの跡をお念佛で弔ふものがないゆゑ、それでゞござりますわいなあ。

七右　さうかえ、それで樣子が分つたが、さうしてまだお前の上に、仲町に藝者をしてゐた姉えがあつたが、どうしたえ。

お花　はい、その姉さんは三年跡に、馴染のお客に引かして貰ひ、上州の方へ行かしやんしたが、今では樂な身の上ぢやと、をり〳〵便りがござりますわいな。

七右　さうかえ、それはまあ仕合せな事だ。

由藏　ほんに作兵衛どのも、いゝ子持だなう。（ト七右衛門財布より五十兩包みを出す。）

七右　それはさうと後方迄、此の金をどうぞ預かつておいて貰ひたい。

お花　そりやもうお安いことではあれど、心遣ひでござりますな。

七右　いや〳〵ちよつと、蛤町の講頭の所迄行つて來る内だ。持つて歩くのも物騷ゆゑ、ちよつとの間預つておいて下され。それ、五十兩あるよ。

お花　それでもどうやら、心遣ひでござんすなあ。

七右　はて、ちよつと行つて來る内だ。

三人　そんならどうぞ、賴みましたぞや。

ト三人お花に金を渡し、右鳴物にて足早に下手へはひる。お花金包みを持ち、迷惑なるこなし、

お花　ほんにもう、僅でもある事か、五十兩といふ金を、つひぞ持つたこともないものを、かうして預つてゐるといふは、あゝ心遣ひな事ぢやな。

ト件の金を茶簞笥の抽斗しへ入れる。此以前より上手へ幕明きの日丈出て、是を窺ひ居てうなづいて上手へはひる。しつとりした端唄の合方になり、花道より役僧日章、月代の延びたる坊主鬘、着流し、前帶、鼠鼻緒の駒下駄、手拭を持ち出て來り、花道にて、

日章　風は百病の長とやらで、ちよつと邪氣をば引込んだが、廿日ばかり煩らうたが、久し振りで湯へはひり、どうか體が輕くなつたやうぢや。

ト合方にて舞臺へ來る。お花日章を見て飛んで出て、

お花　お前は日章樣、けふは大分御氣分がよいやうに聞きましたが、ごこぞへおいでなさんしたか。

日章　おゝお花ごの、わしが病氣のその內も、度々尋ねて下されたが、今日は矢張り氣分もよく、久しう風呂にはひらぬゆゑ、裏門前の風呂へはひり、こちらへの方へ廻つて來ました。

お花　ほんにかるはずみではござんせぬか、少しよいと其様に、方々お歩きなさんすが、大方何處ぞへ寄道でもなさんしたのであらうわいなあ。（ト氣の揉めるこなし。）
日章　さあその寄道もしてゐたし、顏も見ようと思ふゆゑ、實は方々廻つて來ました。
お花　もし、さうしてそれは何處でござんす。
日章　さあ、それはの。
お花　えゝも、それはでは分らぬわいなあ、あゝ分つた。大方何處ぞか、娘さんのある所でござんせう。
日章　いやもう、娘も娘も、美しいよい娘のある所ぢや。
お花　さうしてそれは、どこでござんす。
日章　はて、大抵おぬしが推量でも、知れさうなものではないか。
お花　えゝも氣の揉める事ぢやわいな。おゝさうぢや、そんなら當てゝ見ようわいな。
日章　おゝ、當て見や〱。
お花　大方、あの米屋のおよねさんでござんせう。
日章　いゝや、さうではない。

お花 それではてつきり、おゝさうぢや、薪屋のお松さんの内でござんせう。

日章 いや〳〵、さうではないわいなう。（ト此内いろ〳〵捨ゼリフあつて、）

お花 さうして、何處でござんすぞいなあ。

日章 どこでもない。つい、そこの。

お花 なに、ついそことは、どこでござんす。

日章 矢張りおぬしの所へ來たのぢや。

お花 えゝもう、そんな人ぢらしな、大抵氣の揉めた事ぢやござんせぬわいな。

ト思はず土瓶をひつくり返す。是れにて灰神樂パツと立つ。

日章 えゝ、何をするのぢや。

お花 あれ、とう〳〵みんなこぼしてしまうたわいなあ。

ト是れにて又兩人床几へかける。なまめいたる合方になり。

日章 いやなに、お花ばう、不思議な緣で此樣に、出家の身にてあるまじき、おぬしとかういふ仲とはなつたが、よく〳〵思ひ廻してみれば、これが一生添ひとげて、夫婦にならるゝ事ではなし、ひよつと露顯をした時は、此身の恥をさらしもの、さうなる時は言ひ交せし、そなたばかりか親御

に迄、難儀をかけねばならぬゆゑ、たゞ何事も是迄の、緣と思うてさつぱりと、いつそ別れてしまつた方が、よからうかと思ふわいの。

お花　そりやもう足らはぬわたしゆゑ、愛想が盡きてか知らねども、忘れもせぬ去年の秋、お施餓鬼の時父さんが、お勝手許のお手傳ひ、わたしはその日のお給仕に、幾間も隔つたお座敷ゆゑ、あなたのお部屋さ氣も附かず、明けて嬉しいお詞うけ、かういふ譯になつたのは、女子冥加に叶つた事と思ひに思うてゐるものを、そのやうな事おつしやるは、お胴慾でござんすわいなあ。

日章　それ程思うてくれるのは、嬉しいけれど今言ふ譯、そなたの爲ゆゑ思ひ切り、親切づくで末長く力になつてやらうわいの。

お花　いえ〳〵そりや嘘でござんす。その樣なことおつしやるは、わたしが厭になつたのぢやわいなあ。

日章　いや〳〵、決してさういふ譯ではない。

お花　なに、ないことがござんせう。あなたが風を引かしやんして、御說法をばなされぬゆゑ、あすこや爰の娘さんが、早うお風の直るやうにと、毎朝大勢連れ立つて、お百度上げに通らしやんすを、爰で見てゐるわたしの氣では、嬉しいやうで此樣に、氣の揉める事はござんせぬ。大方外に情人が出來、わたしが厭にならしやんしたのぢや。えゝも、腹が立つて〳〵ならぬわいな。

ト日章の膝へ縋つて泣く。

日章　あゝこれ〳〵、何もその樣に腹を立てる事はない。今のやうに言うたのも、そなたの爲を思ふからぢや。氣に障つたら堪忍して、心を直してくれたがよいぞ。

お花　そんなら切れるの何んのと言ふこと、嘘にも言うて下さんすな。もしも外に情人が出來、今度切れると言はしやんすと、わたしや生きてはゐませぬわいなあ。

日章　そなたを退けて餘所外へ、何んで心を掛けようぞ。そんなわしぢやと思うてか。此間から風を引き、久しう店へも來ぬゆゑに、わしよりそなたが外ほかへ、よい男でも出來はせぬかと、實は心を引いて見たのぢや。

お花　もし、そりやあなた、ほんの事でござりますか。

日章　ほんの嘘のと出家の身で、五戒を破りし此の日章、僞り言うてよいものかいの。

お花　それが誠でござんすなら、わたしや嬉しうござんすわいなあ。

日章　そなたの心も直つたからは、どれ、わしは是れにて歸りませう。

お花　あもし日章樣、お久しぶりでござんすなあ。

日章　久し振りではあるけれど、人でも來ては惡いわいなう。

お花　いえ〳〵今は丁度人絶え、よい首尾でござんすわいな。

日章　そんなら人の來ぬ内に。（ト引寄せる。）

お花　とは言へあなたが、お風の擧句で。

日章　はて、少しぐらゐはよからうわいの。

ト お花を引寄せる。お花日章に寄添ふ。此内後ろへ以前の日丈出て窺ひゐて、いろ〳〵氣を揉む事なぞあつて、此間に茶簞笥の抽斗しを明け、以前の五十兩包みを出し、舌を出し、思入あつて上手へはひる。又題目太鼓になり、下手より以前の七右衛門、由藏、竹三出來り、

三人　やれ〳〵、大層手間どつたわえ。

ト 此聲に驚き、日章お花ほぐれて、日章は下手の出茶屋の蔭へはひり、吹竹をとつて釜の下を吹く、お花はあり合ふ茶碗をとり、茶を呑んでゐるこなし、

七右　お花ばう、今歸りました。

お花　もし、大そうお早うございましたな。

七右　いや〳〵大きに手間どりました。（ト日章を見て、）これは日章樣、何でその樣な所においでなされます。まあ〳〵こちらへおいでなされませ。

ト是にて日章間が悪さうに前へ出て、床几へ掛ける。

山藏　いや、あなたは此中より、御病氣と承りましたが、もうさつぱりとよろしうございますかな。

日章　やうやく全快いたしまして、只今風呂へ參つたる、その歸りがけでございます。

山藏　それはよろしうございました。

竹三　いやもう、お前樣の說法を、諸講中の者が待兼ねてをりまする。

日章　もう二三日も經ちますと、出勤をいたす積りでございます。

竹三　いや、それは嘸ぞ講中が悦ぶでございませう。

七右　實にお前樣の御出勤がないと、參詣が落ちるといふ事でございます。

日章　いや左樣にお褒め下さると、却つて痛み入りまする。いやさつぱりと忘れてゐたが、施餓鬼の卒塔婆を書くのであつた。（ト立上つて、）左樣なれば、講中の衆。

三人　日章樣。

日章　これにごゆつくりとなされませ。

ト合方にて、日章お花よろしく思入あつて、上手へはひる。

七右　いや、あの日章樣も御出家には、餘り男が好過ぎるから、御辛抱が出來ればよいが。

由藏　ときに七右衛門殿、さつきの寄金を早く奉納してしまはうではないか。
七右　それがようござります。お花ばう、さつき預けた金を出してくんなさい。
お花　はい〳〵、畏まりました。
　ト こちらへ來り、茶簞笥の抽斗しを明けびつくりなし、
　やあ、今のお金が。
七右　なに、あの金がごうぞしたのか。
お花　はい、此の抽斗しへ入れておいたに、どうした事やら見えませぬわいなあ。
七右　なに、金が見えねえ。そりやまあ、大事だが、何處ぞ外へしまつたのではないか。
お花　いえ〳〵、外ではござりませぬわいなあ。
三人　どこぞそこらを搜して見るがいゝ。
　ト 是より皆々捨ゼリフにて、そこらを搜すことあつて、
七右　いよ〳〵こりやあ見えぬが、さうして誰ぞ今の間に、爰へ休んだものはないか。
お花　いえ〳〵、誰も參りませぬ。日章樣がござんしたばかりでござりますわいな。
由藏　外に誰も來ぬ日には、無くならう譯がないが。

七右　はゝあそれおや今日章樣が、そこにまご〳〵してゐたが、もしや、ふつとした出來心で盜んで行つたことかも知れぬ。

お花　いえ〳〵、あなたに限つて、その樣なことはないわいな。

七右　いや、これぱかりは、名僧でも慥なことは言はれぬて。

由藏　そんなら是から開帳場へ行つて、一と詮議して見ませう。

竹三　これお花ばう、おぬしも矢張りかゝり合ひだ。わしと一緒に行つて下せえ。

お花　それでも見世の、留守番が。

ト爰へ上手より、以前のおたき出來り。

七右　おゝ、いゝ所へおたきばう。

お花　もしおたきさん、跡を賴んだぞえ。

たき　あい〳〵、合點ぢやわいなあ。

三人　さあ〳〵、一緒に來やれ。

ト講中三人、お花を連れて上手へはひる。跡はやり唄になり、花道より花屋作兵衞、白髮鬘、木綿やつしなりにて、花を入れたる瓶を持ち出て來る。跡よりお峯、島田鬘、草履がけにて、手拭を冠り、

若い衆の供、草履がけにて柳行李の荷を擔ぎ、總て舟から上つたと言ふ旅なりのこしへらにて出て
花道にて、

お峯　もし、そこへ行かしやんすは、父さんぢやござんせぬか。

ト是にて作兵衛振返り、

作兵　おゝ、誰かと思へば娘ぢやないか。やれ〳〵、まあよく出て來たな。

お峯　今内へ寄つたれば、見世にぢやといふことゆゑ、それでこつちへ來ましたわいな。

作兵　あゝさうか、まあ〳〵何にせい。見世は向うぢや。あすこへ行つて話さうわえ。

トやはり右の唄にて、舞臺へ來る、おたき出て、

たき　をぢさん、お歸りなさんしたな。

作兵　おゝ、これはおたきばう、大きに御苦勞ぢやなう。

お峯　お父さん、さうして此子わえ。

作兵　これは近所の娘ツ子ぢやが、お開帳中かりておくのぢや。

お峯　さうでござんすか。ほんによい子でござんすな。

作兵　さうして、茶を一杯貰ひたい。

たきあい〳〵。（ト茶を汲んで出すことあつて、）

作兵　さて娘、おぬしが所から久しう便りがないゆゑに、變つた事でもありはせぬかと、お花と二人で案じてゐたに、よくまあ出て來てくれたな。

お峯　さあ、あんまりよくも出て來ませぬが、聞けばあの子も達者なさうなが、まあ〳〵無事で、目出たいわいな。

作兵　いやもう、お花めは仕合せさ、風一つ引かぬわい。さうしてそなたはよく出て來ぬとは、何ぞ氣にかゝる事でもないか。

お峯　さあ、それにはいろ〳〵譯のある、まあ一と通り聞いて下さんせ。（ト合方になり、）今更言はずともの事ながら、かゝさんが長の病氣、手に手を盡した甲斐も無う、お果てなされたその跡の、取り片附けに差支へ、私は辰巳の中裏へ、藝者に身を賣り一二年、勤めてゐる內馴染のお客、粕壁邊の商人衆、近江屋彥右衞門といふお人に年拔きして貰ひ、直に一緒に粕壁へ召連れて行かれて世話になり、何不自由なくしてゐる內、盈つれば虧くる習ひとやら、今度餘儀ない事が出來、その近江屋の御本家が奧州の方にあるとやら、それへ旦那が一二年、行つてゐねばならぬにつけ、そちを一緒に連れて行つては、本家の手前何やかや、あすこや爰へ面倒ゆゑ、內へ戾つて父さん

の世話になつて片附くとも、おれが江戸へ出て行く迄、厄介になつて待つてゐるとも、そなたの好きにしてくれと、據ない頼みゆゑ、彦右衛門様と別れまして、内へ戻つて來ましたわいな。

作兵 そんならそちは彦右衛門様と、別れて江戸へ戻つて來たとか。定めて餘儀ない譯であらうが、そりやまあ、本意ないことであつたなう。

ト お峯懐より、百兩包みを出して、

お峯 もし父さん、さうして此お金を、下さんしたわいな。（ト件の金を見せる。作兵衛取上げ見て、）

作兵 こりやまあ、餘程の金ぢやなう。

お峯 あい、丁度百兩ござんすわいな。

作兵 そんなら、大まいの此金をば。

お峯 さあ是から江戸へ戻つても、何かと親の厄介ゆゑ、是を土産にしろというて、此金をば下さんしたわいな。

作兵 あゝ、御大家とは言ひながら、大まいのお金をば、かうしてそなたに下さるとは、お氣前のよい旦那ぢやなう。

お峯 ほんにわたしがかういふと、をかしい事を言ふやうぢやが、あゝいふ氣前のよい人は、江戸にも

たんとござんせぬわいな。

作兵　何んにせえ。おれは是からお開帳場へ、此花をば持つて行かねばならぬゆゑ、おぬしは內で待つてゐてくれ。

お峯　お開帳の事なれば、わたしもお參り申さうわいな。

作兵　それでもそなたは旅疲れ、嘸ぞ草臥れたであらうのに。

お峯　いえ／＼、そこ迄船で來ましたゆゑ、少しも足は草臥れぬわいなう。

作兵　ほんにさうであつたか、そんなら一緒にお參り申しやれ。

ト　お峯供に向ひ、

お峯　もしお前、大きに御苦勞でござんした。どうぞその荷物をば、わたしの內へ屆けて下さんせ。

若衆　へい／＼そんなら、お先へ參りますが、お內は今錠がおりてをりましたが。

作兵　おゝさうであつた。これおたきばう、一緒に行つて上げてくりやれ。

ト　腰より鍵を出して、おたきに渡す。

たき　あい／＼、そんなら一緒にござんせいな。

若衆　是はお前さん、御苦勞でござります。

作兵　さうしてお花は、何處へ行きましたの。

たき　今講中の衆から預かつたお金が、なくなつたとやら言うて、お開帳場へ行かしやんしたわいなあ。

作兵　はてな、それは飛んだ事であつた。

たき　さあ、行かうわいな。

ト　おたき先きに、若い衆の荷物を擔ぎ、下手へはひる。此時おたき以前の日丈より拾ひし文を落して行く。お峯件の文を取上げ、

お峯　こりや何ぢややら、いやらしい文、そんならあの子が此文を。ほんにまだ一向に年は行かぬ樣子ぢやが、もう此樣な事をするわいな。ほんに小袋と子娘とて、油斷のならぬ事ぢやなあ。

ト　文の上封じを見て、

何々『戀しきお花樣參る、焦るゝ日丈より』むゝ、そんなら妹に日丈が。

作兵　や。

お峯　どれ、日朝樣へ久し振りで、お參りをして來ませうか。

ト　思入あつて、件の文を帶の間へ挾む。作兵衛は花を入れし瓶を抱へる。此模樣題目太鼓にて道具廻る。

（妙心寺開帳場座敷の場）＝＝本舞臺三間の間、上下折廻し障子屋體、正面中形の襖、欄間へ一面に井桁に橘の紋をつけし白地の幕を張り、舞臺一面に毛氈を敷詰め、總て開帳場座敷の模樣、上手に日法上人坊主鬘、緋の衣にて住ひ、下手に以前の日章、お花住ひ、七右衞門、由藏、竹三の講中立ちかゝりゐる。所化二人日法上人に附添ひゐる。此の見得、音樂にて道具留る。

日章　これは講中の衆、此日章にあわたゞしく用事と申すは、何事でござるな。

七右　その用と申すは外でもござりませぬ。先程私共三人で、講中の寄金を奉納いたしに參つた所、蛤町に用事があるゆゑ、是れなるお花の見世へよつて、五十兩といふ金子を預けて行つて歸つて來る間に、その金子が紛失しました。

由藏　段々詮索いたした所が、私共が預けて行つた跡へ來たのはお前樣ひとり、他に誰も來ぬとの事。

竹三　それゆゑあなたにお目に懸り、金の行方を聞きに來ました。どうぞ敎へて下さりませ。

日章　あゝこれ〳〵、こなた衆は暴な事を言はつしやるが、夢にも存ぜぬその金子、敎へてくれと言はつしやるのは此の日章が盜みしとでも、こなた衆は思つしやるのか。

七右　さあ思ふまいものでもござりませぬ。お前樣より外誰一人、來たものがないと言へば、心當りはお前樣だ。

竹三　誠にさき程私共が、お花の見世へ歸つた時に、金をしまつておいたといふ、茶簞笥の脇にお前樣が、うろ〳〵してござつたが、それが何より慥かな證據。

日章　それでは是なるお花どのが、此の日章が盜みをせしと。

お花　あゝもし、何でわたしが盜みしなどゝ、その樣な事を言ひませうぞいな。

七右　さあたとひ、お花が言はないでも、何ゆゑ出家の身をもつて、茶見世へ立寄り、茶簞笥の傍にうろうろしてござつたのだ。

日章　さあ、それは。

七右　言譯無ければ日章殿、何でもこなたが金の盜人。

日章　何んで愚僧が左樣な事を。

お花　あゝもし〳〵、それは人違ひでござりませう。日章樣が何んでまあ、盜みなどをなさいませう。わたしが證人でござりますわいなあ。

由藏　むゝ、それぢやあ外に盜んだものが、あるとでも言はつしやるのか。

お花　いえ〳〵、それは知りませぬわいな。

由藏　知らずば何んで日章樣が、盜まぬ事を知つてゐるのだ。

お花　さあ、それはな。
三人　えゝ、日章様、きり〳〵金を出して下せえ。
　　ト此以前より後ろへ以前の日丈、手箱を持ち出掛りゐて、
日丈　いや、その金は日章が、盗んだに違ひない。（ト前へ出る。日章日丈を見て）
日章　誰かと思へば日丈どの、何んで愚僧が盗みしとは。
お花　何ぞ慥かな證據があつてか。
日丈　おゝ證據といふは日章が、お花こ疾うからちゝくり合ひ、夫婦約來してゐるが、是が何より慥な證據ぢや、察する所馴れ合ひで、その奉納の金を盗み、それを路用に駈落ちでも、大方する氣であらうわえ。さあ日章、きり〳〵白狀してしまやれ。
日章　これ〳〵日丈どの、身に覺えなき左樣な事、師の御坊の手前と言ひ、滅多な事は言ふまいぞ。
日丈　所が幾ら隱しても、隱されぬのは女犯の罪、此儘に捨置く時は、高祖の御罰を蒙るゆゑ、こりや穩便には濟まされませぬ。
日法　こりや日丈、何を申す、その方一人遮つて、此日章が五つの戒め、破りしと申せども、こりやその方が思ひ違ひ、いやさ、心得違ひであらうがな。（ト思入にて言ふ。）

日丈　いえ、思ひ違ひではござりませぬ。此の日章とお花とが、ちゝくり合つてゐる事は、私ばかりちやござりませぬ。世間でみんな知つてをります。いくらお庇ひなされましても、手證は上つてをりまする。

日章　あゝこれ〳〵日丈どの、そりや何を言はつしやる。此の日章身にとりて、左樣な覺えはござらぬぞ。强ひて女犯と言はつしやるには、何ぞ慥な證據がござるか。

日丈　はて證據のない事何んで言はうぞ。それ、證據は爰へ持つて來た。（ト手箱を出す。日章見咎め、）

日章　や、その手箱は、愚僧が手箱。

お花　もしや文でも。（ト言ひかけるを、）

日章　あゝこれ、たとひ手箱を改めたとて、此の身に覺えのなき事なれば、何で證據があらうぞいの。

日丈　いや〳〵中にない事はない。紛失した奉納金も、隱してあるに違ひない。

ト箱を明け、中をあらため、幕明きの文を出し、

はて、何處へこかしたか金は見えぬが、その替りこんな怪しい文があつた。何ぢや『日章樣參るお花より。』（ト是にて日章びつくりなし、）

日章　どうして、それを。（ト取らうとするを、）

日丈　ごつこい、是はやらぬわえ。さあ女犯でないと言張つても、かういふ文が出たからは、慥に金の盗人も、大抵知れた此場の詮鑿、お師匠樣御覧なさい。「日章樣參る、花より」講中の衆、見さつしやれ。かういふ慥な證據が出れば、何と動きはとれまいがな。

ト是にてお花、日法上人是非なき思入、日章お花顏見合せ思入に　七右衞門傍へ寄つて、

七右　これ日章殿、知らぬと言うた色戀も、あゝいふ證據が出る上は、奉納金の五十兩も、こなたの仕業に違ひないわえ。

日章　いえ〳〵、金子を盗みし覺えは。

日丈　ないといふには、是ぞといふ、しつかりとした證據がござるか。

日章　さあ、それは。

由藏　證據がなければ、こなたが盗人。

日章　さあ、それは。

三人　さあ。

日章　さあ〳〵〳〵。

三人　こりやもう、いつぞ。（ト立上る。此時下手障子の内にて、）

作兵　あゝもし〳〵、暫くお待ち下さりませ。(ト障子を明け、以前の作兵衛、お峯出る。皆々見て、)
日章　や、こなたは親御の作兵衛殿。
お花　お前は姉さん、どうして爰へは。
お峯　わたしの來たのは、跡でゆるりと、
日法　おゝ誰かと思へば、花賣り作兵衛。
日丈　一緒に來たのは其以前、藝者をしてゐた姉娘。
三人　さうして待てと、留めたのは。
作兵　あなた方を暫くと、お止め申したは外でもござりませぬ。只今見えぬとおつしやいました、日章様へお疑ひの、掛りましたるその金の、申譯をばいたしませうと。
日丈　何と。(ト合方になり、お峯前へ出て、)
お峯　これは〳〵貫主様を初めとして、どなた様もお久しぶりでお目にかゝりまする。御存じの通り私も粕壁の方へ緣あつて、久しく參つておりましたが、退れぬ事で今日内へ、五年ぶりで歸つて來ましたが、鍵がおりて留守ゆゑに、隣で聞けばお開帳ゆゑ、見世を出してゐると聞き、直に見世へ參つてみれば誰もをらず、明け放して油斷な事ではあると、何心なく茶簞笥の抽斗しを明けま

すと、内にあつた大まいのお金。

お花　いゑ／＼わたしやお金を預かり、それから見世を明けた覺えは。

お峯　はてまあ、默つてゐやいなう。それからお聞き下さりませ。何か様子は知らねども、此様な者を預かりながら、如何に年が行かぬとて、見世を明けておく内に、もしもの事でもある時はと、姉のわたしが預りましたわいな。（ト作兵衞金包を出し、）

作兵　卽ちお預けなされました、奉納金の五十兩、いざ、お請取り下さりませ。（ト二人の前へ出す。）

七右　おや、さうでござりましたか。いやもう、さういふ事とは知らぬゆゑ。

山藏　何科もない日章様を、一途にそれと思ひまして、

竹三　お疑ぐり申しましたが、かうして金が出て見ると、お氣の毒でござりまする。

ト此内七右衞門金を改め見て、

七右　や、こりや五十兩は五十兩だが、さつき預けた五十兩は、然かも二分金、是は小判だ。

作兵　はて、何んであらうと金は金、二分金ぢやと思うても、思ひ違ひはいくらもある事、日章様の御難儀なれば、外ならぬ信者の衆、默つてそれを、はて、どうぞ納めて下さりませ。

ト講中三人によろしく呑み込ませる。

七右　成程さつき預かつたは、二分金だと思ひましたが、よく〳〵考へて見ましたら、二分金ではない小判であつた。
由藏　左樣々々、道理で輕かつたと思ひましたが、矢張り小判に違ひなかつた。
竹三　錢と違つて金ゆゑに、ついぞんざいに間違へました。
七右　ときに、金が出る上は、又何事もない内に、早く納めてしまひませう。
三人　成程、それがようござる。
七右　これはどなたも、失禮を申しました。
ト講中三人下手の障子屋體へはひる。此内さては親父がといふ思入あつて、
日丈　何だか怪しい金の出所、然し五十兩は五十兩ゆゑ、それはそれで遁れても、女犯の科は遁れられまい。
日法　こりや日章、覺えがあるかどうぢや。
日章　さあ私は。
作兵　こりや娘、いよ〳〵そちがその文を上げたか。
お花　はい、いゝえ。（トもぢ〳〵する。）

お峯　いや／＼是はそなたから、よもや上げたのではあるまい。こりや人違ひであらうがな。

お花　はい。

日丈　いゝや、さうは抜けさせぬ。たとひ何と言はうとも、慥な證據はこれ、こゝに。（ト懐中より百度緡の附きし額を出し）此間中日章が、病氣でゐた折、願籠めに上げたる額の百度緡『大願成就願主はな』と書き記した此の額と、これ此文と則ち同筆、何と遁れはありますまいがな。

日法　すりや、どうあつても日丈には、日章とお花兩人が、不義をいたしてをると申すか。

日丈　打捨ておかば一山の恥辱になるゆゑ共吟味、きつと糺さにやなりませぬ。

日法　こりや日章、申譯あらば、是にて申せ。

日章　さ、その申譯は。

日法　こりや日章、早く申せ。（トきつと言ふ。是にて日章是非なきこなしにて、）

日章　師の御坊のお目を盗み、面目次第もござりませぬ。（ト恐入つて平伏する。）

日丈　貫主樣、何と相違はござりますまい。

日法　はて、是非もなき事ぢやなあ。

日丈　貫主樣、して此の仕置は、如何なされまする。

日法　先例通り日章は、今日追放申しつける。

日丈　こりや、さうなうては叶ひますまい。

お峯　かやう申せば女子の身で、差出たことではござりまするが、その文ゆゑに事顕れ、日章様が御追放におなりなさる事ならば、まだ此外にもうお一人、御追放になされましても、よろしいお方がござりまする。

日法　なに、まだ此外に追放を、申しつくべき者があるとは、して〳〵それは何者なるぞ。

お峯　さあ、もうお一人のお方といふは、不義の御詮議なされました、日丈様でござりまする。

日丈　なに、愚僧を追放いたせとは。

お峯　はて、あなたも不義がござりますゆゑ。

日丈　えゝ黙らつせえ、何を申すのぢや、名僧知識の日丈を捕へ、不義があるとは何の譫言、今一言言つてお見やれ。その分にはいたさぬぞよ。

お峯　たとひ何とおつしやらうと、遁れぬ證據は、是れ爰に。（ト以前拾ひし文を出し）もし此文を、あなた御存じでござりますか。（ト見せる。日丈びつくりして、）

日丈　南無三、それを。（ト取りにかゝる。）

日法　こりや〳〵日丈、立ち騒いで見苦しい。詮議中ぢや、控へてよからう。
日丈　へえい。（ト是非なく控へる。）
お峯　もし父さん、お前讀んで下さんせ。
作兵　いや、おれは目が惡い。やつぱりそなた讀んでくれ。
お峯　さういふ事ならわたしが讀みませう。（ト文を開く。日丈氣の揉めるこなし、）何々『あまり〳〵思ひに絶え兼ね候まゝ、魚づくしの新作を拵へ、文字さへ、優しき假名がしらにて、一と舟しめしまゐらせ候』
日丈　こりやもう、たまらぬ。（ト逃げにかゝるを、）
作兵　はて、日丈樣、まあ〳〵とつくり聞かつしやりませ。
日法　それ所化ども、日丈を取押へい。
所化二人　畏りました。（ト日丈を押へつける。）
作兵　それお峯、高らかに讀み上げたがよい。
お峯　あい〳〵『しやけとや、いつも〳〵、こちばかりにて、筆に鰯のさよりのみ致し、飛の魚ほど思ひをり候へ共、兎に角鮑の片思ひにて、そもじ樣は白魚顏をなされ候とは、うなぎしく〳〵、小鰈こがれて我身事は、三度の飯もとゞへは通らず、たら〳〵そもじ樣のこぼうのみを戀ひ煩ひ、

實にめごちにもかゝはる小鯛に候まゝ、是非々々、いゝ蛸の御返事を、蟹かけ念じ參らせ、ほうぐまだぐ申しあま鯛ことも數の子の數々に候へども比目魚の關のしげゝれば、をしき筆留め、ゆで蛸かしく。戀しきお花さま參る、焦るゝ日丈より。』もし日丈樣、かやうな證據がある上は、あなたも不義でござりませうぞえ。

日丈　いゝや、言はゞ是は戲れ、いや戲れ事にいたしたを、證據にとつての不義呼ばゝり。此日丈は身にとつて、不義と言はるゝ覺えはない。おゝ追放される覺えはないわえ。

日法　こりや日丈、よく承れ、只今その方申せしには、不義ではないと申せども、此の日章が不義いたせし證據と申すは、女の方より出家の方へよこせし文、まつたその方が證據と申すは、出家の身にてあり乍ら、女の方へ送りし艶書、さすれば罪に取る時は、日章よりは遙に重いぞ。

日丈　むゝ。

日法　さすればそちも只今より、矢張り追放いたさねばならぬ。

日丈　あいや、ではござりませうが、私めは日章めとは違ひまして、たゞ文一本送りしのみにて、未だ女を犯した事なく、殊更盜みと申しましては、塵ッぱ一本、箸片々、かすめた事はござりませねば、そこらの所を思召され、何卒偏に追放の儀は。

ト此以前より、下手の障子屋體を明け、幕明きの灘七、仲藏出かゝりゐて、此時前へ出て、

灘七　なに、ねえ事があるものか。こんな太え奴はありやあしねえ。

仲藏　よくもおら達二人に、待ちぼけを喰はせたな。

日丈　や、貴殿はさつきの、あゝこれ〳〵、二人ともにつか〳〵と、必ず何も言ふまいぞ。

ト　あっちへ行けといふ思入。

灘七　必ず言ふなもよく出來た。こつちもすやを喰つた替り、

仲藏　何もかも言つてしまはあ。もし皆さん、聞いて下さいまし。

日丈　あゝこれ〳〵、さつきの金の事は、いやささつきの事は、おれが承知ぢや。それぢやによつて、こなた衆は、どうぞあつちへ、これ頼む〳〵。

ト此内日　法　上人心得ぬ思入にて、

日法　何とも怪しき此場の振舞。こりや〳〵兩人の者、いかなる仔細かそれへ出て、有體に申したがよい。

灘七　さやうなら申しますが、元この日丈と申す坊主は、大阪の川口で、桑名屋といふ廻船問屋の番頭をしてをりました、善兵衞と申す太い男、段々との押領が大晦日に露顯して、ゐても立つてもた

まらぬ所から、かけ硯の抽斗から、五十兩といふ金を引浚つて隨徳寺。

仲藏　その時二人も頼まれて、捜しに出たが行方知れず、それからわしらも難船で、命助かり水主をやめ、千ケ寺參りになりまして、今日思はずも御門前で、出つ會した此の善兵衛。

雛七　長旅ゆゑに五兩程、路用の無心を言ひましたら、五十兩の惡事があるゆゑ、安請合に請合つてその場を逃げてそれツきり。

仲藏　すやを喰つたる腹癒せに、こいつが惡事の棚卸しを、しようと思つて參りました。

ト此内日丈逃げようとするを、所化○△の兩人押へる。

日法　扨は是なる日丈は、左樣な奴めであつたるか。舊惡露顯の上からは、猶更當寺に置かれぬ日丈今日よりしては追放ぢやぞ。

日丈　いや、いらざる奴が出しやばつて、餘計な事迄喋べつたばつかり、たうとうこつちも追放とは、いや忌々しい事だな。

所○　そんなら不斷意地惡な、日丈殿はお師匠樣の、お叱り受けてしくじつたか。

所△　こんないゝ氣味な事はない。こなたやわしを虐めた替り、笑つてやらうぢやござらぬか。

所○　おゝそれがよい〱、肴盡しの生臭坊主、

所△ お師匠様をしくじつて、明日から乞食ぢや。

兩人 わアい〳〵。

日丈 えゝ、おのれら迄が、すつ込んでをれ。（ト叱りつける。日法上人作兵衞に向ひ、）

日法 いやなに作兵衞どの、一人ならず二人迄、かゝる譯にて寺僧をば、追放いたす上からは、氣の毒ながらこなた衆も、どうも此まゝ門前へ置くと申す譯にも行かぬ。迷惑ながら何れへなと、どうぞ立退いて下されい。

作兵 いやもう、仰せなくとも娘から、事が起つて輕からぬ、お役僧をお二人迄、御追放にいたす上は何んでおめ〳〵ゐられませう。御門前にも今日限り、何れへなりと娘を連れ、立退きまするでござりませう。（トお花に向つて、）こりや娘、それへ出い。よくも〳〵此様な、大それた事を出かしをつたな。言はうやうない不孝ものめが、貫主様への申譯に、うぬ、どうしてくれよう。（ト襟上をとつて引付け、打たうとする。）

お峯 あゝもし、父さん、その腹立ちは尤もながら、手荒い事をして下さんすな。

作兵 あゝこれ〳〵お峯、必ず共に留めてくれるな。あの作兵衞はよい年して、後生も願はず娘を餌にあのやうな事いたしをるかと、人に疑ひ受くると思へば、腹が立つて〳〵、これ此の胸が張裂け

るやうぢやわい。

お峯　さあ常のお前の氣性では、定めてさうでござんせうが、何を言うても出來た事、今更言うても返りませぬ。爰で折檻しようより、内へ歸つてとつくりと、わたしが異見をしませうわいな。

トよろしく作兵衛を宥める、日章氣の毒の思入にて、

日章　是といふも日章が、不圖した心の迷ひより、師の坊始めこなた衆に、難儀をかける身の大罪、今日の今迄知れまいと、思うてゐたは我過り、かゝる恥辱を受くるのも、是皆高祖の御罰と思へばあゝ愼しむべきは煩惱ぢやな。（ト思入にて言ふ。日法上人思入あつて、）

日法　日章、それへ出い。

日章　はツ。（ト前へ進む。）

日法　こりや、よう聞けよ。數多の弟子もある中に、取りわけそちは七歳より、我手許で敎導なすに、一を聞いて萬を悟り、成長なすに隨つて、衆に勝れし才智ゆゑ、末賴もしく存ぜしに、その甲斐もなく惱煩の道に迷うて今日より、勘當いたす我が殘念、先非を悔まば改心なし、何處へなりとその身を落着け、一旦穢れし三衣をば、淨めて一つの功を立て、再び當寺へ立歸り、今の恥辱を雪ぎくれよ。

日章　はゝ有難き師の坊の、冥加に餘るそのお詞、譬にも言ふ師の影は、七尺去つて踏むなとある。父母より重き大恩に、ましてや我は幼きより、長の間の御高恩、送らぬのみかお恥辱迄、與へし此身の不埒の段、お許しなされて下さりませ。

灘七　もし、こんな坊主をべん／＼と、かうしてお置きなされますと、又どんな事を仕出かさうも知れませぬ。ちつとも早く追出して、おしまひなされませ。

仲藏　賴んだ路用を貸さねえ替り、赤ッ恥をかゝせるのが、せめての事の腹癒せだ。どれ、おら達も手傳つて、叩き出してやらうかい。

日法　やあ／＼所化共、日丈を追放いたせ。（ト奥にて）

若衆　はあゝ。（ト所化二人、棒を持ち出て來り）

所一　日丈ごの、師の坊の仰せでござる。

所二　きり／＼爰を、

兩人　お立ちなされい。（ト是にて日丈立上り）

日丈　あゝ是といふのも日丈が、不圖した心の迷ひより、師の坊はじめこなた衆迄、難儀をかける身の大罪、けふの今迄知れまいと思うてゐたは我あやまり、かゝる恥辱を受くるのも、是皆高祖の御

罰なり、あゝ愼むべきは煩惱ぢやな。

ト日章の言つた通りを眞面目に言ふ。是にて唄になり、日丈先に灘七、仲藏是を追ひ立て、所化の一、二附いて下手へはひる。〇△の所化日章の傍へ來り、

所〇　もし日章樣、そんなら今日からお前樣も、此お寺にはござりませぬか。

所△　是迄長々お經をば、教へてお貰ひ申しまして、

兩人　有難うござりまする。（ト手をつかへ、辭儀をなす。）

日章　おゝ、そち達はまだ幼年ながら、年より賢いものぢやによつて、お師匠樣に世話やかせず、よう經文を精出して、出家堅固に遂げませうぞ。道に背きし事をすれば、直にその身は此身の通り、日章が能い手本ぢやゆゑ、必ず色に迷ふまいぞ。

所〇　はい、有難うござりまする。是迄二人を可愛がつて下さりました日章樣、今日お別れ申しますれば、

所△　明日からお經を忘れても、教へて下さるものもなく、

所〇　それを思ふと悲しくなり、

所△　お名殘り惜しう。

兩人　ございます。

ト左右より縋る。是にて日章不便だといふ思入。此時寺鐘鳴る。日法上人思入あつて、

日法　最早や開帳、日章には、とく〳〵當寺を退散せよ。

日章　お名殘り惜しうはござりますれど、御勘氣蒙むる上からは、長居はおそれ、何處へなりと。

ト立上る。此時お花顔をあげ、

お花　どうぞわたしも、御一緒に。(ト寄らうとするを、作兵衛留めて、)

作兵　あゝこれ娘、さうはならぬ。日章樣は改心なされ、御勘氣お詫の大事の御身。

お花　そんなら是れぎりあなたには、

お峯　はて又それも、折があらう。

お花　それぢやというて。

お峯　これ、時節を待つがよいわいの。(トよろしく宥める。日法上人立上り、)

日法　とは言へ、不便な。(ト思入あつて氣を替へ、)日章早く退散いたせ。

ト唄になり、日法上人〇△の所化附いて奥へはひる。日章跡を見送りて、伏拜みゐる。作兵衛、日章の傍へより、

作兵　日章樣、よしない娘があつたばつかり、お情け深いあなた樣を、破戒墮落の御身となし、何んとお詫を申さうやら、御免なされて下さりませ。

日章　その言譯は愚僧から、言はねばならぬ此身の不埒、年來爰にござつたる、此門前にも今日限り、居られぬやうにしましたは、皆日章がなせる業、面目次第でござらぬわいの。

お峯　只此上のお情けには、妹にどうぞ一遍の、お詞かけて下さりませ。それが一つの姉がお願ひ。

作兵　いゝや、それではどうも爲にならねば、是よりしては別れ〳〵に。

お花　もし日章樣、わたしや覺悟をしてをりますわいなあ。

日章　そんならそなたも。(ト矢張り死ぬかといふ思入。)

作兵　えゝ。(ト聞き咎める。)

日章　あいや、そなたも隨分その身を大事に。

作兵　別れ〳〵といふものゝ、長々御恩になつたれば、せめて親父が裏門まで、お見送りをばいたしませう。

日章　いや、それでは却つて。

作兵　はて、御遠慮には及びませぬ。

お峯　そんならわたしは妹を伴なひ、表門から内へ戻つて。
お花　いえ〳〵わたしや、どうでもあなたと。
お峯　あゝこれ、それではどうも濟まぬわいなう。
　　ト お峯、お花の手をとり上手へ行き、日章 作兵衞は下手へ行く。双方顔見合せ。
日章『忘るなよ、程は雲井を隔つとも、』
作兵『空行く月の、』
お峯『廻り逢ふまで。』
お花　そんなら是れが、（ト行かうとするを、）
お峯　あゝこれ。（ト お峯留める。日章思入あつて、）
日章　どれ、退散いたさうか。
　　ト是より送り三重になり、日章 作兵衞は花道へかゝる。お花名殘りを惜しむを、お峯無理に手を取り、東のあゆみへ掛る。此時以前の日法上人、上手障子屋體より出て手を合せる。作兵衞愁ひの思入、お花は日章を見て、モシと行かうとするを、お峯これを留める。日法上人衣の袖にて涙を拭ふ。双方一時に木の頭、三重本釣鐘にて、みな〳〵愁ひの思入にてよろしく、

ひやうし幕

ト幕引付けると、開帳の太鼓の頭を打込む。是にて双方立止り、愁ひの思入にてよろしく揚幕へはひる。留めの木に付き跡シヤギリ。

二幕目　仙臺堀道行の場

(淨瑠璃)月を使の道行に、時鳥二世契(淸元連中)

〔役名――久遠寺の役僧日章、同役僧日丈、秋田の重吉、朝參りの講中經八、同題七。作兵衞娘お峯同お花、合長家四人。〕

(仙臺堀川岸通りの場)――本舞臺三間の間、少し後へ下げて一面に中足の二重六枚かざり、石垣、浪打際の蹴込み、上手畫心に、貸藏の張物、下手白壁、日窓屋敷の外がゝり、是を打返して出語り臺になること、正面少し下手へ寄せて、片ふたの橋、上手に柳の立木、日覆より同じく釣枝、後ろ黑幕舞臺前浪よけの杭、浪板を並べ、この蔭に誂への切穴、總て仙臺堀川岸通りの模樣、四つ竹の合方、浪の音にて幕明く、と矢張り右の合方にて、下手より○△□合長屋の拵へにて、弓張提灯を持ち、鉦太鼓を敲き迷子を呼びながら出來り、

三人　迷子やアい、迷子の〳〵、お花ばうやアい。

○ 大きにどなたも、御苦勞でござりました。

兩人 いえもう、是はお互ひの事でござりまする。

○ 何にしろ、宵からかうやつて、聲の嗄れる程呼んで歩いても、ちつとも手當りのないには困つたものでござりまする。

△ 左樣々々、然しまあ困ると言へば、作兵衞どのも仕合せの惡い事ではないか。お役僧の日章樣がどういふ事でか、お花ばうとでれ合つて、その女犯が顯れて、日章樣はお寺を追放、それに附けて作兵衞どのも、門前を追拂はれ、俄かに本所の方へ引越すといふ事ではないか。

□ されば、さ、その中でお花さんが、家出をして行方知れず、何でも日章樣が追放されたによつて、その跡を追駈けて行つたに違ひはない。是から何でも日章樣の身よりを尋ねたら、ちつとは足が附くであらう。

○ それは足がつくに違ひはないが、何もさう肩を入れるには及ばない。何もわしでもお前方でも、一つ長屋にゐることだによつて、まさか知らぬ顏も出きず、言はゞ義理一遍の仕事、もういゝ加減にしようではないか。

△ 成程それに違ひなしだ。不實な事を言ふやうだが、どうで明日は引越して行く作兵衞どの、附合

ふのも今夜ぎりだ。
□　さうとも〳〵、明日からは本所の人だ。
○　本所と言へば、矢張り忘れたことがあつた。
△　本所を忘れたとは、何の事だ。
○　いやさ、本所で思ひ出したといふのは、此書附けの事だ。
□　お定りの淨瑠璃ぶれだの。
○　迷子の仕出しと來た日にやあ、觸れを讀むのは紋切形だ。
△　何にしろその役ばかりで爰へ出たのだ。早く呼んで、引込む算段をしようぢやないか。
□　その事〳〵。
○　淨瑠璃名題――。（トよろしく三人にて淨瑠璃名題、太夫連名役人替名を讀んで、）
△　いよ〳〵此處、淨瑠璃初まり。
○　その爲、本所左樣。
□　さあ、是れで役が濟んだ。
三人　迷子の〳〵、お花やアい。

ト三人捨ゼリフにて上手へはひる。跡時の鐘を打込み、知らせにつき下手の張物を打返し、爰に淸元連中居並び、前彈なしに直に淨瑠璃になる。

〽妙なるや法の蓮の花いかだ、弘誓の船に法の道、いつか迷ひの雲霧にその身を覆ふ濡衣、日章と呼ぶ文字さへも、破戒の罪と散り果てし、花とは言へど袖に淚の、乾く間も夏の茂みの木下闇、

ト此淨瑠璃の內、花道より日章月代の延びたる坊主鬘、色氣のある無地の着附、好みのなり、東の假花道より、お花さら毛の島田鬘、振袖、世話娘のこしらへにて、兩人共よろしく出來り、文句一ぱいに花道よき所に止り、思入あつて、

日章　あゝ我ながら迷うたり、おのれが罪おのれを責むる今の成行き、三衣を纏ふ僧の身で、あるべき事か五戒を破り、殊に女犯は罪深きものと知りつゝ墮落なし、佛の御罰は眼のあたり。

お花　お懷しいは日章樣、わたしゆゑにお寺を開き、憂き目にお逢ひなさるゝも此身に報ふ罪科と思へど心に忘られず、あなたに添はれぬその時は、死なうと覺悟は極めたれど、どうぞま一度たゞ一と目。

日章　師の御坊への申譯、また二つには知る人にも、何とて顏が合はされよう。死ぬより外に思案はなけ

れど、いまは際に唯一言、お花に逢へばなにやかや。
お花　此世の緣は薄くとも、來世はせめて女夫ぢやと、言ふお詞が聞きたうても、何處においでなさるやら。
日章　なまじ逢うても共々に、却つて心が殘る道理。
お花　お顏を見たらなまなかに、矢張りあなたのお爲めにならず。
日章　未練殘さず此身を捨て、
お花　幾萬年の御壽命すぎ、
日章　未來は一蓮托生に、
お花　あの世で添ふを樂しみに、
日章　我身の銹とは言ひながら、
お花　戀しいお方に添はれぬも、
日章　思へば薄き、
お花　緣ぢやあなあ。
〽心は一つ二た道をかけて鳴く音の時鳥、冥土の鳥と聞くからに、あの世へ急ぐ知るべぞと

思ひ入るさの月代も、かれこれ四つか三つまたの、川邊傳ひに辿り來る。

ト此内日覆より時鳥笛、兩人よろしくあつて、本舞臺へ來る。此時日覆より半月を引出す。

〽只さへ知れぬ朧夜に、胸の闇路を行き惱み、たそと姿も見えわかぬ、互ひの顏も袖覆ふ橋の袂もつきせぬ緣。

ト此内兩人袖にて顏を隱し、入替る事あつて、お花日章の姿をよく〳〵見て、

お花 や、あなたは日章樣か。

日章 そなたはお花、さらばぢや。

〽さらばとばかり日章が、行かんとするを引きとゞめ、

ト此内お花日章に縋るを振切つて行きにかゝるを、お花日章の袖を引きとめて、

お花 そりやお胴慾でござりまする。これ程焦れてお跡を慕ひ、爰で逢うたは祖師樣の、お引合せと思うてゐるに、わたし一人を振捨てゝ行かうといふはお情ない。そりや聞えぬ、聞えませぬわいなあ。

ト泣伏す。日章思入あつて、合方になり、

日章 さゝ、その恨みは尤もなれど、そなたと二人連れ立たば、猶々重なる我が罪科、今更改め言はい

でも、そなたも知つてゐやる通り、幼い頃より師の坊の、御恩を受けて人となり、十分が一のその御恩も送れぬのみか出家の身で、慎しむべきは女子の交り、五戒の内の邪淫戒、それを破つたのみならず、金子までの御苦勞かけ、重罪人の此の日章、お師匠樣への申譯、せめては命を捨てたなら、少しは人の憎しみも薄くならうと思案を極め、死ぬる覺悟の此身ゆゑ、そなたは跡にながらへて、どうぞわしが忌日には、香花なりと手向けて下され、すげなう言うたも死ぬ氣ゆゑ、必ずともに恨みとばし、どうぞ思うて下さるな。

お花　いえ〳〵、そのお詞がお恨みでござりますわいなあ。

日章　これ程譯を言うて聞かすに、何んでそなたは恨むと言ふのぢや。

お花　お恨み申さいで何としませう。お前一人が死なしやんして、わたしに跡へ殘れとは、そりや水臭いおつしやりやう。さういふお身にしたのもわたし、それぢやによつて、死ぬるなら、とも〳〵死ねとたゞ一と言、なぜ言うては下さんせぬ。そりやあんまりでござんすわいなあ。

日章　はて、やくたいもない其の恨み、わしは女犯の罪ゆゑに、死ぬるはせめての罪滅ぼし、そなたを共に殺しなば、罪に罪をば重ぬる道理、殊には世間の口の端にも、一人で死なば先非を悔い、命を捨てしと世の人の、少しは不便もかゝらうけれど、そなたと死なば心中と、世間へぱつと浮名

が立てば、猶々師匠へ恥の上塗り、もう〳〵左樣な事言はずと、生ひ先き長きそなたの事、ましてや親御へ大不孝、どうぞながらへ作兵衞どのに、孝行をして下されいなう。

お花　成程あなたのおつしやる事、よう聞きわけてをりますわいなあ。

日章　そんなら聞きわけて下さつたか。

お花　あいなあ、一緒に死ねば心中と浮名が立つとおつしやるゆゑ、わたし一人で所をかへ、今宵の内にお跡から死んで行きますほどに、あの世へ行つたら一つ蓮、必ず待つてゐて下さんせえ。

日章　そんならどうでも。

お花　あい、死ぬる覺悟でござんすわいなあ。

〽言ふもびんなき事ながら、御出家樣の戒めにも、女子の手から物とれば、五百生のその間手のないものに生るゝと、聞いてはゐれど何んのその、すまぬ戀路も墨染の、衣かたしき緣の絲、經讀む鳥にあらねども、初寐嬉しき床の内、別れ惜しんで長房の、辛氣辛苦の紐とけて、結ぶも堅き約束を、今更一人ながらへてゐよとは何んの七文字と、口說き歎くぞ道理なる。

ト此内よろしく口說きの振りあつて、日章にとり附き、泣き沈む。日章も思ひ入あつて、

日章　これお花、其心とは知つてはゐれど、今のやうに言うたのも、そなたの爲を思ふゆゑ、それ程迄に慕ふもの、どうまあ無下にそち一人、跡に殘して死なれうぞいの。

お花　そんならわたしが言ふ事を、あなたは叶へて下さりますか。

日章　はて、叶へいで何とせう。只何事も定まる約束、二人一緒に手に手をとり、此の大川へ身を沈め底のみくずとなる心。

お花　そのお詞を聞く上は、變らぬ女夫でござんすぞえ。

日章　今宵は誰に憚らず。（トお花の手をとり、引寄せる。）

お花　日章樣。

日章　お花どの。

お花　お嬉しうござんすわいなあ。

トお花日章に寄り添ひ、袖にて顏を隱す。

〽佛の道に入りながら、戀には誰も煩惱の、愚癡な事ぢやが此娑婆で、二人かうして添ふならば、樂しからうにそれさへも、ならぬ奈落のそこはかと、いろには心亂れあふ、わりなき仲ぞいぢらしき。

〽折もこそあれ向うより、祖師の利益を假宅のぞめき半分深川へ、朝參りとはお若いに、よく御信心、せう〳〵な。ほんに仲よい二人連れ、團扇太鼓の拍子よく、浮かれ浮かれて來りける。

ト此文句にて、花道より朝參りの講中經八、同題七、着流し尻端折り、白足袋、麻裏、團扇太鼓と日參と記したる長提灯を持ち出て來り、花道にてよろしく振りあつて、本舞臺へ來る。日章は是を見て、天窓へ手拭をのせ、姿を見せぬ思入、お花も日章の後ろへ隱れる。經八、題七は提灯の灯りにて兩人をすかし見て、

經八　もし、そこにおいでなさるのは、お若いお方の女中連れ。

題七　矢張りお前さん方も、お開帳の朝參りかね。

日章　へい、左樣でござります。

經八　それぢやあ信者同志ゆゑ、こいつは話が出來るわえ。

題七　出來る所ぢやねえ、大出來に出來てゐるのだぜ。（トちよつとお花へ指をさして言ふ。）

經八　成程こりやあ大出來だ。そりやあいゝが、さつき打つたのは七つだと思つて出かけて來たが、鷄がうたふ樣子も見えねば、こいつア一時早く來たわえ。

題七　そんなら、今しがた打つたのは、八つか知らぬ。
經八　さうとも、八つに違ひなしだ。それだから向う川岸で犬に吠えられて困つたが、怪我のないのはお祖師樣の御利益だ。
題七　怪我がないと言へば、此の川端にしよんぼりと、さうしてゐなさる二人の樣子、あんまり戀路に濡れ過ぎて、
經八　果ては、どんぶり濡れようと、粹な端唄や淨瑠璃の、文句にかゝせる氣ではないか。
題七　ませた事を言ふ樣だが、死んで花實は、
兩人　咲かぬぞえ。
〽よく道行きの口說きにも、蓮の臺のあら世帶、そんな危ふいうてなより、二人手をとりしつぽりと、根岸を過ぎて日暮らしか、夫婦暮しの片田舍、機も織り候賃仕事、おかる氣取りで身も輕く、口さへ輕き小ませもの、異見交りと鳴る鐘も、夜明け間近き鷄の聲。
經八　何でも災難を遁れるには、祖師の利益にしくものなしだ、南無御信心せう〳〵。
兩人　南無妙法蓮華經。
〽おそれ多くももつたいなくも、抑高祖大聖人、難行苦行の其内に、大難四ヶ度小難の數

經八　あの鐘は、もう七つ、いらざる事に何時迄も、白浪に題目を、書かせ給ふか佐渡やさぞ、人目に立つた龍の口、片瀬かたはも御利益で、盲が目を明く、唖が口利く、躄が駈け出す。そりやこそ夕立車軸より、汗を流してどんつくどん。ぢがけ地がねの信者とて、話に法の道連れが、又も二人に目をつけて、

題七　とんだお世話の無駄話し。

經八　必らず腹を立つまいぜ。

日章　御親切なるその御異見、

お花　有難うござりまする。（ト此内かすめて題目太鼓）

經八　コウ題七、どこかの朝參りが出て來たやうだ。

題七　そんならそろ〳〵、出かけよう。

經八　二人の衆は是にゆるりと、

兩人　なされませ。

〽心殘して兩人は、たつ蠟燭の心よりも、親身の異見そこ〳〵に、太鼓鳴らして急ぎ行く、二人は跡を打ち見やり、

ト經八、題七よろしく思入あつて、太鼓を叩きながら上手へはひる。兩人は跡を見送り、

お花　いづれの衆か知らねども、わし達二人の姿を見て、

日章　胡散なものと思うてやら、若いお方の今の御異見、此世で添はれぬ身の惡業、思へばはかない。

兩人　身の上ぢやなあ。（ト兩人よろしく思入、又かすめて題目太鼓になり、）

日章　これお花、かすかに聞ゆるあの太鼓、朝參りの講中ならん。死なうと覺悟極めしからは、見咎められぬ其内に、ちつとも早く。

お花　後世を願うて、お祖師樣。

日章　生者必滅會者定離、

お花　日章さま、

日章　支度しや。

お花　あい。

〽南無妙法蓮華經。妙法蓮華經。

ト獨吟の題目になり、此内兩人名殘を惜しむ思入。お花小石を拾ひ、袂へ入れる事あつて、

日章　覺悟はよいか。

お花　日章様、さうぢや。

〽合掌なして水の面、此世の名殘りなり振りも、そゞろに川へ飛込むお花、こなたも共に遲れじと、又も飛込む日章が、袖にからまるもやひの棒杭、

ト此内お花手を合せ拜む事あつて、前の切穴へ飛込む。日章もつゞいて飛込む。日章の袖舞臺前のもやひ杭へ引つかゝりし思入にて取らうとするも取れぬこなしいろ〳〵あつて、やう〳〵と袖を取り、二重へ腰をかけ、ほつと思入、

〽死におくれたる日章が、ほつと一と息ためらふ內、上手へ登る障子船、

〽戀するも樂しみするもお互ひに、世にある內と思はんせ、死んで花實も野暮らしい、同じ花なら床の內、比翼枕がよいわいな、じつまことと思はんせ。

日章　折も折とて舟で彈く、あの三味線の唱歌にも、樂しみするも戀するも世にある內、死んで花實が咲かぬとは、死ぬのは惡い料簡と、此の日章へ異見の辻占、

〽心にふつと死神の、放れて吐息月の影。

此結構な世を捨てゝ、死ぬのは野暮の行きどまり、人間僅か五十年、首尾よく行けば又十年、百年迄も生きのびて、假令襤褸を纏うても、金さへあれば出來る樂しみ、同じ事ならあのやうに、

騷いで暮すも人の一生、是からおれも宗旨を替へ、人の物は我物と、榮耀榮華をするのが德、こいつはめつたに死なれぬわえ。
〽空さへ替る夏の短夜。
それにつけても早まつて、お花を先きへ殺したが、是が一つの心がゝり、あゝ矢張り是も約束事か、墮落なしても以前が出家、後世はおれが弔らうてやる程に、それで料簡したがよい、南無妙法蓮華經。

トちよつと川を拜むこなしあつて、塵を拂ひ立上る。浪の音、四つ竹の合方になり、上手より日丈坊主鬘、鼠の着附、尻端折り、お花の跡を搜しに來たる心にて、うろ〳〵と出て來り、舞臺にて、日章と行き合ひ、兩人こなしあつて、日丈、日章を見て、

日丈　や、そちや日章ぢやな。
日章　日丈どのか。（ト行きにかゝるを日丈、日章の手をとつて、）
日丈　どつこい、逃がしてなるものか。よくもわれはおれを出しぬき、あのお花を引出したな。何んぼ貴樣が和倘でも、隨德寺をきめようとは、おのれはのぶとい奴めだな。
日章　それはお前の料簡違ひ、お花さあゝした譯にはあれど、なか〳〵内を連れ出した、覺えは少しも

ござりませぬ。

日丈　えゝぬかしをるなえ。愚老が首たけ惚れ込んだ、お花をわれに引出され、その上おのれのお相伴で、おれ迄たうとうお拂ひ箱、此の腹癒せはお花めを、おれが搜して女房にする。さあ、お花の在所をぬかせ。えゝ、きり〳〵こぬかしをれ。

日章　そりやそなたが、無理と言ふもの、實にお花が行方は知らぬ。

日丈　えゝまだ知らをきりをるか、さあ愚老と一緒にうせをれやい。

ト日章の手をとり、無理に行けといふ。日章は行くまいと兩人よろしく爭ふ內、日丈の懷中より、五十兩包みをばつたり落すを日章目早く取上げて、

日章　こりや金。

日丈　南無三、それを。

ト日章に武者振りつくを振り拂ひ、浪の音にてちよつと立廻りあつて、日章、日丈を突廻し。トヾドンと當てる。是にて日丈立身にて苦しむ。日章金包みを見てにつこり思入。

日章　思ひがけない五十兩、毒喰はゞ皿、

ト立身に苦しむ日丈を足にて蹴る。是にて日丈前の切穴へ落ちる。浪の音烈しく、水の花パツと立

つ、日章川を見込み、きつと思入。本釣鐘。

是を路用に是からは、し度い三昧それからそれ、實に坊主も飽き果てたア。

ト此時、チヨント月隱れる。

闇を幸ひ、夜明けぬ内に。

ト行きにかゝる。此以前、下手より秋田の重吉、頰冠りにて窺ひ居て、此時日章の後ろより組み附き、金を取らうとする。上手より前幕のお峯、小田原提灯を提げ出て、此立廻りの中へはひり、提灯を差出す。日章は提灯を打落し、三人きつと見得、是より誂への世話の鳴物になり、金をかせにだんまり模樣の立廻りよろしくあつて、トヾ日章は遁れ、花道へ行く。秋田の重吉は日章と心得、お峯を引附け、天窓を探つてびつくり飛びのく。日章は手拭を冠る。双方見合つて木のかしら。是にて後ろ黒幕を切つて落す。向う高橋を見たる遠見、是へ朝參りの萬燈の書割、舞臺はお峯、秋田の重吉向うを見込む。日章は逸散に花道へはひる。浪の音、題目太鼓にて、賑かによろしく

ひやうし幕

三幕目

唐土受仙宮の場
高輪大木戸の場

〔役名〕‖冀國侯蘇護、西伯侯姫昌、殷の紂王、桑名屋德兵衛、西伯の臣雷震、佞臣費仲官、同師絹官、下官數名、美濃屋重兵衛。蘇護妹妲妃、德兵衛妾お百、紂王の后姜后、侍女等。〕

（殷の都外構への場）‖本舞臺眞中に石の關門、左右石を疊みし塀、松の立木、日覆より同じく釣枝、總て殷の都外構への體、爰に西伯の臣雷震好みの鬘、織物つゝツぽ仕立の唐裝束、臑當、沓、劍を帶し、懷に錦の袋へ入れし照魔鏡を持ち、誂への斧を持ちて、立身、上下に下官○△□◎何れもつゝツぽ、下官にて雷震をさゝへゐる見得、唐めいた鳴物にて幕明く。

○　怪しきわつぱめ。

四人　下りをらう。

雷震　やあ、毛唐人の折介めら、道をさゝへて何んとする。

○　何んとするとは、知れた事、怪しき者は通すなさ、費仲官の言ひ附けにて、此關門を守る我々。

△　通りたくばその名を名乘り、何用あつて何處へ行くと、仔細を言はゞ通してくれう。

□　さもない内は我々の、越度となれば此の關門。

◎　通す事は、

四人　罷りならぬ。

雷震　佞人讒者の費仲官が、言附けによつて通されぬとか、しやらつくせえさゝへだて、此關門の一つや二つ、踏み碎いても通つて見せう。

○　いや、小さななりでわつぱめが、大きな事をまきだしたな。

△　つひぞ是迄見かけぬが、只のパア〳〵でもないと見える。

□　天から降つたか地から湧いたか。

◎　そも先づ、うぬは、

四　何者だ。

雷震　うぬら如きうじ蟲に、名乘つて聞かすも無駄なれど、その名は四方へ鳴り渡る雷の響に我母の、胎を破つて誕生した、雷震といふ腕白者、終南山の雪中子から、西伯侯へ使に行くのだ。道を開いて通さばよし、さまだけなさばそつ首を、斧をもつて切落し、手だまに取るぞ覺悟なせ。

○　雪中子から西伯へ、使といふは合點が行かぬ。

△　殊に汝が懷に、怪しき品を所持なすからは。

□　此の關門は。

四人　通されぬ。

雷震　我懐に所持なすは何も怪しい品ぢやあねえ。照魔鏡と名附けし鏡、先だつてより雪中子が殷の都に妖氣立つは、まさしく年ふる妖狐の類徘徊なすと覺えたり。これにつけても合點の行かぬは寵に誇り紂王へ惡意を勸める妲妃が振舞、此鏡にて姿を照し、邪正を見よと我が師から、西伯侯へ持參なすのだ。

○　さう聞いては一大事、費仲官を初めとして、我々共に至るまで。

△　妲妃の方の執成にて、日々のぼる立身出世。

□　元より玉を欺く程、美しいから御寵愛。

◎　それを怪しむ雪中子、西伯とても合點が行かぬ。

○　まづさし當る照魔鏡、我々どもに、

四人　渡してゆけ。

雷震　此の雷震が所持なす鏡、取らんなぞとは及ばぬ事、譬にも言ふ蟷螂の、斧の引導渡してくれろ。

○　えゝ面倒な、打つてとれ。

雷震　何を小癪な。

ト大太鼓入りの唐めきし鳴物になり、雷震四人を相手に立廻りよろしくあつて、トゞ四人叶はず、上

手へ逃げてはひる。雷震斧を持ちて跡を追つてはひる。これにて此道具廻る。

（紂王の別館受仙宮の場）――本舞臺四間通し、高足の二重、本緣附き、朱塗りの柱、同じく高欄、腰通り唐花の模樣、朱塗りの三段、向う大瓦燈口、錦の緞帳、左右金張り附け、唐花の模樣、軒に一面に緞帳をおろし、左右同じく朱塗りの渡殿、床下へ岩組に紅白の牡丹を取附け、日覆より海棠の釣枝、總て紂王の別館受仙宮の體、唐樂にて道具留る。と唐樂を打上げ、床の淨瑠璃になり、

〽抑殷の湯王より、二十八世の聖代も、滅ぶる時の來るにや、惡逆無道の紂王が愛妾妲妃が色香に迷ひ、日夜遊戲の受仙宮、今日もお入りに佞臣の費仲、師絹が出迎ひ、

ト唐樂になり、上手より費仲、師絹、唐裝束、沓にて出來り、

費仲　如何に師絹どの、今日本で流行なす、貴殿も身共も胡麻摺りと、列侯どもに誹らるれど、妲妃の方へとり入つて、日々登る立身出世。

師絹　とても世界の人々に惡く言はれる位なら、思入れ胡麻をすり込んで、官位昇進するのが德。

費仲　西伯東伯なんども佞辯をもつて讒言なし、押籠めにしてしまふ時は、あたまのつかへるものはない。

師絹　君をおだてゝ晝夜をわかたず、酒池肉林の酒宴を開き、男女裸の無禮講。

費仲　腕づく次第で幾人でも、好きな女が自由になるとは。

師絹　こんな世界が唐にもあらうかと、日本人は言ふさうだが。

費仲　今般の世の歡樂は。

師絹　三千世界にあるまいて。（ト此時花道の揚幕にて）

呼ビ　御入り。（ト呼ぶ。）

費仲　最早や我君、

兩人　お入りとな。

〽程もあらせず紂王が、比翼連理のかたらひなす、愛妾妲妃もろ共に、前栽近く步み來て、

ト唐樂の入りし誂へ出の鳴物になり、花道より殿の紂王、唐冠り、唐裝束、沓の拵へ、妲妃誂への鬘、沓、下官、絹張りの長柄の傘をさしかけ、唐子二人、唐めきし煙草盆、長煙管を持ち、侍女〇△□◎何れも唐裝束、侍女の拵へにて出來り、花道にて、

紂王　實にや、牡丹は百花に勝り、盛り久しき富貴草、詠めに飽かぬ花なれど、これなる妲妃に比ぶれば、遙かに劣る花の色。

妲妃　その我君の愛で給ふ、牡丹の花に勝りたる、御愛妾の持病ゆゑ、何れも樣のお勸めうけ、代りに

立ちし此の妲妃、牡丹は愚か芍藥の花にも劣るふつゝかは、お許しなされて下さりませ。
ト見物へ辭儀をなす。

紂王　いや、そもじが何と言はうとも、此の紂王が心には、三千人の寵愛も、只一人にとゞめし妲妃。
唐一　花は櫻と言ふけれど、
唐二　櫻に勝る牡丹の花、
侍○　今を盛りと園に咲く、その牡丹にも勝りたる。
侍△　白紅のいろ〳〵に、色どる羅綾の御裝ひ。
侍□　櫻恥らふ花の王、
費仲　これは〳〵我君樣、妲妃の方樣、只今お入りにござりますか。
師絹　先刻より我々兩人、酒池肉林の設けをば、
兩人　いたしおきましてござりまする。
紂王　心利きたる費仲、師絹、萬端よきに。
兩人　委細畏つてござりまする。
妲妃　何は兎もあれ、我が君樣には。

侍女四人 設けのお席へ。

紂王 皆も一緒に。

皆々 まづ入らせられませう。

〽いざと妲妃が飄す、羽翼の袖に炷き籠めし、蘭麝の薫り高樓へ、靜々と坐し給ひ。

ト此内師絹、費仲平伏なす。紂王、妲妃二重の眞中へ住ひ、腰元皆々後ろへ居並び、紂王 思入あつて、

紂王 最前より妲妃には、何時にない浮かぬ顔、氣分でも惡いのか。

侍○ 妲妃樣には、只今これへ、

侍△ 御入りの折から、俄の御病氣。

侍□ お顔の色も常ならず。

侍◎ 御不例の御樣子に、

四人 ござりまする。

紂王 雨を帶びたる海棠の、病める姿はまた一入、酒池肉林の宴を開き、妲妃が心を慰めい。

皆々 はあッ。

妲妃　いや、その酒宴には及ばぬわいの。
費仲　でも我君の仰せなれば、牛の照燒、豚の刺身、あらゆる肉を庖丁なし。
師絹　扨御酒宴の一興には、我等が得手のすつとこ踊りで、お笑ひ顏の出るやうに、
費仲　御機嫌を、
兩人　とらねばならぬ。
侍女皆々　そりや面白うござりませう。
紂王　さあ〳〵、早く、初めい〳〵。
兩人　畏りました。
妲妃　あゝこれ二人とも、まあ〳〵待ちや、みづからが今日の病ひは、たゞならぬ病ゆゑ、打捨て置いてたもいなう。
紂王　たゞならぬとは心がゝり、して〳〵如何なる病なるぞ。
妲妃　さあ、外の事でもござりませぬが、數ならぬ自らを、御寵愛深きゆゑ、人の嫉みを受ける中にも、とりわけ皇后樣の御憎しみを受けますれば、兄冀國侯蘇護が方へ參りたうござりまする。
紂王　なに、皇后が嫉み深きゆゑ、暇をくれと申すのか。

妲妃　お名残り惜しくはござりまするが、どうぞお暇下さりませいな。
紂王　いや／＼それはならぬ事、誰が何と申すとも、打捨て置くがよい。それとも心に濟まぬなら、四百餘州の政事さへそちに委す此紂王、誰彼の容赦はない。嫉むものは死刑にせよ。
侍〇　妲妃樣の仰せながら、皇后樣は、慈悲深く。
侍△　お心素直なお產れゆゑ、嫉み婧みはあるまじと、
侍□　わたくし共は存じまする。
侍◎　やはりお嫉みなされまするか。
費仲　そりや上々でも下々でも、初手は承知で持たした妾を、後では女房が角をはやし、悋氣をするはまゝある事。
師絹　唐も日本もおしなべて、嫉み婧みは女の道、お恨みなさるに違ひない。
妲妃　それにも深い譯あるゆゑ。
紂王　して／＼それは、如何なる譯だ。
妲妃　此事ばかりは皇后樣の、御身の上にかゝはる事ゆゑ、あなたへ申上げまいと、これ迄お隱し申しましたが、皇后樣が自らを、お恨みなさるその元は、いつぞや月の御遊の折、清光樓の高樓にて

皇后樣と西伯どのが、たゞ二人にて竊のかたらひ、折惡しくも參り合せ、ふとその樣を見たのがあやまり、もしその事が洩れやうかと、それから辛く當り給ひ、此程より我君が、重き罪あるものゆゑに、死刑を行ひ給ふのも、皆みづからがお勸め申し、無慈悲な事をいたすやうに、御吹聽なさるゆゑ、四百餘州の人々にさみせらるゝのが恥かしく、御寵愛さへ蒙らずば、かゝる事も申されまいと、それゆゑの身の御暇、お許しなされて下さりませいな。

〽思ひ入つてぞ言ひければ、紂王心に怒を生じ。

ト紂王きつと思入あつて、

紂王　む、すりや、皇后西伯が清光樓にて密會せしを、そちが見たゆゑ皇后が、おのれの罪を隱さんと、辛く當ると申すのか、思へば憎き皇后西伯。

伯絹　何は兎もあれ主ある御身で、清光樓にたゞ二人、これが晝でもある事か、夜陰にお出でなされしは、不義密通に違ひない。

費仲　さある時には先達てより、君のお胤と御披露ありし、皇后樣の御懷胎も、どうやら怪しうござりまする。

紂王　何樣、合點のゆかざる懷胎、是につけても此程より、酒宴の興にこれなる妲妃に、孕める女が胎

内の男子か女子を占せ、腹を裂いて見し所、一人として違ふ事なし、今皇后が懐胎も、我胤か
西伯の胤かはそちは存じてゐような。

妲妃　それも疾より占ひましたが、君のお胤ではござりませぬ。

○侍女　すりや、皇后様の御懐胎は、

△侍女　西伯どのゝ、

皆々　胤なるとか。

紂王　四百餘州の主人たる、此紂王が目を盗み、密通なせし二人のもの。

妲妃　きつと御詮議なさらねば、お恥辱になりまするが、これも妲妃がお勧め申すと、よしなき事を言はるゝのが此身に辛うござりまするから、君のお暇給はりて、兄の許へ帰りなば、人の恨みも受けませぬゆゑ、どうぞ此まゝみづからを、お返しなされて下さりませいな。

紂王　たとひ何と申さうとも、そちは片時傍は放さぬ。蔑なすものは死刑に行ひ、辛き目見せなばそれに恐れて、つひにはさみなすものもあるまじ、必ず心にかけぬがよい。

師絹　何はともあれ輕からぬ、君の御目をかすめし大罪。

費仲　御詮議あつて然るべく。

兩人　存じ奉りまする。

紂王　おゝ後とも言はず此場にて、不義の詮議をいたすであらう。それ、費仲には奥殿へ参り、皇后を召し連れ参れ。

費仲　畏つてござりまする。

〽勅命受けて皇后の、館をさして急ぎ行く。（ト費仲下手へはひる。）

師絹　して、相手の西伯めは。

紂王　彼を詮議いたしたとて、たやすくは白状せまじ、それゆゑ先へ皇后を、詮議なして白状させ。有無を言はせず西伯めを、罪に落すわが計略。

師絹　成程、これはよき御思案。

紂王　今庭前で皇后を、責むるを肴に、一獻汲まん。

師絹　それ、御酒宴の御用意めされ。

侍女皆々　畏りました。

〽打連れ奥へ入りにける。跡に妲妃はかた頰笑み。

ト侍女皆々奥へはひる。妲妃思入あつて、

妲妃　二人を此場で罪したまはゞ、最早や此身の。（ト思入。）
紂王　や。
妲妃　いやさ、此身を恨むものもなく、長くお傍にお仕へ申し、夜毎々々に比翼連理、君のお情受くる
のが、お嬉しうございますわいなあ。

ト妲妃紂王の顔をぢつと見る。

紂王　可愛い事を言ひをるなア。

〽折柄侍女が奥の間より、珍味佳肴を持ち運び、既に酒宴ぞ初まりける。

ト唐樂を冠せ、奥より侍女四人見事なる臺へ、酒肴を載せ、ギヤマンの徳利、こつぷ、杯、唐めきし
道具を持ち出て來り、よき所へ並べて、

侍〇　我君樣にはお杯、いざお取上げ、
皆々　遊ばされませう。（ト紂王杯を取り、）
紂王　おゝ、妲妃酌いたせ。
妲妃　はあッ。（ト妲妃酌をする。此時下手にて、）
費仲　君の御召し、急いで御前へ。

〽御いたはしや皇后は、費仲官に警固され、廣庭へ立出で給ひ。

ト下手より后姜皇后唐裝束の拵へにて、費仲先に、幕明きの四人の下官附添ひ出來り。

仰せに任せ皇后樣を、伴ひましてござりまする。（ト控へる。）

〽皇后は合點行かず、あたりの樣子窺ひて、

皇后　これは〳〵我君樣には、妲妃の方をお相手に、御酒宴のその中へ、お邪魔にならうに自らを、何ゆゑお召しなされました。

紂王　おゝ、そちを是へ呼び出せしは、詮議があるゆゑ。

皇后　えゝ、自らに御詮議とは。

紂王　我面へ泥を塗りし、その身の科を白狀いたせ。

皇后　思ひも寄らぬ御尋ね、何ゆゑ君のお面へ。

紂王　泥を塗りしは外ならず、我目を盜み西伯と、よくも密通いたしたな。

〽思ひがけなき一言に、皇后は驚き給ひ、（ト皇后びつくりなし、）

皇后　跡方もない不義の御詮議、露いさゝかも此身には。

紂王　やあ、覺えないとは言はれぬぞ、十月に近き懷胎も、我胤ならず西伯が、胤なる事まで存じをる

わ。

費仲　所詮遁れぬ事なれば、包み隱さず白狀召され。

師銜　我君さまのお怒りは、及ばずながらわれ〳〵が。

兩人　お執成しいたしませう。

皇后　てもまあ情ない、その樣な事を誰が讒言なしたるか。それぞまさしく自らに、恨みのあるその者が、身に覺えなき濡衣着せ、罪に落さん企みよな。

紂王　やあ、言ふな〳〵、その言譯聞く耳持たぬ、不義をなせしに相違ない。

皇后　それには何ぞ證據でも、あつての事でござりまするか。

紂王　おゝ證據も證據、密會せしを見屆けしものがある。

皇后　して見屆けしとは、そりや誰が。

〽言ふに妲妃は見返りて。（ト妲妃思入あつて、）

妲妃　誰でもない、みづからでござりまする。

皇后　え、して何でそなたが。

妲妃　見屆けましてござりまする。

皇后　して〳〵それは、何れ何處で。

〽せき立ち給ふを、

妲妃　まあ、そのやうに皇后樣、おせきなされるには及びませぬ。（ト誂への合方になり、）いつぞや月の御遊の折り、清光樓でのさゞめ言、折惡う行き合せ、確かに見たれど見ぬ振りして、何氣なう歸りましたは、あなたの罪を隱さう僞、かやうに思ふ自らを、告げでもするかと疑ひ給ひ、つらく當り給ふとは、さりとは情ない事と、お恨み申してをりましたれど、なほも庇うて今日迄も、みづからは言はねども、道に缺けたる事ゆゑに、天知る地知ると我君の、お耳に入りし不義の科、もう隱しても隱されませぬわいな。

師綰　いくら知れぬつもりでも、かの唐土の川柳點にも、知らぬは帝王ばかりなりと、誰言ふとなく世上の取沙汰、

費仲　その帝王も御存じあつて、今日此場にて不義の御詮議、

紂王　あり體に白狀なさば命ばかりは助けてくれうが、白狀いたさぬその時は、火水の責に遭はすぞよ。

皇后　如何なる責苦にあへばとて、覺えもない不義密通、何で罪に落ちませうぞ。

紂王　清光樓で密會せしを、これなる妲妃が見屆けしに、そちや存ぜぬと申すのか。

皇后　たとひ何と申さうとも、知らぬ事が申されませうか。

妲妃　てもお優しい顔に似ず、恐ろしい皇后様、現在爰に見たものが、居るのに知らぬとまざ〳〵しう

よう言はれた事でござりますなあ。

〽妲妃が詞に紂王は、怒れる聲を振り立てゝ、

ト妲妃紂王に寄り添つて言ふ。紂王思入あつて、

紂王　やあ、存ぜぬ知らぬとしぶとき皇后、打据ゑて白狀させい。

皆々　ハヽツ。

費仲　御諚ではござりますが。

皆々　まさしくお主を。

紂王　すりや皇后ばかりが主人にて、言附けし此の紂王は、主人ではないと申すのか。

皆々　全く以つて。

紂王　いなやを申さば手をおろさうか。

皆々　恐入つてござりまする。

〽悪逆無道の紂王は、黑闇地獄の閻羅王、費仲師緡の牛頭馬頭が、黑鐵の棒携へ出で、

ト此時紂王妲妃は酒を呑み、費仲師緍鐵の棒を持ち出る。下官四人は前後を圍ひ、

費仲　我君の嚴命なれば、是非に及ばぬ、皇后樣。

師緍　此黑鐵の棒を以つて、打つたら骨がひしげませう。

費仲　痛い目せぬ內、

皆々　白狀めされ。

皇后　その黑鐵の棒を以つて、身を粉々に打たるゝとも、道に缺けたる不義密通、此身に覺えもない事を、何で罪に落ちられようぞ。

紂王　猶豫いたさず、疾く〳〵打て、

費仲師緍　はツ。さあ、上意でござるぞ。

〽黑鐵の棒振り上げ情もあらき拷問に、苦しみ給ふ皇后を、見るに忍びず侍女が駈寄り。

ト師緍費仲鐵の棒で皇后を打つ。皇后苦しき思入。妲妃紂王に寄りかゝり、是を見て嬉しき思入。

侍女〇△つか〳〵と寄りて兩人を留め、

侍〇　あゝこれ、皇后樣はたゞならぬ、御懷胎の大事の御身、

侍△　手荒い事をなされたら、お體に障りませう。

師緡　やあ、出てかへらぬ君の仰せ。
費仲　留めだていたすと、傍杖くれるぞ。
△侍○　それぢやと言うて。（ト留めるを振拂ひ、）
師緡　えゝ姦しい。控へをらう。
紂王　それ、もつと打て〳〵。
兩人　はツ。
〽又もや二人が棒取りのべ、りう〳〵はつしと打ち据ゑ〳〵、さあ白状をめされよと、あなたこなたへ打倒され、姿亂るゝあを柳の、風に揉まるゝ如くなり、怺へ兼ねて皇后は、苦しき息をほつとつき、
ト此内皇后を左右から、費仲、師緡鐵棒で打つ、皇后苦しき思入にて、
皇后　身に覺えもない科を負ひ、かゝる憂目にあふといふは、如何なる宿世の因果なるぞ。
〽四百餘州の主人たる、並ぶかたなき國王の后となりしは上もなき、果報ものよと世の人に、言はれし此身が今日の責め。
是みな妲妃が色に迷ひ、日にまし募る無道の振舞、我は打たれて死ぬるとも、命はさら〳〵惜し

まねど、長く榮えし殷の世の、亂れとなるか情ない。

〽悲しいわいなと打伏して、歎き給ふぞ哀れなり。（ト此内皇后よろしく思入。）

〽妲妃はわざと打ち萎れ、

妲妃　あれ、あの如く皇后樣が、自らのみ憎み給ひ、善きにつけ惡しきにつけ、皆此身から起る樣に、おつしやりまするも我君の、御寵愛が深きゆゑ、嫉み猜みを受けますれば、どうぞ此身を兄の許へ、お返しなされて下さりませいなあ。

紂王　いや、ならぬ〳〵。何でそちを歸さうぞ。やい皇后、汝が罪をつゝみ隱す、かく情ある妲妃をば敵の如く思ふゆゑ、暇をくれと申すのぢや。最早助けておかれぬぞ。それ、打据ゑて息の根留めい。

費仲
師綰　はツ。

侍女
四人　すりや皇后樣を。

費仲
師綰　嚴命なれば、是非に及ばぬ。

皇后　望みなき世にながらへんより、早う殺してたもいなう。

兩人　言ふにや及ぶ。

へ又もや鐵棒ふり上げて、既に危きその處へ。

ト兩人また皇后を打たうとする。此時花道の揚幕にて、

冀國　いづれも、待つた。

へいづれもまつたと聲を掛け、妲妃が兄の冀國侯。

トばた〳〵になり、花道より冀國侯、錦の筒袖、唐裝束、沓にて出來り、

まづ〳〵、お待ち下さりませ。

へ言ひも終らず駈け來り、費仲師綰を止むるにぞ。

ト冀國侯直に舞臺へ來り、師綰費仲を留める。

紂王　やあ、誰かと思へば冀國侯。

妲妃　思ひがけない、兄上樣。

費仲　何故お留め、

皆々　召さるのだ。

冀國　お止め申すは外ならず、何科もなき皇后樣、殊には君の御胤を御懷胎の大事の御身、打つと言ふがあるべきか、折よく爰へ某が、參り合はせし上からは、假令君の嚴命でも、冀國侯がお止め

申す。

＼言ふに嬉しく皇后が。（ト皇后嬉しき思入にて）

皇后　よい所へ冀國侯、自らが無實の罪、推量してたもいなう。

冀國　操正しき皇后樣に、不義密通のなき事は、某承知つかまつる必ずお氣遣ひなされまするな。

＼后を勦り冀國侯、威儀を改め詰め寄りて、（ト冀國侯、皇后を勦り、思入あつて紂王に向ひ）我君には此程より、御心荒くならせ給ひ、酒池肉林の興に乘じ、孕める女の腹を裂き、又は左程の科なきものに、烈火の柱を抱かせて、非義非道の御刑罰、かく殺伐を好みたまふも、是皆妹妲妃が仕業と、誰言ふとなく世上の取沙汰、それゆゑ今日我君へ、御諫言申さんと、これへ參つてはからずも、皇后樣の御難儀を、お助け申せし冀國侯、なぜ妲妃にはお傍にゐて、かゝる振舞なさるゝを、お諫めは申さぬぞ。われが爲めにはお主たる、皇后樣の御難儀を、餘所に見なす人畜生、四百餘州の列侯へ、それがしが身の言譯。

＼取つて引据ゑる扇にて、りう／＼はつしと打ちすゑる、その手を妲妃は振拂ひ、

ト冀國侯つか／＼と二重へ上り、妲妃を引据ゑ扇にて打つ。妲妃その手を振拂ひ思入あつて、

妲妃　えゝ情ない此の折檻、お前は何も知らぬゆゑ、只自らが惡いやうに思うてなれどさうでない。皇

后樣のお爲を思ひ、蔭になり日向になりお庇ひ申して居りますに、却つてそれを恨み給ふは、お嫉み心が强いゆゑ。（ト冀國侯に向ひ、常の女の心にて言ふ。）現在兄に人でなしと、恥しめられしも誰ゆゑぞ、皇后樣、あなたゆゑ。人我につらければ、我また人につらしの譬。（トきつとなり。）さら〳〵妲妃にその樣な、心はなけれど人でなしと言はれしからは。（ト又きつとなり。）費仲、師絹になり替り、自らが拷問なさん。

〽言ふに紂王ぞく〳〵悦び、

紂王　テモ小氣味よき妲妃が一言、打つて〳〵打殺せ。

妲妃　仰せにや及ぶ。

〽立つを冀國は引き止め。（ト妲妃立掛るを、冀國侯留め。）

冀國　返す〴〵も憎き妲妃、生けておけば世界の害、兄の劍の銹となさん。

〽一徹短慮の冀國侯、腰の劍に手をかくれば、紂王妲妃を圍ひ給ひ、

ト冀國侯劍を拔かうとするを、妲妃留める。ちよつと立廻つて紂王妲妃を圍ひ、

紂王　やあ、冀國侯控へい。

冀國　はツ。（ト冀國侯ためらふ。）

紂王　たとひ汝が妹にせよ。四百餘州の主人たる、此の紂王が愛妾妲妃に向ひ、手向ひなすは無禮なるぞ。
冀國　御諚をもどくは恐れあれど、道に缺けたる妹ゆゑ、兄が成敗いたさにやおかぬ。
紂王　我を恐れずまだ〳〵申すか。それ、冀國侯を搦めとれ。
皆々　心得ました。

〽費仲、師絹を始めとして、下官も共に立掛るを、右と左りへ投げ退けて、

ト費仲、師絹、冀國侯の手を取り、平舞臺へ引きおろす。四人組附くを冀國侯投退けて、

冀國　佞人讒者の手に合はうか、馬鹿な事を。（トきつと思入。）
紂王　やあ、妲妃が兄ゆゑ容赦なすに、手向ひなさば容赦はならぬ、手づから首を刎ねようか。
冀國　さあ、それは。
紂王　手向ひなすか。
冀國　さあ。
紂王　さあ。
兩人　さあ〳〵〳〵。

紂王　命惜しくば、控へてゐよ。
冀國　もう此上は、一命捨て。
〽勢ひ込んで駈上るを袖を開いてとゞむる紂王、いらつて踏込む冀國が脇腹、さそくの當身にうんとばかり、尻邊にどうと悶絶なす。
ト冀國侯二重へ上ると、紂王これを留め、ちよつと立廻つて冀國侯を當てる。冀國侯どうとなる。
費仲 師紹　これ、息の根を留めてくれん。
紂王　やれ待て兩人、早まるな。憎いやつではあるけれど、可愛い妲妃が兄なれば、命助けていましめおけ。
費仲 師紹　畏つてござります。
〽用意の早繩取出し、高手小手に縛むれば、冀國侯は心附き、
ト兩人繩を取出し、冀國侯に繩をかける。冀國侯心附き、
冀國　えゝ、不覺をとりて繩目に逢ひしか、口惜しやなあ。
妲妃　此上は不義の相手の、西伯侯を召捕りて、きつと御詮議なされませ。
紂王　言ふにや及ぶ。それ、西伯を召捕り參れ。

下官四人　はツ。

〽はツと許りに立掛る、折柄向うに西伯侯。

西伯　お召しに及ばぬ、西伯侯姫昌、只今參上仕る。

〽禮儀亂さず西伯侯、御前へ出るを佞臣ども、それと互ひに目配せなし、搦めとらんと組附くを、心得たりと投退けて、

ト是へ唐樂を冠せ、花道より西伯侯、唐裝束、沓を履き、劍を提げ出來り、費仲、師涓四人へ目配せする。是にて四人つか／＼と行き、西伯侯に掛るを、ちよつて立廻つて、

こは何ゆゑの、此の狼籍。

○下官　やあ、狼籍とは舌長なり。

△　西伯侯に罪あるゆゑ。

□　搦めとつて參れよと、

◎　我君樣の、

四人　上意だぞ。

西伯　たとひ君の御諚にせよ、科の次第を承らねば、めつたに繩目は受けませぬ。

四人　何を。

〽又も組附く下官をば、右と左りへ投退け蹴退け、階段間近く來るにぞ、

ト西伯四人を相手に立廻りながら本舞臺へ來るを、

紂王　やあ、わが言附で搦めとらすに、西伯汝は手向ひなすか。

西伯　何しに、お手向ひ仕らん。

費仲　手向ひなさずば、

兩人　控へてござれ。

西伯　はゝツ。

〽身をへりくだり西伯侯、帝位を恐れ敬へば、

ト西伯、跡ずさりにさがり、下にゐる。冀國侯見て、

冀國　西伯侯、來られしか。

西伯　やゝ、冀國侯が繩目といひ、御懷胎の皇后樣の、此の廣庭に御座あるは。

皇后　身に覺えもない疑ひ受け、最前より雜人の、笞に打たるゝ身の悲しさ。

冀國　それゆゑ君へ某が、御諫言申せしが、害となつて此繩目。

西伯　君の御胤御懷妊ありし、御大切の御身をば、何ゆゑあつて我君樣には、
紂王　しぶとく白狀なさゞるゆゑ、それにて拷問いたすのだ。
西伯　して〳〵それは、何の科にて。
紂王　科は則ちその方と、不義密通をなせしゆゑ。
　ト聞いて西伯打ち驚き、
西伯　なに、某が皇后樣と、不義密通をなせしとは、思ひも寄らぬお疑ひ、
　ト言はせも果てず、
妲妃　いや西伯どの、人は知らず我が前で、知らぬとは言はれまい。
西伯　や。
妲妃　いつぞや月の御遊の折、清光樓での密會を、此の妲妃が行き合せ、見たを御身は忘れしか。
西伯　清光樓での密會などゝは、合點行かざる事ながら、して〳〵それは、いつの御遊に。
妲妃　あれまあ、よくもまざ〳〵しう、合點の行くの行かぬのと、その夜は秋の最中にて、月の御遊の
　その折に。
西伯　かへす〴〵も西伯が、身に取り少しも覺えはござらぬ。

冀國　跡かたもなきことを言出し、皇后様を罪に落し、おのれが后にならうといふ、是皆妲妃が企み事。

妲妃　又しても〳〵、お前が入らぬその口出し、此の妲妃が企まずとも、不義の科にて皇后様の御命断てば自らが、后になるは知れし事、その時こそは我光りで、お前に立身出世させ、大國の主人ともなるやうにと、思うてゐる、妹の心も知らずして、世上の人と同じ様に、此妲妃が企みなどゝさがなき事を言はれたら、お前の爲にならぬぞえ。

冀國　えゝ聞くも腹の立つ事のみ、小祿なれど冀國侯、妹の力で出世はせぬ、渇しても盗泉の水を呑まざる我心、不義の富貴は望みにない。

〽口惜しけれどいましめに、足摺なしてもがくにぞ。

紂王　かほどに思ふ妲妃をば、恨むはそちが心得違ひ。

師緒　われ〳〵ならば立身出世、願うてもない事だのに。

費仲　不義の富貴は望まぬなどゝ、欲を知らぬは馬鹿の内。

冀國　えゝ、うぬらが樣な佞人とは、我魂は違ふわい。

師緒　なに、われ〳〵と魂が違ふ、いや質屋の藏ぢやあるまいし。

妲妃　さあ此上は西伯侯を、拷問なして白状さしや。

兩人　畏つてござりまする。

西伯　たとひいか程おつしやつても、西伯覺えござらねば、白狀いたすいはれがない。

妲妃　覺えないと言やつても、后の腹に宿せしは、我君のお胤ならず、汝が胤といふ事は、此妲妃が占つて、疾より知つてゐるわいな。

西伯　それは如何なる奇術なるか、密會もせぬ西伯が、胤なりと言はるゝには、なんぞ慥かな證據がござるか。

妲妃　證據は汝がその胤故、左り孕みの男子にて、西伯といふ文字に似た、しかも總身に黑き痣あり疑はしくば皇后の、腹を裂いて改め見よ。

西伯　さあ、それは。

妲妃　かゝる慥な證據あれば、知らぬとは言はれまい。

西伯　證據といふは皇后樣の、お腹に宿せし御子なれば、見るに見られぬ此の場の難題。

〽是も妲妃が惡計と、知れてはあれど紂王が、國家にかへぬ愛妾ゆゑ、手ざしもならず控ふれば。

ト皇后、西伯思入あつてこらへる。冀國侯悔しき思入。

紂王　かゝる慥な證據あるに、存ぜぬ知らぬと陳ずる西伯、手酷く彼を打据ゑい。

費仲
皆々　はツ。

〽はつとばかりに立掛るを、

妲妃　いや皆の者、待ちや。

費仲　何故おとゞめ、

皆々　なされまする。

妲妃　その鐵棒より手酷い拷問、自らがしようわいの。

師緡　して妲妃の方の、

皆々　拷問とは。

妲妃　后の腹に宿せしは、此西伯が胤にして、痣ある事迄さしたれど、此の妲妃を疑ふゆゑ、その證據を見せたらば、よもや知らぬとは言はれまい。拷問替り西伯に、此の場で后の腹を裂かせ、痣のある子を見せたる上、又俗説にも言ふ如く、胞衣にも必ず印あり、兎にも角にも西伯に、腹を裂かすが打つよりも、遥かに勝りし不義の拷問。

紂王　流石は妲妃、よき工夫、それ、大俎板を是へ持て。

四人　はゝつ。

〽はツと答へて入りにける、跡に皇后涙を拭ひ、

ト四人下手へはひる。皇后思入あつて。

皇后　すりや自らが懐胎を、西伯侯が胤なりと、身に覺えもなき不義の證據に、此腹を裂かすとは、そなたは鬼か蛇かいの。

〽悔し涙に伏し給へば、並みゐる侍女もおいとしやと、共に涙にくれにける。折柄下官が廣庭へ携へ出づる大俎板。（ト皇后泣伏す。下手より四人大俎板を持ち出來り、）

四人　はツ、持參いたしてござりまする。

紂王　不義の證據に腹裂く皇后、その俎板へくゝり附けよ。

四人　はツ。

〽はツと下官が立掛るを、西伯暫しと押留め、（ト四人立掛るを、西伯留めて、）

西伯　すりや、どうあつても御懐胎の、皇后様の御腹を、

妲妃　此場で裂かすが、拷問替り。

西伯　はツ、是非に及ばぬ。

紂王　それ、く〻し付けい。

皆々　はッ。

〽情容赦も荒繩にて、泣き居る后の兩手を取り、見るもいぶせき俎板へ、八重十文字に縛るを見て、冀國侯は齒がみをなし。

ト此内西伯は是非なき思入、下官四人皇后を引立て、俎板の上へ仰向けに載せ、荒繩にて縛る。

冀國侯是を見てあせり、

冀國　かねて噂に聞きたれど、傍にをらねばかほど迄、惡逆無道と知らざりしが、たゞでもあるか御懐胎の皇后樣の御腹を裂くとは、如何なる天魔の所爲なるか。

〽二十八世つゞきたる、殷の御世の亡ぶる時節。

それと言ふのも妲妃めゆゑ、此の縛めがないならば、生け置くやつではあらざるに。

〽ちえゝ口惜しやと立ちつ居つ、足摺りなすを妲妃は見遣り、（ト冀國侯よろしく思入。）

妲妃　君へ對して無禮の兄上、疾くにも命のない所、命のあるのは妲妃のお蔭、妹のお蔭であるわいな。

冀國　えゝ、何でおのれに。

〽繩も切れよと立掛るを、費仲、師緒が押留め、

費仲　やあ、君の御前でじたばたと、無禮でござる。
兩人　控へめされ。
紂王　さあ、西伯には不義の證據、とく〳〵后の腹を裂け。
西伯　御諚ではござれども、この儀ばかりは。
妲妃　辭退いたすは不義せしゆゑ、后の命を惜しむのか。
西伯　さあ、不義ならねども臣として、主に刃が當てられませうか。
紂王　さ言ふは矢張り、わが胤ゆゑか。
西伯　全く以つて。
妲妃　疾く〳〵裂くか。
西伯　さあ、それは。
紂王　不義をなせしか。
西伯　さあ。
兩人　さあ。
四人　さあ〳〵〳〵。

紂王　よもや、違ひはあるまいが。
〽有無を言はさぬ主命に、のつ引きならぬ西伯も。（ト此内西伯侯術なき思入あつて、）
西伯　委細畏つてござりまする。
冀國　やゝ、すりや西伯には皇后様を。
西伯　四百餘州の主人たる、君の上意が背かれませうか。
〽それと言はねど五音にて、知らする忠義に皇后も、
ト西伯、冀國侯へ氣遣ひするなといふ思入。
皇后　人でなしの手に掛り、死するとも是非なけれど、忠義も厚き西伯の手に掛るのが嬉しいわいの。
西伯　とは言へ、無實の罪ゆゑに、お命捨つる皇后様。
侍△　君の御諚と言ひながら、
四人　おいとしいことでござりますわいなあ。
皇后　是れも定まる身の厄難。
西伯　お覺悟よくば。
皇后　早う殺してたもいなう。

〽死ぬるを急ぐ皇后が、歎きを餘所に紂王は、

紂王　これを肴に一獻汲まん。

妲妃　どれ、お酌いたしませうか。（ト紂王コップをとり上げ、妲妃瓶をとりて酌をなす。）

師絡　さあ、猶豫いたさず。

皆々　疾く〳〵裂かぬか。

西伯　はツ、是非に及ばぬ。（ト西伯侯立上る。）

冀國　すりや、どうあつても。

西伯　絕體絕命。

〽銳き刃に水そゝぎ、既にかうよと見えたる所へ、宙を駈けつて馳せ來る雷震。

ト西伯侯誂への劍へ水を掛け、これをしごきにて拭ひ、後ろへ立上り、向うへ思入、ばた〳〵になり、花道より以前の雷震走り出て來り、直に舞臺へ來て、

雷震　御主君、これにござりましたか。

西伯　おゝ雷震か、待ち兼ねたり、して雲中子へ賴みたる、邪正を照す照魔鏡は、

雷震　則ち持參いたしてござりまする。

妲妃　や。（ト妲妃きつと思入。）

〽さし出す御鏡押頂き、（ト雷震以前の鏡を出す。西伯侯取上げ押頂き、）

西伯　ちえゝ忝い、殷の都に妖氣立つは、まさしく年經る妖狐の障碍、この照魔鏡にて照し見よと、

雲中子より授かる御鏡。

〽聞くに妲妃は血相かへ。（ト妲妃きつと思入あつて、）

妲妃　すりや、それが照魔鏡とな。

西伯　此の場に於て照し見ん。

〽袋の紐をとく／＼と、取り出す鏡の光鋭く、本體顯はす九尾の老狐。

ト西伯侯袋より誂への鏡を出す。妲妃ちよつと袖で顏を隱す。西伯侯鏡を差附ける。これにて妲妃半面にて狐の姿になり、

さてこそ鏡に、

翼國　うつるはまさしく、

雷震　怪しき姿。

妲妃　あれエ。

四人　こりや、妲妃樣には、

〽顏を覆うて打ち伏せば、（ト妲妃袖にて顏を隱し、うつ伏しになる。腰元皆々側へ寄り、）

妲妃　俄の持病。

西伯　それぞ正しく。（ト雷震斧を持ちて三段へ踏みかけるを、紂王立身にて、）

紂王　無禮者めが。（トきつと言ふ。）

雷震　はッ。（ト控へる。）

〽妲妃が不例に紂王は、帳臺深く伴ひ入る。

ト紂王、妲妃の手をとり、きつと見得。妲妃は袖の蔭より窺ひ居る。腰元左右に並び、此見得唐樂を冠せ、屋體へ緞帳をおろし、此人數を隱す。費仲、師涓は思入あつて、

費仲
師涓　その御鏡は。

〽取りにかゝるを雷震が持ちたる斧を打ち振れば、首は左右へ飛んだりける。西伯すかさず縛めの、繩切りほどけば冀國侯。

ト此内費仲、師涓鏡をとりに掛るを、雷震立廻つて斧で首を打落す。四人はこれに恐れて逃げてはひる。西伯侯は冀國侯の繩をきり、皇后の繩をきりて介抱なす。冀國侯きつとなつて、

冀國　此上は奥へ踏込み、妲妃は元より紂王も、國家の爲めゆゑ、生けてはおかれぬ。
西伯　御尤もではござれども、急く所でない冀國侯、此の照魔鏡が手に入る上は、妖狐を見出すは瞬く内、後は我等にお任せ下され。たゞ氣遣はしきは后の御身、何卒貴殿御供なし、一先づ此場をお立退き下され。
冀國　言ふにや及ぶ、此の冀國が大恩ある皇后様、これより郷里へ御供なし、御平産遊ばすやう、御介抱いたすであらう。
皇后　危き命助かりしも、皆西伯が働きゆゑ、忠義の程は忘れぬわいの。
西伯　佞人多き館の内、斯く言ふ内も氣遣はし。
冀國　いざ、御供仕らん。
雷震　奥へ踏込み、妲妃の本體。
西伯　見出すは、これなる照魔鏡。
下官○△　西伯覺悟。（ト兩人かゝるを立廻つて、西伯、雷震引きつける。冀國侯は皇后を圍ひ、）
冀國　然らば、
兩人　西伯侯。

西伯　冀國侯。

皆々　さらば。（ト兩人を投げのけ）

〽さらば〳〵と忠臣義士、立別れ行く殷の世の、妖狐退治もゆかりある、妲妃のお百が一夢にて、覺めて跡なく。

トこれへ唐樂を冠せ、西伯侯、雷震は上手、冀國侯皇后は下手へはひる。淨瑠璃のきれ、三重大ドロ〳〵にて、この道具居所替りとなる。

（高輪大木戸の場）――本舞臺三間の間、向う石垣の小口、砂手摺、此後ろ二段に波手摺、安房上總夜の遠見、上手の塀、ぐるりと廻し、此の後ろ葭簀張りの出茶屋、片附けし體、爰に桑名屋德兵衞、やつしなり、脚絆、草鞋、やつれたる旅なり、姿お百浴衣の上ツぱり、草履旅なりにて、傍に古き菅笠二かい置く、兩人葭簀を小楯に睡り居る。下手の塀廻つて、大木戸開帳札になり、日覆より霞附きの月をおろし、總て高輪大木戸の體、よろしく道具納まる。と矢張ドロ〳〵にて、日覆より心といふ字を兩人の後ろへ引いてとり、ドロ〳〵打上げ、兩人夢の醒めたる思入にて、

お百　そんなら今のは、夢であつたか。

德兵　扨はおぬしも夢を見たか。

　ト本釣鐘、かすめて波の音、兩人思入あつて、

お百　道の勞れにとろ〳〵と、まどろむ内に見た夢は、妖狐傳の本で見た、殷の都の愛仙宮。
德兵　しかも妲妃と紂王が、不義の詮議に懷胎の、后の腹を裂くところ。
お百　醒めて思へば夢の内、お前が殷の紂王で、わたしはどうやら妲妃のやう。
德兵　諫言に來た冀國侯は、おぬしの兄の新助にて、
お百　不義の相手の西伯は、こりもなほさず能登の佐吉。
德兵　腹を裂かるゝ皐后は、女房お高に生寫し。
お百　思ひもつかぬ事ながら、長の旅にて苦勞をなし、
德兵　所謂五臟の煩ひに、
お百　こんだ夢をば、
兩人　見たこゝちやなあ。

ト兩人思入、波の音、しつとりとした端唄の合方になり、兩人思入あつて、

お百　思ひも附かぬといふものゝ、三年後にお内儀さんが能登の長尾の飯炊と、惡い事をしなさんしたを、土藏の二階で二人して、ほんにさつきの后のやうに、總身に痣の出來る程、責めた事がありましたねえ。

徳兵　お高も丁度身持ちにて、臨月近い體をば、たゞでもあるか雪降りに、すつぱだかにして追出したが、行くところもなく、おぬしが兄、肴賣りの新助が所へ行つて世話になり。

お百　間もなく產んだ男の子の、體へ疵があやかつたを、氣にして直にお内儀さんは、死なしやんしたといふ噂。

徳兵　定めておら達二人を恨んでゐたか三年忌に、其の土藏から火の玉が、出ると思ふと忽ち擴がり、家藏から屋財貨財、一時の内に灰となり、かてゝ加へて江戸へ出た、一艘の船が難船なし。

お百　仕方なく／＼河岸藏に殘つたものを賣代なし、それを路用に此の江戸へ、下る途中でその金を、護摩の灰に盜みとられ。

徳兵　かうして二人が難儀をするも、あいつの思ひでされるのか。

お百　心に忘れず見た夢も、所は違ふ唐土ながら、

徳兵　心は同じ女房の責め、

お百　これを思ふと世の中は、

徳兵　唐も日本も同じことだ。（ト時の鐘、徳兵衛氣を替へて、）そりやさうと夜が更けるに、爰で野宿もなるまいから、そろ／＼と出かけよう。

ト兩人前へ出て、

お百　さうして爰は、どこでござんす。

徳兵　品川越せば江戸と聞いたが、どこが何處やら知らぬ土地。

お百　誰ぞに聞いて見なさんせいな。

ト波の音、浮いた端唄の合方になり、上手より美濃屋重兵衞、紺の脚絆、尻端折り、麻裏草履、一本差し、合羽を肩へかけ、小田原のかし提灯を提げ出來り、

重兵　この金はどうしたか、先だと思つて行き過ぎたか、但しは跡に捜してゐるか。はて世話の燒けたやつだなあ。（ト上手へ振返り思入。兩人は下手へ出て、）

徳兵　あもし、ちよつと物が承りたうござります。

重兵　あゝ、なんだえ。

徳兵　江戸と申します所は、どこでござりまする。

重兵　なに、江戸はどこだ。（ト提灯で兩人を見て、）お前は旅の衆だの。

兩人　はい、左樣にござりまする。

重兵　今聞きなさる江戸といふのは、品川からまつすぐに、千住迄江戸と言ひます。

お百　さうして爰は、何と申しまする所でござりまする。

重兵　爰は高輪の大木戸と言つて、昔はこれから江戸だつたのだ。

德兵　御親切に有難うござりまする。

重兵　江戸も知らずに出て來なすつた、お前方は何處だえ。

兩人　はい、大阪でござりまする。（ト重兵衛兩人を見て思入あつて、）

重兵　から見たところが供もなし、若い身空の二人連れ、江戸見物か知らないが、勝手も知らぬ此土地へ、來たのは大方色戀で、生れ故郷の大阪に居られぬ譯でもあつてゞあらうが、どこを便つて來なすつたのだ。

德兵　御推量の通り大阪に、居られぬ譯がござりまして、江戸へまゐりは參りましたが、知邊とてもござりませず。

お百　牛込とか申す所に、尋ねる人がござりますから、それを便つて參りますもの。

德兵　此の高輪から牛込迄、どの位ござりますな。

重兵　そりやあ何にしろ、とんだ事だ。此の高輪から牛込迄は三里もないが二里餘り、もう今夜も四つ過ぎだから、所詮これから行つたところが、お前方にやあ道は知れぬ。それよりは跡へ歸り、

今夜は樂に品川へ、泊つてあしたゆつくりと、尋ねて行つた方がよからう。

徳兵　有難うはござりますが、品川へ歸りましても、泊ることが出來ませぬ。

重兵　なに、泊ることが出來ぬとは。

お百　お恥しうござりますが、旅籠錢がない、旅籠錢がござりませぬわいなあ。

重兵　え、今夜泊る旅籠錢がない、そりやあ氣の毒なことだ。土地の勝手も知らぬ二人、爰らにまごごしてゐると、ぽん引きといふ者があつて、親切らしく連れて行き、身ぐるみ剝いだその上に、女郎に賣つて金をとる、ふてえ奴が幾らもある。江戸の者はかゝらぬが、旅他國から來たものはその手にかゝつて身を賣られ、難儀をする者がいくらもある。呼び止められたが緣の端、そんな難儀に逢はねえやう、品に寄つたらお前方の力になつて進ぜませうが、生れ故郷の大阪は、何といふ所で、どういふ譯で出て來なすつたか、一通り話しなせえ。

ト重兵衛床几を出し、腰をかける。兩人嬉しき思入にて、

徳兵　見ず知らずの私共の、力になつてやらうとおつしやる、有難い思召しのあなた樣ゆゑ、何事も包み隱さず申しまするが、元大阪の川口で、私は桑名屋の徳兵衛と申しまする廻船問屋でござりまするが、不仕合せがつゞきまして、家藏を燒き失ひ、その上親の代からして、持ち傳へた一艘の

船が遠州灘で難船なし、世間の手前も外聞惡く、いつその事江戸へ出て、知らぬ土地で暮さうと
殘りの品を賣代なし、

お百　百兩餘りの金を持ち、それを路用に下る途中、護摩の灰とも知らずして、連れになつたその男に池鯉鮒の泊りでその金から、持つて參つた着換への包み、脇差まで盗み取られ、仕方なく〱一枚づゝ、着てゐる着物を脱ぎまして、胸につかへし大井川、箱根も越えて江戸近く、

德兵　もう一泊り、二泊り僅かな所をしまつして、川崎迄參りましたが、晝の旅籠と渡し錢で、一錢殘らず遣つてしまひ、今夜泊れば是れを脱ぎ、裸にならねばならぬ仕儀。

お百　女心の愚癡ゆゑに、明け暮れくよ〱思ふのは、

德兵　家藏持ちし身の上が、

お百　かゝる姿になり果てし、

德兵　世にも哀れな二人が身の上、

お百　御推量、

兩人　なされて下さりませ。

ト涙を拭ひながらぢつと思入、重兵衛氣の毒なる思入にて、

重兵　そりやあ長の道中を、嘸難儀をしなすつたらう。錢がなくば旅籠錢を、お前方に上げてもいゝがこれから歸るも無駄なこと、わしは汐留片町で、美濃屋重兵衛といふものだが、爰から道も僅かゆゑ、今夜はわしが內へ來て草鞋を脫いで泊りなさい。

德兵　えゝ、すりやお泊めなされて下さりますとか。

重兵　捨つる神ありや助ける神さ、

德兵　旦那樣、

兩人　有難うござりまする。（ト嬉しき思入。）

重兵　何の禮に及ぶものか、一と晩や二晩は遠慮なしに泊つてゐて、その內ゆつくり牛込へ見物ながら行くがいゝ。然しかうした世話をしても、いま話したほん引なぞぢやア、決してねえから案じなさんな。

お百　どうしてまあ、あなた樣が、そんな事をなされませう。

德兵　人は見かけで知れまする。

重兵　さう言はれて言ふではないが、人の難儀が見てゐられず、力になると言つたからは、御判で來たか知らねえが、御關所のある東海道、あすが日どんな難儀が來るとも、何處が何處迄引受けて、

此の重兵衞が脊負ひ込む氣、夜目にも見ゆる品川の、沖にかゝつた親船に乘つた心でゐて下せえ。

德兵　かういふお方に思はずも、爰でお目に掛つたのは、

お百　なき親達の導きで、

德兵　誠にこれが地獄で佛、

お百　こんな嬉しい、

兩人　ことはない。(ト時の鐘を打込む。)

重兵　おゝ、いつの間にか九つだ。更けない内に出かけませう。(ト立上る。)

德兵　お供いたすでござります。

お百　そのお提灯は私が持つて。

重兵　なに、それにやあ及ばねえ。(ト此時提灯の灯消える。)

お百　おや、灯が消えましたか。(ト重兵衞思入あつて、)

重兵　風も吹かぬに提灯の、消えたはどうやら。

ト重兵衞思入、月隠れる、うすドロ〳〵になり、よき所へ海坊主すつぽんにて出るを、重兵衞見て、

や、怪しき坊主が。

德兵　え。

お百　あれエ。

ト重兵衛に縋る。海坊主消えて、ドロ〳〵が浪の音になり、月出る。

重兵　月の光に、

德兵　雲晴れて。（ト重兵衛お百の手をとり、ちつと顏を見て、）ても美しい。

お百　え。

ト重兵衛お百を振拂ひ、合羽を肩へかける。お百は振りかへり、重兵衛を見る。これを木の頭

重兵　あゝ、いゝ月だなア。

ト重兵衛お百に見とれる。兩人は嬉しき思入よろしく。波の音佃にて、

ひやうし幕

四幕目

上尾宿棒鼻の場
同八町繩手の場

〔役名——願禮作兵衛、和尚次郎、役僧日丈、判人傳八、酒屋の亭主、丁稚、駕籠舁、願禮娘お衣等。〕

（上尾宿棒鼻の場）——本舞臺三間の間、藁葺きの庇、向う板羽目、下の方へ寄せて酒樽を積みたる注

ぎ場の書割下手の前づら、一間の腰羽目、此上へ酒肴飯と記せし半障子を立切り、内に煮しめを並べし屋體、燗銅壺杯よろしく、舞臺前、ずつと上手に中仙道上尾宿といふ榜示杭、下手に杉の葉の看板、日覆より松の釣枝、總て立場居酒見世の體。中臺に列人傳八、かつぱ拵らへ、脚絆、草履がけにて、駕籠舁き○、△を相手に酒を呑んでゐる。前の床几に旅人二人、酒を呑み、丼飯などを喰つてゐる。酒屋の丁稚給仕をしてゐる。下手に雲助一、二、三、四、何れも雲助の拵へにて息杖を持ち、立ちかかり居る。下手屋體の内に酒屋の亭主、着流し、前垂がけにて、肴拵へをしてゐる。此の模様馬士唄にて幕明く。

旅○　おい〳〵小僧や、爰は幾らになる。

亭主　ソレ、はなのお客様が御勘定とおつしやるよ。

丁稚　へい〳〵、御酒が二つに燒きが一杯、御膳が半替りでおすいが二杯、七百十二文でござりまする。

旅△　かうつと、それぢやあ二つ割にすると、三百六十四文づゝだ。

旅○　何でも旅では、銘々勘定がようござります。（ト兩人錢を出して、勘定をする。）

雲○　もし、あなた方はお下りと見えまするが、大宮迄お供は出來ますまいか。

旅△　どうして〳〵私共は、行き大名の歸り乞食で、切り詰めの道中だから、なか〳〵駕籠になんぞは

乗られない。
旅○ 一杯やつた勢ひで、もう一と息急ぎませう。（ト是にて両人立上り、）
○△ こりやあ大きに、お世話でござりました。
亭主 有難うござります。
丁稚 いや、お歸りイす。（ト旅の○△両人は上手へはひる。）
雲△ いや、今日の樣な仕事の出來ねえ日はねえが、場所でもかへて張つて見ようか。
雲□ なアに、止すがいゝ、こんな日にやあ、何處へ行つたとて同じ事だ。
雲◎ どうか旨え仕事をして、女の處へでも行つてやりてえもんだ。
雲○ こう、女と言へば今しがた、中の立場で見かけた巡禮、すてきにいゝ娘だ。
雲△ さうよ、親父とたつた二人連れだつたが、あいつを女郎にでもつくつた日にやあ、すてきな代物が出來る。
ト此内判人傳八、中臺に酒を呑んでゐて是を聞き、
傳八 あすこに居る人達は、大分暇な樣子だが、こつちへ呼込んで一杯呑ましてやるがいゝ。
駕○ それは有難うござります。からく みんな悦ぶがいゝ。おらたちがお供をした旦那が、一杯呑ま

してやるとおつしやらア。

雲□　何だ親方が吞ませて下さるとか。そりやあ有難うございます。みんな來てお禮を申せく。

三人　へいく、これは大きに有難うございます。

傳八　おい御亭主、酒を熱くして、もつと附けておいてくんなせえ。

亭主　へいく、畏りました。御酒が二升かゝるよ。

丁稚　おいく。（トちろりにてよろしく燗を附けること。）

傳八　然し、爰ぢやあ狹えから、そつちの方へ持ち出すとしよう。

雲皆々　それがようございます。

ト皆々手傳ひ、酒肴を持ち前の床几へ出でよろしく床几にかゝり、酒を吞むことあつて、

傳八　ときに、今ちらりと聞いたが、お前方が見かけたといふ、その巡禮の娘といふは、年頃はいくつぐらゐだえ。

雲◎　左樣さ、なんでも年の頃は十七八だが、今當世といふ顏で、よつぽどいゝ娘でございました。

傳八　さうかえ、どうかそんな代物を、買出して行きてえものだ。

雲△　何さ、此親方は女郞のお世話をなさる、江戸の判人さんだわな。

傳八　さうしてその巡禮といふのは、もうよつぽど行つたかね。

雲○　いえなに、今しがたの事でございますから、まだいくらも行きやあしますまい。

傳八　なんと、ものは相談だが、その巡禮を見てえものだ。

雲□　そりや、譯はございません、なんとかそこは嘘をついて、爰へ連れて來ませうよ。

傳八　もし又それがはなし合ひで、奉公人にでもなる日にやあ、お前方にも禮はしつかりだ。

雲◎　そいつア耳寄りだ、それぢやあ親子の巡禮に、駕籠をすゝめておどしをかけ、爰へそびいて來ませうよ。

傳八　まあ、行くもいゝが前祝ひに、大きなもので引つかけて行くがいゝ。

雲○　いえなに、連れて來てからゆつくりとやります。

傳八　それぢやあ御苦勞ながら、行つて來て下せえ。

四人　ごれ、一ツ走り行つて來ようか。（ト上手へはひる。傳八跡を見送りて、）

傳八　こいつアいゝ事を聞出したが、どうかうまくゆけばいゝが。

駕〇　なあにお案じなさる事はございません、あいつらが行けば、きつと連れて來るに違えございません。

駕△　高が向うは娘と年寄り、話のわからねえその時にやあ、引つさらつても連れて來ませう。

傳八　少々無理な仕事をしても、玉がよけりやあ話し合で、どうか相談をつけてえものだ。

ト亭主ちろりを持つて來て、

亭主　はい、つきましてござります。

傳八　いや、ついたとはいゝ辻占だ。

ト三人酒盛りよろしく、やはり馬士唄になり、花道より和尚次郎、着流し三尺帶、尻はしをり、脚絆がけ頰冠りにて出來り、花道にて、

次郎　晝時分からごろ／＼と、遠くの方でやつてゐたが、すてきに雲行が早くなつて來た、どうか一雨かゝりさうだ、雨具は持たず笠はなし、是から先は上尾の原、降られた日にやあずぶ濡れだが、どうか降らねえその内に、泊り迄やツつけてえものだ。

トやはり右の唄にて、本舞臺へ來る、傳八次郎を見て、

傳八　もし、そこへ行きなさるのは、次郎さんぢやあねえか。（ト是にて次郎振返り、）

次郎　おゝ誰だと思つたら傳八さん。いや、とんだ處で逢ふものだ。（ト頰冠りをとる。）

傳八　まあ、兎も角も爰へおかけなせえ。

次郎　それぢやあ、御免なせえ。（ト床几へかける。）
丁稚　御酒でござりますか、御膳でござりますか。
傳八　なに、こりやあ俺の連れだから、もつと酒をつけておいてくれ。
丁稚　へい〳〵、御酒が一升かゝります。（トちろりにて燗をすることよろしく。）
傳八　さうして次郎さん、何處へ行きなさるのだ。
次郎　傳八さん聞いてくんねえ、龍の口ぢやねえけれど、此春からの大御難で、出るとはとられ〳〵、すつかり足だらけで顏を出すことも出來ねえから、此の熊谷の在方に、以前のおれの朋輩弟子が今一ケ寺を預かつて、相應に暮してゐるゆゑ、それへ便つて無心を言はうと、行つた所が生憎に本山へ行つた留守中で、無駄足をして歸るのだが、さうしてお前はどこへ行くのだえ。
傳八　わつちやあ根津の相模屋の旦那と、伊香保の方へ湯治がてら、玉を捜しに出かけて來たが、次郎さん、何ぞいゝ奉公人の心當りはあるめえか。
次郎　さし當つて心當りもねえが、今言ふ通りの譯だから、女房でも持つてゐりやあ、賣つても凌ぎを附ける氣だが、何を言つても赤貧一本、實に弱つてゐる所だ。
傳八　もし、さうなる時にやあ、酒でも吞んで、景氣を付けにやあいかねえから、まあゆつくりと吞ん

で行きなせえ。
次郎　それぢや一杯やつて行かうか。(ト酒を呑むことよろしくあつて、)
傳八　さうして次郎さん、是からお前江戸へ歸んなさるのか。
次郎　そこいら中足だらけで、江戸へ顏出しも出來ねえから、これから常陸の方へ赴いて、金の算段をしにやあならねえ。(ト丁稚空を見て、)
丁稚　やあ、大層空が曇つて來たが、夕立でもかゝりさうだ。
次郎　どれ、降らねえ内に出かけようか。(ト立上る。)
傳八　まあ次郎さん、いゝぢやあねえか。
次郎　さう落着いてもゐられねえ。(ト腹掛の隱しより二分金を出し。)おい御亭主、是で勘定してくんねえ。
傳八　これさ、詰らねえことをしちやあいかねえ、お前に勘定させて濟むものか、勘定はわつちがするから、そりやまあ引込ましておきなせえ。
次郎　なアに、どうせおれも一杯やりてえ所だ、まアおれに拂はしてくんねえ。
傳八　はて、不斷なら兎も角も、今言ふお前も御難の所、殊に是から旅を抱へ、無駄をさせちやあわつちが濟まねえ、まあそつちへしまつておきなせえ。

次郎　それぢやあ氣の毒だが、今日は御馳走にならう。

傳八　どうぞさうしてくんなせえ。

次郎　それぢやあお前も隨分達者で。

傳八　そんなら次郎さん。

次郎　傳八さん。

傳八　ゆるりと江戸で、逢ひませう。

次郎　いや、とんだ幡隨長兵衞だ。

ト馬士唄になり、次郎上手へはひる。此時床几の上へ、かます煙草入を忘れて行く。皆々心附かず。

駕〇　もし親方、今のお若いお方は、なんでも遊び人といふ拵へでございますね。

傳八　ありやあ和尚次郎といつて、江戸で名うてなごろん坊だ。

駕△　さうでございますか、道理で錢放れがいゝと思ひました。

亭主　へえゝ、それぢやあ今のお客樣は、江戸の遊び人衆でございますか。江戸の衆はどこかあく拔けて、直に樣子で分ります。

傳八　あれでも元は深川で、立派な寺の役僧だつたが、思案の外の女犯があらはれ、寺をかぶつて江戸

にもゐられず、それから久しく相模の方へ行つてゐたといふことだが、惡い事にやあ染り易く、いつの間にか遊びを覺え、以前が坊主の所から、和尚次郎と渾名を呼ばれ、今ぢや遊び人の賣出し男だ。

亭主　へえ、左樣でござりますか、成程さうおつしやれば、どこか人柄のよい所があると思ひました。

傳八　何と言つても出がいゝから、何處か樣子が違ふのよ。

駕○　そりやあさうと、あいつらもう歸つて來さうなものだ。

駕△　から手間どるところを見ると、親父が野暮でも言つてゐるか。

傳八　何にしろそこらまで、出かけて行つて見ようぢやねえか。

○△　そんなら、さう致しませう。

傳八　おい、勘定は幾らになるえ。

亭主　へい、一分と七百文でござります。

傳八　いや、安いものだ。（ト金を出して、）おい、つりはいゝよ。（ト一分二朱を出す。亭主とつて、）

亭主　是れは有難うござります。まあ、御ゆるりとなされませ。

ト此内駕籠舁兩人、下手にある駕籠を持つて來て、

兩人　さあ、お召しなせえ。

ト是にて傳八駕籠へ乘る。亭主件の次郎の忘れし煙草入を見附け、

亭主　もし、お忘れものがございます。（ト出すを、傳八とつて、）

傳八　おゝ、こりや今の和尚次郎のだ。

亭主　それぢやあ今のお客樣が、忘れておいでなすつたのでございますか。

傳八　遠くは行くめえ、跡から追ツ附き、

駕兩人　それぢや、急いでやりませう。

傳八　どうぞさうして下ツし。御亭主、大きにお世話になりました。（ト垂をおろすを、道具替りの知せ。）

亭主　是れは大きに、有難うございます。

ト駕籠舁兩人、駕籠を擔ぎ上げる。丁稚皿に殘りし肴をつまんで喰ふ。此の模樣馬士唄にて道具廻る。

（同八丁繩手の場）――本舞臺後ろ淺黄幕、向う一面の茅原、眞中に一間、常足の二重、草土手の蹴込み、此上に庚申塚、道祖神、地藏尊などよろしく、下手に松の大樹、日覆より同じく釣枝、總て上尾の原八丁繩手の體、爰に作兵衞白髮鬘、笈摺やつしなりにて小さな葛籠を、草土手の上へおろし、立

ちかゝりゐる。傍にお花島田鬘、同じく順禮にて立ちかゝり居る。是を以前の雲助〇、△、□、◎左右より狹み立ちかゝり居る。此の模樣、禪の勤めにて道具留る。

雲〇　これさとつさん、そんな強情を言はねえで、素直に駕籠へ。

四人　乘んなせえな。

作兵　お前方もめつさうな、見なさる通りの坂東巡禮、一錢二錢の手の內を、貰つて道中するわたしが何で駕籠に乘られうかいの。

お花　もし父さん、今にも降つて來さうゆゑ、早く行かうぢやないかいなあ。

雲△　それ見ねえな、今にも降つて來さうだから、駕籠へ乘つて行きなといふのだ。

雲□　錢がなけりやあたゞでもいゝから、うんと言つて乘つたがいゝやアな。

作兵　その思召しは有難いが、產れてからまだ駕籠なぞへ、乘つたことがござらぬゆゑ、却つて步く方が勝手でござるわいの。

駕◎　それ程手前が厭ならば、無理に乘せようとは言はねえから、そのお娘を乘せてやんねえ。

四人　さあ〳〵姉エ、乘つて行きねえ〳〵。

お花　いえ〳〵私も步く方がようござります。どうぞ堪忍して下さんせいなあ。

雲〇 これさ、何も錢を取らうといふのぢやなし。跡先長い此の原中、降られたら難澁だらうと、後生の爲めに乘せてやるのだ。さあ〳〵遠慮をせずと、

四人 乘んなせえ〳〵。（ト無理にお花の手を取るを、作兵衞割つて入り）

作兵 あゝこれ、待たつしやれ。厭ぢや言ふを無理無體、駕籠へ乘せようと言はつしやるは、そりやあお前方が無理といふものぢや。

雲△ 無理であらうが何であらうが、かう言ひ出したら。

四人 乘せにやあならねえのだ。

作兵 最前からの樣子といひ、合點の行かぬお前方、どうやら胡散な、

雲□ 何だおらつちが、胡散だと、これ、胡散とは何が胡散だ。その譯を聞かせてくれろ。

雲◎ さうだ〳〵、足弱連れの巡禮だから、手の內代りに二人を、たゞ駕籠へ乘せてやらうと言ふのを胡散だとは、何といふ言ひ草だ。

雲〇 いゝわ、胡散だと言やあがつたからは、こつちも胡散な働きをしにやあならねえ。

雲△ 四の五のご面倒だ、娘はおれが連れて行くのだ。

ト お花を引立てにかゝるを、作兵衞留めて、

作兵　むゝ、扨はわいらは言ひがけをして、此娘をば勾引すのぢやな。

四人　えゝ、きり〳〵そこを放しやあがれ。

作兵　さう聞く上は尙の事、年こそよつたれ此の作兵衞、うぬらに娘を渡さうか。

雲〇　えゝ面倒な、たゝんでしまへ。

三人　合點だ。

ト禪の勤めになり、作兵衞杖にて打つてかゝるを、四人は息杖にてよろしくあしらひ、わざと下手へ逃げてはひる。作兵衞是れを追つかけてはひる。お花跡に殘り、作兵衞を案じる思入にて、

お花　あゝもし父さん、よい加減にしなさんせいなあ。長居をしなさんして、怪我でもしてはならぬぞえ。あゝこれ、勝手も知れぬ原中に、日は暮れかゝる雨は降りさう、心細うてならぬゆゑ、早う戻つて下さんせ。あゝ案じられる事ぢやなあ。

ト下手より雲助□◎とつて返す、お花是を見て、

やあ、お前は今の。（ト逃げにかゝるを、）

兩人　どつこい、逃がしてなるものかえ。（ト雲助◎お花を後ろより抱きしめる。）

お花　あれエ、父さん、早う來て下さんせいなあ。

雲□　えゝ、やかましい靜にしろ。
雲◎　から、なんだかおつな氣持になつたが、ちよんの間の念佛講はどうだ。
雲□　巡禮だけに念佛講もよからう、爰らがつけめだ、やツつけろ。（ト兩人してお花を捕へる。）
お花　あれエ〳〵。

トもがくことよろしく、矢張りかすめて禪の勤め、上手より以前の和尚次郎出來り、お花のわめく聲を聞きすかし見て、扨はといふこなしあつて、此中へ割つて入り、兩人を投げのける。これにてお花癪のさし込む思入にて、うんと倒れる。雲助□、◎軆の痛む思入にて起上り、次郎を見て、

雲□　や、わりや見なれぬ若い奴、何でおらツちの、
兩人　邪魔をするのだ。
次郎　やかましいやイ、盜人めら、今此の宿の御代官が、跡から爰へお出でなさらア、二人とも動きやあがるな。

ト是にて兩人びつくりして、

雲□　なに、御代官が爰へ來るとか。
雲◎　そいつア爰にやあゐられねえ。（ト逃げにかゝるを、）

次郎　えゝ逃げやあがるな、待ちやあがれ。（ト下手へ逃げてはひる。次郎跡を見送りて、）

兩人　どうして逃げずにゐられるものか。

次郎　と言つて騙したものだ。いや、馬鹿な野郎もあるものだ。（トこちらへ來て、）おい、ねえさん、もう何も怖いことはねえ、あいつらは逃げて行つてしまつた。（トお花の體を見て、）何だ、こりや巡禮だな。おゝ、氣を失なつてゐる樣子だ。はゝあ、今の奴等に取り卷かれ、ハツと思つて癪がさし込み、取りつめたと見える。何にしろかゝりあひだ。どれ呼びいけてやらうか。（トお花を介抱しながら、）おゝい、巡禮の女やァい。（ト呼生けながら顏を見て、）とつぷりと日が暮れたので、はつきり顏は分らねど、どうか女もよさゝうだが、金の工面も鶍となり思案に暮れた歸り道、かういふ娘に出ツくはすとは、さつき逢つた傳八に、こいつを賣つて金にしろといふ天道樣のお授けか、何にしろかうやつて胸先を撫でる手の先に、小さな乳の觸るといひ、こいつア謀叛が起つて來たわえ。

ト誂への合方、薄くドロ〳〵の樣な風の音になり、次郎お花を抱きしめ、頰ずりなどする事よろしくあつて、此内お花心附き、びつくりなして次郎を突退け、

お花　えゝ、ごうぞ堪忍して下さんせいなあ。（ト是を聞き、次郎びつくりして、）

次郎　や、さういふ聲は、
お花　どうやら、覺えの、
次郎　お花ぢやねえか。
お花　日章樣。
次郎　ても、思ひがけねえ、南無阿彌陀佛々々。
　ト早めたる一つ鉦になり、次郎に寄らうとするを、幽靈だといふ思入にて、飛退いて手を合せ、
お花　南無阿彌陀佛々々。（ト頻りに拜む。次郎合點の行かぬ思入。）
次郎　なんだかをかしな素振だが、きやつでもありやあしねえか、それにしても、よく化けたなあ。
　ト眉毛へ唾を附け狐だといふ思入。お花も思入あつて、
お花　そんなら、わたしや氣を失ひ、冥土とやらへ來たゆゑに、戀しいあなたに逢はれましたか、日章樣、よう迷うてゐて下さりましたなあ。
次郎　こいつアいよ〳〵をかしいが、本物か本物でねえか、一番樣子を聞いて見よう。これお花、どういふ譯で以前に替り、こんな姿で爰へ來たのだ。
お花　さあ、あの折身を投げ死ぬところを、白魚船の四ツ手網へ、かゝつて命を助けられ、死ぬにも死

なれぬ様になり、仕方なく〳〵生延はり、あなたの菩提を弔ふ爲め、父さんと二人して、坂東巡禮に出ましたが、思はぬ今宵の災難で、あの世へ來たが身の仕合せ、あなたのお目にかゝつたのが、何より嬉しうござんすわいなあ。

次郎　それぢやあ矢張りあの時に、お前も命を助かつたのか。（ト傍へ寄らうとして、）どつこい、油斷はならねえわえ。

お花　さうして今では、日章樣には、どこにおいでなされまする。

次郎　久しく青山の六道の辻に、知るべがあつて隱れてゐたが、此頃は又佛店へ來て、友達の所に遊んでゐるのよ。

お花　六道の辻から、佛店へござんしたとあるからは、極樂にござんすのかいなあ。

次郎　どうして〳〵極樂どころか、怨靈の鬼に責められ、内にもゐられず爰らまで、迷つて步く位だから、樂な事は少しもねえ。

お花　それでは鬼に責められて、迷つておいでなさるとあれば、地獄においでなさんすか、おいとしいことでござんすなあ。

次郎　ほんに此頃の苦しみは、地獄も地獄八寒地獄の苦しみだ。

お花　どうか極樂へお出でになることは、出來ませぬかいなあ。(ト是にて次郎心附き、)

次郎　なに、極樂へ行くことは出來ねえか、お前はおれを、何だと思つてゐる。

お花　幽靈でござんせうがな。

次郎　何を馬鹿な事を言ふのだ。おらア幽靈ぢやねえよ。

ト此時知らせにつき、日覆より月をおろし、お花あたりを見て、

お花　ほんに冥土と思つたも、矢張り爰は元の原、そんならわたしや死なぬのかいなあ。

次郎　お前が死んだと思つたは、氣を失つてゐたからだ。

お花　それではお前も、幽靈でなく、

次郎　上尾の原ゆゑ狐だと、思つた娘は矢張りお花。

お花　幽靈でないならば、あなた足がござんすかえ。

次郎　あるのねえのと側ぢやう、足だらけにしたばつかりで、

お花　え。

次郎　何さ、それ見なせえ。足は此の通りだ。(ト足をまくつて見せる。)

お花　やれ〳〵、それで落着きましたわいなあ。

次郎　いや、とんだ間違ひもあるものだ。

ト此時下手より以前の作兵衞出來り、此體を見て、下手の松の蔭へ忍ぶ。お花次郎の樣子を見て、

お花　さうしてあなたはお頭から、お身裝までが變りましたが、どういふ事にて、お命助かりいづくにおいでなされました。(ト是にて次郎言ひ兼ねる思入あつて、わざと眞面目になり、)

次郎　さあ、合點の行かぬは尤もぢやが、あの時わしも身を投げて、死なうとしたを不思議にも、命助かりながらへしが、お前が死んだと思ふから、矢張り菩提を弔ふ爲、所々方々をごろ附き歩き、いや靈場參りに歩く內、盡きぬ緣にて不思議にも、危ふい場所へ通りかゝり、難儀を救ふも佛の導き。(ト此時ばた／＼になり、作兵衞松の蔭より出て、)

作兵　娘、爰にをつたか。

お花　おゝ、お前は父さん、よう戾つて來て下さんしたなあ。

作兵　やあ、あなたは日章樣ではござりませぬか。

次郎　やあ、そなたは親の作兵衞どの。

作兵　雲助めを追散し、戾つて見れば男と二人、なにやら話をしてゐるゆゑ、合點行かずと松蔭で、委細の譯は承りましたが、此世においでなさらぬと、思ひしあなたも御無事にて、お久し振りに

てお目に掛り、こんな嬉しい事はござりませぬ。

次郎 いやもう、若氣とは言ふものゝ、出家の身にてあるまじき、こなたの娘をそゝのかし、面目次第もござらぬわい。

作兵 あゝもし、その御斟酌には及びませぬ。一旦身を投げ死ぬる身も、互ひに命助かりて、又もや爰でお目にかゝるは、前生からの深い御緣、あなたの外には二人と夫は持たぬと菩提の爲め、巡禮に出たこの娘、どうぞ不便と思召して、行末長う女房に、持つてやつて下さりませ。

お花 あゝもし父さん、お前ばかりがその樣に、勝手な事を言はしやんしても、以前と違うてあのやうに、お還俗をばなされたからは、定めて今ではお內儀さまが、出來てゐるかも知れぬわいなあ。

次郎 これは又思ひもよらぬ、今もそなたに言ふ通り、菩提の爲めに靈場を、廻つて步く此の日章、一旦破戒の身となりて、還俗をしてごろついたが、いやさ五年十年經たうとも、そなたへたつる心中に、一生一人でゐる氣なれば、なんで女房を持たうぞいの。

お花 そんなら矢張りあなたにも、それ程にまでわたしをば、お思ひなされて下さりましたか。ちえゝお嬉しうござりまする。

作兵 そのお優しいお心ゆゑ、娘が見込んで惚れたのも、こりや尤もな事ぢやわい。

ト是にて次郎、お花を賣つて凌ぎを附けようといふ思入あつて、わざと眞面目になり、

次郎　いやなに、作兵衛どの、此の日章も唯今迄、お花どのが死んだと思ひ、何をする氣もなかつたが今日計らずもめぐりあひ、以前に變る日章へ、女房に下さる上からは、丁度幸ひこれから直に、いやさ、幸ひ伯父が甲州で、書物屋をしてゐれば、これへ便つて此身を固め、書物屋でも出さうと思ふが、どういふものでござらうの。

作兵　それは結構な思召し、さういふ事ならこれから直に、娘をあなたへ上げませう。年頃な娘をば連れて歩くは心遣ひ、あなたへ上げれば私も、まことに安心いたしまする。

次郎　それは早速の御承知、千萬、忝うござるが、然しこれからこなたは一人で、心細くはござらぬか。

作兵　いえ、その御心配には及びませぬ。あなたもかねて御存じの、まだ此上の姉がござりますれば、これへ便つて又元の、仕馴れた稼業の花屋でも、初めて氣樂に暮しまする。

次郎　さういふ事なら何れ又、伯父の所へ此身を落着け、見世でも出したその時は、早速甲府へ呼び寄せて、今の恩義を返さうわいの。

作兵　又私も何れへなと、落着き次第手紙に認め、甲府のお家へ出しますが、さうして先きのお名前

はな。

次郎　さあ、その先きは、おゝさうだ、所は甲州八日町の書物屋で、甲州屋國右衛門といふがわしの伯父、そこ迄手紙を出して下され。所で古い見世ゆゑに、誰知らぬものもござらぬ。

作兵　よろしうござります、しかと承知いたしました。

ト作兵衛腰より矢立を取出し、所書を留める。矢張馬士唄になり、上手より以前の判人傳八、駕籠に乘り、是れを駕籠舁兩人擔いで出る。傳八次郎を見て、

傳八　おゝ次郎さんか、お前爰にゐたか。

次郎　おゝ傳八樣。（ト言ひかけ心附き、氣を替へ）いや傳八どの、先刻はいかい馳走に預かり忝うござる。

ト是にて駕籠をおろし、傳八駕籠より出て、お花を見て、

傳八　や、こりや慥かにさつき話の。

お花　え。

傳八　いやさ、さつきお前が休んだ立場に、煙草入れが落ちてあつたから、お前のだらうと思つて持つて來てやつた。（ト以前の煙草入を出す。）

次郎　ほんに違えねえ、そのてつかを、いやさ、先刻立場で休息して、失念のいたした煙草入を、わざ

わざお屆け下されしとか。それは近頃お世話でござつた。

ト煙草入をとつて懷中する。

傳八　これさ次郎さん、何だな、そんなにしかつめらしく、ほんにお前も常談ものだぜ。

次郎　あゝこれ、傳八どの、今でこそ還俗して、かやうな形になつてをれど、是でも以前は一ヶ寺の役僧をも勤めた日章、さう粗略には。

傳八　これさ、大概にしねえな。

次郎　はて、人の手前も、いやさ、人は禮儀が大事でござるぞ。

ト作兵衞やお花が居るゆゑ、賴むといふ思入よろしく、傳八呑み込み、

傳八　ほんに私としたことが、ついがさつな生れゆゑ、物言ひがぞんざいでなりませぬ。日章様、どうぞ堪忍しておくんなせい。

次郎　いえ、その御挨拶では痛み入ります。

傳八　ときに、爰においでなさる姐さんは、お前さんの知つたお娘でござりますかえ。

次郎　これなる二人の巡禮どのは、以前私が寺にゐた折、門前にゐた花屋の娘、傍にゐるのが親御でござる。

傳八　はゝあ、それぢやあ不斷話に聞いた、花屋の娘といふは此娘か、こいつアすてきな玉だ。
次郎　え。（ト言つては惡いと思ひ入。）
作兵　なに、玉とおつしやりまするは。
傳八　さあ、わつちが玉と言つたは、おゝそれ〳〵、さつき日章樣の話に聞いた、珊瑚珠の玉、ありやすてきなものだね。
次郎　えゝ、珊瑚珠とは。
傳八　はて、お前も物覺えの惡い、それ、さつきの玉よ。（トお花へ目くばせをする。）
次郎　成程、さつきの玉でござるか。何とあの玉を賣らうと思ひますが、求めるお氣はござらぬかな。
傳八　そりやあ隨分買ひませうが、さうして、どの位でお賣りなさるのでござります。
次郎　さあ、何を隱さう此娘を、これなる親御と話合ひで、わしが妻に貰うたれば、何ぞ拵へてやりたいゆゑ、これの簪一本ぐらゐに。
傳八　さうさ、年一杯なら、いやさ、目一杯に買つたらば、その位にはなるだらう。
次郎　そんなら話をいたさうから、まあ兎も角も其の玉の、ある所まで行つて下さい。
傳八　どうで遊山の旅なれば、そんなら御一緒に行くとしませう。

作兵　もし日章様、さうして此のお方様は。

次郎　これは以前講中の、お世話人をなされた御仁ぢや。

傳八　もしお父さん、お前が門前においでの時分は、ちよく／＼お目にもかゝつたが、お久しぶりでござりましたね。

作兵　へい、左様でござりましたか、こんこお見それ申しました。御免なされて下さりませ。

傳八　はい／＼、さうして聞きやあ娘御を、此の次郎さんにおやんなすつたさうだが、いゝ御料簡でござります。いやもう、此の日章様とは御出家の時から、お馴染だが、こんな物堅い人はござりません。先づ第一に酒が嫌ひで勝負事が嫌い、女郎買ひが嫌ひで朝寐が嫌ひ、ほんに稼ぎ一三昧といふ人だ。かういふ人のお内儀さんになりやあ。娘御も仕合せだが、お前も安心といふものでござります。

作兵　へい／＼、有難うござります。

傳八　そんならかうしませう、わたしが乗つて來た此の駕籠が空いてゐるから、是へその娘をお乗せなさるがいゝ。

作兵　それは御親切に、有難うござります。

次郎　そんなら夜路の事なれば、駕籠をばこちらへお譲り下さい。
傳八　さあ、お安い御用だ。お乘せなさるがいゝ。
お花　そんならわたしはあの駕籠へ。
作兵　折角の御親切ぢや、あなたの代りに乘るがよい。
傳八　さあ〳〵、こつちへお出でなさい。
お花　あなた、御親切に有難うござりまする。（ト是にてお花駕籠へ乘る。）
作兵　さあ、かう事が極つたれば、更けぬ其内少しも早く。
お花　そんならさゝさん、お前も無事で。
作兵　そちも達者で、捨てられぬやう。
次郎　えゝ。
作兵　日章様を、大事にしやれよ。
お花　あい、そりや合點してゐるわいなあ。（ト是にて駕籠の垂をおろす。駕籠舁兩人駕籠を舁き上げる。）
次郎　そんなら是にて、作兵衛どの。
作兵　左様なれば、日章様。

次郎　何れその内、便りをしますぞ。

傳八　さあ、出かけようぜ。（ト是にて駕籠を先に、傳八次郎下手へ來る。）

次郎　これ。（ト思入、傳八口を抑へる。）思へばこりやあ佛頼んで。

作兵　えゝ。

次郎　なアにさ、急いで頼むよ。

駕籠兩人　畏りました。

ト唄になり、駕籠屋先きに傳八附いて花道へはひる。跡より次郎旨いといふ思入あつて、足早に花道へはひる。作兵衛見送りて、

作兵　やれ〱、是れで一つの安堵ぢや。死んだと思つた日章様に、計らず爰でお目にかゝり、一生後家を立てさせると不便でならぬあのお花を、好いた男と女夫にさせ、さぞや嬉しい事であらうと思へばおれも嬉しいわえ。あゝいふ娘を連れゝばこそ、さつきのやうに雲助めらに、言ひ掛けもされるものゝ、おればかりでは誰一人、構ひ手のない此親仁、とんと重荷をおろしたやうぢや。

ト此内知らせなしに、日覆より月隱れること。

おゝよい鹽梅に雲も晴れ、どうか降りさうもなかつたが、また大層曇つて來た。どりや降らぬ内

に出掛けませうか。

ト葛籠を脊負ひ、身支度をする。禪の勤めになり、花道より、日丈坊主鬘、鼠の着附、脚絆草鞋がけにて、笠を手に持ち出來り、花道にて、

日丈 今あそこで擦違つたは、ありやあ慥に以前の朋輩、日章に違えねえが、一緒に駕籠へ附いて行つたは、山女衒の傳八めだが、あゝして二人寄り合つたら、ろくな事はしやあしめえ。

ト言ひながら、舞臺へ來る。作兵衛は駕籠を脊負ひ、花道の方へ行かうとして、兩人行き當り、

あゝ痛え、何をしやあがる。目をあいて歩きやあがれ。

作兵 これは粗相をいたしました。御免なされて下さりませ。(ト是を聞き、日丈すかし見て、)

日丈 や、貴樣は門前にゐた、作兵衛ぢやねえか。

作兵 さういふあなたは、日丈樣ではござりませぬか。

日丈 おゝ如何にもおれは日丈だが、こりやあいゝ所で逢つた。いろ〳〵貴樣に聞きてえ事もあるからまあ〳〵そこらへ掛けるがいゝ。

作兵 左樣でもござりませうが、ちと心も急きますれば。

日丈 はて、さうでもあらうが久しぶりだ。まあ、そこらへ掛けたがいゝ。

ト是にて無理に作兵衞を草土手へかけさせる。作兵衞脊負ひたる葛籠をおろし、

作兵　さあ、何の御用でござりまするな。

日文　さあ、用といふは外でもねえが、聞けば貴樣は娘を連れて、巡禮に出たといふ事だが、あのお花は達者でをるか、一緒に見えぬがどうぞしたかな。

作兵　へい、その娘めはたつた今日章樣にお目にかゝつて、どうぞ夫婦になりたいこと、當人も望みのことゆゑ、親が承知で日章樣へ、上げ申した所でござります。

日文　何んと言ふ、そんならおむすは日章めに、貴樣が承知でやつたとか。

作兵　へい、左樣でござります。

日文　むゝ、扨は今の駕籠の內は、貴樣の娘のお花であつたか。これ作兵衞、そいつアとんだ事をしたぞ。

作兵　なに、とんだ事をいたしましたとは。

日文　いたした所の譯ぢやねえ。さうして貴樣は日章の身の上を、まだ知らねえのか。

作兵　いえ御門前に居た時より、よく存じてをりますが、お年若ではあるけれど、御發明ぢやと近所でも、評判のよい日章樣。

日丈 所がそりやあ大違ひだ。いつぞや寺をしくじつて、貴樣の娘を連れて逃げ、心中すると騙したも仙臺堀から娘を打ち込み、おのれは其場を生き延びて、高飛びをするところを、通り合せて見たのはおれだ。事がばれては面倒と、おれが脾腹をどんと當て、持つてゐた五十兩迄、いやさ、五兩ばかりの金を卷上げ、おまけに跡が水雜炊、すんでのことに土左衞門と改名をするところであつたが、根が船頭のおれだから、命ばかりは助かつたが、あんなふてえ奴はありやあしねえ。

作兵 さあ、その時はその樣な、太い事をさつしやつたかは知らぬが、今では大層堅氣になり、甲州にござる伯父御を便り、今後本屋を出すとのこと。

日丈 これさ、未だそんな事を言つて、あの日章めに化かされてゐるか。その本屋といふは當てずつぽうほんぢやあなくつて大の嘘だ。知らざア言つて聞かせてやらうが、今ぢやあいつアごろつきの仲間へはひつて身を持ち崩し、ゆすりかたりやぶつたくりと、惡法ばかりかいてゐる、和尚次郎といふ博奕打だ。

ト是を聞き作兵衞扨こそといふ思入、

作兵 はゝあ、道理で言葉と身なりとは、あんまり違ふと思つたが、そんならさつき言うたことは皆僞りであつたるか、やゝゝゝゝ。(ト當惑の思入。)

日丈　一緒に行つたは山女衒の傳八といふ狼もの、こいつア二人が馴合ひで、貴様の娘を勾引し、女郎に賣るのに違えねえ。
作兵　えゝゝゝ、そんなら娘のお花をば、女房にするといふは僞り、一緒に行つたのが女衒にて、可愛や娘は賣られますとか。
日丈　おゝ、何でもそれに違えねえが、何處迄太えか數が知れねえ。
作兵　さう聞く上は跡追つかけて、娘をこつちへ取返して、
日丈　おゝさうだ〳〵、何でも跡を追つかけて、取返すのが上分別だ。
作兵　こりや、かうしてはゐられぬわえ。
ト作兵衞身拵へをする。此時雨車烈しく、雷の音になり、
日丈　やあ、こいつア大層ばらついて來た。
作兵　あゝこれ、折も折とて此の夕立、跡追つかけて行からにも、常から嫌ひの烈しい此の雷、あゝこりや困つたものだなあ。
ト此時雷の音はげしくなり、トヾ雷の落ちたる心にて本鐵砲の音、是にて日丈耳を塞ぎ俯伏になる。作兵衞も氣絶せし心にて、俯伏になる。日丈起上り作兵衞の體を見てうなづき、あり合ふ葛籠

を脊負ひ、

日丈　此間に、さうだ。

ト旨いといふこなしにて上手へはひる。作兵衛心附き、起上つてあたりを見て、

作兵　いや、恐ろしい雷であつたが、何處ぞ爰らへおさがりなされたと見える。日丈様にもお怪我はないか。

トあたりを見廻し、日丈が見えぬゆゑ、

はゝあ、日丈様には今の間に、何處ぞへ逃げて行つたと見える。どれ、此間に早く。

ト立上り行かうとして、葛籠を脊負はうとして見えぬゆゑびつくりして、

やゝ、爰へ置いたる葛籠の見えぬは、扨は暫時の氣絶を幸ひ、心よからぬ日丈が、盗んで行つたものなるか。詮議せうにも雲をやみ、何處を當と夕立の、身に降りかゝる此場の災難、こりやどうしたら。

トどうとなるを、木のかしら、

よからうなア。

ト當惑の思入、雷の音はげしく、雨車にて、作兵衛臍を押へる。此の模様よろしく

ひやうし　幕

五幕目

洲崎武藏屋の場
千葉下屋敷の場
深川美濃屋の場

〔役名＝魚賣り新助。葛飾四郎三郎、桑名屋德兵衛、秋田の重吉。葛飾次郎右衛門、中川右膳、新居の彥五郎、若黨佐五平。雇婆お熊、美濃屋の小三、武藏屋女中等。〕

（洲崎武藏屋の場）＝本舞臺三間の間、眞中屋根付きの風雅なる門、是へ御料理武藏屋といふ暖簾をかけ、上下船板の塀、此内に大和葺きの座敷の屋根を見せ、若楓の立木、日覆より同じく釣枝、よき所に床几を並べ、爰に若黨○、△、中間○、△、酒肴を並べ、供待ちの心にて酒を呑みゐる。總て洲崎武藏屋表掛りの體、はやり唄、浪の音にて幕明く。

若○　ときに金平、此の酒は此の節には、珍らしいいゝ酒ではないか。

若△　いや、酒もよいが、此の鯛と比目魚のあら煮は、頗る別品であるわい。

若○　餘程主人が氣前ものと見えます。

中○　もし〳〵、私などは、旦那方のお供で、方々の茶屋へ行きますが、どこの見世でも、りやんこの酒手位がお定まりだが、爰の內はびつくりでござります。

中△お前、爰の內の亭主は、却々こちとらだつて粗末にやあしねえ。それに番公の氣取がいゝから、五分もすきはありやあしねえわな。

若○いやそれは主人の如在ないのだ。却々今の世界では、よつぽど小股をすくはにやあ繁昌はしないわ。

若△これだによつて、生業冥利で、此の通り忙がしいのだ。

中○何でも利は元にありと言ふのは、爰のことだね。

中△牡丹餅は棚にありだらう。

中○又四文と出やあがらあ。

若△さあ〳〵、燗が上出來だ。貴樣達は茶椀にするがいゝ。

中△その事でござりまする。

中○さあ〳〵、注いでやらう〳〵。

中△おつと、もつと〳〵。

中○又下司張りやあがらあ。

ト皆々捨ゼリフにて酒を呑みゐる。矢張り合方。楊弓の音になり、上手より桑名屋德兵衛、やつしな

り、尻端折り、古びたる紺足袋、草履、麻風呂敷を脊負ひ、鐵砲笊の中へ秤を入れ、是を提げてぶら／＼と出來り、思入あつて、

徳兵　さつき上手の上り口で、侍客に連れられて、行き違つた藝者の顔が、日外別れて行方の知れぬ、お百が顔に生寫し、跡をつけて來た所が、此の武藏屋へはひつたが、何でもあいつに違ひはない。引捕へてと思うたなれど、世間には似た者が幾らもあるによつて、今出前を持つて出る若い衆に聞いたれば、あれは今深川で評判のはやりツ子、小三とやらいふ藝者とのこと、あゝどうぞして今一度、その藝者の顔を、とつくり見たいと思へども、かういふ立派な會席茶屋へ、こんな身装で上れはせず、第一金はなし、今に歸るか／＼と、さつきにから幾度となく、此前を行つたり來たり、あの座敷の騒ぎでは、まだ歸りをらぬことか知らぬ。

ト徳兵衞いろ／＼思入あつて、あちこちをうろ／＼として、入口より内を窺はうとして、思はず中間○の足を踏む。

中○　アイタヽヽ。えゝ、何をしやあがる。目を明いて歩きやあがれ。（ト是にて徳兵衞びつくりして、）

徳兵　これは眞平御免なされて下さりませ。つい屈託がござりますので、思はぬ粗相をいたしました。

中○　やい／＼／＼、思はぬ粗相だ。べらぼうめ、思つて粗相をするやつがあるものかえ。

中△ さうだ〳〵、何だかこいつァをかしな奴だぜ。さつきから爰の前を、行つたり來たりしやあがつて、おまけに内を覗き込み。

若○ やい〳〵、汝は怪しいなりをして爰らあたりをうそ〳〵覗くは、ハヽア、わりやあ晝稼ぎだな。

若△ その上、我々共が酒食をいたす妨げひろぐ不屆やつ。

若○ えゝぐづ〳〵いたさずそれへ出ろ。その分では許さぬぞ。

德兵 へい〳〵、なか〳〵怪しいものではござりませぬ。どうぞ御免なされて下さりませ。

中○ 怪しくねえ事があるものか。何で爰の内を覗いたり、まご〳〵爰らを歩きやあがるのだ。

德兵 へい〳〵、是はかやうでござりまする。此家の内へ參つてをりますものに、少々逢ひたいと存じまして、それゆゑ門をうろつきましたのでござりまする。どうぞ御料簡なされて下さりませ。

中○ いや〳〵料簡ならねえ。内を覗くばかりなら、人の内だから料簡もしようけれど、何でおれの足を踏みやあがつたのだ。

德兵 それは全く粗相でござりますれば、御免なされて下さりませ。（ト頻りに詫びる。）

若○ これ〳〵中間ども、何を言つてもぐづ〳〵と、譯の分らぬ。

若△ 以後の見せしめ、懲り〳〵するやう叩きしめてやるがいゝ。

中○　さうだ〳〵、叩きしめろ〳〵。（ト立ちかゝるを、）

徳兵　あゝもし〳〵、御免なされませ〳〵。

中△　うぬ、太え野郎だ、逃がすものか。

ト是より浪の音になり、徳兵衞の襟上を取り、引摺り倒し、四人にて散々に打ち据ゑる。徳兵衞は詫びてゐる。皆々わや〳〵言つて徳兵衞をくらはす。此時花道より魚賣り新助木綿やつしの上へ、さしツこの筒ツぽ。半纏、草履、尻端折りにて痣の出たる子供の手を引き出來り、花道にて此樣子を見て足早に來て、此中へはひり、皆々を取押へ、徳兵衞を圍ひ。

新助　まあ〳〵、どなた樣も御料簡なされませ。どういふ譯か存じませぬが、どうぞ御勘辨をなされて下さりませ。

皆々　いゝや、料簡はならねえ〳〵。

ト又わや〳〵と徳兵衞にかゝるを、新助是を制して、

新助　左樣でもござりませうが、どうか私にお免じなされて、御料簡下さりませ。これ〳〵その人、お前も皆樣方に、お詫び事をするがいゝ。

徳兵　はい〳〵、どなた樣か有難うござりまする。（ト此時顏を上げて、兩人顏見合せ、）

新助　や、こなたは。

徳兵　お前は。

皆々　どういたした。（ト言ふを押へて、）

新助　いや、何も知らぬわしは、通りがゝりのものぢやが、見兼ねて、爰へ留めに來たのぢや。皆様方へ、よくお詫び事を申すがよいぞや。（ト此内徳兵衛はうつむいてゐる。新助こなしあって、）へい〳〵ごなた様も御立腹もござりませうが、御覧の通り、見る影もない若い者、ごうぞ御勘辨をお願ひ申しまする。

若〇　いや〳〵、我々どもへ無禮をなした憎いやつ、何とそちが申しても、料簡はならぬのだわ。

皆々　さうだ〳〵。料簡はならねえ〳〵。

トわや〳〵言ふを、新助留める。此時門の内より武藏屋の若い者〇、△、半纏を着たる出前持ちにて出來り、

〇　まあ〳〵、皆様も御勘辨をなされませ、又旦那様方のお耳へでもはひりますと、私共が濟みませぬ。

△　どうぞ機嫌を直して、ゆるして上げて下さりませ。

皆々　あんまり分らぬ奴だわえ。
○　左樣でもござりませうが、まあ〳〵御勘辨をなされませ。爰は往來の事ゆゑこんな粗相も出來まする。又所を替へて、河岸の梅林の待合で、御機嫌直しに呑み直しとなされませ。
△　どうぞ、左樣なされて下さりませ。
若衆　綺麗に掃除も出來てをりまする。
○　七ごん、御酒やお肴を、河岸へ運んでおくれ。
若衆　はい〳〵。さあ〳〵旦那方、いらつしやりませ。
女中兩人　わたくし共が、お連れ申しませう。
皆々　それぢやと申して。
女中兩人　まあ、お出なされませ。
トわや〳〵言ひながら、四人を女中取りおさへながら、捨ゼリフにて皆々下手へはひる。新助皆々を見送り、
新助　どなたも大きに有難うござりまする。お世話樣でござりました。（ト子供の手を取つて、）三之助や、嘸怖かつたであらう。もう〳〵皆行つてしまつたゆゑ、案じることはないぞ。そなたは爰へかけ

てゐろよ。

三之　あい／＼。（ト子供を床几へかけさせて、あたりへ思入あつて、徳兵衛の傍へ來り、）

新助　もし、お前は桑名屋の徳兵衛さんぢやござりませぬか。（ト合方になり、）

徳兵　新助どの、お前に逢うて顔を合はすも、あゝ面目ない／＼。

トよろしく面目なき思入にて、顔を背ける。

新助　まあ／＼、何は格別達者でゐるをよいことして、いろ／＼と聞きたい事、また話したい事もあるけれど、どういふ譯か今の間違ひ、何にしろ裾も袖も砂まぶれ、ちよつとまあ立つて、そこらをよく拂はつしやれ。

徳兵　はい／＼有難うござりまする。いやもう、こんな姿になりますと、する事なす事ろくな事はござりませぬ。（ト此内新助砂を拂ふ事あつて、）

新助　何でも時の災難は、遁れぬものだ。怪我をせぬのがまだしも仕合せといふものだ。

徳兵　はい／＼、とんだ御厄介になりました。

ト兩人よろしくあつて、合方楊弓の音になり、

新助　徳兵衛さん、まづ早速お前に聞きたいは、江戸へ下つたといふ話しは、わしも聞いてはゐたが、

まだ、まあ一年經つか經たぬに、どうしてまあ、そんな姿にはなんなすつたのだえ。

ト德兵衞もこなしあつて、

德兵　新助どの、話せば長い物語り、わしが身の不仕合せ、どうぞまあ聞いて下さりませ。こなたも知つてゐる通り、引續いての災難に、家藏から船迄なくし、手振網笠で仕方なく〳〵殘つた品を賣代なし、お百を連れて此の江戶へ、下る途中の池鯉鮒の宿、吉田屋といふ宿屋にて、連れになつたが護摩の灰で、着替への着物は言ふに及ばず、路用は元より大事にした、二字國俊の一腰までそつくり取られてその日から、着てゐる着物お百が簪、少しの價に賣つてしまひ、艱難苦勞でやう〳〵と、江戶へ着いた其晩に、しかも芝の高輪でお恥かしい譯なれど、乏しい金も遣ひはたし、何處を當途の知るべはなし、途方に暮れてゐる所へ、美濃屋重兵衞どのといふ、旅商人の小間物屋に、いろ〳〵難儀を助けられ、その夜は汐留片町の、重兵衞殿の內へ泊り、足を痛めてゐるゆゑに、二日が三日と日を送つて、お百と二人そこの食客、それからわしが思ふには、他人の內へいつ迄も、世話になるのも本意でないゆゑ、どうか仕樣はあるまいかと思案をするその內にふつと思ひ出したのは、わしが大阪にゐる內に、藏屋敷のお役人に、十兩貸したお方があるのを胸に浮んで是れ幸ひ、今ではたしか甲州に在番をしてゐるとの事、わしの難儀を話したら、戾さ

ぬ事もあるまいと、重兵衛どのに相談かけ、僅かの路用を借り受けて、お百をそこの内へ預け、甲府へ登つて半金の金はやう／＼取つたれど、歸る途中で風を引き、四五日逗留したゆゑに、前後にかれこれ廿日程、かゝつてやう／＼江戸へ着き、お百や内の主人にも悦ばさうと汐留へ、歸つてみれば、家は明き店、どうした事と隣の内で様子を聞けば、此間お百を連れて重兵衛どのもどこへ行つたか行方知れずと聞いてびつくり、どうせうかと思へど捜す當てもなく、それから僅かの知るべを頼み、立場で借りた生業道具、紙屑買ひとなり下り、諸所方々と尋ねても、今は行方も知れませず、どう稼いでも細元手、それゆゑわしが今の此様、新助どの、推量をして下さりませ。

ト徳兵衛よろしく思入あつて言ふ。新助是れを聞きこなしあつて、

新助　そりやまあ、とんだ苦勞をしなすつたなう。もし徳兵衛さん、今更言つても死んだ子の年だが、わしが言はねえ事ぢやあねえ。あのお百めは私が妹だが、子供の時とは様子が違ひ、惡魔が魅入つたお百の性根、どうしてあんな心になつたか、實に憎いやつでござりまする。したがお前が其様に、難儀をするのもこりやお皆んな、過ぎ行かれたお内儀さんの罰でござりますぜ。あのやうなよいお人、御當人はお前さんを困らせる氣もござりますめえが、天道様が見通しだ、報はにや

あなりますまい。あのまあ優しいお內儀さんが、身持ちになつてゐる所を、お百とお前で酷く當り、あらう事かあるまい事か、藏の二階へ縛り上げ、打つたり蹴つたり叩いたり、體中が痣だらけ目も當てられぬ責め折檻、苦痛の中の臨月で、產み落したる子供衆の顏も體も矢張り痣、これ三坊や、ちよつと爰へ來い。

ト子供を傍へ寄せて、德兵衞に體や顏の痣を見せる。德兵衞不思議の思入

よもや忘れはさつしやるまい。此子がお前の痣の悴、よくまあ、見てやつて下さりませ。

ト子供を德兵衞に突きつける。德兵衞扨は是がといふ思入にて、面目なきこなしにて、子供の顏をつく〴〵見て、

德兵　そんなら是が女房の、お高が產んだ悴であつたか。

新助　現在我子を一生の、不具にしたも、お前のわざ、ちつとは心に當りませうが。

德兵　あゝ我子といふのも面目ない。堪忍してくれ〳〵。

子供　そんならお前が、父さんかえ。

新助　おゝさ、お前を邪慳にさつしやつた、眞實の父さんぢや、よく顏をば見せたがよい。

子供　これ父さん、なぜおツ母さんを酷い目に逢はしたえ。

ト子供怨めしさうに徳兵衛の顔を見つめて言ふ。徳兵衛子供を抱上げ、

徳兵　おゝ堪忍せい〳〵。おれが心の迷ひより、色に耽つてあらぬ身持ち、その天罰で今の此様。これ女房、どうぞ許してくれいやい。（ト徳兵衛後悔の思入。）

新助　もう〳〵悔んで返らぬこと、お前の心が本心になつたれば、又捨つる神ばかりはない、七轉び八起の譬、あんまりくよ〳〵氣を揉んで、煩ひでもした日には、猶々詰るお前の身の上、かうお目にかゝつた上は、何れわしも尋ねませうが、さうして今のお前の家は。

徳兵　さあ、家と言うてはなけれども、以前大阪で使つたものが、燈明寺店といふ所に、世帯を持つてゐるゆゑに、其人の世話になり、屑買ひをしてをりますが、新助どの、お前のお内はこの御近邊でございますか。

新助　いえ〳〵、爰からはちつと遠方でございますが、生業の事で洲崎の濱まで來ましたのだが、内は今戸の少し先、石濱といふ所に、蜆賣りをしてゐますのさ。

徳兵　いづれ尋ねて參ります。（ト子供の顔を見て、）あ、此の痣を見るにつけ、たゞ憎いのはあのお百め。

新助　え。

徳兵　いえさ、百の錢さへ持合せねば、悴に何の土産もない。

新助　何のそんな心遣ひ、そりやあ世にある時の事、お前も心が直つたら、切つても切れぬ此子の親、ちつと尋ねてござらつしやい。膝とも談合いたしませう。

徳兵　いやもう爰で逢うたは地獄で佛、行かいでなんといたしませう。あゝ思へば悪い親を持つて、悴に迄も苦勞をかけ、

新助　これさ、それも歸らぬ愚癡といふもの。（ト思入あつてちよつと氣を替へ）さあ、三坊行かうか。

ト子供の手を引く。

徳兵　何れその内お宅へ參つて、徳兵衛さん、煩はぬやうにさつしやりませ。

新助　ゆつくりお話しいたしませう。

子供　をぢさん、あばよ。

徳兵　おゝ。（ト寄らうとするを、新助入れ替つて、）

新助　もし徳兵衛さん、お前の子には、

徳兵　え。

新助　利口過ぎるよ。

徳兵　いや、面目次第もござりませぬ。

トよろしく思入あつて、やはり唄の合方、浪の音にて新助、子供を連れて上手へはひる。徳兵衛跡を見送り、

左様なら新助どの、どうぞ悴をお頼み申しまする。

ト跡をのび上り見て、

あゝもう、横町へ曲つた、足の早い事ぢやなう。（ト又こちらへ來り、）思ひがけなく新助どのに、さんだ世話になつたのも、是もやつぱり盡きせぬ緣、久しぶりで悴に逢ひ、嬉しいやうで面目なかつた。あゝした苦勞をさせるのも、心柄とはいひながら、あのお百に迷つたばつかり。それにつけてもさつきの藝者、どうかしけ〴〵見たいものぢや。いよ〳〵あれがお百めなら、おれを阿呆にしをつた腹癒せ、存分言うてこまさにやならぬが、まだあいつも歸りをらぬか、どうか座敷を見たいものぢやが。えゝ門をしめてしまひをつた。意地の惡い奴らだ。

トあちこちを覗くこなしあつて、見えぬゆゑ塀の傍へ床几を持つて行き、此上へ上り延び上り、塀の内の楓の枝へつかまつて覗み込む。是にて楓の枝ぽつたり折れるゆゑ、枝を持つたまゝ下へ落ちる。

えゝ木の枝迄が。（ト下へ打付けるを、道具替りの知らせ、）馬鹿にしをるわえ。

ト此模樣、はやり唄にて此道具廻る。

（武藏屋座敷の場）――本舞臺四間通し中足の二重、三方折廻し本緣付き、大和葺きの本庇、四ツ谷丸太の柱、風雅なる欄間、向う上手一間の茶壁、次に床の間、光琳風の掛物、細口の花活け、是につゞいて風流なる地袋、戶棚、違ひ棚、眞中茶立口、下手腰張りのある茶壁、ずつと上手圍ひの横手をみせ、下手建仁寺垣、是より下手へ風雅なる遠州透しのある門、此脇に春日燈籠、つくばひの手水鉢四つ目垣へ鐵せんの盛り、楓の立木、同じく釣枝、總て武藏屋座敷の模樣、綺麗に飾り上手に中川右膳好みの鬘、着流しにて更紗の褥に住ひ、此脇に刀掛け、是へ大小を載せ、此傍に小三深川藝者好みの拵らへにて、右膳の羽織を疊んでゐる、爰に酒肴をならべ、此下手に林藏、鄕藏、五平太、伴吾袴着流し、諸士の拵らへ、女中○△狐拳を打つてゐる。皆々酒盛りの體よろしく、浪の音賑かなるはやり唄にて道具留る。

鄕藏　さあ〳〵お榮、今度は四五で只今の敵と參らう。

女○　もし鄕藏さん、稽古は四つ前でござんすぞえ。

鄕藏　いや〳〵今度はきつと吞ませて見せる、さあ來い〳〵。（ト鄕藏腕まくりをして、車輪になる。）

女△　もし〳〵、それよりは皆さんで、軍師はどうでござりますえ。

伴吾　軍師なれば我々は、餘程たしかなものだ。

林藏　伴吾どの、貴樣は軍師を御存じかな。

五平　伴吾どの、御師範をお願ひ申します。

伴吾　是はけしからぬ、武夫の身で軍師を存ぜぬものがあらうか、先づ唐土で孔明、我朝の楠、或ひは信濃で山本勘助、まづ只今の世で申さうならば。

右膳　こりや〳〵伴吾、何を申す。それは戰場での軍師、女子共が申すのは、軍師拳のことだわ。

郷藏　お株で川邊氏の出損ひ、さりとは無粋な儀でござるな。

伴吾　いや〳〵、お笑ひなされな。軍師軍法も矢張りけん道でござりまする。

林藏
五平　是はなか〳〵味をやられるわえ。

女〇　なか〳〵そのお口合ひでは、隅へはおかれませぬ。三ツ組の眞中で、一ツお上りなされませ。

ト女中〇杯をとつて、伴吾にさす。

伴吾　然らば頂戴々々、悦びありやといたさうわえ。

小三　大層お洒落が上達でござんすなあ。

伴吾　これは〳〵、小三どのに褒められては、最一つ洒落すばなりますまい。

郷藏　これさ、貴殿にさうはしやがれては、拙者の發散場がござらぬて。
林藏　これはしたり郷藏どの、貴殿の洒落よりは伴吾どのゝ聲色が、おはこぢやと申すことだ。一つやつてはどうでござる。
伴吾　なに、拙者が聲色をお遣ひなさるとか、それは初めて承つた。
右膳　此の聲色は似せた所が、さつぱり人には分かるまいて。
伴吾　是れは御挨拶でござりまする。

ト よろしく捨ゼリフあつて、酒盛になる。右膳女中△に向ひ、

右膳　こりや〳〵女中、亭主に申して何か見つくろつて、土産にいたす折を拵へてくりやれ。
女△　はい〳〵、畏りましてござりまする。
郷藏　念を入れて拵へろと、申してくりやれ。
女△　左樣申しますわいなあ。
女○　お燗のよいのを持つて參りませう。
林藏　いかさま、燗も賴むぞ〳〵。

ト 捨ゼリフにて女中○、△は奥へはひる。

右膳　さあ〳〵何れも、是からは大杯をはやらせてはどうだ、まづ身共から初めようわえ。小三一つ注いでくりやれ。
小三　あい〳〵。（トよろしく酌をする。）
鄕藏　拙者は此のコップで一つ頂戴といたしませう。
林藏　身共がお酌をいたすでござらう。
鄕藏　是れは憚り、たみ〳〵とおつぎ下され。（ト呑んで、）五平太どの一つ差上げませう。
五平　それ待つ事やゝ久しいことでござる。伴吾どの、お酌を願ひまする。
伴吾　おつと、承知仕つた。
トよろしく酌をする。此内右膳も重ねて酒を呑む事、皆々よろしく酒盛りあつて、
鄕藏　大夫如何でござる。極く上燗でござりますが、も一つお過しなされては如何でござりまする。
右膳　いや〳〵、もう〳〵呑めぬ。殊の外大醉いたした。暫時睡眠といたさう。
小三　ほんに大層御酩酊の樣子、お枕をとつて來ようわいなあ。
右膳　あいや〳〵、其方は行くには及ばぬ。誰ぞ呼べ〳〵。
ト右膳酩酊の思入にて横になる。林藏、五平太、伴吾皆々手を叩いて、

四人　こりや／＼、お枕を持て／＼。（トわや／＼言ふ、奥にて、）

女△　はい／＼、畏りました。（ト枕と搔卷を持ち來る。）

伴吾　よし／＼、それへおいて參れ。

　ト女中△は奥へはひる。小三介抱して枕をさせ、搔卷をかける。

林藏　中川氏には御酩酊の時には、いつも御寢なるがお持ち前、そつといたしておくがよい。

小三　お風を召しはせぬかいなあ。

鄕藏　いや／＼、却つて風に當るがようござらう。

林藏　我々はお目覺め迄、ちよつと休息いたさうではないか。

伴吾　何さま、それがよくござらう。

鄕藏　かういたしては如何でござる。お目覺めの其間、海邊の掛茶屋へ參つて、遠目鏡で遠見といふのは如何でござる。

林藏　何さま、それがよろしうござらう。

小三　わたしも一緒に行かうわいなあ。（ト立ちかゝるを、）

林藏　いや／＼、小三どのには大儀ながら、これにござつてどうぞ御介抱をいたして下され。

五平　いつもお目覺めには、水を召し上るによつて、その用意を女子共に言附けて下され。
小三　そんなら、さうしませうわいな。なるたけ早う歸つて下さんせ。
鄕藏　そこは此方、事馴れてをれば、お目ざめ頃にはきつと參るでござらう。
伴吾　然らば小三どの、何分大夫をお頼み申す。
小三　ようござんすわいなあ。
鄕藏　然らば、各々。
三人　さ、參りませう。（ト矢張り浮きたる合方にて、四人は奥へはひる。小三思入あつて、）
小三　いつにないわたし迄、大層今日はまはされたわいなあ。さうして、南氣のせゐか、きつう逆上せて。（ト額を押へて、）頭痛がしてならぬわいなあ。

トあり合ふ双六盤へもたれ、紙入より奇功紙を出して小さく切り、頭痛へ貼る思入。此内上方唄の獨吟になる。小三是を聞き、思入にて指にて三味線をひくこなしあつて、

今奥で唄ふのは、上方唄の通ふ神、あの唄を聞くにつけ、故鄕が思ひ出されるわいなあ。

トちよつと鬱ぐ思入、又二の句になり、思入あつて、

あゝさうぢや、あの文句にもある通り、愚痴な臺詞が戀の實、末は野となれ山水の。（ト思入あつて）

どうなるものか人の一生、氣樂に暮すが今の人情、爰は野となれ山水ぢやなあ。

ト三の句よろしくこなしあつて、右膳の傍へより、

もし中川さん、まだお目がさめぬのかえ。うたゝ寢をなさんすと、お前お風を召しますぞえ。もしえ〳〵。

ト右膳を搖り起す。是にて右膳目の覺めたる思入にて枕を上げて、

右膳　おゝ、小三か。

小三　にい、お目が覺めましたかえ。

右膳　皆のものは、何れへ參つた。

小三　あい、お目覺めまで楊弓を引くと言はしやんして、わしの尾とやらへござんしたわいなあ。

右膳　それぞ幸ひ。（ト右膳起上り、あたりへ思入あつて、しつとりとした合方になり、）小三、ちよつと爰へ。

小三　あい。

右膳　醉うたと見せて睡眠なせしは、口さがなき輩をば、それと言はずに遠ざけたのぢや。

小三　何とおつしやる。あの方々を遠ざけたと言はしやんすは、わたしに何ぞ御用でも。

右膳　如何にも。

小三　その用と言はしやんすはえ。

右膳　外ではない、お百そちに頼みがある。

小三　改まつて、あのわたしへ。

右膳　さ、その頼みといふは外でもない。最前山の花屋敷で、植六方の亭座敷へ、御休息あられたは、かくいふ右膳が御主君なるわ。

小三　そんならあの折、お目見得した殿様が。

右膳　如何にも。それについてそちへの話し、いつぞや深川三十三間堂に於て、通し矢ありしその砌りそちは心も附かざりしが、殿様にはその方の、眉目よき姿を見染められ、どうか召仕ひといたしたいと殊の外の御執心。

小三　あの、わたしを、お召仕へに。

右膳　さればさ、然しその節はたゞ行違ひのお目通り、今日わざ〳〵そちを呼び寄せ、殿に御覧に入れたる所、いよ〳〵御意に入つたゆゑ、是非々々妾に抱へるやう、急々其方計らへと、くれ〴〵とのお頼み、そちが得心いたしなば、支度の金子は望み次第、瞬く内に玉の輿、立身出世になる事なれば、何とお百、色よい返事をいたしてくれまいか。

小三　そりやもう賤しい此のわたしが、お大名のお妾様になるのぢやもの、此上もない仕合せなれど、さうなる時には、お前と逢はれぬわいなあ。

右膳　そんなら其儀は、必ず心配しやるな。一つ屋敷の事なれば、そちに逢ふのは何時なりとも。

小三　そんならお上へあがつても、お前さんと逢はれるかえ。

右膳　たとひ殿が寵愛深く、お側を放さぬことありとも、そちに逢はねばならぬといふは、常々そちが心を見込み、明かして聞かすかねての大望。

小三　えゝ、その大望とおつしやるは。

右膳　さ、他聞を憚る一大事、假令枕を並べたる、その方なれど改めて、誓ひを見ねばあかされぬ。

ト小三よろしくこなしあつて、

小三　わたしの心を見込んだと、その一言が嬉しうござんす。お百の誓ひを右膳さん、今お目にかけますわいなあ。（ト以前の双六盤を前へ置き）御慮外ながら。

ト右膳の差添を拔き、小指を切らうと刀を握上げる。右膳是を見て、

右膳　お百、待ちやれ。

小三　お留めなさるは、右膳さん、わたしの誓ひがあなたのお氣には。

右膳　天晴見上げた、氣に入つた。
小三　お氣に入つたら、今此の場で。（ト又刀を振上げる。）
右膳　いや、その心底を見る上は、誓ひに及ばぬ。
小三　え。（ト思入あつて刀を下に置く、）
右膳　お百近う。
小三　あい。（ト四の句になり、右膳の側へよる。）
右膳　これ。
ト合方きつぱりとなり、右膳小三は囁く。小三こなしあつて、
小三　そんならお前が、千葉のお家を。
右膳、おゝさ、掌握なさん豫ての企み。
小三　そんならわたしが妾になり、殿の心をとらかしなば、
右膳　企みの邪魔になるものは、ある事ない事殿へたきつけ、
小三　そこはわたしが口先で、遠ざけさせる魂膽工夫。
右膳　まだその上に我が胤を、宿せば殿の御胤なりと、披露をなして世取りとなさば、その方はお部屋

と稱し、此右膳は直ぐに後見、上見ぬ鷲で活計歡樂、然し事成るそれ迄は、必ずともに悟られぬやう、心を附けて、合點か。

小三　もし中川樣、そんな蓮葉ぢやござんせぬ。案じる事はないわいな。

右膳　いや、却々見上げた、

小三　お轉婆ものかえ。

右膳　いゝ肚胸だと申すのぢや。

小三　あんまりおだてゝ、

右膳　や。（ト小三につたり思入あつて、煙管をつくを、道具替りの知せ。）

小三　下さんすなえ。

トよろしく思入、はやり唄にて、此の道具廻る。

（千葉家下屋敷外構への場）――本舞臺三間の間、一面の練塀上手に黒の冠木門、下手に榎の大樹、日覆より同じく釣枝、總て千葉家下屋敷外構への模樣、時の鐘、合方にて幕明く、と下手より中間菖蒲革のなりにて、六尺棒を持ち出來り、角々にて六尺棒にて下を叩き、やはり合方にて門の潜りより、葛飾五郎三郎　袴羽織大小、跡より中間附き出來り、中間佐五平を見て辭儀をする。

五郎　おゝ番のもの、大儀であつた。

中間　へい〳〵、是は葛飾の若旦那様、どちらへお出でござりまする。

五郎　今日親共がお國許よりお着きと申す、夜前觸がありしゆゑ、途中迄お出迎ひに參るのぢや。

中間　左様なれば大旦那様の、お着でござりまするか。それははやあなた様にも、嘸御滿足でござりませう。今日は御舍兄様は、御番でござりまするか。

五郎　兄四郎次郎は、御前の御用繁きゆゑ、身共ばかりお出迎ひ申すのぢや。

中間　左様でござりまするか。それははや御苦勞様でござりまする。いや、かやう申せば恐入つた事でござりまするが、大旦那様がおいでなさらねば、實はお屋敷は闇でござりまする。右膳様兄弟に諂つて、目のよる所へ玉とやらで、佞人の寄合ひで、いやもろくな事はござりませぬ。なう可内どの。

若衆中間　それは違ひない事だが、下々のものはこつぱいでござりまする。

五郎　これはしたり、どういたしたものだ。下として重役の取沙汰、左様な事は申さぬものぢや。

中間　いえ、少し位は聞えても、大事はござりませぬ。あまり得手勝手でござりまする。

五郎　これはしたり、控へぬかと申すに。

中間　へい。（ト控へる。）

五郎　中川氏が御前體のお首尾のよいのも、殿樣の思召しにある事、以來左樣な噂など、決して申すことは相成らぬぞ。

中間　へい〳〵、畏りましてござりまする。

五郎　さゝ、その方は早う參つて、休息いたしやれ。

中間　有難うござりまする。左樣なれば、御免なされませ。

ト やはり六尺棒を叩きながら、上手へはひる。五郎三郎思ひ入あつて、

五郎　あゝ、下ざまと申すものは、はて口さがないものぢやなあ。いや思はぬ事にて暫時の暇入り、もうお歸りに間もあるまい。どりやお出迎ひいたさうわえ。

ト 五郎三郎行きかける。中間向うへ思ひ入あつて、

中間　若旦那樣、あれ〳〵向うへ大旦那樣が、お見えでござりまする。

五郎　なに、父上樣が、いかさま、最早是へお出でなさるか、然らば此所にてお待受けのいたさうわえ。

ト 合方になり、花道より葛飾次郎右衞門、野袴ぶつさき、大小、更けたる拵へ、此跡より若黨佐五平旅なり、脚絆草鞋にて附添ひ、あとより人足菰包みの小長持を、とんぼにて擔ぎ出來り、すぐ

に舞臺へ來る。五郎三郎是れを見て、

これは〳〵父上樣、只今お着きでござりまするか、御道中滯りなく、お目出たう存じまする。

次郎　おゝ忰、出迎ひに參つたか。

五郎　はツ、夜前のお先觸ゆゑ、お出迎ひいたしましてござりまする。

次郎　左樣か、いやも日和都合と申し、萬端御用も相調ひ、目出度う歸府いたした。して、兄四郎三郎は。

五郎　兄上には只今御殿へ、出仕にござりまする。

佐五　若旦那樣、御機嫌よろしうござりましたか、嘸お留守中お淋しいことでござりましたらう。

五郎　佐五平、その方も旅中、嘸かしの疲れ、大儀であつた。

佐五　へい、有難うござりまする。

次郎　忰聞きやれ。此度の旅行は、佐五平が供いたしたゆゑ、宿へ着いても樂々と、安心いたして寐られたわえ。

五郎　左樣でござりましたか、何かお心遣ひの事でもござりましたか。

次郎　さればその方も知つての通り、お國許の御金藏より、お納戸金を受取り、道中金子と見えざるや

う、菰包みにいたし、人足共に擔がせしが、肩のこたへ足の運び、自然と人に金子なりと悟られしゆゑ、道中も其の心配をいたしたゆゑ、宿へ着けば此の佐五平が、夜通し寐ずの番、それゆゑにこそ恙なく、まづは到着のいたしたわえ。

佐五　若旦那樣お聞きなされませ。此程は道中筋は、護摩の灰と申す盜賊多く、片時も油斷はなりませぬ。途中で旅人の話を聞けば、金子の荷物を奪はれて、難儀いたすものが隨分ありますさうにござりまする。

五郎　それは嘸かしの心配であつたであらう。

次郎　こりや佐五平、其方も目を附けたれど、幸手宿の立場にて、出逢ひたる二人の旅人、商人體と見ゆれども、一癖ある面魂。

佐五　左樣でござりまする。此お荷物へ目を附けて、何か胡散なひそ〳〵話、彼等は正しく旅稼ぎの盜賊に違ひはござりませぬ。

次郎　それゆゑにこそ、休息もろく〳〵致さず、道を急いで參つたれば、まづ是にて安堵いたした。

五郎　私迄も、大慶にござりまする。

佐五　こりや〳〵人足共、さぞかし疲れたことであらう。その替り旦那樣へお願ひ申して、御酒代は頂

藏いたして遣はすぞ。

人足　へい／＼、それは有難うござりまする。

五郎　父上樣、遠路の所お疲れなされ、御休息の上、御前表へ。

次郎　何さま、左樣いたさうわえ。

ト立上る。此時風の音になり、下手の榎より、さしがねの雀一羽、鳶に追はれ、嘴にて突かれたる心にて、ばつたり落ちる。鳶は此儘飛び去る。皆々是を見て思入、次郎右衞門こなしあつて、

鳶に追はれし是れなる雀、落命なせしか。はてさて、不便なこゝちやなあ。

ト五郎三郎、雀を見て、

五郎　父上樣、此雀は朝夕に裏手の庭の雀堂へ、餌をねだりに參る親鳥、此の雀には小雀が二羽ござりまする。嘸かし親を慕ふことでござりませう。

次郎　なに、小雀があると申すか。

五郎　左樣にござりまする。

ト又風の音になり、さしがねにて小雀二羽、飛び來り、落ちたる雀の上を飛んでゐる。

あれ／＼、小雀が參りました。

次郎　さては是が小雀なるか、實に桓山の四鳥の別れ、人にも恐れず小雀が、なき親鳥を慕ひ來て、あたり放れず飛び交ふ有樣、鳴く音の五音分かりなば、さぞ親戀しと言ふならん。あ、不便な雀の有樣ぢやなあ。

佐五　たゞ憎きはあの鳶め、鳶は四十八鷹の内にて、物をさらふ曲者、鳥の内にて盗人同然。

次郎　さればこそ、晝鳶などといへる、稼ぎの盗賊ありとやら。

五郎　雀は忠孝全きもの、主人へ毒を與へしを、知らせし例も雀の宮。

佐五　しかも鳴く音のちうといふ、五音は忠義に通へる音律。

次郎　人に例へて言はうなら、雀は忠臣又鳶は、

五郎　お家を覘ふ佞人讒者。

佐五　取りも直さず、

五郎 佐五　中川兄弟。（と思はず大きく言ふを、）

次郎　あ、これ。（ト抑へて、）譬にも言ふ壁に耳、滅多なことを。

五郎　何にもいたせ此の雀が、果敢なく落命いたせしは。

佐五　案じることではあるまいか。

次郎　もしや、此の身の。

兩人　え。（ト次郎右衞門氣を替へ、）

次郎　前車の覆へるを見て、後車の戒め、油斷ならざる此の時節、少しも早く此の荷物を。

佐五　畏つてござりまする。これや／＼人足共、大儀ながら荷物を屋敷へ。

人足　畏りました。

ト人足は長持を舁き上げる。五郎三郎雀を見て、物案じの思入、次郎右衞門も思入あつて先に立ち、

次郎　あ、心ならざる。（トこなし。）

兩人　え。

次郎　さゝ、參らうわえ。

ト唄になり、次郎右衞門先きに、五郎三郎佐五平よろしく思入。人足荷物を擔ぎ、皆々上手の門の内へはひる。時の鐘、四ツ竹模樣の合方になり、下手より秋田の重吉旅なり、脚絆草鞋にて、三度笠を肩へかけ出來り、あたりを窺ひ、

重吉　今度位え、、、とんまな仕事にかゝつたことはありやあしねえ。越ケ谷からあの金をつけて來たが、泊りへ着いても中食でも、五分程も隙がねえから、名に負ふおれが親分も、持てあまして手出し

もしねえが、もう屋敷へ擔ぎ込んぢやあ、是で市も榮えたが、これぎりあいつを見遁しちやあ、生業冥利に盡きる譯だ。今夜屋敷へ持込んで、やれ嬉しやと安堵して、心の弛んだ所を附け込み爰まで釣られた無駄骨を、今夜かき目と出さにやあならねえ。

ト此時門の内より、以前の雲助息杖を擔ぎ出來る、是れにて重吉はちよつと小隠れする。

○ こう八、べらぼうに重い荷物だな。

△ その筈よ、五箱といふ金だもの、重くなくつてどうするものだ。

□ 大名なんぞといふものは、豪氣なものだぜ。藪際から二番目の藏へ擔ぎ込ませたが、いけぞんぜえなものぢやねえか。

○ あの衆の五箱や六箱は、こちとらの三歩か一兩だ。いけぞんぜえにする筈だ。

△ 何にしろ、そこらで一ぺい引ッかけようぢやねえか。

□ さうしべい〳〵。

三人 さあ行かう〳〵。

ト捨ゼリフにてわや〳〵と下手へはひる。秋田の重吉出來り、思入あつて、

重助 あの雲助の話ぢやあ、竹藪つゞきの二番めの、藏へ入れたとぬかしたれば、是から直に親分に、

今夜の仕事を、さらだ。

ト時の鐘の送りにて、重吉逸散に花道へはひる。やはり時の鐘にて此道具廻る。

(深川美濃屋の場)——本舞臺一面の平舞臺、正面眞中暖簾口、此の上手三尺の瓦燈口、眞鍮の金具を並べ金毘羅の神棚、此下いきなる杉戸、此傍に糸をさげ、祝儀の紙大分結びつけてある。此の次に三尺の茶壁、是より上手一間の障子屋體、此内に床の間、下手やはり茶壁、爰に三味線掛へ三味線を掛け此下手障子を建切り、折廻して表は腰障子、是へ美濃屋と記し、下座の所黒塀、いつもの所門口、舞臺よき所に行燈、桐の箱火鉢へ鐵瓶を掛け、此側に茶盆へ急須を載せてあり、總て深川小三内の體、爰に小三着物を着替へてゐるを、雇婆お熊、是を手傳つてゐる。門口に駕籠舁立ちかゝりゐる。箱屋の小助、駕籠屋に茶を出してゐる。此の模樣よろしく、さんげ〳〵の唄にて道具留る。

小助　おい、若い衆さん、お茶を爰へおくよ。

○　へい〳〵、有難うございまする。

小助　さうして、是は小三さんから御祝儀だよ。(ト駕籠屋に祝儀をやる。)

△　いつも〳〵有難うございまする。どうぞよろしくおつしやつて下さいまし。

小助　大きに御苦勞だつたね。蠟燭もそこへおいたよ。

○　へい、有難うございまする。

△　洲崎へ何もお言傳はございませぬか。(ト小三帯をしめながら、)

小三　何も用はないが、親分にもお上さんにも、よろしく申しておくれ。

○　へい〳〵、畏りました。(ト此内駕籠屋は茶を呑み、駕籠を疊んでゐる。)

お熊　もし小三さん、大層着物が皺になりましたよ。

小三　さうかえ、跡で火熨斗でもかけておいておくれ。

お熊　畏りました、皺のばしをしておきませう。さうして中川の旦那さんは、直にお歸りでございましたかえ。

小三　旦那も今日は、御用があるとおつしやつて、直にお歸りだよ。

お熊　さうでございましたかえ。是非お歸りにお寄りなさるだらうと存じまして、奥の四疊半を綺麗にしておきましたよ。さうしてお土産の折は明けておきませうね。

小三　あい、さうしておくれ。(トお熊杉折の蓋を明けて見て、)

お熊　おやまア、又きんとんが澤山はひつてをりますよ。

小三　お前が好きだからさ。

お熊　おや嬉しい。武藏屋のきんとんは、いつち旨うござりますよ。
小助　おい又摘んぢやいけねえぜ。お熊さんはきんとんを見ると、いつでもにこ〳〵してゐますぜ。
お熊　よしてもおくれ、お前が水溜りを見やあしめえし。（ト此内駕籠屋、駕籠を疊んで）
駕籠兩人　へい、左樣なら、又お願ひ申します。
小助　大きに、御苦勞よ。
ト駕籠舁兩人駕籠を擔ぎ、一人は提灯を持ち、先へ立つて行く。やはり右の合方にて、花道より德兵衞足早にうろ〳〵して出來り、駕籠屋を見て、
德兵　あ、もし〳〵駕籠屋さん、ちよつと待つて下さりませ。（ト息を切つて言ふ。）
○　あい、何だえ、お前大層息を切つてゐるが、どうぞしたのかえ。
△　追剝にでも追はれたのかえ。
德兵　なに、左樣ぢやあござりませんが、洲崎の武藏屋の前から、お前方の駕籠の跡に附いて駈けて來たので、息がはずんでなりませぬ。
○　それぢや載せて來た藝者衆に、用でもあるのかえ。
德兵　はい、是非逢はねばなりませぬが、あの藝者の内はどこでござりまする。

△ぢき向うの美濃屋といふ、障子の立つてゐる内さ。

ト徳兵衛はその儘舞臺へ來り、駕籠屋は花道へはひる。徳兵衛舞臺へ來り、障子の印を見て、爰だといふこなしにて、門口より内をうろ〳〵覗いて見ること、小三は火鉢の側へ來り煙草を呑みながら、

小三　小助どん、駕籠が早かつたから、嘸草臥れたらうの。

小助　いやもう、箱を脊負つて駈け通しでござりました。

お熊　お前、早く湯へでもお出でな。

小助　さうさ、一と風呂飛込んで來ませうよ。

ト此内徳兵衛内を覗き、よく〳〵見て、いよ〳〵是に違ひないといふ思入にて、門口を手荒く明けて内へはひる。お熊小助はびつくりする。徳兵衛せき込みしこなしにて、

徳兵　おのれお百、爰にをつたな。

小三　や、お前は。

トびつくりする。徳兵衛小三に飛び附かうとするを、小助出て、徳兵衛を突き退け、

小助　やい〳〵〳〵、何をしやあがるのだ。人の家へ草履も脱がずにへひりやあがつて、途方もねえ野郎だ。きり〳〵表へ出やあがれ。（ト徳兵衛を突出さうとする。）

徳兵　ゑゝ、何もお前方が知つたことぢやあござりませぬ。あの女めに恨みがあるのぢや。そこ退いて下され〳〵。（ト掻き退けて又はひらうとするを、）

小助　えゝ知つても知らなくつても、内へ入れる事はならねえ、きり〳〵と出やあがれ。

ト又門口へ突出す。徳兵衛無理に内へはひり、

徳兵　何であらうと退いて下され。やい女め、おのれに言はにやならぬのぢや、何とか物をぬかさぬかえ。（ト言ひながら、内へはひらうとするを、お熊出て、）

お熊　おい〳〵、何だ此の人は、錢貰ひだか、無心だか知らないが、人さんの内へ挨拶もせず、あんまり物を知らねえ人ぢやあないか。

小助　さうよ、物言ひがぜえろくだぜ。これ、言ふことがあるなら、門口から挨拶をして、何とか物をぬかすがいゝや。御大層に女だの何のとぬかしやあがつて、ぐづ〳〵しやあがると、叩きしめるぞ。（ト小助立上るを、小三留めて、）

小三　これさ〳〵、靜かにおしな。近所隣りへ聞えると、面倒だわね。

小助　何をお前さん、こんな小穢ねえ野郎をのさばらせると、癖になりますから、懲り〳〵する樣に叩きしめるがようごぜえやす。

德兵　えゝ、何で叩きしめるのぢや、言ふ筋があるゆゑに來たのぢや。おゝあの女に言分があるのぢや。わしぢやとて、錢貰ひや無心ものぢやない。桑名屋の德兵衞といふものぢや、あんまりぽん〳〵と言うて貰ふまいわえ。

小助　べらぼうめ、德兵衞だか德平の膏藥賣りだか、そんな事を知るものかえ、用があるならあるやうに、靜かにものをぬかしやあがれ、山の中の一軒家とは譯が違ふわ。

德兵　何で靜かに言はれうぞえ、靜かに物は言はれぬわえ。

小助　なに、靜かにやあ出來ねえと、途方もねえ贅六め。

お熊　おい〳〵、ぐづ〳〵、ぬかさせる事はねえ。打ちのめして叩き出しねえな。

德兵　何ぢや打つ。おゝ、打つなら打つて見い。さあ打て〳〵、えゝ打ちをれやい。

ト德兵衞口惜しき思入にて言ふ。

小助　うぬ、打たなくつてごうするものか。

お熊　生利な事をぬかしやあがるな。（とお熊德兵衞を引倒す。小助足にて蹴倒す。此内德兵衞悔しき思入にて）

德兵　おゝ、もつと打て〳〵。（ト兩人へ體を擂りつける。此内小三煙草を呑みゐて、）

小三　これさ〳〵、怪我でもさせちやあ濟まねえ。これさ二人ながら、手出しをしなさんなよ。

お熊　何さ、うつちやつておきなせえ。こんな奴は癖になりやさあね。
小助　太々しい野郎ぢやねえか。（ト又足にて蹴倒す。）
小三　これさ、よしなと言ふに。（ト此内徳兵衛起上り、小三を見て、）
徳兵　やいお百、此のやうな目に逢はすのも、矢張りわれが言附けぢやな。（トきつとなつて言ふ。）
小助　何だ、小三さんが言附けだ。とんだことをぬかしやあがらあ。
ト又打ちにかゝるを、小三留めて、
小三　まあ〳〵待ちなよ。待ちねえといふに。此の人はちつとわたしが退れねえお人だから、わたしが留めるのに止まらねえのか。
小助　いえなに、お前さんがよけりやあいゝけれど、あんまり分らねえからさ。
お熊　それぢやあ、お前さんが、馴染の人かえ。
小三　さうさ、わたしもちつと恨まれる譯もあるのだから、どうとも話せば分ることだから、小助どんお前は構はずと、湯へでも行つてお出でよ。
小助　それだといつてお前さん、女ばかりぢやあ。
小三　いゝといふことよ。わたしが胸にあることだから、構はず行つておいでよ。

小助　ようござりやすかえ。

小三　いゝといふことよ。

小助　そんなら、よきやあようござりやす。

ト小助はぶつ〳〵言ひながら、手拭を肩へかけ、下手へはひる。此の内徳兵衛は體の痛む思入にて、手足を擦つてゐる。お熊は何だか分からぬ思入。小三こなしあつて、

小三　さあ、もうようござんす。こつちへ來て下さんせ。

徳兵　行かいでどうするものか。此樣な酷い目に逢はしをつて。（ト立上り、）あいたゝゝゝ。

ト足の痛む思入。

小三　どこぞ、痛めなさんしたか。

徳兵　今の男め足を酷く打ちくさつて、あいたゝゝゝ。

小三　ほんとにあの人も、氣の早いので困りきるよ。お熊さん、手を取つて上げておくれ。

お熊　此人のかえ。

小三　さうさ。

お熊　あい。（ト不承々々手を取つてこちらへ來て、）もし小三さん、此のお方は何處のお方でござんすえ。

小三　それ、いつもお前に話をする、徳さんといふ私がお世話になつたお人さ。

トお熊に目まぜで知らせる。お熊呑み込み。

お熊　へえゝ、成程、いつもお前さんが、朝晩にお噂をなさる。さうでございますかえ。ほんとうに知らない事とて、失禮をいたしましたよ。まあ〳〵こちらへ、お出でなさいまし。

トお熊そら〴〵しく言ふ。徳兵衞こなしあつて、

徳兵　えゝも、構うて下さるな。一人でそつちへ行きますわえ。（トお熊の手を振放す。）

お熊　おや、きついお腹立ちさねえ。（トお熊つんとしてこちらへ來る。）

徳兵　おゝ、腹が立たいでかえ。（トよろしく居直つて、）これお百、いやさ百、ようも〳〵此のわしを酷い阿呆にしをつたなあ。何から恨みを言はうやら、あれもこれも言ふことだらけ、どれから先へ言はうやら、氣ばかり急いて出ぬわいやい。（ト腹を立て、思入にて疊を叩いて言ふ。）

小三　お熊どん、お茶でも一つ上げておくれ。

お熊　はい〳〵。（ト茶を汲んで、）はい、あなた、お茶。（ト徳兵衞の前へ置く。）

徳兵　えゝ構うて下さるな。腹が立つて〳〵湯も茶も咽へははひらぬわえ。これお百、よもやそちは忘れはせまい。あの美濃屋重兵衞どのに世話になつて、食客でゐる内に、相談の上甲州へ、金の貸

を取りに行き、歸つて見れば内は明店。ヤイ、わりやおれが留守の内、あの重兵衛とちゝくつて此徳兵衛に鼻あかせ、此の深川へ引越して、浮氣らしい藝者稼ぎ、それでわりや濟むと思ふか。義理が濟むと思ひをるか。やい、おのれはなア〳〵。

ト小三の胸づくしを取つてこづく。小三こなしあつて、

小三　さあ、そのお前の腹の立つのは尤もでござんす。さら〳〵無理ではござんせぬが、まあ氣を鎭めて下さんせ。

徳兵　えゝ、ぬかしをるな。是れが鎭めてゐられるものかえ。

小三　さあ、さうでもござんせうが、わたしが言ふ事徳兵衛さん、どうぞ聞いて下さんせいなあ。

ト よろしく思入、誂への合方になり

もし徳兵衛さん、爰をよく考へて見て下さんせ。お前が旅へ行かしやんす時、七日か八日で歸つて來るさ、甲州へ行かしやんして、十日たつても二十日たつても、何んの便りもないゆゑに、案じ暮して占ひに、見て貰つても墨色でも、是れは急には歸るまいさ、何處で聞いても言はれるゆゑ、そんなら私を捨て置き、大阪へでもござんしたかと、女の狹い心から、案じ暮してゐる内に、重兵衛さんが言はしやんすには、急に家業の事につき、田舍へ行かねばならぬゆゑ、私はお

前の跡を尋ね、甲州へ行くがよいと言はれ、そんなら行きませうと行つて見たれど道は知らず、どうしたらよからうと、思案に餘れど仕方なく、重兵衛さんと二合半迄一緒に行つて、歸つて來たらばかうしてと、思つてゐるその內に、その心配が病ひとなり、久しく私が煩らつて、人を雇つて藥の世話、いろ〳〵厄介かけたゆゑ、其の恩返しに藝者になり、辛い勤めをしてゐるわたし。なアお熊さん、お前も知つてゐる通り。はて、此のおツかあが證人ぢやわいなあ。

お熊　えゝ、ほんにさうでございますよ。かうしたわたしも小三さんの傍にゐて、なにもかもよく知つてをりますがね、何の重兵衛さんへ氣兼をして、陰になり日向になり、お前さんのことを、それは〳〵ごんなに苦勞をしておいでなさるか知れませんよ。ねえもし、小三さん。

小三　そりやもうわたしも、どうぞお前に逢ひたいと、烏の鳴かぬ日はあれど、お前の事を一日でも、言はぬ日とてはござんせぬわいなあ。

お熊　ほんに實氣な小三さん。もし、お前さんも、ほんたうにお仕合せでござりますよ。

小三　お前に言はれる私より、お前にたんと恨みがござんす。もし德兵衛さん、推量して下さんせいなあ。

お熊　もし、あんなに詫びてゐなさるから、いゝ加減に堪忍して上げなさんせ。

ト お熊、徳兵衛の背中を打つ、是にて徳兵衛もじ〳〵して、どうしたらよからうといろ〳〵思入あつて、

徳兵　あゝこれ〳〵、わしもさう疊みかけて言はれると、何やら言ふ事があつちこつちになつて、どうやら工夫が違うたやうぢやわいの。

お熊　さあ〳〵お前さんも、かう譯が分つたら、今迄のことはこれぎりにして下さんせ。もし小三さんさつきのお土産のお肴で、一と口上げてはどうでござんす。

小三　どうぞさうして下さんせ。もし徳兵衛さん、わたしもお前にいろ〳〵と、話したい事もござんすから、今日はゆつくりとして下さんせ。

徳兵　さういふそなたの心とは、夢にもわしは知らなんだ。

お熊　ほんたうにお前さんも、腹の立てやうが早かつたので、わたしもびつくりしました。どうぞまあ今夜は小三さんを、たんと嬉しがらせて上げて下さいまし。是れが牛も願へばはなづらとやら、正直の頭に神宿るでござりますねえ。おほゝゝゝ。（ト此内いろ〳〵思入あつて、白丁の徳利を出して、）おや〳〵わたしやあ、さつぱり忘れてゐたよ。もし小三さん、わたしはちよつと大急ぎで、横丁迄行つて來ますよ。（ト お熊徳前を袖で隱して言ふ。）

小三　どうぞさうして下さんせ。

お熊　もしお前さん、ちよつと行つて參りますから、少しの間待つてゐて下さいましよ。

ト徳利をさげ、門口へ出て、小三と顏見合せ、舌を出して、

どりや、行つて參りませう。

ト矢張り合方にて、お熊は下手へはひり、小三門口へ來て跡を見送り、こちらへ來て徳兵衛に縋り泣き伏し、

小三　徳兵衛さん、ようまあ來て下さんしたなあ。（ト徳兵衛の顏をつく〴〵と見て、ほろりと思入あつて、）ほんにまあ、僅か見ぬ内に、きつう苦勞をしなさんすかして、どこもかも窶れなさんした事わいなあ。

徳兵　これお百、そちに別れたその後は、たゞ悔しいと口惜しいで、ろく〳〵稼ぎもせぬうちに、こんな樣になつたのぢや。そなたに逢つたら恨みを言はうと氣を張り詰めてゐたところへ、やう〳〵逢つて氣が弛んだか、何だか氣拔けがしたやうぢや。

小三　もし徳兵衛さん、是れからは猶の事、氣がゆるんではならぬぞえ。どうぞしつかりとして下さんせ。ちつとお前に話さにやならぬ事がござんすわいなあ。

徳兵　なに、話さにやならぬとは。

小三　外の事でもござんせぬが、丁度此節重兵衛さんが、旅商ひの留守こそ幸ひ、是からお前と此内を二人一緒に駈落して、何處の浦へか身を寄せて、お前さ一緒に暮すなら、たとひ苦勞をするとても、わたしやそれが樂しみでござんすわいなあ。

徳兵　そんならそなたは此の家を、わしと一緒に駈落して、

小三　あい、苦勞する氣でござんすわいなあ。

徳兵　これお百、堪忍してくれ。その心さは知らぬゆゑ、是れ迄怨んだこの徳兵衛、あゝ濟まぬ事だわえ。

小三　何の濟まぬ事がござんせう。足らはぬわたしをそれ程迄に、思うて下さんすのが、わたしや嬉しうござんすわいなあ。何にしろ徳兵衛さん、善は急げと言ふからは、今宵夜更けて此家を逃げて。

徳兵　それでは今夜出かけるつもりか。さうして、是から何處を目當に。

小三　さあ、何處といつて、當はなけれど、一旦行徳の方へ出て、水戸の大和町にちつと心當りがござんすから、そこで少し稼いだ上、奥州路から越後の方へ、行つたらどうか二人位、暮らせぬ事もござんすまい。

徳兵　成程、それはよい思案ぢやが、わしは着たきり構はぬが、そなたは何かの支度をしやれ。

小三　それは如在なうするわいなあ。何にしろお前はまあ、足も何も泥だらけ、ちよつと湯へ行つて來なさんせ。

徳兵　ほんに、さうせう。久し振りでそなたに逢ひ、汚れてゐては恥かしい。それでは一と風呂はひつて來ようか。

小三　どうぞ、さうして下さんせ。（ト煙草箱の抽斗より錢を出して、）徳兵衛さん、湯錢と手拭を爰へおくぞえ。

徳兵　あゝ、何から何迄忝い。爰が馴染の、

小三　えゝ

徳兵　女房だけぢや。

小三　早う歸つて下さんせえ。

徳兵　そんならお百、行つてくるぞや。

ト徳兵衛手拭を持ち嬉しきこなしにて、合方になり、下手へはひる。小三跡を見送り、ほつと思入あつて、

小三　あのぼんやりした德兵衞が、どうして爰を突き當てたか、甲府へ行つて歸つたら、大方内が明店ゆゑ、すご／＼故郷の大阪へ歸つて行つてしまふだらうと、思つてゐたがけふが日迄、矢張り江戸にまごついて、ゐたとはちつとも氣が附かなんだ。とんだものが舞ひ込んだなう。

トよろしく思入、さんげ／＼になり、下手より以前のお熊、德利を持ち出て來り、門口より内をそつと窺ひ、

お熊　小三さん。

小三　お熊さん、お歸りか。

お熊　今のれきわえ。

小三　今湯へやつたのさ。（ト是にてお熊德利をおき、小三の傍へ住ひ、）

お熊　もし小三さん、お前あれをどうするつもりだえ。

小三　どうしたらよからうかと、今思案の最中さ。重兵衞さんは歸つては來ず、さつきもお前に話した通り、それに今日は武藏屋で、中川さんが殿樣の妾に上れとおつしやるから、行くつもりで相談して、行くと極れば支度金は望み次第、旨く御意に入つた時は、いゝ目が出る上出世の小口、その矢先へ足手纏ひな、あの德兵衞が舞込んで、實にこれにやあ持てあますよ。

お熊　金の蔓に取りつくのだから、重兵衛さんは相談づくで、どうとも話が出來る人だが、今の代物は金づくぢやあむづかしいよ。

小三　それだから、喰ひきりが面倒だわね。

お熊　なに、面倒な事があるものかね、片付けておしまひな。

小三　片付けるとはえ。

お熊　お前、殺しておしまひな。

小三　え、まさかそんな事も、出來ないぢやないか。

お熊　なに、出來ない事があるものかね。さつき魚屋の長助が、小魚を持つて來た時、私がこしらへると言つて、すつかり研いだ此の出刃庖刀で殺せといふ、天道様のお授けだわね。

小三　そんな思ひ切つた事が、わたしにやあ出來るものかね。

お熊　まだそんな事を言つてるよ。何のお前、あんなぼんやり男の一人や二人、わたしも腕一杯手傳ふから、すつぱりやつておしまひよ。

小三　いえ〳〵、わたしにはいけないよ。どうか手をおろさないやうして、殺す仕様はないかねえ。

（トちよつと思入。）おツかあ、かうしたらどうだらう、酒の中へ毒を入れて、呑ましたらどうだら

うね。

お熊　そんな氣の長いことは、わたしや大嫌ひさ。それよりやあ今言つた通りにしておしまひよ。それぢやどうしても殺す事はいやなのかえ。あの、ごうしてもかえ。（トむつとした思入にて、）それが厭ならしやうがないね。

ト小三思案の思入、是をきつかけに、兩窓の黑幕をおろし、仕掛にて行燈暗くなる。風の音のやうなドロ〳〵になり、小三お熊うつとりとなる。此時上手の障子屋體へ海坊主の影うつる。ドロ〳〵きびしく打上げて、小三はつきりとなる思入。是にて兩窓をあける。海坊主の影消える。本釣鐘誂への合方。

小三　お熊さん、なる程、こりやあ殺してしまはうよ。

お熊　それがいつち早手廻しだわね。

小三　色で仕掛けて爰を連出し、殺す所は砂村の、六萬坪の汐入堤。

お熊　湯から歸つて來たならば、酒を勸めて性根を亂し。

小三　そこはわたしの口先で、ころりとやつて片付ければ、跡腹やめず大名の、お手かけ樣になられるわたし。

お熊　お前の肚胸が据つたら、提灯持ちは此のお熊。
小三　もし。（トお熊に囁く、お熊呑込み。）
お熊　そんならわたしは、先きへ廻つて。（ト大きく言ふ。）
小三　あれさ、野暮な聲だなう。（ト是にてお熊口を押へる。）お熊さん、一杯おつけな。
お熊　あい、小三さん、今夜はちよつと際はにやあいけないよ。
小三　熱くしておくれ。
トお熊燗徳利へ酒を入れ、燗をつけ、能代の廣蓋へ土産の肴を載せ出す。時の鐘合方になり、下手より徳兵衛出て、
徳兵　あゝ、いゝ心持になつたわえ。（ト門口をあけて、）お百、今戻つた。深川の水は惡いといふが、仲町の湯はなか／＼よい水であつた。
小三　おや、お歸りかえ。さあ、火鉢の側へ來なさんせ。
徳兵　いや／＼、湯上りは火鉢の傍は逆上せてならぬ。ちつと風を入れようわえ。
ト能き所へ住ふ。お熊徳利を取つて、
お熊　お湯でござりましたかえ。只今迄あなたのお話しを申してをりました。お燗が丁度程でござりま

すから、一つ召上りませ。

德兵　それでは一つ、馳走になりませうか。

小三　あれさ、そんな小さいものではいけないから、是でお上りな。

ト壺の深いぐい呑みを出す。

德兵　いや、是れはきびしいの。

お熊　さあ、お酌をいたしませう。（ト お熊つぎにかゝるを、小三取つて、）

小三　お酌はわたしがするわいなあ。

お熊　はい、これは野暮をいたしました。（ト お熊こちらへ來る。小三德兵衞の酌をする。）

小三　もし德兵衞さん、わたしや是程情立て、此をばさんと二人して、女世帶で藝者をして、お前の事を案じてゐるに、お前大方あれから後に、女房さんでも持たしやんして、仲能う暮してゐなさんせうと、ほんに思へば女子程、損なものはないわいなあ。（ト德兵衞に凭れる。）

德兵　何の女房は愚な事、おれ一人の體さへ持てあましてゐる始末だ。

小三　あれ、又そんな間に合せを。（ト德兵衞をつめる。）

德兵　あいたゝゝ。間に合せ所か、大眞實。

小三　それが定なら、(ト顏を見合せて、德兵衛を引寄せ、)をばさん、堪忍おしよ。

お熊　なにさ、わたしや近日だから、遠慮はないよ。

小三　今夜はどうで。(トちよつと思入。)

德兵　や、(ト小三こなしあつて、片手を下へ突くを、道具替りの知せ、)

小三　歸しやあしないよ。

ト小三よろしく寄添ふ。お熊は一人茶碗で酒を呑む、此の模樣よろしく、早めたる合方にて道具廻る。

(千葉下屋敷の場)——本舞臺三間の間、下手に塗り籠めの稲荷の祠、前に石燈籠、是を畫心に飾り、此後に松の立木、同じく釣枝、是より下手へずつと柵矢來の板塀の裏を見せ、上手三尺程出はひりを付けて、植込みの張物、總て千葉下屋敷内の體、時の鐘、蛙の聲にて道具留る。トばた〳〵になり、上手より新居の彦五郎、紺の手拭にて頰冠り、黑手の着附、しごき一本差し、尻端折り、拔身にて、葛飾次郎右衛門着流し、矢張り拔身、肩先を斬られ、切り結びながら出來り、よろしく立廻りあつて、きつと留り、苦しきこなしにて、

次郎　いづれも、盜賊が入つたるぞ、出逢へ〳〵。(トちよつと立廻つて又一と刀斬られ、)

ちえゝ口惜しや、年寄つたれど次郎右衛門、不意を打たれし此深手、假令五體は叶はぬとも、武士の一念、覺悟ひろげ。

彦五　えゝ、よめえ事をぬかしやあがるな。假令百人二百人、へろ〳〵武士が取卷くとも、びくともする盗人ぢやあねえ。腕は覺えの神影流、極意を極めた免許とり、劍はわざもの二字國俊、わいら如きの手に合はうか、馬鹿な事を。

ト又ばた〳〵となり、下手より逸散に若黨佐五平出來り、此體を見て、

佐五　やゝ、お旦那樣の此の體は。おのれ曲者。

ト佐五平切つてかゝるを、よろしく留めて、

彦五　邪魔立てなさば、我もとも〴〵、冥土の道連れし、覺悟いたせ。

佐五　何を。

ト佐五平又斬つてかゝる。彦五郎よろしく立廻つて、一刀浴びせる。是にて佐五平ムヽと倒れる。爰へばた〳〵にて、上手より秋田の重吉、五郎三郎と切結びながら出來り、きつと留めて、

重吉　頭、爰にか。

彦五　おゝ秋田か、爰はおれが引受けた。手前は是を持つて行き、ちつとも早く此場をふけろ。

重吉　合點だ。

五郎　おのれ盜賊。

ト五郎三郎重吉を引戻しに行くを、彦五郎留める。此内重吉は逸散に花道へはひる。彦五郎、五郎三郎ちよつと立廻つて、下手にある石燈籠を、彦五郎足にて蹴る。是れにて燈籠五郎三郎の方へどつさり倒れる。是にてたぢろぐ内、彦五郎隙を見て、下手へ逸散にはひる。五郎三郎きつとなつて、

何處までも。

ト行きかゝる。此時五郎三郎、次郎右衛門に躓きすかし見て、

やゝ、父上樣には深手を負ひしか。もし親父さま、父上さまいなう／＼。あゝこれ、最早事が切れたるか。はゝあ、此上は今の盜賊、遠くは行くまい。跡追つかけて、それ。

トきつとなる。此時佐五平起上つて、彦五郎と心得むざと斬りかゝる。五郎三郎身をひねり、佐五平の腕をきつと抑へ。

こりや佐五平、うろたへて何んといたすぞ。（ト佐五平をよく／＼見て、）扨は汝も、手を負ひしか。

佐五　若旦那樣でございますか、口惜しうござりまするわえ／＼。

五郎　父上樣の横死といひ、汝迄も、あゝ不便な此場の成行きぢやなあ。

佐五　もし、若旦那、猶豫いたす所でない。ちつとも早く、今の盗賊をお押へなされ、早く〳〵。

五郎　言ふにや及ぶ。（トきつとなつて立上る。佐五平は落入る。五郎三郎死骸を見て、愁ひの思入あつて、心を替え、むゝと息込むを、道具替りの知らせ、）はあゝ。

ト泣伏す。風の音、蛙の聲にて、此道具廻る。

（同屋敷奥庭外廻りの場）——本舞臺、後ろ黑幕、上手へ竹矢來の小口を見せ、是より舞臺一面の竹藪下手矢張り藪疊、總て屋敷の内、奥庭外廻りの體、庭石三四枚積重ねある。此上へ以前の千兩箱をおき、重吉刀を振り上げたる見得。中間一人眉間を押へ、刀をさし付けたる見得、早めたる合方、風の音にて道具留る。

トやはり右の鳴物にて、烈しき立廻りあつて、中間を下手の藪疊へ追ひ附ける。此時藪の内より、白刃出て中間を貫く。是にてわつと言つてどうとなる。本釣鐘を打込み、藪疊の内より以前の彦五郎出る、此時月出て、兩人顏を見合せ、思入あつて、

彦五　重吉か。

重吉　あい親分、今夜の仕事はそつくりと、骨折らさずと思つてゐたが、野暮に仕事がいごかつたね。

彦五　さうよ、此の働きで一と箱ぢや、あんまりまうでもなかつたの。

重吉　さやうさ、さうしてこいつは。

彦五　なに、大概今ので、いきついたらうよ。

ト重吉千兩箱を抱へ、彦五郎刀を拭ふ。此時後ろの竹藪より、塒の雀ぱつと立つ、兩人は左右へ別れる。竹藪の眞中を押し割けて、葛飾五郎三郎、袴股立ち、大小りゝしき裝にて槍を持ち、つかつかと出來り、

五郎　親の敵の兩人とも、そこ一寸も動くまいぞ。（トきつと言ふ。）

彦五　えゝ、入らざる二歳の小腕立。秋田ぬかるな。

重吉　合點だ。

ト又重吉切つてかゝる。五郎三郎槍にて立廻り、此内彦五郎又斬りかゝる。五郎三郎槍にて突いてかゝる。彦五郎槍を受け損じて股を突かれ、ひるむ所を五郎三郎つけ込んで突きかけるを、後ろより重吉斬つてかゝる。此立廻りよろしくあつて、三人きつぱりとしたる見得にて、チョンと月隱れる。三人暗がりの探り合ひあつて、此内重吉は千兩箱を抱へそつと遁れて花道へ行き、逸散に花道へはひる。彦五郎暗がりにて斬込む。刀、石へきりかけ、石火ぱつと立つ。此の火影にて五郎三郎槍をつきかける。又立つて彦五郎足の疵を抑へ、花道の附際迄行く。四郎三郎石突にて探る心にて、中間に

とんと當る、これにて中間心附き、

中間　おのれ、盜賊。(ト立上らうとして、よろ〳〵となるを、五郎三郎聞き耳立て、)

五郎　これ。

ト石突にて中間を押へる。花道にて彦五郎エイと礫を打つ、五郎三郎身をかはしてきつとなり、槍の石突をつく。彦五郎は花道へべつたりとなる。双方見合つて、木のかしら。

ちえゝ、殘念やなあ。

ト五郎三郎は向うを見込む、彦五郎は花道へはひる。中間は刀を突き苦しむ。此の仕組よろしく、三重本釣鐘の送りにてよろしく、

ひやうし　幕

ト幕引附けると、浪の音にてつなぎ、直に引返す。

五幕目返し　砂村横堀殺の場

〔役名――和尚次郎、藝者小三實はだつきのお百、桑名屋德兵衞、彦根の金、雇婆お熊等。〕

(砂村横堀の場)――本舞臺三間の間、高足へ本緣だけ附けたる、棕櫚伏せの草土手、此前上手へ寄

せて常足の二重な二枚、やはり棕櫚伏せの草土手の蹴込み、後ろ黒幕。高二重一面に玉椿の生垣、捨石二つ程置き、眞中に臺石の附きたる石の地藏、此後へ卒塔婆を三本立て、少し上寄りに柳の立木、日覆より同じく釣枝、下手植込みの張物にて見切り、平舞臺一面に浪布を敷き、舞臺前、諸所へ青葉の蘆の浪板、總て砂村横堀の模樣、爰に切溜の入りたる包みを背負ひ、弓張り提灯を持ち、鼠の着附の坊主、一升徳利を提げ立掛りゐる。此の見得よろしく、浪の音、禪の勤めにて幕明く。

○　もし〳〵、お見かけ申してお聞き申しまするが、砂村の燒場は、何處でござりまする。

坊主　何だ、燒場か、是から此土手を下りて、二丁ばかり行くと、直に明りが見えるから、その火かげを見當に行くがいゝ。

○　有難うござります。此前家主の嚊がごねた時、一遍來たことがありますが、矢張り夜の事だからちつとも道が分りませぬゆゑ、さつきから、此土手にまごついてをりましたが、よいお方にお目にかゝつて、やう〳〵道が知れました。

坊主　さうしてお前、燒場の方へ何しに行くのだ。

○　へい、今夜泊つて佛を燒きに來た衆の、辨當を持つて行くのでござりまする。

坊主　それぢやあ別火の佛なら、近江屋のお使ひだね。

○　へい、左様でございます、お前さん、よく御存じでございますね。
坊主　知つてゐる所ぢやねえ。おれは燒場の傍の庵寺の坊主だ。それぢやあおれと一緒に來るがいゝ。
○　それでは御一緒に參りませう。ときに、何時でございませう。
坊主　さうさ、九つを打つてから、酒を買ひに行つて來たが、夜が短えから、かれこれ九ツ半でもあらうよ。
○　さうでございますか。ところの衆とは言ひながら、今時分酒を買ひに行きなさるとは、險難なものでございますね。
坊主　なにさ、ごろで燒場は佛せえありやあ、夜通しだから夜中に出て歩くは、何とも思やあしねえのさ。
○　しかし、よいお方にお目にかゝつて、私も仕合せでございます。
坊主　おれも、お前の提灯で、助かるから兩爲めだ。
○　そのくせ背負つてゐるものは、切溜めでございまする。
坊主　何を言はつしやる。さあ、行かうか。
○　はい、提灯持ちは先きに立ちまする。

トやはり禪の勤めにて、兩人は下手へはひる。時の鐘。蛙の聲になり、上手より前幕の藝者小三褄を端折り、草履にて、蕨のつきたる提ぶらをさげ出で來り、其後より德兵衛前幕のなり、尻端折り、草履にて、萌葱の風呂敷包みの大きなるを背負ひ出來り、よき所に留り、

德兵　お百や、何だか、まツ暗な晩だの。

小三　曇つてゐるから暗い筈だ。もし德兵衛さん、宵の雨で道が悪いから、辷らないやうにおしよ。

德兵　おい〳〵承知だ〳〵。さうして爰は、何といふ所だの。

小三　爰かえ、爰は洲崎の六萬坪といふところさ。

德兵　浪の音がするが、前は川と見えるの。

小三　あい、砂村の汐入りつゞきの土手さ。

德兵　さうか、隨分淋しい所だの。

小三　どこだといつて今時分、賑かな所があるものかね。

德兵　これ、お百、何んだか此包みが重くつて、肩がめり込むやうぢや。ちよつと一と休みやらかさうか。

小三　嘸まあ重からうが、どうで家を逃げるのだから、なるたけ餘計に持つて行かうと思つたゆゑ、洗

ひざらひ入れて來たのさ。

徳兵　道理で、うんと應へると思つた。

小三　もうちつとだから、土手迄我慢おしな。

徳兵　土手といふのは、もう直かの。

小三　ついそこだから、足許を氣を附けておいでよ。

徳兵　大丈夫ぢや〳〵。（ト本舞臺へ來り、あたりへこなしあつて、）

小三　爰に捨石があるから、爰へかけてちつと休んでおいでな。

徳兵　さうせう〳〵、やれ〳〵、重い包みぢや。やれ、どツこいしよ。

ト捨石へ腰をかける。小三傍の石へ腰をかけて、

小三　もし徳兵衞さん。是から先が道が長いから、よつ程しつかりしておくれでないといけないよ。

徳兵　それはおれも承知してゐる。さうして是から何處へ行くのぢや。

小三　何處といつて、さつき内で言ふ通り、まあ夜の明けない内に行徳まで行つて、夜があけたれば駕籠に乘つて、土浦から銚子へ出て、水戸まで行つたらちよつと足をとめて、そこで少し路用を稼いで、それからだん〳〵奥州の方へ稼ぎ〳〵行つたらば、路金に困る氣遣ひないから、まあさ

うして行くつもりさ。

徳兵　成程、それではごうか行かれるだらうが、これお百、おれは此通りこんな姿になつたれば、賴みに思ふはそなたばかり、どうぞ見捨てぬやうに、面倒を見てくりやれよ。

小三　お前もまア、詰らない事を言ふぢやないか。お前を見捨てる位なら、こんな詰らない思ひをして、内を捨て出るものかね。お前をそんな姿にしたのは、元はと言へばわたしが業、假令辛い勤めをするこも、生涯お前を過すから、心細いことを言はずと、氣を丈夫に持つておくれ。是れからは旅先だから、煩らつちやいけないよ。

徳兵　おゝ、さうぢや／＼。おれもしつかりする心ぢや。あゝ見る影もない此のおれを、そのやうに思うてくれるは忝い。これお百、おりやそなたを女房と思ふと罰が當る。おれが爲には、神佛ぢや。これ、手を合せて拜むぞよ。

小三　又そんな事をお言ひだよ。女房が亭主の世話をするのは、當り前のことだわね。もう／＼そんな事を言はずと、だん／＼稼いでこの暮あたりは、越後の新潟へ行つて、一二年も働いたら、生れ故鄕の大阪へ、假令錦は飾らずとも、襤褸をさげずに歸られようから、それを樂しみにして下さんせ。

德兵　何でもそなたが力ぢやによつて、どうぞ體を大事にしてくれよ。

小三　それはお案じでないよ。もし德兵衞さん、うか／＼爰にいつまでゐて、人目にかゝらば互ひの身の上、さあ出かけようぢやないか。

德兵　おゝ、さうとも／＼、追手にでも出逢つた日には、そなたの心配も水の泡ぢや。

小三　さ、もう一息、辛抱して下さんせ。（ト小三德兵衞の後より包みに手をかけて、）それ、立てるかえ。

ト是れにて德兵衞やつと立上り、

德兵　おつと、大丈夫ぢや。

小三　さあ、行かうわいなあ。

ト兩人よろしく立上る。此前方より箱根の金、非人の拵へにて、菰をすつぽり冠り、上手より窺ひながら出來り、兩人の樣子を窺ふ。小三是に心附かず、下手へ來て提灯の灯を消す。德兵衞思入あつて、

德兵　やれ／＼、提灯が消えたか、困つたものだ、川風が吹込んだのであらう。

小三　なにさ、蠟燭がたつてしまつたのさ。

德兵　さうか、あゝ、とんだ事をしたわえ。

小三　どうも仕方がないから、わたしに附いて、そろ／＼とお出で。

徳兵 おい〳〵、川の方へ寄ると危いぞよ。

小三 あい〳〵。

ト小三徳兵衛の手を引いて、だん〳〵と上手へ行く。非人の金窺ひ〳〵附いて來り、玉椿の蔭へ忍ぶ。徳兵衛こなしあつて、

徳兵 さつぱり方角が知れぬわえ。

小三 もつとそつちへ、寄らしやんせ。

徳兵 おい〳〵。

ト本釣鐘、だん〳〵合方凄味になり、小三徳兵衛の手をとつて、二重のはなへ連れ行き、後ろから徳兵衛の背中を突く。是れにて徳兵衛前の流へ轉げ落ちる。小三驚いたるこなしあつて、

小三 あれ、危い、辷つたのかえ。早く土手へつかまつて、上つておくれ。

ト徳兵衛は平舞臺へ落ちて、上手の二重の杭に摑まつてゐて、

徳兵 いや〳〵、辷りやあせぬのぢや。そなたがおれを、突いたのぢや。

ト小三は高二重にて、

小三 あれさ、詰らぬことをお言ひでない。何でわたしが突くものかね。早くまア、上つておくれよ。

ト此内徳兵衞は下にゐて、

徳兵　何せえ、まあ此の包みをとつてくれ。

小三　何だ風呂敷包みかえ。

徳兵　それ、包ぢや、よいか〳〵。

ト徳兵衞背負ひし包みを取つて、小三に渡す。小三とつて脇へおき。

小三　ほんに、世話のやけた人だなう。

ト思入、此内徳兵衞は土手へ這ひ上る。小三帶へ差したる匕首をぬき、すかし見て、出しぬけに徳兵衞の肩先へ斬り附ける。徳兵衞びつくりして、又どうと川へ落ち、

徳兵　これお百、何でおれをたゝくのぢや。あいたゝゝゝ。

ト小三はあたりへ思入、徳兵衞肩先の疵口を探り、手へ糊紅附く、是れにてびつくりして、

や、こりや、おれを斬つたのぢやな。えゝ、人殺し。

ト言ひながら、這ひ上るを、

小三　えゝ、やかましい。

ト又斬附ける。徳兵衞カツと苦しみながら、草を拗つて打ち附ける。小三これを拂ふ。徳兵衞はよろ

めく所を、後ろより突倒す。是にて半身土手から落ちかゝり、苦痛の思入。小三匕首を振上げて、きつと見得。一つ鉦、誂への合方になり、徳兵衛よろしく苦しき思入あつて、

徳兵　やいお百、さては逃げると言つたのは、爰までわしを釣出して、殺す心であつたよな。

小三　知れたことさ。誰がお前と眞劍に、逃げる奴があるものか。已惚れ過ぎるにも程があるよ。

ト是れを聞き、徳兵衛口惜しき思入にて、

徳兵　えゝ、人でなしの大惡人、さういふ心と露知らず、うか／＼爰まで騙されて、連れ出されしか口惜しい、手は負うたれど男の一念、おのれも生けて歸さうか。

ト又這ひ上り、小三に飛びかゝらうとする。此時蘆の蔭より前幕のお熊出て、徳兵衛の襟上をとり、引倒して、

お熊　これさ、じたばたと騒ぎなさんなよ。（ト此聲を聞き、）

小三　おつかあ、早かつたの。

お熊　何さ、さつきから爰へ來て、蘆原の蔭に忍んでゐたが、すてきに藪蚊に刺されたよ。

小三　それぢや今迄、見てゐたのか。

お熊　あいさ、見物しながら出かける場所の、隙を狙つてゐたところさ。おい、もう藻搔いても仕方がな

いよ。所詮命は助けねえから、舌でも喰つて往生しねえな。

徳兵　それぢやあ、われもお百が相ずりだな。

トお熊徳兵衛を酷く蹴倒す。徳兵衛糊紅になり、苦痛の思入あつて、

やい、お百、是れ程酷いやつとも知らず、おのれゆゑに身代も捨てゝしまつた此の徳兵衛、艱難苦勞で上方から、江戸まで連れて下つたおのれ、何の恨みで殺しをるのぢや。

ト恨めしさうに言ふ、小三捨石へ腰をかけて、

小三　内を疊むも艱難も何でわたしが知つたことか、言はゞお前がぐづだからさ。なにも爰まで引出して殺す程な恨みもないが、種を言やあ理窟がねえ。お前のどぢに愛想が盡き、三文なしのこなさんと、商人ながらも錢金の、切れ放れのいゝ重兵衛さんに、牛を馬に乘りけえて、今ぢやあ氣樂な自前の藝者、座敷を勤めるその内に、千葉の屋敷の重役で、中川さんといふ人に、又乘り換えて身をまかせ、その又縁で千葉樣の、お妾になる此お百、さうなる時にやあ大名のお部屋となれる立身出世、お前のやうな惡足が、あつちやあ出世の邪魔ゆゑに、お氣の毒だが今日爰で、お前を殺してしまふのさ。どうで生きても其樣ぢやあ、所詮世界の娑婆塞げ、まご／＼するよりいつそのこと、殺してやるのもお前の爲、愚癡をこぼさずあきらめて、早く往生しておしまひな。

ト小三ふてぐ\しく言ふ。此内お熊は素知らぬ顔にて、藪蚊を拂つてゐる。徳兵衛無念の思入にて、

徳兵　假染ながら此おれは、おのれの爲には主人なり、亭主のおれを手にかけるは、如何に心が鬼にもせよ、三尺高く木の空で、死ぬのをわれは願うてゐるか、言はうやうないおのれはなあ。

トよろしくこなしあつて言ふ。お熊徳兵衛を是にて押へつけ、

お熊　えゝ、餘計な事をほざきやあがるな。

トお熊徳兵衛の口を押へる。徳兵衛お熊にむしや振り附く、お熊其手を拂ふ。

徳兵　おゝ主殺しぢや、亭主殺しだ。

ト大きく言ふを、又口を押へる、その手を放さうとする。兩人摑み合ひの立廻りあつて、トゞお熊徳兵衛を捻ぢ倒し、たぶさを摑んで捻伏せる、是にて徳兵衛もがきながら、

主殺しだ。

と是にてお熊押へつける。小三是をぢつと見てゐて、

小三　えゝ、いゝ加減に默らねえか。（ト誂への合方虫笛になり。）おい、徳兵衛さん、お前が幾ら怒鳴つても、人里離れた六萬坪、聞きてはわたしとおツかあと、石の地藏と三人限り、淒味なことを言ふやうだが、妲妃のお百と異名をとり、是まで人を化したが、尻尾を見せた事はねえ。十四の年か

ら桑名屋へ、小間遣ひからすり込んで、擧句がお前をたらし込み、いやな妾も慾德から、たらとう下齒を責めさいなみ、ほんに腹こそ裂かねえが、餓鬼を孕んだ臨月に、お前の女房が狂ひ死、それから跡がしてえ三昧、擧句の果が京大阪とへめぐつて、今ぢやあ江戸で藝者の小三、三國渡つた此のお百が、亭主殺しの殺生石、是から千葉のお妾で、飛ぶ鳥落す勢に、なつて惡事を那須野ヶ原、草葉の蔭から德兵衞さん、わたしの出世を見物おしな。

ト思入あつて言ふ。德兵衞是を聞き、無念のこなしにて、

德兵　飽く迄根强いその雜言、聞けば聞く程、極重惡人。

ト德兵衞の頭を匕首にて切りつける。是にて德兵衞わつと言つて苦しみ、仕掛にて糊紅顏へ流れる。

小三　えゝ、何をぬかしやあがるのだ。

德兵衞お熊をはねのけて、小三に飛びかゝらうとするを、お熊後から德兵衞に組付き、

お熊　小三さん、長く苦しませるも殺生だ。一と思ひにやつておしまひな。

小三　さうさ、もう爰らで息の根を。（ト立上り）ごれ、留めて上げようねえ。

ト小三七首を持ち、德兵衞のたぶさをもつて胸へ突通す、是にてワツともがきながら、お熊の髮の毛を摑み、よろしく落入る。小三は是を見てにつこり思入、お熊德兵衞が毛を摑んだろ手を放さうとし

ても取れぬゆゑ

お熊　小三さん、どうかしておくれな。執念深いやつぢやないか。

ト　お熊その儘立上る。是れに附いて徳兵衛ひよろ〳〵と立つた、小三徳兵衛の腕をおさへて匕首にて、摑んだる指を斬る思入、是にて徳兵衛よろ〳〵となつて、前の切穴へ、どんと落ちる。水の音きびしく、水の花ぱつと立つ。

おゝ、天窓もなにも代無しにしやあがつた。

ト　捨ゼリフにて地藏の後にある卒塔婆をとつて、土手の下へおり、死骸をつゝき込み、思入あつて流れにて手を洗ひ、土手へ上る。小三は此内草にて匕首の糊を拭ひ、お熊こなしあつて、

もし小三さん、此の堀は下が沼だから、すつかり塔婆でつゝき込んでおいたから、めつたに浮上る氣遣ひなしだよ。

小三　そりや御苦勞だつた。おいお熊さん、見ねえ、そこら中へ血糊がはねたものだから、着物をすつかりとよごしてしまつたアな。

お熊　どうせ着物は、うつちやりものさ。

小三　とんだ散財だの。

お熊　そりやあいゝが、臓物を片附けたから、そろ〳〵行かうぢやないか。

小三　そりやあいゝが、お前大儀でも、此の風呂敷包みを、背負つておくれな。

お熊　おつと承知。ちよつと背中へおツつけておくれ。

ト小三風呂敷包みをお熊に背負はせる。お熊風呂敷を結びながら、

何をお入れだか、大層な目方だねえ。

ト此時以前窺ひ居たる箱根の金、石地藏の後よりそつと顔を出す。小三是を見てぎつくり思入、お熊に囁く、小三先へ行けといふ思入、お熊呑み込み素知らぬ顔にて、

それぢやあ、先きへ行きますよ。

ト浪の音にて、お熊跡を見送りながら、上手へはひる。小三跡に殘り、差したる匕首にて金を殺さうといふ思入にて、そつと跡へさがり窺ひ居る。此時下手の玉椿を破つて、和尚次郎の吹替、頬冠り、好みの拵へ、尻端折りにて窺ひ〳〵出來り、次郎は金と心得、探りながら傍へ來て顔見合せ、兩人ぎつくり思入、誂へ一つ鉦の入りたる鳴物になり、小三行かけるを、次郎引戻す。是を拂ふ立廻りちよつとあつて、後より金出て、此中へ割つてはひり、小三を救ふ心にて有合ふ卒塔婆にて次郎へ打つて掛る。この立廻りの内、小三はすり拔けて手拭を冠り、金の脱ぎ捨てし菰を冠り、地藏の後へは

ひる。次郎はお百の落せし簪を拾ひ、金とちよつと立廻り、よき程に次郎石地藏の後より押す。是にて地藏ばつたり前へ倒れる。是れに金足を打たれて、二重へ轉げ落ちろ。次郎は飛び退き足を踏出す。小三は地藏の臺石へ足を踏みかける。双方一時に木のかしら、此時水鳥を大分あひ引にて日覆へ引上げる。小三は菰を身に纏ふ。次郎は簪を星明りにてすかし見る。金は足を擦りゐる。此の仕組よろしく、浪の音、本釣の寺鐘にて、

ひやうし幕

六幕目　西横網美濃屋の場

〔役名――美濃屋重兵衞實は新居の彦五郎、和尚次郎、秋田の重吉、藝者小三、雇婆お熊、堅田の金五郎、家主與次兵衞、箱廻し小助、小按摩波市。作兵衞娘お峯、船頭二名、捕手大勢等〕

〔西横網美濃屋の場〕――本舞臺三間の間、平舞臺、正面一間月影の襖、此脇三尺瓦燈口の佛檀、下けんどんの襖、續いて更紗の暖簾口、下手腰張の茶壁、三味線掛、上の方一間折廻し障子屋體、いつもの所門口、下の方一間美濃屋といふ腰障子、藝者小三内の體。爰に箱廻しの小助、船頭〇△着流し、三尺帶、船頭のなり、小さな廣蓋に二つものゝ肴、德利猪口にて酒を呑み居る。此傍に小按摩波市指をならしながら、十四經を言つてゐる。此模樣はやり唄の合方にて幕明く。

波市　先づ七九けんびきは大髓の骨より左右へ別つて、凡そ二寸程なり。

小助　かう〳〵波市さん、靜にしてくんなせえな。
波市　それでも是を忘れると、明日師匠に叱られるもの。
小助　そりやあお前が無器用だからだ。
波市　あい無器用だからさらふのだ。まづ七九けんびきは大髓の骨より左右へ別つて、
○　かう〳〵、もう七九けんびきは、いゝ加減にしねえな。
△　それ程覺えてゐりやあいゝぢやあねえか。
波市　溝をまたぐと忘れるから、何遍もやるのだ。先づ七九けんびきは大髓の骨より左右へ。
小助　成程、盲は強情なものだな。
波市　先づ七九けんびきは。
○　これさ、さう執拗く言はねえで、酒でも一杯呑みねえな。
波市　わたしは酒は大嫌ひだ。先づ七九けんびきは。
△　お前酒が嫌ひなら、玉子燒でも喰はねえか。（ト玉子燒を取つてやる。）
波市　あい、そりやあ有難うございます。（ト波市とつて、）玉子燒は大好きでございます。（ト喰ふ。）
小助　やれ〳〵、やう〳〵靜になつた。

△　かう、御馳走になつて言ふのぢやねえが、小三さんの様な藝者衆はねえな。
○　そりやあねえ筈だな、まづ、
小助　七九けんびきは、
○　これさ、混ツけえしちやあいかねえ。まづ女がよくつて、程がよくつて、さうして氣前がいゝと
いふのだから、此上があるものか。
小助　あれで産れが上方だが、どう見てもさうは見えねえね。
△　見えねえ筈だ。此頃ぢやすつかり江戸ツ子だ。
波市　先づ七九けんびきは。
○　えゝ、また初まつたのか。
波市　それぢや、もう一つ玉子焼をくんねえ。
△　いや、意地のきたねえ奴だな。
トまた玉子焼を取つてやる。此内始終酒を呑みゐる。やはり右の合方にて、下手より家主與次兵衛羽織着流し、よいよいの家主にて二本杖を突き出來り、直に門口へ來て、
與次　だ、だ、大分賑かだの〳〵。

小助　やあ、大變だ〳〵。よい〳〵大家が出て來た。あいつに吸込まれては大變だ。
○　早く呑んで片附けろ。
△　もう一杯呑むから、待つてくれ。
小助　跡でゆつくり呑むがいゝ。（ト皆々片付けにかゝるを、門口から見て、）
與次　あゝこれ〳〵、おえが來たと言つて、しまふにやあ及ばねえ〳〵。まあ一杯呑ましてくれ〳〵。

トひよこ〳〵と內へはひる。

小助　もし〳〵大家さん、上げるのは惜しくはねえが、お前の體へ酒は毒だ。
○　もう天王樣が近いから、呑みなさらねえ方がいゝ。
與次　なに、呑んだつて大丈夫だ〳〵。足に毛があゆから、よい〳〵なぞになりやあしねえ。

ト言ひながら轉ぶ。

○　それ見なせえ、轉ぶくせに。
與次　なに、こりやあ一人角力をとつたのだ。
△　これさ大家さん、あぶねえから、まあ下にゐて、一杯おやんなせえ。
與次　そいつは有難え〳〵。

ト與次兵衞ふる〳〵猪口を取る。船頭△酌をする。

波市　先づ、七九けんびきは。

○　又初めたか、それ、玉子燒だ。

波市　あい〳〵、有難うござります。

與次　もう一杯ついでくれ〳〵。

△　今呑みなすつたぢやあねえか。

與次　駈けつけ三杯は、お定まりだ〳〵。

波市　先づ七九けんびきは、

○　こいつあ精根が盡きるぜ。

小助　いやはや、とんだものが舞込んだな。

ト船頭○は波市に玉子燒をとつてやる。船頭△は與次兵衞に酌をしてやる。此時下手より堅田の金五郎頰冠り菰を着て出來り、門口から内を覗き込む、小助見て、

何だ、人の内を覗き込みやあがつて、手がふさがつてゐらあ、早く行け。

金五　やかましいや、行かうと行くめえと、おれが足だ。うぬらが世話になるものか。

小助　うぬらたア何だ。宿無しのくせにしやあがつて、御大層な事をぬかしやあがるな。
金五　ぬかしたらどうする。錢を貰やあ旦那様だ。かけ錢一文貰はにやあ、うぬらだつて、乞食だつて
三度の飯を喰ふ人間だ。
小助　三度喰ふもすさまじい、洗ひ流しやお餘りを、尻尾をふつて喰やあがる、うぬらは犬も同然だ。
金五　洗ひ流しやお餘りを、頂いて喰ふ宿無しと、一つにうぬらは思やあがるか。年が年中飯屋から、
炊き立ての飯が來て、今日は鰹、明日は鯉こ、茶屋小屋へこそ行かねえが、身分相應呑み喰ひに
やあ、贅澤をしてゐる宿無し様だ。殘り肴や燗ざましの、酒を喰ふうぬらとは、菰を着てゐても
譯が違ふ。
小助　なに、燗ざましを喰ふとは、そりやあ誰がことだ。
金五　誰でもねえ、うぬらのことだ。
小助　なに、おれがことだと。
ト小助立ちかゝるを、船頭○△これを留めて、
○　これさ〳〵、かつたいに棒打だ。
△　相手が惡い、構ひなさんな〳〵。

小助　それだといつて、あんまりなことをぬかしやあがるから、毆らにやあ腹が癒ねえ。
金五　腹が癒にやあ毆れ〳〵。毆られてえのだ。
小助　毆らねえでどうするものか。
ト立ちかゝるを、船頭○△捨ゼリフにて、小助を留めながら、
○　これ〳〵、手前も早く行くがいゝ。
△　喧嘩をしちやあ詰らねえ。
金五　なに、喧嘩をする氣もござりませんが、あんまり野だは言をつきやあがるから。
○　まあ、いゝから。
兩人　早く行きねえ〳〵。
金五　お前さん方がさうおつしやるから、今日は此儘歸ります。やい間拔野郎、あした來るから待つてゐろ。（ト右の合方にて金五郎、づう〳〵しく下手へはひる。）
小助　うぬ、待ちやあがれ。
兩人　これさ、いゝ加減にしねえといふに。
ト小助を留める。此の喧嘩の內、與次兵衛手酌で無暗に酒を呑み、嬉しき思入、波市は手際に肴を摘

んで喰ふ、皆々見附けて、
○　かう〳〵見や、摘み物を波市が、大概喰つてしまつたぜ。
△　盲滅法界といふのは此事だ。
波市　先づ七九けんびきは。
○　えゝもう、大概にしねえか。
△　もう遣るものは、ありやあしねえ。
小助　肴は仕方がねえが、酒はどうだね。
與次　こや大きに御馳走になつた。（ト酒に醉つたる思入、小助德利を振つて見て、）
小助　今の騷ぎによい〳〵大家め、みんな吞んでしまやあがつた。
○　錢の出ねえ酒だといふと、よい〳〵になつても吞むのだ。
△　そこが大家根性だ。
與次　あゝ、いゝこゝよもちに醉つた。
小助　さあ〳〵、是れから角力甚句がいゝ。始まり〳〵。
ト與次兵立衞上り、甚句を唄ひながら、よい〳〵の蹈になる。此時奧より小三不斷着にて出來り。

小三　大家さん、いゝ御機嫌でござりますね。
與次　おゝ小三ばうか、此衆に勸められて、一杯やつたのだ〳〵。
小助　誰がお前に勸めるものか。
○　小三さん、鹽梅はどうでござります。
△　ちつとはようござりますか。
小三　昨夜はお座敷が更けたので、いつもの頭痛が起つたのだが、波市さんに揉んで貰つたので、ちつと輕くなりました。
○　そりやあようござります。此の小僧は形に似合ず、療治が巧者でござります。
波市　それは修業が違ふからだ。先づ七九けんびきは。
△　また、初めたかよ。
小三　けふはお前方は遊びかえ。
○　昨日からの水氣で、船頭は上つたりさ。
△　そこで一杯御馳走になりに、二人連れで參りました。
小三　三ツ割を貰つて困るのだから、たんと呑んで行つておくれよ。

與次　そいつア有難え／＼。（ト小三煙草を呑みながら、）

小三　小助どん、もう何時だえ。

小助　もう今に暮れます。

小三　それぢやア大層寐たね。

小助　市村ははだしでございます。

小三　まさか、さうでもないわね。そりやあさうとをばさんは、何處ぞへ行つたかえ。

小助　何か洗ひ物があると言つて、裏へ出て行きなすつた。

小三　おや、さうかえ。さうして大家さんは、何ぞ御用かえ。

與次　おゝ、おふえがあつて來たのだ。

小三　何のお觸でございます。

與次　昨夜千葉の屋敷へ、どよばうがはひつて／＼。

小三　大家さん、どよばうといふのは、何でございますえ。

與次　それ、どよばうの事よ。

二人　やはりどよばうだ、はゝゝゝ。

小三　そのごよばうがどうしましたえ。
與次　どうしたのだか、わすイた〳〵。
波市　えゝ覺えの悪い大家さんだ。わたしなぞは、忘れたことはありやあしねえ。先づ七九けんびきは大隨の骨より左右へわかつて。
○　また七九けんびきか。
△　肩の張る程聞き飽きた。
與次　何にしろおふえの事を、さつぱり忘いてしまつた。
小助　そのお觸はからでござりませう。昨夜千葉のお屋敷へ、泥坊がはひつて、千兩金を盗んだ所、その金は一兩々々、月星の極印があるので、遣つたものがあるならば、千葉の屋敷へ訴へ出ろ、褒美はしつかり下さるといふ、そのお觸でござりませう。
與次　おゝ、その通り〳〵。（ト此内小三思ひ入、時の鐘。）
△　また昨夜六萬坪で、人殺しがあつたさうだね。
小助　委しいことは聞かねえが、意趣切りだといふことだ。
○　昨夜小三さんは遲かつたさうでござりますが、お座敷は何處でござりました。

小三　えゝ、わたしや洲崎の武藏屋さ。

兩人　さうでござりますか。（トこれにて小三思入あつて、）

小三　あゝ、大層肩が張つて來た。

波市　ちつと揉みませう。

小三　さうして貰はうよ、大家さん、御免なさいまし。

ト時の鐘、合方になり、波市小三の後へ廻り、「まづ七九けんぴきは」と言ひながら、肩を揉みかゝる。奥より雇ひ婆お熊、行燈を提げて出來り、

お熊　秋の日は忙しない。今しがた七つを打つたが、もう日が暮れてしまつた。

小三　をばさん、洗濯をしておくれださうだね。

お熊　人手にかけると落ちないから、わたしが洗つてしまひましたよ。

小三　そりやあ御苦勞だつたね。まあ息つぎに一杯おやりよ。

お熊　しまつてからやりませう。

與次　それぢやあおゑが代りに、もう一杯呑まう〳〵。

お熊　大家さん、お前さんにやあ毒だよ。

與次　毒でもいゝから、呑ましてくれ〳〵。

お熊　呆れ返つた代物だ。

ト謎への合方になり、皆々酒を呑みゐる。花道よりお峯、やつしなり、手拭をすつとこ冠りに冠り、三味線を弾きながら出來り、

お峯　三日見ぬ間に櫻かなと、僅か四五年たつた内に　爰もかしこも以前と變り、かうして忍んで歩いても、知つた人に逢ひもせず、ほんに世間の變るにつけ、爰で藝者をしたものが、門を流して歩くとは、かうも變るものかいなあ。

ト思入あつて舞臺へ來り、門口へ立ち、三味線を弾く、内では小三波市に揉ませ、皆々は酒を呑みながら、お熊門口の三味線へ聞耳立て、

お熊　もし小三さん、表にゐる門附は、いゝ音じめぢやあございませんか。

小三　わたしもさう思つてゐるのだよ。どんな人のなれの果か、今此の土地にもあの位、弾くものはないやうだね。

○　なに、ないことがございませう。

△　小三さんといふものがあります。

小三　常談はのけて感心だね。をばさん、おあしをやつておくれな。

お熊　あい／＼。（ト笊の中から錢を出し、門口へ來て、）あいよ。（ト錢を出す。お峯手を出し顏を見合せ、）や、お前は峯吉さんぢやあないか。

お峯　え、さう言はしやんすは。

お熊　お熊婆アだよ。

お峯　おや、隣り裏にゐなさんした、お熊さんでござりましたか。誠にこんななりになりまして、お恥しうござりまする。（トお峯うつむき、面目なき思入。）

お熊　いつかお開帳のあつた時、粕壁の旦那の所から、内へ歸つておいでだと、話しに聞いたが、あれぎり一度もお目にかゝらんなんだから、委しい譯も聞かないが、どうしてお前は門附なぞに出なさる樣になんなすつたのだ。

お峯　それにはいろ／＼、言ふに言はれぬ餘儀ない譯がござんすが、その内お目にかゝつた時、ゆつくりお話し申しませう。（トお峯行かうとするを、お熊留めて、）

お熊　まあ峯吉さん、ちよつとお待ち、又その内と言つたとて、いつ逢はれるか知れないから、兎も角も内へはひつて、お茶でも呑んで行つておくれな。

お峯　有難うございますが、さうして爰のお内は。

お熊　小三さんといふ藝者衆の内でわたしや雇ひに來てゐるのだが、遠慮はないから内へおはひりよ。

お峯　はひつてもようござんすか。

ト　お峯手拭をとり、内へはひる。和尚次郎　頰冠り尻端折りにて出て、お峯に思入あつて、門口に窺ひゐる。

小三　をばさん、お前の知つたお方かえ。

お熊　あい、いつもわたしが噂をします、峯吉さんでございます。

小三　おや、さうでござんしたか。それぢや音じめのよい筈だつたね。波市さん、もうよいよ。

ト　是にて波市こちらへ來り、

お峯　どなたも、御免なさいまし。

小三　毎度をばさんから承つてをりましたが、お前さんが峯吉さんでございましたか。

お峯　以前に變る此樣な、見すぼらしいなりをして、ひよいと人に逢つた時はと思ひましたが、馴染の土地に生れ故鄕が懐しさに、參りましてござります。

小三　そりやあようお出でなさんしたな。

與次　おゝ、誰かと思つたら妙心寺門前の花屋の娘か。
小助　思ひがけない、峯吉さん。
三人　久し振りでござりましたね。
お峯　皆さん方にお目にかゝるも、お恥しうござりますわいな。
お熊　まあ、お茶を一つお上んなさい。（トお熊茶を汲んで來る、）
お峯　有難うござります。
お熊　日章樣の一件で、御門前を拂はれてから、割下水の方へお出でだと、長家の衆から聞きましたが
わたしもかういふ體ゆゑ、尋ねて行かなんだが、あれからお前、どうしなすつたのだ。
お峯　いえも、話せば長い不仕合せ、初めて上つてこんなことを申すでもござんせぬが、かういふ譯で
門附をして歩くかと、皆さんの思召しもござりませうから、一と通りお話し申しませう。
お熊　及ばずながら膝とも談合、どうぞ聞かして下さんせ。
ト誂への合方になり、お峯思ひ入あつて
お峯　をばさんお前も知つての通り、日章樣と妹が、あゝいふ譯になつた所から、此世で添はれぬ事な
らばと、心中に出て大川へ、二人一緒に身を投げたも、命あつてか妹は、白魚船に助けられ、日

章様のみ死んだと思ひ、菩提の爲にとゝさんと、同行二人の巡禮で上州邊を廻つた折、上尾とやらで、思はず日章様にお日にかゝり、様子を聞けばその時に、やつぱり命が助かつたと聞いて妹が女夫になりたく、思ふ矢先きへ日章様が、甲府へ行つて本屋をなし、世帯を持つと言はしやんすゆゑ、これ幸ひと父さんが、直に其場で妹を女房に上げたその跡へ、日丈どのが來合はせて、それはみんな嘘僞り、今日章は悪漢になり、和尚次郎と人に言はれ、ゆすりかたりをするからは娘は賣つたに違ひないと、言はれてびつくりする折柄、常から嫌ひな雷さまに、行くに行かれず恐るゝ内、路用の金と着替へまで入れて置いた葛籠を盗まれ、慥にそれも日丈が仕業と知れど證據もなく、杖一本で内へ歸り、妹を何處へ賣つたかと、けふは品川明日は千住と、所々方々を尋ね歩き、やう／＼根津で逢うたれど、金がなければ連れて來られず、どうがなしてと思へども、出來よう當も内證が、段々詰る秋の日と、同じやうに貯へも、けふは一分明日は二分と、その日その日になくなつて、三方四方へ借が出來、仕方なく／＼切れかゝる、絲より細い痩世帶、彈く三味線の音じめさへ、昔に變る果敢ない身の上、お察しなされて下さりませいなあ。

トよろしくお峯思入にて言ふ。皆々氣の毒なる思入。門口の和尚次郎、裏向にて濟まぬといふ思入。

小三　そりやあまア、お氣の毒なことでござんすなあ。

お熊　お前方二人がそんな苦勞をしなさるのも、元は和尙吉次郎からだ。嘸父さんが悔しからう。

お峯　明けても暮れてもその事ばかり、騙されたのが悔しいと、烏のなかぬ日はあれど、父さんやわたしらが泣かぬ日とてはござんせぬわいなあ。（ト お峯泣く、與次兵衞思入あつて）

與次　おゝ尤もだ〳〵、嘸父さんは悔しからう。

小助　かけ構ひのねえわたしでも。

○　話に聞いても悔しいもの。

△　父さんは悔しい筈だ。

波市　何だか譯も分らねえが、おらも悔しい。

與次　おれも悲しい、はあゝゝゝ。

ト泣く、皆々も思入、是れにて和尙吉次郎濟まぬ事だといふ思入あつて下手へはひる。小三思入あつて佛檀から金を出して紙に包み、

小三　もし峯吉さん、こんなものをお前に上げては失禮でござんすが、お父さんのお好きなものを、買つて上げて下さんせ。（ト金をお峯の前へ遣る。）

お峯　有難うございますが、そんなお心遣ひを受けましては、濟みませぬわいなあ。

お熊　何で濟まぬ事があるものかね。一段好まれて語つたと思やあ、いゝぢやあないかね。

お峯　それでもついぞ、是れ迄に。

お熊　はて見ず知らずの人にせえ、爰の名弘めあすこの浚ひと、義理を出すのは毎日だから、遠慮せずとお貰ひなね。（ト　お峯　思入あつて、）

お峯　左様なら、お貰ひ申しませう。（ト金を取つて戴き、）小三さん、有難うござんす。

小三　そんなにお禮をお言ひでは、お氣の毒でござんす。

ト是にて與次兵衞不便だといふ思入にて、

與次　い、どえ〳〵おえも爰に分一の割があつた。是をやい、おろ〳〵。（ト財布から紐に結び附けし金を出してやる。）

お峯　いえもう、それには及びませぬわいなあ。（ト戻すを、無理に押へて、）

與次　えゝ、煙草でも買ひねえ〳〵。

お峯　是れは有難うござりまする。

お熊　さうして今ぢやあ、どこにおいでだえ。

お峯　山崎町にをりまする。

お熊　それぢやあ爰から二里たらず、早く歸りなすつたがいゝ。
お峯　いえもう、直に内へ歸りまする。
小三　又こつちへお出での時は、いつでも寄つて、
與次　飯でも喰つて行きねえ〳〵。
お峯　有難うござりまする。（トお峯門口へ出る、與次兵衞も出る。お峯思入あつて）いえ、ちと道を急ぎますれば、あなたは御ゆつくりとなされませ。
與次　さうか〳〵。
お峯　ほんにまあ、久しうなるゆゑ、知る人も變つてゐようと思うたれど、故鄕へ來れば矢張り知る人私の姿は變つたれど、馴染の方といふものは、ほんに變らぬものぢやなあ。
お熊　もし峯吉さんえ、又お出でなさいよ。
お峯　是れを御緣に、またその内。
お熊　きつと待つてをりますよ。
お峯　左樣なら、おやかましうござりました。
ト東上總の合方になり、お峯思入あつて、花道へはひる。

與次　ゑゝ待たねえか、送つてやらうといふに、ごつちよいしよ〳〵。

トスチヤラカの合方になり、與次兵衞杖を突き、花道へはひる。波市は此時居睡りゐて、横に寐る。

○　いや、わつちもお暇いたしませう。

小三　まあ、いゝぢやあないか。

△　まだ湯へはひりませんから、拔けねえ内に參りませう。

小助　おいらも一緒に附合はう。

△　左樣ならをばさん、大きに御馳走になりました。

お熊　またお出でなさいよ。

○　をとゝひ來いぢやあねえかね。

小助　違えねえ、さあ行かう。（トはやり唄の合方にて、三人下手へはひる。跡合方引流し。）

小三　をばさん、洗つたのは、昨夜のものかえ。

お熊　あい、今朝見たら血だらけだから、そつと緣の下へ入れておいて、暮合のどさくさ紛れに、綺麗に洗つておきましたよ。

小三　そりやあよくしておくれだねえ。

お熊　汚れものは隱したが、溝の中へ突込んだ、死骸がもしや浮びでもしたか。
小三　あゝこれ。(ト寐てゐる波市へ思入あつて、)氣を附けにやいかないよ。
お熊　うつかり言つたが、波市さんが。
小三　まだ子供だから、氣が附きやあしまい。(ト起す。)
波市　あい〳〵、大層寐たかね。
お熊　もう今に五つだから、早く歸んな。
波市　そいつア師匠に叱られにやあならぬ。
小三　それ、叱られないやうに、是れを持つて行きな。(ト金を紙に包んで遣る。)
波市　これは有難うござりまする。
小三　又あす來ておくれよ。
波市　はい〳〵。(ト門口へ出る。)
お熊　忘れちやあいけないよ。
波市　なに、忘れるものか、まづ七九けんびきは。
ト右の合方にて、波市は本を讀むやうに、七九けんびきを言ひながら花道へはひる。

小三　をばさん、精の附くやうに、鰻でもさう言つて、一杯やらうね。

お熊　御馳走になりませう。

小三　まあ、そこを片付けて、まき直しにしよう。

ト小三は煙草を呑む。お熊はそこらを片付けゐる。矢張りはやり唄になり、花道より美濃屋重兵衞、額へ膏薬を張り、半合羽、脚絆一本差し、麻裏草履、菅笠を冠り、旅拵へ、秋田の重吉紺の手甲、腹掛け、脚絆、尻端折り、一本差し、草鞋にて柳行李を背負ひ、此上へ菅笠を附け出來り、

重兵　今迄月があつたので、提灯が入らなんだが、雨氣附いたので暗くなつた。

重吉　まだお内は、餘程ございますか。

重兵　つい向うに見える、美濃屋といふ障子の建てゐる内だ。

重吉　そりやあ何より有難い、肩がめり〱いふ様だ。

重兵　あゝこれ、餘計な事を言はねえで、早く來い。（ト矢張り右の唄にて舞臺へ來り、門口をあけ、）小三、今歸つたよ。（ト小三見て、）

小三　おや、旦那でございますか。（ト立つて來り、）まだお歸りぢやあるまいと申しましたが、よく早く歸つて下さんしたな。

重兵　ちつと急な用が出來て、それで早く歸つて來た。（ト重兵衞足の塵を拂ひ、内へはひり。）
お熊　此間から小三さんも、お待ち兼ねでござりました。旦那、おすゝぎはよろしうございますか。
重兵　さつき夜食を喰つた時、洗つたからおらアいゝ。
お熊　それぢやあお前さん、お洗ひなさい。
ト　お熊盥へ水を汲んで重吉にやる。
重吉　是れは有難うござります。
ト　重吉柳行李を内へ入れ、入口に後ろ向きで草鞋を取り、足を洗ふ。小三はよき所へ座蒲團を敷く。重兵衞此上へ住ふ。小三湯吞へ茶を汲んで出す。捨ゼリフよろしくあつて、重吉下手へ來り。
重兵　これ小三、此男は重吉といつて、久しいおれが子分だが此間道中で思ひ掛けなく出合つた所、田舍にゐても詰らぬから、江戸へ出て奉公でもしようといふから、丁度幸ひ荷を擔がせて連れて來たが、當分こつちへおくつもりだから、目を掛けてやつてくれ、
重吉　是は姉さんでございますか、不調法ものでございますから、何分お賴み申しまする。
小三　わたしも我儘ものゆゑ、（ト言ひながら重吉と顏見合せびつくりして、）や、お前は。
重吉　さういひなさるは。（トびつくりする。）

重兵　何をそんなにびつくりするのだ。
兩人　さあ、それは。
重兵　おぬし達は、知つた仲か。
小三　いゝえ、見ず知らずのお方だが、わたしの知つたその人に、生寫しゆゑ、思はず知らず。
重吉　わつちもいつか東海道で、一緒に泊つたその人に、似てゐなさるのでびつくりしました。
重兵　何にしろ是れからは、小三は元よりおつかアも、世話だらうが頼むよ。
お熊　なに、世話ごころかわたしの方で、お世話にならにやあなりませぬ。
小三　そりやあさうと、おまんまはえ。
重兵　夜食は途中で喰つて來たから、何ぞ肴をさう言つてやつて、一杯燗を附けてくれ。
小三　お酒は取らずと内にあるが、をばさん何ぞ平清へ。
お熊　もう平清へ行つてもありますまいから、さつきのお肴ぢやあ、どうでござります。
小三　若い衆に出しやあしなかつたかえ。
お熊　なに、あの手合は肴より、酒さへ多けりやあいゝのだから、一鉢除けておきました。
小三　そりやあ丁度よかつたね。

重兵　そんな事にやあ拔目はねえな。
お熊　こんなこころが、年の功さ。
小三　いえ、お前のは龜の甲だよ。
お熊　はゝゝゝ。どれ、お燗を附けて來ませうか。
　　ト　お熊奥へはひる。小三重兵衞の額の疵を見て、
小三　もしお前、額のその疵は、どうしなさんしたのだえ。
重兵　此の疵か。
重吉　そりやあ昨夜。
重兵　あこれ、昨夜の泊りで相宿同士、酒の上の喧嘩が始まり、見てもゐられず留めにはひつて、とんだ怪我をしたのよ。
小三　そりやああぶない事でござんしたな。（ト重兵衞疵の痛き思入あつて、）
重兵　これ重吉、今の内、貼替への膏藥を、何處ぞ氣の附かねえ所で、いやさ、氣の拔けねえやうに、貝へ入れて買つて來てくれ。
重吉　此の先に外科醫者があつたツけ、あすこへ行つて來ませう。

小三　お前知つておいでかえ。
重吉　えゝ、爰ら近所は、いえ、聞いたら直に知れませう。（ト柳行李を重兵衞の傍へ持つて行く。）
重兵　夜道は不用心だから、氣を附けて行け。
重吉　一本差してゐるから、大丈夫でございます。（ト脇差を見せ、門口へ出て下駄履き、）それぢやあ親分行つて來ますよ。
小三　早くお歸りよ。（トはやり唄になり、重吉思入あつて下手へはひる。）
重吉　もし重兵衞さん、久しい子分だと言ひなさんすが、重吉さんの身性をば、お前知つてゐなさんすか。
重兵　おゝ、若いに似合はず器量があるゆゑ、おれが片腕と思つてゐるが、何ぞ惡い事でもあるか。
小三　惡いも惡いあの人は、泥坊をしなさんすぜ。
重兵　えゝ、博奕は打つし、女郎は買ふし、少し位はするかもしれねえ。

ト謠への合方になり、重兵衞煙草を呑みゐる。

小三　少し位ぢやござんせぬ、あの桑名屋の德兵衞さんと、大阪から下る時、ふつと道から連れになり池鯉鮒の宿へ泊つた晩、一つ座敷へ寢た所、路用の金が百三十兩に、着替を入れた柳行李、二字

國俊の脇差まで、盜んだ人でござんすぞえ。（ト重兵衞思入あつて、）

小三　そりやあれが手際にやあ、いゝ仕事をしたなあ。

重兵　博奕や酒ならよいけれど、泥坊をする重吉さん、あんな人はよい加減に、世話をするがようござんすぞえ。

小三　おぬしの言ふのも尤もだが、道中稼ぎをするものは、言はゞ雲助同樣ゆゑ、少しづゝの疵はあるのさ。それを兎やかう言つた日には、連れて歩く供がねえ。

重兵　それぢやあお前は泥坊しても、子分にしておきなさんすかえ。

小三　何の盜みをしたとつて、高の知れた道中稼ぎ、人殺しをするから見ると、遙に輕い兇狀だ。

重兵　え。（トぎつくり思入。）

小三　是がたゞの藝者なら、びつくりするも尤もだが、口先ばかりか眞劍で、人を殺す肚胸がありやあそんなに怖がることはねえ。

重兵　おつな事を言はしやんすが、眞劍どころか口先でも。

小三　いゝや隱しても隱されねえ。昨夜洲崎の六萬坪で、先の亭主の德兵衞を、お熊と二人で殺したらうが。

小三　え〻〻〻。（ト小三びつくりする。此以前後ろへお熊酒肴を持ち、出かゝりゐて、）

お熊　どうしてそれを、旦那には。

重兵　そればかりぢやねえ。何事もおれが留守にあつたことは、殘らず聞いて知つてゐる。

ト小三思入あつて、

小三　さう御存じの上からは、何を隱さう昨日の日暮れ、武藏屋からの歸りをば、あの德兵衞に見付けられ、內へ振り込み恨みたら〳〵、言譯してもきかぬゆゑ、世間の聞えを憚つて、實はかういふ身になつたも、どうぞしてお前に逢ひ、故鄕へ行つて添ひたいと、嘘八百で騙し込み、直に今夜爰を逃げ、常陸の方から奧州路へ、一と先行つて稼がうと、逃げる支度で內を連れ出し、六萬坪で殺したは、ちつとわたしには出來過ぎた仕事をしたも古狸の、此をばさんの指しがねさ。

お熊　邪險なことだが德兵衞が、ぐづ〳〵言つてゐる日には、隣り近所へ事が知れ、小三さんやお前さんの邪魔になるゆゑいつその事、やつた方がよからうと、後生を願ふ身をもつて、小三さんを勸め込み、とんだ殺生しましたのさ。

重吉　あの德兵衞が生きてゐては、邪魔になるゆゑ殺したのは、おれが爲ぢやアあるめえぜ。

兩人　え。

重兵　中川右膳が手引にて、千葉の屋敷へ娶に行くに、邪魔になるゆゑ殺したのだらう。

ト是を聞き兩人びつくりして、

兩人　どうして、それを。

重兵　知つてゐるのは此おれが、旅へ立つたその日から、子分を一人目明しに、附けてあるゆゑ何もかも、殘らず聞いて知つてゐる。

小三　その子分と言ひなさんすのは。（ト此以前、箱根の金五郎出て窺ひゐて、）

金五　誰でもねえ、わつちでござります。（ト手拭をとり、菰を脱いで内へはひる。兩人見て、）

小三　や、お前はいつも門口へ。

お熊　新米乞食と思つたが。

金五　此の親分の言附で、毎晩爰の軒下を、定宿にした菰冠り、江州無宿の金五郎といふ、まだ駈出しの旅稼ぎさ。

小三　そんならお前が、何かの事を。

金五　朝から晩までうろ〳〵と、此の居廻りを貰つて歩き、人の噂を聞き出して、一々知らせた見張り役、昨夜も夜更けて男と二人、包を背負つて出かけたは、こいつアてつきり駈落と、思つたゆゑ

に見え隠れに、附けて行つた六萬坪、手酷い仕事をこつくり見て、けふ親分へ言ツ附けたのさ。

お熊　それぢやあ昨夜の始末をば、委しく知つてゐなさる筈だ。

重兵　流石のお百も堅田の金が、菰を冠つて附けたゐたは、知らなんだと見えるな。

お熊　實にわたしやあ知らなんだが、かういふ子分を二人迄、手なづけなさる重兵衛さん、合點の行かぬお前の身の上。

重兵　なんと。

お熊　額へ受けた疵といひ、かさより重い柳行李、道中師だとおつしやるが、重兵衛さん、お前さんもたゞの旦那ぢやあございますまいね。

ト重兵衛思ひ入あつて、

重兵　察しの通り、兇状持ちだ。

小三　え。

重兵　是迄手前に隠してゐたが、供に連れた重吉を、護摩の灰と知られたからは、もう隠しても隠されねえ。一杯やりながら、ゆつくり素性を話して聞かさう。（ト誂への合方になり、重兵衛猪口を取り上げ。）お百ついでくれ。

小三　あい。(ト酌をする。重兵衞ぐつと呑んで、)

金五　今も言ふ重吉は、秋田小僧と名の高い、產れは出羽の護摩の灰、またわしは江州產れで、堅田無宿の金五郞といふものだ。

重兵　まだ此外におれが子分で、越後善介、尾張の千藏、太え奴は幾らもある。おつかア一杯やらうか。

ト猪口を差す。

お熊　有難うござります。(ト小三酌をする。)これは憚りでござります。

重兵　その中で、又親分と言はれるおれも、變名して、或は近江屋彥右衞門、又は美濃屋重兵衞と、姿を變へて働くが、誠は甲州新居村で、彥五郞といふものだが、譬にもいふ生兵法、神影流の免許まで、とつたが此身の害となり、なまなか腕が利くゆゑに、たうとうしまひは大疵の元となつて盜みをするのだ。

お熊　旦那、一つ上げますよ。(ト猪口を出す。)

重兵　おつと來た。(ト又小三酌をしながら、)

小三　お前がさういふ身分と聞いては、額へ受けた疵といひ、もしやさつきのお觸のあつた、千葉の屋敷へはひつたは。

お熊　旦那、お前さんぢやござりませんか。

重兵　むゝ、昨日道から附込んで、昨夜秋田の重吉と、二人で千兩盜んだが、一兩々々月星の極印ゆゑに瓦も同然、無駄な仕事をして來たのよ。さあ、お百。（ト猪口をさす。）

小三　あい。（ト取る。お熊酌をする。）

重兵　かうぶちまけて話されちやあ、手前もいやになるだらうな。

小三　いゝえ、お前がさういふ惡黨で、わたしや安心しましたよ。

重兵　なに、安心したとは。

小三　主人なり亭主なりの、德兵衞さんを殺したからは、槍でなければ死なれぬ體、誰がこんなに疵ものを、女房に持ち手がありませう。是から二人心を合せ、どんな事でもしませうから、どうぞ見捨てずに下さんせ。

重兵　何でおぬしを見捨てるものか。その心を見込んだから、あの德兵衞を捨てさせて、おれが女房に持つたのだ。

小三　四五年跡に親分が、峯吉といふ藝者を引かせ、妾にしておきなすつたが、正直過ぎて親許へ、返した事がありましたね。

重兵　さうよ、あんまり正直過ぎるから、金を持たして歸してやつた。何でも牛は牛連れで、互ひの心が合はねえ日にやあ、長く一つにやあゐられねえ。
お熊　おや／＼、それぢやあ峯吉さんの、旦那といふのはお前さんかえ。
小三　もう一足遲かつたら、お前さんは逢はれる所だ。
重兵　むゝ、峯吉が爰らへ來たのか。
お熊　あの子が段々不仕合せで、門附に出て今しがた、爰の門口へ來なさんしたから、段々樣子を聞いた所、誠に淚のこぼれる話しに、小三さんも氣の毒がつて、小遣ひをやんなさいました。
重吉　そりやあよくやつてくれた。
金五　あの顏をもつてゐながら、そんなに困る譯はねえのだが、あんまり正直過ぎるからだ。
ト此内酒盛りあつて、
重兵　お百、もう一つ遣らう。
小三　わたしやもういけませんよ。
重兵　此の猪口が別れだから、さう言はずと呑んでくれ。
小三　えゝも何だね、緣起でもねえ。

重兵　いや、爰にゐるのも今夜限り、明日は草鞋を穿かにやあならねえ。
小三
お熊　そりや又、何で。
重兵　額へ受けた此疵が、證據となつて捜されたら、足の附くのは知れたこと、それゆゑ今夜明け方に
此鎌倉を逃げる積りだ。
小三　さういふ事なら、わたしも一緒に。
重兵　いや、逃げる旅に女は邪魔だ。おぬしは内の始末をして、當分影を隱してくれ。
小三　影を隱せと言はしやんしても、何處といふ當もなければ。
重兵　いや、おぬしやあ遠くへ出るよりか、鼻の先の千葉さまで、妾に欲しいと言ふこそ幸ひ、中川殿
の手續きで、御殿へ出るが何處よりか、いつちいゝ隱れ所だ。
小三　それぢやあ私をこれ限りに、見捨てる心でござんすかえ。
重兵　何でおれが見捨てるものだ。その内居所が極つたら、秋田か堅田を迎ひによこさう。
金五　おつちが迎ひに來ますから、案じずにおいでなせえ。
小三　そんならどうでも、千葉の屋敷へ。
お熊　こりやあ親分の言ふ通り、名に負ふ大家の千葉樣ゆゑ、お妾に出れば大丈夫、小三さんさうおし

よ。

小三　年取つたお前迄が、さう言ひなさることならば、惡い事もあるまいから、それぢやあお屋敷へ行くとせうかね。

金五　それが何より上分別さ。

お熊　跡に殘つて困るはわたし、ごうか屋敷へお供して、

小三　いよ〳〵行くとなつたらば、伯母の積りでお前も一緒に。

お熊　それでわたしも、安心した。

トばた〳〵になり、下手より前幕の中間出來り、

中間　はい、御免下さい。

お熊　どちらからお出でなさいました。

中間　千葉の屋敷の中川から參つた、小三どのが内なら、此の手紙を上げて下さい。（ト手紙を出す。）

お熊　これは御苦勞樣でござります。小三さん、中川樣から。（ト出す。小三手紙を開き見て、）

小三　今言つた妾の事で、是非話したい事があるから、駕籠に乘つて深川迄、直に來てくれろといふ迎ひの手紙でござんすが、どうしませうね。

重兵　そりやあ丁度幸ひだ、直に支度をして行くがいゝ。
小三　それぢやあ、さう言つて上げておくれ。
お熊　是は大きに御苦勞様でございました。只今上りますると、おつしやつて下さりませ。
中間　又參らぬ様、お頼み申す。
お熊　畏りました。（ト中間は引返して下手へはひる。）
小三　をばさん、紋附を出しておくれな。
お熊　奥に出て居ますよ。
小三　それぢやあ奥へ行つて、着換へようか。
お熊　さうおしなさいまし。（ト小三思入あつて、重兵衛に向ひ、）
小三　もし、ちよつと奥へ。
重兵　何ぞ用か。
小三　話がありますから。
重兵　爰で言へばいゝに。
小三　いゝえ、みんなの前ぢやあ、言へないからさ。（ト重兵衛へ寄り添ふ。金五郎これを見て、）

金五　おらあちよつと髪を結つて來よう。
お熊　もうしまやあしねえかえ。
金五　此頃は、四ツ迄あるよ。（ト言ひながら門口へ出る。）
お熊　さあ、此間に早く。
小三　奥でこつそり。
重兵　え。
小三　話したいのだよ。

ト唄になり、小三重兵衞の手を取り、重兵衞は柳行李を抱へ奥へはひる。門口の金五郎是を覗き込み。

金五　えゝ、氣の惡い話しだなあ。（トはやり唄の合方にて下手へはひる。お熊跡を見廻し思入あつて、）
お熊　人といふものは知れねえものだなあ。（ト合方になり、）旅生業で荒ツぽい錢をとるとはいひながら、器川な金の遣ひぶり、たゞの人とも思はなんだが、盗人とは知らなんだ。さつきみんなの話を聞きやあ、千葉へはひつた盗人の、訴人をすれば屋敷から、しつかり褒美が出るといふ。あの彦五郎がゐる時は、小三さんの出世の邪魔、是れから屋敷へ訴人をして、逃げねえ内に喰ひ込ませ、

褒美の金を取つた上、小三さんへ恩に被せ、お袋替りになる日にやあ、一生涯樂隱居、まご〳〵しちやあゐられねえわえ。

ト此内以前の秋田の重吉、下手より出來り、門口にて是を聞きびつくりする。お熊は尻を端折り草履にて外へ出る。重吉下手へちよつと隱れる。

これから千葉の下屋敷へ、ちつとも早くさうだ。

ト時の鐘の送りにて、お熊逸散に花道へはひる。重吉跡を見送り、

重吉 こいつア捨てゝおかれねえわえ。

ト下駄を脱ぎ、尻端折り、きつと見得、時の鐘、佃にて逸散に花道へはひる。やはり佃の合方にて、下手より以前の小助、足早に出來り、門口より内を窺ひ、

小助 今宿老へ呼附けられ、小三の旦那の身許をば委しく聞かれ、逃がさぬやうに氣を附けろと、言附けたられが、何ぞ怪しい事でもあるか、何にしろ奥の樣子を。

ト内へはひり、暖簾口から奥を覗き、びつくりして門口へ來り、

とんだ所を覗いたので、小三さんがびつくりした。どれ、裏へ廻つて窺はう。

（材木河岸の場）——本舞臺一面に材木の置場、立掛けし松丸太の間へ、川を見たる道具、上の方柳の

立木、日覆より同じく釣枝、たそや行燈、下の方藪疊、總て材木河岸の體。爰に以前のお熊、上手に立身、下手に重吉是を留めてゐる見得、波の音佃にて道具留る。

お熊　お前は荷揚の重吉さん。何でおいらを留めるのだ。

重吉　いや留めるのは外でもねえ。お前が何處へ行きなさるか、それをわつちやあ聞きてえのだ。

お熊　なに、おらかえ。（ト思入あつて、）ちよつこ近所迄使に行くのだ。

重吉　何處へ行くか知らねえが、おれも一緒に連れて行つてくんねえか。

お熊　何だなお前、面白くもねえ、おれと一緒に行くよりやあ、網打場でも一廻りひやかして來なさるがいゝ。重吉さん、急ぎだから御免よ。（ト上手へ行きかゝるを、重吉留めて。）

重吉　行くなら伯母さん、お前におらあ貰ひてえものがあるが、何とわつちにくんなさらねえか。

お熊　鐵砲放す錢がねえのか。

重吉　なに錢は爰に持つてゐるが、外に貰ひてえものがある。（トお熊もぎつくり思入あつて、）

お熊　何が望みか知らねえが、命の外なら、何でも上げよう。

重吉　いや、その命が貰ひたいのだ。

お熊　何だと。（ト時の鐘、合方替つて、）

重吉　どうぞわつちに、くんなせえ。

お熊　送り狼同様に、跡をつけて來たからは、大方そこらと察してゐた、本卦返りも去年して、死んでも不足はねえけれご、まだ〳〵命はやられねえ。

重吉　くれざあ秋田の重吉が、たゞとるから覺悟しろ。

お熊　年月日時も揃はぬ産れ、藥にされる覺えもねえが、何でおれを殺すのだ。

重吉　われを殺すは外でもねえ、さつき思はず門口で、樣子を聞きやあ親分が、千葉の屋敷へ忍び込み、千兩盗んだ訴人をして、褒美を貰ふご聞いたゆゑ、貰はぬ先に命を取るのだ。

お熊　はゝあ、それぢやあおれが問はず語りを、聞いて跡から附けて來たのか。

重吉　知れたことだ。

お熊　そりやあ惡い料簡だ。おれが訴へをしねえと言つて、天の網が掛つたら、ごうで長くは生きられねえ。とても捨てる命なら、おれに金を取らした方が、來世の爲によからうぜ。

重吉　成程われも此年迄、惡い事をしたゞけあつて、殺すと言つても恐れぬ度胸、惜しいものだがそれだけに、猶々命を取らにやあならねえ（トきつと言ふ、お熊思入あつて、）

お熊　むゝ面白い、とられるものなら取つて見ろ。十四の年に男をこしらえ、兩親捨てゝ旅の空、宿場

稼ぎの飯盛も、杓子果報に身請をされ、大百姓の女房になつたも麥飯ぞくひにならずもの、直に放れてそれからそれ、流れ〳〵て深川の、あひる新地の四百玉、鐵砲お熊と名に呼ばれ、枕搜しで汐水が、體へ沁みるひどあかぎれ、今ぢやお雇ひ婆アだが、うぬらに命を取られる樣な、まだ耄碌はしやあしねえ。

重吉　耄碌すりやあ助けるが、鬼にも負けねえ根性で、心に持つた針の山、頭の惡事を嗅ぎ付けて、訴人をすると聞いたゆゑ、劍の山か血の池の、血まぶれ仕事にせう塚の、婆アを殺す所せえ、爰から近へ閻魔堂、作つた罪の深川に、堀へ圍つた魚ぢやあねえが、奈落の底へ沈みやあがれ。

お熊　えゝ、しやらつくせえことをぬかしやあがるな。

ト　お熊行きに掛るを引戾し、ちよつと立廻つて重吉腰の脇差を拔き、

重吉　婆アめ、覺悟をしやあがれ。

ト　波の音、誂への鳴物にて、重吉切つてかゝる。お熊あり合ふ細き丸太の折にて立廻りあつて、トヾお熊材木の蔭へ逃げ込む。それを追つかけ、材木の間をあちこちと逃廻る立廻りよろしくあつて、重吉お熊を一刀切る。是れにてお熊どうと下に居る。重吉脇差を振上げ、きつと見得、波の音早き合方にて、此道具廻る。

（深川小三内の場）——本舞臺元の道具、以前の重兵衛、金五郎を相手に酒を呑んでゐる。此脇に蝶足お膳、茶碗、箸箱を載せ、八寸に同じく茶碗、箸を添へ、お櫃土瓶などよろしく並べ、よき所に丸行燈、下手障子の所、戸に替りあり、端唄にて此道具留る。

金五　親分、小三さんはもう行きなすつたかえ。

重兵　今又二度目の迎ひが來て、駕籠に乗つて出て行つた。

金五　今夜歸つて來なさいますかね。

重兵　遲くも歸ると言つて行つた。いや歸るといやあ、重吉はどうしたか。

金五　何處ぞへ行きましたかえ。

重兵　膏藥を買ひに行つたが、それツきり歸つて來ねえ。

金五　呑んでゞもゐやあしねえか知らぬ。

重兵　あいつの事だから、知れねえ。

金五　そこらの酒屋を見て來やせうか。

重兵　なに、今に歸るだらう。うつちやつておくがいゝ。

ト右の鳴物にて、下手より和尚次郎着流し、三尺帶にて出來り、門口にて、

次郎　へい、御免なさいまし。
金五　あい、どッから來なすつた。
次郎　小三さんは、お內でござりますか。
金五　今お座敷へ行きなすつたが、何ぞ御用かえ。（ト次郎內を見廻しながら）
次郎　ちつと御無心があつて參りました。
金五　そりやあ折角お出でだが、言ひおいていゝことなら、言つてお出でなさい。
次郎　お目に掛らにやあ分らねえことだが、もし向うにおいでなさるのは、旦那かえ。
金五　あい、小三さんを世話をしなさる、奧州の旦那さ。
次郎　それぢやあ、重兵衞さんとおつしやるのは、あなたかえ。
重兵　あい、重兵衞とはわしだが、何ぞ御用でござりますか。
次郎　眞平、御免なさいまし。
　　ト合方きつぱりとなり、次郎內へはひり、下手よき所へ住ひ、
こりやあお初にお目にかゝりますが、お前さんが小三さんを、お世話をなさる旦那樣でござりますか。

重兵　世話をするといふでもないが、旅生業ゆゑ出て來た折の足休めに、寢泊りをしますのさ。

次郎　お世話をなさる旦那なら、お前さんにお願ひしませう。わつちやあ和尚次郎といふ遊び人でございますが、久しく體が惡くツて、今度草津へ湯治に行きますのだが、どうか草鞋錢をお貰ひ申したうござりまする。

重兵　草鞋錢でござりますか、どれ程上げればようござりますな。

次郎　たゞお貰ひ申すのだから、思召しでようござりまする。（ト重兵衞紙入から二分金を出して紙に包み、）

重兵　金や、これをお上げ申してくれ。（ト金五郎に渡す。）

金五　あい、是れは少しばかりだが、旦那から上げます。（ト出す。次郎とつて戴き、）

次郎　こりやア有難うござります。皆さんのお蔭をもつて、體の療治が出來ます。（ト言ひながら、紙を開いて見て、）もし、こりやあ二分でござりますね。

金五　さうよ、二分金だから、落しなさんな。

次郎　お志しは有難うござりますが、こりやあお返し申しませう。

金五　二分ぢやあ不足だと言ひなさるかえ。

次郎　二分ばかりのはした金を、口をすぼめて貰ひにやあ來ねえ。

重兵　そりやあ小三がゐたならば、どうか仕樣もあらうけれど、わしは勝手の知れぬことゆゑ、それで料簡して下さい。

次郎　何も料簡するのしねえのと、たゞ貰ふ金だから、足り不足は言ひたくねえが、餘り酷いお捌きだから、此金はお返し申します。

重兵　それだから先に聞いたのだ。幾ら上げればよいのだね。

次郎　百兩お貰ひ申してえのだ。

重兵　え。

金五　なに、一本、四百の事か。

次郎　いゝこけな事を言ひなさんな。一本と言ふのが分らざあ、言つて聞かさうか。一本といふのは、百兩の事だ。

金五　途方もねえ熱を吹き出したな。（ト重兵衞思入あつて、）

重兵　どういふ譯か知らないが、何で小三に百兩といふ、金を貰はうと言ひなさるのだ。

次郎　貰つてもいゝから、貰ひに來たのだ。

重兵　そりやあ上げていゝ筋なら、上げまいものでもないけれど、譯を聞かして下さりませ。

次郎　よく芝居でも言ふ筋だが、昨夜洲崎の六萬坪で、人殺しがあつたが、知つてゐなさるかえ。

重兵　え、まだ話にも聞かないが、そんな事がありましたのか。（ト重兵衞金五郎と顔見合せ思入。）

次郎　丁度時刻は九ツ過ぎ、燒場へ行つた歸りがけ、通りかゝつて血だらけな、川ツぷちで拾つた簪

ト見せる。重兵衞見て、

重兵　そりやあ小三が。（ト兩人きつと思入、合方になり。）

次郎　金鍍金といふ所も、銀の燻しに象眼で、小三といふ字を彫込んだ、五分もすかねえ珊瑚珠は、色もほんのり無疵だが、とんだ疵を見附け出し、此の簪を足にして、百兩貰ひに來ましたのさ。

ト此内かます煙草入の中から、誂への珊瑚珠の銀かんを出す。重兵衞是へ目を附け、

重兵　成程それは小三の簪、それが其場にあつたゆゑ、小三が仕業と言ひなさるのか。

次郎　月はあつたがばら〳〵降りで、雲が掛つて薄暗がり、水の光りに見た形は、藝者姿の深川風、後日の證據に簪を、拾つて跡から見え隱れに、昨夜內迄見て歸つたのだ。

重兵　こつちに覺えはなけれども、拔きさしならぬ簪を、お前が證據と言ひなされば、品によつたら望みの金を上げまいものでもないけれど、何を言ふにも當人の、小三が座敷で留守なれば、今といふ譯にもいかぬ。

金五　又出直してあしたでも、小三さんの居る時來なせえ。たんとの事はいけねえが、小遣位は貰つて遣らう。

次郎　さういふ事なら面倒だ。小三さんの歸る迄、爰で待つてをりませう。おい兄イ茶を一杯くんねえな。

金五　おい。（ト不承々々に立つを、）

重兵　いや、ぬしにやあ茶より有合ながら、酒の方がよからうぜ。

次郎　有難うござりますが、酒の上が惡いので、金比羅さまへ斷ちやしたから、矢張りわつちやあ茶の方がいゝ。（ト金五郎盆の上へ茶碗を載せ、）

金五　ちつと溫いよ。（ト出す。次郎とつて呑み、重兵衞思入あつて、）

重兵　いやなに若いの、小三も氣輕な女だが、まさか人を殺すなどゝ、そんな事はしますまいが、人の玩具になる藝者、お客次第でどんな所へも一緒に行かねばならぬ身の上、大方疝氣の稻荷樣へ、參つた歸りに落したと、言ふ樣な事だらうが、さういふ場所にあつたが災難、穩便にして下さるなら、その簪を買ひませう。然し五十の百と言つては、ちつと相場が違ひます。買つたら十か十五兩、ところを十兩利附をして、二十五兩に買ひませう。それでわしに賣つて下さい。

ト次郎そしらぬ振をして煙草を呑んでゐる。

金五　から、一兩でもたゞとる金だ。損の行かねえ話しだから、二十五兩に賣つたなら、言分はありやあしめえ。

次郎　思召しは有難えが、まあ賣買はよしにしやせう。

重兵　それぢやあまだまからぬかな。

金五　賣つたらよからうに。

次郎　厭だ。

金五　何だと。

次郎　二百とも言ふのだが、早いがいゝから百兩とこつちから負けて出たのだ。一朱缺けても賣りやあしねえ。

重兵　一朱缺けても賣らぬとは、それはあんまり一刻だ。さう言はずとも相談にしなすつたらよからうに。

次郎　いやだ〳〵、厭だ。金はそつちのもの、代物はこつちのものだ。賣らねえと言つたら賣りやあしねえ。お前も何處の馬の骨だか、旅他國へ來て、名うての藝者を圍ふからにやあ、百や二百のそ

の金に、困る人ぢやあ出來ねえことだ。是を證據に出る所へ、わつちが持つて行つたらば、お前が毎晩がたつかせる、潰し島田の小三の首が、ぱつさり落ちにやあならねえ話しだ。何ぼ可愛い女だつて、胴がらア抱いて寢られもしめえ。

重兵　むゝ。（トぢつと思入）

次郎　首をついでおきたけりやあ、値切り小切りをしなさらずと、綺麗に百兩出しなせえ。

重兵　それでは拾つた簪を、證據にこなたはゆするのだな。

次郎　わつちも若い體だから、荒い錢が遣ひてえが、人の物をたゞとりやあ、直に後へ手が廻らア、その捕繩に縁のある、三月しばりの圍ひもの、ちよつと背中を叩いても、五十と百になる體、二の腕の輪も色白に、ぱつと日に立つ腕守り、神信心をかこつけて、駒木の諏訪から成田をかけ、馬で野郎を引廻し、果は濱から島行きと、榮耀榮華も床の內、首を並べてねだり出し、何でもいふ目が出羽奥州、旦那がいゝと聞いたゆゑ、一本槍に突當てゝ、金を取らにやあ千住か品川、好きな女郎が買はれねえ。見込まれたのがそつちの不運、法蓮陀佛と往生して、坊主歸りの和尚次郎に、お布施と思つて出しなせえ。

重兵　すりや重兵衛が圍つて置くゆゑ、百兩出せと言はつしやるのか。

次郎　知れたことさ。ゆすりはするが堅氣な家へ、是れ迄行つた事はねえ、言はゞたゞとる金だから、罪滅しに貰ひに來たのだ。それも大した人殺しの、慥な證據があるからだ。出すのがいやなら手短かに、おれをゆすりで突出しなせえ。出る所へ出て金ばかりか、うぬが首まで取つて見せう。

ト金五郎恷へかね、

金五　え〻虫を恷へて聞いてゐたが、もう料簡が。（ト金五郎立掛るを、重兵衞留めて、）

重兵　あこれ金五郎、どうしたものだ。立騒がずと下にゐやれ。

金五　それだといつて。

重兵　はてまあ、下にゐやれといふに。（ト是にて金五郎悔しさうに控へる。）いやなに、次郎さんとやら、もう言草はそれぎりかえ。

次郎　何だと。

重兵　いやさ、言草はそれぎりなら、望みの金を上げよう程に、小三が歸つたら見せるから、請取を置いて行つて下せえ。

次郎　お安い事だが、わつちは無筆、書くことが出來ませぬ。

重兵　なに、書附には及ばぬが、たゞ百兩渡したといふ證據さへあればよいのぢや。

次郎　むゝ、何を證據に、お前はどる氣だ。

重兵　されば、何がよからうか。百兩渡した證據ゆゑ、こなたの首にしようかえ。

次郎　何と。（トきつとなる。誂への合方になり、）

重兵　どうで命を取るからは、冥土の土産に言つて聞かせる。如何にもわれが見た通り、昨夜洲崎の六萬坪で、以前の亭主の德兵衞を、殺したのは藝者の小三だ。證據になつた簪を、われが言ひ値で買はうから、生かしちやあ歸さねえぞ。

次郎　小三が人を殺したを、承知で圍ふ重兵衞さん、お前もたゞの人ぢやあねえな。

重兵　知れたことよ。盜人だ。

次郎　大方そんなことだらう。

ト兩人氣味合の思入、合方きつぱりとなり、

重兵　旅生業とごまかして、東海道から中仙道、水戸奥州の街道で、名を知られたる義賊の頭、産れは甲州巨摩郡新居村で人となり、肩名も新居の彦五郎、噂に聞いたか白浪の、夜働きはするものゝ、難儀なものゝ金は取らねえ。宿で一二の豪家へはひり、千と二千の仕事をすりやあ、水も呑まねえ百姓や、喰ふや喰はずの伊勢參り、巡禮六部へその金を、七分施す陰德に、陽報あつて八方を

取巻かれたる此身の大難。
ト重兵衞片肌を脱ぐ、肩から二の腕へ刀疵、肌に誂への法華の珠數をかけ、是を見せて、
數ケ所の疵を受太刀の、九死も祖師の利益に遁れ、短い命も長房に、けふ迄つなぐ珠數の數、同じ宗旨の盗人だが、手前達とは修行が違はア。
トきつと思入、和尚次郎びつくりしたる思入にて、
次郎　それぢやあお前が名の高い、新居村の彦五郎さんかえ、さういふ立派な親分と、ほんに夢にも知らねえから、七目題目並べたて、面目もねえ和尚次郎、又坊主にでもならにやあならねえ。
重兵　さあ、約束の百兩だ。請取を置いて持つて行きやれ。(ト次郎の前へはふる。次郎思入あつて、)
ト次郎坐り直し、天窓を搔いて思入、重兵衞は胴卷から百兩出して、
次郎　もし親分、今更こんなことを言ふと、未練な事を言ふ奴だと、思はれるのが面目ねえが、一二三日わつちが此首を、わつちに貸しておくんなせえな。
重兵　なに、その首を貸してくれとは。
次郎　何を隱さうゆすりをして、酷い金を拵へるのも、以前わつちが娘を賣り、難儀を掛けたその親仁が、路頭に迷ふと聞いたゆゑ、身の代金の百兩を、返してやりてえばつかりに、此の簪を種に

して、金をゆすりに來ましたのだ。お前も盗みをしながらも、陰徳をする義賊の頭、爰の所を聞きわけて、その親仁に此金を渡してくる内不承でも、首を預けてくんなせえな。

ト重兵衛煙草を呑み黙つてゐる。金五郎出て、

金五　こう〳〵、その言譯は素人に、そりやあ言ふ言譯だ。今更難儀を掛けた人に、金を返すもねえものだ。どうで一度は切られる體、こけ未練なことを言ひなさんな。

ト是にて次郎きつと思入あつて、

次郎　お前方の目から見たら、一寸遁れにちやらつぽこを、言つて逃げると思ひなさらうが、何ぼけちな野郎でも、そんな小さな根性ぢやあねえ、どうで切られて死ぬ事は、お前が言はずと百も承知だ。さう疑ひがかゝつちやあ、もう金もいらねえ、疑ひばらしに切つてくんねえ。(ト金を投出す。)

金五　それぢやあいよ〳〵、性根を据ゑて、

次郎　一寸の虫にも五分の魂、一分も跡へ引きやあしねえ。さアすつぱりとやつてくんなせえ。

ト次郎襟の毛を撫で上げ、正面を向き覺悟の思入、重兵衛是を見て感心の思入。

重兵　ても天晴な、いゝ肚胸、知らねえ内なら兎も角も、その性根を見た上は、どうして命を取られるものだ。此の百兩と諸共に、首はお前に貸しておかう。(ト金を投げてやる。)

次郎　流石は名うての彦五郎さん、切れ放れのいゝ捌き方、わつちやあお前に惚れやした。是を縁にけふからは、子分と思つてくんなせえ。

重兵　人は當つて碎けろと、さういふお前が心なら、親分子分と言はずとも、上州きつて友達も水滸傳になぞらへて、（ト肌につけたる珠數をとり、）人殺しも珠數の百八人、お前も是へ這入んなせえ。

ト珠數を見せ、次郎へ目をつけ思入あつて、

次郎　ちよつとそれをお見せなせえ。（ト取上げよく／＼見て、）この親玉に妙法の、二字を左右に彫付けしは、わつちが持つてゐる此珠數と、（ト腹に卷きし珠數を出し、）寸分違はぬ文字の筆法。

重兵　どれ。（ト重兵衞とつて比べ見て、）こりやあおれが親父の細工で、兄貴へ一連遣つたと聞いたが、是を所持してゐるからは、もしやお前は大野村の、治右衞門の子ぢやねえか。

次郎　成程、わつちやあ言ひなさる治右衞門が一人悴、五つの年に厄病で、兩親ともに死んでしまひ、菩提の爲に檀那寺へ弟子になる時此の珠數を、親の形見に貰ひました。

重兵　それぢやア、おれが兄貴の悴だ。

次郎　お前は親父の弟かえ。

重兵　身性が悪さに絶交して、久しく出入りをせなんだから、跡の事も知らなんだが、

次郎　思ひがけねえ二人が身の上。
重兵　繫がる緣の珠數の彫、
次郎　妙な事から名乘つてみると、
重兵　切つても切れねえ伯父と甥。
次郎　經ちし月日の長房も、
重兵　廻り廻つてけふ爰で、
次郎　逢つたも祖師の、
兩人　御利益だなあ。（ト兩人珠數にて拜む。）
重兵　やれ〳〵、とんだ事であつた。（ト合方になり、）そりやあさうと是れでいゝが、もし義理が缺けるなら何本でも貸してやるやら、遠慮なく言ふがいゝ。
次郎　なに、賣つた金せえ返してやれば、それで義理が立ちますから、それぢやあ是れを借りますぜ。
重兵　もう貸借りに及ぶものか。（ト次郎封じ紙を見て、）
次郎　もし、此紙はおつな紙だねえ。
重兵　そりやあ奧州の國產で、此の鎌倉にやあねえ紙だ。

ト此以前よき程に、下手より秋田の重吉、お熊の前垂へ婆の首を包み、是を提げて門口に窺ひゐて、内へはひり、

重吉　親分、大きに遅くなりました。

重兵　おゝ重吉か、何處まで膏藥を買ひに行つたのだ。

重吉　なに買つてから、ちつと廻り道をして、それで遅くなりました。（ト首を下手へ置き、よき所へ住ふ。）

重兵　早速ながら爰にゐるのは、和尚次郎と言つて、おれの甥だ。

重吉　いえ、その事は今表に立つてゐて聞きました。（ト次郎に向ひ、）わつちやア秋田の重吉といつて、親分の厄介者でござります。

金五　さつきは失禮を言ひましたが、わつちやア堅田の金といふ、お先ものでござりまする。

次郎　どうぞ是れからア二人とも、

重吉　お心安く。

三人　お願ひ申します。（ト金五郎跡へ下り、首に躓き、）

金五　こう重吉、爰へ持つて來たのは、何だ。

重吉　そりやあ婆アの首だ。

金五　何だ。

重吉　親分、油斷はなりませんぜ。雇婆アがお前の素性と昨夜の始末を聞いたとこから、千葉の屋敷へ訴人をして、褒美の金を貰はうと、慾に迷つて出て行くを、見え隱れに附けて行つて、材木河岸で一と思ひに、やツつけやしたが、滅法手ごはい奴だつた。

重兵　一と癖あると思つたが、それぢやあおれが惡事を聞き、千葉の屋敷へ訴人に行つたか。

金五　しかし途中でばらしてしまへば、屋敷へ知れる氣遣えはねえ。

重兵　何しろ長居はならねえ。折角逢つた次郎に別れて、これから信州へ一と先影を隱すとしよう。金五郎は大儀ながら、小三の所迄行つてくれろ。

金五　あい、行きやせう。

重兵　手前が見聞きをした通り、あれに話して遲くとも、一緒に連れて歸つてくれろ。

金五　承知しやした。次郎さん、御免なせえまし。

ト金五郎尻を端折り、門口へ出る。下手より黑四天の捕手二人窺ひよつて、捕つたと十手で打つ、金五郎びつくりして、

親分、づきが廻りやしたぜ。

ト言ひ捨て逃げ出すを、兩人追つかけて行く。揚幕の手前にて打ち据ゑ、繩を掛けて揚幕へはひる。
舞臺は重吉心得、門口へ掛金をかける。重兵衛は以前の柳行李を出し、

重兵 もしもの時は重吉は、行李を持つて裏からこつそり。

重吉 して、親分は。

重兵 跡へ殘つて防ぐから、次郎も早く逃げるがいゝ。

次郎 それだといつて、爰を見捨て。

重兵 いや、おれに構はずその金で、難儀をかけた人を助けろ。

次郎 いえ〳〵、逃げちやあ義理が濟まねえ。

重兵 はて、他人ぢやあなし伯父甥に、義理もへちまも入るものか。

次郎 それぢやあ伯父御の詞について、わつちやあ是を持つて行かうが、實に濟まねえことだなあ。
ト次郎濟まぬといふ思入にて、金を懷へ入れる。

重兵 何しろ旅がけだ、支度をしにやあいけねえが、重吉手前も飯を食へ。

重吉 あい、底を入れておきやせう。
ト誂への合方になり、有合ふ膳を重兵衛の前へ直し、重吉も膳を控へ、重兵衛へ飯を盛つてやる。

重兵　次郎一ぺえ附合ねえか。

次郎　今しがた喰つたから、お給仕でもしませう。

ト此時下手より、以前の小助先に、黒四天の捕手四人出て來り、門口を明けようとして明かぬゆゑ、門口を叩き。

小助　もし〳〵、小三さん〳〵。

ト此内重兵衞、重吉は飯を食つてゐる。

次郎　そこを叩くのは、誰だ。

小助　小助でござります。ちよつと明けて下せえまし。

ト又叩く、重兵衞次郎に見ろといふ思入、次郎心得、そつと行つて門口から覗き、ぎつくり思入あつて、

次郎　伯父御、來やしたぜ。

重兵　さうか。（トゆう〳〵と飯を喰つてゐる。）

重吉　なに捕手かえ。（ト重吉びつくりして咽へつかへ苦しむ。）

重兵　これ、どうした、胸につかへたか。

次郎　意氣地のねえ野郎だなあ。

ト爰へ小助と捕手一人後より出來り、組附く。是とちよつと立廻つて次郎重吉の背中を叩く。是にて飯の落着くこなし。是へ捕手かゝるを、次郎立廻つて重吉の方へやる。重吉捕手を押へ附ける。重兵衞は茶碗を持つたまゝ、小助を見事に返して背中へどつかり乘る。次郎はお櫃を下へ置く。双方見合つて、木の頭。

重兵　もう一杯くれ。

ト茶碗を出す。次郎飯をよそふ。重吉は又捕手をねぢ伏せる。此の仕組よろしく、早き合方ドン〳〵にて、

ひやうし　幕

七幕目

御輿嶽山下の場
根津相模屋の場

〔役名――花屋作兵衞、和尙次郎、役僧日丈、若い衆喜助、駕籠舁二人、寢ず番太助、太市番太、新居の彦五郎。作兵衞娘お峯、相撲屋の抱へお花、同二階廻しおかつ、同抱へおきく、同おふで、同小職おまめ等。〕

（御輿嶽山下の場）――本舞臺三間の間、上手草土手の石垣、下手町家夜の遠見、上の方石垣、此前に竹の埒垣、下の方に柳の立木、日覆より同じく釣枝、總て御輿ケ嶽山下の體、爰に駕籠舁兩名○△切繼、尻端折り、草鞋にて四ツ手駕籠へ腰を掛け、煙草を呑み、客を呼びかけ居る。時の鐘四ツ竹の合方にて幕明く。と上下より、着流しの仕出で、通り抜けてはひる。

○　こう棒組、又今夜も降りさうだな。

△　此頃のやうに降られちやあ、辻駕籠は上つたりだ。

○　それにまだ宵ツから一挺も擔がねえが、祝儀でもくれさうな、種のいゝのを擔ぎてえものだ。

△　さうよ、四百と五百取つたらば、早く切上げて歸らうぜ。

ト矢張り右の合方にて、花道より太市番太着流し、町人なり、生醉の思入にて出來り、

番太　酒飲めばいつか心も春めきて、借金取りも鶯の聲と、何でも酒でなくツちやあいかねえ。えゝい。あゝいゝ心持だ。（トひよろ〱しながら、舞臺へ來る。）

○　もし旦那、御都合まで參りませう。一挺めして下さいまし。

番太　何だ。駕籠をめしてくれ。面白え。召してやらう。何挺でもありツたけ持つて來い。

○　それぢやあお召しなすつて下さいますか。こう棒組、旦那が乘つてやらうとおつしやるから早く

駕籠を持つて來い。

△ そりやあ有難うござります。（ト駕籠を持つて來て、）さあ旦那、お召しなさいまし。

番太 おつと來た、乘つてやらう。（ト番太駕籠へ横乘りに乘る。）

○ もし旦那、どうぞ眞直に乘つて下さいまし。

番太 なに、おれは此方が勝手だ。

△ あなたは勝手でございませうが、私共が擔ぎにくうござります。

番太 よくいろ／＼な事を言やあがる。さあ、是れでいゝのか。（ト眞直に乘る。）

○ もし、さうしてどちらへやります。

番太 どちらでも好きな方へやれ。

○ そんな事をおつしやつちやあ、私共が困ります。どうぞお内をおつしやつて下さいまし。

番太 手前達アおれを知らねえか。

△ 一向に存じませぬ。

番太 さりとは不便な奴等だな。知らずば名乘つて聞かせよう。遠からんものは時々引く、鐵棒の音にも聞け、近くは目にもみご等、草履草鞋に隱れのねえ、此先の太市番太だ。

△　それぢやあお前は番太郎かえ。

番太　何でもいゝから、早くやつてくれ。

○　さあ、上げますよ。

兩人　いや、とんだ厄介ものだ。

ト兩人番太を乘せ、駕籠を擔ぎ上手へ這入る。矢張右の合方雨車になり、花道より四幕目の花屋の作兵衞切繼ぎやつし形にて、ゆで玉子の笊を提げ、破れたる大黒傘を差し、玉子を呼びながら出で來り、花道にて、

作兵　今夜はごうか降りさうゆゑ、邪魔ながら背負つて來た此傘が、役に立つたがお峯は何處で降られたか、嘸困つてゐるであらう。どうぞたんと降らねばよいが。

ト舞臺へ來る。此時揚幕にて、

次郎　おゝい／＼。

ト雨車ばた／＼になり、花道より和尚次郎、頰冠り、尻端折りにて出來り、直に舞臺へ來り。

おいとつさん、ちよつと待つてくんなせえ。

作兵　はい、お呼びなさいましたは、玉子を上げますかな。

次郎　いや玉子ぢやあねえ、とつさん、おいらだよ。（ト頬冠りをとる。作兵衛見てびつくりなし。）
作兵　や、こなたは日章殿か。（ト大きく言ふ。）
次郎　これさ、大きな聲をせずと、静にしてくんねえ。（トあたりへ思入。）
作兵　何で静に出來るものだ。（トやにはに次郎に武者ぶりつき、）これさ日章殿、こなたは〱恐しい人ぢやの。
次郎　さあ、其恨みは尤もだが、是れにやあいろ〱譯のあることだ。まあ〱爰を放してくんなせえ。

ト作兵衛を無理に下へ居らせて、捨石へ腰を掛け、木魚入りの合方になり、

作兵　えゝ、何の譯があるものだ。よくもいつぞや上尾の原で、わしを騙して娘を引上げ、年一ぱいに根津へ賣り、非道の金をとらつしやつたの。こなたは衒りぢや、かどはかしぢや。
次郎　其の腹立ちは尤もだ。無理ぢやねえがこれ父さん。それも切ねえ金の切羽に、悪いと知りつゝ百両に、お前の娘を根津へ賣り、おれの難儀は助かつたが、苦界の勤めをさせるのが、濟まねえ事だと思ふから、お前に逢つて詫びをしようと、此間から捜してゐたのだ。
作兵　えゝも、言はつしやるな。何でそんな心があらう。いつぞや上尾で逢うた時も、甲府に本屋の伯父があるゆゑ、それを力に本屋をすると、體よく娘を勾引し、連れて行つた其跡へ、通りかゝつ

た日丈殿に、和尙次郎と人に言はれ、ゆすりかたりをさつしやると、聞いてびつくり跡追つかけ、行かうと思ふその途端、常から嫌ひな雷が落ち、耳を塞いで俯伏しに、なつてゐる内着替の着物や路用の金を入れておいた葛籠を盜まれ重なる難儀、てつきり是は日丈が、仕業と思へど行方は知れず、雲を當ゆゑ仕方なく、杖一本でやう〳〵と、袖乞をして江戶へ歸り、姉のお峯が世話になり、毎日々々遊女場を、爰やかしこと聞き步き、根津で娘に尋ね當り、段々聞けばあの折に、直に賣られてそれつきり、顏も見せぬ邪險な仕方と、淚ながらに話すゆゑ、どうか苦界を助けたいと、思へどお峯も旦那に別れ、貰つて歸つた百兩も五十兩は開帳場で紛失した金をつくのひ、殘りの金も何やかや、身の不仕合せに遣つてしまひ、日々詰る瘦世帶に、其日の烟りも立兼ねて、娘は每晚門附に出、わしはかうして玉子を賣り、しがない暮しの身になつたも、これも誰ゆゑそなたゆゑ、えゝ悔しいわい、口惜しいわい。

ト作兵衞悔しき思入、次郎氣の毒だといふ思入あつて、

次郞　その難儀を此間、餘所ながら聞いたゆゑ、せめての事の言譯に、お前に樂をさせようと、拵へて來た此百兩。（ト懷より前幕の百兩を出し、）是れをお前に上げるから、腹も立たうがこれ父さん、お花が事は帳消しに、どうぞ堪忍してくんねえ。（ト作兵衞に金を遣らうとするを突戾し、）

作兵　え〻、入りませぬ〳〵。その口に困つて死ねばとて、何でこなたに金を貰はう、不正な金は入りませぬ。

次郎　これさ父さん、そんな詰らねえことを言ふものぢやあねえ。おれが悪いから言譯に、お前にやる此の百兩、何も不正な金ぢやあねえ。

作兵　なに、ない事があるものか。博奕は元よりゆすりかたり、ろくでなしのこなたの金、不正でなくてどうするものか。

次郎　そんなきざを言はねえで、折角お前にやらうと思つて、拵へて來た金だ。どうぞ納めてくんなせえ。（と無理に作兵衞の懐へ入れようとするを、）

作兵　何で是れを貰はうぞ。穢れた金は入らぬわえ。

ト次郎の手を拂ふ。此の機に百兩包み下手へ飛ぶ。次郎びつくりして、

次郎　詰らねえ事をするぢやあねえか。勿體ねえ何處へ遣つたか。

ト次郎金を捜しに下手へ行くを、作兵衞捕へて、

作兵　うぬ、そんな事を言つて、逃げようといつて逃がすものか。

次郎　何でおれが逃げるものか、逃げやあしねえが、金を捜すのだ。

作兵　おゝ、その金々といふのも、大方石か瓦であらう。さあこれからおのれを代官所へ、そびいて行つて、勾引の罪を糺さにやおかぬのぢや。さあおれと一緒に歩びやあがれ。

ト作兵衛次郎の手を取り引立てにかゝる。次郎其の手を振り拂ひ、むつとして、

次郎　これ父さん、何ぼお前が堅氣だつて、あんまりわからねえ人ぢやあねえか。お前の娘を百兩に、騙しておれが賣つたのが、惡いからこそ、百兩の、金を拵へて、あやまるのだ。その金を取りもせず、勾引だから代官所へそびいて行くとは、分らねえ。不正な金なら遣るめえから、入らざあよしねえ、取んなさんな。

作兵　おゝ後日の難儀にならうも知れぬ。出所も知れぬ不正な金、何でわたしが取るものだ。金の代りにおのれの命を。

次郎　え。

作兵　取らねば腹が癒ぬわいの。さあ、おれと一緒に歩びやあがれ。（ト次郎の手を取り引立てるを。）

次郎　えゝ、さりとはお前も聞分けのねえ。まあ、爰を放しなせえ。

作兵　いや／＼、放さぬ／＼。おのれを逃してなるものか。

次郎　誰も逃げやあしねえといふに。

ト次郎作兵衞を振放さうとする。作兵衞は次郎を引き摺つて行かうとする、爭ふ立廻りよろしくあつて、次郎作兵衞を手荒く突放す。作兵衞よろ／＼として、上手の埒垣へこけ掛り、横腹を竹にて貫き、あツと苦しむ。次郎此の聲に驚き駈け寄つて作兵衞を抱起し、

これ父さん、何處ぞ打つたのか。怪我でもしやあしねえのか。

ト介抱する。作兵衞糊紅になり、次郎に取り付き、きつとなつて、

作兵　こりや、わしを殺すのぢやな。

次郎　えゝ馬鹿なことを言ひなせえ。何でお前を殺すものか。

作兵　いや／＼、殺すのぢや／＼。

次郎　これさ、人聞の惡い事を言ひなさんな。

ト次郎作兵衞を介抱する。手へ糊紅が付くゆゑ、びつくりなし。

やゝ、こりや父さんにやあ、今の機に、とんだ怪我をしてくれたなあ。

ト次郎ハツと思入、作兵衞その手に縋り、

作兵　これも日章、おのれの仕業、わしを此儘生かしておいて、訴人をされては身の上ゆゑ、それでわしを殺すのぢや。騙されたにしろ我娘を、一旦女房に遣つたからは、おのれが爲には舅ぢやぞ。

舅は親なりや親殺しぢや。おゝ、和尙次郎は親殺しだ。

ト大きく言ふ。次郎びつくりなし、作兵衞の口を押へ、あたりへこなし、

次郎　えゝ、詰らねえ事を言ひなさんな。誰がお前を殺すものだ。（ト次郎手を振拂ひ、）

作兵　いや〱、われが殺すのぢや〱。和尙次郎は、親殺しぢや〱。

ト言ふを次郎留める立廻りあつて、ぢつと捉へ、思入あつて、

次郎　えゝ情けねえ。これ父さん、お前に樂をさせようと、かうして金まで拵へて、娘を賣つた詫びするに、律義な心に穿き違へ、勾引だと騷ぎ立て、我手についた此の怪我を、親殺しだと言はれちやあ、和尙次郎が身の大事、殺す心はさら〱ねえが、年の上にこの深手、所詮お前の命はねえ。助からねえと極つたら、長く苦痛をさせるも殺生、かすかに聞ゆる木魚の、夜の勤めがあの世へ引導、髮剃代りに一と思ひ、和尙次郎が殺すから、迷はず往生してくんねえ。

ト次郎手を放す。作兵衞よろ〱しながら、

作兵　親殺しだ〱。

ト下手へ行くを、次郎懷から匕首を出し、後ろから作兵衞に切り付ける。作兵衞アッと言つて下手へどうとなる。次郎は匕首を振上げ、きつと見得。作兵衞は玉子の笊の玉子をとつて打附け、傘を持

つて立ち掛る。是より傘を遣ひ兩人立廻りよろしくあつて、トヾ作兵衞を柳の木の前にて立身にて扶ろ。此の血汐傘へかゝる仕掛。作兵衞虚空を掴み苦しみ落入る。次郎作兵衞の着物で糊を拭ひ、鞘へ納め、懷へ入れ、死骸を埒垣の蔭へ入れ思入あつて、

次郎 思ひもつかねえ殺生をしたので、何だかぼんやりしてしまつた。いやぼんやりしちやあゐられねえ。さつきの金は何處へ飛んだか。溝へでもへえらにやあいゝが。

ト次郎あちこちと尋ねてゐる。此時上手より以前の駕籠舁○△、駕籠を擔いで出來り、

○ こう棒組、とんだ奴を擔いだので、酷い目に逢つたな。

△ 早く切上げて歸りやあよかつた。(ト言ひながら下手へ行くを次郎見て、)

次郎 おい駕籠屋さん、お前方は歸りか。

△ へい、歸り駕籠でございますから、幾らでもようございます。召して下さいませんか。

次郎 おゝ歸り駕籠なら乘つてやらうが、今爰へ落したものがあるから、その提灯を貸してくんねえ。

○ 何をお落しなさいましたか、さあ、御覽じませ。

ト提灯を出す。次郎提灯を取り、あちこちと搜す。○△あたりを見て、

兩人 やア、こりや大層な血だ。

ト大きく言ふ。次郎ぎつくりして、わざと提灯を落して、あかりを消し、

次郎　え丶、びつくりしたぜ。

○　もし〳〵、此の血はなんでございますね。

次郎　何んだか知らねえが、今しがた犬が切られたといふことだ。

○　へえ、さうでございますか。そいつア無氣味なここでございますね。

△　さうして、お捜しなさるものは、何でございまする。

次郎　捜すものは、金よ。

兩人　え、金でございますえ。

次郎　なアに、今打つた鐘は何時だといふことよ。

△　今打つたのは、四つでございます。(ト雨車になり、次郎思入あつて)

次郎　何にしろ、ぼつ〳〵とやつて來たから、捜し物はい丶にしよう。

○　左様なら、直にお召しなさいまし。(ト次郎金に心の殘る思入にて駕籠に乘る。)もし親方、どちらへやるのでございます。

次郎　根津までやつて貰ひてえのだ。

○　それぢやあ今晩は、お樂しみでござりますね。
△　さうして根津は、何處でござります、
次郎　相模屋の内へやつてくんねえ。
兩人　畏りました。

ト誂へ凄き合方になり、兩人駕籠を擔ぎ上げる。此の時ドロ〳〵のやうな風の音になり、舞臺の道具打返しにて、誂への闇暗の書割になり、兩人駕籠を擔ぎうろ〳〵して、

○　もし親方、根津の方は、どつちでござりますね。
次郎　何だ、お前方は道を知らねえのか。
○　道は知つてをりますが、提灯はなし、雨は降るし、眞暗で方角が分りません。

ト此時ドロ〳〵になり、柳の木の元より、誂への魂を日覆へ引上げる。○△見て、

兩人　やア、人魂だ。（トびつくりなし、駕籠をおろす。次郎もぎよつとして氣を替へ、）
次郎　爰らア寺が多いから、人魂なざア珍しかアあるめえに。
△　何だか知りませんが、氣味の惡い晩だ。
○　どうか、今の人魂の行つた方が、根津のやうだ。

△　そんな事を言つてくれるな。體がぞつとすらあ。

ト兩人こは〴〵駕籠を擔ぎ、花道へ行く。此時以前の人魂駕籠の上を向うへ行く、兩人駕籠の棒鼻を留められる思入、

○　これさ、ぢいさん、邪魔をしちやあいけねえ。（ト次郎是を聞き、）

次郎　なに、ぢいさんが留めるとは。

○　へい、六十ばかりのぢいさんが、駕籠の先へ立つて、邪魔をしていけません。

ト次郎駕籠から外を見て、

次郎　馬鹿ア言ひねえ、誰もゐやあしねえぢやあねえか。

○　なに、ゐねえことはござりません。

△　どうだえ、そこらへおろさうか。

次郎　えゝ、お前達も氣の弱え、構ふことはねえから、眞直に突切つてしまひねえ。

△　何だかをかしな、

兩人　晩だなあ。

ト始終ドロ〴〵のやうな風の音にて、兩人氣味惡さうに駕籠を擔ぎ、花道へはひる。

時の鐘にて此道具廻る。

(根津相撲屋二階の場)―本舞臺三間の間平舞臺にて、向う一間の床の間、此脇鼠壁、上の方一間折廻し障子屋體、下の方一間廊下を見せたる片遠見、ずつと下手格子を打ちし半窓、總て根津相撲屋二階の體、爰に日丈すいの張りの坊主鬘、着流しにて立掛りゐるを、若い者喜助、抱へおきく、同おふでの朋輩女郎、二階廻しのおかつ留めてゐる。此の模樣はやり唄にて道具留まる。

日丈 さあ〱、歸るぞ〱、歸るから留めてくれるな。

きく もし、そんな野暮な事をおつしやらずと。

ふで まあ、座敷へお出でなさんせ。

日丈 いや〱、歸ると言つたら歸るのだ。

お勝 生憎今夜はお花さんも、やかましいお客が落合ひ、それでお前さんの所へも、つい行けないのでござんせう。

喜助 もし、只今直にお上げ申しますから、まあ兎も角も御座敷へおいでなさいまし。

日丈 いやだ〱、今夜ばかりなら勘辨もせうが、足を近くかうして來ても、いつの晩でも宵の内、ちよつと顏を見せたばかり、つひに床へ來たことがない。これ、一人で寢る位なら、勤を出して根

津くんだり迄、わざ〳〵足を運びはせぬわ。

きく　もし、それはさうでもごぜえませうが、お前さんだつて先からの、お馴染ぢやアありませんか。

ふで　わちき共でもお馴染は、つい心安だてゞ、行かずにしまふことがござんす。

お勝　お前さんもお花さんの心を、知つてゐなさんせうに、堪忍して上げなさんせ。

喜助　歸る〳〵と言はれては、あの子の恥になりますから。

きく　まあ〳〵座敷へ。

きく
ふで　お出でなさいよ。

日丈　いやだ〳〵、馴染の客は馴染だけ、よくされにやあならねえ譯だ。惡くするのが習ひなら、猶々爰にやあゐられねえ。さあ留めるな、歸るぞ〳〵。

皆々　まあ〳〵、お待ちなさいまし。

日丈　いやだ〳〵、放せ〳〵。

ト皆々わや〳〵言つて留める。矢張り騷ぎのはやり唄にて、下手の廊下よりお花、緋縮緬の長繻袢、縞物のしかけを羽織り、上草履にて出來り、日丈を後ろより抱き留め、

お花　もし日丈さん、何だね。お前も馬鹿らしい。玉子ぢやアあるまし。歸る〳〵と見つともないわ

ね。（ト日丈振返り、お花を見て、ぐにや〳〵になり、皆々を見て又氣が替へ）

日丈　おゝ、わしはどうで、馬鹿らしい玉子ぢやによつて、歸るのぢや。

お花　何だね、そんな大きな聲をして、かうしてお前に出てゐりやあ、わたしや女房も女じ事。その女房に恥をかゝせ、それでよいのでござんすか。

ト　お花首へ嚙り附きこづく。是にて日丈ぐにや〳〵となり、

日丈　なに、さういふ譯ぢやあねえ。（ト思入あつて）おゝさうだ〳〵、おぬしの恥になることだから、大きな聲をしたくもねえが、喜助やお勝の言草が、氣に喰はねえから歸るといふのだ。

喜助　もし〳〵、何も私やあ、お前さんのお氣に障るやうな事を言つた覺えはござりませぬ。

お勝　お花さんが來ないと言つて、歸るとおつしやつたのぢやござりませんか。

日丈　なに、そんな事を言ふものだ。

きく　あれ程言はしやんしたくせに。

お花　もし、それ程お前歸りたくば、遠慮はないから歸りなさんせ。

日丈　なに、歸りたいといふ譯ぢやあない。

きく　歸りたくない譯ならば、こんなに世話を燒かせずと。

ふで　まあ、こつちへお出でなさいよ。（ト日丈の手を取り引張る。）

日丈　これさ、そんなに引張つてくれるな。行けといふなら行くけれど。

お花　今わたしも跡から行くから、まあ先へ行つておくれ。

日丈　それぢやあきつと來るか。

お花　えゝも、じれつてえ。行くと言つたら、いゝぢやあないかね。

皆々　さあ〳〵、早くお出でなさいまし。

日丈　これ、お花待つてゐるぞ。

ト矢張りはやり唄にて皆々日丈を引張り、下手の廊下口へはひる。跡お花思入あつて、

お花　ほんにいつぞや父さんが、上尾の原で盗まれし、着替の着物や路用の金も、あの日丈が仕業ぢやと、此間來て言はしやんしたが、是ぞといふ證據もなければ、めつたな事も言はれぬが、そんな事を思つてみると、しみ〴〵厭な人だねえ。

ト　お花思入。下手廊下口より、小職おまめ先に、お峯切つぎの拵へにて出來り、

まめ　もしお花さん、姉さんがお出でなさいましたよ。（トお花お峯を見て、）

お花　おゝ、お前は姉さん、よう來て下さんしたな。

お峯　つい來ようと思うても、暇のないので此間は、大きに無沙汰なしましたわいな。
お花　わたしとても便を上げず。そりやお互ひでござんす。まあ／＼爰へ來やしやんせいな。（ト端唄の合方になり、お峯よろしく住ふ。）これあの子や、お茶を持つて來なよ。
まめ　あい／＼。（トお豆下手へはひる。）
お峯　あゝこれ、必ず構うて下さんすな。久しうそなたに逢はぬゆゑ、逢はうと思うてゐたけれど、定めて夜は忙しからうし、晝間來ようと思うても、知つての通りの此姿、引附けの間の惡さに、お年寄られた父さんは、夜商ひに出やしやんすし、わたしも共々藝が身を、助ける程の不仕合せと日の暮れるのを待ち兼ねて、門附に出てやう／＼と、其日を送る身の上に、譬にもいふ貧乏暇なし、來る間もないのに一つには、そなたの恥ゆゑ無沙汰がち、今日は聞きたいことがあつて、人目を憚り手拭で、顔を包んでやう／＼と、そなたに逢ひに來ましたわいの。
お花　そりやまあ、よう來て下さんした。わたしが内にゐたなれば、共々苦勞もしようもの、ほんに此身の徒らから、よしない人に騙されて、こんな苦界へ身を沈め、父さんにまで苦勞をかけ、ああ不孝なことでござんすなあ。
お峯　それもこれも約束ゆゑ、今更言つても歸らぬ事、おゝ不孝と言へば父さんが、今夜こちへ見えぬ

かいの。

お花　いえ〳〵こちへは見えなさんせぬが、何ぞ用でもござんすのかえ。

お峯　さあ毎晩四つの鐘を合圖に、山下で待合せ一緒に内へ歸るのぢやが、今夜はどうした事ぢややらいつもの所に四つ過ぎまで、待合はしてゐたけれど、ござんせぬのは此間から、そなたに逢ひたい〳〵と父さんが言うてなれば、大方こちへ來なさんしたに違ひないと思うゆゑ、それで尋ねて來たのぢやわいの。

お花　わたしも久しう逢はぬゆゑ、逢いたうてならぬ所、もう今にござんせうわい。まあゆつくりとして下さんせいなあ。（トお峯心に掛る思入にて、）

お峯　それともわたしと行違ひに、山下に待つてござんすか。但しは内へ歸らしやんしたか。おゝ心に掛ることぢやなあ。（ト思入。此時一つ鉦なる。）えゝも氣味の惡い。あの鉦はどこぢやぞいの。

お花　あれは隣りに不幸があつて、今夜は通夜ぢやさうにござんす。

お峯　さうかいの、ほんに枕念佛といふものは、幽靈でも出さうなものぢやわいの。

ト此時下座にて念佛あつて、薄ドロ〳〵になり、下手へ以前の作兵衛、薄色好みの拵へにて、すつぽんにて出で、しよんぼりと俯向きゐる。お峯是を見て、

や、そこにゐなさんすのは、父さんぢやござんせぬか。
作兵　おゝ娘、待ちごほであつたらうな。
お花　父さん、ようこそ來て下さんしたな。
お峯　もし、何處へ寄つてゐやしやんしたか。いつもの所に四つ過ぎ迄待合はしたれどござんせぬゆゑ妹の所へ來てみれば、そちへも見えず、何ぞ間違ひでもありはせぬかと、わたしが癖の取越苦勞に、大抵案じたことぢやござんせぬ。(トお花立つて行つて手を取り、)
作兵　あゝこれ、必ず構うてくりやるな。(ト誂へ幽靈の合方になり、作兵衞上手よき所へ住ふ。)
お花　ほんにお前がござんすのが、知れてゞあつたら宵の內、好きなものでも取つておかうに、おゝそれ〳〵よいものがござんした。お前の好きな鰻があれば、おまんまを上げようわいなあ。
作兵　いや〳〵、鰻は食べたくない。
お花　そんなら、ごぜうはどうでござんす。
作兵　それもいやぢや。
お花　何ぞ上げたいものでござんすが、よいものを好ましやんせいな。
お峯　折角妹があのやうに、何ぞ上げたいと言うてぢやゆゑ、好きなものを言はしやんせいなあ。

作兵　何も欲しいものはない。いやおれへ馳走をしやるなら、水を一杯手向けてくれ。
お花　え、手向けてくれとは。
作兵　あいや、たんと呑ましてくれと言ふのぢや。
お峯　お前息切れでもしなさんすか。譬にも言ふ年寄りの冷水、水よりお茶にしなさんせいなあ。
作兵　おゝ、お茶湯でも大事ない。（ト作兵衛ちつと思入。）
お花　もし父さん、お前どうぞしなさんしたかえ。
作兵　いや、どうもしやせぬわいの。
お花　それでも、いつもと違ふゆゑ。
お峯　いや父さんも年取つて、その日〳〵の苦勞は絶えず、夜商ひまでしなさんすゆゑ、きつう弱りなさんしたわいな。
お花　ほんにさうでござんせう。いとゞ苦勞の多いのに、わたしがかういふ身の上ゆゑ、猶々御苦勞かけますが、今に私も身まゝになり、お前に樂をさせます程に、どうぞわたしの歸るまで、煩はぬ樣にして下さんせえ、え。（トつく〴〵と顏を見て、）まゝ、どうぞそれ迄お達者でゐて下さんすりやよいけれどなあ。

ト案じる思入、作兵衞は俯向く。

お峯　えゝも、そなたとした事が、何でそんな事を言やるのぢや。わたし迄が身につまされ、つい涙がこぼれたわいの。もし父さん、お前もまあ何でござんす。その樣に鬱ぐことはござんせぬ。人は七轉び八起とやら、假令しがないゝゝゝ暮しをしても、かうして同胞揃うてゐれば、またよい時節があらうわいな。

作兵　そりやそち達は若いゆゑ、又よい時節に逢はうけれど、もう逢ふことのならぬのは、一年増しに取る年に、體の時計が狂つたれば、かうしてゐてもいつしれず、今夜の内も知れぬわいの。

お峯　あれまた、そんな忌はしい、今夜の内も知れぬなぞと。

お花　死ぬるなんのと言ふことは、嘘にも言うて、

兩人　下さんすな。（ト作兵衞思入あって合方。）

作兵　いや、言ひたっならうても言はねばならぬは、今も言ふ取る年ゆゑ、今夜の内も知れぬ體、役に立つても立たいでも、親があれば力なれど、おれがないその跡は、頼り少ない二人の同胞、よいにつけ悪いにつけ、互に力になり合うて、お峯は早く亭主を持ち、三尺店でも位牌所の、絶えぬやうにしてくりやれ。又お花の年が明けたらば、おれに替つてあれにも亦、末頼もしい亭主を持た

せ、矢張りその身を堅めてくりやれ、草葉の蔭からそれを見て、そち達二人に香花を手向けて貰ふが何より樂しみ、くれ〴〵跡を賴むぞよ。

ト此内始終一つ鉦をあしらひ、お峯思入あつて、

お峯　ほんに父さんの言はしやんす通り、人の身は老少不定、こんな事を言はしやんす、父さんが跡に殘り、

お花　又わたしらが先へ行くか、知れぬで持つた世の中も、

作兵　身貧でなければ後々の、苦勞もなけれど此樣に、あるに甲斐ない親子の身の上。

お峯　かうして娘はありながら、姉は古巣のつま鳥に、別れて誰と定めなく。

お花　勤めする身の妹は、出る事ならぬ籠の鳥。

作兵　野飼の鳥に劣りたる、親は塒にさ迷うて。

お峯　翼もしめる袖乞ひの一錢二錢三味線や。

お花　比翼の契りかはすのも、苦勞苦界の一夜妻。

作兵　昨日あつても明日の餌に、

お峯　困つて鳴かぬ日とてはなく、

お花　頼み少ない浮世ぢやと、
作兵　思へば果敢ない、
三人　身の上ぢやなあ。（ト三人よろしく愁ひの思入あつて、時の鐘になり）
お峯　ありやもう慥に九ツなれば、父さん、歸らうではござんせぬか。
作兵　おゝ、更けぬその内行きませう。あゝ是が別れに。
お峯
お花　え。
作兵　いやさ、是れぎり逢はれぬ事でもなければ、どりや行きませうか。（ト作兵衞名殘り惜しさうに立上る。）
お花　何だか今夜は父さんが、氣にかゝる事ばかり言はしやんすれば、わたしや歸りが案じられるわいなあ。
お峯　いえ〳〵、わたしと一緒なれば、案じることはないわいの。
お花　そりやあさうでもござんせうが、もう引過ぎのことなれば、泊つて行つて下さんせぬか。
お峯　さあ、わたしもごうやら、歸りともなく泊つて行きたく思へども、そなたの迷惑にならうと思うて。

お花　いえ〳〵、迷惑にはならぬから、遠慮なしに父さんも。
お峯　そんなら泊つて行かうか。
お花　どうぞさうして下さんせいなあ。（トお花手をたゝく、下手より以前のお勝出來り、）
お勝　お花さん、何でござんす。
お花　ちよつと耳をかしておくれ。（ト囁くことあつて、）
お勝　あい〳〵、ようござんす。丁度隣りの部屋が明いてゐれば、あそこへお連れなさいましな。
お花　そんなら、お部屋へよいやうに。
お勝　えゝ、よいやうに言うておきませうわいな。
お峯　とんだ御厄介になりますわいの。
お勝　何の御厄介どころか、どれ、さう申しておきませう。（トお勝は下手へはひる。）
お花　さあ父さん、さぞ草臥れなさんしたらうから、ちつと横にならしやんせいなあ。
ト右の合方、薄ドロ〳〵になり、お花先に作兵衞しを〳〵と上手障子屋體へはひる。跡よりお峯行かうとして立留り、
お峯　おゝお年の上とはいひながら、苦勞勝ちゆゑとぼ〳〵と、昨日に替る今日の樣子、夜更けて歸る

も氣がゝりに、ごうしたものと思ふ所、妹の留めるを幸ひに、爰へ留めて貰うたが、かうして親子一つになるのは、もしや今夜が、

ト思入、此時きびしく一つ鉦を打つ、お峯びつくりして下にゐるを、道具替りの知らせ。

おゝ、心に掛ることぢやなあ。

ト一つ鉦、風の音にて、此の道具廻る。

(同女郎屋廻し部屋の場)＝＝本舞臺三間の間、平舞臺、向う中切の襖上下一間折廻し、障子屋體、上手に廻し屛風、いつの所二階の上り口、總て女郎屋廻し部屋の體、道具中程より、はやり唄の騷ぎにて道具留る。

と直に下手障子の口より、以前の若い者喜助、和尙次郎を連れて上つて來り、

喜助　へい、こちらにお出で下さいまし。(ト是にて次郎上手へ住ふ。)へい、お馴染樣でござりまするか。お初會樣でござりまするか。

次郎　なに、おらア初會だが、こつちの內にお花といふ、女郎衆があるさうだが、それを出して貰ひてえのだ。

喜助　へい、生憎今晚はお花さんは、お客樣でござりまするが、外にまだ幾らもよい子供衆が遊んでを

りまするが、如何でござりませう。

次郎　いくら廻しがあつてもいゝから、ちよつと顔さへ見りやあいゝのだ。どうぞその子を出してくんねえ。

喜助　へいへい、それさへ御承知なら、お花さんをお出し申しませう。

次郎　さうしてまだ、外に遊んでゐる子があるなら、二三人連れて來ねえ。今夜は賑かに騷ぎてえのだ。

喜助　それは有難うござります。さうしてお誂へは、どういたしませう。

次郎　大臺を一枚、酒は詰で持つて來てくんねえ。

喜助　へいへい、畏りました。（ト下手へはひる。）

次郎　もう今夜は引過ぎのやうだが、どぢな駕籠に乘つたので、そこら中を擔ぎ廻され、やうやうのことで惣門へ來たが、辻駕籠にやあ乘らねえことだ。

ト此時障子の内よりおまめの小職、盆へ茶碗をのせ持ち出て、

まめ　はい、お茶をお上んなさい。

次郎　おいおい、よく持つて來てくれた。さうして手前は幾つだ。

まめ　あい、十になるよ。

次郎　みんなかうして仕込まれるのだが、考へて見ると可愛さうなものだ。さうしてちやんもおつかあもねえのか。

まめ　あい、ちやんもおつかあもあるけれど、ちやんが博奕が好きだものだから、それでおいらは賣られたよ。

次郎　なに、それぢやあ矢張り博奕でか。いやさ、可愛さうなことだな。（トおまめ立つて行かうとするを）おい、ちよつと待ちな。（ト腹がけの隱しから、百錢を出し、）それ、辻占の豆でも買つて喰へ。

まめ　あい、有難う。（ト錢を頂き、下手へはひる。）

次郎　誰でもあいつに掛つちやあ、可愛い子供や女房を、かういふ苦界へ沈めるから、何でも博奕アしねえことだ。

ト矢張り右の鳴物にて、下手よりお勝引附の杯を持ちて、先に立ち、以前のお花、おきく、おふで上草履を履き出て來る。お花次郎と顏見合せ、ぎつくり思入あつて、わざと知らぬ顏にて下手へ宜しく住ふ。お勝前へ出て、

お勝　へい、今晩は有難うございます。へい、あなた様。（トよろしくお花を引附ける事あつて、）へい、お召し替へ。（ト是にてお花ずつと立つて下手へはひる。おきく、おふではこちらへ來り、）

きく　今晩は、有難うござんす。
ふで　さあ〱、こつちへ來て、一服やんねえ。
お勝　左樣なら、只今お誂へが參ります。
次郎　どうぞ、早くしてくんねえ。
お勝　畏りました。（ト下手へはひる）
きく　もし、さつきはきつい降りでござんしたなあ。
ふで　さぞ降られて、お困りなさんしたらう。
次郎　いや、どぢな駕籠に乘り當てゝ、酷い目に逢つた。（ト此時おきく烟草を吸ひつけて出し。）
きく　はい、一服お上んなさい。
次郎　あい〱、有難うよ。いや、來る時にやあ降られて來ても、どうか振られて歸りたくねえものだ。
きく　あれ、うまく言つてお出でなさるよ。
ト下手より喜助、臺の物と白鳥の德利を持ち出來り、
喜助　へい、お誂へが參りました。
次郎　おゝ、めつぽふに早かつたな。

喜助　もし、おふでさん、お燗をどうぞお頼み申します。

ふで　あい／＼、承知ぢやわいな。

ト爰へおまめの小職、酒の道具を運ぶことよろしく。おふで酒の燗をつけること。

次郎　かうお前も暇なら、一ぺえ呑んで行きねえな。

喜助　へい、有難うございます。左様なら、ちやうだい鏡立といたしませう。

次郎　あんまり悪い洒落だな。

きく　ほんに喜助どんは、徳利さへ見ると、株で駄洒落が出るのだよ。

ふで　そんな古いのを出さずに、もつと新しい洒落をお言ひなねえ。

喜助　いえ洒落ばかりは額銀と違つて、古い方が通用がようございます。

次郎　しかし、あんまり手擦れ過ぎて、引を立てにやあ通用しめえ。

きく
ふで　ほんに、さうでございますね。

次郎　何にしろ、是はお前にさすとしよう。

喜助　それは有難うございまする、どれ、頂戴。

きく　また、鏡立かえ。

喜助　いえ、他人の初まりさ。

次郎　いや、、、おつウ逃げたな。

ト此内酒盛よろしく、下手の障子を明け、お勝出で、

お勝　大分お賑かでござりますね。

次郎　かゝ、お前もこつちへ來て、一ぺえやんねえな。

お勝　へい、有難うござります。左樣なら、お辭儀なしに。（トこちらへ來る。）

喜助　おつと、ちやうだい鏡立はいけねえよ。

お勝　あれさ、まだ何も言やあしないわね。

きく　お勝どん、まだ義太夫は始まらないのかえ。

お勝　いえもう、二三段濟みました。是からお駒の鈴ヶ森ださうでござります。

次郎　さらひでもあるのかえ。

お勝　いえ、義太夫の好きなお客樣が、芝居へ勤める太夫さんを連れて來て、さつきから語りつゞけでござりまする。

次郎　そいつア聞き事だ。

ふで　今に始まつたら開きにお出でなさいよ。
　　　　ト此内喜助一人で無暗に酒を呑む事よろしくあつて、
喜助　是は大きに御馳走様になりました。
次郎　まあ、いゝぢやあねえか。もつと呑みねえな。
喜助　いえも、澤山頂戴。
お勝　もし、鏡立はいけないよ。
喜助　それぢや、ちやうだい。
きく　他人の始まりかえ。
喜助　その通り。（ト喜助天窓を掻きながら下手へはひる。）
お勝　おきくさん、お花さんはまだ見えなさんせぬかえ。
きく　あい引付きりでござすんすが、ちよつと見て來て上げようわいな。
次郎　大方今に來るだらうから、まあいゝやな、爰で呑みねえ。
きく　もう引過ぎでござんすから、早くお床におしなさいましよ。
ふで　また床で遊びませうね。

お勝　遊ぶのはいゝけれど、此お客に岡惚れをして、難儀をかけちやあいけないよ。
きく　ほんにぬしにやあ、誰でも惚れるよ。
次郎　これさ油をかけちやあいけねえぜ。
お勝　それぢやあ親方、
三人　また後程。
次郎　きつと遊びに來てくんねえよ。
ト矢張右の騷ぎにて、皆々わや〳〵と下手へはひる。直に上手障子屋體より、お花つか〳〵と出て、
お花　もし、日章さん。（ト大きく言ふ。）
次郎　これ、靜に言へ。（トあたりへ思入、誂への合方になり、お花次郎の胸づくしをとり、）
お花　えゝ、お前はなア〳〵。
次郎　おゝ尤もだ〳〵。その恨みは父さんに、さつき澤山聞いた。何事もおれが惡いから、どうぞ何にも言つてくれるな。これ、この通りだ〳〵。（ト手を合せて拜む。）
お花　言ふなと言つても言ひますわいな。なぜかういふ身にさしやんすなら、わたしにかうと打明けて得心させて下さんせぬ。そりやもう、わたしゆゑにお寺をしくじり、そんな姿になつたお前、得

心づくのことなれば、何で厭ぢやと言ひませう。それもわたしを爰へ賣り、逢ひにも來て下さんす事か、なしもつぶてもしなさんせぬこは、そりやあんまりぢや、胴慾ぢやわいな。

次郎 おゝ尤もぢや、無理ぢやあねえ。そりやあ手前が言はねえでも、百も合點してゐるが、おれもあの時大御難で、どうしようと思ふ矢先、あの女衒の源八に出會はしたのが因果の始まり、ほんのその場の出來心で、かうして賣りやあ賣つたものゝ、よく〳〵思やあ年とつた、あの父さんをたばかつて、濟まねえことだと氣が付いたから、矢も楯もたまらなく、どうぞ金をば工面して、手前の年季を抜きてえと、あつちこつちと駈け歩いたが、さて出來ねえものは金錢づく、それゆゑ手前の所へも、段々無沙汰になつたのだ。所がちつと譯があつて、やう〳〵百兩出來たから、金の顏を見るとそのまゝ、ちつとも早く手前に逢ひ、言譯しようと思つて來た、道で思はず、(ト言ひかけ思入あつて)まあ此話は又跡で、ゆつくり話して聞かせよう。何にしろあれッきり無沙汰にしたのは此譯ゆゑ、必ず悪く思つてくれるな。その替りにやあ、是から又、足近くおれも來て、手前の力にならうから、出來たことだと諦めて、どうぞ料簡してくれろ。(ト次郎よろしく詫びる。)

お花 ほんにお前の口先は、うつかり乘られはせぬけれど、さういふ譯ならそれとして、わたしや料簡しようけれど、わたしよりは父さんが、どんなに怒つてゐなさんせう。何でもお前を見當り次第

かぶり附いても娘の敵、取らねばならぬと言うてぢやぞえ。

次郎　おゝ、さうだらう〳〵。その腹立は知つてゐるよ。

お花　丁度幸ひ父さんが、今夜來てゐなさんすゆゑ、譯を言うてあやまらしやんせ。

ト是を聞き次郎合點の行かぬ思入にて、

次郎　これお花、父さんが來てゐるか。

お花　あいなあ。

次郎　えゝ、(トびつくりなし、)そりやあ、本當のことか。

お花　何のまあ、お前ぢやアあるまいし。わたしが嘘を言はうぞいなあ。

次郎　そんならいよ〳〵、來てゐるか。

お花　あい、今しがた迄、わたしと一緒に話をしてゐやしやんしたが、隣りの部屋に蚊帳を釣つて、今夜は泊つてゐやしやんすから、嘘なら行つて見やしやんせ。

次郎　いや、そいつア見るには及ばねえ。(ト思入あつて、)親子の愛に迷つて來たか。

お花　え。

次郎　いやさ、おらア手前に迷つて來たのだ。

お花　えゝも、氣休めも止しなせんないなあ。（ト下手よりおきく出來り、）

きく　もし、お花さん、ちよつと。

お花　おきくさん、何ぞ用かえ。

きく　今お部屋の旦那樣が、何だかお前を呼んで來いと、言はしやんしたわいなあ。

お花　なに、旦那さんかえ。

きく　あいなあ。

次郎　それぢやあもしや、おれが身許を。

きく　え。

次郎　いや、おらア寢て待つてゐるから、早く行つて來るがいゝ。

お花　あい、直に行つて來ますよ。

ト端唄になり、お花おきく附いて下手へはひる。跡に次郎思入あつて、

次郎　蚊帳の内に寐てゐるから、見ろとあいつが言ふからは、よもや噓ぢやアあるめえが。どうして殺した父さんか、爰の二階に來てゐるか、おれが乘つてる駕籠先に、親仁がゐると駕籠屋が言つたが、それぢやあおれに附いて來たが、何でもこいつアドロ〳〵に。（ト慄然として身顫ひをなし、）何

だか寒くなつて來た。（トあり合ふ茶碗で手酌にて酒を呑む事あつて、）そりやあさうと、さつきの百兩、何處へ飛んだか知れねえが、人通りのねえところだから、夜明け前に行つたらば、あるだらうとは思つてゐるが、どうぞ誰ぞに拾はれにやあいゝが。

ト此以前上手へ前幕の重兵衞、着流し、好みの拵へにて窺ひゐて、

重兵　いや、その百兩なら、案じるな。

次郎　や、思ひがけねえ、お前は伯父御。

重兵　これ。（トあたりへ思入あつて、誂への合方になり、）手前の尋ねるその金は、おれが拾つて持つて來た。

次郎　どうしてお前が、あの金を。

重兵　御輿ヶ嶽の山下を、通りかゝつて拾つたが、どうして爰らに此金があつたことかと提灯の、明りで見たら覺えの百兩、包んだ紙は端切らず、世間に少ねえ奥州檀紙、手前にやつた金ゆゑに、そのまゝ拾つて持つて來たのだ。

次郎　そりやあ何しろいゝ人に、拾はれたのが仕合せだが、さうしてお前は信州へ、行くと言つたがまだ江戸に。

重兵　直に旅へ出かける日にやあ、出口々々に鵜の目鷹の目、直に喰え込む仕事だから、矢張燈臺元暗しと、滅多に人の氣の附かねえ、草深い所に隱れてゐて、ほとぼりを拔いて行くつもりだ。それゆゑ今夜も暮れてから、用達に出た歸り道だ。

次郎　どうしてわつちが爰にゐるのを、お前は知つて來なすつた。

重兵　手前のゐるのを知つちやあ來ねえ。今夜おれが爰へ來たのは、金を拾つてぶら〳〵と駒込在へ歸り道、丁度根津の入口で、見かけた女はその以前、おれが田舍へ連れて行つて、圍つて置いた女だが、見る影もねえ形をして、門附にでも出る樣子、逢つて言ひてえこともあるが、あたりの人目にうつかりと、名乘ることも出來ねえから、見え隱れに附いて來たら、爰の內へはひつたからおれも爰へ上つたが、手前に今夜逢はうとは、おらあ夢にも知らなんだ。

ト此內次郎思入あつて、

次郎　ほんに思ひがけねえことだが、その門附の女といふなあ、ちつとこつちに當りがあるが、そりやあ何處のものでござります。

重兵　その女は深川の、妙心寺の門前で、花屋作兵衞といふものゝ娘だ。

次郎　え、それぢやあお花の姉のお峯かえ。（ト是にて兩人びつくりなし、）

重兵　おゝ、そのお峯といふ女だが、どうしてそれを。あゝ手前が以前ゐた寺の、門前だから知つてゐるのか。

次郎　いえ、知つてゐるのはその妹の、お花とわつちが喰付いて、追放されたがぐれの初めさ。

重兵　おゝ、それぢやあお峯が話に聞いた、お花といふのは手前の色か。さうしてその妹は、何處にゐる。

次郎　わつちが賣つて爰の内に、今ぢやあ勤めをしてゐます。

重兵　それでお峯が、逢ひに來たのか。

次郎　いや、とんだことから名乘つて見ると、

重兵　手前とおれは、伯父甥だが、

次郎　女の縁ぢやあ兄弟同士。

重兵　何處にどういふ縁があるか。

次郎　ほんに知れねえものだねえ。

ト兩人思入あつて、重兵衞次郎の手拭へ目を付け、

重兵　さうして見ると作兵衞は、手前の爲にやあ舅だが、何で今夜殺したのだ。

次郎　え。(トびつくりなし、)なんで、わつちが。

重兵　いや、隱すにやあ及ばねえ。此の百兩を拾つた傍に、切られてゐたは花屋の作兵衞、不便や誰に切られたかと、思つてゐたが金といひ、手前の持つてる手拭に、糊が附いてゐるからは、殺したに違ひあるめえ。(ト次郎是非なき思入にて、)

次郎　さう知られた上からは、隱しやあしねえが殺したは、かういふせつねえ譯ゆゑに。

ト次郎言ひかけるを重兵衞留めて、

重兵　いや、その話は又後に、床でゆつくり聞くとしよう、引過ぎながらまだあの通り騷いでゐれば、洩れては互ひの身の上だ。(ト懷から以前の百兩を出し、)何んにしろ、さつきの百兩、是をそつちへ渡しておかう。(ト次郎請取り、)

次郎　こりやあ有難うございます。いゝ人に拾はれたので、捨てものにした百兩が、思ひ掛けなく返つて來た。(ト此内上手障子の内にて、)

お峯　もし父さん、父さんは、何處へ行かしやんした。

ト此聲に次郎びつくりして、屛風の影へ隱れる。お峯出來り、

重兵　そこへ來たのは、お峯ぢやあねえか。

お峯　えゝ、さう言はしやんすは。
重兵　忘れたか、おれだ。
お峯　おゝ、旦那さんでござりましたか。
重兵　久しぶりで逢つたなあ。
お峯　えゝ、お懷しうござりますわいまあ。（ト　お峯傍へ來り、）さうしてあなた、只今では。
重兵　矢張り元の國にゐるが、のがれぬ用事で出掛けて來たが、又近々に歸るのだ。
お峯　よい時お目にかゝりましたが、今夜爰へはお馴染でも、あつてお出でなさいましたか。
重兵　馴染ごころか初會だが、女郎を當に來たのぢやあねえ、お峯おぬしに、逢ひに來たのだ。
お峯　どうしてわたしが、をりますことを。
重兵　さあ知つたはさつき惣門前で、思はず見かけた後姿、往來中で話も出來ねば、見え隱れに附いて來て、おぬしが上るその跡から、直に二階へ上つてゐたのだ。
お峯　そりやまあ嬉しうござんすが、お目に懸るも面目ない、身の不仕合せに此樣な、姿となりし一と通り。
重兵　いや、其の難儀をした譯も、脇で委しく話に聞き、內が知れたら尋ねて行つて、貢いでやらうと

思つたとこゆゑ、それで爰へ上つたのだ。

お峯　以前の誼みを思召して、貢いで下さるお心なら、ごうかわたしを又お國へ。

重兵　さあ連れて行つてやりてえが、おぬしの世話の出來ねえのは、親子に難儀をかけまいため。

お峯　え、そりや何ゆゑでござります。

重兵　委しい譯は爰ぢやあ言えねえ。幸ひ女郎も廻しゆゑ、何かのことはおれが寢所で。

お峯　そんならあなたの、お部屋へ行つて。

重兵　三年此方別れてゐた。

お峯　積る話しをしつぽりと。

重兵　櫺子へ當る雨を聞き、

お峯　久しぶりにて。（トお峯重兵衛に寄り添ふ。）

重兵　ごれ、名代を抱いて寐ようか。

ト唄になり、重兵衛お峯を連れ、上の方へはひる。屏風の影より次郎出て、

次郎　思ひがけねえお花が姉の、お峯を圍つた旦那といふは、おれが伯父御の彦五郎、今宵からして落合ふとは、こいつも不思議な因緣だなあ。

ト風の音ドロ〳〵のやうな音になり、時の鐘、下手障子屋體より以前のお花しを〳〵と出で來り、次郎の傍へ來て、鬱ぎゐる。

これお花、今夜も餘程更けたやうだ。床を入れて貰つて寐ようぢやあねえか。

ト言へども立つてゐるゆゑ、

これ、なぜそんなに鬱ぐのだ。まあこつちを向くがいゝぢやあねえか。

ト お花を引寄せるを、

お花　もし、日章さん。（ト胸づくしをとつて、）お前はおそろしい人だね。

ト恨めしさうに言ふ。凄き合方になり、

次郎　えゝ、またそんな愚癡を言ふのか。もう大概にするがいゝ。

お花　是まで言はずにゐたけれど、よくもいつぞや深川で、二人一緒に死なうと言つて、私を川へ附落し、お前は死なずにゐなさんしたな。白魚舟に助けられ、死なずにゐたからよけれども、あの時死ねば私一人、こつちはお前が死んだと思ひ、菩提の爲に親子して、順禮に出た二人を騙し、私をかういふ苦界へ沈め、またあきたらず父さんまで。

次郎　あゝこれ、滅多な事を言つてくれるな。

お花　いえ〳〵、言ひます、言はいでかいな。よくも最前山下で、父さんを殺したな。

次郎　え、誰がそれを手前に言つた。

トドロ〳〵になり、お花すつぽんにて消える。直に以前の作兵衛すつぽんにて出で、

作兵　誰でもない、おれが言つた。（ト次郎びつくりして、）

次郎　や、お前は父さん。さては迷つて爰へ來たのか。

作兵　おゝ迷はひで何んとせう。われが非道な刃にかゝり、行くところへも行かれぬゆゑ、中有に迷ふ此の作兵衛、さつきの駕籠に乘り移り、われが惡事を訴人したれば、今にその身を召捕らせ、恨みを晴らさにやおかぬぞよ。（ト作兵衛次郎の胸づくしを取る。）

次郎　尤もだ〳〵、その恨みは尤もだが、さつきもあれ程言ふ通り、お花を賣つたが惡いから、百兩こいふ金を拵へ、それを土産にあやまつたも、昔し氣質に聞き入れず、勾引の訴人をすると、言ふを留むるその機、脾腹を垣で突いたのは、そりやあお前がしたことだ。

次郎　是程おれが譯を言ふのに、またそんな事を言ふのか。

作兵　おゝ言はいで何とせうぞ。非業な目に逢つたからは、とり殺さにやあ腹が癒ぬ。

次郎　さりとはお前も分らねえ。どうで一度は死ぬ體だ。とり殺すなら殺しねえ。

作兵　おゝ、殺さいでおくものか。(ト胸をしめようとする。)

次郎　えゝ、しみしつこい放さねえのか。

ト振拂ふ。此内ドロ〳〵幽靈の合力、作兵衛後から次郎の咽喉をしめにかゝる。次郎怺え兼ねて、懐から匕首を出し、作兵衛を切拂ふ。是にて作兵衛後へたぢ〳〵となる。此時後の襖を引拔き、内に床を敷き、蚊帳を釣つてある。此時下の方よりお花出來り、びつくりして此中へはひり留める。是より三人蚊帳を遣ひ、次郎は作兵衛を切拂ふ。お花は是を留める立廻り、よろしくあつて、トヾ作兵衛を切拂はうとして、誤つてお花を切りさげ、びつくりなす。作兵衛是れを見て、情けないといふ思入あつて、ドロ〳〵にて蚊帳の内へ消える。お花苦しき思入にて、

お花　こりや、何でわたしを殺すのぢや。

次郎　何でお前を殺すものか。こりやアまつたく、怪我だ〳〵。

お花　いえ〳〵、殺すのぢや〳〵。お前は私を殺すのぢや。(ト是にて次郎お花の口を押へ)

次郎　えゝ情ねえ、手前迄、非業におれが父さんを、殺したと思つてゐるか。その間違ひで此深手。所詮命は助かるめえから、死ぬと覺悟をしてくれろ。おれも舅を殺したからは、手前ばかりやりやあしねえ。今に跡から死んで行くから、恨みがあるなら冥土で言へ。(ト手を放す。)

お花　人殺しぢや。

ト逃げようとするを、次郎引戻して、咽を貫く。是にてお花烈しく苦しみ落入る。爰へ下手より以前の日丈出て、

日丈　やい日章、手前もいゝ悪黨になつたな。

次郎　や、さういふわりやあ日丈か、さつき思はず父さんに、手前の悪事の噂を聞いたが、さてはあの時助かつたか。

日丈　おゝ、いつぞや川へ打ち込まれ、すんでの事に土左衛門と名を替へようとしたところ、おれも以前が桑名屋で、船乗りをしたお蔭にやあ、命助かり生延びて、今夜お花の所へ上り、思はず見たり聞いたりした、手前の悪事を訴人するから、不便や首は附いちやゐねえぞ。

次郎　え。(トぎつくり思入。)

日丈　それとも附けておきたくば、懐にある百兩の、金を半分おれによこすか。

次郎　さあ、それは。

日丈　それともいやなら、訴人をせうか。

次郎　さあ、それは。

日丈　いやなら惡事の、訴人をせう。
次郎　さあ、それは。
日丈　金を寄越すか。
次郎　さあ。
日丈　さあ。
兩人　さあ〳〵〳〵。
日丈　金を寄越さぬ上からは、うぬが惡事を訴人して、以前の意趣を返すから、覺悟して待つてゐろ。

ト日丈下手へ行かうとするを、次郎引戻し、ちよつと立廻つて、

次郎　いつか手前がちよろまかした、奉納金の五十兩は、その晩おれが取返したが、上尾の原で父さんの葛籠を盜んだ護摩の灰、訴人をするといふからは、手前も冥土の道連れだ。
日丈　何を小癪なっ

ト早き合方になり、ちよつと立廻つて、次郎日丈を切倒す。是にて日丈聲を立てようとするを、あり合ふ蒲團を冠せ、ぐつと上からさし通す。日丈虛空を摑み落入る。次郎ほつと思入、床の淨瑠璃になり、

〽思ふ事叶はねばこそ憂き事の、戀と義理との諸手繩、不便やお駒は夫の爲め、かゝるうき身のしばり繩。

ト此内次郎日丈の死骸へ、すつぽりと蒲團を冠せ、お花の死骸を屛風で隱し、匕首を側へ置き、思入あつて、

次郎 折も折、時も時、二階で語る淨瑠璃は、白木屋お駒が引廻し、死なうと覺悟した矢先、丁度此身にいゝ辻占、合更愚癡を言ふやうだが、思へばいつぞや二人して、身を投げた時死んだなら、今の思ひはあるめえに、あの時なまなか助かつて、ふつと浮んだ惡心に、そでねえ事をして暮した、報いが忽ち廻り來て、心にもねえ親殺し、舅殺しの惡名を、殘すもみんな此身の科、せめて一筆書き殘さん。

〽顏さし入れる懷を、もれて流るゝ淚橋、居所の羊の歩みより、果敢なき身ぞと觀念し、力なく〳〵曳かれ來る。

ト此内次郎有合ふ硯箱を引寄せ、紙がないと言ふ思入にてあたりを見廻す。後の屋體の内に行燈のあるを見て持ち來り、是より行燈へ書置きを書く事よろしくあつて、

罪の次第を書殘し、身を捨札の行燈は、時にとつての角柱、その張附の紙幟で引かれて爰も廻し

部屋、突込む此身の錆槍は、お部屋仕置の小刀針、どれ兇狀をうけようか。

〽果てはかうした淺猿しい、此世からなる劍の山、身を切りさかれうき恥を、洒すも定まる因緣づく。

ト此內次郎屛風を建て、肌を脫ぎ、件の匕首を腹へ突立て、わッと苦しむ。

〽折もこそあれこなたなる、群集押し分け兩親は、竹垣に縋り附き。

ト此時上手より以前の重兵衞、お峯出で、此體を見てびつくりなし、

重兵　やゝ、こりや次郎には、腹を切つたか。

次郎　こなたは伯父御、お峯どの。

お峯　こりや何ゆゑに、此の生害。

次郎　罪の次第は、此の行燈。

お峯　なに、此の行燈に。

重兵　お峯、讀んで見やれ。

お峯　どれ。（トお峯行燈へ向ふ、竹笛入りの合方になり、）なに〳〵。「一、此の次郎事、いまだ日章と言ひし出家の折、女犯の罪にて追放の身となり、その夜相弟子日丈と申す者が所持なせし金子五十兩

奪ひ取り、その後お花作兵衛をたばかり、娘お花儀を遊女に賣り、金子百兩貪り取り、あまつさへ右作兵衛を殺害に及び。」え丶、そんならあの父さんを、こなたが手にかけ殺せしとか。

〽縋り歎けば、聲をあげ、

次郎 さ丶、それも全く怪我あやまり、かね〴〵こなたも知つての通り、お花を苦界へ賣つたのを、濟まねえ事と思ふから、百兩といふ金を拵へ、言譯せうと來かる丶途中、作兵衛どのに出ッ會し言譯したれど聞き入れず、爭ふはずみに竹垣で、脾腹を突いて思はぬ深手、所詮命のねえ事ゆゑ、無據殺したが、死靈の祟りでお花といひ、弟子朋輩の日丈を、殺した上は此次郎、最早生きちやあゐられぬから、舅を殺した言譯に、身を捨札の此の行燈、つもる惡事も有明と、共に消え行く我命、此首とつてお峯どの、どうぞ恨みを晴らして下せえ。

〽言ふに母親うろ〳〵と、娘が姿見るよりも、前後不覺に取り亂し、

ト お峯お花の死骸を見て、取り附き泣く。

お峯 え丶情ない此の姿、如何なる前世の因果にて、さういふお前の心と知らず、正直一途な父さんに、言譯さへも聞き入れず、その身ばかりか妹迄、か丶る非業な最期をなし、便りに思ふ二人を先立て、跡に殘つて何樂しみ、わたしも共々死にたいわいな。

次郎　これ〱姉御、その歎きは尤もだが。

〽必ず〱泣かずとも、娘でもない、何でもない。ありや前生の敵ぢやと、歎きを止めて下さるが、少しは冥土の罪滅し。（ト此内次郎お峯に詫びる思入、重兵衞よろしく思入あつて、）

重兵　あゝ、惡に强きは善にもと、流石は次郎吉よく死んだ。晩かれ早かれ此の伯父も、跡から行くから待つてゐろ。（トお峯是を聞き、）

お峯　え、お前が伯父と言はしやんすのは。

重兵　何を隱さう次郎吉とは、切つても切れぬ伯父甥だ。

お峯　思ひがけないお二人は、さういふ緣でござんしたか。

次郎　さあ、苦痛をさせずにお峯どの、此の首とつて父さんや、お花の恨みを晴らして下せえ。

〽わたしが死んだ其跡でも、必ずくよ〱思はぬやう。

ト次郎匕首をお峯の前へ出し、首を差延べる。お峯思入あつて、

お峯　知らぬ先は兎も角も、繋がる緣とあるからは、何で刃が當てられませう。假令恨みがあればこそ言はゞ其場の行き間違ひ、死なずとしやうもあらうのに、早まつた事なさんしたなあ。

重兵　いや〱、假令此の場で死なずとも、一人ならず二人三人、人を殺した上からは、其の身にかゝ

る天の網、長く生きてはゐられぬ次郎吉、先非を悔いて腹を切り、疊の上で死ぬのは仕合せ、今も廊下で噂を聞けば、さつき爰まで乘せて來た、駕籠屋が訴人で事が暴れ、歸りを待つて召捕るとて、表に捕手が詰め掛けたれば、迚ものがれぬ惡事の年明け、爰らが人の死にどころだ。

次郎　そんならさつきの駕籠屋が訴人で、捕手が來たとあるからは、案じられるは伯父御の身の上、ちつとも早く此の場をば。

重兵　おれが事なら氣遣ひするな。假令捕手が數百人、此家の四方を取卷くとも、神影流の極意を極めし、天狗と異名の彦五郎、切拔けるのは腕にあるわえ。

お峯　そんならお前も、何で惡事を。

重兵　おら、此の次郎吉と同じ事、明日をも知れねえ身の上だ。

お峯　えゝ。（トびつくりなす。）

重兵　旅では近江屋彦右衞門、江戸では美濃屋重兵衞と、美濃と近江の異名のあるは是迄寢もの語りにもおぬしに隱して言はなんだが、生れは甲州巨摩郡猿橋近く手の長い、新居村の彦五郎といふ、おれも矢張り盜人だ。

お峯　お前がさういふ身の上とは、けふの今迄知らなんだが、假令盜人さんにもせよ、一旦御恩をうけ

たれば、
〽何の跡に片時も、生きてゐられう二人ながら、
どうぞわたしも、共々に。(ト六峯、重兵衛に縋る。)
重兵　いや、そりやあ悪い料簡だ。おれが體へ青繩が、かゝりや繋がる親父やおぬしに、難儀をかけるが不便ゆゑ、それと言はずに百兩の金を手切に別れた仲、よしない義理を立てねえで、親父や妹が亡き跡の問弔ひがおぬしの役、殊には爰を逃げ延びても、此の彦五郎を附狙ふ、四郎三郎に廻り逢ひ、盗んだ金を返した上、敵を討たれて葛飾の、家再興をさせるのが、この彦五郎がその以前恩を受けたる恩返し、荒い稼ぎはしながらも、爰が義賊の魂だ。
次郎　それ迄伯父御やお百の科も、どうであの世へ行きがけの駄賃に背負つて行くその書置、末の方を讀んで下せえ。
〽今死する身のあどなさを思ひやりつゝ、兩親は、(ト重兵衛書置を見て。)
重兵　なに〳〵、「千葉の屋敷へ忍び入り、葛飾次郎右衛門を手にかけ、金子千兩盗み取り、其の夜洲崎の六萬坪にて、桑名屋徳兵衛を殺し、又候今宵女房花、合弟子日丈を殺害に及び、重なる悪事の先非を悔い、此所にて相果て候ものなり。」すりやおれといひお百迄の、罪をその身に引受けて、

書殘したる此の行燈。

次郎　二人の罪も此次郎が、背負つて行くのは此金を、貰つた伯父御へ一つの返禮。(ト以前の百兩包みを出し、)お峯どのは此の金で、二人の跡を弔うて、殘つた金でその身の片附き。

お峯　そんなら、是で。(ト金を取上げる。)

重兵　人目にかゝらば身の大事、少しも早く、此家を落延び。

お峯　とは言へ別れ程經たる、お前にめぐり逢ひながら、

重兵　敵持つ身に是非なくも、又もや爰で生別れ。

次郎　此の次郎は罪科を、背負つて冥土へ死別れ。

お峯　いつを限りと知れぬ身に。

重兵　又逢ふことも有明の。

次郎　此の曉が此世の別れ。

お峯　是を思へば世の中に、

重兵　逢ふは別れの、

三人　初めぢやなあ。

〽前後正體打倒れ、泣く音は濱邊に打寄する、波に波ますばかりなり。

ト三人よろしく思入あつて、爰へ寢ず番太郎時の拍子木を打つて來て、是を見て、

太郎　やあ、こりや心中か。

トびつくりして行きにかゝるを、重兵衞引戻し、次郎の方へ突きやる。次郎太郎を引付け膝をかける。お峯は行燈を吹消す。重兵衞は手を合せ、次郎を拜む。此の摸樣よろしく、早めたる合方、時の鐘の送りにて、此の道具廻る。

（根津相摸屋格子先の場）――本舞臺三間の間、上手一間の大戸、潛り附、是より下千本格子、戸袋日覆より二階をおろし、誂へ毀れる仕掛の格子、上下黑塀、此前に常燈のたそや行燈、手桶を積みし用水桶、總て根津相摸屋格子先の體、どん〳〵にて道具留る。と爰に黑四天の捕方六人立掛り、若い者喜助控へてゐる。

○　こりや若い者、すりや、かね〴〵お尋ねの新居村の彥五郎に、

△　名うてのごろつき和尙次郎が、此家に止宿いたしをるとか。

喜助　左樣にござりまする。兩人ともにをりまするが、彥五郎は七つを打つと歸りまするると申しますれば、もう只今に歸りませう。

○　少しも早く歸るやう、其方參つて取計へ。

喜助　畏りましてござりまする。

△　氣取られぬやうに致せ。

喜助　心得ましてござりまする。

ト喜助潛りより内へはひる。跡六人囁き合ひ窺ひゐる。此の時内にて、

へい、お歸りでござりまする。

ト此聲にて六人は上下へ別れ、忍びはひる。誂への合方になり、大戸の潛りを明け、重兵衛一本差し、雪駄を履き出る。

お近い内に。

ト跡をしめる。此時上下より捕手窺ひ、重兵衛是を見てうなづき、ゆう／＼と行きにかゝるを後から一人、つか／＼と行き捕へて組附く、重兵衛振解きて見事に投げのけ、又行きにかゝるを、二人左右よりかゝるを、突廻して目潰しを喰せて投げのけ、きつと見得。ドン／＼誂への合方にて、六人一度に打つてかゝる。重兵衛一腰を拔き、是を相手に手の利いたる烈しき立廻り、トヾ六人叶はず、下手へ逃げてはひる。此時二階正面の格子をばら／＼と毀し、寢ず番太郎逃げて庇へ出る。跡より次郎

糊紅になり、ひよろ〳〵と出て、片手で腹を押へ、匕首を振上げ、きつと見得。是にて太郎二階より見事に轉り落ちる。重兵衛是を引付ける。此の時潛りよりお峯出て、重兵衛の裾へ取附く。本釣鐘を打込む。

お峯　そんなら、是れが。（ト次郎下を見て、）

次郎　此世の別れ。

重兵　次郎、お峯。

ト重兵衛兩人に氣の引かされる思入。此時上下より捕手ばら〳〵と出て、重兵衛にかゝる。是を相手によろしく立廻り、爰へ下手より秋田の重吉、繩にかゝり出て來る。重兵衛重吉を見て、

や、重吉も喰ひ込んだか。

重吉　親分、もう逃げても叶はねえ。往生して地獄へ行きねえ。や、次郎さんは腹を切つたか。

重兵　逃げるだけはと思つたが、次郎といひ手前迄、天の網にかゝつたら、おれも男だ、未練は言はねえ。（ト捕手を振拂ひ、下にゐて、）いざ、繩をお掛け下さりませ。

捕手　神妙にいたせ。（ト重兵衛に繩をかける。此の時次郎下を見て、）

次郎　そんなら、伯父御も。

重兵　おゝ、冥土へ行つて。

ト重兵衛立上る。お峯泣伏す。次郎柱へ取附き、双方見合つて、木のかしら。

ト重兵衛二階を見上げる。お峯は重兵衛へ思入。重吉は捕手附き、上手へ来る。次郎うつとりとなり、落入る。此の仕組よろしく、本釣鐘、早き合方にて、

ひやうし　幕

和尚次郎と妲妃のお百（終り）

（附録）

主なる興行年表

切られお富

年時	座名	名題／役割	おとみ	安	源左衛門	與三郎	丈賀	幸十郎	與五郎	おたき
元治元年四月	守田座	處女翫浮名横櫛	澤村田之助	市川九藏	中村芝翫	澤村訥升	市川小文次	中村仲太郎	尾上梅幸	中村歌女之丞
明治十八年七月	千歳座	夕立雲斑甲横櫛	尾上菊五郎	尾上松助	市川壽美藏	坂東家橘	中村傳五郎	市川猿十郎	尾上菊之助	岩井小紫
明治二十一年九月	壽座	月影差横櫛	澤村源之助	市川小團次	市川荒次郎	市川小團次	坂東喜知六	尾上きく	坂東好太郎	市川蔦三郎
明治三十一年二月	市村座	處女翫浮名横櫛	澤村源之助	片岡市藏	中村芝鶴	中村種太郎	片岡市右衛門	片岡市作		市川女寅
明治三十三年八月	眞砂座	浮名の横櫛	澤村源之助	大谷馬十	尾上菊五郎	澤村訥升		中村種太郎		市川猿糸
明治四十二年八月	新富座	友千鳥浮名香箱	澤村源之助	尾上菊四郎	嵐芳三郎	中村又五郎		中村竹三郎		實川延太郎
大正四年七月	本郷座	切られお富	澤村源之助	關三十郎	澤村訥子	市川九藏				

年月	座名	名題	初瀬浪子	尾上松助	中村東蔵	澤村宗十郎		坂東彦三郎		宇治龍子
大正七年二月	帝國劇場	切られお富(きられおとみ)								

敷島怪談

年月	座名	名題／役割	敷島	お玉	十三郎	主鈴	五平次	お爪	源四郎	雲井	主水
明治二年三月	守田座	好色芝紀島物語(かうしよくしきしまものがたり)	澤村田之助	澤村田之助	澤村訥升	澤村訥升	中村仲蔵	中村仲蔵	市川左團次	尾上菊次郎	市川左團次
明治十一年十一月	都座	童歌舗島譚(わらべうたしきしまものがたり)	澤村百之助	澤村百之助	片岡我童	片岡我童	片岡市蔵	片岡市蔵	片岡我童	岩井紫若	片岡我童
明治三十四年八月	東京座	廓文庫敷島物語(くるわぶんこしきしまものがたり)	澤村源之助	澤村源之助	市川染五郎	市川壽美蔵	市川壽美蔵	中村勘五郎	市川染五郎		市川猿之丞
大正九年八月	浪花座	怪談鋪島譚(くわいだんしきしまものがたり)	實川延若	實川延若	實川延若		嵐巖笑	浅尾大吉	嵐吉三郎		
大正十四年三月	大阪角座		片岡我童								

勢力民五郎

年時	座名	名題／役割	民五郎	竹五郎	與吉	左門	奇妙院	丑蔵	おしほ
慶應三年十月	守田座	群清瀧贔屓勢力	中村芝翫	中村芝翫	大谷友右衛門	澤村訥升	中村仲蔵	中山現十郎	坂東三津五郎

明治八年十月	新富座	夜講釋勢力譚話	中村芝翫	中村芝翫	坂東彦三郎	澤村訥升	坂東彦三郎	尾上梅五郎	中村喜世三郎
明治廿一年七月	千歳座	同	中村芝翫	片岡我童	坂東家橘	中村福助	尾上菊五郎	中村鶴五郎	中村歌女之丞
明治廿九年六月	市村座	巖石碎瀑布勢力	中村芝翫	中村芝翫	市川猿之助	中村芝鶴	尾上松助	市川宗三郎	市川女寅
明治卅一年十一月	歌舞伎座	群濤瀧巖尾勢力	中村芝翫	市川猿藏	市川染五郎	市川右田作	嵐雛助	中村成三郎	市川升藏
明治三十三年七月	東京座	巖石碎瀑布勢力	市川猿之助	中村勘五郎	實川延二郎	中村雀三郎	中村勘五郎	市川壽美五郎	市川猿之丞
明治三十九年六月	明治座	巖石碎瀑布勢力	澤村訥子	澤村訥子	坂東鶴之助	市川團升	中村勘五郎	市川升太郎	

妲妃のお百

年時	座名	名題／役割	お百	和尚治郎	徳兵衛	彦五郎	重吉	新助	おくま	おみね
慶應三年三月	市村座	善惡兩面兒手柏	市村家橘	市村家橘	市川左團次	關三十郎	市川左團次	坂東龜藏	坂東龜藏	市川新車
明治六年五月	村山座	御伽草紙百物語	坂東三津五郎		市川壽美藏	河原崎權之助	坂東家橘	中村時藏	團三十郎	坂東三津五郎
明治十五年七月	壽座	善惡兩面兒手柏	澤村清十郎	坂東家橘	坂東家橘	市川八百藏	中村鶴五郎		中村銀之助	坂東登美松

明治三十一年七月	東京座	百物語澤邊螢火	澤村源之助		市川猿之助	市川壽美藏	市川染五郎	市川荒次郎	市川荒次郎	市川升若
明治三十三年六月	眞砂座	妲妃のお百	澤村源之助	中村種太郎	澤村訥升	澤村訥升	中村翫助	嵐璃宗	大谷馬十	中村銀之助

大正十五年一月十五日印刷
大正十五年一月十九日發行

『默阿彌全集第七卷』

非賣品

著作權者印

補修　河竹糸女

校訂
編纂者　河竹繁俊

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田利彦

印刷者　東京市神田區松下町七番地　佐藤磨

印刷所　東京市神田區松下町七番地　明治印刷株式會社

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂

